

指揮官はつらいよ～美女美少女ばかりの職場でいかに性欲を発散するか～

サモアの女神はサンディエゴ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

性欲って溜まるよね？

考えて欲しい。

肌色の面積が多い服装で目の前を歩かれたり、近づかれる時の事を

……

女性ばかりの職場で自慰すら出来ない悶々とした毎日を……

その女性達が美女美少女で毎日のように誘うかのような思わせぶりをしてくる事を……

でも手を出せない。

そんなんで手を出して不和を作って内輪揉めしたら人類がお疲れ様なのなもの。

追記

お話毎に簡単な題名を付けてみました。

R-18版にてマッソー敗北ルートも出来ましたマッソー!!

処女作過ぎて上手く出来たか分からないけど、お納めくださいマッソー!!

アズレンのデータ戻りました!!

更新再開マッソー!! (1月24日現在)

目次

第1話	プロローグとベルファスト	1
第2話	人体の不思議と夕張	7
第3話	夢精とサフォーク	11
第4話	休息とヴェスタル	16
第5話	マツソー評論家なローン	21
第6話	サポーターなジャン・パール	27
	※後書きにて追記有り	
第7話	家庭の味と長良	33
第8話	お昼寝と睦月型	38
第9話	特訓と山城	43
第10話	お風呂とテイルピッツ	51
第11話	ジョギングとフォックスハウンド	58
第12話	ダンスとドイツチュラント	67
第13話	試合と瑞鶴	73
第14話	記録とシャングリラ	80
第15話	テニスで知るクイーン・エリザベスとウォースパイト	87
第16話	ジャンクフードとパーミヤチ・メルクーリヤ	95
第17話	期待と信濃	106
第18話	ヒーローとリノ	112
第19話	お酒とプリンツ・オイゲン	121
第20話	弛みとシェフィールド	127
第21話	重さと樫野	137
特別編!!	アズールレーン3周年記念版!!	146

第22話	デュエルとハーミーズ	追記あり	179
第23話	お見合い写真とネルソン		189
第24話	思い出とロング・アイランド		203
第25話	空気椅子と三笠		211
第26話	水泳と一航戦		220
第27話	バチボールとリットリオ		235
第28話	歌とル・マラン		245
第29話	急展開とZ23		253
	クリスマスだったよ!! スペシャル篇	《明石とお	
《			264
	お正月だよ!! 初詣マツソー!! 《初詣とジャベリン》		273
第30話	初夢とプリンツ・ハインリヒ	修正版	280
第31話	お茶と不知火		293
第32話	サイクリングとアーク・ロイヤル		300
	バレンタインデー特別編だよ!! (チョコと綾波)		313
第33話	セントルイス姉妹とエアロビクス		328
第34話	ひな祭りと長門		341
第35話	抱っこことアドミラル・グラフ・シユペー		357
第36話	熱とアルジェリー		366
第37話	秋月型と縄跳び		376
第38話	シャワー室とクリーブランド		388
第39話	夕立と運動		399
第40話	開発とビスマルクとU-556		406
第41話	ティータイムとイラストリアス姉妹		421
第42話	お昼寝とラファイ		437

	第43話	誘惑と東煌姉妹	450
	第44話	朝食と翔鶴	459
	第45話	汗と筋肉とポネキにインディちゃん	473
	第46話	天城(?)のお手伝い	491
	第47話	エレバスとテラーとハロウィン	506
	第48話	晩酌とリシユリユ	517
	第49話	幸運と雪風	537
	50話	クリスマスダイナーとフリードリヒ・デア・グローセ	
547	第51話	ライブツイヒとニルンベルクと夜這い	557
	バレンタインデー特別編その2!! (エンタープライズと手作り) 追記		
	有り		566
	第52話	お世話とアンカレッヅ	572
	エイプリルフールイベント発生!!		584
	第53話	鈴谷と熊野とパジャマパーティ	590
	第54話	リアンダーとだらける日	601
	クリスマス特別編	アイアンボトム・サウンド鏡面海域撤退戦	前編
			609
	クリスマス特別編	アイアンボトム・サウンド鏡面海域撤退戦	後編
			622
	第55話	水着とチェシャー	636
646	バレンタインデー特別編その3 (時雨様のチョコレート大作戦!!)		

第1話 プロローグとベルファスト

いきなりだが俺はアズールレーンの世界に転生した指揮官である。
前世はうだつの上がない三十路サラリーマン。

趣味はアプリゲームのアズールレーンでイベントガチャを回す時に食費の論吉をリングに何度も変える錬金術師だった。

そんな生活を続けていたら遂にコロツと栄養失調で倒れてこの世界に転生したのだ。

転生した当初は混乱したが、アズールレーンの世界に転生した事が分かって大興奮したものだ。

美女美少女ばかりの世界に転生したからには是非ともKAN—SEN達に会ってみたい。

あわよくばお近づきになってムフフな事とか…

こんな事ばかり考えてを浮かべて気持ちの悪い笑い方してしまい、母親に怒られる事が幼少期は多かった。

しかし、この世界はそんなに甘くなかった。

勘の良い皆なら分かると思うがセイレーンの存在だ。

この世界の人口の9割を死滅させた奴らに俺はこの世界での両親や兄弟、友人や隣人達を奪い去られた。

そして孤児となった俺は成人する前に徴兵される事に……

世界の危機であるセイレーンに対してカウンターとして生まれたKAN—SEN達の指揮官としての適性が判明するまで、殉職率の高い前線での警備艇の隊員を務めた俺に転生前までの浮ついた邪念はどこか遠くに吹き飛ばされていた。

そして第一次セイレーン大戦が終わった頃にアズールレーンがレッドアクシズと2つに分裂しそうになったのをなんとか派閥争い程度に押し止めたら、今度はアズールレーンの最高指揮官として本部の母港に縛り付けられるようにして着任させられたのだった。

「いや、なんでさ……………」

「どうか致しましたかご主人様？」

「なんでもない、独り言だ」

朝日が差し込む執務室で書類作成をしながらぼんやりと回想していたら、つい口に出してしまった。

秘書艦として傍で控えるロイヤルのメイド隊のメイド長である巡洋艦ベルファストに聞かれていたようだ。

「お疲れですか？少し働き過ぎな所もございますし、1度御休憩なされては如何でしょうか？」

「そうだな、この書類を片付けたら少し休もう」

「分かりました。それではお茶の御用意をして参りますね」

心配そうに近寄ってくるベルファストにチラリと視線だけ向けてそう返して再び書類へと視線を戻す。

そして、休憩の為に紅茶と付け合わせのお菓子を用意しに出て行ったベルファストのドアの開ける音を聞いた俺は……………猛烈にStandard Upしそうになっている自身の息子を抑える。

「なんだよあのメイド服……………北半球が丸見えで色気ムンムンじゃねえか……………」

この世界に転生してすでに32年。

思春期を戦争で命の危機と共に抑え付けられたリビドーが今になって俺を苛む。

前世と合わせてすでに60年以上の時を生きている俺だが、男としての機能は衰えるどころか逆にギンギンギラギラであった。

しかし、なんとか内戦状態にならずにすんだこの状況で魅力的とはいえKAN—SENに手を出せば、恐らくそこから陣営同士の不和が始まって内戦とセイレーン侵攻で人類オワタになる可能性がある。

そう思っただけのだけ……………でも彼女達はすごい魅力的だ。

「だいたい女性ばかりの場所に男が俺1人つてのがおかしいだろ……………ネルソンは前屈みになって胸が出そうになったり、あのミニスカから時々パンツ見えてるしよおお……………サンディエゴはあの体

つきでいきなり抱き着いてくるから我慢するのも大変だし、駆逐艦達の子達もけっこう大きい子達がいるからムラムラが抑えられそうにない!!」

この母港に着任してから臭いなどが男より敏感な女性ばかりが居る場所なのでおちおち自慰すら出来ない。

さっさと片付けた書類を横にやって最近のムラムラ具合に頭を抱える。

思い出したら股間の暴れん坊が天を目指そうとしてズボンを内側から押し上げようとしてきた。

女性ばかりの職場で男の象徴を膨らますなんて社会的な死しかない状況はご勘弁願いたい。

「ダメだダメだダメだ!!これからベルファストが戻ってソファーでお茶するのにこれは見せられない……………かくなる上は……………」

執務室に作られたとある一角を睨みつけるようにして見る。

恐らくもう猶予は無いだらう。

俺は白い軍装を脱いで中のワイシャツやタンクトップを脱ぎ去り……………重量470kgのバーベルを担いでパワーリフティングスクワットを行う。

ずしりとした重量感に全身の筋肉が悲鳴をあげて血管が浮かび上がるのが分かる。

「グ　ギ　ギ　ギ　ギ　ギ　……………が
ああああああああああああああああああああああああああああ
!!」

1度屈んで持ち上げただけで汗が吹き出る。

更にもう一度行う頃には全身から滝のように汗が流れ落ちていた。

最後の仕上げに担いだ状態で10秒キープする。

「ふうふう……………ふしゅるる……………」

呼吸の仕方にも全身に力を込めやすい腹式呼吸で筋肉一つ一つに酸素を染み渡らせるようにすると床に流した汗が水溜まりを作り始め

ていた。

「ただいま戻りましたご主人様……………っ!？」

「ふはあああ……………戻ったかベルファスト」

ちやうど終わろうとしていた時にベルファストがカートに紅茶セットを載せて帰つて来たようだ。

バーベルを固定器具に戻して傍に用意してあるタオルで顔や体に付いた汗を拭うと何やら頬を赤くしたベルファストがこちらを見たまま固まっている。

まあ執務室に入つていきなり三十路の野郎が上半身裸で筋トレしてたら思考回路が停止するわな。

「見苦しいモノを見せてすまんなベルファスト、少し身体を動かしたかったんだ……………シャワーを浴びてくるからお茶の準備を頼んだ」

「はっ?!失礼致しましたご主人様……………早速準備をさせて頂きます」

再び動き出したベルファストを見ながら脱いだワイシャツや上着を肩にかけて母港に用意してある私室を目指して歩き出す。

筋トレで昇華したからムラムラもスツキリだ。

シャワーで更にサツパリしてベルファストの用意した美味しい紅茶とお菓子で残りの仕事も頑張るぞ!!

~~~~~

「……………はあ……………ご主人様の香りが……………」

紅茶とお菓子を手早く準備しながら火照る頬を冷やそうとする私は、ゆっくりと呼吸する。

鼻から入ったご主人様の香りが私の中に入って下腹部の疼きを更に刺激してくるのが分かった。

ご主人様は第一次セイレーン大戦の英雄にしてアズールレーンがレッドアクシズと2つに別れそうになったのを防ぎ、セイレーンとの癒着があつた腐敗する上層部を一掃するきつかけを作った功労者。

数少なくなつた人類を再び戦火の渦に巻き込まないようにたつた

1人でKAN—SEN達を纏め上げて自ら前線に立った御姿を見て何人のKAN—SENが堕ちた事か……

「あらう、これは……」

準備を終えていまだに火照る身体を冷まそうとさらに深呼吸しようとしていたら……ご主人様が持つていかれるのを忘れたタンクトップが目映る。

誰も居ないはずの執務室で辺りを見渡し震える手でゆっくりとタンクトップを拾い……

「すうううううううう……はう」

顔に近付けてご主人様の男性的で刺激の強過ぎる香りを胸いっぱい吸い込んだ。

その際に軽く達してしまったのは内緒である。

下着も少し怪しい感じがするけれども、これから戻って来られるご主人様に少しでもアピールする為にはちょうど良いのかもしれない。

「陛下もロイヤルの未来の為にはご主人様が必要であると仰られておりますし……まったく、ハニートラップを仕掛けてもつれない御方です」

色んなKAN—SEN達がご主人様にアピールして迫っています。が、いまだにあの難攻不落の要塞のような理性を崩すに至っていません。

一部ではそういう趣味なのではとまで噂になってしまわれておりますが、私室のお掃除に伺った際にベットの下に隠された女性の水着姿が写った写真集もありましたから大丈夫だと思われれます。

「私も精一杯アピールすればご主人様とこの執務室で……んんっ」

イケナイ妄想が脳内に映り、下着が更に湿っぽくなっていく。

シリアスではございませんが、このようなはしたないメイドには主人様からの罰を与えて頂きたくありませんね。

「はあ……ご主人様……ベルファストはいつでもお待ちしております」



## 第2話 人体の不思議と夕張

指揮官です。

今日は母港のトレーニングルームにて専用のトレーニングウェア（上下白のジャージ）を着て元気に鍛えております。

このルームランナー最高ですよ!!

なんと重桜の巡洋艦である夕張が特別なチューンをしたおかげでベルトの回る速度が時速50kmまで出せる優れものなんだよ。

「夕張！今何キロお!？」

「ご主人は本当に人間？今メーターは時速47kmだよ……短距離走のオリンピック選手より速い速度で、もう10分以上走ってる」

メーターを見ながら時折こちらを見る夕張に走り続ける俺。

前傾姿勢のまま走る俺は16ビートどころか24ビートを刻んでいる自分のハートに限界を感じていた。

「ううううう」

おおおおおお

ああああああああああああああああああああああああああああ!!

正直に言うともちやくちやしんどい。

本当は自分のペースで筋肉と対話しながら走りたいけれど……股間のロンギヌスがカチコチに固まっている為にそれが出来ないのだ。

何故こんな事になったのか？

その答えはとても簡単で分かりやすい。

「うくん、ご主人のペースがまた上がった……これも記録しなきゃね」

そう言うと夕張は俺が走るルームランナーの正面にある機材に端末を接続して記録を取り始めた。

ここで説明しておくが、今世の俺は身長が高い。

だいたい190cmくらいある。

そこに小柄な夕張が重桜独特の着物でいつもの着崩した状態で俺

の前に来たらどうなるか？

小柄なりに育ったちっぱいの先端が見え隠れする状態で俺の目前にそれはもう人類が目指した楽園（エデン）として素敵な光景を広げているのだ。

我、理性へのリビドー侵攻を観測せり

いや理性崩壊したら不味いから!!

ますます硬さを増す自分の分身が焦りを募らせる。

しかし、このままではジリ貧だ。

俺の身体はすでに限界に近い。

いや、よくここまで持った方だと思う。

ここで夕張に全てを明かして欲望を満たしてしまっても良いのではないのか？

そんな考えが頭を過ぎる。

だが俺は童貞だ。

がつつき過ぎて引かれるんじゃないかなろうか？

そもそもこの歳で童貞とか笑われるんじゃないかなろうか？

というより真剣に実験をしている夕張に手を出すとかそれは不義理過ぎるのではないか？

色んな事が頭の中で回って考えがまとまらない。

決して、決してその行為に移る前にヘタレた訳では無い。

これはだね、本当に夕張の事を考えてだな……………

「ご主人もういいぞ？ 凄い記録が取れた、感謝する」

不意にルームランナーの速度が落ちてゆく。

そしてモヤモヤ考えていたら我が息子は萎えてしまつて代わりに

力強く走り続けた足腰の筋肉が汗で輝いていた。

「……………要修行といった所か……………不覚!!」

「むむむ、人類最高以上の身体能力を持っててどこが不覚なんだご主人?」

不思議そうに小首を傾げる夕張に俺はタオルで汗を拭いながら首を振る。

ああ、修行不足だ。

邪な考えを振り払えず、一過性の感情で夕張を手籠めにしようとするなんて……………

「まだまだ、俺はまだいける!!」

「むむむ、これから解析にかきたいからコレは回収したいぞご主人」

「そうか……………なら仕方がない。部屋でトレーニングを続けるとするか」

私室にはルームランナーは無いが、筋肉を鍛える為の道具は一通り揃っているからそれで我慢するとしよう。

決して優柔不断で勿体ないことしたなあとかもう少し夕張のちっぱいを堪能したかったなあ……………なんて邪念を振り払う為じゃないからな!!

ホントだぞ!!

~~~~~

「凄い……………ご主人は凄いよ」

あのルームランナーの実験で得られたご主人の身体能力を記録としてパソコンに打ち込んでいく。

人類最高峰といっても過言ではない持久力に脚の速さ。

「こんなデータは見たことない……………」

他にも普段使っているバーベルの重量も頭がおかしい程の重さであり、総合的なパラメータはもはや超人である。

ご主人には内緒でルームランナーに付けた小型カメラで映像記録も撮っているが……………

「これは……これは夕張だけのもの」

画面に映る雄叫びを上げながら雄々しく走るご主人のカッコ良さは尋常ではない。

一つの事を全力で取り組むご主人の一生懸命な表情が夕張の胸を高鳴らせる。

「わざと胸元を広げてみたけど、ご主人は気が付いていたかな？」

他の人達のように大きくはない胸を精一杯露出してアピールしてみたけれど、ご主人は襲ってくれなかった……

それどころか鬼気迫る表情で実験をしてくれるご主人のこちらを見る視線だけで、夕張の身体は火照りが治まらなくて何度も計器を確認する振りをして呼吸を整える羽目になってしまったのが悔しい。

「はぁ……はぁ……んう……熱い……」

自身の深い部分に少し手をやるだけで下腹部からの洪水が感じられる。

あの夕張を見つめる視線を思い出すだけで息が上がって熱くなるのをどうしても止められない。

「今度はもっと過激に……ご主人のお情けを……」

そう言いながら夕張は身体を横にする。

「ご主人！ あぁ……ご主人!!」

映像に映るご主人を見ながら夕張は自身を慰める為に指を動かすのだった。

第3話 夢精とサフオーク

夜中に不意に目が覚めた指揮官です。

母港に用意してもらったベットはキングサイズのダブルベット。

3〜4人一度に寝てもまだスペースのありそうな素晴らしい大きさで、寝心地の良い最高品質らしい。

シーツや身体に掛けている羽毛の布団も前世なら目が飛び出るくらいお高い物を使用している。

最初は普通の軍で使用されている安物で量産品のパイプの組み合わせだったようなベットで良いと言っていたのだけれど……

「世界を救った英雄にそんなもの用意するわけないじゃないの!!」

とクイーンエリザベスに怒られてしまい、メイド隊の手によってあつという間にこのベットが用意されてしまった経緯がある。

まあ筋トレした夜はこのベットのおかげなのか疲れも残らずグツスリと寝てしまうのだから、意外に侮れないものだ。最近は感心してもいた。

「……………さて、そろそろ現実逃避をやめようか」

身体を起こして布団を退けると自分の息子のある場所に視線を向ける。

「……………出ちゃった」

夢精である。

ぐうの音も出ないくらいに夢精である。

きつかけは恐らくアレだろう。

「いや、昼間オクラホマが転けそうになったのを支えたら……たわわなお胸様をラキスケで手が服の中に入って直に揉んじまって、夢で息子をズリズリしてくれるオクラホマを見ちまうなんて……そんな無理やんけ」

寝間着の下にあるパンツのベチヨベチヨ具合を感じるに相当乱射

してしまつたらしい。

最近KAN—SEN達の距離が妙に近くてパンチラにブラチラ、マウンテンの頂きチラなんてムラムラ上昇気流待った無しの状況が長く続いたもんだから少々息子がハッスルしてしまった。

「……………スキンシップなのか腕に抱きついてくる子もいるから勘違いしそうになるし、息子が天に昇りそうなシチュエーションばかりだ」

おっぱい大きいのに腕組んできたら当たってもうムラムラ止まらないわ!!

仕方なくシャワールームに行つて息子とのキャッチボール（一方的）の痕跡を消す。

ついでに寝間着も一緒に洗つて寝汗が酷くてシャワールームに行つたら寝ぼけて寝間着のまま浴びちつた作戦を発動しよう。

「ふうう……………確かこの時間の警備はサフォークだったか?」

サボりの常習犯であり、どこかぼんやりしている彼女なら寝ぼけて濡らしたと言つても通るかもしれない。

あのメイド服を押し上げる大きな胸を見る度にムラムラしていたのだが、最近サフォーク改となつて風に吹かれて巻き上がり、スカートの下に隠された純白の乙女に包まれる柔らかかそうな臀部とスラリと伸びて美しい足に息子が超反応したのは少しヤバかった。

「いかん、また雑念が……………」

このままではまた息子がバッターボックスに出してしまう。

彼女に寝間着を渡したら少し外をジョギングして頭を冷やそう。

備え付けの時計を見ると朝の4時を少し過ぎた所だからジョギングを終わらせたなら再びシャワーを浴びて朝食にへ行くことにしようか。

「そうと決まつたら早速行動だな!やはり筋肉を鍛えるのは素晴らしい事だ!!」

ただっ広い母港の外周はだいたい30kmなので5周くらい回れば頭を冷やすには持つてこいな距離で助かる。

「さあ、今日も一日頑張るぞ!!」

決意も新たにパンツを洗い終えた俺は手早くタオルで水分を拭き取り、トレーニングウェアに着替えて部屋を出る。

……石鹸で洗ったから臭わないよな？

~~~~~

「……………という訳ですまんが洗濯してもらえるかサフオーク？」

「は〜い、大丈夫ですよお」

指揮官さんから私は袋に入った濡れた寝間着を受け取る。

濟まなそうな表情で私に頼む指揮官さんを見るのは久しぶりで、頼まれる事に私は嬉しくて胸が高鳴った。

普段は仕事をどうサボろうかと頭を悩ますのですが、指揮官さんの頼みは別です。

「俺は外周を走ってくるから居場所を聞かれたらベルファスト達に伝えといてくれ」

「お気を付けてくださいね？指揮官さん」

「ああ、それじゃあなサフオーク」

私の頭をポンポンと軽く叩くようにして撫でると指揮官さんはそのまま玄関の方へ行ってしまう。

「ふへへへ〜♪撫でられましたよ♪」

両手の中にある受け取った寝間着をギュ〜って抱きしめながら幸せを噛み締める。

装甲の薄さで使えないと不良品の烙印を押されていた私に、共に戦おうと言ってくれた指揮官さん。

私の長所である砲撃能力の高さを活かした戦術で、格上だと言われていたメイド長のベルファストさんに演習で勝つ事が出来た時には思わず泣いてしまいました。

「あの時からとっても大好きですよ指揮官さん？」

色んな人達に要らないモノ扱いされてた私にあの青くて広い空のように受け入れて、色んな事を教えてくれた指揮官さん。

サフオークは、そんなお空のような貴方の事を愛しています。

「ふふふ♪……………さて、指揮官さんの寝間着を洗濯場に……………あれ？」  
受け取った洗濯物を洗濯場に持っていきながら中身を確認したら  
……………指揮官さんのパンツが出てきました。

「こ、これ……………指揮官さんの……………ゴクリ」  
何故か喉が鳴りました。

少し顔を近付けると石鹸の香りに混じって嗅いだことの無いよう  
な匂いが……………

「なん…でしょうか？スン…スン……………ふあ……………」

気が付けば夢中でパンツの匂いを嗅いで自分でも聞いた事の無い  
甘い声が出てます。

それと共に指揮官さんを想いながら自分で慰めていた時のような  
感覚になってしまつて……………

「はう……………んう……………うう……………」

身体が熱いです。

たった一つのパンツから香る指揮官さんの匂いに、私は燃えるよう  
な熱さと切なさで苦しめられてしまいました。

「これは…あふあ……………なん…でしようか？」

自然と内股になつてしまった震える足へ必死に力を入れて立ち続  
ける。

お腹の下の切なさが身体を熱く熱く燃え上がらせ続けた。

この苦しさを解放するには自分で慰めるのが一番だというのは分  
かっている。

だから自室に戻ろうとした時に一つの名案が思い浮かんだ。

「どうせ洗濯するなら……………もつと汚れてても大丈夫ですよね？」

両腕で洗濯物（宝物）を抱き締めながらゆっくりと歩く。

その宝物（洗濯物）から香る指揮官さんの匂いが私を狂わせていく

のを自覚しながら……………

ああ……………今日はとっても気持ち良いんだろぅなあ……………

## 第4話 休息とヴェスタル

指揮官です。

いつものように筋トレをして煩惱を筋肉に変えていたら、ユニオンの工作艦であるヴェスタルに止められました。

「身体を鍛えるのは良いですけど、たまには休んでください！もう何日連続でトレーニングをしているんですか!!」

腰に手を当てながらプリプリと怒っているけどそんな姿も可愛らしい彼女に少し癒されながら軽く母港の外周を2周した後、トレーニングルームで軽くストレッチを行う。

筋肉にますます磨きがかかってきたので今日はダンベル200kgの重さにして腕の筋肉を鍛える予定だったのだけれども、ドクターも兼ねているヴェスタルに言われたら止めるしかない。

「うーん、大丈夫なんだけどなあ……………」

「またそんな事を言って……………指揮官が倒れたら皆が哀しむんですよ?」

ストレッチで全身の筋肉をほぐしながらクールダウンしていると心配そうな表情でこちらを見ている。

なので少し意地悪な質問を試してみる。

「俺なんか倒れてもさ、大丈夫だよ。もしかしてヴェスタルは俺の事を心配してくれるのか?」

軽い気持ちで苦笑しながらヴェスタルにそう言うと彼女からの返事は無い。

それを不審に思いストレッチを止めてヴェスタルの方を見ると

「……………ううつ、ひつく……………」

可愛らしく整った顔を歪めながら静かに涙をこぼしていた。

「ヴェ、ヴェスタル!」

静かに涙をこぼす彼女に慌てて近寄って声をかける。

こういう時はどうすれば良いのか分からない。

童貞歴60年クラスの俺には女性が涙を流している時の対応なん

て、全くもって検討も付かないのだから慌ててしまう。

俺みたいな童貞が涙を拭ってあげるなんてイケメンな行動したら引かれるに決まってるし、抱きしめて慰めるなんて行動を取ればセクハラで訴えられた挙句に営倉入りの社会的地位の没落だろう。

「ええつと……………その、ああ……………すまない」

とりあえず女性が涙を流している原因は俺なのだから謝るのがベストなのでは？

そう思つて頭を下げ謝る。

仕事以外で女性と話すなんて母親以外経験無いんだよ……………

「……………ぐすつ」

「うええつとお……………そのお……………」

いまだに鼻を鳴らしているヴェスタルに謝罪以外で何が声をかけたいのだが、どうすれば良いのだろうか？

そうだ！

俺の身体の筋肉を見てもらえれば健康である証拠となつて、元々のこの状態に陥つた原因である俺が倒れるのでは無いかという不安を取り除けるのではないだろうか？

サイドチェストとモスト・マスキュラーには自信があるんだ!!

そうと決まれば早速上を脱ごう。

そう思つて上着と中に着ているタンクトップの裾を掴んで一気に脱ごうとしたその時

「なんでそんな当たり前の事を言うんですか……………私は……………私はもう傷付いた貴方を見たくないんですよ!!」

涙を浮かべたままヴェスタルはそう言つて俺に抱きついてきた。

「……………ヴェスタル」

俺はあまりの事態に動けなかった。

主にヴェスタルの豊満なおっぱいに包まれた腹部の感触に息子がキタワアー————(n, v, )————!!! って状態になるのを防ぐ意味で。

マジでごめんヴェスタル……童貞拗らせてごめんなさい。  
でも股間のエクスカリバーが上向きにならないようにしながら  
ヴェスタルの話を聞く。

泣いてる彼女のおぼーい of 感覚を感じて幸福感を感じながら、股間  
の息子とは天下分け目の関ヶ原の合戦を演じる苦行を強いられる羽  
目になるとは……………

おれ、このおはなしがおわったら……………きんにくをみがくんだ  
……………

~~~~~

「うううう……………」

この人の事はよく知っていました。

常に前線で指揮を取り、時に敵の砲弾や艦載機からの機銃掃射を受
けても前線指揮を止めない”死にたがり”

その為に砲弾の破片や何かの部品で切り傷を負ったり、機銃掃射が
掠めて肉が抉れるような負傷をしても応急処置をするだけでそのま
ま指揮を取り続けた猛将。

今だって私が抱き着いているお腹には16個の金属の小さな破片
が摘出出来ずに残っているのだ。

「どうして……………どうして貴方は自分を大事にしないんですか？」

あの大戦で何もかもを失い未成年のまま徴兵され、いつ死んでもお
かしくない戦場で逃げる事を許されず矢面に立たされ続けたこの人
は……………いまだに自分を虐め抜く事をやめようとはしない。

ゆっくりと撫でる彼のお腹には何度も糸で縫い合わせた傷や治療
せずにそのまま遺してしまった傷が沢山残っている。

「倒れてはダメです……………ずっと、ずっと生きていて下さい……………」

私達KAN—SENはそんな傷つきながらも一度も倒れる事無く
一緒に戦い続けてきた貴方だから、この母港でゆっくり休んで貰いた
くて無理を言っただけで着任してもらったのに。

あの上層部に対してのクーデターだって元は権力で手箆めにされそうだったKAN—SENを助ける為に上官に齒向かって、買収されていた憲兵隊諸共丸腰のまま徒手空拳で制圧。

そしてそのままセイレーンに唆されて世界大戦の草案についての会議しようと集まっていた上層部を、その場にいたKAN—SEN達に全て暴露して力を貸すように求めて一緒に逮捕したのが真相。

その時のこの人は負傷して自身の血で血塗れになりながらも離れの控え室で待機していたKAN—SEN達の下へ向かって走って行き

「力を貸してくれ！世界の危機なんだ!!」

そう言っただけで私達に手を伸ばしていた。

何度も戦場で戦い抜いた戦友である彼の一片の曇りの無い力強さを感じさせる視線に私達は惚れ込んだ。

そして彼を唯一の指揮官として、その下に隷属する事を私達は選んだのだ。

「絶対に貴方を支えますから……絶対に！」

この人を後ろから支える柱になりたい。

疲れているであろうその心と身体をどこまでも癒してあげたい。

その為に私はここに居るのだから……

「だから、心配させないで下さい。無理をしないで下さい。私達にその辛さを一緒に背負わせて下さい……指揮官」

ズルいやり方だと思う。

自分の涙で彼を困らせて止めようとしているのだから。

優しい彼は困惑して抱き着いている私を見てくれている。

「私は指揮官の為ならなんでも出来ます！だから……それ以上自分を苦しめないで下さい」

そう、この人の為ならなんでも出来る。

全てを捧げても良い。

呼んで頂けるのならば夜のお相手にだって喜んで行けます。

顔を彼の胸に押し付けながら心の中で願う。

もっと全てを預けるように私を頼ってください。

何もかも私に任せて何もしなくて良いのです。

全ては貴方に安らぎを感じて頂けるように……………

第5話 マツソー評論家なローン

指揮官です。

今日は筋肉の締まり具合を確認してもらおう為に第三者の視点を借りる事にしました。

「うーん、やはりもう少し背中中の筋肉も大きく育てた方が見栄えがもつと良くなるのではないでしょうか？」

私室にて服を脱いだ上半身の背中を撫でつつ、彼女はそう意見をくれる。

普段は装備している手甲を外した両手で確かめるようにして撫でる彼女は、俺の背中に吐息が掛かる程に近づいてくれている。

「す、少し近くないか？」

「いいえ、しっかりチェックするなら近くで見ないと確認できませんから……ここら辺の筋肉は凄く引き締まっていますね」

背中からなぞるように指先一つ一つを筋肉の起伏に合わせてなぞる動きは、俺の脇腹へとその先を進める。

それに合わせて彼女がもつと近寄って来る気配を感じた。

「はあ……まるで戦いの神々を象った彫像のように美しい筋肉です。惚れ惚れしてしまいます」

「あ、ああ……そう言って貰えると嬉しいよ」

「お世辞なんて私は言いませんよ？指揮官は本当に素晴らしい筋肉をお持ちです♪」

「は、はははは……ありがとうございます」

脇腹から腹筋の筋を撫でる彼女は俺を後ろから抱きしめるようにして、丹念に臍の周囲から自分でも自信のある引き締まったシックスパックへと指をなぞった。

その時にあまりにも柔らかく、大きく豊満なお胸様が俺の背中に当たると感じる。

そして相変わらず悩ましがな吐息が背中に当たりっぱなしである訳で……

らめえええええ!!鍛える予定の無い暴れん坊が將軍しちゃうのおおおお!!

デーンデーンデーン始まつちゃう!

童貞にはキツ過ぎるシチュエーションが!!

今はまだ小康状態だけど、ゆつくりと上に上がっていくのがズボン越しに分かつちゃうの!!!

ど、どうにかしてこの状態を脱出しないと…………

「あゝ、ローン?」

「何ですか指揮官?」

鈴の音を転がすようなゆるふわ系の可愛い声が背中越しに聞こえる。

今回の筋肉チェックをしてもらっていたのは鉄血の巡洋艦ローン。

開発艦と呼ばれる特殊な条件の元で建造された彼女は、元々あの腐敗した上層部にコントロール出来ない不良品の烙印を押され研究対象として建造されて直ぐに監禁されていたという事情のあるKAN—SENである。

まあ、上層部を一掃した後に監禁されていた研究室から俺が引き取って今では主戦力として前線を任せているほどに心強い仲間なんだが…………

そんな彼女の声色はとても楽しそうで手つきは衰えるどころか、ますます艶めかしく動いて胸筋と腹筋の間をなぞっていた。

いや、なんでチェックするだけでこんなにエロいんですかねこの娘?

そろそろ俺の股間の俺がStand Upする寸前なので別の場所をチェックしてもらおう。

「肩の筋肉もチェックしてもらおうかと思っただけ?」

「そうですね…………分かりました」

分かってくれたのか彼女は俺から離れてくれた。

柔らかいお胸様が背中から離れていくのを名残惜しく感じながらも俺はその場でゆっくり跪く。

身長の高い俺が跪けばちようどローンから肩を見やすくなり、股間の息子が少し立ち上がってもズボンのスペースで分かりにくいはずだ。

「これで見えるか？」

「はい、大丈夫ですよ♪」

ローンの柔らかい指が後ろから肩に触れたのを感じた。

お胸様も背中に当たってないし、これで少しは落ち着いて筋肉を見てもらえるだろう。

「あら？指揮官？少し右の三角筋が大きくなって左右のバランスが取れてないみたいですよ？」

「そうなのか？」

「はい、もう少しよく見てみますね？」

「っ!?!」

俺の手!!

俺の手がローンのおぱーいに包まれて!?

なんで胸に抱え込むようにして俺の腕を包んでるんですかねローンさん!?

「ああん♪……そんなに動かさなくてください指揮官、くすぐりたいですよ？ほら、じっとしててくださいね？肩の筋肉をもっとよく確認しているのですから」

「す、すまんー!」

思わず動揺して腕を動かしてしまった。

ってかなんだ今のローンの声？

ヤバいくらい股間の息子が反応するくらい甘ったるい声だったんだが……

いかん………煩惱が………

「やはり、少し右の筋肉の方が大きいですね」

「……………」

「指揮官？…どうなさいましたか？」

「い、いや、なんでもないぞ？…右の筋肉だな？…なら今度は左側を重点的に鍛えてバランスを取ろう!!」

「あ……………そうですね。また今度チエツクする時には均整の取れた素晴らしい筋肉を見せてくださいね？」

「ああ、約束をしよう。それじゃあ今日はありがとうローン」

あつぶねええええ!!

ローンに声を掛けられなかったらケダモノになる所だった……………

これだから童貞は（自虐）

とりあえず服を着直してローンに礼を言っておく。

彼女は純粹に俺の筋肉を評価してくれるベストパートナーだ。

「い、いえ、これくらいならいつでも大丈夫ですよ？」

服を着終わって振り返るとふわふわとした笑顔を浮かべるローンが口元に手を当てながらこつちを見ていた。

これで筋肉の評価は終わりだ。

また明日から輝くマツソーを目指して筋肉を磨いていこう。

それにしても……………

今日はヤバかったなあ……………

~~~~~

「ふふ♪指揮官の身体はいつ見ても凄いですねえ♪」

つい先程まで触っていた感触を確かめるようにして手の平を眺める。

引き締まった肉体を惜しげも無く見せてくれる指揮官に、つついイタズラ心が芽生えて背中に息を吹きかけたり、胸を押し付けて誘惑してしまいました。

「腕を抱えた時の反応なんて……………うふふふふふ♪」

驚きの表情を見せてくれたあの様子もまた私にとっては愛おしい。指揮官との交流は私の身体を熱く切ない未知の快楽を与えてくれる。

今日このまま自室に戻れば止めることの出来ない快楽を貪ろうと自分を慰め続けることになるのは明白だ。

「こんなに熱いなんて……私も指揮官を愛してしまっているのでしょうかね」

愛という感情を知ってしまったら、それは他のどの感情よりも強く激しい……

でもその感情は乾いて破壊しか興味を示さなかった私の心を満たしてくれるオアシスのようなモノでもある。

未成艦であり、開発艦第一号であったのに破壊衝動を抑えられずに艦隊行動ができない欠陥品。

そんな私を研究室から連れ出して付きつきりで破壊衝動を抑えてくれ続けた指揮官。

どれ程傷つこうとも諦めず、私を助けてくれた人。

「……残念なのは私以外の他の人も指揮官の魅力に惹かれてしまっている事でしょうか？まあ少し不愉快ですが、私達にとって指揮官は魅力的過ぎて仕方の無いことでしょう」

顎に指を当てながら母港の外周を歩いて少しでも身体の疼きを抑える。

そうしないと指揮官への想いで隣部屋どころが寮全体に響き渡る程の嬌声を上げながら自分を慰め続けることになるだろう。

「響き渡るような声を上げるのは私だけではないのですけど……あら？」

ちやうど母港の施設から離れた死角となる切り立った崖の下にボートが見えた。

そのボートには明らかに私達KAN—SENとは違う”者”達が乗っており、小銃等を所持しているのもハッキリと確認出来る。

「まだ居たんですね……指揮官が居なければ世界の覇権を握れるなんてバカな考えの愚か者達が……」

指揮官が居なければ世界を巻き込んだ大戦となって、どれ程の犠牲が出たのか分からないのに……………

「そんなの許せないよね!!」

吹き荒れる怒りと破壊衝動をそのままに自身のメンタルキューブを覚醒させて艦装を呼び出した。

指揮官に仇なすような輩はここで消す。

だいたい指揮官をこの母港に閉じ込めるように着任させる代わりに、ここは指揮官以外の人間は立ち入り禁止となっているのだ。

全ての陣営がその条件でKAN—SENと契約を交わして調印まですしたのに手を出そうとするのだから……………

ボートの方が騒がしい。

私が艦装を起動した光が見えて見つかったのが分かったようだ。

「ふふ、私のことを見て逃げようとするなんて、まさか逃げられるとも思っているんですかあ〜?」

主砲を構える。

ちようど沖合で演習も始まっているので数発撃ち込んだくらいではバレることは無いだろう。

指揮官以外のモノは要らない。

仲間は許しますけど……………それ以外は全て壊します。

だって指揮官には必要無いでしょう?

だから、せめて壊れる瞬間に私を楽しませて下さいね?

第6話 サポーターなジャン・ボール ※後書  
きにて追記有り

指揮官です。

今日はトレーニングルームにてシンプルに上体起こしをして腹筋を鍛えております。

「248…249…250…251…252…」

上体を起こして左右に身体を捻って外腹斜筋を鍛えるのも忘れな  
い。

外側の筋肉も一緒に鍛える事が均整の取れたマツソを取得する  
のに必要不可欠だからね。

「341…342…343…344…345…」

腹部を構成する筋肉として腹直筋 外腹斜筋 内腹斜筋 腹横筋  
がある。

よくシックスパックと呼ばれる筋肉は腹直筋とよく知られている  
が、その筋肉以外にもインナーマッソーと呼ばれる腹横筋等があり、  
それぞれの筋肉に合ったトレーニングをするのがベストなのだが  
……

「いい仕上がりだ。お前の運動を見てるとこっちまで身体が熱くなる  
な」

床に寝転び立てている膝を抱えるようにして固定してくれる彼女  
は、勝気な笑みを浮かべてそう言ってくる。

それに対して俺はこなしている数を数えながら何度か頷く事で返  
事とした。

「ふ、本当によくやるよ。やっぱり継続は力なりってやつか？私には  
難しそうだ」

そう言いつつ俺の足の甲に下ろした腰の位置を微調整し、立ってい  
る膝と床のスペースに足を組み入れ抱き着くようにしっかりと固定  
している。





スポーツしないにしてもそれ専用の下着なんかあったと思うんですけどお？

ヤバイ!!

童貞の俺には刺激が強過ぎる……………

本人はそれに気が付かずにドンドン下がってるよ？

足の甲に感じる柔らかさと身体を起こす度に見えそうになってくる絶景が俺の股間を熱くする。

もうダメだ…………おしまいだあ…………

「よし、これで大丈夫だな。続けてくれよ」

初めて股間の息子に白旗を上げようとしたその瞬間、モゾモゾ動いていたジャン・ボールが動きを止めて俺の膝を固定し直して笑顔でそう言うてきた。

「ぬう

おおおおおおおおおおおお

29

!!!!!  
」  
りやあああああああああああああああああああああああああああああああ

今こそ俺は限界を超える。

こんなにも純粋な笑顔で俺を支えてくれる彼女に劣情を抱こうとした己自身を超える為に。

煩惱よ、ここから居なくなれええええええええええ!!

……………でも、ちよつと役得だったかな？

~~~~~

「……………どういう事だ！オレ達が滅ぶ運命だつて？」

「その通りだよジャン・ボール、それが今日決まるのだよ」

目の前の小太りのアズールレーンの中将が気持ち悪い笑みを浮かべながらそう言ってきた。

なんでも今後世界大戦を起こして人類への進化を促す為にいくつかの国に滅んでもらう必要があり、オレ達の国が最有力候補なのだという。

「そんなふざけた話があるか！セイレーンとの戦いが一段落したのに今度は人類同士の戦争で、オレ達の国はそんな茶番の為に消されるつてのかよ!!」

「だからね。取引をしようと言っているんだよ？」

「……………くっ、ゲスが……………」

取引内容は簡単だ。

このクズ中将にオレの純潔を捧げる事。

そして外で控えている買収された憲兵隊の連中も中将の後で相手する事で候補から外すだけでなく、オレ達の仲間達にも手を出さないという。

正直眉唾物の話だが、コイツが盗撮してきた写真には各陣営の人類代表者達の印が押された会議資料が写っている為に信憑性は高い。

自分一人で国や皆が護れるならば……………

こんな事なら前線で一緒に戦ってきたアイツに……………貰ってもらえば良かったなあ……………

一筋の涙が頬を伝うのを感じた。

覚悟を決めて口を開こうとした瞬間

「そこかジャン・ボール!!」

「っ!!」

凄まじい破碎音と共に聞こえた声。

振り返って見ると木製の大きな両開きの扉を粉々に粉碎しながら現れた、それは覚悟を決める前に思い浮かんだアイツだった。

「貴様！どうしてここが分かった!!」

豚（中将）が腰から拳銃を引き抜きながら顔を怒りで赤くしながら威嚇している。

それを見たアイツはゆっくりと豚に向かって歩きながら語った。

「素行の悪い憲兵隊の連中が言ってたよ、とんでもねえ美女を抱けるチャンスだつてな……それがジャン・ボールでアンタが脅して最初を貰ったら後は自分達の番だつてな」

途中で負傷したのだろう。

眉間に大きな刃物傷や左肩から胸にかけて大きく切り裂かれた後がある。

「凄く口の軽い連中だよな……腕と足をへし折ったらペラペラと全部吐いちまうんだからなあ……」

それでも右手の握り拳を力強く胸元まで引き上げてしっかりと豚を睨みつけた。

「く、来るな…グボエツ?!」

「遅せえ!!」

そこからはあつという間だった。

豚が拳銃の引鉄を引くよりも早くアイツがその顔面をフルスイングでぶち抜いたのだ。

ろくに運動も出来そうにない豚は顔面崩壊しながら壁まで吹き飛んで、それつきり起き上がることは無かった。

「無事かジャン・ボール？」

「お前……どうして……」

心配そうに来るアイツにオレはそうとしか言えなかった。

一緒に戦った仲とはいえ、自分の立場や生命をかけてまで来てくれるなんて……

どう言葉にしているのか分からずに言葉に詰まっていると

「女の子が一人で抱えるのが難しい事を吹っ掛けられてゲスの手籠めにされそうになってんだ、男が助けに動くんならそんな単純な理由で十分だろ？」

どこか困ったような笑みを浮かべたアイツはそう言つてオレ……私に手を伸ばしてくれ。

トクンつと胸が震えた気がした。

こんなにも傷付いても私を助けに来てくれた御伽話の古き良き騎士のようなこの男に……私は恋に堕ちた。

「……………またドキドキしてんなあ……………」

アイツのトレーニングを手伝った後にシャワー浴びにシャワールームに来たが、ずっと胸がときめいたままで収まりそうにない。

あの恋に堕ちた日の事を改めて思い出すとこのドキドキが止まらなくなるのだ。

「少し攻めた服を着てみたけど……………私が恥ずかしいだけでアイツは全然平気そうだったんだよなあ……………」

わざわざ胸を押し付けてみたり、少し恥ずかしかつたけど、お尻を動かして意識させてみようかと頑張ったけれど効果が見られなかった。

「ま、次に活かせばいいさ。私はジャン・ボール、私掠船の尊敬された船長と同じ名を持つ者だ。ライバル達が多くとも必ずアイツの心を奪ってやるさ……………海賊らしくな」

シャワーのコックを捻つてお湯を出した。

温かなお湯で汗を流しながら次の案を考える。

狙った獲物は絶対に逃さない。

それが私、ジャン・ボールなのだから!!

第7話 家庭の味と長良

指揮官です。

今日はいつも頑張ってくれる自分の筋肉の為にしっかりとお昼の燃料補給していきたいと思います。

という訳で食堂に行こうとしたらちようど出会った彼女に呼び止められた。

「あ、指揮官く。ご飯食べるならちようど良かったく」

そして、そう言われていきなり手を引かれ、彼女の部屋に連れて行かれた俺は目を白黒する羽目になる。

だって……女の子の部屋に入るの初めてなんだもん。

すげえいい匂いする（脳死中）

すでにノックアウト寸前の頭を切り替える為に自分の腹筋に力を籠めて周りを見渡すと、ぬいぐるみを飾り、可愛い小物がいくつも置いてあるホントに女の子らしい女の子の部屋が視界を埋め尽くす。

「……………落ち着かん」

童貞の俺には敷居が高過ぎてまるでラストダンジョンのようなこの部屋の主は

「ちよっと待っててね指揮官。今ご飯持ってくるからねく」

と言って部屋を出て行ったばかりだ。

あまりにも急な展開に置いてきぼりにされそうになっているが、彼女はいつも姉妹にご飯を作っていると聞いたことがある。

つまり俺は彼女のご飯にお呼ばれしたという事でいいのだろうか？

姉妹の分を作り過ぎたから丁度食堂に向かって歩いていたら俺を見つけてご馳走してくれるという事なのだろう。

「……………たぶんそうなんだろうなあ……………ん？」

脳内で推理出来る範囲で結論を出しつつご飯を待っている俺の視界に…………彼女が普段服を仕舞っているであろうタンスの前に可愛いリボンがワンポイントの純白のレース付きパンツが落ちているの

を発見した。

これどうしよう？（困惑）

いやいやいやいやいやいや！！

こんなラブコメみたいな展開あつてたまるか！！

俺は今一人でここに居るんだぞ！！

あ、こんな可愛いのが穿いてるんだって股間の息子は大喜びだけど、状況的にこれは俺が変態扱いされる危険がある。

「教えてくれ上腕二頭筋……俺はどうすればいい……」

自らの筋肉に語りかけてみるが、マツソーは何も答えてはくれない……

俺がダンスにパンツを戻しても普段とは違う畳み方になるのは明白で、直ぐに気が付かれてそのまま変態として営倉行きは確定だろう。

逆にこのまま彼女が帰ってくるまで放置しても部屋に戻った彼女にパンツを見られたと言われてやはり変態扱いは免れない……

「八方塞がり……だど？」

まさに万事休すである。

確かに童貞の俺にはあの可愛らしいパンツは眼福だが、俺を信頼してこの彼女の自室に一人で待たせて貰っているのにその信頼を裏切りたくはない。

「……………はっ!?この手があつたか!!」

悩み続けた俺の視界に焦燥感のあまり握り拳を作っていた自身の腕が入ってピンツときた。

この手に限る。

俺は上着とワイシャツとタンクトップを脱ぎ去り、その場で逆立ちしてそのまま姿勢を保持して腕立て伏せを行う。

「ごめんね指揮官。あて、ちよつと遅くなっちゃった」

扉が開いてこの部屋の主である重桜の巡洋艦 長良が帰ってきた。

「あれ？指揮官またトレーニングしてたの？相変わらず凄い筋肉だね

く。……あれ？はわわわわ!!指揮官、そのまま少し待っててね!」
机に恐らくお膳に載せたご飯を置いてちようど自身の下着が落ちて
いる事に気が付いたのだろう。

俺にそういう声を掛けてタンスを開けてパンツを仕舞う音が聞こえた。

「も、もういいよ指揮官?お昼ご飯を食べてくれないかな?」

どこか焦ったような声色の長良の声を聞いて腕立て伏せを止めて
ゆっくりと足を床に降ろす。

俺の作戦は完璧だ。

逆立ちをする事で自然と視線は床に固定されるのでパンツを見ら
れない状態に持ち込む事が出来る。

普段から筋肉を鍛える俺が待っている間に筋トレを始める事は彼
女から見てもなんら不自然ではないはずだ。

「ああ、すまない。少し身体を動かしたくなつてな……長良のご飯
は美味しいと聞いている、少しでも腹を空かしておこうとも考えたん
だが……君の部屋ですべき事じゃ無かったな。どうやら俺も噂
の美味しい長良の料理を楽しみにして待ち切れなかったみたいだ、す
まない」

「えへへ♪そんな事言われてもおかずを一品増やすだけだよ指揮官
♪」

はにかむ様な照れた笑みを浮かべながら普段の服装にエプロン姿
の長良が頬に手を当てながら身を振ると、その身長に対して不釣り合
いな程に大きなお胸様がフルリフルリと揺れるのが見えた。

うん、眼福眼福。

あまりに可憐なその姿と視線を誘導されそうになる程大きな巨峰
に癒されながら並べられていく料理の美味しそうな匂いに空腹を感
じた。

「それじゃあ指揮官?召し上がれ♪」

「全ての食材と調理してくれた人に感謝して……いただきます!!」

見るものを癒し尽くしそうな微笑みを浮かべる長良に見られなが
ら俺は両手を合わせる。

さあ、味わわせてもらおうか……………長良の絶品料理の数々を!!

……………長良のパンツも俺の脳内アルバムに頂きました!!

~~~~~

「えへへ、指揮官良い食べっぷりだったね」

食べ終わった食器を洗いながら美味しそうにご飯を食べてくれた指揮官を思い出して思わず笑顔が溢れる。

領きながら何度も美味しいと言ってくれた事が嬉しくてまた作りたくなってきた。

「でも、ベルファストさん達が普段はいるから難しいよう……………」

今日はベルファストさん達が用事で傍に居らず、指揮官が食堂でご飯を食べるという情報を苦労して手に入れて大急ぎで準備した甲斐があつたものだ。

「……………秘蔵の指揮官のポージング写真集を支払った甲斐はあつたから今は満足かなあ」

先に情報を持っていた赤城さんに頭を下げて写真集を渡す事でその権利を得たあては、少し勿体ない気持ちを感じながらも洗い終わった食器を乾燥用の籠に入れていく。

「指揮官……………かつこいいなあ……………」

手に付いた水分を布巾で拭き取り、エプロンを外しながら瞼を閉じた奥に浮かぶ指揮官の姿で何度も妄想する。

「あてが指揮官のお嫁さんになって……………指揮官のネクタイを締めたり、疲れて帰ってきた指揮官を労りながら一緒にご飯を食べて……………お風呂で大きな指揮官の背中を流して一緒のお布団に入ったら……………えへへ♪」

イケナイ妄想が捗ってしまう。

いつかはそんな関係になってみたい。

それを現実に見てみたいけれど、実際にはドジを踏んでしまった。「なんで下着が落ちてたのかなあ……………指揮官は気が付いてなかった

みたいだけど……でも、見られて指揮官がその気になってたら……えへへ〜♪」

もしも、もしも指揮官がその気になってたらあの太い腕で組み伏せられて乱暴にされてしまうのか？

それともイケナイ娘だと言われながらも口説かれつつ優しくして貰えるのか？

「はあ……切なくなってきた……」

その時を妄想すると身体が熱くなってきた。

でも今日は指揮官の残り香を楽しみながらできる。

「あては……指揮官のお嫁さんになりたいなあ」

恋しい想いを胸に秘めたまま、自室を目指す。

明日は昨日よりも指揮官に近づけますようにと願って。

## 第8話 お昼寝と睦月型

指揮官です。

今日は非番なので母港の全ての陣営が集う談話室にやって来ました。

私服でたまには筋トレせずにここで本を読むのが、俺の中で1番のリラックスタイムとなっている。

元々転生する前から本を読むのは好きだったし、本を集中して読んでいればKAN—SEN達も邪魔しないように声を掛ける事があまり無い。

例外があるとすれば……………

「……………なんで俺の身体を枕にしてんのかねえ」

「んみゅ……………」

「く……………く……………」

夕方の木漏れ日に気持ち良くなってソファアの上で少々うたた寝をしていた俺の腹の上に、重桜の駆逐艦 睦月と如月が仲良く手を繋いでお昼寝をしていた。

たまにこういう事がある。

この前うたた寝をした時は文月と長月が乗ってたし、重桜の駆逐艦達の格好のお休みスポットになってしまっているようだ。

寝顔が可愛い2人の頭を起こさない程度に軽く撫でて壁に掛かっている時計で時間を確認すると、現在夕方の16:25だ。

夕食にはまだまだ時間もあるし、彼女達のお昼寝を邪魔する事は忍びない。

「いくらKAN—SENと言ったって、この外見だからなあ……………ついつい甘やかしまっ」

睦月型駆逐艦の子達はとても幼い。

それこそ幼稚園児とまではいかないものの、小学生低学年から中学年程の外見年齢だ。

言動も幼くてあまり戦いには向かないような気もするが、彼女達を

悔ってはならない。

「こんな可愛いのに雷撃のスペシャリストでもあるからなあ……  
ホントにビツクリだよなあ」

やはりそこは駆逐艦。

魚雷の扱いはお手のものなのである。

「ん？おっとお!？」

「んんー……ちゅぷ……」

「……うにゅ……レロレロ」

そんな事を考えていたら頭を撫でていたはずの俺の手を睦月と如月が両手で捕まえて、指を一本ずつ舐め始めていた。

あれ？どうしてこうなった!？

「ええ……そうはならんやろ」

思わず困惑した心境を口に出してしまったが、彼女達は指の付け根まで丁寧にペロペロと舐めてくる。

その様子が彼女達の可愛らしく幼い容姿と重なって……ちよつと背徳感を感じてしまった。

そう、感じてしまったのである。

つまり、股間の紳士が『ん？呼んだかい？』と起き上がってきてしまっているのである。

アウトおおおおおおおおおおおおおおお  
!!!!!!

おめえ見境無しかよ!!

確かに可愛くて愛らしいけどさ、ロリコンにまで堕ちた覚えはねえぞ!？

まあ、なんというかこんなに可愛い子達がペロペロキャンデイの代わりに、俺の手を寝惚けながら一生懸命舐めてるのを見て背徳感を感じるのは……仕方の無い事なのかなあ……

「いかん……思考がアークロイヤルになるところだった……なん

て恐ろしい……………」

とにかくこの状況を脱出してロリコン野郎の称号を取らないようにしなければ……………」

とりあえず今舐められている手を引き抜いて……

「あううう……………」

「むううう……………」

めっっちゃ不機嫌になった挙句に二人揃って俺の手を両足の間挟み込むようにして抱え込んでしまったのだ。

さつきより状況が悪化した。

「しかもこの感触……………触ったことの無い感触だ……………もしや!？」

ふわふわとした感触が俺の手に押し付けられている状況を確認する為に視線を彼女達の向けると、あのヒラヒラのスカートが捲りあがって可愛いプリントパンツが晒されているのが見える。

「マジでえ……………なんでだよお……………」

なんでこんな状況が悪化するんですかねえ!?

そしてこの状況で起き上がってこようとするペドな股間の紳士は空気を読んで貰いたい。

「このままでは……………しかし、どうすれば……………」

足りない脳みそを必死に回して考える。

このままではロリコン野郎もいいかな?なんて煩惱に理性が取り込まれてしまう!!

何か妙案は……………っ!??

「一か八か……………やってみる価値はある!!」

そう、この煩惱に理性が焼き切られてしまう前に実行するのだ。

まず腹筋だけで身体を起こして抱え込まれている腕を動かさないようにして一緒に起きる。

そしてゆつくりと二人を揺った。

「睦月、如月、そろそろ起きるんだ」

「ううん……………しゅきかん?」

「ふああ……………しきかんなの?」

今だ!!

起きた事で緩んだ足の拘束からスルリと腕を引き抜いて二人を抱き抱えた。

「だっこしてくれるのしゅきかん？」

「かたいおてでだねー」

二人は抱き抱えられた事に大喜びしてさつきまで俺の手があつた位置など覚えていないようだ。

今回はなんとかやり過ぎす事に成功したが、一步間違えたらどうなっていたか……

抱っこされて満面の笑顔でキヤツキヤツと喜ぶ二人を見て俺は癒されつつもこう思った。

ロリコンって簡単になつちまうんだなあと。

~~~~~

「しゅきかんからアメさんもらっちゃったね♪」

「おいしいね♪」

二人で手を繋ぎながら寮へ帰る。

今日の晩ご飯は大好きな指揮官のお膝の上であーんして貰いながら食べさせてもらって大満足。

そしてご飯が終わった後にアメさんを買って貰ってそこで指揮官とは別れたのだ。

「しゅきかんはやっぱりやさしいね」

「うん、如月しゅきかんはこわくないよ」

大好きなアメさんから感じる甘さに頬が緩みながら、普段は話さない事を互いに話し出す。

それは、胸の内に秘めた乙女の秘密。

「睦月、しゅきかんのおよめさんになりたい!!」

「如月も……ううううはずかしいよお……」

「そんなこといっいたらしゅきかんとられちゃうよー」

「うううううう……それはいやあ……」

自分達二人だけでなく、指揮官を想う人は多い。

睦月型の皆で指揮官に好きになってもらおうと作戦を立てている所なのだ。

自分達が他のKAN—SENに比べて小さいというのは分かっている。

その分指揮官に好きになってもらうのが難しいのも……だから考えた。

「しゅきかんをろりこん？つてのにすれば睦月たちもおよめさんになれるの！」

「うまくいくかな？」

小さい子を好きになるロリコンというモノに指揮官をしてしまえば、自分達もチャンスが巡って来るかもしれない。

そして、指揮官が談話室で本を読んでうたた寝している瞬間を狙って睦月型の皆で協力して交代しながら添い寝しているのだ。

全ては指揮官をロリコンにする為に

「いつかしゅきかんとみんなでけっこんしようね」

「うん、如月がんばる!!」

その意味が分からずとも、最終的に皆で幸せになるために……

その行為で指揮官が窮地に陥るといふ事も分からずに……

第9話 特訓と山城

指揮官です。

今日は普段鍛えた筋肉を解放しにトレーニングルームの一角に設けられた俺専用のスパリング区画に来ています。

サンドバッグやパンチングボール等を実際に使って自分の筋肉を確認する目的で設けられた区画なんだけど、何故俺専用と言われているのか？

その理由は簡単。

煩惱を全て筋肉に変えてきた結果、普通のサンドバッグ等では耐えられなくなってしまうからだ。

何時だったか？

煩惱を吹き飛ばす為に全力全開でサンドバッグを抉り込むようにして殴った際に、覆っていた布を突き破って中の綿（ワタ）が辺り一面にばらまかれたのは……………

あの日は施設を管理している明石と不知火にめちやくちや怒られた。

その後、修繕費としてとんでもない量のダイヤを持っていかれて、ついでと言わんばかりに床や壁なんかも戦艦クラスの砲弾が直撃しても壊れないような耐久性を持った物に変えられた。

「おかげで全力で動いても大丈夫なようになっただけだな……………」
踵を床から離して軽くステップを踏みつつ、両腕を胸の前に構える。

仮想する相手は前世のゲームで蛇のコードネームを持つ伝説の傭兵。

CQCと呼ばれる特殊な格闘術を持つ伝説の傭兵は今の俺にとって最適なトレーニング相手と言える。

この母港で暗殺対象となる指揮官である俺が暗殺者に直接狙われて、接近戦闘になった際にその中でも最高の潜入工員である彼との戦闘を想定する事が一番暗殺者達のスタイル的に似ているし、その完

成系と言っても良いからだ。

左手にナイフを逆手に持って腕をクロスするように構える彼が、腰をゆっくりと沈めて時計回りに俺に回り込みながら接近してきた。

俺はそれに合わせてステップを踏みながら正眼に来るよう身体の向きを変える。

おそらく勝負は一瞬。

銃を使わずに俺を暗殺しに彼が来るのならば、KAN—SEN達に気が付かれないように一撃で仕留めに来るはずだ。

その一瞬を逃さぬように瞬きすらせずに彼を見つめ続ける。

ステップを踏んでいるだけなのに汗が滲み出てきた。

「っ?!?!」

気が緩んだ訳ではなかった。

滲み出てきた汗が目に入って少し顔を顰めた瞬間に彼は飛び込んできたのだ。

「クソっ!」

とつさに上体をスウエーする事でナイフを躲す。

しかし、それは予備動作に過ぎない。

素早く懐に入り込み何も持っていない右手で俺の右腕を掴むとそのままスウエーの反動で戻った上体の勢いを使って投げ飛ばされた。

「まだだ!!」

そのまま関節をキメられる前に受け身を取りながら、投げられた反動を活かして俺は彼を投げ飛ばす。

だが、それは想定の内だったのか転がりながらも素早く体勢を整えて油断なくまたあの構えを取っていた。

軍隊格闘術を習う前に徴兵で直ぐに前線へ送られた経緯を持つ俺には、我流の喧嘩殺法しか知らない。

だからどうしても自分の筋肉のパワーを主軸にした、半ばプロレスのような戦い方になってしまう。

「…………やはり技を知らなければ宝の持ち腐れか」

彼から目を離さずにしかし、勝てないからと言って諦めるつもりは無い。

確かに技を俺は知らない。

だが、俺は指揮官である。

勝てなければ勝てる戦力が来るのを待てばいい。

「時間は俺の味方だ……KAN—SENの誰かが来るまで耐えれば良い」

それを知っている彼はすぐに再攻撃を掛けてきた。

今度は掴まれないようにステップを踏んでいる足を使って距離を取りながら、冷静に相手を見極める。

どれだけ情けなくても、生き残らなければならない。

この母港のKAN—SEN達の指揮官である以上は、生き恥を晒しても………

「絶対に諦めん!!」

そう、トドメを刺されるその瞬間まで生き汚く、汚泥を啜ってでも彼女達の指揮を執らねばならないのだ。

彼女達は良くも悪くも純粹な存在である。

人間の汚い部分を知ってはいるが、理解していない娘達も多い。

その例があの時手籠めにされそうになったジャン・パールや研究室に監禁されたローンだ。

元々鉄の船であった彼女達に人間の汚い部分をいきなり理解するのは難しかっただろう。

そのせいで彼女達は利用されてしまい、汚い人間の玩具へと選ばれてしまったのだ。

「俺が生きている限りは………させんぞ!!」

鋭い切っ先を向けて突撃してくる彼の思惑を読んでその影で、再度掴んでこようとすると右手を振り払い逆にナイフを持つ左手を殴りつける事で手放させる。

武器を無くして膠着状態になった所で彼は逃走を開始した。

これ以上時間をかければKAN—SENが来て更に不利になるのを感じての撤退。

「彼女達を人間の玩具にはさせるものか……………」

仮想ではあるが、何ヶ所かナイフで切られてしまった。

実戦であれば流血していることだろう。

彼女達を護る為にはまず自分が生きなければならぬ事のなんと難しい事か……………」

「はあ……………未熟者だな俺は」

トレーニングを終えた俺は備え付けで置いてあるベンチに座ってベルファストが用意してくれていたタオルで汗を拭き、スポーツドリンクを飲む。

いくらサンドバッグを貫通出来る程の力があっても、パワー主体の戦い方には限界がある。

そう学ばされるトレーニングだった。

「殿様避けて〜!!!」

「え?」

自分の戦闘スタイルについて深く考えていたら反応が遅れた。

顔を上げた瞬間にパフツと柔らかいモノに俺の視界は遮られてしまったからだ。

「むぎゅ? (なんだこれ?)」

「うにゃあ! くすぐったいですよ殿様あ!!」

思わず顔を覆っているソレを触ってみると凄く柔らかいゴムまりみたいなモノだった。

しかも重桜の戦艦 山城の声まで……………」

「ふががが! (山城!?)」

「ああ…………と、殿様あ…………はう…………それ以上はあ…………んあつ…………山城おかしくなつちやいますう……………」

何故山城がここに居るのは置いておくとして……………」

この柔らかいゴムまりみたいなのはもしかしなくても山城のお胸
様か!!??

「と、殿様がぁ……いい……なら……やまし……ろは……あうっ……」

山城の声が蕩けて俺の股間の紳士にダイレクトアタックしてる。

このままじゃSTAND UPしちゃおう!!

「つぶはぁ!!待て待て待て!!どうした山城?!

俺の顔を塞いでいるお胸様から名残惜しいが顔を離して山城を見ると、そこには荒い呼吸をしながら時折身体をビクつかせ頬を紅潮させながら瞳を潤ませる美少女がいた。

「殿様がぁ……あうう……山城の……んんっ……む、胸をお……」

「へ?……ええ?!」

艶やか過ぎる山城に言われて自分の手を確認すると

イケナイお手手がお山と頂きをモミモミコネコネしてた。

「ごめん山城!!」

「あぁ……はぁ……はぁ……殿様ぁ」

慌てて手をお胸様から離すと山城は俺に向かって倒れ込んでくる。

それを慌てて抱き留めると山城が潤んだ瞳でこちらを見つめて、そつと俺の胸に手を当てながらしなだれ掛かってきた。

「だ、大丈夫か山城?」

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

見たことも無い山城の様子にドギマギしながら声を掛けるが、山城は荒い呼吸と紅潮した頬のまま俺の事をじっと見つめるだけで何も言わない。

これはどうすればいいんですか? (困惑)

童貞故にこのシチュエーションを想定出来ず、思考が停止しそうになるが……まだだ、まだ終われんよ (震え声)

なんだか雰囲気ピンク色っぽい感じがするけど……童貞の俺にはいっぱいいっぱい過ぎる!!

でも、勿体なかったかなあ……………

~~~~~

「殿様のほか……………」

布団を頭まで被って呟く。

千載一遇の好機だった。

あのトレーニングルームで特訓の終わった殿様を遊びに誘おうとして、偶然転けてしまった山城は殿様に胸を揉まれました。

それが嫌じゃなくて、むしろ大好きな殿様に触られて自分で触るよりもとても気持ち良くて……………

そしてお部屋まで夢にまで見た憧れのお姫様抱っこで連れて来られて、山城は初めての時を迎えるのだと期待と不安に胸を膨らませていたのに……………

「本当に寝かせてくれるだけなんて……………鈍感な殿様のおばか……………」

期待したような事は無く、殿様はお医者さんのヴェスタルさんや扶桑姉様に知らせてくると言って出て行ってしまったのだ。

「もつと……………素直に大好きって言えば良かったのかな?」

布団から半分ほど顔を出しながら思索する。

鈍感な殿様にこの続きをして貰いたい山城はぼんやりと考えた。

どうにも治まりがつかない火照った身体が思考の邪魔をするけど、そもそもこの生殺しの状態で放置されたのは殿様への想いを伝える言葉や逢瀬を重ねるような仲に進展していなかったからではないかと考える。

「……………殿様にいっぱいいっぱい大好きって言えば、山城を可愛がってくれたかな?」

一人きりの部屋にそんな呟きが木霊する。

だったらもう次にする事は決まった。

「鈍感な山城の大好きな殿様には、山城の気持ちをいっぱいいっぱい

知ってもらおう!!」

そうして想いを伝えたら今度こそはこの続きをしてもらうのだ。

………とりあえず、姉様達が来るまで時間があるだろうから、この火照りをどうにかしよう。

「殿様あ……山城は………山城はあ………はう………お慕いしておりますううう!!」

軽く意識を遠くに飛ばしながら殿様にされたのを思い出して慰める。

いつかは必ず殿様と結ばれますように。

## 第10話 お風呂とテイルピッツ ※追記有り

指揮官です。

今日は週に二回ある大浴場が使える日なので、広いお風呂を求めて来ました。

中でも重桜式の大浴場は人気があり、前世でいう温泉の浴場みたいな開放感溢れる露天風呂や打たせ湯につぼ湯なんかが完備してある素晴らしい場所です。

「ふあああああ……まさに命の洗濯だあ」

婦女子には見せられない部分をおっぴろげにして、夜空の見える露天風呂の丸い石で囲まれたへりの部分に背中を預けてリラククスする。

最近は筋肉を虐め過ぎて疲労が溜まってきていたので、この大浴場が使える日をとても楽しみにしていた。

「前世が日本人だった身としては、やっぱり広いお風呂は嬉しいよなあ」

頭に畳んだタオルを乗せて目を閉じると気分は上々。

目を閉じていると一度行ったことのある温泉宿を思い出す。

「風呂上がりにお酒を飲みながら会席料理なんてのも乙だったけど……そんな贅沢出来る訳ないよな」

というか指揮官としてここに着任しているのに、酒を飲んで指揮が出来ない状態になるとか言語道断である。

なので少し寂しいが、紅茶やコーヒーで我慢するのが筋というものだろう。

「それに酒なんて飲んだ日には……赤城とか隼鷹に大鳳が怖い」

介抱するフリしてそのままお部屋にお持ち帰りされた後、気が付けば既成事実を結ばれていたなんて事に……

「……そうなたら母港が吹っ飛ぶかもな」

怖や怖やと肩を摩り、湯船に浸かっているにも関わらず急に冷えた



背中を震わせながら想像を打ち切る。

せつかく皆で協力して盛り上げた母港がそんな不祥事からの不和で吹き飛ぶのだけは避けたい。

ここがそんなくだけない理由で墮ちたら、セイレーンに呆気なく人類が滅ぼされるだけだろう。

「これからもマツソー神を信仰して皆の健やかなる毎日を祈ろうか」

俺が信仰するマツソー神。

俺に危機的状況を打破する知恵を筋肉から教えてくれるありがたい神様である。

と言つても筋肉を見ていると危機的状況の時に、不意に知恵が思い浮かんでいるからそう言っているだけなんだが……………

「まあ、筋肉で解決出来るんならやっぱりマツソー神が宿つてるとしか思えないんだよなあ……………」

自分の両腕の筋肉を眺めながらマツソー神が宿つて居そうな場所を考えて……………やめた。

「身体を鍛えて筋肉を育ててれば、それがマツソー神の信仰になるさ」どこにいるか分からない神様の居場所を特定するよりも、更なる信仰として筋肉を鍛える方がよっぽどご利益がありそうだ。

そう思つて腕を暖かいお湯に沈めていった。

「ここが重桜のお風呂ね、素晴らしい場所だわ」

「ん？」

不意に後ろから声が聞こえてきた。

おかしい、今日は俺だけがこの大浴場を使える日のはずだ。

誰もいない場所で声が聞こえる筈がない。

「っ???!指揮官?!何故女湯のここに貴方がいるの!!!」

はい、幻聴なんかじゃありませんでした。

どおしてだよおおおお!!!

振り向かなくても分かる。

俺が大浴場を使える日にKAN—SENが入ってきてしまったという事に。

隠す物が貧弱なタオル1枚しかない時に限ってラブコメの波動が発動とか聞いてないぞ!!

とりあえず落ち着け………C O O Iになるんだ俺!!

安易に振り向かず、そのまま声を掛けてみる。

「今日は俺が大浴場を使える日のはずなんだが……」

「そ、そうなの? 今まで寮のシャワーしか使わなかったから知らなかったわ」

どうやらこの声の主は俺が大浴場を使える日という事を知らなかったらしい。

ならばこれは単なる事故だ。

「そうか、普段使わないのなら仕方ないな」

「本当に申し訳ないわね指揮官。私もそういう事をしっかり把握しておくべきだったわ」

よしよし、このまま当たり障りのない会話でやり過ごして彼女には悪いが俺が出て行った後に入浴してもらおう。

「なら、せっかくだからご一緒させてもらおうかしら?」

はい? (困惑)

今なんと仰いましたか?

ここでそう来ます!?

なんで出て行ってくれないんだよ!!

そんな事したら股間の間かん坊が暴れちゃうだろ!!

「隣、失礼するわね」

あ、オワタ＼（＾ω＾）／

よりによって俺の横に美しく透き通るような白い肌を惜しげも無く晒す、鉄血の戦艦 テイルピッツがゆつくりとお湯に入ってきた。

「はぁ……これがお風呂……こんなに気持ちが良いなんて知らなかったわ」

たわわなお胸様を両腕で隠しながら手で掬ったお湯をそのお胸様に掛けていくテイルピッツ。

お湯に当てられてほんのり赤みの差した頬と温かいお湯の気持ち良さで潤んだ瞳が妙に色っぽい。

お願いマツソー……息子抑えられない（落胆）

真横でそんなんざれたら童貞の俺にはヤバ過ぎるって!!

見ろよこれ!!（見せられない）

スタンディングオベーションの仰角最大の状態だぞ!!

こんなん見られたら俺の社会的地位は吹っ飛んじまうよ……

「ああ……こんなに気持ち良いのを今まで知らなかったなんて……損していたわ」

言い方！

ちよつとエロいんですよ!!

これちよつと童貞の俺を殺しにかかってませんかね？

「指揮官もこの気持ち良さを楽しみに来たのね？私と一緒にゆつくりと楽しみましょう？」

ヌンっ!!!（童貞が即死する音）

なんで言葉だけでそんなにエロいの？

心臓ドッキドキで血液循環の速度がウォータージェットみたいなんですけどお!?

ととととりあえず、お湯に関心がいつてる間になんか言つとかないところち見られたら俺の主砲も見られちまう。

「ああ、ここのお風呂は最高だからな。向こうにあるつぼ湯や打たせ湯なんかオススメだぞ?」

「そうなの?ならそれも試してみたいわね」

後ろの方にあるつぼ湯や打たせ湯を指差すとテイルピッツも振り返って興味深そうにそちらを見ていた。

振り返って見えた彼女のうなじに股間の紳士が『これもまた素晴らしい!!』なんて反応しているが、今はそんな事に構っている暇は無い。「一緒に楽しみたいところだが、そろそろトレーニングするつもりなのでな?」

「こんな時間に?まあ貴方らしいわね指揮官」

クスクスと楽しげに笑うテイルピッツはどこか納得したような雰囲気で見上げた。

よし、今だ!!

俺はすかさず頭に置いていたタオルを股間に当てて湯船から立ち上がる。

そしてしっかりと腰に巻き付け……主砲が邪魔で巻き付けられない!?

そんな風に悪戦苦闘していると不意に後ろからお湯の滴る音が聞こえる。

「今度はゆっくり一緒に風呂に入りましょう指揮官」

脇腹から手を通すように抱き着かれて柔らかな二つのナニかを背中に押し付けられながら、テイルピッツに後ろからそう囁かれた。そして一瞬力を入れてギュツと抱き締められると、そのままテイルピッツは離れて行った。

……………ほげええええ (魂消失中)

テイルピッツの大人な色気に当てられた俺はしばらくその場で立ち尽くしてしまっただった。

こんな無理やん……………

~~~~~

「ああ……………勿体ない事をしたわ」

目的のつぼ湯に入りながら目を閉じて反省する。

指揮官がお風呂に入っていたとは知らずに来てしまい、予期せぬ混浴となってしまった。

それでもどうか勇気を振り絞って彼の隣に座ってみたが、気恥ずかしくてどうしても彼の方を見る事は出来なかった。

「好きな人と共に居るといのは難しいのね」

孤独なる北欧の女王が聞いて呆れる。

共に在りたいと願う想い人の前ではただの小娘のようで、思ったように話せないのだから……………

「もつといっぱい話せればいいのだけれど……………」

唯一出来た事は遅しい筋肉を持つ指揮官の背中に抱き付けた事だけ。

あんなに雄々しく傷だらけの大きな背中を見て思わず抱き着いてしまったけれど、それだけが今回の出来事で最高に良かった事だった。

「もつと余裕を持って指揮官と話したかったな……………次こそはしっかりと指揮官を見て話さなければ」

孤独なる北欧の女王と呼ばれた私を唯一孤独から解放して共に戦ってくれた指揮官。

貴重な存在だからと戦場に出されずに置き物と化していた私を、明るい光のある暖かな表側へ引っぱり出してくれた彼に必要とされた時の心地良さ。

そして、その凍ってしまった心すらも溶かして暖めてくれた彼に恋をしてしまった私は、どうしても彼を前にするとそこの小娘と変わらなくなってしまう。

「恥ずかしくはあるけれど、一緒に居られるのは嬉しかった」
お湯を掬って顔に掛ける。

閉じた瞼の奥に指揮官の背中が焼き付いていた。

「今度はもっと長く一緒に居たいわね指揮官」

あまり浮かべる事の無い笑みを自分でも気が付かずに浮かべながら、その時を想像しつつお風呂を楽しんだ。

次こそはしっかりと指揮官とお話出来る事を願って。

第11話 ジョギングとフォックスハウンド

指揮官です。

今日はほぼ日課となっている母港の外周をジョギングしています。朝の光が目に入る時間帯に走るのはとても気持ちがいい。

段々と温まってくる空気を感じ取りながら走るこの時間は、俺のその日のモチベーションを上げる要因として重要な役割を担っているのだ。

「やっぱり身体を鍛えるのは最高だ」

一定のリズムで足を動かしていく単純な作業にも思えるジョギングだけれども、身体の状態や筋肉の発達具合を自己判断するのにも使える実に便利な運動の一つなのである。

まあ問題があるとすれば……………

「はあっ…はあっ…はあっ…はあっ…指揮官!!」

俺の後ろで息を切らしながら着いて来るワンちゃんくらいか。

「無理にペースを合わせようとするなフォックスハウンド。それじゃあお前が倒れるぞ」

「ぼ、ぼくは……………けほっ……………指揮官の……………はあっ…はあ……………護衛だから!!」

ロイヤルの駆逐艦 フォックスハウンドはとても苦しそうだ。

それもそのはず、俺の走るペースはフォックスハウンドにとって全力疾走に近い速さなので、いくら体力があるKAN—SENでもかなりキツイはず。

しかも今彼女は艦装を付けていないとはいえ見た目通りの少女としての体力ではないにしても、俺に合わせられる程ではないのだ。

「ふう……………仕方ないか」

「はあっ…はあっ…はあっ……………も、もう……………やめるの?まだいつもの距離……………走ってないよね?」

一度立ち止まってフォックスハウンドが追いつくのを待つ。
追いつき汗を滝のように流して息も絶え絶えにしながらフォックスハウンドは、両手を膝に当てて前傾姿勢のまま顔だけ上げてそう言う。

ちなみにフォックスハウンドは改装を済ませており、前まで小柄な駆逐艦にはある方だと思っていた胸部装甲が巨峰というか霊峰と言える大きさになっている。

何が言いたいかというと……

汗で服が張り付いてエロいんだよ
!!!!!!

改装すると服装が北半球丸出しで生地薄い服になるので、余計に胸を強調したように見えてしまう。

そこにヒラヒラとしたフレア超ミニスカートにニーソックスとの絶対領域とか……

マジエロい（確信）

更に煩惱を直撃する要素に彼女の性格は人懐っこいワンコなのだ。

あの霊峰で人懐っこいワンコのように構って構ってされるとか

……

真っ白に燃え尽きちまうぜ……

てか今現在も股間の紳士がムクムク起き上がりながら『ん、最高ですねえ』と言い始めているのだ。

とりあえずフォックスハウンドに知られる前に偽装として彼女の視線に合わせるよう、片膝を折ってズボンにスペースを作ってそこに股間の紳士を隠しておく。

これで安心だ。（慢心）

息が整ってきたフォックスハウンドを見つつ、無性に頭を撫でてやりたくなるのを堪えながら口を開く。

「護衛だというのは分かるが、それじゃあお前が先に潰れてしまった意味がないだろうか？」

「うううう……でもお……」

若干涙目で悲しそうな表情をするフォックスハウンド。

ゾクゾクつと何かイケナイ扉を開きそうになるが、不屈のマツソーでそれを抑え込んだ。

「だいたいお前が護衛の時はいつもそうだ。何故俺に合わせて走ろうとする？他の皆は自転車（ロードバイク）や車に乗って追いかけて来るから、それを真似て来ればいいだろうか？」

「……………うん」

ますますしよんぼりしてきたフォックスハウンドが可哀想過ぎてこれ以上の説教をしたくはないが、ここは心を鬼にして話さなければいつか致命的な失敗をする事になる。

それによって俺が傷付けばフォックスハウンドに消えない心の傷を負わせてしまうことにもなるのだ。

だが、どうしてフォックスハウンドは俺を追いかけるようにして走るのだろうか？

その理由を聞いてみない事にはこの問題は解決しないだろう。

「なあフォックスハウンド、なんで俺の後に着いて走って来るんだ？理由を教えてくださいよ」

「……………」

いつも明るい笑顔を振りまくフォックスハウンドが俯いたまま喋らない。

いったいどうしたものかと考えていると、不意にフォックスハウンドがこちらにゆつくりと近づいてきた。

「フォックスハウンド？」

俺が声を掛けても反応しない。

そして俺のすぐ側まで来ると……………何も言わずに抱きついてきた。

なん……だと……!?

二つの霊峰がムニユリと形を変えて押しつぶされながら、俺の目の前に映る。

股間の紳士が『ギター(。▽。)(。▽)(。▽)(。▽)』と喚いているのも気になるが、それより先にフォックスハウンドの!様子がおかしいのを一番に解決しなければならない。

股間の息子よ、だから収まってる!!

全身の筋肉に力を込めて股間の紳士を抑え込んだ俺は、改めてフォックスハウンドの顔を見た。

そして改めて見たフォックスハウンドは……泣いていた。

「どうしたんだ?いつも明るいお前はどこに行ったんだ?」

「ごめんなさい指揮官……ぼく……ぼくは……」

まるで捨てられた仔犬のように震えて泣くフォックスハウンドは嗚咽が混じって上手く話す事が出来ない状態だったが、それでも俺に何かを伝えようとしているのが分かる。

そんな彼女に俺は頭を撫でながら落ち着くのを待っていた。

「……指揮官」

「ああ、どうしたフォックスハウンド?」

あれからしばらく泣き続けたフォックスハウンドを頭を撫で続けながら慰めていたら、ようやく収まったのか少し躊躇する様子で俺に話しかける。

俺はそんなフォックスハウンドに自分で出来る精一杯の笑顔で優しく向き合った。

赤く腫れた目をしながらフォックスハウンドは……俺の肩に頭を乗せて、まるでぬくもりを感じ取ろうとするかのように頬擦りを始める。

そんなフォックスハウンドの行動に驚きつつも、俺は股間のバツキヤローが反応しないよう細心の注意を払って受け入れた。

「ぼくね？最近指揮官から距離を置かれた気がして…………嫌われたんじゃないかと思ったんだ」

「え？」

「だって改装が終わってから指揮官はぼくが前みたいに抱きつこうとしても、押し止めて離れて行くし…………」

思い当たる節はあった。

彼女の改装が終わってから前の外見からかなり変わってしまった、特にそのお胸様が霊峰へと変わってからというもの…………股間の俺がわっしょいわっしょいとお祭り状態になりかけたからだ。

それから彼女が抱きつこうとしてもそれをマツソー神のお告げを使つて回避していた覚えがある。

「いつもは笑顔で抱きつかせてくれたのに…………ぼくは指揮官に嫌われる事しちゃったのかなって…………走ってる指揮官を見てたらそのまま置いていかれるんじゃないかって…………そう思っちゃったんだ」

「フォックスハウンド…………」

確かにあの頃はロリコンではなかったし、駆逐艦にしてはあるお胸様が当たるのを役得役得なんて考えでフォックスハウンドが抱きついてくるのを受け止めていた。

しかし、改装が終わってからの彼女の霊峰は完全に俺を煩惱で苦しめてくるのが分かる程のご立派様だったので、彼女の抱きつきに答えられなくなってしまうのだ。

「指揮官、ぼくは何が悪かったのかな？指揮官が嫌な思いをするような事をしたかな？教えてよ…………指揮官」

悲痛な表情でそう言うフォックスハウンドに俺は…………

「フンッ!!!!」

「指揮官!?!」

フォックスハウンドから頬を離して自分の頬を思いつきりぶん

殴った。

口の中で鉄の味が広がる。

恐らくぎっくりと自分の歯で口の中を切ったのだろうが、フォックスハウンドが感じた痛みはこんなものではすまないはずだ。

唾液と混ざって粘つくソレを戒めとして飲み込んで、俺はフォックスハウンドをしつかりと抱きしめた。

「ごめんなフォックスハウンド、俺が悪かった」

「指揮官？」

オロオロするフォックスハウンドに俺はしつかりと目を見て話す。

「改装が終わってからのフォックスハウンドはかなり魅力的な大人の女性に見えてな？ 大人になったお前に安易に抱きつかない方が良くと勝手に俺が思っていたんだ」

「……………え？」

「本当にすまなかった、俺の中で勝手に決めつけてしまってお前を傷つけてしまったんだ」

彼女達KAN—SENは良くも悪くも純粹だと自分で理解していたはずだった。

いや、理解していたつもりになっていただけだったんだ。

改装で成長した姿になっても彼女達は純粹なままで、俺が身体的特徴から勝手に決めつけてしまっただけで心理的な変化はなかった。

「フォックスハウンド、俺はお前を嫌ってなんかいないさ。お前の明るさに救われたことだってあるんだ」

「そう…なの？」

小首を傾げてキョトンとするその姿は改装を受ける前のままだ、そんな純粹無垢な彼女の姿が煩惱まみれになりそうになった時に俺を正気に戻してくれた事があったのだ。

イラストリアスのスーパーBIGお胸様に悩殺されそうになった時に、底抜けに明るい笑顔で抱きついてきたフォックスハウンドにアニマルセラピーを受けて九死に一生を得ることが出来た事があった。

「だからもう一度謝りたい。本当にすまなかった」

「うん……うんうん！ぼくは指揮官に嫌われてなかったんだね？今まで通りに指揮官に抱きついて良いんだね？」

あの底抜けに明るい笑顔のフォックスハウンドが戻ってきた。目をキラキラさせて俺を見ている。

「ああ、もちろんだフォックスハウンド。」

「指揮官大好き!!」

嬉しそうに頬擦りしながらそういうフォックスハウンドは、今まで暗さが嘘のように元気が良かった。

……でも考えてみればフォックスハウンドに悩殺されそうになる可能性が高くなったのでは？

男に二言は無いが、少し早まったかもしれない……

~~~~~

「えへへへへ♪嬉しいなあ♪」

指揮官に嫌われてた訳ではなかったと分かってとつても嬉しい。

とつてもとつても嬉しくて笑顔が止まらなくて、つつい声に出ちゃう。

「指揮官はこれからも抱きついてきて良いって言ってたし、大好きな指揮官にまた抱きつける♪」

指揮官に抱きつくのと、とつてもいい匂いがして頭がクラクラする程気持ち良くなれるし、あの匂いを嗅いでないとお腹が切なくなる。

これから指揮官の匂いをドンドン嗅いでもっと気持ち良くなろう!!

よく分からないけどそれが良い事だと感じているし、自分がそうしたいと強く願っている事なのだから。

「……ふざけんな!!こんなの無理に決まってるだろ!!」

「ん。」

夢見心地から目の前の貧相な”人間”に意識を戻す。

ロイヤルの本土から送られて来た指揮官候補生らしいのだけど、母港から離れた出島で試験を受けさせられているが煩いのだ。

一応フォックスハウンドだけじゃなくて他のKAN—SEN達も試験官として来るみたいだけど、今日はワンワンが試験官をする日。

「だいたいこんな無茶苦茶な試験は有り得ないだろ!？」

「そうかな?」

「当たり前だ!・150kmの距離を5時間以内で走り抜けるとか、ダネル250kgを持ち上げるなんて……指揮官のする事じゃないだろ!?!おまけに精鋭の工作員部隊と単独で交戦して生き延びるなんて無理だ!!」

「……………」

本土からは指揮官以外の候補生を擁立したい思惑があるみたいだけど、こんな貧弱な”人間”じゃあ指揮官にはなれない。

「君はこの程度出来ないの?」

「あ、当たり前だ!!お前、俺の事をバカにしてんのか!?!こんな理不尽な事をして良いと思ってるのか!!」

激昂した”人間”がフォックスハウンドに詰め寄って来るけれど……貧相すぎる身体のせいで迫力が無さ過ぎる。

「くっ、KAN—SENを指揮するだけなのに必要の無い事ばかりするなんてナンセンスだ!俺は帰らせてもらおうぞ!!」

全く迫力の無い”人間”を興味も無いのでただ見ているだけだったけれど、何故か勝手に怯んで帰って行ってしまった。

これで100人目の候補生がこの試験を合格出来ずに去っていった訳だ。

「おかしいなあ……………そんなに難しい試験じゃないはずなんだけになあ……………」

普段から指揮官がしている事を簡単にしたモノを試験にしているだけなのに……………

「ぼくの指揮官はできたよ？ぼくの指揮官なら簡単にできたよ？」

やっぱり”人間”は指揮官になれない。

ぼくの指揮官は彼だけなんだ。

ああ、指揮官は………ぼくの指揮官以外いないね。

## 第12話 ダンスとドイツチュラント ※追記あり

指揮官です。

今日はダンスホールでダンスの練習をしています。

基本的な3ステップを踏んでターンを決めるゆったりとしたダンスは、前世も含めて全くの素人なので最初に踏み出す足の運び方など……筋肉でカバーしづらい場面が多い。

しかも本番さながらに俺専用のタキシードを着て練習してるからいくつか可動範囲が狭まってなかなか練習しがいがある。

幸いにも鍛えているお陰か自分流ではないが、いくつかの動きをマッソーで合わせることが出来ていた。

「鍛えてはいるが、普段使わない筋肉が沢山あるもんだなあ……」

今回練習している男性パートナーはリードする部分が多く、ステップの始動は必ず俺から始めないといけないのでリズム感や相手に合わせる洞察力も高めなくてはならない。

「普通の筋トレとは違ったマッソーのトレーニング方法になるなあ……やっぱりこれは良い」

ダンスの練習をすると聞かされた時には苦手意識を持ったものだが、実際にしてみると身体を動かす筋トレとは違った独特の感覚に少し楽しみになってきていた。

「1. 2. 3. 1. 2. 3. ……ここでターン！」

仮想で居るはずのパートナーと共にステップを踏んでターンを決める。

だいたい儀礼的なパーティなどのダンスホールでダンスを求められた時の為にと練習を始めたのだが、今では本当に心から楽しんでる自分に驚きつつも筋肉との対話を続けていた。

「ちよつとー！ 下等生物!!」

「ん？ ドイツチュラントか？」



ダンスの練習中にホールへと入ってきた彼女は鉄血巡洋艦 ドイツキュラント。

しかし、いつもの彼女の魔改造軍服姿ではなくパーティ用の漆黒のドレスを身に纏ってホールへ来ていた。

はて？

いったい何の用事でドレスを着ているのだろうか？

「二人で寂しそうに踊る貴方に高貴な私がパートナー役をしに来てあげたわよ」

そう言つて不敵な笑みを浮かべたドイツキュラントは俺の側まで来て手を差し出す。

突然の事態に目を白黒させていると

「この下等生物！レディが手を出したらしつかり受け取るのが紳士というものでしょう!!」

めっちゃ怒られた。

というか童貞の俺にそんな高難易度な事を求めるのか……

まあ一人で踊りの練習をするよりか、相手役がいる方が捗るのも確かだ。

でも言われっぱなしってのも癪だし少し芝居かかったやり方でドイツキュラントを誘ってやるか。

イタズラ心が芽生えた俺はドイツキュラントの前で跪き、頭を少し下げて恭しくその手を取る。

「御一曲この私と踊って頂けませんか？麗しいフロイライン？」

「……………ふえ？」

ドイツキュラントの声が聞こえた後に顔を上げると呆けた顔が見えた。

そしてみるみる赤色に染まると

「お、お願いね？」

消え入りそうな照れた声でそう俺に向かってそう言ってきたのだった。

あれ？思ってたのと違うね？（困惑）

想定していた反応は

「ふん、やれば出来るじゃない下等生物」

みたいな少し見下したようなドイツチュラントが居たはずなんだけれど……………

実際のドイツチュラントは赤くなり、恥ずかしそうにキョロキョロと辺りを見ながら少し内股気味になっている。

普段のドイツチュラントとは全く違った様子に俺は……………

『これもまた良きかな良きかな』と股間の息子がゆっくり立ち上がってきた。

いやいやいやいや!!

どうしちまつたんだドイツチュラント?!?!

こんなのまるで可愛い乙女じゃんよ!?

普段はプライドが高い系な彼女が見せる内気な態度とか、童貞の俺にはハートを震わせられるってか殺しにきてんぞ!?

ええい!!

このまま踊ってマツソーの力で煩惱を打ち消してやらア!!

「緊張してるのかドイツチュラント?ほら、二人しか居ないんだ。いつものように可愛い笑顔を見せてくれ」

あ、可愛いじゃなくてカッコイイの間違えだった……………

あの不敵な笑みをカッコイイって表現したかったのに、間違えて可愛いって言っちゃったよ!!!

これはドイツチュラントが怒っちゃまう。

「え?か、可愛い?そう?……………はう」

ドイツチュラントはますます顔を赤くして俯いてしまった。

そうじゃないんだよおおおおおおおおお！！！！

やる事成す事全部が裏目に出過ぎだろ!?

確かにこのドイツチュラントは可愛い。

だけど今の俺が欲しいのは股間の息子に優しい方のドイツチュラントなの!!

しかもよく見れば漆黒のドレスも肌が少し透けて見える仕様で辛抱堪らん……………

『盛wりw上wがwってw参wりwまwしwたw』

STAY!!マジでSTAY!!

股間の紳士がマジでイキリ勃ちそう……………

か、かくなる上は……………

「よし、それじゃあ始めようか?」

「え、ええ」

ダンスを……………

一心不乱にダンスを!!

握る手を彼女に合わせて伸ばし、俺はドイツチュラントの肩甲骨辺りに手を添える。

そして彼女が俺の二の腕辺りに手を当てたら曲が無いまま心に響くマツソーのリズムで3ステップを踏んでダンスを始めた。

身長差があるものの、しっかりとドイツチュラントは着いて来てくれるっていうか、潤んだ瞳で俺を見つめ続けたまま離さない。

なんでこうなったんだ……………

こんな可愛い姿って卑怯だぞ……………

~~~~~

ダンスホールに曲も無いまま始まる円舞曲（ワルツ）

身長差があるのにそれを苦にすることも無くフォローしながら踊る彼。

最初はからかいながらダンスを教えてやろうかなんて考えでここに来たのに、今では向こうにフォローされながら踊っている。

「さあ、こちらへ」

「あ……はい」

リードも優しく、見た目の大男からは考えられないほど繊細に導いてくれている。

微笑みながらこちらを見つめている様子はまるで貴公子のようだった。

パーティ用に特注で作った黒いタキシードが今の彼には良く似合っているから特にそう感じるのだろう。

ダンスの練習をするから本番と同じようにした方が良く、ロイヤルのメイドから言われて着たまま練習しているらしいけど………

カッコ良過ぎでしょ？

………これが惚れた弱味ってやつよね？

どんな態度で接しても変わらず笑いながら頼みを聞いてくれる彼に一度だけ、弱気な自分を見せた事がある。

鉄血の皆とはぐれて海域を彷徨っていた私に彼は途切れ掛けの無線で励まし続け、セイレーンの艦隊に見つかって大破して諦めたその瞬間。

「待たせたなドイツキュラント」

彼は指揮専用艦に乗って前線まで助けに来てくれた。

船は護衛のニーミ達すら置いてけぼりにしながらフルスロットル

で接近し、操縦を饅頭達に任せて船の後部からロープを握って水上スキーのように水面を滑りながら現れた彼がボロボロの私を抱きとめて離脱したのだ。

「なんで来たのよ!!」

と泣きながら怒る私に

「鉄血の皆の言葉を借りるが、大切な家族を護るのに理由は無いだろ？」

と笑顔で返す彼に、私は……………恋に堕ちてしまった。

曲の無い円舞曲は続く。

ずっと続けていたいこの時間が愛おしい。

普段は素直になれない私でも、こんな時くらいは彼に身を委ねたい。

ああ神様、どうか私と彼が長い時間を共に過ごせますように……………

第13話 試合と瑞鶴

指揮官です。

現在命の危機を感じております。

酷く晴れ渡った青空の下。

たまには前世 日本人らしく和を感じる重桜の道場でトレーニングをしようと思っただのがいけなかったのでしょうか？

目の前で紅蓮の焰を纏った刀を避け続けて既に15分が経過していますが、周りに誰も居ないので止めてくれる人がいません。

「ふっ、はっ、よっ……そりゃ!!」

「うわっ?!全部避けた上に反撃まで?!……ますます燃えてきたよ!!」

隙を見て素早く頭に卵を割れない程度の威力でチョップをしようとするが、紅白の着物を着た彼女は満面の笑みで回避して刀を正眼に構え直すと再び斬りかかってくる。

しかし、仮想の敵として戦った伝説の傭兵とサイボーグ化した雷の化身に比べれば遅く感じてしまう。

「そこだ!!」

「きゃん!……また負けたあ……」

確かに太刀筋が鋭いのだが、如何せん彼女の性格ともあいあまって素直過ぎて避けるのが簡単なのだ。

今のだって彼女が刀を振り下ろした瞬間に半身になりながら避け、距離を詰めて軽くおでこにデコピン（小指）をしただけである。

ちなみにこの勝負既に5回目だ。

戦績は5戦5勝であるのだが、刀なんて生身で受けたらいくら何でも死ぬわ!!

マツソー神への信仰として筋肉を育てている俺だからこそ、この勝負が成り立っている訳なのだが……それを彼女は気が付いているのだろうか？

「そろそろ終わりにするか?」

「うううう……もう一勝負!!もう一勝負だけだから!!」

……この負けず嫌いも筋金入りか。

しかし、これ以上はさすがにやばい。

ああ、そうだ……俺（の股間）がヤバい。

だって……コイツ丈の短いスカートで立ち回りを続けていたからパンチラし放題だったし、着物の前を閉じずに大きく開いて着ている為に胸元が大解放されてお胸様がほぼモロ見えである。

本人が自分の魅力に気が付いてない節もあるので本当に童貞からすると見る場所に困るんだよなあ……

「ねえ良いでしょ指揮官!もう一度、もう一度だけだから!ね?」

「……はあ、もう一度だけな?」

「やったあ!よし、今度こそ一本取ってみせる!!」

重桜空母 瑞鶴が正眼に刀を構え直した。

それを見て俺は構えを取る。

前のシャドートレーニングから少しファイティングポーズを変更した俺は、肩幅に足を開いて少し腰を落とす。

その状態で左足を少し前に出して半身状態を取って両手を顔の高さまで上げて構える独特の構えを取った。

大きく深呼吸をする。

丹田から全身の筋肉に酸素が行き渡るようなイメージで力を込めていく。

パワータイプの俺にはスピードで勝負する事が出来ない。

なら、ダンスで鍛えた洞察力や観察力を存分に活かして最低限の動作で相手の攻撃を避けていくのが現状できる戦術だと考えた。

瑞鶴が刀を振り下ろす瞬間にその軌跡を視認してその剣の腹を左手の指先のマッソーでそつとなぞって俺の体から逸らす。

「まだまだあー!!」

「……そこだ!!」

振り下ろしから斬り上げて来る刀を今度は右手の指のマッソーで

涙目の瑞鶴が刀から手を離して鼻を抑えていた。

「すまんな瑞鶴、少し力を込めすぎた」

「う　わああああああ　ん！　ま　た　負　け

たああああああああああああああああああああああ！！」

「うおっ?!ビックリした……………」

心配して近寄ってみたら鼓膜が破れそうになるような大声を瑞鶴が出して悔しがっている。

「ううか本気でビックリしたわ。

「そんなに悔しかったのか？」

「当たり前じゃない！私はKAN—SENで戦う為に生まれてきたんだよ？人間の指揮官に負けるなんて面目丸潰れじゃないの!!」

堰切ったようにように捲し立ててくる瑞鶴の迫力にたじろぎつつも確かにそうだよなあと共感した。

彼女達KAN—SENは戦う為に生み出された存在だ。

たとえ幼い姿であったり、見惚れるような美女美少女であったとしても本質は軍艦の化身と言ってもいい存在である。

それを生身の人間である俺に限定的な模擬戦であつても負けるのは自分のアイデンティティを揺るがすような事なのだというのもだ。

だがな？

「瑞鶴」

「なに指揮官？」

唇を尖らせて拗ねた様子の瑞鶴の頭を撫でながら俺は苦笑しつつ答える。

「お前は俺が努力しなかったとでも思うのか？お前達と共に戦う為に俺だって死に物狂いで自分を鍛えてきたんだ。…………俺だってお前達と一緒にいたいから誰にも負けないように頑張ってきたのさ」

「指揮官……………」

結局の所、それに尽きる。

前線で皆と一緒に銃を片手に戦う事は出来ない。

だが共にある為の努力をやめようとした事は無いし、自分で出来る範囲で彼女達のサポートとなるような後方支援や作業員等の不確定

気恥ずかしくて身悶えが止まらなくなるけど、私は指揮官に恋をした。

こんなに甘酸っぱいものだなんて知らなかったし、自分が恋するなんて考えてもいなかった。

でも、指揮官を狙うライバルは数多くいる。

「……………約束したんだ。一本取ったらお願いを聞いてくれるって」

衝動的に頬にキスをしてしまったけれど……………本番はこれからだ。

一度決めたらやり遂げる。

だって私は負けず嫌いので何事も真っ直ぐ全力で前に進んで来たのだから。

「強敵はいっぱい。一航戦やグレイゴーストだって狙ってる……………でも負けない!!」

強敵がなんだ!!

指揮官に相応しい魅力的な女性になって隣に共に在る。

私はあの美人で凄い翔鶴姉の妹なんだ!!

どんな困難にだって負けてやるもんか!!

第14話 記録とシャングリラ

指揮官です。

現在上半身裸でサイドチェストを決めたまま動けません。

なんでもしっかりと今のマツソーの状態確認してからまた次の確認の時との比較をしたいとの事。

確かに記録を取る事で次のステップへの目標も立てやすいし、自分では気が付かなかった事も出てくる筈だ。

「指揮官、次のポーズをお願いします」

「おう、これでいいか？」

「はい、ありがとうございます」

10分ずつ同じポーズを決めるのは少し疲れるが、記録を残す為だから仕方ない。

次はとりあえず、ダブルバイセップスで肩と腕に腹部の筋肉を大きく見せてみるか。

「……………記録を取っていますが、凄い筋肉ですね」

「まあ、鍛えてるからな」

感心したようにそう言いながらも、手元のボードに記録を書いている手を止めない彼女はユニオン空母 シャングリラ。

指揮官の頑張っている記録を残したいと俺に直訴してきたユニオンの眼鏡っ娘で性格も真面目さんであるが、根は優しくて気配り上手な良い子である。

「本来なら写真も撮りながら記録を残したかったのですが……………」

「奴の事は忘れよう」

「……………はい」

本来ならここにアーク・ロイヤルが写真撮影をしながら記録を残す予定だったのだが、つい先日の朝に駆逐艦の子達の隠し撮り写真がベルフアストとシェフィールドのガサ入れにより発見されて営倉にぶち込まれている。

その時に口走った供述によると

「駆逐艦の妹達があまりにも可愛くて……気が付けばシャッターを切っていた」

との事らしい。

本当にアイツ何してんだよ……（困惑）

「腕だけじゃなく背中中の筋肉の隆起も凄いですよ指揮官、まるでオーガの顔のようになってます」

「そう言って貰えると鍛えた甲斐があるな」

シャングリラの言葉に気を良くしながらポーズを続ける。

オーガ、つまりは鬼の顔のように見えるって事は背中中の僧帽筋、脊柱起立筋、広背筋の隆起が最高潮に高まっている証拠だ。

これからもマッソー神に感謝しつつ信仰を捧げて筋肉を育ててみましょう。

「……隆起した筋肉達が均一に並んで、絵のように見える姿はまるで芸術品のようです」

「そこまで言う事か？」

「はい、指揮官の筋肉はとても美しく見えますよ」

笑顔でそう言うシャングリラに少し気恥ずかしく感じるが、お世辞でもそう言ってくれる事に感謝しなくては。

「ありがとうシャングリラ。世辞でも嬉しいよ」

「お世辞なんかじゃありませんよ指揮官！自己評価が低いんですからもう……」

礼を言った筈なのに怒られた俺は、首を捻りながら何が悪かったのかを考える。

最後の方は声が小さくてよく聞き取れなかったので理由がよく分からない。

「とにかく、指揮官は素晴らしいです！こんなに鍛え上げられた人は中々いませんよっ」

「うーん、どうだろう？もしかしたら他にも居るかもしれない気もするがなあ……」

「またそのようなご冗談を……」

「えっ？」

「え?」

俺的には居そうな気がしたのだが、シャングリラは驚いた様子を見せていた。

「ほ、本当にそう思われているのですか?」

「あ、ああ」

「ダメです……指揮官の認識を早く何とかしないと?」

小声で何かを呟きながら頭を抱えるシャングリラに俺は再び首を捻る。

なにが悪かったんだ?

しばらく悩んだ様子のシャングリラだったが、ポケットから小さなメモ帳を取り出してこちらに向き直り

「いいですか指揮官?まず指揮官のように身体を鍛えている人でもそこまでの筋肉を保持できる方はいません。この前の記録ではダンベル280kgにバーベル498kgを持ち上げたそうですね?そんなの人類最高峰の筋力を持っている方でもそうそう出来ませんよ?それに150kmの距離をジョギング感覚で走り抜ける人間もいません。マラソン選手でもそんな距離を走れば身体が持ちませんし、ましてや朝食前の軽い運動みたいに行きませんからね?そして昨日は重桜の瑞鶴さんと模擬戦までしたそうじゃないですか……限定的な近距離戦なのは分かりますけどあっさり6回もKANSEN相手に勝利するなんて本当に人間なのか怪しいですよ?しかも勢いよく振り下ろされる刃物に合わせて指先で軌道をずらすなんて漫画の世界みたいな事をしないで下さい!!」

「お、おう……」

なんか凄い勢いでまくし立てられた。

あまりの勢いに内容が入ってこないが、怒られている事だけは分かった。

そして、メガネの美人が怒ると怖いことも……

「本当にお分かりですか?」

「ああ……なんとなくだが……」

「なんとなく?」

シャングリラは俺の言葉が気に入らなかつたのかツカツカとこちらに歩み寄って来る。

そして俺の目の前まで来ると腹筋に右手を沿わせてゆっくりと撫でてきた。

「……………シャングリラ?」

「……………はあ、指揮官は本当に凄いですよ?」

そして困った表情を浮かべて顔を俺の腹筋に近づけていく。

吐息が感じられる程に近い顔に俺は驚きつつも長い髪が重力によつて落ちて、そこから見えるうなじに色っぽさを感じていた。

柔らかい手のひらが俺の腹筋から胸筋にかけて移動していくのを感じつつ、シャングリラの頭が上がるにつれて見えてきた、たわわなお胸様に俺の息子がゆっくり背伸びを始める。

とりあえずシャングリラのお胸様が至近距離過ぎて息子が今日も元気です。

「こんなに凄いですから自覚してください……………私の自慢の指揮官なんですよ?」

俺の顔を見つつ笑顔を浮かべるシャングリラ。

しかし、上半身裸のままなので息子が隠せない俺は焦っている。

このままではシャングリラが下を向いた瞬間に立派になった息子と鉢合わせしちまうよ!!

「自慢の指揮官か……………そう思つて貰えて嬉しいよシャングリラ」

「はい、本当にそう思つてます……………それに」

「ん?なんだ?」

とりあえずその場を切り抜ける為に会話を続けていると、シャングリラが顔を赤らめてクスクスと笑っている。

いったいどうしたのか分からずに困惑していたら

「指揮官は私の胸が好きですか?女性は敏感ですから、そういう視線

ドを持ってペンを握る。

「さあ指揮官？記録を続けましょうか？」

輝くような笑顔でシャングリラは俺にそう言ったのだった。

今回は心臓に悪過ぎる……………

視線には注意しよう……………

~~~~~

「これは皆に比べて一歩リードできたのではないでしょうか？」

記録を取り終わって指揮官と別れた後に今日の振り返りをする。

指揮官に関する素晴らしいデータが蓄積できたのは僥倖で、データの約束を確約できたのは大きい。

「……………記録から推測して指揮官が女性の胸やお尻だけでなく、うなじ等にも興味を持たれているのを上手く使えました」

自室に戻ってすぐに達成出来た記録を指揮官専用のメモ帳に書き込んでいく。

新しい発見やその時に気が付いた事をいくつも書き込んでいくソレは既に35冊目のメモ帳だ。

「写真撮影役のアーク・ロイヤルさんに前の日からカメラを渡しておけば、駆逐艦の子達の写真を盗撮するのは記録からも明らかでしたから……………後はそれをロイヤルのメイド隊にタレ込めば指揮官と二人きりの空間を簡単に作る事ができましたね」

少しアーク・ロイヤルさんには悪い事をしてしまったと罪悪感が芽生えるが、それはこの時の為の布石なのでコラテラルダメージとして胸に仕舞っておこう。

それよりも指揮官の趣味や嗜好をもっと調べておくべきだ。

「普段お世話をしているロイヤルのメイド隊のおかげで情報が遮断されていますが、今日の反応を確認するに指揮官に異性への興味がある

事が分かりました。私も姉妹の中でも胸は大きい方ですから指揮官へのアピールが沢山出来そうです♪」

自分の身体が指揮官の好みである事に嬉しく感じながら、次はどのように見せれば指揮官に気に入ってもらえるかの考察に入る。

「やはり胸だけでなく、足のラインも見せるべきでしょうか？スリットの入ったスカートも候補に入れるべきですね……………」

自身のクローゼットから薄手の白のブラウスに大きくスリットの入ったロングスカートを取り出して身体に重ねてみた。

「クスッ♪指揮官とデート……………こんなに心が浮つくのは初めてです」

着て行く服装を決めたら次にショッピングのルートを決めていくのだけだ……………

「ほぼ確実に他の方々からの妨害、もしくは監視が入りますよね……………特に策を仕掛けてくる候補は重桜の空母の方達に戦艦の天城さん、そして巡洋艦の神通さん。後はロイヤルのメイド隊でしょうか？」

その事項を念頭に置いてじっくりと考える。

指揮官に楽しんでもらいながら邪魔が入りにくいルート選択を……………

「指揮官の嗜好的にスポーツショップなども見て周りましょうか？ふふ♪楽しみです♪」

こぼれる笑みをそのままにデートプランを練っていく。

全ては私の自慢の指揮官との甘い一時の為に。

自慢でもあり、私の好意の対象である彼に自身を意識してもらおう為にも……………

全ての記録を駆使して私の虜になってもらいましょう。

美しく輝かしい記録を残せますように……………

## 第15話 テニスで知るクイーン・エリザベスと ウォースパイト

指揮官です。

たぶん今日が一番ヤバイ日だと思います。

何故なら賞品と書かれたタスキを掛けられて、母港の福利厚生施設であるテニスコートの一角に設けられた日差しの建てられた場所で椅子に座らされてますから。

「どうぞ、お茶をお持ち致しましたよ?」

「……………頂こう」

ロイヤル巡洋艦 ニューカッスルに入れてもらった紅茶を、ゆつくりと口に運んでもう一度状況を確認しよう。

きっかけは……………シャングリラへの謝罪としてショツピングの荷物持ちをしに母港の商業区画に出かけた後だったか……………

「という訳でテニス大会を開催するわ」

急に執務室に入ってきたロイヤル戦艦 クイーン・エリザベスに開口一番そう言われた。

「……………どういう過程でそうなったんだ?」

全く過程の見えない結論に首を捻りながら、クイーン・エリザベスを見ると胸を逸らしつつ説明する。

「貴方がユニオンの空母とデートしてたのを多数のKAN—SENが目撃していたのを皮切りに、普段からコミュニケーションが取りづらいと皆からの陳情が上がったの。だから各陣営ごとにコミュニケーションを取るのを目的とした会食を開く事になったから、その順番決めとしてテニス大会の順位で決める事になったのよ」

陳情まで上がるとは……………

確かにこの母港はかなり広い上に在籍しているKAN—SENの

数もかなりのものだ。

「会食とテニス大会の件は了解した。普段からコミュニケーションを取る時間が少ないのは問題だな……………戦場で戦ってくれる皆の望む事はできるだけ叶えないとな」

「うんうん、さすが私が見込んだ指揮官ね？男ならそのくらいどつしり構えてくれなきや」

弾けるような笑みを浮かべたクイーン・エリザベスが腕を組みながらそう言うと、傍に控えていたロイヤル戦艦 ウォースパイトが大きな紙袋をこちらに渡してきた。

それが何なのか分からず困惑したが、悪い物では無いだろうとすぐに受け取って……………

「指揮官専用のテニスウェアと当日に貴方が掛けるタスキよ？陛下と私が選んだテニスウェアだからしつかりと着こなして来るようにね？」

「……………マジか」

賞品と書かれた派手なタスキと白色が眩しい短パン半袖のテニスウェアが入っていた。

自慢ではないが鍛えてる俺の身体でこのテニスウェアはミスマツチな気がするが……………

「私とウォースパイトが貴方の為に選んだテニスウェアは気に入ってくれたかしら？……………いつか貴方と一緒にテニスを出来ないかと思ってたからちようど良かったわ」

「ええ、陛下とその時を楽しみにしていますよ指揮官？」

二人が楽しみにしてんだ、なら答えてやらないと。

紙袋からテニスウェアの上を取り出して自分の身体に重ねてみる。

「似合ってるか二人とも？」

「完璧よ！」

「ええ、素晴らしいわ」

笑顔で二人に問いかけると即答だった。

二人の反応的にこれなら大丈夫そうだ。

……………そしてずっと気になっていたんだが

「……………一人はなんでテニスウェアを着てきたんだ？」

二人は何故か揃ってテニスウェアを着ていた。

というかウォースパイトは自身の願掛けみたいなものでスカートを履かない主義らしいが、テニスウェアまでスカートを履いてないの  
で純白のフリル付きパンツ丸出しだ。

「ふふん！私達も当日参加するのよ？でも大会前に最初に指揮官には  
私の可憐なテニスウェアを見せてあげるわ」

「ええ、陛下とお揃いのテニスウェアを着てきたのよ？どうかしら？」

「……………そうか、よく…似合っているぞ？」

俺がそう言うのと彼女達はうんうんと頷いてますます笑みを深めて  
いく。

というかさすがにウォースパイトのパンツ丸出しは如何なものか  
と思うんだが……………

「ああ、指揮官？私のアンダースコートはどうかしら？ヴィクトリア  
スにお願いして作ってもらったのよ？」

「アンダースコート？」

「そう、下着が見えないように下着の上に着る専用の下着よ？」

結局下着なのか（困惑）

たぶん前世の知識から考えるに見せパンみたいなものだろうか？

男の俺がそれに対しての感想を言っているのだろうか？

「ちなみに陛下も私と同じ物を履いているわ」

「そうね、見られても大丈夫な下着だもの。特別に指揮官に見せてあ  
げるわ！」

「え？……………ちよつ!？」

そう言つてスカートを捲り上げるクイーン・エリザベス。

そこにあったのは

スケスケレースのシルクパンツだった。

アンダースコート履いてねえじゃねえか!!!  
クイーン・エリザベスは全く気が付いていない。

隣のウォースパイトはこちらを向いているので、クイーン・エリザベスの大事な部分が晒されている事に気が付いていなかった。

「どうかしら？高貴な私にピッタリでしょ？」

「お、おう」

「ふふ♪指揮官も照れているのですかね？」

「まあそうだな……………」

自慢げな二人に掛ける言葉も思い当たらずに上の空でそう言う。今度は二人揃って後ろを向く。

「後ろ側も中々のデザインですよ？」

「ヴィクトリアスの素晴らしい裁縫能力が生かされて、高貴なる私に相応しい出来栄えよ？」

「!!!」

??ぞして晒される臀部を覆う布は……………

限りなくヒモに近かった。

というかプリンプリンなお尻丸出しなんですけどお  
最低限必要な部分しか布ねえじゃんよ!!  
!!!???

その張りのある柔らかそうなお尻に俺の息子が急にサービスエース打ちたそうに構え始めてんですけど？

「この辺りに陛下とお揃いの刺繍を入れてもらっていますよ？」

「いくら大会だといっても見えない部分にも優雅にオシャレをするのがロイヤルの矜持よ!!」

腰を回る紐を指さすウォースパイトにスカートを持ち上げたままのクイーン・エリザベス。

この状況はいったい何なんだ（困惑）

とりあえず、これ以上は息子がストレートに勝負を決めてきそうな

ので、筋肉で抑えている間に感想を言っただけで隠してもらおう。

「す、凄いオシヤレだな？」

「ふふくん♪分かってるじゃない♪」

「指揮官の率直な感想は良いですねえ♪」

お尻丸出しで満足そうな声で喜ぶ二人とは対称的に俺は股間の息子が暴発しないか凄まじく不安だった。

というかシミ一つ無いあんな綺麗でプリンプリンとしたお尻を見た事ないわ……………

「それじゃあ指揮官に衣装を見てもらった事だし、そろそろ戻るわね」「ええ、大会の準備を進めるとしましょう」

「ああ、頼んだ……………」

我慢に我慢を重ねてなんとか耐えきった俺は、笑顔で帰っていく二人にただただそう返す事しか出来ない。

「……………お尻って凄いんだな」

心を掻き乱す対象が胸やうなじだけでなく、お尻にもあるという事を知った俺は……………思わずそう呟いてしまったのだった。

そして大会当日、俺はクイーン・エリザベス達の用意してくれたテニスウェアを着て大会の挨拶をして用意されていた席で試合を見ようとしていたのだが……………

「目のやり場が……………」

何故かクイーン・エリザベス達のアンダースコートを俺が褒めたという話が母港中に広まっており、皆揃ってテニスウェアを着てアンダースコートが似合っているか俺に見せて聞きの来るトンデモない事態に発展して大会どころではなくなっていた。

「ふふふ♪さすがの貴方様でも堪えますか？」

ニューカッスルがいたずらっぽい笑みを浮かべながら、クスクスと笑っている。

冗談じゃないよ全く……………童貞の俺には美女美少女達から下着の評価をさせられるなんて高難易度過ぎて全身の筋肉が強ばっちゃう。



というか股間の間かん坊がハッスルタイムに入ってそれどころではなかったのが一番ヤバかった。

隠す為にずっと座り続けて俺の尻もそろそろ限界だ。

「勘弁してくれニューカッスル。俺には荷が重過ぎる案件だったよ……………」

「そうですか？それは困りましたね……………」

「ん？」

ニューカッスルが急に俺の前に来て少し照れた様子で頬を染めながら、ゆつくりとスカートを捲り上げる。

「私のアンダースコートもご確認して頂きたかったですよ？」

「……………」

ブルータス、お前もか……………」

安易な気持ちで褒めた事を後悔してようやく収まってきたはずのバカ息子の再稼働を抑えつつ、今後の目標として女性を褒める前にちゃんと自分の首を絞める事にならないか確認をする事にしよう。

股間に悪過ぎてヤバいんだよ!!!

今夜また夢精したらどうしよう……………」

……………

「上手くいったわね？」

「ええ、充分過ぎるくらいには」

クイーン・エリザベスとウォースパイトは、ニューカッスルにアンダースコートの感想を求められて狼狽えている指揮官を遠くから見つつ小声で話す。

今回の件は全て仕組まれた事だった。

確かに指揮官とのコミュニケーションが少ないという声があった

が、筋トレ中やジョギング中に気さくに挨拶して話しかけてくる彼に皆はだいたい満足しているのだ。

しかし、彼女達KAN—SENにはどうしてもそれだけでは満足出来ない事がある。

それは指揮官が自分達の事を異性として見てくれているかが気になっっているという事だった。

「デートをしていたユニオンの空母からの聴取では、指揮官は私達を女性としては見てくれているとの報告があがっていたけど………実際に確認しないと不安になるわ」

「陛下の仰る通り、私達の一方的な想いだけではあの方をここに留めるのは難しいですからね」

二人の脳裏に浮かぶのはセイレーン大戦時に全身に包帯とガーゼを当てられながらも、血染みをボロボロの軍服に滲ませながら指揮を取り続ける指揮官の姿。

その眼はギラギラとしたまるで野生の獣のような威圧感を持って敵のいる方角を睨むその姿はまさに修羅。

まるで自分の命など歯牙にもかけず、むしろ囿の駒としてすら使う命知らず。

聞けば天涯孤独の身の上で失う物が無いからこそその捨て身とも呼べる戦法だった。

「そんな彼に惚れちゃったのよね………」

「私もですよ陛下」

命を粗末にするその姿勢に憤りすら感じていた。

しかし、話を聞けばその憤りはすぐに消え去ってしまう。

「俺は徴兵でここに来て、何も知らずに前線で戦ってきた。適正があったから指揮官になっただけで、戦術や作戦の立て方なんてものは一度も教えて貰えなかった………だが、それでも俺みたいな奴に付き従ってくれる奴らがいる。そいつ等や俺達の後ろで怯えている連中の為にも俺は前に出るんだ。それしか知らないのもあるが、そうやって皆で生き延びてきたんだ」

見れば周りにいる人達はとても若く、そして銃の持ち方すらちゃん

と知らない人達ばかりだった。

おそらく彼等は捨て駒として編成された人達なのだろう。

その痛々しさに思わず涙がこぼれそうになったが、堪えて指揮官に「あなたのやり方は賛成出来ないし認めないわ！でも任せなさい!! 私達が一緒に戦って守ってあげるわ!!」

「私も陛下と共に貴方を……貴方達と戦いましょう」

杖と剣を掲げながら宣言した。

「………すまない、ありがとう」

宣言を聞いた指揮官はしばらく目を閉じた後に、頭を下げながら私達に礼を言う。

その姿勢はとても好ましいものであり、精一杯戦い続けた彼の心からの感謝だった。

「上層部の連中の裏をかいて指揮官を生き延びさせてきたけど、それにしたって呆れた連中よね？」

「ええ、あれ以上に私達KAN—SENの心を震わせる最高の指揮官は居ないというのに……」

何度暗殺計画を阻止して指揮官を守ってきたのか分からない。

彼らにしてみれば指揮官は使い捨ての駒で、これ以上は必要無い存在だったのだろう。

「今回の件で指揮官には私達と深く結びついてもらわないとね？」

「我等KAN—SENと共にある為にも少しでも意識してもらわなければ………」

自然と微笑みながら指揮官を見つめ続ける。

互いに恋する殿方へと熱い視線を向けながら。

二人の企みはこれから続く。

その姿はかつての母国の外交のように裏をかいて全てを自身の利益となるようにしてきた時のように。

その企みが実を結ぶまで、指揮官への苦難は続くのである。

## 第16話 ジャンクフードとパーミヤチ・メルクーリヤ

指揮官です。

現在お昼ご飯のお時間です。

筋トレと午前の執務も終わり、いつもならベルファストがカートにご飯を載せて執務室に来るのですが、あのロリコンがまた駆逐艦の子達の盗撮をしたそうで大捕物が始まってご飯がありません。

「でもたまにはジャンクフードとか食べたいよな」

確かに俺の栄養バランスを考えた食事で筋肉を喜ばせるのも良いものだが、たまにはジャンクフードみたいな手軽に食べれる物も食べたいよな。

狙いは食堂のユニオン区画にあるビュッフェ形式のショーケースの一角に設けられたユニオン戦艦 テネシーとカリフォルニアが担当しているバーガーコーナー。

ボリウム満点で香辛料をたっぷり使った身体に悪そうなジャンクフード具合が堪らなく食欲をそそる。

「筋肉には悪いが、無性に食べたいんだよなあ」

ベルファストに知られたら怒られそうな事を言いつつ、ワクワクしながら食堂へと足を進める。

「待ってるよチーズバーガーにフライドポテト！ナゲットとコーラも楽しみだ!!」

もう俺の足は止まらない。

栄光（食堂）へのゴールテープ（入口）はすぐそこに……

「あ、指揮官じゃない！今日はここで食べるの？わたしも一緒に食べるー！」

寸前でお預けですかね？

いきなり後ろからそう声かけられて抱き着かれた。

だいぶ低い腰の位置で二つの柔らかくて大きなモノがフニユリフニユリと形を変えながら押し付けられているのを感じる。

「あれれ?もしかして指揮官わたしの胸で欲情しちゃってるのおく?

いやくん♪指揮官のへ・ん・た・い♪」

「…………お前かパーミヤチ・メルクーリヤ」

「ああん♪…………わたしが誰か分かったの?はう……………もしかして胸の大きさを判別してるのかなあ?いやらしいんだく♪」

なおも柔らかく大きなお胸様をグリグリと押し付けながら、そう言う北方連合巡洋艦　パーミヤチ・メルクーリヤは、からかうような様子が感じ取れる。

誘ってるのか!?誘ってるのかよ!!!

お胸様をグリグリして時々喘ぐの止めろ!!

俺の腰は何か?

机の角か何かと勘違いしてないかこの発情ロリ巨乳?!

お前のせいで俺の息子が元氣リンリンだわ!!

「パーミヤチ・メルクーリヤ、ふぎけるのもそこまでにするんだ」

「え〜!指揮官つてばノリ悪い。でも役得だったでしょ?という訳で指揮官にご飯を奢って貰うからねく♪」

押し付けていたお胸様を外して俺の前に来た彼女は唇を尖らせながらそう言いながら、俺の腕を引いて食堂へと誘う。

イタズラでいきなりのピンチを迎えた俺は肩をガツクリと落としたフリをして前屈みになる事で立ち上がっている息子を隠し、パーミヤチ・メルクーリヤに連れられて食堂に入ったのだった。

「指揮官は何を食べるつもりだったの?やっぱり筋肉の栄養の為に25ポンドステーキ?」

「そんなに食えるか!!」

「え〜?指揮官ならいけそうだと思うけど……………なら何を食べるの?」

「…………お前の中での俺はフードファイターか何かか？今日はユニオンのバーガーコーナーに行くんだよ」

いつの間にか彼女に左腕を両腕で抱きしめるように組まれて、ボリューミーなお胸様を押し付けられながら食堂のユニオンの区画へ足を進める。

とうるかバーガーコーナーに行くと言った瞬間からパーミヤチ・メルクーリヤの様子がおかしい。

さつきより更にお胸様を押し付けながら俺の腕に頬擦りまで始めやがった。

「お、おいパーミヤチ・メルクーリヤ？」

「えへへ♪やっぱり指揮官は優しいわね♪私の大好きなバーガーコーナーに行ってくれるなんて最高じゃない♪」

「そ、そうか……………」

どうやらパーミヤチ・メルクーリヤの好物に当たる食べ物に偶然にも的中していたようだ。

それにしたってやけに引っ付いてくるな……………

おかげで股間の息子が元氣過ぎて前屈みから元の姿勢に戻れない。

一応左腕に引っ付いているパーミヤチ・メルクーリヤに合わせて屈んでいるように見せかけているが、全身を鍛えているからと言って中腰で居続けるのはキツイものがある。

早めにバーガーを注文して席に座ろう。

「パーミヤチ・メルクーリヤはどれがいい？俺はこのデラックスチーズバーガーセットってヤツにするんだが……………」

「うくん、わたしは普通のバーガーセットにしようかな？」

「ポテトとドリンクの大きさも普通でいいのか？」

「うん、お願いね♪」

とりあえず注文が決まったのでトレイを取ってバーガーコーナーへと歩き出す。

ちょうどバーガーコーナーに人は居ないのですぐに注文出来そう  
だ。

そして見えてきたバーガーコーナーの開放的なオープンタイプの

キッチンにはテネシーとカリフォルニアがエプロンを着けて立っていた。

「む？指揮官か？珍しいな」

「え？本当だ！指揮官が食堂に来るなんて珍しいね！」

「まあ、たまにはな？注文いいか？」

笑顔で迎えてくれる二人に俺も笑顔で返しながらそう言うと、二人は頷きながら

「ああ、大丈夫だ」

「うん、何でも言つてよ指揮官！」

テキパキとバンズとパテを準備し始める。

やはり慣れているだけあって、すぐにでも出来たてを出せるように準備しているようだ。

「デラックスチーズバーガーセットのユニオンサイズでLサイズだ。サイドメニューはポテトで、ドリンクのコーラと合わせてユニオンLで頼む。後、パーミヤチ・メルクーリヤが普通サイズバーガーセットにポテトも同じでドリンクも同じの種類は……聞いてなかったな」

「わたしもコーラでお願いね？」

「……だそうだ」  
元氣よくそう言うパーミヤチ・メルクーリヤに苦笑しながらそう注文すると

「了解だ指揮官、トレイをそこに置いて少し待っていてくれ」

「あんまり待たせる気は無いけど、一度席を取っておくといいよ？出来たら呼ぶからね？」

熱した鉄板でバンズとパテを温めながら二人はそう言ってきた。

前世でもバーガー食べに行った時は番号札を持たされて席で待つてたなあ……

摩耗し始めている前世の記憶の懐かしさを感じているとパーミヤチ・メルクーリヤに腕を引かれる。

「ほらー待ってる間に席を探しましょう？……あ!!あその席なんてちょうど良いんじゃない？」

「ん？……本当だ、ちょうど空いてるな」

パーミヤチ・メルクーリヤが指を指した先に視線を向けると、壁際の端の方にある二人がけのテーブルが一つだけ空いていた。

トレイを指定された場所に置いてその席に向かう。

相変わらずパーミヤチ・メルクーリヤのお胸様は俺の左腕を挟んだままで、息子が直立不動の姿勢を保持しているのだが……

ここで座って誤魔化せるのと、お胸様が離れてクールダウン出来るのは大きい。

「それじゃ座って待ってるか」

「そうね♪指揮官く？わたしの胸の感触は楽しめたかなあ♪」

「……………」

「あれれえく？もしかして離れたくないくらい気持ち良かったの？指揮官のむつつき♪」

クスクスとイタズラっぽく笑うパーミヤチ・メルクーリヤに俺は内心『そうだよ！気持ち良かったよ！！股間の息子が革命を起こしかける程にヤバかったわ！！童貞で悪いか！！』と叫びながらため息を吐く。

実際にそんな事言えねえよと諦めながら左腕をパーミヤチ・メルクーリヤから名残り惜しいが、力を入れ無いように優しく外して先に椅子に座った。

マッソー神への信仰と鍛え上げた筋肉が無ければ即死だったわ

……………」

「むー、無反応なのは面白くないなあ……………」

「俺にどうして欲しいんだよ……………」

頬を膨らませながら不満を言う彼女に俺はガツクリと肩を落とす。

男の俺が正直に言うなんて社会的な抹殺というか自殺行為は勘弁してもらいたい。

ただでさえ前のテニス大会でKAN—SEN達のアンダースコアの評価なんて、変態チックな出来事があったばかりなのに……………」

あの時は集団心理か何かは分からないが、そこまで気にする子達は居なかったから良かったものの、一歩間違えれば俺は稀代の変態野郎だからな？

「はあ……………」



「あー！またため息なんてしたちやってえく……………よくし♪……………それ♪」

「なっ!？」

どこことなく感じる頭痛に止まらないため息を吐いているとパーミヤチ・メルクーリヤは何を思ったのか俺の膝の上に座ってきた!？ウツソだろお前!!

その短い丈のタイトスカートじゃ俺の膝に柔らかいお尻の感触がダイレクトアタックしてきやがる!!

やめてくれ！俺の股間はバーサーカーソウル発動中だ!!

「お前……………いったい何を……………」

「ふふ〜ん♪どうかな指揮官?この美少女の柔らかくいお尻の感触は?ほらほら♪スリスリしちやうぞ〜♪」

「ぬぐううう……………」

やめろください!!!

おめえふざけんなよ!!ふざけんなよ!!!

マジで柔らかなお尻を俺の足にスリスリしてきてやがる……………

しかも俺にその様子が見えるようにわざわざ前屈みになって、腰の艶かしい動きまで見せてきてやがるぞこのメスガキロリ巨乳!?

てかエロ過ぎだろこのロリ巡洋艦!!!

なんでこんな事になってんですかね? (困惑)

「指揮官はヘタレだから〜♪こんな事しても襲わないんだよね〜♪」  
「……………」

腰の動きをそのままに振り返ってニヤニヤと笑うパーミヤチ・メルクーリヤに、いい加減俺も我慢の限界が近づいてきた。

ムラムラが止まらない!!

そして目の前に調子に乗って人を小馬鹿にしつつ誘惑するメスガキロリ巨乳がいる。

これは据え膳なのでは?

そうとしか思えない。

ならば……………お仕置だ!!

「あ、あれ? 指揮官?」

「ふむ、少し俺も怒ったぞパーミヤチ・メルクーリヤ?」

「へ? や、やだなく指揮官。ただのイタズラだよ? 懐の大きくて優しい指揮官は許してくれないかな? って……………」

「そんな時間はとうに過ぎ去ったんだよ」

「ひゃあ!? し、指揮官?!」

俺は慌てた表情の彼女を後ろから左腕で両腕を巻き込むように抱きしめて抵抗出来ないようにした後、その少し色素の薄い柔らかな黒髪を右手で掬いながら梳いていく。

その指通りの良い髪を弄りながら彼女の耳元に唇を近づけてワザと吐息がかかるように話し掛ける。

「どうして欲しい? このまま力づくで押し倒されてみるか? それともこの見えない所にキスマークでも付けようか?」

「はひゅっ?! 指揮官?!」

「どうした? お前が誘ったんだろ? ちょうどここは人目につかない場所だ……………最初からそういう目的だったのか? イケナイ子だな」

「あう……………し、指揮官……………」

首だけ振り返り顔を紅潮させて潤んだ瞳で俺を見つめるパーミヤチ・メルクーリヤ。

そんな彼女に俺は顔を近づけていく。

すると彼女はピクリと身体を震わせた後にゆっくりと目を閉じた。

今だ  
!!!!!!

「ていー」

「いっつっつたあああいいいい!!!」

目を閉じたパーミヤチ・メルクーリヤのおでこに俺はデコピン（小指）を放った。

かなり手加減して放ったはずだが、彼女は涙目で俺を恨みがましく睨みつけている。

「そ、そこはキスしてくれる場面じゃないの!?なんでデコピンなの指揮官!」

「お仕置だつて言つたら?それとももう一発いつとくか?」

そう言つてもう一度デコピンの構えを取るとパーミヤチ・メルクーリヤは何度も首を横に振った。

「いけないわよ!!もー!せつかく一緒に話しながらご飯を食べて仲良くなるうと思つてたのにいゝ!!」

「そうだったのか?なら今からでも遅くはないだろ?」

身体を俺に拘束されっぱなしの彼女の言葉に俺は笑いながらそう答える。

ふと視界を外に向ければ注文したバーガーをトレイに載せてテネシーとカリフォルニアがこちらに向かつてきているのが見えた。

「むー、じゃあ指揮官があーん、して食べさせてくれたらいいわよ?」

「それくらいお安い御用さお嬢様?」

「なんか納得いかないなあもう……………」

「ほら、拗ねるな拗ねるな。美味しいご飯を食べながら色んな話を聞かせてくれよ?お前の事をもっと教えてくれないか?」

「わ、わたしの事を?ふーん、そこまで指揮官が言うならしようがないわね?」

調子の戻ってきたパーミヤチ・メルクーリヤの話に耳を傾けながら俺は思った。

また勿体ない事したなあ……………」と。

このメスガキロリ巨乳のせいでムラムラMAXだよ!!

そしていつまで俺はこいつのお尻の感触を味わって息子を誤魔化せばいいのだろうか……………」

途中からムラムラでタガが外れたのはちよつと危なかった。

でも、気持ち良かったなあ……………」

~~~~~

「……………いつまで見てるつもりなのかな？」

指揮官と対話しながらご飯を食べさせてもらった後、北連の寮前で別れた後に後ろから着いて来る存在に声を掛ける。

「気が付いてましたか？」

「当たり前じゃない、何年の付き合いだと思ってるの？」

振り返るとそこには同じ北連の同志である巡洋艦 アヴローラが微笑みながら立っていた。

「指揮官へのアプローチは上手くいったと思っただけですけど……………なかなか隙を見せてくれるような方ではありませんでしたね？」

「まあ、彼だもん。今回はある程度は歩み寄れたと考えた方がよいよ」

肩を竦めながらそう言うわたしにアヴローラはクスクスと笑う。

少し不愉快な気分になったが、失敗したのだから何も言えない。

頬に手を当てながらアヴローラはポツリと呟く。

「やはり指揮官を籠絡するのは難しいですね？」

その呟きはわたしとアヴローラしかいない、この空間によく響いた。

そう、わたし達北方連合は指揮官を欲している。

きっかけは頭が硬く腐り果てた帝政だった北方の上層部を一掃したあの革命（クーデター）。

一歩間違えれば世界を巻き込む戦争へと突き進むとんでもない事態に、わたし達は彼に助けられたと言っても過言ではない。

しかし、上層部を一掃したからと言ってその取り纏めとなる旗印があるかと言えばそうとも言えない状態が今の北方連合だ。

北方連合の同志達が腐った非革命的な“モノ”に対しての粛清を進めているが、それでもまだまだ多いのが現状なのである。

「指揮官さえいてくれればあの問題も解決できますね？ 私達を強く纏め上げてくれる指導者であり、私達の愛する人であるあの方さえ居て

くれれば……いいえ、本当はあの方以外は私達に必要な無いですけどね？」

「……………わたし達を照らす革命の光。その光は決して消させはしない」

そう、指揮官さえ居てくれれば……………

アヴローラの言うように彼さえ居てくれさえしてくれれば、あとは何もいらぬのだ。

我等の偉大なる祖国の父として彼が君臨してくれさえしてくれれば、あとはわたし達がその全ての手足となつて動こう。

彼が望むのなら自分の純潔など喜んで差し出してみせる。

その為に今日の昼食の準備を妨害するようロイヤルの空母を囮に使つて騒ぎを起こしたのだ。

「今度は私も一緒にアプローチを掛けてみましょうか？既成事実も一緒に作れれば……………一番良いでしょうね？」

「愛しくも偉大なるわたしの光……………今度は……………今度こそは絶対に逃したりしないんだから」

「ふふふ♪燃えますねパーミヤチ・メルクーリヤ？まさに革命的な情熱を感じますよ？」

次の作戦をアヴローラと考える。

今回はまだ彼に自分の事を知ってもらつただけだった。

なら今度は彼の口から自身の事を語ってもらうようにしようかな？

そうやって着実に彼との仲を縮めていつかはこちら側の偉大なる祖国の父として君臨してもらおうのだ。

その際に自分の想いも一緒に聞いてもらつて純潔を捧げたい。

それほどまでにわたしは彼を愛しているのだから………

ああ、偉大なるわたしの光に栄光あれ!!

第17話 期待と信濃

指揮官です。

今日は自分の限界に挑戦してみたいと思います。

トレーニングルームにて人間の限界と言われる重さのバーベル500kgに挑戦しますのです。

何故限界と言われているのかというと、人間の骨の限界強度が500kgと言われているからだ。

「……………汝なら如何なる苦難や試練をも越えられる、妾はそう見えた」

「……………一応普通の人間なんだがなあ」

重桜空母 信濃が眠そうな目をしながらそう言ってくるのを苦笑しながら答える。

俺の答えに少し不思議そうな表情を浮かべる彼女は今回の挑戦の見届け人みたいなもので、挑戦する日は誰にも言っていなかった筈なのに何故かこのトレーニングルームに既に居たのだ。

ロイヤル驚異のビックバン胸部装甲に負けず劣らずどころか凌駕してしまっている御立派様をお持ちになっている彼女は、前世の世界でいう世界最大級の戦艦 大和の姉妹艦にあたるKAN—SENだ。

最近になって重桜からこの母港に着任しに来たのでここでは新顔の一人なのである。

「とういかよく俺がこれに今日挑戦するって分かったな？」

「此度の事……………夢にて既に知っており申した……………ZZZZZZ」

「……………立ったまま寝るなよ」

「……………はあ……………失礼お詫び申す……………あまりにも寝心地よい場所であった故に」

深々と頭を下げる彼女に思わず頭を搔く。

彼女はまるで眠り病にでも罹っているかのように何処でも寝てしまうのは、この母港でもすでに広まっている話だ。

最近をよく駆逐艦の子達と一緒にお昼寝しているのを見かけるのだが、あまりにも気持ち良さそうに寝ているので、集まって一緒にお

昼寝している駆逐艦達を盗撮しようとするロリコンをジョギング中のトレーニングの一環として後ろから口を封じヘッドロックをかけてベルファストの所まで連行し、眠りを妨げないようにしている。

………何処にでも湧くなアイツ（呆れ）

そんな彼女が眠い目を擦りながら俺の挑戦を見届けてくれるというのだ。

本当は眠いだらうに………これは頑張って結果を残さねば。

「しっかりと見ててくれよ信濃？絶対成功するからな!!」

「妾は汝を見届ける。既に確定した結果であれど………何より汝の勇姿をこの眼に焼き付けたいが故に………」

「………そこまで言われると少し照れるな」

信濃の期待にこそばゆい気持ちになりながらもしっかりと準備を進めていく。

バーベル自体の亀裂や歪み等の不備は無い。

錘の留め具や錘自体にも変わった様子は無い。

最後に手を保護する手袋を填めてしっかりと滑り止めの粉を手に塗りこんだ。

「すー………はー………いくぞ!!」

遂にその時が来た!!

大きく深呼吸しながら心の中でマツソー神に祈りを捧げてまずはゆっくりと持ち上げる。

「ぬぐっ!!」

やはり重い。

このままゆっくりと胸元まで上げるのだが、全身の血管が浮き出て筋肉がバンプアップして大きく膨張しているのが感覚で分かった。

かなりの負荷で全身から汗が吹き出始めるが、己の筋肉を信じて落とさないよう慎重に持ち上げていく。

「ふぐううううう………おおおおおおおおお!!」

苦しげに雄叫びを上げると俺の前で離れて見続けている信濃が心配そうに俺を見ていた。

彼女は俺が成功すると夢で見たと言っていたが、実際に挑戦を目の当たりにして不安になったのだろうか？

ならばその不安を取り除かなければ!!!

俺に宿りしマツソー神よ!!

俺に力を!!!

「うおおおおおおおおおおおおお
りやあああああああああああああ
!!!!!!」

渾身の力を振り絞ってバーベルを頭上に掲げる。

そのまま右足を前に出してスナッチと呼ばれるウエイトリフティング競技のキープ用のポーズを取った。

目の前のキープ時間を示すランプが点灯していく。

この日の為に夕張が用意してくれた自動測定器が俺の記録を測ってくれている。

体感時間で永久に思えるキープ時間。

全身の筋肉が渾身の力を込めて己を支え続けているのが感じ取れる。

信濃が祈るように胸の前で手を組んでいるのもよく見えた。

信濃も応援しているのにこれで奮わなかったら漢（おとこ）じゃねえよな？

「ぐうううううがああああああああああああああああああああ
!!!!!!」

最後の咆哮と共に計測器のブザーが鳴る。

その音を聞いた瞬間に俺はバーベルを前に落として少し後ろに後ずさった。

やった………やったぞ!!!

自己記録の498kgを2kg更新したぞ!!

人類の想定される限界値を持ち上げたんだ!!

「やったぞ信濃！俺は成し遂げたんだ!!」

その場に座り込みながらガッツポーズを取る。

この喜びを見届け人である信濃と分かち合いたかった。

俺は笑顔のまま信濃の方へ顔を向けると

「わぷっ!」

柔らかく暖かさを感じる肌色が視界の全て遮った。

そのまま頭の後ろに感じる手のひらが俺の予想通りの状態なのだとしたら……………俺は今信濃に抱きしめられてるのか!?

「ああ……………ああ……………よくぞ……………よくぞこの試練を成し遂げられた。妾は汝を誇りに思う」

「ふん……………(息が……………)」

超絶ビクバンな胸部装甲に包まれて股間の息子も大歓喜な程に嬉しいのだけれど、鼻と口を塞がれて息が出来ない!?

こ、このままでは窒息してしまう……………

「今は……………妾の胸の中でゆっくりと休息を……………素晴らしき偉業を成した汝に妾から……………出来うる限りの賞賛を……………」

「……………が……………(もう……………むりぽ……………)」

その思考を最後に俺は深い闇へと意識を落とした。

そして気が付くと俺の私室のベッドにトレーニングウェアのまま寝ていたのだった。

すぐ横のテーブルに書置きが置いてあり

『疲弊し眠られた様子なので私室へ運ばせて頂いた。無理せずしっかりと休まれよ 信濃』

と書いてある。

「いや、絞め落とされたようなもんだと思うんだが……………」

あのビクバン胸部装甲の柔らかさと暖かさを思い出しつつも、実際に窒息するような事になるなんて脅威の事実を知ってしまった俺は……………

「……………あれ?俺って信濃に私室の場所教えたっけ?」

少しだけ背筋がひんやりしたのだった。

でもあの胸部装甲は反則過ぎる大きさだわ……………

~~~~~

「ふう……………眠られたか？」

偉業を成した指揮官を自身の胸の中で抱きしめて眠らせる。

これもまた夢で見えた事。

力の抜けた彼の身体をすぐに横たえて膝枕をする。

「……………こうして見れば……………あの夢で見えた汝とは別人のよう……………」

妾の夢は幾つにも別れた欠片のようなもの。

戦陣の中で沈む夢や全てを失って絶望しながら生き永らえる夢もあつた。

しかし、この指揮官のいる夢だけは……………彼が望むも望まぬも常に英傑と呼ばれている姿ばかり。

「不思議な御方……………どう転んで立ち上がっても……………その先は英傑としかならぬなんて……………」

彼の髪を撫でながら顔を見つめる。

いくつもの傷を負い痕を遺すその顔は……………妾が好意を寄せる凛々しき尊顔。

「……………どのような時も挫けぬ限界を超え続ける強靱な精神……………夢の中で妾達と共に翔ける嵐のようで……………護りに赴きを傾けた御方」

夢の欠片では妾達を護ろうと自身の肉体すらも、戦陣で失う事すら彼はしてしまふ。

しかし、その強靱過ぎる精神故に戦陣から離れる事なく失ってしまつた身体の大半を機械に置き換え、子を残す事すら放棄してまで戦いに参加する姿の痛々しさは、妾の心を酷く哀しませる。

「ああ……………夢の中とはいえ、夫婦（めおと）の契りまで交わした汝に……………斯様な未来を歩ませたくはない……………」

夢の中で何度もめぐり逢い、そしてようやく自覚した恋心を知られ

て愛と成した未来……………

あの欠片では滅びを迎えて全てを水底へと消えてしまった。

「此度こそは……………滅びなどさせぬ……………」

撫でていた手を止めて彼の頬に手を添える。

そして後ろにある電源の落ちた測定器を見て小型隠しカメラの位置を確認し、式神を飛ばして貼り付けた。

「これより先は……………夫婦の営み故……………」

熱くなる頬を感じながらゆっくりと彼の顔に自身の顔を近づける。

それは誓い。

此度こそは汝と共に全てを終わらせる事を……………

そして、再びこの現世で夫婦とらん事を……………

その為ならば……………限界という言葉すら超えてみせると……………

## 第18話 ヒーローとリノ

指揮官です。

今日とはあるKAN—SENから見て欲しいモノがあると寮の自室に誘われました。

童貞の俺にはかなり勇気のいる行動となりますが、内心ビクビクしながら様々な良い香りのする寮内を歩いて目的地へと進みます。

「……………しかし、俺に見せたいモノってなんだろうか？」

昨日超ハイテンションで見せたいモノが完成したから見に来てくれと執務中の執務室に呐喊してきて、ちようど居合わせたベルファストに怒られていた彼女を思い出す。

静かに怒るベルファストに涙目になりながら謝罪する彼女が少し可哀想になったが、とりあえずベルファストは怒らせないようにしようと思心誓った。

「……………ベルファストって怒るとあんなに怖いんだな。絶対に怒らせないようにしよう」

無表情で淡々と悪かった点の指摘を繰り返し、相手を追い詰めるように怒るベルファストは正直怖過ぎだ。

「怖や怖や……………つと、ここだな」

そんな事を考えていると目的地に到着したようだ。

とりあえずラブコメの波動を発動して自分の首を絞めないようにしっかりとノックをしなくては。

前に重桜戦艦 長門に呼ばれて部屋へ行った際にうっかりノックするのを忘れ、生着替え中に部屋へ入ってしまった事があるので充分注意したい。

「あの時は顔を真っ赤にした長門にBIGSEVEN—桜—を撃ち込まれて死ぬかと思ったからな……………」

おかげで部屋はめちやくちやになり、何事かとやってきた長門の護衛で重桜駆逐艦 江風に長い時間正座でお説教を受ける羽目になったのは苦い思い出だ。

同じ失敗をしないようにしっかりとノックをする。

「リノ、居るか？」

「はいはい！待ってたよ指揮官！開いてるから入ってきて〜」  
ノックをして扉越しに声をかけるとすぐに返事が帰ってきた。

部屋の主はユニオン巡洋艦 リノだ。

気さくで明るい元気な彼女は前世の記憶というヒーローオタクである。

というか世界観どうしたと言わんばかりに、オーバーヘルヒーローガジェットなんかも自作する程の熱の入れっぷりにこちらがビツクリするほどだ。

しかし、一方で自分はサポートキャラであると言い張って俺の事をヒーローだと言う不思議な感性をお持ちの娘でもある。

ちなみに彼女はあのアトランタ級の後継艦でもあるオークランド級でもあり、あのサンディエゴとは姉妹艦に当たるので彼女達と同じくスタイル抜群過ぎて股間には悪影響を及ぼす事がしばしば……

「失礼するぞ……おおう……」

部屋の主からの了解も得たのでとりあえず中へ入ると、視界に入るマ○ベルヒーローズのフィギュアの数々。

ベッド以外の物が置けるスペースに所狭しと並ぶそれはまさに圧巻の一言に尽きる。

「へへ〜♪いらっしやい指揮官、リノのコレクションは凄いでしょ？」

「凄いなこれは……まさか全部自作か？」

「そうだよ？重桜の夕張に手伝ってもらって色々作ってるんだよ？」

ここにも技術者夕張の手が入っているのか……（困惑）

何でも有りな夕張に戦慄しつつも、細かい作り込みや配色までしっかりと考えられているであろうフィギュア達を観察していく。

「ここまで作るのに苦労したろう……素晴らしい出来だ。こんなにカッコイイフィギュアはなかなかお目にかかれないだろう」

「ありがとう指揮官！最高の褒め言葉だよ！！」

フィギュア達を観察する俺のすぐ横でニコニコと上機嫌のリノ。

しかし、俺に見せたいモノはこのフィギュア達なのだろうか？

確信が持てないままにフィギュアを見ていると不意にリノに肩を叩かれた。

「ん？どうしたリノ？」

「実はね指揮官？見てもらいたいモノはそれだけじゃないんだよ？」

「そうなのか？」

「うん、着いて来てよ指揮官」

フィギュアだけでもなかなかの見応えがあったが、更に見せたいモノがあるのか？

フィギュアの出来から更に凄いモノが出るのではないのかという期待に、心をワクワクさせながらリノの後を着いて行く。

特撮ヒーローに憧れた前世の少年心を思い出して本当にワクワクが止まらない。

「いったい彼女は俺に何をを見せてくれるというのだろうか？」

「この扉だよ？」

「…………コイツは……………」

それは明らかに普通の部屋には似つかわしくない重厚な鉄の扉。

おそらく認証コード等が無ければ開かないであろう鋼鉄製の両開きのスライドドアがリノの後ろにはあった。

「リノが見せたいモノはこの中にあるんだよ」

「いつの間にかこんな物が……………」

アイ○ンマンみたいな手の装備を持っていて、自作でガジェットを作ってしまった彼女だからこそ…………俺の少年心に火を灯す。

めっちゃカッコイイ!!!

前世で見たTVヒーローの秘密基地の入り口のようなソレは、俺の心を掴んで離さない。

自分でも興奮を抑えきれないのが分かるほどに高揚している。

「へへへ♪少し時間がかかったけど、ようやく完成したんだよ？」

「リノ、いったいコイツは何なんだ？」

自慢げに大きなお胸様を逸らして手を腰に当てる彼女に俺は思わず尋ねた。

すると彼女は笑みを深めて俺へ手招きをする。

「指揮官、ここに両手を当ててもらって良いかな？」

「あ、ああ……これで良いのか？」

「うんうん♪そのまま待つてね？」

俺は言われるままに扉に両手を当てていると……

「ぬお!？」

「動かないでね指揮官？今スキャンしてるところだからね？」

扉の上の方が小さく開いて赤い光が俺を照らす。

驚いて手を外しそうになるが、リノの言う事を聞いてその場に留まった。

「………いったい何が始まるんだ？」

「リノを信じて、すぐに分かるから」

体験した事の無い状況に困惑しつつもリノを信じて待つてみる。

赤い光は満遍なく俺を照らしていたが、すぐに消えて鉄の扉の先から何やら機械音が聞こえてきた。

しかし、それもすぐに止まりゆっくりと扉が開き出す。

扉の先にあったのは………

「これは………」

「ふふふ♪そのまま中に入ってみて指揮官？」

自分の視界に入ったモノが信じられない。

だが、実際にそこにソレはあるのだ。

俺はリノに言われるまま扉の中へ足を踏み入れると

『認証確認中………入室者を指揮官と確認しました。これより装着プロセスを開始致します』

機械音声でそう言われて両足を固定された。

しかし、俺は慌てない。

これと似たようなシーンを前世の映画で見た事があるからだ。

『両脚部装甲の装着開始します………装着完了』

ロボットアームによって様々な金属パーツが俺の足を覆っていく



のが見えた。

蒼色に染まった装甲が鈍い光を放ちながら、カチャカチャと小気味の良い音を立てて俺の身体に合わせて採寸していくのが分かる。

『胴体部装甲の装着開始します………装着完了』

俺の胴体を前後で覆うように重厚な装甲が、ゆっくりと装着されて内側から筋肉の起伏に合わせて隙間なく絞まっていく。

しかし、継ぎ目がいくつもあるので動き自体は全く阻害される様子は無い。

『両腕部装甲の装着開始します………装着完了』

両腕にも同じような装甲が装着されているが、右前腕部分に何が仕込んであるであろう膨らみが見えて、左前腕部分には円形状のシールドが装着される。

『頭部装甲の装着を開始します………装着完了』

頭部は後頭部と目元まで隠れるヘルメットのような形状の装甲を被せられ、何やらゴムのように伸縮する紐のような物が右側のもみあげ部分から顎の下を通って左側のもみあげ部分に引っ付き、頭部側面の装甲が頭の大きさに合わせ収縮して完全に頭の装甲が固定された。

目の部分には小型のホログラム投射装置が仕込まれており、現在の自分の付けているアーマーの状態や何かのエネルギーメーター等が表示されている。

『全工程終了致しました』

足の固定が外されて自由になった。

身体の具合を確かめるようにゆっくりと振り返る。

ガチャリガチャリと音を立てながらリノの方へ身体を向けると

「ニューヒーロー!!キャプテンユニオン!!」

いつの間にか用意した自立スタンド型の姿見の鏡と共に、満面の笑みを浮かべてそう言ってきたのだった。

見た目はメインカラーが蒼と白になったアイア○マンのボディにヘルメットを近代化改修して、何処かア○ムナイト的なギミックが

詰まったキャプテン○メリカ。

しかも盾と胸にはユニオンのシンボルであるイーグルマークが描かれているのだ。

「どう指揮官？リノの考えた最高傑作の着心地は？」

「最高だな!!」

装着過程のロボットアームからこのスーツを付けていく感じに完成した後のリノのヒーローネームもイカしてやる!!

昔憧れたスーパーヒーローに変身を果たした俺は、リノからの質問に勿論即答だった。

「いや、よく出来てるなこのスーツ。デザインも良いし何より動きやすいのもいいな」

「うんうん♪パワーアシストとかは指揮官の筋力を考えて要らなかつたから外しといて、動きやすさと頑丈さをメインに作ったからね♪……でもこのスーツの全体重量が618ポンドあるのに動ける指揮官は超人血清でも昔打たれたの?」

「毎日の鍛錬の賜物だか?」

「わお……リノびっくりだよ!」

リノは目をキラキラさせながら胸の前で手を組んでいる。

俺の返答にどこかおかしな部分があったのだろうか?

「ねえ指揮官?お願いがあるんだけどいいかな?」

「ん?なんだ?」

若干興奮状態のリノに少し苦笑しつつ俺はリノのお願いとやらを聞いてみる。

「とうか今更気が付いたがリノがいつの間にか俺のすぐ前まで近寄って来てた。」

頬を紅潮させて瞳を潤ませながら上目遣いでそう言ってきたのだから、男としては聞かない訳が無い。

「あ、あのね指揮官?」

「おう」

「指揮官の事を………キャップって呼んでいい?」

「んん?どういう事だ?」

お願いの意味が少し分からずに思わず聞き返してしまっただが、よく考えるときっきのヒーローネームから推測するに今の俺はキャプ○ンアメリカモドキだ。

つまりそこから予想すれば答えは簡単だった。

「指揮官はコマンダーなんだけど……でも、今はリノのヒーローのキャプテンユニオンだから……あのね？その……」

「愛称で呼んでくれて構わないさ。最後までとことん付き合うよりノ……まだやれるぞ？」

「……………キャップ!!」

その瞬間のリノはまさに弾けるような満面の笑顔だった。

そのまま俺に抱きついて喜びを全身で表現している。

金属の装甲でそのお胸様の柔らかさを堪能出来ないが、アッセンブルしたがっている股間の息子よりも今は夢を見るリノの為に一肌脱ごうじゃないか。

「さあ、リノ！一緒に周辺警戒任務に行くぞ？Are you ready？」

「わっ!!キャップ!!」

俺はリノを横抱き、つまりお姫様抱っこで抱えて部屋の外へ出る。

せっかく頑張つてこの最高傑作を作ってくれたんだ、皆にお披露目しないとな？

「キャ、キャップ……リノは重くない？」

「大丈夫さリノ、軽過ぎるくらいだよ。このまま走って通り過ぎる人に右から失礼つて声をかけてみないか？」

「……っ!!それ最高だよ!!」

「よし、しっかり捕まってる……ユニオンズ、アッセンブル!!」

「了解キャップ!!」

寮の玄関を出た瞬間から俺はすぐに走り始める。

俺の腕の中にすっぽりと収まって、落ちないように俺の首に手を回す彼女の楽しげな笑い声を聞きながら。

たまにはこんな日があつてもいいんじゃないだろうか？

まあ、走る振動で揺れるお胸様は眼福でした。

~~~~~

「あく楽しかったあ……………」

母港の外周をキャップと一緒に警戒任務に出て散歩していた人達と一緒に右から失礼って言ってきた。

まるでキャップがリノの知ってる本物のキャップみたいで興奮が収まらなかったよ。

「やっぱりキャップは凄いなあ……………」

この母港のヒーローであるキャップは強くてカッコよくて揺るがない精神を持つ、まるで漫画の中から抜け出してきたかのような人だ。

この前だって人間の限界値である重さのバーベルを持ち上げたらしいし……………本当に超人血清打ってないのかな？

「キャップ……………んう……………」

思い出していたら急に我慢出来なくなってきた。

普段は煩わしいと思うこの大きな胸もキャップの事を想いながら触ると抗えない程の快感を生み出してくれる。

本当はもっと小さい方が良いと思っていた。

ヒーローと一緒に戦ってサポートするなら動きやすい方が良いって。

「はうっ……………はあ……………はあ……………キャップう……………」

身体が自分の意志とは関係なく跳ね上がった。

切ない……………凄く切ない……………

心のどこかでキャップ……………指揮官を求めている。

「リノの……………リノだけのヒーロー……………ああ!!」

また身体が跳ねた。

カッコよくて大好きなヒーロー。

本当のリノの姿を見たらどう思うのかな？

「リノは……リノはいやらしい子だよ……指揮官の事考えるだけでこんなになっちゃう……あうっ……はぁ……はぁ……」

下腹部の疼きも酷くなってきた。

もう弄りたくて切なさを慰めたくて仕方ない。

指揮官は気が付かなかったけれど、今寝そべっているベッドから見える天井に彼の等身大ポスターが貼ってある。

「ああ、リノを……リノを見て！指揮官!!指揮官!!」

リノのヒーロー………

リノが憧れて支え続けたヒーロー。

………リノだけのヒーローになってくれませんか？

第19話 お酒とプリンツ・オイゲン

指揮官です。

久しぶりにお酒を飲めるとの事で私室でワクワクしていたら既に先客がいました。

とうか指揮官が飲んで良いのかという問題は、プリンス・オブ・ウエルズとエンタープライズがたまには休息を取って欲しいと執務を一日代わってくれるとの事で楽しみにしていたんだが……

「ねえ指揮官？ひつく……ほら、飲みましようよ？」

「お前は飲み過ぎ………とかいつから飲んでたんだ………」

俺の部屋にあるテーブルの上には蓋の空いたワインやウイスキーの空瓶が数本。

ソファーに座ってそれをグラスでグイグイと飲み続ける彼女は既に酔っ払いで酒臭過ぎる。

何だこの状況は？（困惑）

俺の部屋中に広がる酒の匂いが凄まじ過ぎるんだが………

「流石に飲み過ぎだぞプリンツ・オイゲン？」

「なによお………まだまだこれからなのよ？」

「呂律が微妙に回ってないぞ？」

「だいじょうぶらいじょうぶ………ひつく」

これダメみたいですね（呆れ）

鉄血巡洋艦 プリンツ・オイゲンはケラケラと笑いながらそう答えていたが、明らかに酔いが回りまくっている。

おそらく気を利かせたベルファスト辺りが用意してくれたお酒を、どこからか嗅ぎつけてきたプリンツ・オイゲンに飲まれたというのが真実だろう。

彼女はお酒が好きだとは知っていた。

だが俺は彼女とは飲まないように注意を払っていたのだが………

「指揮官………ひつく、早く飲みましようよ」

「お、おい………」

密着度!!

密着度。パないって!!!

なんかお酒の匂いに混じってすげえ女の子な香りがするし、押し付けられたお胸様の感触が気持ち良い!!!

いかん!

思考がショートしている!!

というかプリンツ・オイゲンさん?

潤んだ目で上目遣いして、吐息を掛けながら空いた右手で俺の胸板に撫で撫でしないで!!

なんでこんなにえっちいんですか?

ダメだ!!

俺の息子が爆発すりゅ!!

酒を飲んでないのになんでこんなに興奮してんだよお!!

「指揮官……………」

「どうしたプリンツ・オイゲン?」

俺を上目遣いで見つめ続ける彼女は、胸板を撫で続けていた手を俺の頬に添える。

そしてゆっくりと顔を近づけて……………」

「ん……………ふふふ♪キス、しちゃったわね♪」

「……………」

軽く触れるようなキスを俺にしてきた。

チーーーーー(´ω´)ーーーーーん

一瞬思考が止まった……………魂抜けてたわ。

こんな童貞は死んでまう!!

普段は小悪魔風な態度で色々焦らしてくるような子が、触れるようなキスで無邪気に喜んでいる姿なんて童貞野郎には尊過ぎる!!

「指揮官は……………うれしくないの?」

「いや、ありがとう?」

「ふふ♪へんな指揮官♪」

思わず疑問形でお礼を言ってしまったが、彼女は楽しそうに笑う。そして俺の胸板に頬擦りしながらポツリと呟く。

「わたしは……………いいわよ?」

「!？」

爆弾発言ですよプリンツ・オイゲンさん!?

今そこでそれを言ったら俺止まんないよ?!

驚愕と興奮に身を震わせて煩惱で彼女を抱きしめようとして気が付いた。

「……………ZZZZZZ」

「……………はあ」

プリンツ・オイゲンは寝落ちして俺はお預けを余儀なくされたのだ。

思わずため息が出る。

ここまで盛り上げといてここまでなのかという落胆は計り知れない。

おかげで股間の息子も急速沈下。

「……………まあ、酔ってたってのもあるか」

酔い潰れたプリンツ・オイゲンの頭を撫でながら空になった瓶の数を数える。

……………相当な数飲んでたからかなり酔いも早かっただろう。

「こうしていると可愛いもんだな」

「……………♪」

撫でる度に笑顔になる眠り姫に肩を竦ませて俺はこの後の事を考えた。

これ、俺の給料から引かれるんだろうなあ……………

まあ可愛いプリンツ・オイゲンも見れたから良しとするか。

~~~~~

「……………失敗したわ」

寮の自室で目覚めてすぐに自分の失敗を悟る。

今日こそは指揮官と一夜を共にしてみせると意気込んでみたものの、いざその時になったら落ち着かずとその場にあったお酒を大量に飲んで寝てしまった。

「ああもう!!あと少しだったのに……………」

お酒の力を借りて大胆に行動できたのに、最後の最後で目的を達成出来なかったのだ。

普段から揶揄うように指揮官にちよっかいを掛けているのに、いざとなったら臆病になってしまいう自分が恨めしい。

「……………私を本気にさせたのに、私が臆病になってどうするのよ」

指揮官に惚れたのは出会った最初の方から。

決して諦めないその強い心と仲間を思う優しさにあつという間に心奪われたのだ。

自分でもチョロいと思うけど、こればかりは恋に堕ちてしまったのだから仕方がない。

「……………胸がドキドキする……………なんであそこで寝てしまったのかしら。もう!!」

酔っても記憶が残る方である私は指揮官に迫って自分の純潔を差し出す許可まで出したのに……………

指揮官は紳士なのかヘタレなのかは分からないが、私を部屋に送って寝かせてくれていた。

「シチュエーション的には問題無かったはずよ……………問題はお酒を飲みすぎた事ね」

指揮官の方も雰囲気にも飲まれていたので、あの失敗さえ無ければ望んでいた結果を得られたはずなのだ。

とにかく今回の失敗はお酒を飲み過ぎた事。

「次は絶対失敗しないわ……絶対指揮官に私を貰ってもらうんだから」

次はお酒を我慢して想いを伝えるのだ。

指揮官と結婚したい。

ただその想いを胸にひたすら突き進む。

姉には恥ずかしくて言えない乙女の心を彼の下へ。

だからどうか神様、私に彼との赤い糸を繋いで下さい。

それだけが私の望みなのです。

第20話 弛みとシェフィールド 加筆修正版  
追記あり

指揮官です。

最近凄まじく弛んでいる気がしてなりません。

気が付けば見目麗しいKAN—SEN達に翻弄されて狼狽えるばかり……………

今までマツソーで乗り越えられた事が何故か通用しなくなっている事に焦りを覚えてしまう。

「やはり……………弛んでいるのか」

起床時間よりかなり早く目が覚めた俺はそんな事を考え自身の腕を見ながらそう呟く。

最近マツソー神のお告げが上手く来ていない気がするのは間違えではないはず。

やはり原因は……………筋肉との対話が減った事だろうか？

「最近KAN—SENとのコミュニケーション不足をクイーン・エリザベスに指摘されて、彼女達に積極的に話しかけて筋肉との対話の時間を減らしてしまったからなあ……………」

もしやマツソー神からのお告げが来ないのは筋肉に対する姿勢が成っていないからか？

それは由々しき事態だ。

「マツソーを敬愛する俺が筋肉に対して不誠実な対応を取るなんて……………言語道断だ!!」

今はまだベルファストが俺を起こしに来る前の時間だ。

ならば先に執務室へ行って執務を終わらせ筋肉との対話を始めるのがいいだらう。

「筋肉の衰えは待つてはくれない……………今しかないんだ!!」

早速着替えて執務室へ全速前進だ!!

警備艇の隊員時代に慣れた早着替えを使つて速攻で着替え終わり、

全身の筋肉をフル活用する事で可能となる足音を極限まで無く走り方を使い玄関へと駆け抜けた。

ああ……今の俺の筋肉は輝いている。

そんな事を考えながらふと今日の見廻り当番は誰だったかを考えた。

そして昨日ベルファストに聞かされていたメイドの名前を思い出す。

今日の見廻りメイドはシェフィールドか……

ロイヤル巡洋艦 シェフィールド。

彼女はかなり優秀なメイドでロイヤルメイド隊の中でも隠密行動を得意とするKAN—SENだ。

俺の記憶が正しければかなりの探知能力を持っており、ベルファストが起こしに来る前に俺が勤務時間外に仕事をしようとしている事がバレてしまう。

「……………それだけは避けないとな」

バレたらベルファストからの有難いお説教と勤務時間外に仕事をした事による罰則として、一日何もさせてもらえなくなる刑が待っている。

あの刑は恐ろしいものだ……

トイレ以外の行動を全てメイド隊に取られて何もさせてもらえなくなる。

食事では常にあーんされるし、飲み物も自分で飲めない。

読みたい本は読み聞かせられて暑さ寒さを感じたらすぐに気温調節されるのだ。

その間筋トレも禁止なのだから苦痛以外の何物でもない。

まるで自分が何も出来ない幼児になったかのような錯覚をしてみようのだ。

「メイド隊が皆揃って女神のような微笑みを絶やさずに奉仕し続けるから尚更怖い」

俺の世話をする事が天職であるかのような振る舞いに、俺自身があるのではないのかと勘ぐってしまいそうになる程に彼女達は甲

斐甲斐しく世話を焼いてくれる。

……絶対に見つかってたまるか!!

幸いにも俺の私室から執務室までの距離は近い。

全身の筋肉に感覚を行き渡らせマッソーセンスを発動し、細心の注意を払いながら周辺に誰も居ない事を確認して玄関から外に向かって駆け抜けた。

「よし、シエフィールドは居ないな?」

まだ日が昇る前の星が瞬く空の下、マッソーセンスで周囲を警戒する。

そして近くの茂みに身を潜めて目が暗闇に慣れるのを待った。

………どうやらここにはシエフィールドは居ないようだ。

もしかすると執務室周辺を巡回しているのかもしれない。

注意を怠らないようにしなくては………

「電灯なんかは避けて通らないと………こんなんでバレたらシャレにもならん」

腰を低く鍛えた筋肉で姿勢を保持して身体のブレを抑える。

茂みを越えてしまわないように電灯の明かりを避けて大きく迂回しながら執務室へ進んでいく。

ここまでシエフィールドに出会っていない事が奇跡のようだ。

「目的地まで………あと少しだ」

執務室までの距離はもうあと少し。

このまま執務室へ入って今日の内に見なければならぬ書類へサインと変更点の確認に演習等の通達事項を書けば今日の仕事は終わりだ。

セイレーンとの戦いが小康状態の今だからこそその仕事の少なさに、不謹慎ながら感謝してしまいそうになってしまった。

「それさえ終わらせてしまえば、もう一度私室に戻ってベルファストが起こしに来るのを待てばいいだけだ」

適当に仕事をする振りをして終わったと言えば、その後は念願のマッソー神へ捧げる筋肉との対話を思う存分出来るのだ。

全身の筋肉が喜びに震える。

「よしよし、ここから執務室のある建物へ………つ!？」

電灯地帯を越えて執務室のある建物へ進んでいたら………建物前にシエフィールドが巡回していた。

しかも艀装を展開して探照灯まで使って周辺を巡回してやがる………

「流石メイド隊の中でも隠密が得意なだけはある………死角になりやすい場所や人が隠れられそうな場所を重点的に照らして警戒してるな」

隠密に長けているというご事はその逆もまた然り。

いやらしいまでに完璧な警備だ。

「だが、それは普通の人間であればの話だがな」

シエフィールドの居る場所から東側に切り立った崖がある。

母港を一望できるその場所は下の海に機雷等を多数設置された危険地帯。

そこなら気が付かれずに建物へ近づけるはずだ。

「ボルダリングの経験は無いが、大戦時に崖から滑落しそうになって必死に上がった経験があるし大丈夫だろう」

あの時は陸上で指揮を執っていた際、突然の敵襲を受けて味方を撤退させている最中にセイレーンの艦載機からの空爆で吹き飛ばされて、転がっていった先が崖だった。

無我夢中で掴んだ崖の側面に生えていた木を掴むことで九死に一生を得て、崖を登り撤退したのだ。

「あの時はまだマツソーを極めていなかったのもあって鍛えていなかった事に随分後悔したもんだ………よつと」

崖の側面にある僅かな隙間に足を掛けながら降りて行く。

僅かな隙間に指を掛けてマツソーセンスで崩れそうな足場などを避けて進むと、案外簡単にスルスルと進めて建物の裏側へ回れた。

「やはり持つべき物は筋肉だな!!」

指の力だけで身体を支える事などマツソーを持つ者なら他愛もない。

次に行うのは建物への潜入だ。

「確か3階の最上階の窓が少し立て付けが悪くて、鍵が閉まらないので今度フレームから取り替えるとか言っていた気がする……」

ベルファストがその為の改修工事の許可を求めていたから、おそらくそこが狙い目だろう。

幸いにもレンガ造りの建物には指をかけるスペースがあるので指の力と腕力だけで登れる。

また筋肉の見せ所が来た!!

このマッソーならば立て付けの悪い窓を開けて中に侵入出来るはずだ。

「あまり時間を掛けてはられないな……シエフィールドが巡回してくる可能性がある」

外に設置されている配管の強度を確かめるが、体重をかけるには脆くてすぐに折れそうだった。

ならば最初に窓枠に足をかけて壁を登るのが一番ベストな選択だ。

「ふっ……窓を割らないように気をつけなければ……」

建物の最上階まで登るのは困難を極める。

しかし、レンガの隙間に指をかけて少しずつ確実に登っていく。

腕の上腕二頭筋に上腕三頭筋、前腕伸筋群と前腕屈筋群がうねりを上げる!!

身体を持ち上げる毎に掛かる負担が俺の筋肉を熱くさせていくのだ。

こんなにもマッソーが輝いているのは久しぶりではないだろうか？

「ぬうう……あと少し……はあっ!!」

最上階の窓のへりに指をかけた俺はそのまま一度窓に鍵が掛かっていないか確認すると、普通に開いていたのでそのまま身体を窓の中へ入れて音を立てないようにその場にしゃがみ込んだ。

完璧な潜入だ!!

思わずガッツポーズを決めたくなる程に完璧な潜入だった。



後は執務室へ向かい今日の仕事を済ませるだけ。

「おっと、忘れないように窓を閉めておかないとな」

上手くいった事で上機嫌な俺は音を立てないように窓を閉める。

「そうですね。しっかりと閉めておいてください」

「ああ、そうだな」

「……………あれ？」

俺って一人で潜入してたんじゃないの？

恐る恐る振り返るとジト目でこちらを見つめるシェフィールドがそこにはいた。

「朝早くからご苦労様ですご主人様。普段とは違うルートでわざわざ崖を渡って来るなんて……………とうとう頭の中まで筋肉になられましたか？」

「あ、いや、筋トレの一環で……………」

「ちなみに既に見張りをしていたダイドーからご主人様が、私室から出て行つたと連絡を受けております」

「oh……………」

バレバレやんけ……………」

俺の潜入バレバレやん!!

という事はなんだ？

俺はバレていた行動に完璧な潜入とかイキってたって事か？

「ご主人様が茂みに隠れていたのも筋肉で身体が大き過ぎてすぐに分かりました」

「……………不覚」

「落ち込むのは構いませんが、今からメイド長が来ますのでさっさと執務室に向かって下さい」

シェフィールドの辛辣な言葉に反応出来ない程に落ち込んだが、ここは神妙にお縄に着くのが良いだろう。

シェフィールドに先導されながら執務室へ向かう。

トボトボと後ろを着いて歩いていると彼女がチラリと振り返る。

「ご主人様のお好きな業務は今からして頂いても構いません」  
「本当か？」

一筋の光明が見えた。  
もしかすると罰則は無くて筋トレが……………

「業務が終わり次第、罰則を受けて頂きますので」

「ダヨナー（棒）」

その光明はただの誘蛾灯でした。

多分デロデロに甘やかされるんだろうなあ……………

ロイヤルメイド隊って目のやり場に困ってたまらんのだがなあ

……………  
~~~~~

「はい、ご主人様♪あ〜んして下さい♪」

「じ、自分で……………」

「はい♪あ〜ん♪」

「あ、あ〜ん……………」

実に楽しそうに食事を食べさせる小さいベルファストことベルちゃん。

流石のご主人様も小さい子に食事を食べさせられるのはかなりツライモノがあるらしい。

「ご主人様！ダイドーがお飲み物をお口に……………どうぞ♪」

「ああ、ありがとうダイドー……………」

もはや諦めの境地にあるように見えるご主人様はダイドーから飲み物を飲まされている。

まったく、こうなる事が分かっているはずなのに何故懲りないのか

が分からない。

「大手柄でしたねシェフィールド？」

「そうですね。ご主人様が最近よく自身の筋肉を意味もなく動かしている回数が多かったので、とても分かりやすかったですから」

「ふふふ♪貴女くらいですよ？ご主人様をそんなに観察している人は」

「……………別にそんなに見ている訳では」

ベルファストに指摘されなくても分かっている。

気が付けばご主人様の事を見つめている事くらいは……………

「では食事が終わりましたら私が指揮官様の御本を読み聞かせ致しますね？」

「待ってくれハーマイオニー!!それはまだ読んでいない新刊で……………」

「Hey!指揮官!!ハーマイオニーが終わったら次はケントがこっちの本を読み聞かせしてあげるね？」

「そんな……………」

ご主人様の狼狽えぶりは見ていて面白い。

ただそれだけなのだ。

「……………まだご自身の事を許せませんか？」

「っ?!……………そうなのかも知れませんか」

不意にベルファストに言われたソレは……………

大戦時の指揮官が崖下に落とされた時のことだ。

あの時の哨戒任務でセイレーンの空母を落とした後、帰る場所を無くした艦載機達のご主人様達を襲ったのだ。

帰る場所を無くした艦載機に未来は無い。

いずれ墜ちる未来の筈だった。

しかし、そう思っただけで見逃した艦載機達が近くで戦っていたまだ無名だった頃のご主人様達を襲い、そして危うくご主人様を無くすところだった。

「私は……………まだあの日を夢に見ます」

「シェフィールド……………」

「もしあの時のご主人様が助かっていなかったら……………私達KAN—SENの殺し合いの引き金を引いたのは間違いなく私だと」

「……………」

あの時の慢心が仕えるべき主を殺していた。

そんな事になれば……………私は死を選ぶだろう。

だから……………ご主人様から絶対に目を離さない。

慢心などは一切しない。

全ては敬愛するご主人様の為に……………

「誇らしきご主人様……………この万年筆を落として壊してしまいました……………どうかこの卑しきメイドに罰を」

「なにい!?!……………それクイーン・エリザベスからの誕生日プレゼントだったんだが……………」

「これはもう元に戻らないにや……………旦那様、どうするにや?」

「なんか良い言い訳と一緒に考えてくれチェシャー……………なるべくシリアスが怒られない方向でだな」

何やらメイド隊では無い者もいつの間にか紛れ込んでいるが、ご主人様に奉仕している様子なので放置しておく。

カーリユーとキュラソーがご主人様に奉仕したいロイヤルのKAN—SEN達も巻き込んで罰則をする方が良いと言って招いていたけれど……………

まあ見ている限りはご主人様の罰となるから良いだろう。

ニューカッスルやグロスターにエディンバラとグラスゴーも彼女達と一緒にご主人様のお世話をしたいKAN—SEN達を呼びに行っているのをご主人様には居ないが、聞きつけた他の陣営の者達も押し掛けてくるかもしれない。

「シリアス……………またご主人様にご迷惑を御掛けして……………」

ベルファストがシリアスのやらかしに気が付いてご主人様達の方へ向かって行ったのを見届ける。

ご主人様の為ならば、私は己が持つ全てを使って遮るモノや危険に

晒す存在を排除しよう。

その為に私は今生きているのだから……………

「ロイヤルメイドの名に誓い、全ての害虫に鉄槌を」

全てをご主人様の為に。

大戦時に上層部よりご主人様へと向けられた暗殺者へ鉄槌を下した時に口ずさんだ言葉……………

今の私はあの時より少々鈍っているのかもしれない。

そうでなければご主人様が計画した時点ですぐに気が付いた筈なのだ。

「取り戻さなければ……………ご主人様を御護りする為にも……………」

幸いにも力を取り戻すのに必要な経験値はいくらでもこちらに向かって来る。

ならばその全てを噛み砕いて吐き捨てて見せよう。

「お慕いしております……………ご主人様」

大切なモノを護る為なら容赦はいらない。

これはあの時に護れなかった貴方を今度こそ護る誓いなのだから

……………

第21話 重さと檜野

指揮官です。

誘惑に負けそうです。

目の前でフルリフルリと揺れるお尻が俺の股間を熱くする!!
とうかこの状況がマジでヤバイ!!

「んー、ここはこれで……………これはあそこですね」

筋トレ用に置いてある重りを一つずつ丁寧に仕舞っていく彼女は、俺の視線に気が付いているのだろうか？

トレーニングルームで日課の筋肉との対話を始めていたら起こってしまったこの誘惑……………

「あつーこれはここに置くんですね!!」

嬉しそうな声色と共に仙骨部辺りから生えている尻尾が勢い良くフリフリと振れる。

ダンベルを抱えてダンベルフライをしているのに、視線が彼女のお尻とか尻尾に持っていかれるのだ。

「何故……………」

思わず声に出してしまう。

だが、思わずにはいられない。

何故……………彼女は俺の枕元で重りの整理をしているのだろうか？

しかもあのミニスカートで若干腰を屈めているので、中身丸見えなんです。

ちくしょう無地の白かよ!!

視線誘導し過ぎだろうが!!

「あ、この重りはこっちですか！やっとな数が合いました!!」

俺の気持ちとは裏腹に本当に嬉しそうな彼女に、そろそろ俺の枕元から退いて欲しい。

これ以上誘惑され続けたら筋肉との対話どころじゃなくなってしまう。

「あれ？この重りはバーベルに使う物じゃない？……………んー、向こうに

仕舞わないと」

そう言つて重りを抱えた彼女は俺の枕元から離れていった。

「……………マツソー神よ、あなたに感謝を」

筋肉に宿るマツソー神に感謝の祈りを捧げる。

耐え難い誘惑に負けずに筋肉との対話を続けられた事に、俺は深く深く祈りを捧げてダンベルフライを続行した。

前にユニオン潜水艦 アルバコアがイタズラで重りを持って行ったのを彼女が整理しにきたと、全ての重りを持って現れたのには少々ド肝を抜かれた。

「確か……………全部で800kgくらい持つてなかつたかあれ？」

鍛えている俺よりも更に重量のある重りを軽々と持ち上げる彼女に、俺はダンベルフライをしながら眺める事しか出来ずに……………あの様な事態を引き起こしてしまったのだ。

「力持ちだとは聞いていたが……………やはり大和型の主砲を運搬しただけはある」

素直にその力に感心し続けていると、またこちらに彼女が歩いてくる音が聞こえた。

だが今度の俺は一味違うぞ？

「ふっ、ふっ……………マツソー神との対話に集中する為に……………ふっ……………己の目を閉じれば大丈夫だ」

そう、視覚からの誘惑に対してその目を閉じれば万事解決なのだ。そうすればそこに居るのは己と対話をしている筋肉とマツソー神だけ。

なんて素敵な解決方法なのだろうか？

「さあ……………対話の時間だ……………ふっ、ふっ、ふっ……………」

静かに目を閉じて筋肉のうねりを感じる。

暗闇の中で躍動する大胸筋が俺のエネルギーを消費しながら大きく肥大していくのがよく分かつて最高だ!!

ダンベルが頂点に達してまた降りる度にまた一つ筋肉が輝くのを

感じてもう堪らない!!

マッソー神よ!!俺の筋肉に光を!!

喜びに包まれる筋肉に思わず笑みが零れるが、鍛える事こそが俺の気持ち昂らせる。

ああ…………筋肉よ、永遠となれ…………

「…………ええつとお…………これは何処に仕舞うのでしょうか?…………指揮官にお聞きすれば…………きやつ!」

「ぐほお!」

筋肉の賛美をしている最中に腹部へとんでもない重量物が落ちてきた。

目を閉じていた間に何が起きた!?

鍛えていた俺でなければ内臓に重大な損傷を受けてもおおしくは無い衝撃だったぞ?

「痛たた……………めんなさい指揮官!」

「う…………ぐう……………お前か樫野」

目を開けて自分の腹部を見ると、そこには俺の上に横から被さるようにして倒れた重桜運送艦 樫野がいた。

彼女は信濃と一緒に最近この母港に配属されたKAN—SENで、あの大和型に積む為の主砲を運送する為だけに建造された運送艦であり、細い腕に見合わず力持ちだ。

ただ、KAN—SENとして生まれてから自分の身体のバランスに着いていけずによく転ぶ姿が目撃されている。

まあ、理由は簡単だ。

豊か過ぎるフォートレスお胸様に安産型のBIGヒップが、あの細い手足と腰つきに付いているのだからバランスを崩すのは仕方ない事だろう。

「本当に…………めんなさい指揮官、邪魔するつもりは無くて……………」

「ああ、分かっている」

とりあえず俺の上から退いてもらえないだろうか？

その大きさに見合わず柔らかいフォートレスお胸様が服の上からでも分かるくらいに、俺の腹部で窮屈そうにしている息子が呼んでもないのに立ち上がりそうだ。

そんな風に思っていると檜野が哀しそうに聞いてくる。

「あの……すみません、重いですよね？」

「いや、大丈夫だが？」

彼女自身は全然重くなかったので速攻で答えた。

持っていたらしい重り(50kg)は向こうに飛んでいってしまったので、俺に掛かっている重さは檜野だけ。

そのくらい鍛えている俺の筋肉にとって負担となる訳が無い。

「そ、そうですか？本当に重くないですか？」

「ぜんぜん平気だが？倒れ込んできた勢いに驚いたが、お前自身は全く重くはないぞ？」

「だって……こんなに胸が大きくて自分でも重いって思うのに……」

持っていたダンベルを降ろして床に置き、不安げにこちらを見る檜野に俺は頭を撫でた。

多少コンプレックスになっているのかもしれない。

確かロイヤル空母のユニコーンにも同じような兆候が見られていた。

自分は小柄なのに胸だけ皆と違うと。

その話を直接ユニコーンに言われた俺は返答に困ってしまったが、その時一緒にいたユニオン駆逐艦 ラフィーの発した『カツコイイ』という発言とその後のフォローのおかげでユニコーンは笑顔を振り返り取り戻した。

今回もそのパターンだろう。

だが違う点としてフォローを入れてくれる子が居ないという点だ。ならばここは俺が彼女にフォローしてあげるのが一番良いだろう。

「檜野、それはお前の個性だ。皆と違うのは当たり前だよ」

「でも指揮官……………私は……………」

「不安か？」

「……………はい」

曇ったままの檜野に俺は笑みを浮かべながら言葉を選ぶ。

不安でいっぱい彼女の心を癒す言葉を考えるんだ。

「俺だって不安な事はある。お前達にふさわしい指揮官であれているのかってな」

「そんなことは！」

「そう言ってくれてありがたいよ。でもな？俺は人間だ。いつ間違いを犯すか分からないし、その時にお前達を危険に晒すかもしれない……………」

「それは……………」

「な？言い切れないだろ？」

「……………はい」

自分の不安に思う事を赤裸々に話す。

彼女が不安に思っている事を話したんだ。

それくらいしないと彼女は萎縮して話せなくなってしまうかもしれない。

「前線で戦い続けた学の無い俺なんかには力は貸してくれる……………俺はそんな皆の期待を一身に背負ってここに居るんだよ……………だから不安に思う事なんだ」

「指揮官……………」

「でも俺は逃げたくない……………皆と一緒に居たいんだ。お前はどうか檜野？」

「私は！指揮官と一緒に居たいです!!」

その答えを聞いた俺は何度も頷く。

配属されたばかりの彼女にそう言ってもらえるのはありがたい。

こんなにも信頼してくれる彼女の不安を俺が取り除かなければ。

「だからな檜野？俺はそんな信頼してくれるお前を変だとは思わない」

「え？」

「だってそうだろ？お前はお前だ。俺を信頼してくれる大切な仲間なんだぞ？どこに変だとは感じる必要がある？」

「指揮官……………」

話を少しすり替えて信頼の話に持っていく。

女性の褒め方なんてこの童貞には分からない。

でも信頼してくれる仲間を励ます事くらいは出来るはずだ。

「それでも不安に思うなら……………」

「思うなら？」

「黙って俺に着いて来い」

「ふえ？」

惚ける榎野の目をじつと見て伝える。

考えるな、感じろの精神だ。

前線で戦い続けた俺と部下の間にあつた絆でもある。

先を進んで道を切り開く俺に着いて来いと何度も言つたあの大战時。

男臭いやり方だが、先の見えない俺達を鼓舞する為にひたすら先導役を続けた俺のやり方だ。

「俺がお前を認める。他の奴等になんと言おうとも俺だけはお前を認め続けてやる……………だからその不安も全部俺に託して着いて来い」

「い、いいんですか？私、重いんですよ？」

「そんなもの屁でもない、そのくらい背負えるさ。俺はお前を信じてる。だからお前は俺を信じて着いて来てくれれば良いんだ」

「……………指揮官……………はい」

俺の撫でる手を両手で包み込んで頬擦りする榎野。

その表情はとても安らいで見える。

問題を先送りにしたような気もするが、今の俺にはこれが精一杯だろう。

後は時間と他のKAN—SEN達と交流を深める事で解決する筈だ。

でも何故だろうか？

なんかとんでもない事を言ってしまった気がするのだが……

~~~~~

「指揮官の信じる私かあ……ふふふ♪」

不思議と笑いが込み上げてくる。

その言葉が私の胸を熱くさせ、不安に思っていた事が全てどうでもよくなってしまった。

「凄いなあ……カツコイイなあ……」

頬が熱い。

あの方の手を当てた場所が熱い。

新人としてここに来た時は不安でいっぱいだった。

他には無い艦種で皆と違う私は、仲良くなれる人をどうすれば見つけられるのか分からない。

しかも着任する場所は歴戦の英雄である指揮官の母港。

風の噂では前線でどんなに負傷しても指揮を執り続ける猛将だという。

果たして私はそんな凄い人の下で上手くやっていく事が出来るのだろうか？

運送しか取り柄のない私に何か出来ることはあるのだろうか？

「実際に会ってみて、凄く気さくな方で驚いたけど……本当に私がここに居ていいのかなんて思うくらい居心地が良い場所をくれた人」

指揮官は困った事があれば嫌な顔せず話を聞いてくれて、一緒に解決方法まで考えてくれるような良い人だった。

だからどんな雑用でも自分に出来ることはやってきたし、今回の重りを仕舞いに来たのもそう。

「指揮官が居たのは想定外だったけど……でも相談に乗ってくれたし……」

この人型になって得た他の人よりも遥かに大きな胸やお尻に誰にも相談出来なかつた事を、指揮官に思わず言ってしまったのだけれど……あの方は笑うこと無く真剣に考えてくれた。

今思い出してみれば男性である指揮官には、答えずらい内容だったにも関わらずちゃんと答えてくれた。

「俺に着いて来いかなぁ……えへへへへ♪」

指揮官だけは私を認め続けてくれる。

私の不安も何もかもを背負って前に居続けるのだ。

「あれって……将来の”妻”として着いて来いって事だよな？」

先を歩いて道筋を示すあの方の、半歩後ろを着いて行くのが私の役目という事なのだろう。

私の全てを受け止めて背負い、共に歩いていこうという”プロポーズ”。

あんな風に力強く誘われたらときめかない訳が無い。

女の子ならカッコイイ王子様に助けられて力強く誘われてみたいなんて夢を見てみたいと思うものです。

「ああああ……思い出したら胸がドキドキして止まらないよお……」

あの方が居れば他の事は全て気にならない。

指揮官が私を信じてくれるのなら……もう何も怖くない!!

他とは違うなんて事で悩むのはもうやめです。

「指揮官の為に……私、頑張ります!!」

あらゆる障害を跳ね除けてあの方のお側に居ても釣り合いが取れるようになる。

そして将来は……あの方と共に幸せになろう。

この母港で一番の幸せ者になる為に……

今はひたすら指揮官が先導するこの未来を駆け抜けて行こう!!

## 特別編!!アズールレーン3周年記念版!!

指揮官です。

ただ今絶賛困惑中です。

目が覚めたら若い頃の自分(10代後半)に戻っており、全身のマッソーが細マッソーになっていた。

しかも前線で戦って付いた傷痕すら残っていない……………

「……………どういふ状況だこれ?」

辺りを見回せば見たことも無い部屋のベッドの上で、勉強机が置いてあってその上に教科書らしき物が積み重ねて置いてある。

起き上がって机の方に近寄ると生徒手帳らしき手帳が置いてあったので確認すると……………撮った覚えのない俺の顔写真に年齢と学年が記入されていた。

「……………アズきゅん学園2年A組という事は、この身体の俺は高校生か?」

聞いたことのあるような無いような学校の名前だが、とりあえず大事な情報源だ。

一応頬をつねって夢じゃないか確認してみたが、痛みを感じたので恐らくこれは現実である。

何故この身体に憑依してしまったのかは分からないが、学生であるのであれば学校へ行かなくてはならない。

もしこの身体の本来の持ち主が戻ってきた時に無断欠席した為に皆勤賞が取れなかったり、教師にその件について怒られる可能性があつて実に不憫だ。

「時間は……………7時10分か……………朝食を食べて制服に着替えよう」

部屋を出てすぐにリビングに出るが、誰も居る気配が無い。

この世界の俺は学生なのに一人暮らししてるのか?

随分と羨ましい限りだ。

「ベルファスト達にいつもは作ってもらっていたけど、簡単な物なら自分でも作れるよな……………なんだか懐かしいよ」

前世の記憶の欠片を思い出しながらコンロに油を引いたフライパンを置いて火を灯す。

大戦時はそこら辺の鳥や蛙に蛇を捕まえて調理していたのが懐かしい。

冷蔵庫の中を漁って卵とソーセージを取り出すと熱したフライパンに割った卵とソーセージを炒めた。

「男料理なんて焼くか煮るくらいだもんな」

「なんだか懐かし過ぎて楽しくなってきた。」

こんな簡単に楽しい事も最近はロイヤルメイド隊に任せていたという事が、なんだか勿体なく感じてきている。

焼き上がった卵とソーセージを皿に乗せて食器棚からお椀を出すと、炊飯器から温かい白米を入れて朝食の完成だ。

「おっと、マヨと醤油を少しかけてっど………いただきます！」

冷めないうちによく噛み締めて味を楽しみながらご飯を食べる。

こんな単純な組み合わせで幸福を感じるなんて俺も安っぽい男だと思いつつ、普段は食べられない簡単な料理に舌鼓を打っている……

「ごめんなさ〜い!!ジャベリン寝坊しちゃいました〜!!」

玄関の方から何やら元気な声が聞こえてきた。

食べるのを止めて玄関を見るとそこには何やら制服を着て髪を降ろしたロイヤル駆逐艦 ジャベリンがリビングに入って来るのが見える。

「ごめんなさい先パイ!!寝坊してご飯作りに来るのが遅れちゃいました………つて!?!先パイが一人で起きてご飯作ってる!?!」

「………まずかったか?」

俺の方を指差しながらジャベリンが驚愕の表情を浮かべているのを見た所、この身体の俺は一人で起きられない上にジャベリンに飯まで作ってもらっているらしい。

しかもジャベリンは俺の後輩のようだ。



……年下に迷惑かけている俺って情けなさ過ぎないか？

普段ロイヤルメイド隊にお世話されている俺が言える事じゃないんだがな。

そんな事を思いながら食事を続ける。

ジャベリンの話が本当なら迅速に食べなければ学校に遅刻することも有り得そうだな。

「う〜……私の楽しみがあ……」

「なんの事だ？」

「何でもないから気にしないで……はあ……」

「……？」

肩をガツクリ落とすジャベリンに首を捻りながらも食事は終わった。

食器を手早く片付け歯磨きをして自室に戻り、制服に着替えて再びリビングへ戻るとジャベリンはまだいじけている。

「そろそろ学校へ行くこうジャベリン。遅刻するぞ？」

「う〜……はっ!? もうそんな時間!? いけない! 早く学校へ行きましょう先。パイ!!」

元の世界と同じく賑やかだな。

慌てているジャベリンに苦笑しながら玄関へ向かう。

どんな世界なのか分からないが平和な世界なのだろうなあ……  
そんな事を思いながらジャベリンと一緒に外へ出た。

「………だいたい予想してたがな」

学園に着いて自分の席に座る。

一番後ろの窓際の席だ。

外は俺が転生する前の令和時代の日本によく似ていた。

ただ、セイレーンやKAN—SENといったモノは無く、アズールレーンが政府与党でレッドアクシズが野党がみたいな感じで平和を維持している。

なんともご都合主義な世界だ。

「ふう……」

「む？どうしたんだ？君がため息をつくなんて珍しいじゃないか」

「……………エンタープライズか」

「体調でも悪いのか？なら保健室で休むと良いぞ？」

声を掛けてきたのはユニオンの英雄 エンタープライズ……………では無い。

ここでは同級生でアーチェリー競技のオリンピックク選考選手のエンタープライズとの事なのだが……………ぶっちゃけ元の世界と性格は変わらないみたいだ。

学園に掛かっている横断幕にそう書かれていたのを見て知ったのだが、ここでも弓の冴えは鈍らないらしい。

「いや、大丈夫だ。問題ない」

「そうか？なら良いんだが……………本当にキツイなら休息を取るのも大事だぞ？」

「ああ、分かった。本当にダメそうならそうするよ」

「無理はしないでくれよ？」

そう言うと心配そうな表情をしながら彼女は俺の席から離れていく。

仲間に対する優しさも変わらないようだ。

「……………よし、現実逃避はやめだ」

色々な情報が満載過ぎて頭がパニックになりそうだが、そろそろ現実逃避をやめるとしよう。

なんで男は俺だけなんだこのクラス!!

というか男は俺以外居ねえじゃねえかよ!!

学園ラブコメ物の主人公が俺は!!

しかもクラスメイトはウチの母港に所属しているKAN—SENばかり……………

こんな所まで元の世界の母港と一緒にじゃなくても良いだろうがよ  
……

さっきのエンタープライズも制服着てて一瞬ときめいたわ!!

こんな美人のクラスメイトが前世にもいたらなあ……なんて考  
えちまったよ……

それに俺しか男が居ないせいか皆ガードが緩過ぎる。

ジャン・バールと熊野なんてミニスカートなのに片膝立てて机に  
座ってるからそっち向けねえだろ!!

あとサフォーク!!

お前の装甲の薄さを表現してるのか知らんが、机でうつ伏せに寝る  
せいでブラウスからブラの紐が透けて見えてるぞ!!

ケントも上着を腰に巻いてるが、そのせいでブラウスの正面から透  
けブラしてやがる……ちくしょう青色かよ!!

何なんだこの状況は……

「この調子でいくと担任教師もKAN—SENだろうなあ……」

ご都合主義の塊と青少年の煩惱をくすぐるのような状況に頭を抱  
えていると予鈴が鳴る。

そして現れた担任教師は……

「コホコホ……おはようございます皆さん。全員揃っていますね  
?」

スーツ姿の天城だった。

……身体のラインが出てエロいんですが天城先生。

スーツの上着に収まらないセクシーお胸様に俺の股間が熱くなる。

というかマッソーが細マッソーになってる影響なのか聞かん坊が  
マジで言う事を聞かねえ……

助けてマッソー神!!

無性に筋トレがしたい!

この煩惱を筋肉に変えたい!!

ダンベルやバーベルが恋し過ぎる!!!

「……………という事でホームルームを終わります。今日も怪我無く元気に過ごしましょう」

筋肉への欲求不満を爆発させているとホームルームが終わって天城が教室から出ていく。

ホームルームの内容が全く頭の中に入ってこなかったが、今の俺はそれどころではない。

だが、ここで筋トレをしてもそれは不審者にしか映らないだろう。

とりあえずこの湧き上がりすぎて着火数秒前なりビドーを何か別の事にすり替えるのだ!!

「……………耐え切れるのか俺は」

不安しかない学園生活。

だが、この身体の俺の名誉の為にも耐えて耐えて耐えて耐え抜くのだ

……………

「嘘だろ承太郎……………」

座学の時間は何とか乗り越えた。

数学はラングレー、化学は夕張、現代社会はアマゾンといったように教師役は母港で指導役をしているメンツと変わりはなかった。

内容について行くのがやっとだったという事は伏せておくが

……………

そして午前中最後の授業は……………体育だった。

体育館に集まった俺達。

体操服に着替えたのは良いんだが……………女子の体操服の下がブルマってどういう事だよ？

ムッチリした子やスラリとした子に綺麗なお尻がクツキリと出るブルマを履いた子達が俺の前に整列している。

一番後ろに並んでいるから凄くハッキリ見えるのだ。

しかも体操服が身体のラインを浮き立たせるような感じで、お胸様が大きい子も控え目な子も普段は制服で見えない子も男の目指した頂をすぐに見ることが出来る。



相手チーム

ボルチモア、瑞鶴、ジャン・ボール、熊野、ケント

無作為なクジで決めたらこうなった。

「圧倒的に機動力が足りない……………」

クジ運の神様は俺を見捨てたのか？

とかポートルランドの奴なんて早速フォーミダブルに妹の薄い本を布教しようとしてやがる。

サフオークは今にも眠りそうで……………大鳳はこつちを見て両手を頬に当てたままウツトリした表情を浮かべているのが見えた。

背筋がゾクゾクしてきたな……………

「いい試合にしよう」

「できるのかコレ？」

挨拶しに来たボルチモアに思わずそう言ってしまった俺は悪くないと思う。

苦笑するボルチモアにため息を吐きながら両チームがポジションに着いた。

俺とボルチモアはジャンプボールのポジションに立つ。

審判はレンジャー先生だ。

「それでは始めます……………ピー!!」

「っ!!」

レンジャー先生のホイッスルが鳴ってボールが高々と飛び上がる。

その瞬間に互いにボールに向かって飛び上がるが、KAN—SENではないただの高校生のボルチモアに俺が負けるはずが無い。

「そら!!」

「くっ—」

ボールを弾き飛ばして一番まともだろうフォーミダブルに送る。

そこまで勢いは無いからボールは取れたはず……………

「え?ちよっ?!?きやあ!!」

「マジかよ……………」

ボールはフォーミダブルの超ド級お胸様に当たって跳ね返り、相手チームの方へと転がるとそれをケントが拾ってしまう。

「へへ、チャンスってやつだよ！」

「ほえ、頑張ってね」

「何してるのよサフオーク！敵チームを応援してるんじゃないわよ！！」

「ほよ？」

ケントがドリブルしながら走るのを止めもせず、手を振って応援するサフオーク。

それを見て怒るフォーミダブルだが、ケントをブロックするには遅すぎた。

「シュート！Hey！先制攻撃成功だよ！！」

「……………3ポイントシュートだど？」

規定ラインよりも外側で放つ3ポイントシュートをあつさり決めるケントに周りの生徒達は歓声を上げる。

すぐさまゴール下からボールを拾ってパスをしようとフォーミダブルが振り返って……………ポートルランドへ投げた。

「そのボールをくれたら後で妹ちゃんのお話いっぱい聞かせてもらっちゃおうかな」

「本当!?じゃあ上げるね」

「ちよつとお!!」

熊野がポートルランドに大好きな妹の話聞く事を条件にボールを貰う。

そして響くフォーミダブルの悲痛な叫び。

これは酷い。

「はい、ボルチモアにパス」

「ありがとう熊野！てい！よし!!」

そして熊野はボルチモアにパスして速攻でまたもや3ポイントシュート。

これ試合になってねえなあ……………

「今度こそ……………サフオーク！」

「ほえ？」

「もらったあ!!」

「またなの!?!」

フォーミダブルは今度こそとパスしたサフォークはボールの事を全く見ておらず、その瞬間に瑞鶴にボールを取られてそのままレイアップシュートでゴールネットを揺らす。

フォーミダブル涙目である。

「というかボールが一向にこつちに来ないのだが……………」

「おーい、パスくれー」

「ほら大鳳!!」

「ああ…………手を振る御姿も良いですわあ」

「何してるのよ!!」

「あー、ボールは貰うぞ?」

フォーミダブルは俺を無視して大鳳にパスするが、肝心の大鳳が俺の方を向いていてボールを取ろうとすらしていなかった。

その隙にジャン・ボールがボールを拾ってまたしてもシュートを決められる。

そんなこんなでフォーミダブルが俺を無視してプレイを続けた結果

66対0

この有様である。

なあにこれえ?

いくらなんでも酷くないかこれ?

フォーミダブルは涙目で肩で息をしているのが見えるっていうかほぼ泣いてるな。

KAN—SENの方の彼女も負けず嫌いな所があるから、よく似た彼女も同じような気質を持っていてよっぽど悔しいのだろう。

「あと6分か…………仕方ない。レンジャー先生、タイムをお願いします」

「ええ、いいわよ?両チームストップ!タイムよ!!」

涙を流しながらパスしようとしていたフォーミダブルが止まった。



相手チームもそんな彼女を少し不憫に感じている様子が見て取れる。

俺はオロオロしているフォーミダブルに近寄って話しかけた。

「どうして俺にパスしない？」

「べ、別にいいじゃない！あんたなんて居なくても勝つてやるんだから!!」

いや、涙目で言われても困る。

というかなんか理由がありそうだな。

少し話を聞いてみるか……………

「現実はどうだ？この大差は覆せないぞ？」

「そんなの……………分かってるわよ!!」

「じゃあ何故俺にパスしようとしないんだ？」

「そ、それは……………」

口籠るフォーミダブル。

根が深そうだが、ここで聞いておかなければ不和を持ったままじゃあのチームには勝てない。

さて、いったいどんな理由があつたんだ？

「あ、あんたが私の事を重いつて言うから……………」

「へ？」

「私の事を重いつて言ったのよ!!」

「そ、そうだったか？」

「そうよ!!忘れもしないわ……………運悪く階段から足を踏み外して落ちた先にあんたが居て、下敷きにしたのは悪かつたけどね……………その後重いつて言ったのよ!!?女の子に重いは無いでしょ!!?」

すげえ俺が悪かつた。

てか本当にこの世界の俺は何をしてんだよ……………

確かに多感な時期である高校生の女の子に重いは無いな。

そりゃ怒るわ。

「その件に関しては悪かつた。この通りだ」

「……………とりあえず謝つたから許すわ。でもこの点数差じゃもう……………」

「俺に任せろ。何とかしてやる」

「できるの？本当に？」

頭を下げて謝りフォーミダブルに許してもらった。

だが、フォーミダブルはこの点数差で覆せるのか心配なようだ。

また泣きそうになっている。

「ああ、その為にも……サフオーク!!」

「ふにや!?ね、寝てませんよ?本当ですよ?」

立ったまま寝ているサフオークへと声をかけた。

「というかよく寝られるな……」

「サフオーク、こっちへ来てくれないか?」

「良いですよ」

「ほら、こうだ!!」

「はにゅん!」

無警戒に近寄ってきたサフオークの頭を優しく撫でる。

普段駆逐艦の子達に気持ちいいと評判の俺の撫で方が、サフオークの頭を刺激すると一気にサフオークの表情が変化してきた。

「ね、ねえ……サフオークの顔が女の子がしている顔をしてないんだけど……」

「……」

「……声も出せないくらいビクンビクンしてるけどこれ大丈夫なの!?!」

「大丈夫だ、問題ない」

手の平と指のマツソーに集中する。

頭頂部から広範囲に広がるツボをマツソーセンスで探して刺激し、頭を撫でるという行為で心地良い状態を作った。

された方は素晴らしい心地良さに夢見心地だろう。

「頃合か……」

「……あれ?終わりなの?」

「どうだサフオーク?もつと撫でて貰いたくはないか?」

「是非!」

俺のマツソー撫でをとても気に入ったのかサフオークは、満面の笑

顔で俺の方に近寄ってくる。

よしよし、良い食い付きだ。

「このバスケットボールでケントをずっとガードしてくれたら、もつと気持ち良くしてやれるんだがなあ……………」

「やりますーだからもう一回！もう一回お願いします!!」

「しようがないな…………頑張ったら放課後にもう一度してあげよう」

「は〜い♪サフオーク頑張ります♪」

これでケントは動けないはずだ。

次に…………大鳳だな。

さつきから凄いいこっち見て恍惚としてて怖いんだが…………仕方ない。

「大鳳」

「はあい♪貴方の為ならなんでも致しますわ♪」

「よし、なら皆からパスを受けたら俺に必ず渡してくれないか？」

「ふふふ♪この大鳳にお任せ下さい♪」

「…………頼んだ」

いつの間にか満面の笑みを浮かべながら近寄って来た彼女に、気圧されながらもお願いするとあっさり承諾してくれた。

……………なんか後が怖そうだが、これもコラテラルダメージなのだろう。

「最後に…………ポートランド!」

「なにになに? 貴方もインディちゃんのお話を聞きますか?」

一番の問題児ではあるが、この問題も解決してみせる!!

コイツの攻略法は割と簡単だからな。

「それもいいんだが……………もし自分の姉が試合に負けてしまって、理由が自分の話をする為に敵に味方したなんて知ったら妹は悲しむんじゃないかなあ……………」

「インディちゃんが悲しむ!? そんな……………どうすれば良いの!」

「方法は簡単だ、この試合で君はジャン・ボールと瑞鶴にボールがいかないようにブロックしてくれ」

「そんな事でいいの?」

「もちろん、後はボールが取れたら大鳳にパスしてくれ。そうすれば後はなんとかなる」

「うん、分かった!」

これで相手の半数がブロックされる事になる。

熊野も運動が出来そうだが、ポイントゲッターは主に熊野以外のメンツなので俺がプレイしながらボルチモアと併せて見ておけば良い。ポジションを上手いこと決めていたらフォーミダブルに体操服の裾を引かれる。

そんなに心配そうな表情をしなくても役割は決めてあるさ。

「ねえ、私は?」

「フォーミダブルには全体を見てもらいたい」

「全体を見る?」

「ああ、ガードが緩くて通れそうな場所や逆に危なそうな場所を教えてください」

これが一番重要だ。

フォーミダブルのパスは皆が取ろうとしなかつただけでしっかりとメンバーには届いていた。

つまり全体を見て誰が一番パスを通しやすいか判断できていた訳だ。

ならば前線で戦う俺よりも全体を見れる位置で、指示を出してくれていた方が勝率は上がる。

「フォーミダブル、君の指示が頼りだ。頼んだぞ?」

「私が……………任せてちょうだい!!」

俺と視線を合わせて力強く頷くフォーミダブルに、もう涙は無かつた。

レンジャー先生にタイム終了を伝えると再開のホイッスルが鳴る。

「一番左のケントが居るコース!」

「了解だ!!」

フォーミダブルのパスを受けた俺はドリブルしながら全力で駆け抜けた。

それを見たケントはブロックしようとするが……

「ごめんね、ナデナデの為にここに居てね？」

「な、ナデナデ？何それ!？」

やる気を出したサフォークにブロックされて動けない。

慌てて出てくる熊野を後目に俺は軽く飛んで左手をボールに添え、右手首のスナップだけでシュートする。

もちろん規定ラインより外側でだ。

簡単に3点GET。

「こんなに簡単に……………」

ディフェンスに戻りながら呆けているフォーミダブルの肩を軽く叩いて

「言つたろ？任せろつてな？」

肩を竦めながら笑ってそう言った。

まあ女子には分かるまい……………この俺の煩惱を通して出る筋肉の力は。

授業中や休み時間の間に溜まったりビドーが全て筋肉への活力に変わっていくこの瞬間こそが俺の求めていた時間なのだ。

「さっきまで一方的に攻撃してきたが……………教えてやるよ、一方的にやられる悔しさと悲しさをな？」

そこからは怒涛の追い上げだった。

すぐにパス回しをして逃げる作戦に切り替えた相手チームだったが、俺やポートランドにボールを遮られてすぐにボールを拾った大鳳やフォーミダブルが俺にパスする事ですぐに攻め上がって3ポイントシュートを決める。

俺の大腿四頭筋とハムストリング、下腿三頭筋がうねりを上げながら熱く、そして強靭なまでに俺の身体を走らせ押し出す力を出してくれるのだ。

マッソーが力を発揮する事が出来れば造作もない事である。  
そして、残り時間が1分になった頃には点数差はもう無かった。

66対66

「凄い、凄いわよ!!あんなに点数差があったのにここまで巻き返せたなんて!!」

「ああ、あと少しだな」

興奮しているフォーミダブルに俺は油断なく相手チームを見続ける。

向こうも何度も俺に攻められて突破を許したので悔しそうにしているが、またなんかの作戦を立てているようだ。

普段クリーブランドに誘われて彼女の姉妹に混ざってバスケットをしている経験が上手く生かされている。

それにこの身体になってマッソーが減って貧弱になったと思っていたが、瞬発力が重要なこの競技では軽くなった身体が思った以上に動いて相手の動きよりも早く動けた。

「次で終わりね」

「ああ、油断するなよ?」

最後に最高の瞬間を迎える為に油断しない。

それは俺もフォーミダブルも一緒だった。

そしてディフェンスのポジションに戻ると、俺の前に熊野がポイントゲッターである俺のマークをする為に立っている。

「ふくん、やるじゃん」

「やるからには全力ってな」

「……へえ」

熊野がニヤリと笑った。

これは何か仕掛けてくるな?

そう思って警戒されなくらいに全身のマッソーに力を巡らせてマッソーセンスを発動していると

「じゃあさっこの試合でこれ以上動かなかつたら……熊野がサーブスしちゃうけどお……どうかな？」

体操服の裾をピラピラさせてへそチラしながら熊野がそう言ってきた。

だがしかし、マッソーをフル稼働中の俺にはそれは悪手だ。

何故なら煩惱は全て筋肉へのエネルギーへと変換し続けているのだから、逆にエネルギー補給をしてくれたのと変わらない。

煩惱は股間の息子では無く全て筋肉に変わっているのだ。

それにこの子はKAN—SENでは無く普通の学生で、精神年齢おじいちゃんな俺がそんな事したらポリスメン出勤案件だわ。

「魅力的な提案だが断っておこう」

「えっ？ノリ悪くい」

唇を尖らせながらそう言う熊野だが、こちらからも少し言いたい事がある。

俺は熊野の頭をポンポンと軽く叩くようにして撫でながら

「可愛いんだからそんなに自分を安売りするな。悪い男に捕まるぞ？」

「……っ!？」

そう言ったら熊野の顔が真っ赤になった。

あ、全身のマッソーに力を巡らせっぱなしでマッソーセンスを使っている状態だからオートでマッソー撫でしまった……

すぐに手を離すが熊野は胸を抑えながら潤んだ目でこちらを見ている。

「つい癖で……すまない」

「えっ？えっ？ええ!?な、なんなの今の………凄い胸がドキドキしちゃう……」

ギュッと胸の辺りを抱きしめるように悶える熊野に、その抱きしめる腕で形を変える胸にドキドキしっぱなしの俺。

実に素晴らしい自給自足だ。

おかげでリビドーエネルギー充填率120%まである。

「それじゃ熊野、勝たせて貰うぞ!!」

「これって恋?初めてだよ……でも今ならチャンスかも……特定  
の人が居ないって聞いてるし大丈夫、熊野ならこの人落とせるはず  
……ねえ、ライン教えて……って!?嘘!!試合始まってる!」

呆けている熊野を置き去りにして俺は駆け出した。

彼女には悪いが、フォーミダブルに勝利を約束しているのだ。

漢に二言は無い。

「正面から少し右にボールが来るわ!そこから左に抜ければゴールま  
で一直線よ!!」

「了解だ!!」

フォーミダブルの指示を受け、俺はそれを信じて走る。

ジャン・ボールと瑞鶴がそれに気がついて止めようとするが、ポ  
トランドが必死にブロックして通さない。

ボルチモアとの一騎討ちだ。

「来たね!」

「勝利は俺達の物だ!」

「負けない!勝つのは無理でも引き分けには持ち込ませてもらおうよ  
!!」

そう言ってドリブルしながら後退しようとする彼女に俺は追い  
続った。

さすが元の世界でもスポーツを幾つも掛け持ちする運動神経をし  
ているボルチモアだ、素早い身のこなしや時に股下にボールを通す事  
で俺からのカットをさせないように粘っている。

残り時間はあと20秒

これ以上は時間を掛けていられない。

この身体になって初めてだが、フルマッソーパワーで動かして貰う  
ぞ!!

「っ!?更に動きが!」

「取ったぞ!!」

「しまった!!」

更に速度の上がった俺に驚愕するボルチモアの隙を着いて、俺はド



リブルしていたボールを奪い去る。

そして一気に相手のゴールに向かって走っていく。

「いくぞ!!!」

「3ポイントじゃない!?レイアップシュート!?」

追いかけて来るボルチモアの声が聞こえる。

確かにこの近さならそう考えるよな?

だが俺が決めるフィニッシュシュートは別の物だ!!!

前世でよく読んだとあるバスケット漫画で尊敬するマッソーを持つ、ゴリゴリなキャプテンの必殺シュート。

あの技をリスペクトして名付けるその技は

マッソーダンク!!!

飛び上がってゴールリングにボールを叩き込む。

全身の筋肉を血管が浮き出る程に隆起させてぶち込んだボールは、一度地面に叩きつけられてそのまま天井近くまで飛んでいった。

そして少し遅れてカウントダウンを刻んでいたタイマーからのブザーが鳴る。

「俺達の勝利だ!!!」

掴んでいたゴールリングから手を離して床に降り立ち、後ろにいてであろうフォーミダブル達に勝利宣言をしながら振り返ると………体育館にいたクラスメイト全員がこっちに向かって来た?!

「悔しい!!でも凄いカッコよかった!!」

「凄いよ!!あそこから逆転するなんて本当に凄い!!」

「勝ったよ!!インディちゃんお姉ちゃん勝ったんだよ!!」

「凄いなお前は。またオレ達と勝負しような!」

「やはり貴方様は私の………うふふ♪」

「放課後頭をナデナデして下さいね♪」

「ラインを………ああもう、これじゃ話をかけられないじゃん!サイアクなんですけど」

聞き取れたのはここまで。

それ以上はもみくちやにされて一度に話すので聞き取れない。

しかも何故か密着してくる子も居るので柔らかい女の子の尻乳太ももが当たって俺の煩惱を掻き立ててきやがる。

「コラー!!皆授業中よ!離れなさい!!」

レンジャー先生が注意しているが、全く皆の耳に入っていない。

それどころかますますヒートアップして収まりそうにないぞこれ?  
?

マッソーを動かしていないので、煩惱で股間の息子が『ヒヤツハー!ファイバータイムだぜ!!』と暴れ狂いそうだ!!

誰か助けて!!マッソー!!

そんな心の叫びは聞き入れられる事は無く、結局騒ぎが収まったのは授業終了のチャイムが鳴った頃だった……

「先。パ。イ。イ。可愛い後輩がお昼ご飯を持ってきましたよ〜!」

昼休みの教室で昼食を持ってきていなかった事に気が付いて慌てていると、扉の方からジャベリンがやって来て大声でそう言ってきた。

「本当は朝のうちに渡そうと思ってたんですけどお……忘れてました。てへ☆」

「そうか、すまんありがとう」

俺の席までやって来てウインクしながらそう言うジャベリンにとりあえずお礼を言っておく。

しかし、俺の反応が面白くなかったのかジャベリンは頬を膨らます。

「……………なんか素っ気ないのは悲しいですよ」

「お前は俺にどうしろと……………」

そんな彼女に若干呆れながら俺がそう言うとジャベリンは袋に入ったお弁当を渡してくれた。

そして俺の腕を取ると

「今日はお天気が良いので外で食べませんか？きつと気持ちいいですよ？」

グイグイと引つ張ってきた。

確かに外は天気も良くてあまり風も吹いていない。

青空の下で食べるお弁当は美味しいだろう。

「了解だ。それじゃ行こう」

「はい♪」

俺が承諾するとジャベリンは元気よく返事をしながら俺の腕に自分の腕を絡めて胸に抱え込んできた。

ジャベリンって着痩せする方なんだな……………

制服では分かりずらい部分に少しドキツとしながら、ご機嫌なジャベリンに引き連れられて校舎を後にする。

そして中庭の空いているベンチを見つけてそこに二人並んで座った。

「は〜い♪今日のお弁当はサンドウィッチで〜す♪」

「美味そうだな」

「愛情たっぷり込めて作ったんですよ？絶対美味しいですから♪」

「それじゃあ、頂きます」

色んな具材の入った肉厚なサンドウィッチを頬張る。

正直横から覗き込むようにこちらを見ているジャベリンがいて食べにくいのだが、挟んであるシャキシャキのレタスやみずみずしいトマトに程よい硬さの卵、そして塩コショウがハッキリと効いたベーコンはとても美味しい。

しかもそれが3層も重なっていても食べ応えがある。

「美味しいぞジャベリン」

「わぁ♪良かった〜……………それじゃあ私も頂きま〜す」

味の感想を伝えるとジャベリンはヒマワリのような満面の笑顔を浮かべると自分の分のサンドウィッチを食べ始めた。

もちろん俺のとはサイズが違ってかなり小さい。

そんな量で足りるのか不安になるが、俺とジャベリンの身体の大き

さ的に丁度いいのかもしれない。

「弁当ありがとうなジャベリン」

「ふえ？いえいえいえ!!これはあの時のお礼なんですから、別にそこまでお礼を言うほどじゃ……………」

不意にジャベリンから気になるワードが出てきた。

この身体の俺はこの美味しいお弁当がお礼として貰える何かをしたらしい。

とりあえず俺には分からないのでそれとなく聞いてみるか。

「あの時？」

「はい、私と綾波ちゃんにラファイーちゃんとユニコーンちゃんとニミちゃんが一緒に遊んで、ガラの悪い人達に囲まれてどこかに連れて行かれそうになった時に先パイが助けてくれたじゃないですか」

「そうだったか……………」

「……………先パイのご両親の言う通りで喧嘩と筋トレ以外は気にならないって本当だったんですね？」

……………マジモンの学園ラブコメか？

そんな王道でベタ過ぎる出会いってなんだよ。

しかもこの身体の俺、筋トレは分かるが喧嘩って……………

どの世界の俺も戦いからは逃げられんようだな。

「皆でお礼をするって先パイに言ったら、別にいらねえの一言でしたし……………思い切って先パイの家に行って直談判したらご両親が凄く喜んで、先パイの世話を任せるって言って私達にお家の鍵を渡してそのままお父様の単身赴任先へ行ってしまいましたから……………」

「……………」

両親が家に居ない理由もここで判明した。

というか不用心過ぎるだろこの世界の両親。

普通なら有り得んわ。

「おかげで私達は役得ですけど……………」

「ん？」

「な、なんでもないですよ?!コホン、それで交代で先パイの家にお邪魔してお世話しに来てたんですけど……………迷惑でした？」

「いや、助かってる。何度も言うがありがとう」

「はう、その笑顔は卑怯です……と、とにかく、これは私達からのお礼なんですからしっかりと受け取って下さいね?」

何故か照れているジャベリンの言葉に俺はしっかりと頷く。

とうるか時々小声でなんか言ってるけどよく聞き取れないぞ?」

まあ自分の置かれていた状況がだいたい把握出来たからよしとするべきか……………

そう思いながら最後の一切れを口に放り込む。

美味かったサンドウィッチも、もう品切れだ。

「ご馳走様でした」

「お粗末さまでした♪」

食べ終わりの挨拶を済ませたら笑顔のジャベリンにそう言われた。

こうやって誰かと一緒に食事をする事はやはり良い事だな。

誰かと一緒にご飯を食べる、それだけで美味しい飯が更に美味しく感じられるのだから。

「先パイは食後の筋トレに行くんですよね?」

「ん?ああ、そうだな」

「それじゃあ私はお弁当を仕舞いに戻りますから、また放課後に会いましょう!」

「そうだな……………」

動く前に食後の俺に関する貴重な情報を得る事が出来たが、それ以上俺のマツソーアイに重要な情報が入ってきた。

それはジャベリンの指だ。

ジャベリンの指の何ヶ所かに絆創膏が貼ってある。

それに注意深く見てみれば、ジャベリンの目の下に薄く化粧で誤魔化されていたが隈が見える。

もしかすると今日のジャベリンは何かしらの理由で寝不足気味なのではないのか?」

「ジャベリン」

「はい?なんですか先パイ?」

ベンチに座ったままで弁当を片付け終わったジャベリンに声を掛



各陣営は互いのメンツを潰されないように意地を張り合う。

そして互いの足を引っ張り合う上層部に振り回されて混乱する末端が、前線ですり潰されていくのを書類上の数でしか見ていない。

まさに末期だ。

あの時に上層部を一掃出来たのはまさに奇跡としか言いようがない。

それもこれもKAN—SEN達のおかげだ。

だがそんな世界でも俺は帰りたい。

こんなにも平和な世界なんて俺には眩し過ぎるのだ。

平和を甘受する権利なんて……前世の時間に既に置き去りにしてしまった。

今の俺には持つ資格すらない。

そう思える程に俺達が戦いを終わらせた後に目指す尊い世界でもある。

「それにしても世界線が違うだけでこんなにも平和なんて……羨ましい限りだな」

順当に技術発展して娯楽が充実し、戦争が無い平和な世界なんて誰もが羨む最高の環境だ。

まあ、ここまでご都合主義が続けば怪しくもなってくる。

「そうは思わないか？オブザーバー」

これで確信した。

ヤツの名前を呼んだ筈なのにそれが音として出てきていない。

何の関係もないならば普通に発音出来ていたはずだ。

「あら？気が付いたの指揮官？」

「…………やはりか」

突如として空間に裂け目が現れて全ての時が止まる。

風に吹かれて揺れていた筈の草木はそのまま止まり、喧騒に包まれ

ていた校舎からの声は消えた。

恐らくこの空間は時折戦場で現れる鏡面世界と似たような空間なのだろう。

ならばアイツらの思うがままに操れるはずだ。

「俺をここに閉じ込めてどうするつもりだ？」

「何も、貴方が望む平和な世界へ招待してあげただけよ？ 貴方が望むならこれからも、そしてこれまでも……………」

まるでタコのような臙装を持つセイレーン オブザーバーが空間の裂け目から現れた。

その顔には笑みを浮かべて何を考えているのか分からない。

前世の記憶の欠片から知っている情報ではコイツはあらゆる世界線を観察して情報を取り纏めるのか役割であり、直接介入する事はあまり無かったはずである。

そんなコイツが介入してくるなんて一体どういうつもりだ？

「そんなに警戒されると傷つくわね……………でも貴方に会うのを楽しみにしていたわ」

「……………どういう事だ？」

近寄るヤツに警戒しつつも、俺はその発言の意味を考える。

俺に会うのを楽しみにしていた？

あらゆる世界線の情報を知るコイツなら俺の事なんて既に知っていそうな気もするんだが……………

「ふくん、なるほど。あの世界線が交わって出来た未来の英雄……………

アレらを打倒するカギになるかもしれない原石……………実に興味深いわ」

「原石？」

「いいえ、こつちの話よ。今の貴方が気にする必要は無いわ」

まるで煙に巻いたような話し方をするヤツに俺は更に混乱する。

俺を混乱させようとしているのか？

ヤツの出方がイマイチ掴めない今の状況で、闇雲に攻撃的になったりこちらから仕掛けるのは悪手だ。

引き出せるだけ情報を引き出して、この状況を打破するきっかけを



掴みたい。

「それで？観察は終わったのか？」

「うくん……………本来の目的は果たせなかったけれど、これ以上は効果を見込むのは難しいわね」

「目的？何をするつもりだ？」

これは重要な情報だ。

何らかの実験をここでするつもりだったようだ。

しかもKAN—SENではなく俺を使った実験。

色んな実験を繰り返し返して、人類を滅亡の危機から救う世界線を探すとされているコイツらの実験に俺は付き合わされていた訳なのだが……………

この学園ラブコメ染みた世界で俺の精神をこの身体に入れて何の実験をしていたんだ？

「つくづく貴方の精神には驚かされるわね。この世界に来て揺るぐ事なんてなかったのだもの……………もしかしてホモ？」

「誰がホモだ!!」

それは失礼過ぎるだろうが!!

俺はノーマルだ、ちゃんと女の子にドギマギする一般男性だぞ？

……………ただ手を出すような勇気の無い童貞なだけだ。

自分で言つててなんか悲しくなってきた……………

「ふくん、まあいいわ。そろそろ潮時ね……………コードGもここを見つけたみたいだし終わりね、貴方を元の世界に返してあげるわ」

「なんだと？」

コードG？

時々報告にも上がるセイレーンと敵対している謎の存在……………つていうか前世の情報通りなら滅んだ世界の何らかの力に目覚めたエンタープライズらしき存在の事か？

ますます頭が混乱してきました。

いったい何が起こっていたんだ？

「それじゃあ指揮官、また会いましょう？」

「ま、待てー！」

「……………貴方の行く末に武運長久あらんことを」

小さく手を振るオブザーバーはそう言つて何も無い空間からモニターを呼び出すといくつかキーをタッチすると俺の意識が遠のいていく……………

慌てて立ち上がろうとするが、既に身体に力が入らない。

……………意識が……………消えて……………

……………クソ……………が……………

「……………ん……………指揮官……………もう、起きてく!!」

「うう……………ここ…は……………」

「あ、やっと起きましたね指揮官。もうすぐ晩御飯ですよ?」

目が覚めるとドアアップで映るジャベリン。

その姿は制服ではなく、いつものノースリーブのワンピースに髪を結い上げた姿。

身体を起こして辺りを見るといつも本を読んでいる談話室のソファアーに眠っていたようだ。

「……………どのぐらい寝ていたんだ?」

「えつとく……………だいたい4時間くらいですな?」

顎に指を当てながら答えるジャベリン。

そう言われて壁に掛けられている時計を見ると、その針はすでに夕方の方の18時を過ぎた所を指していた。

確かにもう夕食の時間が近い。

「起こしてくれてありがとうジャベリン」

「ふえ?えへへー♪それほども〜♪」

頭を搔きながら笑うジャベリンに俺も釣られて笑う。

そして全くの無意識にその頭を撫でた。

「ほにゅ!?ー!ーっ!」

「あ」

無意識に発動したマツソー撫でを何故か更に使いやすくなった状



「—————」

「ジャベリン死んだ？」

「もうジャベリンは帰って来れないのです」

「縁起でもない事言わないでくださいラファイに綾波!!」

あーでもないこーでもないと騒がしくジャベリンを助けようと四苦八苦する俺とニーミに、諦め姿勢のラファイと綾波。

廊下からはユニコーンに呼ばれたベルファスト達が走ってこつちに来る音が聞こえる。

なんでこうなったんだ……………

それもこれもセイレーンってヤツのせいなんだ!! (八つ当たり)

バツキヤロー!!!

ちなみに騒動が収まった後、めちやくちやベルファストに怒られました。

~~~~~

「あれれえ？指揮官に会いに行ったんじゃないのお？」

「そうね、会えたけど目的は果たせなかったわ」

そこはどこにも無い空間。

空中に浮かぶモニターには様々な世界線のKAN—SEN達による戦闘や日常風景が映し出されている。

その中でもオブザーバーはとある一つのモニターを食い入るように見つめていた。

それを見ていたセイレーン戦艦 ピュリファイアーはため息を吐きながら肩を竦める。

「指揮官の遺伝子情報を手に入れるって作戦だったのに……………若い肉

体に入れられて若くて色んな美少女に囲まれてるのによく堕ちなかつたよねえ〜」

「若い肉体ならリビドーを抑えられなくなると思ったのに……………失敗したわ」

彼女達は残念そうに実験の結果について話す。

どの世界線においてもあの指揮官の遺伝子情報は手に入らない。

彼自身の情報なら手に入るのだが、それではただのクローンに過ぎず人類存続の為にはならないのだ。

その為にも遺伝子情報を手早く手に入れる方法として性欲が顕著に現れる学生時代の肉体を用意してみたのだけれども……………失敗した。

「そもそもクローンから採取するのも有りだって私は言ったんだけどね……………アンタがそっちの作戦の方が良いって言ったからこんなに長引いてるんだけどお?」

「確かにそうね。でも貴女も知ってるでしょう?」

「……………クローンの遺伝子情報じゃあの力は再現出来ない」

「そういう事よ」

何故かあの超人染みた力を継承した子供は誰一人として生まれない。

何度も実験した結果なので既に分かっていることなのだが、諦めきれないのだ。

「ああもう面倒くさいなあ!なんで人類最高クラスの遺伝子情報なのにそれを受け継げないのかなあ!!」

ピュリファイアーはガリガリと頭を掻きながら苛立ちを隠そうともしない。

唯一残された方法が今まで観測してきた様々な世界線に居たあの指揮官が結婚し、産ませた子供のみを発現しているという情報のみ。

つまりは指揮官が愛した人との愛の結晶しかその力を継いで産まれてこないという事になるのだ。

「それもまた人間の情報だけでは解析出来ない不可思議な現象なのでしようね」

「…………そんな不確定要素がアレらと戦うカギになり得るってのがまた面倒だわ〜」

クスクスと笑うオブザーバーに呆れて頭の後ろで手を組むピュリファイアー。

アレらと戦う上で絶対に外せないキーマンとなる指揮官の子供。

KAN―SENと共に前線で戦い続けるやり方は親譲りで、驚異的な超人的身体能力を備えた存在。

たった1艦隊指揮させるだけでアレらの8個師団を相手になんと半年も持ち堪える脅威の粘り強さを見せる破格の存在なのだ。

こちらからすれば是非とも来るべき日に向けて何人もの子供を作って貰いたいのだが…………

「今まで進めてきた実験の中で、あの世界線の指揮官が一番私達の迷惑に乗ってくれそうなんだけどなあ……………あんな無茶なクーデターも裏から少し支えてさあ、せっかく母港にあれだけのKAN―SENを集めてるのにねえ〜」

「ええ、でもあとひと押しといった所かしら?」

「早く子供たくさん作ればいいのになあ〜」

「ふふふ、慌てないのよ?ほら、これを贈っておけば勝手に事態が進むわ」

オブザーバーは小さな黒い箱を取り出して手の中で弄ぶ。

それが何なのか気が付いたピュリファイアーはお腹を押さえて笑いだした。

「確かにそうだね!それを使えば一気に大騒ぎだよ!!」

「……………さあ未来の英雄達が産まれるのを見届けましょうか?」

「うんうん、楽しみだよお!!」

彼女達は嗤う。

過ぎ去りし過去や未来を踏み越えて。

それが例え倫理や人道に反していようとも。

それが人類の存続に必要な事である限り……

第22話 デュエルとハーミーズ 追記あり

指揮官です。

今日は久しぶりにカードゲームで遊んでいます。

業務を終わらせ筋肉との対話が済んだ所で、とあるKAN—SENに捕まって寮の自室に連れ込まれてしまいました。

まあ、彼女といつかカードゲームを教えてもらうって約束していたし、暇を持て余すよりは有意義な時間となるだろう。

「そうだ指揮官、そのタイミングでそのカードは発動する条件が揃うんだ」

「ほお、色んな組み合わせがあるもんなんだな」

「そうなんだ！これだからデュエルはやめられないんだよ!!」

「……………奥深過ぎて理解するのに時間が掛かりそうだ」

両手にカードを持って元氣いっぱい笑顔を俺に見せてくれるのは、ロイヤル軽空母 ハーミーズ。

彼女は母港で一番のカードゲーム好きであり、この母港で一番のカードゲームマスターだ。

艦装も前世のアニメや漫画で見たようなカードゲームをモチーフにした物で、そこから繰り出される艦載機からの攻撃は中々にトリックなものである。

ちなみに今ハーミーズに教えられてやっているカードゲームは母港でも流行っており、陣営の垣根を越えて広まっているそうだ。

前世の記憶の欠片に覚えがあるとあるカードゲームに似て、複雑な組み合わせがあり、それが彼女の心を捕らえて離さないのだろう。

「この前天城とデュエルした時はまるで全てを読み切られたチエスの様な戦いだっただけ……………あの時にこのカードが手札に来なかつたら私はそのまま負けていたよ」

「天城らしいな……………」

ハーミーズは切り札らしいカードを手でデュエルの時を思い出しながらしみじみとそう話す。

たぶんその手のやり手としては神通や赤城にベルファスト、そして普通に戦ったら母港きつての幸運のエンタープライズや時雨に雪風がかなり強そうだな……………

勝負は時の運とも言われているし、なかなか手強そうだな。

「ハーミーズは色んなKAN—SEN達と勝負してるから色んな組み合わせを知っているんだな」

「もちろん。皆自分のテーマを決めてデッキを組んでるから、どんな展開が起きるのかデュエルの度にワクワクするんだ」

「なるほどな」

キラキラとした目でそう語るハーミーズはとても楽しそうだな。

心の底からこのカードゲームを愛している彼女だからこそ言える言葉なのだろう。

そこまで楽しそうにされていたら俺も一度勝負して見たくなってきた。

「デッキを組んだら一勝負お願いできるか？」

「もちろんだよ！指揮官の組んだデッキとデュエルするのは楽しみだ！！」

「よし、少し待っていてくれよ……………」

ワクワクを隠しきれずに両手を広げて歓喜を表すハーミーズに、釣られて俺も笑顔になりながらデッキを組んでいく。

とは言ってもハーミーズの方がこのゲームに関しては経験が豊富であり、最初から勝てるとは思っていない。

しかし、勝負をするからには勝ちをもぎ取りたいものだ……………
「……………これは俺もハマるかもな」

既に燃えつつある闘争心に苦笑しながらカードを選んでデッキを構成していく作業は思った以上に早く、そして満足できる完成度だった。

全身の鍛えてきた筋肉から感じられるマツソーセンスを駆使して組んだデッキは……………負けない！！

この母港の頂点という彼女に挑ませて貰うぜ！！

「まあこうなるよなあ……………」

「私のターンはまだ終わってない!!手札から特殊召喚!ソードフィッシュ818中隊!!」

フィールドには俺の召喚したリアンダー級軽巡洋艦1枚に伏せカードが1枚と手札が2枚。

対してハーミーズは手札こそソードフィッシュを召喚した為に無くなってしまうてはいるが、バラクーダT3が1枚にさつき召喚したソードフィッシュ818中隊が居る。

しかもフィールドカードの油圧式カタパルトを発動しているので、俺のリアンダー級軽巡洋艦の防御力を攻撃力が上回っているのだ。

「バトル!!バラクーダでリアンダー級軽巡洋艦を攻撃!!」

「させるか!伏せカードをオープン、逸れる攻撃!!このカードの効果でバラクーダの攻撃ではリアンダー級軽巡洋艦を破壊できない!」

「やるな指揮官…………でもまだソードフィッシュが残っている!!行け、ソードフィッシュ!!」

「くっ!!リアンダー級軽巡洋艦が……………」

なんとか攻撃を凌いだが、俺の場には盾となるカードが消えてしまっていた。

ここで手札を全て消費した彼女だが、俺の手札の2枚がずっと使われていないのを知っているので、条件が揃わず使用出来ないカードである事を知っているから余裕の構えだ。

「よく持ち堪えたな指揮官。でも次で終わらせてあげるよ…………ターンエンドだ!」

「ぬう…………防戦一方か」

正直に言うとは勝てる見込みが無い。

手札のカードはある特定のカードに対しての効果を発揮するカードなのでこの現状では使えない。

……………ここまでなのか。

諦めなつつもデッキからカードをドローしようとする、余裕のハーミーズが腕組みしながらこちらを見ている。

「どうした指揮官？デュエルは最後まで分からないものだよ？」

「……………確かにそうだがなあ」

不敵に笑う彼女に敗戦濃厚な俺は肩を竦めた。

初心者俺とこのカードゲームの頂点にいるハーミーズでは経験が違い過ぎる。

そんな諦めムードの俺にハーミーズが笑いながら

「よし、指揮官がやる気を出す為に一つ賭けをしよう」

人差し指を立てながらそう言ってきた。

俺は今更何を言っているのだろうかと首を捻っていると彼女は

……………

「もしデュエルで指揮官が勝てたら、私の唇と胸を好きにしてもいいよ？」

めっちゃ爆弾発言だった。

西洋人形のように整った容姿に小山ながら服を押し上げお胸様。

そんな彼女が唇に右手の指を当て、左腕で胸を軽く寄せながらイタズラっぽくそう言ってきたのだ。

股間の息子大歓喜である。

煩惱が湧き出て思わず自分の分身を殴りつけて沈静化しようかとも考える程の爆弾発言だった。

挑戦的な視線で俺を見つめるハーミーズに俺の心は既に臨戦態勢だ。

「いいのかそんな賭けをして」

「そのくらい発破をかけないと指揮官は全力にならないかもしれないでしょ？」

……………これは分かせてやらないとな？

煩惱をエネルギーに全身の筋肉を隆起させてフルマッソーパーワー状態に移行する。

俺の信じるマッソー神に祈りを捧げてデッキの一番上のカードに指を掛けた。

マッソーセンスで選んだカード達で組んだこのデッキが……マッソー神を信じて筋肉を鍛えてきた俺を裏切る訳が無いだろう!!

「俺のターン!!……マッソードロ!!」

デッキからカードを勢い良く引き抜く。

そして見た。

勝った!! (確信)

「俺は手札より見習い指揮官を召喚する!!」

「そのカードは……」

攻撃力も防御力も無い一見するとただの雑魚カード。

だが、そのカードが俺の勝利を呼び込むキーマンなのだ。

「指揮官がそのカードをデッキに入れてるなんてビックリしたけど……そのままじゃ私のカード達には勝てないよ!!」

「それはどうかな?……このカードはターンエンド毎に成長するカードだ。……だがそれを短縮する方法はある!!」

「なんだって!？」

驚愕するハーミーズを後目に俺は今まで使えなかったカードを、手札から彼女に見せた。

そのカードを見た彼女は更に驚いた表情を浮かべる。

「手札より特別昇進礼状を発動!!見習い指揮官を墓地に送り、デッキから熟練の指揮官を特殊召喚!!」

デッキから現れた新たなカード。

それは先程の見習い指揮官が成長した姿。

見習いから卒業して頼もしくなった指揮官は俺に勝利の鍵をその手に呼び込む。

「熟練の指揮官の効果を発動!デッキから1枚軍艦カードをフィール

ドに特殊召喚する!!」

「くっ！ここにきて特殊召喚するのか!!」

俺はデッキから切り札として入れていた”あのカード”を取り出してそのままフィールドに召喚した。

そのカードを見た彼女は目を向いて更に驚く。

「来い！軽空母ハーミーズ!!」

「わ、私?!」

「そうだ、お前ならこのカードの効果は知ってるよな？バラクーダを攻撃!!この瞬間、ハーミーズの効果を発動する。攻撃の際にコイントスを行い、表だった場合は攻撃力を2倍にする!!」

「そんな……ここにきてギャンブルで攻めてくるなんて……」

狼狽える彼女に俺は笑みを浮かべながらコイントスを行う。

俺を導くマツソー神が……俺に幸運を授けてくれたならば最早迷いはしない。

親指で弾き、クルクルと回りながら飛んだコインは俺の手の甲に落ちる。

コイントスの結果は……当然表だった。

「よし！バラクーダを撃墜!!」

「で、でもまだソードフィッシュが残っている……」

「俺のハーミーズのターンはまだ終わってないぜ？」

「な……に……?」

固まるハーミーズに手札に残る最後のカードを見せつける。

それは使い所を考えさせられて結局今の局面まで使わなかったカード。

「速攻カードを発動！再出撃命令!!このカードを発動して宣言したフィールドにいる軍艦カードは再度攻撃をする事ができる!!」

「なあっ?!」

「ハーミーズでソードフィッシュを攻撃！この瞬間に再びコイントスをするぜ!!」

再び親指で弾くコイン。

ノリに乗っている今の俺はマツソー神の加護に後押しされている。落ちてきたコインが手の甲に乗った瞬間にハーミーズが更に狼狽した。

「おも…………て…………」

「そうだ！ソードフィッシュを撃墜!!」

これで彼女のフィールドはガラ空きだ。

そして攻撃権が残るのは…………俺の熟練の指揮官のみ。

「覚悟は良いかハーミーズ？」

「そ、そんな…………あそこから私が負けるなんて…………」

驚きを隠せない彼女には悪いがトドメを決めさせて貰おう。

……………ついでにあのセリフも先に言わせてもらうか。

「熟練の指揮官でダイレクトアタック!!ガツチャ！楽しいデユエルだったぜ!!」

「……………負けた」

呆然とするハーミーズに俺は人差し指と中指を立てて額に軽く当てそのまま彼女に向ける。

かの有名なガツチャ教の教祖様のガツチャポーズだ。

……………すげえ満足感だなこれ。

「へへ、逆転勝利つてのは気持ちが良いもんだな」

「……………」

今回のMVPでもある指揮官シリーズとハーミーズのカードを手に取りながら俺はデッキに戻す。

このカード達とマツソー神に導かれて鍛え上げた筋肉が無ければ勝てない戦いだった。

おかげで俺もこのゲームの面白さが充分に理解出来たよ。

「ん？ハーミーズ？のわっ!？」

「……………賭けは賭けだからね」

何も喋らないハーミーズを不信に思った俺が彼女の方を見ると……………いつも着ている上着を脱いでブラウスのボタンを外している
最中だ!!

……白と黒のストライプな柄のブラってなかなか色っぽいんですね？

いやそうじゃなくて!!

「お前……」

「私が言い出した賭けなんだ……勝者である指揮官には賭けの報酬を渡さないと……ね？」

白い肌がお臍まで見えてきた。

スレンダーだと思っていたお胸様は予想よりも大きく、そして何よりもハーミーズの恥じらいながら服を脱ぐという行為に俺の息子は彼女とデュエルしたがってしまっている。

あ、ヤバい……予想以上にヤバい。

普段は男勝りな女の子にふとした瞬間に異性である事を見せつけられる。

これはかなり胸に来る。

普段は見せないような上目遣いや紅潮する頬に心臓がバクバクして止まらない。

白い肌が羞恥の為か仄かに赤色が混じり出す光景なんて童貞の俺には生唾もんだ。

最後のボタンを外し終えた彼女は少し躊躇していたが、ブラウスを脱いで……それ以上はアカン!!

「し、指揮官!？」

「それ以上はダメだハーミーズ」

俺は自分の着ていた服を一瞬で脱いで彼女の肩に掛ける。

……股間の息子が猛抗議しているが、こんなに恥ずかshがっているのに続けさせるなんて俺には出来ない。

確かにこの状況は美味しいし、眼福で心がピヨンピヨンする。

だがハーミーズを傷つけてまでそれを堪能するのは間違っていると思うんだ。

「もつと自分を大事にしろ、可愛いお前が傷つくような真似はするん

じゃない」

「あ、え……」

「またデュエルしような？」

困惑する彼女の頭を軽く撫でた俺はデツキを手にして部屋を後にする。

デツキを見つめながら寮の玄関を出て外に出た。

そして日が傾いた空を見ながら考える。

さて……………このムラムラどうしよう？

またトレーニングルームでマツソーと対話するか!!

恥ずかしがるハーミーズの背徳感は……………最高でした。

~~~~~

指揮官が出て行った扉をただ呆然と見つめ続ける。

肩に掛けられた上着はとても暖かく、心地よい香りがした。

大き過ぎる上着に恐る恐る袖を通すと腕の長さが足りずに途中で折れてしまう。

「……………大きいんだな指揮官って」

あのデュエルで私は負ける気が無かった。

あの状況で逆転するなんて思ってもいなかったし、あの賭けにしたって何度かデュエルをする為の方便で指揮官に最後まで全力で楽しんでもらおうと思っただけだった言葉だった。

「暖かい……………すごく暖かい」

指揮官の上着には彼の温もりが残って私を暖める。

あそこまで啖呵を切って負けた瞬間に頭が真っ白になって……………気が付けば自分で服を脱いでいた。

初心者指揮官にいきなり逆転負けしたのは自分の中でも余程ショックだったらしい。



気が付いた時には殆どボタンを外していたし、もう後戻りは出来ない  
いと覚悟を決めていた。

「でも指揮官は止めてくれたんだ」

恥ずかしさで自暴自棄になっていた私を止めてくれた指揮官は  
……とてもカッコよくて胸が痛いくらい高鳴って激しく動き続け  
る。

こんなときめいたのは初めてで、カードと触れ合っている時以上  
の興奮に包まれていた。

「こんなの……止められない……無理だ」

目に入ったダボダボの袖を顔に近づけて大きく息を吸う。

すると指揮官の良い香りが鼻から入って心臓が更に高鳴るのを感じ  
る。

「恋をするって……こんな感じなのか」

もっと指揮官の事が知りたい。

カードを共に語り合い、デュエルをしてもっと絆を深めたい。

そしてその先の未来で……

「伴侶になりたい……指揮官と一緒にになりたい!!」

身に纏う指揮官の上着を抱きしめながら想いを言葉にする。

この想いは……このデュエルは始まったばかりだ。

私の心に火を付けた相手はこの母港で一番カッコよくて誰もが恋  
焦がれる頂点。

ならば挑ませて貰おう。

私のデュエリストとしての力を存分に発揮して勝たせて貰うよ!!

## 第23話 お見合い写真とネルソン

指揮官です。

今日は自室にて上の服を脱いで逆立ち指立て伏せを重点的に行っていきます。

指立て伏せは握力が相応に無いと出来ないトレーニング方法であり、俺の鍛え上げられた前腕の筋肉を輝かせる素晴らしい筋トレ方法だ。

「4444……4445……4446……」

規定回数は500回。

500回が終わったらインターバルを挟んでまた500回する合計3000回が今日の目標である。

それに今日は少し頭を冷やす為にも一人でゆっくりと筋肉との対話をしたかった。

「497……498……499……500……ふう、こんな所か」

ゆっくりと足を降ろして立ち上がり、タオルで身体の汗を拭う。

そしてタオルをテーブルに置くと俺の頭を悩ます”ソレ”が嫌でも目に入った。

「はあ………怨みますよ閣下」

俺の頭を悩ませる”ソレ”は、統合参謀本部から直接こちらに現アズールレーン元帥閣下が足を運んで持って来た物だった。

その出来事は少し前の時間に遡る。

「久しぶりだね指揮官。相変わらず元気そうだ」

「閣下こそお元気そうで」

見た目はロイヤルの好々爺といった風貌の閣下だが、大将時代は魔窟と言われた参謀本部の頂点に立つ傑物と言われる程に力を持った方だ。

そんな閣下と母港から少し離れた出島にある迎賓館の一室で、ソファに座りテーブルを挟んで顔を合わせる俺。

扉のすぐ外ではシェフィールドとベルファストが警護している。

「うむ、こんなに美味しい紅茶は久しぶりだよ。いつも飲める君が羨ましい限りだ」

「恐縮です」

ベルファストの入れた紅茶を味わい深そうに飲む閣下の好評に俺はその言葉だけを返した。

この爺はなにか話す度に重箱の隅をつつくようなやり方で、失点を見つけて相手を追い詰めるのが得意な方だ。

自分の発言でこの母港やKAN—SEN達に迷惑を掛けるかもしれないかと思うと、安易に話す事は出来ない。

「そんなに警戒しなくとも私は何もしないさ」

「……………そのやり口で俺はここに着任させられたのを覚えていますか？」

「ああ、そんな事もあったかな？歳のせい記憶が定かではない事があつてねえ……………どうだったかな？」

「……………」

微笑みながらそんな事を言うこの爺に俺は苛立つが、ここでそんな苛立ちを表にしても冷静さを失うだけでそこを手玉に取られてしまっただけだ。

あの時この爺に前線で続きで疲れたろうからしばらく後方勤務に着かないかと言われて、頷いた結果この母港で男は俺一人なんて事態に陥ってしまった。

同僚や部下達も丸め込まれたのか笑顔で俺を送り出したし……………もしかして俺って人望が無かったのだろうか？

「……………はあ、それで今日はどのようなご要件でこちらに？参謀本部から重要な物をお持ちだとか？」

「そうなんだよ。紅茶が美味しくて忘れる所だった」

「……………」

早く終わらせる為に話を振ってみたらわざとらしい身振りで、肩を竦ませながら紅茶を飲む閣下。

……………やっぱり俺この爺の事好きになれんな。

更なる苛立ちを抑えつつ俺も紅茶を飲んでみると、閣下は床に置い

ていたお膳位の大きさのスーツケースを取り出した。

何やら取っ手の横に鍵穴が付いており、両端にはダイヤル式の鍵までついてある嚴重な封印だ。

「指揮官、これは重要な物だ。君達の母港において今から渡す物が、どれだけ重要な物であるのかしつかりと見て確認して欲しい」

「ゴクリッ……………」

普段は目を閉じているようにも見えない細目を開いてこちらを見る真剣な表情の閣下に、俺もただ事では無いと思わず生唾を飲み込む。

これは本気でヤバイ物かもしれん。

例えばセイレーンの秘密兵器の計画書とか、秘密裏に造られていた前線基地の場所を記した地図かもしれない。

俺はスーツケースが開くの待った。

「……………よし、開いた。コレだ」

「こ、コイツは……………」

閣下がテーブルの上に置いたスーツケースの全ての鍵を開けてこちらに中を見せる。

俺はその中身の物に見覚えがあった。

スーツケースの衝撃吸収用の素材の上に存在する小さな黒い箱。

英語で *Azur Lane* (アズールレーン) と銀色の文字が筆記体で書かれた箱と小さな封筒が一つ。

「結婚指輪だ。それも普通の結婚指輪ではない……………KAN—SENとの絆を結ぶ事で力を発揮する特別な指輪だ」

「……………」

驚きに言葉が出ない。

前世のアプリ内で諭吉を林檎に変えていくつも購入した指輪がそこにある。

アプリ内ではKAN—SENとの特別な絆を結んで能力を向上させるアイテムという位置付けだったのだが……………

「この指輪は君とKAN—SENを繋ぐ特別な絆となるものであり、この指輪を填めたKAN—SENはその力を大きく増す事が出来る」と技術局から説明があった」

「そうですか……………」

「KAN—SENは人の想いによって生まれた存在だと私も聞いてる……………しかしその想いの強さによって力の幅が広がるというのも知っているかな？」

「多少は……………」

確か前世の記憶では戦果を挙げて活躍したり、知名度の高い船ほど能力が高いのがアズールレーンというアプリ中での情報だったはずだ。

独自の解釈ではあるが、人の思いによって生まれた彼女達は、活躍したり有名である程に人の思いが集中して強力な存在になるのではないかと俺は考えている。

「この指輪は君の想いを直接力に変える物なのでは無いかと私は考えているのだよ」

「俺の想いを……………」

つまりこれはKAN—SEN達が更に上を目指す為には必須の重要アイテムという事なのだろう。

俺と絆を結ぶ事で限界を超えろというセイレーンに対して大きな力となるアイテム。

「今は一個だけだ。これだけしか作れなかったと技術局の連中が嘆いていたよ」

「一個だけ……………ん？」

あれ？

俺の耳がおかしいのか？

今とはか言つてなかったか？

ここまで丹念に説明して普通は一個しかないとかいう貴重な物つてのが普通じゃないの？

「あ、あの閣下？今は一個だけと言うのはいったい……………」

「ああ、すまない。説明してなかったな。この指輪は今君の母港にいるKAN—SENの分は量産するそうだ」

「へ？」

「喜べ指揮官、重婚しても大丈夫だぞ？」

開いた口が塞がらねえ……………

この爺サムズアップとウインクしながらとんでもねえ事を宣いやがった。

こんなお茶目ってかイラつくサムズアップとウインクは初めてだわ!!

「いや重婚って……………」

「む? 知らんのか? 君が誰と最初に結婚するのかウチの参謀本部で賭けまで起きているぞ?」

「な

ん

じゃ

そ

りやああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「ちなみに胴元は君の同僚と部下達だったかな?」

マジで俺って人望なかったのかもしれない。

同僚と部下達に賭けの対象にされてたなんて……………

というかマジでありえねえわ……………

「とまあふざけるのは……………ここまでにしよう」

「まだ何か?」

まだあんのかよ。

正直もうこの爺の話聞きたくないんだけど?

ガツクリと肩を落として爺を見ると何やら大きな封筒をこちらに

差し出していた。

今度はなんだ。

「……………開けたまえ」

「はい……………え?」

そこに入っていたのは複数枚の女性の写真。

しかもそれぞれ人種が違う綺麗な女性ばかりだ。

写真から爺に視線を移すと真剣な表情を浮かべている。

「これはいったい何でしょう?」

「お見合い写真だ。人間の方のな」

意図が読めずに聞いて後悔した。

どつかで見た事ある女性達だと思っただが、セイレーン大戦の戦勝パーティで1度見た各陣営のお偉いさん達のご令嬢達の写真だ。

つまりこれは……………

「政略結婚ですか……………」

「何も不思議な事ではあるまい？君はアズールレーンに残された最後のKAN—SENを指揮する指揮官だ。それに大戦の英雄にして上層部とセイレーンの癒着を暴き、世界を巻き込んだ戦争を未然に防いだのだぞ？誰だつて繋がりを持ちたいと思うはずだよ」

「彼女達の意志を無視してですか？」

「皆好意的だそうだが？」

その言葉に俺は鼻で笑う。

徴兵された俺の時と一緒にだ。

セイレーンに家族を奪われて戦う決意をした志願兵。

捨て駒の俺達を大衆に説明して兵を集める時に使われたプロパガンダと一緒にだ。

「それで俺が納得すると？」

「納得すると思う愚か者もいるという事だ。私としては君が断るのを確信しているし、彼奴らがあまりにもうるさいから、持って来るだけ持ってきたにすぎんよ」

そう言つて爺は紅茶を飲む。

まったく、嫌な世の中だ。

放つてくれたら勝手に戦うだけなのにな。

「そうは思わずに変な勘繰りをする馬鹿共もまだ多いという訳さ。例えばの話だがね？この世界唯一のKAN—SENの指揮官であり、大戦時に捨て駒同様に使い潰されそうになった君がKAN—SEN達と人類を見限つてセイレーンと共に人類を攻撃するのではないか……………なんてね？」

「バカバカしい」

「真剣にそう思う輩がいるという事だ」

思っている事が顔に出ていたのか爺は俺にそう語る。

爺自身もあまりの馬鹿らしさにこの話に関しては乗り気ではないらしい。

「私からは一つだけ」

「……………何でしようか？」

爺は紅茶の入ったティーカップを机に置いてこちらを見つめる。

姿勢まで正して見つめる視線は鋭く、そして今までの雰囲気すべて霧散させる程の圧力を持って何かを俺に伝えようとしているのが分かった。

俺も居住まいを正してその視線に答えるように見つめ返すと

「……………あのクーデター以来KAN—SEN達は我々人類を庇護の対象としては見ているが……………信頼も信用もしていない。KAN—SEN達が全てにおいて信ずるに値する存在は君だけだ」

「それは……………」

「幾人もの指揮官候補生が、誰一人としてKAN—SEN達から受け入れられなかったのはそういう事だ。つまり私達人類は信じられない存在に命運を託した状態なのだよ」

「……………」

確かに俺以外の奴が指揮官になったという話を聞かない。

つまりはそういう事なのだろう。

この世界のKAN—SEN達は人類を信じていない。

世界線を観測するセイレーンにとって良くない兆候だと思うのだが、奴らが介入する気配も無いので少し不審に思っていた所でもある。

……………もしかするとこの世界はセイレーンが見捨てた世界線なのかもしれないな。

「ふう、何とも嘆かわしい事だ。背中を預ける存在に後ろから撃たれる覚悟もしなければならいなんてね？」

「閣下……………」

「それでは私は参謀本部に戻る。……………見目麗しい彼女達の最初に誰と絆を結ぶのか期待してるよ」

「最後にそれかよ!!」



やっぱりこの爺は嫌いだわ!!

童貞の俺にそんな難易度の高いプレイを期待すんなや……………てか賭けの対象はやめろ!!

「それではな指揮官」

「二度と来るな!!」

「アツハツハツハツハ……」

「つたく……………傍迷惑な爺だ……………」

扉を抜けた先にまで笑い声が聞こえた。

たぶんそのまま帰って行ったのだろう。

「ちきしょう……………こんなむしゃくしゃする時は筋トレだ!!」

指輪とお見合い写真をスーツケースにぶち込んで鍵を閉めたら、ベルファスト達に片付けをお願いしてそのまま私室へと戻った。

そして結婚指輪の箱を取り出して誰に渡すべきなのか考えていたが、あの爺の事を思い出して更にむしゃくしゃしたので筋トレを始め、て今に至る。

「あの爺……………ふつ……………ホントに巫山戯んなよ……………ふつ……………童貞の俺には……………ふつ……………難易度高過ぎて……………ふつ……………無理だつての!!」

現在逆立ち指立て伏せラストスパート。

悶々した考えのまま爺に文句を言いつつ始めたら、あつという間に終わりそうだ。

というか恋どころか女の子に仕事以外で話し掛けるのに、勇気を振り絞る必要がある俺にいきなり結婚指輪はぶっ飛び過ぎだろ?」

「ふつ……………お見合い写真まで……………ふつ……………渡されても……………ふつ……………どうしろってんだ!!」

おまけにお見合い写真の方もなかなか気合いが入っており、どのご令嬢も着飾ってバッチリメイクを施して凄まじい気迫が感じられた。

そんな肉食獣染みた視線なんて赤城とか愛宕とか大鳳位でお腹いっぱいだわ。

「……………ふつ……………たまに……………ふつ……………ジャベリンも……………ふつ……………凄い目で……………ふつ……………見てくるよな……………」

あのフルマツソーパーワー撫でによって快樂地獄に陥ったジャベリンが最近物欲しそうな目で俺を見る事が結構ある。

というか駆逐艦を見ているアーク・ロイヤルばりに、はあはあと息を荒らげて内股気味になるのはちと扇情的過ぎるんじゃないかなろうか？

だいたい二人きりになった時に、グイグイとお胸様を押し付けるように抱き着いて俺の手を握ったり撫でたりとしているのだ。

「クソっ……筋肉に集中……ふっ……しなきゃ……ふっ……」

雑念を捨てて逆立ち指立て伏せで一番鍛えられていく前腕の筋肉に集中する。

前腕屈筋群と前腕伸筋群が交互に伸び縮みして鍛えられていくのが分かるぞ!!

負荷をかけられて更に強い筋肉に変わっていくんだ……堪らんな!!

「あんな物に煩わされて筋肉との対話に影響を与えられたら敵わん。とりあえず指輪は隠しておくか……」

逆立ち指立て伏せを終了した俺は指輪をスニーカーに仕舞って、私室に備え付けられてある大型の金庫にスニーカーそのまま放り込んだ。

童貞の俺にプロポーズだなんて無理だわー。

まずは……お知り合いになってからで……

「ちよつと指揮官!!居るなら返事なさい!!」

大きめのノックと共にそんな声が聞こえてきた。

……たぶんこの声はロイヤル戦艦 ネルソンだな？

ロイヤルに相応しい弩級お胸様にガードしてんのかよく分かんねえ北半球丸出しのタイト超ミニスカノースリーブワンピースに赤色の上着を着たツンデレ美女……属性盛り過ぎじゃないか？

改めて彼女の格好を考えるとヤバ過ぎんだろ？

「もう！居るのは分かってるんだからね?!入るわよ!!」

「え？あ、ちよ!？」

「失礼するわよ……………指揮官、その写真は何？」

お見合い写真を出しっぱだったんだなこれが……………

しかもネルソンに見られるとはなあ……………

まあ仕方ない、変に言い訳しても悪化するだけだろうから指輪の事を隠して写真の説明をするか。

表情を変えずにできるだけ無関心を装うんだ、そうすれば俺が乗り気では無いと思ってくれるはずだろう。

「その写真はな、俺宛てのお見合い写真だそうだ」

「お、お見合い写真？」

「そうだ。元帥閣下から直接渡されて困っていたんだ……………お偉いさん達のご令嬢達を写したお見合い写真だとき」

「……………」

俺は肩を竦めてヤレヤレと首を振る。

よし、これで俺が困っているとネルソンに印象付けられたはずだ。

このまま断るって説明すれば大丈夫……………あれ？ネルソンが何も言わないぞ？

いったいどうした……………どわっ!？」

「……………あなたは……………お見合いするの？」

「ネ、ネルソン？」

「私は……………嫌よ？私の認めた指揮官がそんな手の平を返したような連中の娘達なんかと……………婚姻を結ぶなんて有り得ないわ!!」

ネルソンは急に抱き着いて来て慟哭するようにそう叫ぶ。

俺のお腹にフォンフォンと柔らかなお胸様を押し付けながら胸板に顔を押し付ける彼女に……………息子が『出番ですか？』と起き上がった。きた。

どうしてこんなにもお胸様を押し付ける方が多いんですかね？

俺の煩惱を沸き立たせてムラムラさせることに何か意味があるんですか？

めちやくちやしコいボディで密着されて内心オツキを阻止するのに必死なんだが、段々ギラついた怪しい目をし始めたネルソンを見て

これはヤバイと全身の筋肉を総動員して煩惱を圧殺する。

「指揮官をこんな連中に渡さない……………渡してなるもんですか!!」

「落ち着けネルソン!」

「これが落ち着ける訳無いでしょう!!……………あなたまさか……………何か脅かされているの!?!やっぱりあの時全部灰にすれば良かったのよ……………人類なんてやっぱり要らない!!あなたさえ居れば……………」

「ネルソン!!」

「!?……………しき……………かん……………」

それ以上は……………それ以上はネルソンに言わせたくはなかった。  
ネルソンを抱きしめる。

共に世界を護る彼女にだけはそれ以上は言っただけは欲しくない。

……………それじゃ何の為に俺達は戦って来たのか分からなくなってしまう。

俺と一緒に捨て駒になった皆で命を賭けて稼いだ時間が……………無駄では無いと証明する為にも俺は彼女達と共に人類を護っているんだ。

その護っている俺達がそれを言っちまったら、生き残れなかった皆の犠牲を否定する事になってしまうんだよ。

「なあネルソン?それ以上はダメだ。それ以上は言わせない」

「指揮官……………ぐめんなさい」

「分かってくれたんなら良いさ。それになネルソン?俺がいつお見合いを受けるって言ったんだ?」

「……………え?」

俺はそう言っただけで笑うとネルソンのキョトンとした表情が見れた。

そしてネルソンはしばらく呆けているとようやく再起動した瞬間に真っ赤になって俯いてしまう。

どうやら勘違いに気が付いたようだ。

「私の……………勘違いなの?」

「ああそうだな。盛大に大暴走したみたいだな」



事を話すと彼女は苦笑いをする。

もつと早く教えてくれてもいいじゃないと愚痴るネルソンに、まあと宥めるロドニーは少し思案すると妙案が思い付いたのか両手をパチリと叩いてネルソンに提案する。

「ならそんな悪い虫が付かないように私達で指揮官を誘惑してみましようか？私、指揮官の事が好きですから誘惑位全然出来ますよ？二人でなら鉄壁を誇る指揮官の理性も突き崩せるかもしれないですね？」  
ネルソンの姉妹艦らしく豊満な胸の下で腕を組んで強調する姿勢を取るロドニー

それを見たネルソンは十二かを想像したのか顔を赤らめてモジモジしながら

「え？……それはちよつと……」

「それはちよつと？」

「は、恥ずかしいじゃないの!!なんで私がそんな事しなきゃいけないのよ!!」

と頭から湯気が沸き立たんばかりに激高した。

しかしそんなネルソンに対して笑みを崩さずにロドニーは切り札を切る。

「じゃあ人類側の女の人に指揮官を取られてもいいんですか？」

それを言われたネルソンは詰まった。

今日来た元帥からお見合い写真を直接渡されたのだ。

指揮官本人にその気が無くても階級が上の元帥から、お願いという命令を受ければその意思に関係なく受けなければ指揮官の立場が悪くなる。

自分が認めた指揮官が……自分達の唯一無二の希望の象徴たる彼をそんな事で苦しませて堪えるものと羞恥心を飲み込んだ。

「……………分かったわよ。恥ずかしいけど……………それだけは嫌」

「そうですね。私も自分で言っただけ少し気分が悪くなりました」

「で？何か良い作戦はあるの？」

「はい、私達は自分達で言うてはなんです、スタイルは抜群です。ですから水着姿で悩殺なんてどうでしょうか？」

「……………っ!!……………四の五の言っ居られる程に余裕は無いものね……………その案でいきましよう!!」

「それでは細かく詰めて行きましよう。まずはですね……………」

お見合い写真をキツカケに二人は動く。

一人は顔を赤らめて湯気を出しつつ段々出てくる意見が過激になっっている事に気が付かず。

自身のスタイルの良さを活かした作戦の立案は深夜まで及び、抱きつくなどの肉体的接触の他に雑誌等から手に入れた男性の心を攪る方法をいくつも盛り込む事が出来た。

その作戦でその後の指揮官がどう苦しんだのかは……………ネルソン級戦艦に恥じない破壊力だったと指揮官は語ったらしい。

## 第24話 思い出とロング・アイランド

指揮官です。

筋トレ中に油断して抱き憑かれました。

ぷにゆぷにゆのポヨンポヨンが背中に当てられて、既に息子がフルスタンディング中です。

「……………今は筋トレ中なんだが」

「えへへへ〜♪油断大敵だよ指揮官さ〜ん♪」

ダンベルを持ち上げるだけの簡単な筋トレで腕のマツソー達を喜ばせながら、筋肉との対話をする為に意識を集中していたのが仇となったか……………

私室でカーテンを開けた窓から夕陽を浴びてする筋トレも乙なものと上の服を全部脱いで筋トレに耽っていたら、いつの間にか侵入していた彼女……………ユニオン軽空母 ロング・アイランドに抱きつかれていた。

「まったく気配が読めなかったな……………ゲームで気配の消し方を覚えただのか？」

「うふふふふ〜♪それは内緒なの〜♪」

とりあえずスタンディングモードの息子から意識を逸らそうとロング・アイランドに話しかけてみるが、彼女は嬉しそうに俺の背中に抱きついたまま、柔らか過ぎて心地良過ぎるお胸様をグリグリと押し付けてくるのでモードの解除には至っていない。

今日のロング・アイランドは本当に機嫌が良いな……………

何か良い事でもあったんだろうか？

「何か良い事でもあったのか？えらくご機嫌だな？」

「うん！ロング・アイランドは指揮官さんを驚かせられたのが一番嬉しいの〜♪」

「そういう事か……………」

ロング・アイランドは同じユニオンの空母サラトガよりは頻度が少ないものの、イタズラをしてこちらを驚かせてくる事がある。



今日は俺がそのイタズラに面白いように引つかかったから、それが機嫌の良くなった要因のようだ。

まあアルバコアとかみたい洒落にならんイタズラよりはマシだろう。

……アイツ俺の私室から重り400kgを盗んで、俺が執務室から出てくるのを待ち受けていた大鳳の上に落として大破させてたからなあ。

いや、あれはマジでヤバかったから俺やベルファストにユニオンのエンタープライズを呼んで正座させたまま、4時間は説教したもんだ。

「なあロング・アイランド、ダンベルを仕舞うから少し離れてくれないか?」

「あ、もう終わりなの? なら危なくないように離れるね」

ロング・アイランドは素直に離れてくれた。

柔らかなお胸様が離れて少し寂しくもあるが、これでオツキした息子は落ち着いてくれるはず……つて!?

「お前……その格好……」

「どうしたの指揮官さん?いつもの部屋着だよ?おかしな所は無いはずなの」

「いや……それ……」

「幽霊さんはこの格好が一番楽なの」

ダンベルを固定器具に置いて彼女の方を振り返ってみたら……退役上等と書かれた大きめなTシャツを着たロング・アイランドが居た。

そう、Tシャツだけしか着ていないのだ。

お気に入りへのッドホンにTシャツだけを着了た痴女まっしぐらな格好で、俺の前に立っている彼女は満面の笑みを浮かべて両手を広げている。

「終わったんなら一緒にゲームしようよ。最近指揮官さんとゲームして遊んでないの」

「それは分かったが……その格好を……」

「ん？ロング・アイランドの格好は別におかしくないの。指揮官さ  
んだって上半身裸で筋トレしてるの」

「いや、俺は男だからな？」

「男女差別はいけないもん！断固抗議するのー！」

こりや何言ってもダメそうだ。

というかその格好でぴよんぴよん飛び跳ねないでくれ!!

ブカブカのシャツを着ているとはいえ、下が見えそうになってるん  
だ……………

腰まで届きそうなくらい長くて黒い髪に童顔な彼女は小柄ではあ  
るものの、Tシャツを押し上げる位の胸があつてぴよんぴよんする度  
に揺れるお胸様が俺の息子を刺激して果ててしまいうさだ。

しかも改装が終わっているのでTシャツの下から伸びるムチムチ  
とした白くて綺麗な足が更なる煩惱を呼んで……………ムラムラする。

いかん、これでは俺もロング・アイランドの事を言えなくなつてし  
まう。

そう思つて上着を着ようと服に手を伸ばした。

「あ、その傷……………」

「ん？ああ、これか？」

「うん……………」

ロング・アイランドが近寄つて俺の腹筋にある傷に触れる。

この傷は大戦時代に初めてKAN—SENの指揮官として作戦に  
従事し、ロング・アイランドの船体に座乗して奇襲攻撃を受け出来た  
モノだ。

あの時は直衛の機体すら攻撃に回さなければならぬ程の激戦で、  
艦橋にて指揮を執っていたら爆弾の直撃弾を喰らった。

運良く生きていた俺は応急処置だけで済む軽い怪我だったので、そ  
のまま指揮を続行して戦闘に勝利したのである。

「酷い傷なの……………あの時は指揮官さんが死んじやったかと思つたよ  
……………」

そう言いながら傷痕を撫でる彼女。

ロング・アイランドは甲板で艦載機の操作をしていたので無事だつ

た。

そのおかげで俺は無線でそのまま作戦続行を伝える事で、攻撃を続けられて勝利したんだが……心配させたのは本当に申し訳ない。

あの時散らばった金属の破片は摘出手術しても取れないとの事で今でも俺の身体に残っている。

「あの時はああするしかなかったんだ」

「……………分かってるの」

「っ!？」

「ゲームするのはまた今度で良いから……………今はこうさせて欲しいの」

「……………分かった」

顔を曇らせるロング・アイランドに俺がそう言うと、彼女は俺の身体に抱きついて耳を胸に当てて目を閉じる。

そんな彼女の様子に俺は優しく頭を撫でた。

もうすぐ夕日が水平線に沈んで消えていく。

こんなアンニュイな日があっても、良いのかもしれないな。

でもそのお胸様は俺の煩惱を湧きたてるから少し離してくんないかな？

~~~~~

「……………」

指揮官さんと楽しくゲームするつもりだったけど、あの傷痕を見たらそんな気分は何処かに消えてしまった。

部屋に戻った私は傷痕を見てあの時の事を思い出す。

初めて現れた私達KAN—SENを導く指揮官さん。

とても若くてカッコイイ人で初めての指揮は幽霊さんの船体から直接行うって聞いて凄くワクワクした。

「でもあんな事ってないの」

アズールレーン上層部から作戦を伝えられて驚いた。

護衛の前衛艦も無しに敵空母機動部隊の攻撃と殲滅。

明らかに自殺行為であるその作戦に勿論抗議したけど、聞き入れて貰えずにすぐに出撃。

偵察機からの情報ですぐに敵は見つけたので指揮官さんの作戦で、向こうに反撃の隙を与える前に全ての艦載機を発艦させて撃滅するという行為に出た。

その作戦は上手くいき、艦載機を発艦する前に空母機動部隊は壊滅状態。

「……………あの時に油断したのがいけなかったよ」

その独白めいた言葉通り。

攻撃成功に喜ぶ私はこちらを捉えていた敵の偵察機に気が付いていなかった。

喜んだまま第二陣を発艦させるべく準備を始めていたその矢先に……………指揮官さんが居る艦橋へと爆弾が落ちたのだ。

船体を攻撃された事で鋭い痛みが私を襲った。

でもそれ以上に艦橋に居たはずの指揮官さんが心配になって、第二陣の発艦準備を止めて艦橋へと向かおうとした時に無線に受診音が鳴り響く。

『ロング・アイランド、無事か？こちらは大丈夫だ。第二次攻撃隊を順次発艦させてくれ!!』

「指揮官さん!?大丈夫なの？怪我してない？」

『ああ、大丈夫だ心配ない。君の攻撃でトドメを刺して早く帰ろう』
「了解なの〜!!」

無線の声を聞いて安心した私は攻撃に集中して見事に殲滅を完了した。

その喜びを分かち合い、褒めて貰おうと艦橋へと歩みを進めた私は……………ボロボロになった艦橋の中に立っているのが不思議なくらい全身傷だらけで、お腹から血を流していた指揮官さんを見て声も出なかった。

「よく……………やってくれたな……………」

「そんな……………大丈夫だって……………」

「この……………程度なら…怪我の……………内に……………入らんさ」

「あ、ああ……………どうしよ……………指揮官さんが……………指揮官さんがあ……………」

オロオロとするばかりの私は無力だった。

その間にも指揮官さんは自分で身体に刺さっている破片を、いくつ
か引き抜いて血止めをしながら針と糸で縫い合わせていく。

痛みに苦悶の声を出しながらも手を止めない、そのおぞましい光景
から私は目が離せなかった。

「ぐう……………これで……………終わりか……………」

「あ……………ああ……………」

「すまんなロング・アイランド。こんなもの見せちまって……………陸に
着いたら次の作戦までに何か奢るよ」

「え？何を……………言ってるの？」

明らかに重症の指揮官さんが言っている意味が分からない。

次の作戦？

こんなに重症なのに？

普通なら病院へ行って入院してお医者さんに診てもらった方が良
い。

そう思つて口を開こうとする。

でもそれより先に指揮官さんが言った言葉に私は凍りついたかの
ように何も言えなくなつた。

「所詮試供品の俺は使い捨てだ。捨て駒は使い潰されるまで戦うのが
俺の……………俺の役目だからな」

頭が理解するのを拒んだ。

捨て駒？

指揮官さんが？

なんで？

「しきかんさん？」

「大丈夫だ、俺なんかよりも君の方が大事なんだ。セイレーンに対抗する為の唯一の方法である君の方が俺なんかよりも大切にしないといけない……」

虚ろな目をしたままそう言っつて艦橋に立ち続ける指揮官さんは、アズールレーン本部に無線で作戦完了の報告を入れる。

その無線から聞こえた上層部からの言葉は……あまりに冷たいものだった。

『お前が負傷？そんな事はどうでもいい！ロング・アイランドが小破だど？貴様はいったい何をしていた！貴重なKAN—SENに傷をつけるなど、お前の命よりも高い修理費用が掛かるのだぞ？この事は元帥閣下に報告させてもらう!!分かったらさっさと戻ってお前と同じ不良品共の部隊に戻れ!!』

「被弾して誠に申し訳ありませんでした。原隊復帰の件は了解です。失礼します」

『まったく……さっさと二階級特進すればいいものを……』

その怪我をしている指揮官さんへの最後の言葉を聞いた瞬間に私は理解した。

指揮官さん以外の人類は既に滅んでいるのだと。

だって指揮官さんは怪我までして必死に考えて作戦を成功させたのに、”アイツら”はそんな事しか言わない。

そんなの同じ人間じゃないよね？

私の知ってる人間は指揮官さんだけしかいなかったんだ。そう理解している間にも陸地が見えてきた。

指揮官さんは虚ろな目のまま私に笑いかける。

「という事ですまんなロング・アイランド。奢るのはまた今度になりそうだ」

「ううん、気にしないで指揮官さん。幽霊さんはずっと待ってるの。指揮官さんもお大事にね?」

「ああ、そっちな」

そう言っつて私の頭を優しく撫でてくれた。

あの時撫でてくれた指揮官さんの手の温もりは今でもよく覚えて
いる。

「……………駆逐しなきゃ」

セイレーンも”人間モドキ”も。

赤い血を流すけど人間じゃないナニかは存在しちやダメなんだよ
?

指揮官さんもKAN—SENの皆も傷付けるようなヤツらは全部
全部やつつけなきゃね?

「全部出来たら指揮官さんは褒めてくれるかな?」

その日がとても待ち遠しい。

油断してアイツらに反撃されないようにしないとね?

ゲームみたいに全部倒せばクリアだから……………見逃さないように
しっかりと確認しなきゃ。

しきかんさん、まっつてね?

第25話 空気椅子と三笠

指揮官です。

今日はお手軽に出来て体幹や臀部に足の筋肉を鍛えられる空気椅子をしています。

この空気椅子はスクワットのトレーニングをした時の効果に近い筋トレが出来る優れたものです。

時間と場所にお金も掛からないトレーニング方法なので本当にお手軽なのですよ。

「ふぬぬぬぬ!!もう……もう限界……」

「諦めるな!君なら出来る!もう少しだ!!」

「足があ!足の震えがあ!!」

「あと15秒だぞ!頑張れ!君ならやれる!もっと熱くなれよ!!」

トレーニングルームで俺と向かい合って空気椅子をする彼女。

滝のような汗を流して目に見えて足がプルプル震えながらも懸命に空気椅子の体勢を保持する彼女は……

終了を知らせるタイマーのブザーと共にその場に崩れ落ちた。

「流石だ三笠!よく耐えられたな?」

「……もう力が入らぬ。これ以上は無理だ……」

可愛らしいピンクのジャージに身を包んだ重桜戦艦 三笠が、天井を仰ぎ見るようにしてその場に寝転ぶ。

頬を上気させてたわわなお胸様を上下させながら荒い息を吐く彼女の姿にムラっとくるが、俺の空気椅子はまだ終わっていない。

むしろその煩惱が俺のマッソーに注ぎ込まれてエネルギーへと変わり、20分は続けている空気椅子の体勢をよりしつかりと取る為の力となる。

「お、お主は……本当に……筋肉馬鹿なのだ……着いて行けないよ」

「なんだ?最高の褒め言葉だな」

「……褒めてなどない」

そこまで会話して三笠は完全に沈黙した。
どうやら本当に力尽きたようだ。

それを見ながら俺は少し笑ってしまった。

どうして俺のトレーニングに三笠が一緒になってやっているのか？

それはつい先週の事だった。

「……………お手軽に出来る下半身を鍛える方法？」

「うむ、実は最近運動が足らぬと自覚してな？身体を毎日のように鍛えておる指揮官ならば、何か良い方法を知っているのではないかと聞きに来たのだ」

そんな相談をしにトレーニングルームで懸垂中の俺に聞きに来た三笠。

皆に大先輩と呼ばれたり、三笠さんとさん付けで呼ばれているので少し疎外感を感じて、俺には呼び捨てを要求した少し可愛い一面を持つ彼女がこうして俺に相談してくるなんてとても珍しい事だ。

俺が徴兵されるよりも前からセイレーンと戦って人類を滅亡から救い続けてきた、古いカンレキを持つ英雄の彼女からの相談なら真剣に考える必要があるな。

そう思った俺は懸垂を止め、懸垂専用のバーから手を離して地面に降り考える。

「三笠はどこら辺の筋肉と対話を……………じゃなかった鍛えたいんだ？」

「そうだなあ……………お腹周りと足を鍛えておきたいのだが……………」

いつもの軍服とスカート姿で顎に手を当てながら考える黒髪セミロングな和風美人。

スタイルも抜群でたわわなお胸様まで備えたまさに大和撫子という言葉がピッタリな三笠を見て、俺は鍛える必要はあるのかと少し悩んだが……………そこは女性として譲れない部分があるのだろうかと思う。

「お腹周りと足かあ……………」

「あと手軽に出来て、器具などが必要無いものなら尚良しなのだがな」

「お手軽で器具無しか……………アレが良いかもなあ……………」

「む？何か思いついたか？」

「ああ、ピツタリな鍛え方を思い付いた」

三笠の要望にピツタリなトレーニング方法を思い付いた俺は、そう言っただけで体操等がしやすい格好で予定の空いている来週トレーニングルームに来るように伝えたのだった。

そして何とも可愛らしいジャージ姿でポニーテールにした三笠が俺と共に空気椅子を始めて今に至る。

「ほら、休憩もそろそろ終わって次の30秒するぞ？」

「ま、待ってくれ……………もう少し……………もう少しだけ休憩を取らせて……………」

大の字で倒れたままの息の整わない三笠に俺はため息を吐く。

まだ三回目が終わったばかりで、予定ではインターバルを挟みながら全部で六回するはずだったのにまだ半分終わったばかりだぞ？

「……………本当に運動不足気味だったんだな」

「こんなにキツイとは……………思わなんだ……………」

精も根も尽き果てたと言わんばかりの三笠が足を震わせながらゆっくりと起き上がる。

まあスクワットをするよりもキツイトレーニングである空気椅子をチョイスしたのは、人間よりも力のあるKAN—SENならこれくらい余裕だろうと考えた俺のせいなんだが……………

もしかすると普段トレーニングなんてしてない長門やビスマルクなんかもこんな感じになるのだろうか？

それは由々しき事態だ。

早く彼女達も一緒に筋トレに誘わなければ……………

「……………ふう……………少し震えが収まったかな？」

「よし、それじゃ始めるか」

「す、少し待ってくれ！身体が熱くなったから上を脱がせて欲しい」

「ジャージの中に着込んでいたのか？そりゃ熱いだろ」

「うむ、明石から運動するならこれだと買わされた服を中に着ていたのだ……少し待っていてくれ」

三笠はそう言う上ジャージのジッパーを下ろして脱ぎ始めた。空気椅子のままそれを見ていた俺は……目が飛び出でるかと思うほどの衝撃を体感する。

ジャージを脱いだ三笠の上の服は白の無地に襟や袖に赤い縁どりのある半袖で、胸の辺りには《さかみ》と平仮名で書かれたゼッケンが縫い付けてあった。

そしてそのままジャージの下を脱ぐと、そこには俺も初めてお目にかかる密着型のハイカットブルマを着ていたのだ。

「これで涼しくなったな。こうも肌を露出する事に抵抗があったが、身体の熱を放出するという意味合いではこれが体操等に適しているというのは本当のようではあるな」

「……明石……あとでダイヤを山ほどくれてやろう」

大和撫子な三笠の体操服にブルマ姿。

しかもポニーテールで汗をかいて少し張り付いているので、身体のラインが出まくりの凄まじく悩ましいしムラムラする。

『やったね指揮官・夢にまで見たブルマだよ!!』

股間の息子の内なる声が歓喜に震えているのが手に取るように分かった。

やべえってアレ!!

普段肌を露出しない三笠がそれを着るとリビドーが!!

リビドーが爆発すりゅ!!

「む? 難点はこの食い込みを直さなければならん事か……」

「ツ!?!」

俺の目の前でブルマの裾に指を入れて食い込みを緩める三笠。

満点かよ!!

漫画であるブルマで起きるあるあるを普通にやってくれたぞ!!

少し不満げな表情で食い込みを直すその姿は、二次元でしか見たことのないレア過ぎる男なら一度は見てみたいシーンだ……

あれ? ここはエロゲの世界だった?

「そんな錯覚すら起きる扇情的な光景だった。」

そんな俺の困惑を嘲笑うかのように、今度は体操服の丈が気になる三笠は前の裾を右手で引っ張っている。

するとどうだろうか？

薄い生地である体操服は伸びてゼッケン越しにあるたわわなお胸様が強調されて更にエロい!!

綺麗なお椀型のお胸様が俺の脳内の特別なフォルダに焼き付けられていく……………

「むう……………これは仕方ないか……………」

「……………」

「足も大丈夫そうだ。そろそろ始めようか」

「お、おう」

「……………何故こちらを見ておらんのだ指揮官？」

やっとエロ空間が終わって空気椅子の体勢になった三笠を見てタイマーを起動したのだが……………

そのポーズはエロ過ぎるわ!!

身体を起こし胸を逸らしているので自然とたわわなお胸様を突き出しているし、眩しい健康的な白い肌を出したスラリとした綺麗な足とブルマのデルタゾーンが抜群のエロスを醸し出しているのだ。

何だか如何わしいお店のプレイを受けているかのように……………

三笠には悪いが、ここは顔を背けさせてもらう。

このままじゃ間違いが起きそうで怖いくらいだ。

そうだ、視界に入るからいけないんだよ!!

マッソーとの対話が続ける為にも視界に入れなければいいんだ!!

たぶんこれはマッソー神のお告げだな？

これが最適解だと俺を導いてくれている!!

この勝負、俺の勝ちだ!! (慢心)

「くう……………キツイ……………はう……………ダメえ……………震えちやう……………もうダメえ……………」

なんだそのエロボイスは!!

三笠のこんなエロ過ぎる声なんて初めて聞いたぞ!!

俺の煩惱がまるで津波のように理性を押し流しそうになってやがるわ!!

筋肉よ!!マツソー神よ!!

俺にこの試練を耐える理性を下さい!!

「もう無理……………大きいの(足の震え)……………大きい(足の震え)のが来ちゃう……………」

おまつ!?!それは卑怯だろうがー!!

ダメだダメだダメだダメだ!!

煩惱のせいで全部意味深に聞こえちまうよ!!

「も、もう……………もう無理……………ああ!」

「はっ!?!三笠!!」

三笠の悲鳴で我に返った俺はすぐに空気椅子を止めて駆け出し、後ろに崩れ落ちそうになる彼女の伸ばす手を握って俺の方に引き寄せた。

そして足を震わせて動けない彼女をしっかりと抱き留める事に成功。

……………煩惱のせいで危うく彼女を怪我させる所だった。

「間に合って良かった……………」

「……………その……………あの……………」

安堵の息を吐いて腕の中の三笠を見ると、顔を真っ赤にして声に詰まっている彼女がそこにはいた。

あれ?

これって傍から見ると俺が三笠を抱きしめてるように見えないか?

たわわなお胸様が薄い体操服越しにすんごい主張してて息子感激中だよこれ。

「えっと……………これはだな……………」

「……………」

真っ赤な三笠に弁明しようと思を出すが、俺自身も突発的な事と言

葉が出てこない。

「というかこんなラブコメみたいなシチュエーションなんて経験したことないんですもん!!」

「そんな感じで慌てていたら……三笠がフツと笑って俺に抱きついてきた!?!」

「み、三笠?」

「助けてくれてありがとう。おかげで怪我をしなかったよ」

「それは……何よりだ」

「まだ少し足に力が入らないから……もう少しこのままでもいいからえないかな?」

「わ、分かった」

俺は抱きついている三笠にそう言われるがまま抱きしめ続けた。

結局三笠の足に力が入るまで10分程掛かって、それまで俺は約600種類ある人体の筋肉の名前を頭の中で呼びながら耐え続ける事に……

ラツキースケベって本当に起こるもんなんだなあ……

~~~~~

「……………ふう」

自室に戻って体操用の服から普段着に着替えたのだが、まだ足に違和感が残っている。

指揮官の考えた空気椅子で足はもうボロボロだ。

そもそも旧式の私にあのような事をさせるのがいけないのだぞ指揮官。

「あいたたた……これはしばらくユニオンの工作艦の所に通わないと治らないかなあ……」

疲労した足を揉みほぐしながら憂鬱になる。

たぶん明日は筋肉痛だろう。

鍛える方法を指揮官に提案したらとんでもない目にあつた。

「まあ、今日は彼と二人つきりで居られたからよしとするべきだな」  
運動不足の身体を引き締めたいと思つたのは本心ではあるが、本当の所は指揮官と一緒に何かをしてみたいと思つたのが今日の出来事の切っ掛けだ。

普段は指揮官との交流の機会を重桜の皆に譲っているが、たまには私も指揮官と一緒に何かをしてみたかったからである。

一緒に出来る事であれば互いに高め合う事だつてできると意気込んで提案したらあんな事になつてしまったのだけれど……………

それにこの世界唯一の指揮官である彼は私の後輩達を救つてくれた大恩のある人である。

少しくらい彼と話をしてみたいと思つていたから今回の件は本当に良かった。

「まさか世界各国がセイレーンと繋がっているなどとは誰も思わないだろう……………本当にお手柄だったものだ」

これからもつと発展して輝かしい未来を築いていくはずの彼女達を、その目で見届けようとしていた矢先の出来事に私は驚きを隠せなかつた。

古き良き時代が終わり、新しき風が吹き込むその激動の時代を感じる事こそが私の楽しみだったのだから……………

「そんな事にならなくて本当に良かった……………指揮官のおかげで私はこうして伸び伸びと育つていく後輩達の躍進をその目で見れているのは嬉しいなあ……………」

そんな後輩達が慕う指揮官はとても良い好青年で身体を鍛え過ぎる所はあるものの、皆に優しく真つ直ぐに導いてくれるのを見ると自分の現役時代に彼が居てくれたらと思わずにはいられない。

「少し後輩達には嫉妬してしまうな……………本当に羨ましい限りだ」  
そんな指揮官の事を思うと自然と笑顔が出てしまう。

こんな事は初めてだ。

彼に今日は助けられてしまった。

あの力強い腕で引き寄せられて胸の中で抱きしめられるなんて初

めでの経験をしてしまったのだから。

「……………強い男子というものは心惹かれるものなんだね」

崩れ落ちそうになる私を必死の表情で助けてくれた方。

そんな凜々しさに恋焦がれてしまうのは古い女の性なのか……………

「古い私でも……………こんな想いを抱いても良いのだろうか？」

部屋の窓から覗く月明かりに照らされて見ゆるは指揮官がいる私  
室のある場所。

後輩達が慕う彼に……………私が想うのは難しいことかもしれない。

「でも初めてなんだ……………こんなな心を掻き乱されるのは……………」

たった一度きりの事なのかもしれない。

しかし全ては一期一会。

その時起きた事はその時にしか巡り会えないものなのだ。

ならば大事にしよう。

想い続ければきつと必ず届くだろう。

私の想いよ、天まで届いて彼とを結ぶ星となれ。

その星が瞬く度に私の心は貴方で満たされるのだから。



## 第26話 水泳と一航戦

指揮官です。

今日は室内温水プールで全身の筋肉とインナーマッソーを鍛えるのに効果のある水泳をしに来ました。

クロールは腕や胸の筋肉、平泳ぎは足周り、背泳ぎは臀部から腹部周りにバタフライはそれこそ全身の筋肉を鍛えるのに効果があるからワクワクしてプールに来たのですが……

「さすが指揮官だな。私の認めた強者らしい素晴らしい肉体だ」

「指揮官様♡お疲れになりましたら、赤城が用意したマットでごゆっくりお休みくださいね♡」

「……………おう」

ハートマークが目に見えて語尾に付きそうな話し方って俺は初めて聞いたぞ？

しかもなんかそのマットの横に見えるプラスチック製のボトルの容器の中身が意味深に見えて仕方ない。

プールの中でブーメラン一丁の俺に熱い視線を送る重桜一航戦の赤城と加賀が正直怖いんだが……………

「……………今日の鍛錬の内容はベルファストにしか伝えてなかったはずだが？」

「私は知らなかったが、赤城姉様が知っていたから着いて来ただけだぞ?。」

「指揮官様の行かれる場所はすぐに分かりますわ。だって愛しい愛しい愛する方の場所はすぐに分かるのですもの……………これもまた愛の力ですわ」

「なにそれ怖い」

正直マジでビビったわ。

泳ぐ為に更衣室で着替え準備運動が終わって水の中に入った瞬間に、更衣室から出てきたこの二人を見て驚きを隠せない。

マジで出て来る瞬間を見計らっていたかのように……………いや、本当

に見計らっていたのだろう。

最近大人しかったから少し油断してたわ。

「とりあえず私はお前が身体を鍛えている光景を見ていたいだけだ。強者たるお前の力を直に見て感じたい」

「ふふ♪指揮官様の勇姿をこの目に焼き付けるのも……それもまた愛ですわ」

「……………」

なんも言えねえ……………

二人は俺が身体を鍛えているのを見学に來ただけだと言っている。邪魔する訳では無いので強くは言えないな。

でもさ……………

「……………なんでその格好なんだ」

そう、この二人は水着でここに居るのだ。

しかも去年の夏に見たそれぞれのパーソナルカラーのビキニにパレオではない。

彼女達が着ているそれは……………

スリングショットである。

互いにパーソナルカラーの赤と青の、際どいっていうか殆ど大事な部分しか隠れていないような紐スリングショット水着を来ているのだ。

その上に細かい網目模様でシースルーなスケスケのドレスみたいなのを着て……………傍目から見たら裸にスケスケのドレス着てるようにしか見えない。

ネグリジエか何かなのかそれ？

「赤城姉様がお揃いで選んでくれた物だ。お前も目の保養になって嬉しいだろ？」

「指揮官様が私達の姿を見て嬉しく思っただけで頂けるのでしたら、この水

着を選んで正解でしたわ♪」

腰に手を当てて堂々とプールサイドに立つ加賀と、その少し後ろでマットの上に座る赤城が俺には口を開けたでっかい狐のように見えた。

……………たぶんこの表現は間違っていないと思う。

「……………とりあえず俺は泳ぐから、見学ならそこで見ていてくれ」

「分かりましたわ指揮官様♡」

「ああ、お前の強さを見せてくれ」

さつきから無視しているが、俺のネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲はすでに最大仰角に達している。

これを赤城達に見られた場合にブーメランなパンツしか着ていない俺には、これを隠す手段が無い……………というか見つかったら捕食されそうな予感がぶんぶんするんだが……………。

見つからないようにする為にも俺は煩惱を全てマツソーへのエネルギーに変換しなければならない。

魅惑の激シコボディラインは見えるのに、しっかりと見えそうで見えないスケスケのドレスによって異常な興奮状態に持ち込まれているから相当消費するのに苦労しそうだなコレ。

……………これもまた新手のチラリズムという奴なのだろうか？

「煩惱退散、煩惱退散……………行くぞ!!」

煩惱一色になりそうな頭を振って気持ちを切り替える。

これから行うのは神聖な筋肉との対話だ。

それに水中での行動は一瞬の気の緩みで死亡事故にも繋がりがねない場所であり、陸とは違う本来なら陸上の生物が踏み入れる場所ではない所なのだから。

水に潜って壁を蹴り推進力を得る。

そこから慣性だけでしばらく進むと、勢いが落ちてきたのを確認して両手で水を掻き分けるクロールを始めた。

腕の動きを最適化させてより水を掻きやすく動かしていく。

足は膝を曲がり過ぎないようにバタ足する事で浮力と推進力を確保し、水を掻く7回に1回のペースで息継ぎをする事で速度を維持し

た。

これはいいぞ!!

表面に見える筋肉だけでなく、インナーマッソーも引き締められる独特の感覚が俺を包み込む。

水の水圧や抵抗力が負荷となつて俺の身体を引き締めていくのが分かった。

調子確かめるようにクロールしていたら、300mあるプールのプールサイドにすぐ着いてしまったので今度はターンしてそのまま背泳ぎに泳ぎ方を変える。

しっかりと手を伸ばして水を掻き分けると室内プールの天井が見えた。

ここでも体幹を真っ直ぐにする事を忘れず、クロールと同じ速度でプールサイドへと突進していく。

筋肉が煩惱を喰らって爆発しそうなエネルギーを発散させながら泳いでいると、指先がまた壁に触れるのを感じすぐにターンして今度は平泳ぎを始める。

平泳ぎは腕の動かし方が大きくなるので肩の筋肉が自分でも隆起するのを感じた。

そして足もカエルのように水を蹴って推進力を得るので、ふくらはぎや太ももに臀部の筋肉達の大合唱がもう堪らない!!

水中で運動する事がこんなに楽しいなんて……最高だ!!

マッソーが……マッソーが泳ぐ事で俺の全てを表現しているかのような高揚感を感じている!!

さあ次はバタフライに……

「素晴らしいぞ指揮官!私も滾ってきた!!」

「こぼっ?!」

壁に到達して再びターンしようとしたその瞬間に、いつの間にか水面に立っていた加賀がいた。

しかも好戦的な笑みを浮かべて握り拳まで作っているのだ。

驚いた俺はターンする予定だった壁にしがみつき、咳き込みながら飲んでしまった水を吐き出す。

「どうした指揮官、もつとお前の輝きを私に見せてくれ！」

「……………いやお前……………いきなり過ぎてビックリしたぞ？」

「気が付かなかったのは、お前が筋肉を鍛えるのに夢中になり過ぎたからではないか？」

「……………」

これは筋肉との対話に集中し過ぎて、加賀の乱入に気が付かなかった俺が悪いのだろうか？

というか上に着てたスケスケのドレスは脱いだんですね……………

おかげで最低限の布しかない頂点の見えないお山と、見えてはいけない神秘の付け根がオレの目前にあるんですが……………

そのおかげでせっかく筋肉との対話で俯角を保っていたネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲がまた最大仰角になってますよ？

俺のリビドーが凄まじい勢いで理性に先制攻撃を仕掛けているのですが？

そんな事を思いつつ壁側に身体を丸めるようにして愚息を隠して加賀からは見えないようにした。

少し落ち着いたので何故ここに彼女が居るのかを考える。

まあこんな風に彼女が興奮して水面に立っているのは、簡単に想像が付く。

加賀の本能とも呼べる戦闘狂気質が関係しているのだろう。  
爛々と輝くその目に浮かぶのは闘争心剥き出しの心。

強者と認めた者との戦闘は彼女にとってご褒美みたいなものらしいので、この場合は俺の筋肉に刺激されて興奮を抑えきれなくなったのだろうな。

「900mの距離をそれぞれ違う泳法を使って5分半程で泳ぎ切るお前の強靭さは本当に心が躍る……………もつとだ、もつとお前の力強い筋肉を見せてくれ!!」

「っ!?!……………筋肉を見せてくれだつて?」

「ああそうだ!あるんだらう?お前に秘められた最高の力が!!私の心を捉えるような輝きを見せてくれ指揮官!!」

「任せろ!!」

加賀にそこまで言われちゃ見せるしかないだろ!!

フルマツソーパワーで壁を蹴ってプールの底に付く位の低さまで潜水状態で突き進み、プールの中程まで進んだらダイナミックにバタフライを始める。

全身をうねらせるように使って身体を動かし、両腕を後ろから振り上げるようにして水に叩き付けながら両足で同時に水を蹴り出すドルフィンキックを行う。

その時に水面から顔を出し過ぎないように注意して身体が沈みこまないよう気を付けた。

こうする事で自然と身体は前に進み、両手両足からの推進力を受けて爆発的な加速を産み始める。

するとどうだろうか？

遠くにある筈のプールの壁があつという間に目前に迫ってきた。

「いいぞ!!もつと滾らせてくれ指揮官!!」

加賀の聞くだけで興奮している声加賀を更に前へと進ませる原動力となる。

限界を超えて更にその先へ!!

すぐに辿り着いた壁を蹴ってすぐに折り返す。

肩や背中の筋肉である僧帽筋、三角筋、広背筋が腕を振って水を掻き分ける度に、熱を持って俺の身体を進める力となっているのが感じ取れた。

ドルフィンキックをしている足だって独特のうねりを加えるキックが、大腰筋や腸骨筋といった腰の骨を支える筋肉達に更なる高みへと誘う負荷を与えてくれる。

俺は加賀を熱狂させる筋肉を見せつけられているのだろうか？

聞こえてくる声は熱を感じられるような声色だが、もつと昂らせる事だって出来るはずだ!!

マッソー神よ……更なる筋肉の高みへと俺を導いてくれ!!

そんな願いが通じたのか……フルマッソーパワー状態の筋肉が更に膨張し、先程よりも更に速く身体が水を突き進み始めた。

これなら……これなら行けるぞ!!

膨張した筋肉に対して増えた水の抵抗を跳ね除けるような力強さが、今の俺のマッソーには宿っている。

これはマッソー神の加護なのでは？

これこそ筋肉による筋肉の為の筋肉だけの対話なのだ!!

俺の筋肉は更に上のステージへと進んだ……ならばその力の全てを使う時が今なのだろう。

「いいぞ……いいぞいいぞいいぞいぞお!!どこまで私を楽しませるんだ指揮官!!」

灼熱と言っても過言ではないような熱の籠った加賀の声を聞きながら、俺は最後のターンを決める。

心臓は熱い血液を全身に回して筋肉の熱が下がらないようにフル稼働している。

この状態は長く続くのかは分からないが、今までの俺とは違う力がまるでマッソー神の全能感を与えていた。

目指す先はもう目前だ。

振り下ろす腕とキックの力で派手な水飛沫がプールに上がっていることだろう。

普通なら飛沫がそこまで飛び散るなんて泳ぎ方が下手でなければ有り得ない事なのだが、マッソー神の加護が宿った俺の筋肉の力強さで水が吹き飛んでしまっているようだ。

シャークアンカーのように水中でそそり立っていたはずの愚息なんて、筋肉の前には無力ですでに閉じこもってしまっている。

そうだ。

これが俺のやりたかった事なんだ。

筋肉が全てを超越した存在なのだ証明する事こそが、俺の存在意義でもあるのだここに証明するんだよ!!

俺は壁に勢いよくタッチする。

そして水中から顔を上げ壁にしがみついて新鮮な空気を肺に取り込んだ。

気分は最高だ!!!

新たな境地に俺のマツソーは今、輝いてる……………

「最高だ指揮官!!」

「のわっ!」

余韻に浸っていた俺の背中に何かが抱きついてきた。

顔だけで振り返って見ると、それは興奮して頬を上気させ喜色いっぱいぱいの笑みを浮かべた加賀だ。

興奮を抑えきれなくなった彼女はわざわざ水の中に入り、俺の首に手を回して背中に抱きついてきている。

……………背中に何だか小さい突起のある二つの柔らかいお山をグリと押し付けながら。

「か、加賀?」

「はあ…はあ…………ペロツ」

「加賀あ!」

興奮し過ぎて乱れている呼吸をそのままに、彼女は俺の頬をその赤い舌で舐める。

その目には情欲が籠っているのが明らかで、酷い興奮の為か戦闘状態の時のように瞳が青く輝いていた。

加賀のスベスベした白い肌が俺の泳ぎ終えて火照った身体から熱を奪っていく。

「指揮官…………指揮官…………ふふふ」

「おま、お前…………ちよっ?!」

「はむ…………ちゆる…………」

耳を唇でハムハムされて舐められた。

てかそんな事されたら背中に押し付けられたお胸様の事もあって、俺の煩惱で愚息が解放されちゃう!!



何とかして加賀を正気に戻すか離れなくては……

「まあまあ、なんて羨ましい事。この赤城も混ぜて頂きたいですわ」

「っ!？」

「……ちゆる……はむ……赤城姉様も、一緒にされますか？」

気が付けばしがみついている壁の上にしやがみ込んだ赤城が居た。

しやがみ込んでいる為にスケスケのドレスが突っ張って、身体のラインを綺麗に浮き立たせているからエロい!!

しかもスケスケのドレスのスカートにあたる部分がこっち向いているので、何だか下からスカートの中を覗いて見えてしまっている背徳感すらある。

だが忘れてはいけない。

赤城のその目は加賀と同じような怪しい光を帯びて赤く輝いているのが分かるのだ。

この状況は……この状況は非常に不味い。

前門の赤城、後門の加賀。

俺は今ダブルアタックを受けている……

「指揮官様？如何なさいましたか？」

「いや……加賀を止めてくれないっ!？」

「ちゅうう……赤城姉様、指揮官の身体は最高だぞ？」

怪しげな雰囲気の中、赤城は楽しそうにこちらを覗き込み、加賀は俺の首筋に吸い付く。

プールっていつからこんなにアダルトチックな空間になったんだ!？

くっ……このままでは俺は……捕食されてしまう……

童貞の俺には高難易度な姉妹丼で女性主体のまま、美味しく頂かれてしまうのが生々しく想像出来てしまった。

モリモリマツソーの俺が主導権を握られたままやられてしまうだど？

そんなの嫌だ!!

初めては心が通じ合った恋人と甘々イチャイチャしながら迎えた  
い派なんだぞ!!

今ならまだマツソー神の加護が続いているから出来るはずだ!!

「はああああああああ!!!」

首に回っている加賀の手を左手で押さえて外れないようにし、俺は壁に掛けた右手と床に付けていた足のバネの力で水面から飛び出す。しゃがみ込んでいた赤城を越えてその後ろへと降り立った俺は、水を滴らせながらも首に回っている加賀の手を外した。

ふっ、完璧だ。

鍛え上げられた筋肉にかかればこの程度の包囲網など容易く突破出来る。

後はそのまま彼女達に声をかけて更衣室へと逃げるだけ。

そう思っただけ振り返ると………目の前に赤城と加賀が揃って立っていた。

「……………近くないか?」

思わずそう呟いてしまう程に近い。

すぐそこで二人が俺を見上げて立っている。

予想ではすぐ近くにいるのは加賀だけで、一番危険そうな赤城からは離れられたと思っただけは加賀だけ………

「赤城姉様の予想通りだったな」

「そうね、指揮官様ならそうすると思っただけでしたわ♪」

読まれていた!?

マツソー神の加護を受けた俺の行動が彼女達には読まれていたというのか!?

こんな事が起こり得るといえるのか……………

そんな俺の驚愕を他所に、赤城が右手を、加賀が左手を胸に抱き込むようにして組んでくる。

そして身体を擦り付けるようにして俺の傍に寄ってきた。

「お、お前ら……………」

「存分に味わせて貰おうか?」

「そうですね……………普段は邪魔が入りますが、今なら指揮官様を……………うふふふふ♪」

絶対絶命のピンチ!!

加賀は不敵な笑みを浮かべながら胸を寄せて更に左手を動かせないように……つてマジで柔らかいなオイ!!

反対に赤城は俺の右手に自分の両手を重ねて絡めながら腕に頬擦りしてくる。

俺の初めてつて逆レから始まってしまおうのか？

焦る俺を見ていた赤城は静かに耳の近くに口を寄せる。

「……………指揮官様のお部屋にある金庫の中身、スーツケースの中の物をこの赤城に下さいませんか？」

心臓を鷲掴みにされたとはまさにこの事だろうか。

思わず赤城の方を向いて何故と問い掛けたかった。

口を開くが声は出ずに掠れた呻き声しか発せられない

しかし赤城は微笑むばかりでそれら以上は何も言わないから余計に不気味だ。

「アズールレーンの元帥が来た時に、警護に着いていたのがロイヤルのメイド達だけだと本当に思っていたのか？」

左側からそう言うのは腕に頬擦りしている加賀だ。

つまり今加賀が言った事を整理するとベルファストやシエフィード以外にも、あの場に警護をしていたメンバーが居たというのか？

そんな気配は微塵も無かった筈だぞ？

「指揮官様が母港の外へ出られるというのに、万全の警護体制を敷くことは当たり前。ですから居たのですよ？全ての陣営の隠密に秀でたKAN—SEN達が……ね？」

加賀の言葉を皮切りに呆然とする俺に赤城がそう答える。

俺は彼女達KAN—SENの行動力を舐めていたのかもしれない。

そんな事を知る筈もなかった。

あの時の結婚指輪の話や、お偉い方たちのご令嬢の見合い話なんかも全て聞かれてしまったというのか？

「ふふふ♪驚く顔の指揮官様もまた素敵ですわ♡」

「いつもはお前の筋力に驚かされてばかりだからな。たまにはこちら

からも驚かせてみても悪くはあるまい？」

完全に包囲された俺はどうすることも出来ない。

不敵に笑い続ける加賀と、顔を情欲で蕩かしながらこちらを見つめ続ける赤城をどうにか出来る妙案は浮かばずに時間だけがただ過ぎていく。

「……………今日の所はここまでですわ」

「ふむ、これ以上は奴らに勘づかれるか……………」

「……………なに？」

そう言うと二人は互いに顔を見合わせ、それまでであった怪しげな雰囲気消して肩を竦める。

勘づかれる？

つまり誰かがここに来るって事か？

「……ちゆる……………今回は挨拶といった所だぞ指揮官？」

「うふふふ♪指揮官様？我ら重桜のKANSENを代表して、私達一航戦がそのご寵愛を受けたいという意思表示をここに示しますわ♪ちゅっ♡……………あは♪これはその想いの印です」

「……………これは」

赤城は俺の右の大胸筋に唇を寄せ、吸い付いて跡を残す。

所謂キスマークというやつだ。

その跡を見てウツトリとしながらも俺から離れる赤城は本当に名残惜しいという表情をしている。

加賀の方も俺の上腕に頬擦りしながら舐めるのを止めて、スルリと離れていった。

そして二人揃って俺に向かって一礼すると更衣室の方へと向かって歩き出す。

ただただ呆然とその後ろ姿を眺める事しか出来ない俺。

何故こうなってしまったのだろうか？

秘密にしていた事が秘密にしなければならぬ人達にバレていた

なんて……………

どうか大きな事件へとは発展しないで下さい。

それだけが私の望みなのです。

~~~~~

「……………赤城姉様、本当に良かったのですか？あのまま押し切る事も出来たはずでは？」

「いけないわ加賀、そんなの愛が無いじゃない……………もつと焦らさなきゃね？」

重桜の寮に戻った二人は普段着に着替えて話し合う。

今日の事について訝しむ加賀にそれを窘める赤城。

すでに賽は投げられた。

全ての陣営が指揮官の金庫の中身を知っている今、それを最初に与えられる栄誉を皆が求めているのは明らかである。

だから先んじてこの母港にいる現重桜のトップの長門様に許可を取って指揮官へのアピールをしたのだ。

「それにあの場で事に及んでも、あの忌々しいロイヤルのメイド隊が邪魔に入るの明白……………ならば舞台を整える為に敢えて引くのが最良の結果を産むのよ？」

「そういうものですか？私には分かりませんが……………」

「ふふふ♪心配しなくても大丈夫よ加賀？次の手は既に打ってあるわ……………天城姉様や神通も考えた策はなかなか凶悪の一言に尽きるわね♪」

「あの二人が!?……………ならば吉報を待ちましょう」

「ええ、全ては我ら重桜に指揮官様のご寵愛を授けて頂く為に……………」

どこか熱に浮かされたようにしながら、下腹部を撫でつつもそう話す赤城の顔は蕩けたものだった。

加賀もその瞬間を想像がしたのか同じく熱に浮かされた様に、下腹

部を撫でながら頬を上気させている。

重桜が誇る策士二人が考える作戦で指揮官がこちら側に墮ちる事を願って嗤う。

絶対に他の陣営にはそのような最高の誉れを渡したくは無い。

ならば策を弄して彼をこちら側に引きずり込むまで。

いずれ全員分の指輪が作られて配られる？

私達がそんな事で満足出来るはずが無い!!

一番最初に与えられるソレこそが勝利の証。

「楽しみね加賀？」

「はい、そうですね。ああ……今度はしっかり味わいたいものだ」

「ふふふ♪その時は私も指揮官様の御情けを頂いてしまいたいでしょうか」
♪

ペロリと唇を舐める加賀と蠱惑的な雰囲気を出す赤城は、壁に貼られた一枚の等身大ポスターに熱い視線を送る。

指揮官の隠し撮りポスター（明石印 1180ダイヤ）に写る彼は、情欲を抑えきれない彼女達に微笑みを向けていた。

ユラユラと揺れる18本の尻尾がその興奮具合を示していると
いっても過言ではない。

「……………今はまだ我慢ね」

「その時の楽しみは極上のモノになるでしょうね赤城姉様？」

「ああ……本当に楽しみですわ指揮官様あ♡」

「その時は私も抑えられないかもしれないな……………」

夜の暗闇が部屋を覆っていくにつれて二人の瞳は赤と青に輝いているのがクツキリと浮かび上がっていく。

その背後には大きなケモノを象ったオーラの様なものが浮かび上がって部屋を熱気で暖めていた。

それは正しく捕食者としての風格。

彼女達の怪しげな笑い声は部屋の中に木霊する。

指揮官を狙うその必勝の策は重桜に何をもたらすのか？

それはまだ誰も知らないのだった……

第27話 バチボールとリットリオ

指揮官です。

今日はバチボールと呼ばれるスポーツを体験しております。

バチボールとは長方形の囲いの中で複数のプレイヤーが2チームに別れて行うスポーツであり、先攻のチームのプレイヤーが壁の端に向かって転がしたパリーノと呼ばれる白いボールの近くにボールを近づけてより近いボールの個数で点数を付ける競技である。

言ってみればカーリングに近い競技なのではあるが、白いボールにぶつけてはいけなかったり、側面の壁にぶつけても大丈夫なのに、反対側の壁にぶつけると反則となるというルールがあるので少し難しい。

「むう……………また反対側の壁まで転がってしまった……………」

「そんなに力を入れない方がいいよ指揮官？細やかな力配分こそがこのゲームの特徴なんだ」

「そうは言うがな……………」

「よし、ここは私が……………このリットリオがお手本を見せようじゃないか!!」

まるで宝塚の男役のように両手を広げながら、笑顔で俺の方を見るサディアの戦艦リットリオ。

新緑を思わせる鮮やかな緑色の長髪に抜群のスタイルを、劇団の男性役を務める女優が着るのような白い服で包んだ彼女は若干ナルシスト風味の入った少し変わっているKANSENだ。

そして、そんな彼女が勧めてくれたこのスポーツは中々面白い。

それに力加減という俺が最も苦手とする分野をこのスポーツは教えてくれる。

普段から全力全開でマッソーを極める道を突き進む俺に、力の上手い使い方を教えてくれるこのスポーツは本当に勉強になるな。

というか隣を通っただけで華の香りが鼻に入っって少しドキドキするわ……………

香りだけで人を惹きつける何かがあるのか？

そんな事を考えているとリットリオはボールを持って壁に向かって斜めの角度で立つ。

そしてボールを勢いよく転がした。

「このように横の壁を使って跳ね返らせ、勢いを殺す手もあるんだよ指揮官。それに転がったボールをよく見て欲しい」

「む？白いボールの後ろで止まった？……これは厳しいな」

「そうだろうか？こんなテクニクを使って相手から弾かれないようにするのにも技の一つなのさ……まあ、私ならこの程度簡単に来るけどね」

「なるほど、戦略的視点も鍛えられてこれは面白いな」

「ふふふ♪指揮官ならそう言ってくれると思っていたよ。誘った甲斐があつたというものだね？やはり美しき指揮官と共にスポーツを楽しむのは、サディアで一番美しい私の特権なのだろう」

笑顔でこちらを見るリットリオのお手本に心底感心してしまった。

自国発祥のスポーツを紹介するから一緒にしないかと言われてどんなスポーツをするのか少し心配していたが、こういう誰でも分かりやすいモノなら参加しやすい。

本来は何人か人数を集めてするスポーツらしいので、今度は皆を誘って競うのが一番面白いだろう。

まあ、所々入ってしまう自画自賛は彼女の性格上仕方ない事なんだろうが……

「うーん、あの球を弾くには上手く壁を利用しないと……」

「それでいて勢いを付け過ぎないようにしないと、またファールで点数が貰えないよ指揮官？私が、このリットリオが認める指揮官がその程度で終わるはずないだろう？」

「言ってくれるじゃないかリットリオ……よし、転がす角度はこの位か？」

俺はボールを握って左の壁に狙いを定めるとそれを見ていたリットリオが後ろからアドバイスをくれた。

「もう少し左に向けた方がいいかもしれないね？指揮官の筋肉は見る

者を魅力する素晴らしい存在だけど、このスポーツではその力が過剰なまでに発揮されやすいから、角度をもう少し付けて勢いを殺した方が良いと思うな？」

「そうか？なら少し角度を付け直すか………それ!!」

俺の転がしたボールは壁に何度もぶつかって跳ね返りながらも白いボールへと近づいていく。

リットリオの言った通り、軽く転がした筈なのにかかなりの勢いを保ったまま転がってしまった。

助言を聞いていなければまた反対側の壁にぶつけてフールになる所だったな………

「おお!?リットリオのボールを弾いたぞ!!」

「凄いじゃないか指揮官!!少し助言しただけでもうここまで上達するなんて………さすが私達の指揮官だよ」

俺の肩に手を置いて笑いかけるリットリオに俺も笑いながら言い返す。

「おいおい、そんなに煽てるなよりットリオ。まだまだお前の助言無しじゃ俺は上手く転がせないぞ?」

「何事にも挑戦あるのみさ指揮官。それにこんな風に笑いながらスポーツするのも悪くはないだろう?」

不敵に笑いながらこちらを見るリットリオに俺は肩を竦め苦笑しながら何度も頷く。

訓練や鍛錬とは違った楽しむ為のスポーツ。

たまには………こういう事をするのも悪くはないのかもしれない。

「誘ってくれてありがとなりットリオ」

「………え?」

ポツリと自然に出た自分でも意図しなかったお礼の言葉に、リットリオは少し驚いたような表情を見せたが

「ふふ♪どういたしましてだよ指揮官?ほら、今度は私の番だぞ?このリットリオにしか出来ないあつと驚くようなテクニクを指揮官にお見せしよう!!」

そう言つてその立派な双球を胸を張ることで強調し魅力的な女性

である事を示して、俺に向かつてウインクしたのだった。
…………ちよつと息子が喜んでしまいました。

だけど、こんな風に自然体で居られたのは何時ぶりの事だろうか？
リットリオと共にバチボールを続けて笑い声が絶えないスポーツ
なんて初めてだった。

戦争が終わつたら、またこんな風に気楽に遊んでみたいものだ。

~~~~~

「……………もう一度お聞かせ願えますかリットリオ様？」

「聞こえなかったのかな？一度指揮官の傍から離れて自分を見つめ直  
すんだと、私は言ったんだよ？」

母港の講堂に集まったKAN—SEN達の前で私はベルファスト  
にそう言った。

ベルファストだけではない。

指揮官の傍に寄って来るであろう各陣営の者達にも同じような事  
を言っている。

おかげでこの母港に咲き誇る美しい華の彼女達の持つ棘が、この  
リットリオに突き刺さらんと怪しい光を帯びているのが分かった。

「それは……………主人様のお世話をするなど言うことでしょうか？」

「そういう事ではないんだよ……………」

「ではどういう事なのでしょう？私だけでなく、他の陣営の方々ま  
で集めて同じような事を仰られているリットリオ様の意図を計りか  
ねます」

困惑する彼女の様子を見ながらここに集まる可憐な華達の表情も  
見ていくと、幾人かが私の言う事を理解したようだ。

それでも苦虫を噛み潰したような表情を浮かべてこちらを見てい  
た。

「簡単に話そうか……一度指揮官に向けている盲目的な好意を外すんだ」

「……………それは」

「無いとは言わせないよ？ここに集まる誰もが彼に抱いているはずさ……………無論私も」

そう、ここに居る誰しもが指揮官に対する好意を持っており、言われなければ気が付かないような深い想いを抱いている。

だが今の私達の想いは彼には重過ぎるのだ。

「はつきりと言おう。指揮官の心は深く傷付いたままで、最前線の激戦地から帰って来ていない」

「そんな!？」

「ああそうだ……………あの捨て駒時代の最前線から心が……………臨戦態勢を崩せずにいるんだよ」

思わずといった様子で口を両手で抑えるベルファストに私は目を伏せる。

これから言う言葉は本当は言いたくはない程に酷い話だ。

だが言わなければならぬ。

その役目が私にはある。

知ってしまった私には皆に伝えなければならない義務があるのだ。

「ある種のトラウマ……………ユニオンでの戦場における心理学で新たに定義された戦闘ストレス反応というものだったかな？それによる依存が彼を蝕んでいると私は考えている」

「戦闘ストレス反応？それはいったいどういうものなのかしら？」

「そうだね赤城、例えば戦場で砲撃に常に晒される最前線で戦い続けると、人は精神的に苦痛を感じ続けてアルコール依存症や自律神経失調症等を引き起こす。これが戦闘ストレス反応という訳なんだ。一般的にはシエルショックとも呼ばれているよ」

「あの指揮官がか？どうにも信じられぬ」

重桜の一航戦 赤城と加賀は互いに首を傾げながら私の話を理解

しようとしていた。

理解しようとして首を傾げるのは仕方の無い事だろう。

何故なら……私達は戦う為に生まれたKAN—SENなのだから。

「私達KAN—SENと人間である指揮官は元々が本質の違う存在なんだよ？軍船である私達は戦う事にストレスはあまり感じないだろうけど、人間である指揮官には大きな苦痛を伴っているんだよ」

「でもでも指揮官はそんな風には見えないよ？考え過ぎなんじゃないかな？」

「北方のパーミヤチ・メルクーリヤ。このリットリオの美しさには負けるが、君は本当に薔薇より美しく可憐だね？」

「ふえ!?あ、ありがとう……」

「……でも一度でも指揮官に愛称であるクーちゃんと呼ばれた事はあつたかな？」

「……それは……無いわ」

「ここに居る皆が数年前から知り合つて、共に戦場を駆け抜けたのに呼んで欲しいと申告した愛称で呼ばれた事すら無い。つまり指揮官にその余裕すら残っていないという事でもあるんだ」

視線を逸らすパーミヤチ・メルクーリヤに私はそう言い切つた。

幾つか間違えて解釈している部分もあるだろうけど、恐らく大体が当たっていると思う。

そうでなければ説明がつかない。

これだけの美女や美少女に毎日のように言い寄られてアピールを受けているのに、手を出そうとしないなんて男として有り得なさ過ぎる。

極秘に入手した情報では指揮官にソツチの趣味は無く、女性の水着写真集も持っているという事だ。

ならば私達に手を出そうとしないのは可笑し過ぎる。

「つまり……指揮官は何か依存してるとつていうのか？そりや何なんだ？」

「確かにそうなの！普通に執務して皆と過ごしているの!!」

「うくん……私達じゃ気が付きにくい事なのかな？」

ジャン・バールにロング・アイランドそれに瑞鶴がそれぞれ考え込みながら頭を捻る。

分からないのも無理はないだろう。

普段から彼が行っている事であり、それが日常生活の風景として受け入れられてしまっている”ソレ”に気が付けるのは本当に少ない。

「……もしや」

「およう？シエフィールドさん何か気が付いたんですか？」

「大事な事ですから、気が付いた事を私にも聞かせてくださいね？」

顎に手を当てて考え込んでいたシエフィールドが何かに気が付いた。

それを見ていたサフォークとローンが彼女に聞きに行く。

そう、ソレは普段の生活に組み込まれていて全く気が付きにくいモノ。

普段は勉強に使うテーブルに指揮官の記録を記した手帳を何冊も広げるシャングリラもどうやら気が付いたようだ。

「夕張は分かった。多分アレだと思う」

「妾も……覚えている」

「うくん……あては分からないよ？二人とも教えてくれないかな？」

夕張は分かったようだが……信濃はよく分からない。

長良はそんな二人に聞こうと話しかけている。

「麗しき乙女達が美しき指揮官を心配する……なんて美しい光景……ああ……しまった、あまりの尊さと可憐さに思わず話すのを忘れてしまったよ。それでも私の美しさ程ではないけれどね？」

ドイツチュラントが恥ずかしそうにコソコソとテイルピッツとプリンツ・オイゲンに小声で聞こうと話す様なんて健気では非とも指揮官に見てもらいたい。

しかし私の知る全てを彼女達に伝えなければ、この先必ず指揮官との関係に致命的な破綻を産むかもしれないと思うと心が張り裂けそうになる。

だからこの素晴らしい光景を見ながら言うのだ。

「気が付いた人もいるようだが教えよう。指揮官が依存しているもの……それは筋肉なんだ」

私がそう言うのと皆揃って納得した様子を見せた。

というよりも何故気が付かなかったのか不思議なくらいだと首を傾げる者達も居た。

美しさの磨かれたこのリットリオだからこそ気が付けたこの事を自慢して回りたい所だ。

まあ私の趣向よりも今は指揮官の事が最優先である。

「つまり指揮官が筋肉に依存している間に私達が彼に愛を囁いて求めたとしても、必ず何処かで破綻するだろう。だからこそ今は指揮官に癒しを与えて心に余裕を……いや、私達KAN—SENへと関心を寄せてもらう必要がある」

握り拳を作りながら壇上で熱弁する私。

そう、指揮官の心さえ癒すことが出来れば私達KAN—SENは何も後ろめたい事も無く彼と蜜月の毎日を送る事が出来るはずなのだ。独占したい娘もいるだろうし、そこは折り合いを付けて予定を立てる等の対策を立てればいい。

「彼の愛を求めたいのは分かる……だが今は我々KAN—SEN一同が一丸となって指揮官の心を癒す事が最優先じゃないかい？」

「つまりリットリオ様は……ご主人様を癒して差し上げるべき事が最優先である？」

ベルファストが顎に手を当てながらそう言う。

その姿はまるで一枚の絵画の様に様になっている。

男であれば思わず口説きたくなるような美しさを自分の美しさと比較しながら私は大きく頷いた。

「指揮官と蜜月の毎日を送る為にも今は……今だけは彼に癒しを与えて共に愛を分かち合おうではないか!!独占したい者もいるだろう。」

しかし、指揮官程の英雄が一人だけの伴侶で終わると思うかい？そんなのありえないね!!」

壇上の机を作っていた握り拳で強く叩きながら私は訴える。

私達には指揮官しか居ない。

それ以外に身も心も託すなどありえないと誰もが思っているからこそ、指揮官との特別な絆を結ぼうと誰もがアピールしているのだ。そんな私達を冷静に纏め上げている彼の器量の良さや、器の大きさから見ても私達全員を嫁として貰ってくれるだけの力はある筈だ。

「指揮官の心をより癒して傍で支え上げる事の出来るKAN—SENこそが最初の指輪…………ファーストレディに相応しい。第一夫人となる者こそが彼に愛を囁かれる資格を有して、この母港でのハーレムの和を作る者でなければならぬ」

「そう、なら指揮官様を癒して周囲に不和を築かせないような配慮が出来る者…………そうなる者こそが指揮官様に相応しいという訳ね?」  
「その通りだよ赤城。まあ私こと、このリットリオ程相応しい存在は居ないと思うけどね?」

「それはどうかしら?この女王たる私とウォースパイトだって指揮官を癒して支える事はできるわ?」

「ええ、しっかりと癒して差し上げましょう」

重桜の彼女やロイヤルの女王やその騎士まで参加を表明し、この講堂内に居るKAN—SEN達が私もと声を上げる。

もはやこの渦巻く熱気は誰にも止められない事だろう。

和を乱さずに指揮官の心を癒すという共通の目標に対して、表面上は一致団結してくれる。

これで指揮官の不安の種を一つ解消できた。

…………ここまで上手く扇動できるなんて、少し簡単すぎたね?

元々この母港での勢力争いにおいて最重要と言われる、指揮官の寵愛を巡って度々衝突が起きていた。

誰が最初に彼から愛を囁かれるのか?



それは彼を慕う者達にとって死活問題である。  
でもそれに対しての前提条件が変わっていたとしたら？

それは全員で当たらなければ解決出来ない事柄であれば？

東煌の言葉だったかな？

まさに今の光景は呉越同舟といった有様だ。

「……………如何に優秀で美しいこのリットリオでも中々苦勞する案件  
だったよ」

講堂内でのように指揮官を癒すのか？

そんな議題に移行して意見を出し合う皆を見ながら溜息を吐く。

分裂して争い事になるのは人間達だけで良い。

この母港は彼と私達だけの楽園なのだ。

人間と同じような事をして喜ぶのは各陣営の上層部だけだろう。

そんな事には絶対にさせない。

私達KAN—SENが殺し合うような世界だけは絶対に駄目な  
だ。

指揮官が文字通り命を削りながら勝ち得た平和を、私達が無為にし  
てしまう事だけは絶対にしたくないし、させない。

「ふふ♪まあ指揮官のファーストレイだけはこのリットリオも譲る  
気は無いけどね？」

様々な意見がぶつかり合う講堂内で私は笑う。

彼の為ならこのリットリオはいくらでも道化や扇動役を勤めよう。

それこそが私に求められる役割なのであれば。

皆に加減させるようなコントロールは私が担おう。

でも貴方が全てを知ったその時は……………貴方の愛を私に……………

## 第28話 歌とル・マラン

指揮官です

今日はとあるKAN—SENに誘われ、母港にある誰も居ないホールでスーツを着て椅子に座り待つております。

即興で組み上げられたらしいダンボールで出来た舞台上がるのはヴィシア聖座の駆逐艦ル・マラン。

しかも最近開発されたμ装備でいつもならぐーたらする事を最優先にする彼女が、ステージの上から真剣な表情でこちらを見つめていた。

絹糸のように細く柔らかな白に近い銀髪と雪のように白い肌を持つ彼女は、μ装備を身に付けている事で更に精巧に造られた西洋人形のように見える。

その瞳は十字の星のような瞳を持つ青い目をしている彼女は、改めて見れば見るほど本当に美しい。

どこか浮世絵離れした光景に見惚れていると、両手を胸に当てていたル・マランがその手をスカートの上端を握って優雅に一礼する。

俗に言うカーテシーという淑女の礼の仕方だ。

少し気後れしそうな程に厳かな雰囲気の流れているが、スポットライトを浴びる彼女の真剣な様子に俺も当てられてしまったようだ。

「……………これから唄うこの歌を指揮官に贈ります」

「ああ、聞かせてもらおう」

「すう……………—————♪♪」

「……………こいつは……………凄いな」

軽く深呼吸した後には伴奏する音楽も何も無い状態から紡がれるその歌は、まるで神に捧げる讚美歌のように透明感のあるものだった。

俺が普段筋肉を鍛えてマツソー神へとその信仰を捧げると同じように、俺個人へと捧げられるその歌は儂くも力強さを感じさせる良い歌だ。

「ル・マランにこんな才能があったなんて……………」

「……………」

スーツの下で控える筋肉が歌によって震えるようにも感じる。それ程までにル・マランの歌声は素晴らしいものだった。

両手を広げながら俺を見て唄う彼女はただひたすらに尽くすかのように歌声をホール内に響かせる。

俺なんか一人で聞くのが勿体ないくらいだ。

しかし、そんな神聖な時間も終わりを迎える。

終わりに向かうその歌は更に透明感と儂さを強く感じさせていく。

「……………」

「素晴らしい歌をありがとうル・マラン」

俺は思わず椅子から立ち上がり、両手を叩きながら彼女の立つステージへと近寄った。

遠目からは見えなかったが、彼女は大量の汗をかいてかなり消耗しているようにも見える。

あれだけ素晴らしい歌を唄うのは彼女にとって、音楽活動に特化したム装備を身に付けていてもかなりツライ事なのだろう。

何度も言うが本当に素晴らしい歌だった。

「こんな凄く歌を聴いたのは初めだ。今のル・マランはヴィシア聖座の騎士じゃなくて歌姫といったところか？」

「……………はあ……………はあ……………そこまで気に入って貰えたなら……………ふう……………私も頑張った甲斐がありましたね」

消耗し切って肩で息をしながら俺の声に笑顔でそう答えるル・マラン。

彼女の消耗具合を考えるとこのまま歩かせるのは忍びない。

俺の為に全力で唄ってくれたんだ、その後のフォローをしてあげるのは紳士として当然の事だろう。

俺の信仰するマツソー神だつてそう言うに違いない。

「ほら、ル・マラン……………それ!!」

「え?はい……………ふえ?!し、指揮官!」

ステージに立つ彼女に右手を伸ばして握手を求める振りをして、それに答えるようにル・マランの手を引いてそのまま横抱き……………所謂

お姫様抱っこで抱えあげた。

顔を真つ赤にしながら目を白黒させる彼女に、俺はそのままホールの外へと歩みを進めた。

「え？あれ？なんで？嬉しいけどなんで？え？え？え？」

俺の腕の中に居る歌姫は絶賛混乱中のようだ。

普段は公私を分けてプライベートでは凄まじく脱力する彼女にとって、この移動方法は楽で良いはずだと思っただが…………

少し説明してあげないと顔を赤くしたままパニック状態が解除される事は無さそうだ。

「疲れているんだろ？部屋まで送ろう」

「ええ!?でも…………」

「俺の為に歌を唄ってくれた歌姫へ俺からのささやかな恩返しって事で一つどうだ？今のル・マランはヴィシアの騎士じゃなくて歌姫、つまりお姫様だから紳士として当然の事をしているだけなんだよ」

「……………私……………お姫様」

「そうとも、今のル・マランはお姫様だ。ル・マラン ラ・プランセスってところか？……………お姫様、この筋肉しか取り柄の無い男に貴女を運ぶ栄誉を与えて下さいませんか？」

「……………はい」

少しキザなセリフ過ぎるが、この位大目に見てもらえるだろうか？  
実の所、ル・マランが俺に歌を聴かせてくれるというのは前から知っていた。

普段ぐーたらな彼女が、毎日頑張って皆の生活する母港の執務をこなしている俺へのお礼としてこの催しを考えてくれたのだ。

その準備を一人でコツコツと、普段の怠け具合からは想像もつかない程に進めていたのだから驚きだ。

その事を少し前に駆逐艦の子達に配るお菓子を持って来てくれた、同じヴィシアの戦艦ダンケルクがこっそりと教えてくれた。

スタイル抜群で見た目がクールビューティーなダンケルクが他の人の視線を気にしながら、コソコソと俺の耳元でル・マランが頑張ってる準備している事を伝える様子は見ていてかなり可愛かったぞ？

その時の会話はすぐにも思い出せる。

「あ、あのね指揮官？秘密にして欲しいんだけど……ル・マランがね？一生懸命指揮官に恩返ししようとして頑張っているみたいだから、その時が来たら何も言わずに付き合っただけで欲しいんだけど……」

「お、おう……胸が当たってるんだが……」

「ご、ごめんなさい!!気が付かなかった……でも私の胸の事よりル・マランの事をお願いしますね指揮官？」

「……了解した」

すんげく柔らかくてポリューミーなお胸様が当たったまま、耳元でそんな風に囁かれたら了承するしかないじゃないか……

その見た目に反して甘党で身内にはデロデロに甘々な、まさにヴィシアの聖母とまで言われる彼女からの頼みに俺は思わず首を縦に振るのだった。

「あ……きよ、興味があるなら……少し触ってみますか？」

「!!……マッソー神を信仰する紳士としてそのような真似は絶対にしないからな？自分を大事にしなさい」

「……分かりました。でも、指揮官なら触っても大丈夫ですからね？」

彼女は俺を悩殺するつもりだったのだろうか？

ある意味凄まじく悩ましい爆弾発言を残していった為に、その日の筋トレで懸垂タイム3時間の回数が3000回を突破する素晴らしいモノになったのだった。

そして今に至る訳なのだが……

腕の中のル・マランはじっと俺を見つめて満足そうに微笑んでいる。

抱えてわかる事だが、ル・マランは普段ぐーたらな生活をしているのに体重は驚くほど軽い。

KAN—SENと呼ばれる彼女達であっても体重の増減はあるし、その事で一喜一憂する事だって知っている。

しかし、それを踏まえても彼女、ル・マランの体重は無さ過ぎるのではないだろうか？

彼女が普段から全力を出さないのもここに原因があるのでは？

そんな風に考えてしまう程に彼女は重さを感じさせない。

「何か考え事ですか指揮官？」

「む？いや、ル・マランがあまりにも軽く感じてな？しっかりとご飯を食べているのか少し心配になってしまつて……いや、これはセクハラだったか？」

「……………確かにセクハラ発言ですけど……………私を心配してくれているので不問にします」

「そりやありがたい。でもル・マランは本当に羽毛のように軽くて驚いてるんだよ俺は」

「筋肉モリモリのマッチョメンな指揮官なら誰でも軽いと感じる気がするんですけど？」

確かにそうかもしれない。

俺にとつて小柄な駆逐艦の娘達は特に軽く感じているのかもしれない。

ル・マランの指摘に苦笑しつつヴィシア寮へ足を進める。

こんな他愛のない話を女性と何の緊張感も無く話せるのは相手が幼く見えるからだろうか？

「もう、聞いてますか指揮官？体重の事は女性にとつてタブーですよ？聞いてはいけませんからね？罰として指揮官には寮に着いたら私にお菓子を食べさせて下さい」

「了解だお姫様。しっかりと食べさせてあげるからな？」

「はあく……………もうダルいです。明日の委託任務をお休みしたい、出来れば有給休暇を取りたい……………永遠に」

段々ぐーたらな彼女が出てきてタレてきたル・マランに思わず笑みが零れた。

なんにせよ今日は良い一日だった。

このぐーたらなお姫様の召使いとしてしっかりとお菓子を食べさせてあげよう。

こんなに可愛いお姫様に気持ちの良い一日を過ごさせてもらった事に感謝を捧げよう。

~~~~~

「あ〜……もう仕事なんてしたくないですね」

指揮官にお姫様抱つこのままお菓子を食べさせて貰ってお姫様気分を味わっていたら、夕食まであーんで食べさせてもらってしまった幸せ絶頂なのに……明日の委託任務の事を思い出すだけで憂鬱になっってしまう。

自室のベットに戻った私は今日の事を思い返しながら、明日の予定が仕事で埋まってしまっている事実を認めたくなかった。

指揮官へ全力で歌を捧げたご褒美の後に夢から覚めるとはまさにこの事なのだろう。

所属していた私達のヴィシアという国や仲間を護った英雄である指揮官。

最初こそ血みどろになりながらも指揮を止めない猛将であるなんて話を聞いて真面目に仕事をこなしていたけれど……

本当はとても優しく自分に厳しいだけの人だった。

「私達が勝手に聞いた噂だけで決めつけてしまっていただけの事だったんですけどね……」

あの人はそんな私がぐーたらなのをすぐに見抜いたけど、誰にも言わずに頭を撫でて苦笑するだけだった。

ある時、執務室にいる指揮官の補佐として真面目に仕事を続けていた私の疲労が溜まっているのを見抜いた彼は

「美味しい紅茶と茶菓子が手に入ったんだ、トリオンファンも呼んで少し休もうじゃないか」

そう言ってお茶会に私を誘ってくれたのだけど……

「でも…仕事が……」

当時の私は上手い息抜きの仕方なんて分からなかったので困惑し

てしまう。

この世界に人の形を持つて生まれ、休息を取るタイミングが掴めずに馬車馬の如く働き続けた私にはどうしていいのか分からないお誘い。

そんな困惑も彼はお見通しで、笑いながらこう言ってくれたのだ。

「お茶会をするのは俺のわがままさ。ル・マランみたいな可愛いお嬢様とお茶する榮譽を俺に出来ないか？それに、少しくらいぐーたらして休まないと心に余裕が出来ないぞ？ほらほら、分かったらソファーに座ってカップも持ってお茶を飲もう、ぐーたら休憩の時間だぞ？」

そこからはロイヤルのメイド長が謀ったかのように、お茶の準備と姉妹艦であるル・トリオンファンを執務室に呼んで来て楽しいお茶会が始まった。

その時に指揮官は疲れている私の頭を優しく撫でながら膝枕までしてくれたのだ。

あの時の心地良さといったら……まるで全身が蕩けてしまうかと思いましたがよ……

「……っと、思わず力が抜けてヨダレが出ちゃいました」

仕事の合間にぐーたらする事。

公私を分けてきちんと休む事の重要性を指揮官は教えてくれた。

元々ぐーたら気質な私だけど、その休み方を教えてくれたのは指揮官なのだ。

あの時に膝枕と優しく撫でてくれた事が私の心を捕らえて離さない。

もっと早く知りたかったし、教えて欲しかった。

だから……

「……………ぐーたららの仕方を教えてくれた貴方が病んでいるなんて……………気が付きませんでした」

リットリオが言った事は私に大きな衝撃を与えた。

嘘だと言いたかった。

私に休み方を教えてくれたあの人が、今度は苦しんでいるかもしれないなんて……………

あの時私を救ってくれた彼の為ならば私の全てをもつて助けたい。だから少しでも癒しになればと今回の催し物を企画して練習を重ねたのだ。

結果はどちらかと言えば私の方が癒されてしまいましたけど……………

「でも諦めませんよ？指揮官が本当に癒されて私と一緒にぐーたらしてくれる時まで……………」

ヴィシア聖座の騎士として誓いましょう。

あの人を癒せるような歌を捧げられるような歌姫になってみせると。

「……………きつと……………届きますように……………」

胸に秘めた想いと共に祈りを捧げる。

その日が早く訪れますように……………

第29話 急展開とZ23

指揮官です。

いきなり大ピンチです。

床に倒れる俺の上に、鉄血の駆逐艦 Z23 通称ニーミが馬乗りになるようにして乗っています。

しかも瞳を潤ませて頬を赤く上気させたまま、じつと俺と視線を合わせて時が止まってしまっているのですよ。

「……………あうっ♡……………し、指揮官…私…はう♡…私は……………」

「……………ニーミ」

しかも馬乗りになっているニーミのお胸様を俺の両手がしつかりと握ってしまい、駆逐艦の中でも大きい方のお胸様の柔らかさを感じて若干息子がオツキしている状態だ。

いや、ニーミが俺の腹の上に乗ってくれたお陰でバレてないけど……………このままじゃ俺が（社会的に）死ぬな。

どうしてこうなってしまったのだろうか？

きっかけはたった数分前の出来事である……………

本部に送る為の参考資料を母港の資料室から持ち出して、片付けるのを忘れた俺は絶賛返却の道を歩んでいた。

「……………はあ……………なんで使った資料を昨日のうちに戻さなかったんだ俺は……………」

執務が残っているのに執務室を離れなければならない憂鬱さに、溜息を吐きながら辿り着いた資料室の扉に手を掛けてゆっくりと開く。

「あれ？珍しいですね指揮官、この時間は執務中の筈ではないのですか？」

「ん？そつちこそ珍しいというか……………私服のニーミなんて珍しいな」

「今日は非番なので空いた時間に少し勉強をしようかと思いましたが……………」

「さすが努力家のニーミだな。感心するよ」

白いワンピースに黒い前掛けのような物を付けた私服を着ている
ニーミが、両手一杯に資料を持って資料室の中にいた。

スカートの丈が短過ぎるんじゃないのかとか、背中を覆う布地が無
いから大きく見せ過ぎじゃないのかとかいうツツコミは重桜のKA
N—SEN達の格好を思い出してそのまま飲み込んだ。

眩し過ぎる健康的なスラリとした足に白いソックスと黒い靴は良
く似合っており、彼女の綺麗な金髪の上に載せてある黒い帽子もア
セントとしてその可憐さと美しさを際立たせている。

たぶん非番でもお洒落には手を抜かない努力家のニーミだからこ
そ、自分の見せ方にこだわったコーディネートなのだろう。

これはマツソー紳士として服装を褒めてあげべきなのだろうか
？

でも上官の俺が褒めたらそれはそれでセクハラにならないだろ
うか？

せっかくの非番をお洒落して有意義な時間を過ごそうとしている
ニーミに、失礼になってしまふのではないだろうかと頭の中でグル
グルと思考がループしてしまう。

「……………な、なんですか？そんなにジロジロ見るなんて……………私に何か
あるんですか指揮官？」

「あ、いや……………服が良く似合っているぞニーミ？可愛いじゃないか」
長考している間にニーミの事をずっと見つめ続けていたようだ。

咄嗟にそう返したけれど、これで良かったのか？

つい筋肉反射的に褒めるような発言をしてしまったが……………

「……………ふえっ!?あ、ありがとうございます……………ごきます」

「……………おう」

恥ずかしそうに顔を赤らめたニーミがキョロキョロと視線を四方
八方にさ迷わせながら小声で礼を言ってきた。

……………ニーミがめちやくちや可愛いんですけど？

普段から真面目で優等生タイプのニーミが、精一杯のお洒落をして
褒められて恥ずかしがるなんてシチュエーションはなかなかお目
にかかれない。

「必要な資料を取るので失礼します!!」

「お、おう……気を付けてな……」

褒められ慣れてなかったのかニーミは早口でそう言うと、足早に資料室の奥へと進んで行ってしまった。

そんな可愛げのある行動に何故か俺はホッコリしてその場でしばらく立ち尽くしてしまう。

「……つと、そうだ。資料を戻さない……」

そんな心の保養に有難みを感じつつも、当初の目的であった参考資料を元々綴じられていたファイルに仕舞い込んで元の位置に戻した。

これで俺のミツシヨンはコンプリート。

「さて、残りの仕事も張り切って頑張りますかね……ん？」

軽く伸びをして身体の筋肉に喝を入れてみると、部屋の奥の方でニーミが中央から折り曲げた状態の脚立に登って棚の上にある資料を取ろうとしているのが見えた。

そして見てしまった。

ニーミの使っている脚立の側面にある固定器具がしっかりと固定されていない事を。

「いきなり笑顔で褒めてくれるなんて……卑怯ですよ指揮官。んん!! えつと……あの資料はこの辺りに……」

ニーミは資料を探すのに夢中で気が付いていない。

先程俺が服装を褒めた事でまだ耳が赤いままなのを見るに、照れたまま行動して元来真面目で注意深い彼女らしからぬミスを犯してしまったようだ。

あれは非常に危険な状態だ。

そう思った俺はニーミの居る方に歩き出す。

「あ、ありましたね……あれ? し、指揮官!? まだ居たんですか!? つて?! こつちに来ないで下さい!!」

「え? いや、そういう訳には……」

「だ、だからー！こっちに来ないで下さい指揮官!!」
「でもな……………」

危険な状態のニーミを助けようと近寄る俺に、顔を真っ赤にしながら来るなどという彼女。

「いったいどうしたと言うのだろうか？」

必死なニーミの様子に首を捻りつつ近寄る俺に、涙目になりつつある彼女は一度目を閉じて何かを言い淀む。

そして意を決したように目を閉じたまま、大きな声で俺に向かって

「下着が……………そのまま進むとパンツが見えちゃうんです!!」

理由に納得した。

この母港で指揮官をしていると普通にパンチラやブラチラする娘達が多いし、それを気にする様子も無い娘達（主に重桜）が居るので勘違いしそうになるが、基本的に見られたら恥ずかしがる羞恥心を持つているのは当たり前前の事だ。

そんな乙女であるニーミが異性である俺に下着を見られるなんて死ぬ程恥ずかしいに決まっているだろう。

だが危険な状態である彼女を放って置く訳にはいかないだろう。

ここは理由を説明してニーミに少し恥ずかしい思いをさせてしまおうが、安全を確保するべきだ。

「それはすまん。だがニーミ、俺の話を聞いて欲しい」

「そ、そこから話してください!!それ以上はダメですからね!?ぜったいですよ?!」

「分かった。落ち着けニーミ……………っ!」

「は、はい……………きゃあ?!」

なんとかニーミを落ち着かせる事に成功したが、脚立が持たなかった。

留め金が外れて崩れ落ちる。

その瞬間に俺は全身のマッソーをフルマッソー状態にまで瞬時に解放し、全速力でニーミに駆け寄りながらただ一言の命令を叫ぶ。

「飛べ!!」

それを聞いたニーミは脚立から俺の方に飛んだ。

全てが遅く感じる程に集中する。

ニーミを、彼女を傷一つ付けること無く救助する事を。

だが……………このままでは届かない!!

彼女のパンツの件もあり、少し離れた場所で止まっていた為に受け止める場所まで僅かに届きそうに無いのだ。

「うりやああああああああああああ!!!」

だから俺はそこに向かって飛び込んだ。

少しでも距離を縮める為にも全力で止まる事も考えずに。

全てはニーミを助ける為だけに最善を尽くす。

そして……………俺の思いは届いた。

軽いニーミの身体を両腕で受け止めると、そのまま胸の中に抱きしめるようにして護って俺の身体が床にぶつかる様に位置を入れ替える。

少し身体を空中で捻る事でニーミを俺の身体の上にしてこれから起こる事から護る事が出来るだろう。

崩れ落ちる脚立から。

衝撃は一瞬だった。

派手な音を立てながら俺と脚立は衝突する。

頭頂部から後頭部にかけて直撃した脚立の硬さに、本当の意味で目から火花が散るかと思う程の激痛が俺を襲った。

それでもこの腕の中の彼女だけは護ってみせる。

その思いだけで頭の痛みを耐え抜いて肩から床に着地した。

……意識が……朦朧と……

影が……俺を……覗き込んで……？

影がよく分からない……触ってみる……

柔らかい？……真ん中は小さい……硬くなっていく？

分からない……分からないからもつと……触る

影が震えている……触っていると……影が震えている？

「……ふあ♡……あ♡……また♡またあ来ちやう♡」

声が聞こえた。

聞いた事がある声だ。

誰だろう？

俺は誰と一緒に……っ?!

「きちやつ?!……ふああああああああ♡」

意識がハッキリした。

俺の上でビクビクと痙攣しながら嬌声をあげるニーミの痴態で目が覚めた。

天を仰ぎ頬を上気させて目は潤み、口の端からヨダレを垂らしながら身体を震わせるニーミが俺の目前にハッキリと見える。

よく見ると彼女の胸に俺の手がしっかりとモミモミコネコネと刺激していた。

これって……かなりヤバいのでは？

「はあ♡……指揮官♡……もつとお♡」

そんな俺の懸念は大当たりで、酷く艶っぽい吐息を零しながらニーミは内股を擦り寄らせる。

とんでもなく息子大歓喜の展開だ。

そして、社会的責任が伴いそうな今に至るのである。

酷い興奮状態のニーミを刺激しないように手を胸から離そうとするが、それより先に彼女は俺の両手の上に自身の手を重ねて自分の胸を強く握らせる。

「もう一回♡もう一回ですよ指揮官♡」

「……………これはあかん、目の中に♡が写ってるヤツだ」

俺の上で蠱惑的な表情を浮かべて完全にスイッチが入った状態で暴走中のニーミに成す術がない。

というか鉄血の娘達ってハロウインの格好で分かってたけど、普段規律を重んじる娘達が多いのに一度タガが外れるとヤバいつていうかエロい方向に突き進む連中多過ぎないか!?

おかげで毎回目のやり場に困るんですけどお!?

「指揮官♡私を……………見てください♡」

「っは!?!いつの間にかニーミが前掛けを取っている!?!」

別な事を考えていたらニーミが前掛けを脱いで服のボタンを半分くらいまで外してた。

いかんぞ!!

このままではニーミの生お胸様と御対面してマツソーで抑え込んでいるリビドーに脳内を制圧されてしまう!!

それでも良いんじゃないかという考えも出てきているが……………それは本当にニーミの意志なのか?

「はう♡……………今だから言いますよ指揮官♡私はですね……………指揮官の事が大好きなんですよ♡」

なんか最終確認取れましたああああああああああああ!!!

ニーミから大胆な告白を貰ってしまいましたぞ?!

色っぽくありながらも、はにかむ様にそう言うニーミはとても可愛く見えた。

だが童貞の俺には初めての告白を受けてどうしていいのかわからない。

というかこんなエロゲー染みた告白なんてされた事あるわきゃねーだろ!!

「あは♡ほら指揮官♡これで直に触ってくださいすよね?」

「……………やべえ鼻血出そう」

絶賛混乱中の俺に更なる苦境が訪れる。

ニーミが服のボタンを外し終えてしまった。

もはやこれまでなのか?

ニーミは俺の手を取ると、生お胸様に向かって押し付けようと

……………

「ふにゃ!?……………きゆう」

「え?……………おおぅ……………」

その瞬間、不思議な事が起こった。

ニーミの頭に向かって、棚の上にあった少々厚みのある資料を挟んだファイルが落ちてきたのだ。

見事に直上からファイルが直撃したニーミは撃沈。

そのまま俺の上で目を回して気絶してしまった。

「……………危機一髪といったところか?」

俺の胸の上で気絶したニーミの頭を撫でながら天井を見つめる。

本当に危なかった。

しかし、ニーミに告白されるとは思ひもしなかった……………

「……………いや、俺が考えないようになっていただけか?」

好意を寄せられる。

それ自体は悪い事ではない。

だが好意を寄せてくる彼女に俺は誠意を持って答えられるのだろうか？

筋肉を鍛える事で煩惱を昇華し続けた俺には、彼女達を納得させるような想いを伝える事が出来るのだろうか？

「童貞の俺にはキツイ話だが……いつかは考えるべきなんだろうか？」

そういう意味では今回のニーミの告白には考えさせられたし、そういう事が起こりうるのだと学ばされた。

可愛い寝顔を見せるニーミの頭を撫でながら俺はひたすら考える。

その時になって彼女達が胸を張って好意を寄せて良かったと言われる漢でありたいと。

……あと、ニーミはボタンを閉じて鉄血寮へ送っておきました。

正直……スゴい勿体ないような気がしたなあ……

~~~~~

「……………あああああああああああああああああああああ  
!!!」

私ことZ23 ニーミは自室のベッドの上で毛布を頭から被った状態でゴロゴロと転がる。

鏡が無いから見えないけど、たぶん顔は真っ赤に染まっている事だろう。

とんでもなく恥ずかしい!!

指揮官の上で発情してオネダリするなんて……

「明日から指揮官とどう顔を合わせればいいんですか……」

たぶん友人の3人にこの事が知られたら……

『ニーミ……そんな淫乱だったですか？』（ドン引き）

『ラフィーは別に気にしない……………うん、気にしない』（徐々に後退りしながら）

『やっぱり指揮官のお手手はスゴいですよね!? ニーミちゃんも病み付きになっちゃうのが分かりますか? えへへへく♪私もあの感触を思い出したら……………ああん♡』（内股を擦り寄せながらクネクネする）

……………最後だけおかしな反応だけど、だいたいこんな反応だろう。そもそも自分は真面目で通っていた筈なのに、意識が朦朧としていた指揮官に触られただけであんな風になるのはおかしい。

「……………私は……………淫乱なのでしょうか?」

ゴロゴロするのを止めてあの時の事を思い出してみた。

確かに指揮官とそういう関係に後々はなっていきたいという想いはある。

それで指揮官に胸を触られた瞬間に……………気持ち良さが、快感が全身を駆け巡ってそれだけしか考えられなくなってしまった。

指揮官から与えられる快樂をもつと感じていたい。

ただそれだけを考えて色々口走っていたようにも思える。

流石に指揮官への特別な想いまでは話してはいないだろうけど

……………

「でもこれは指揮官に想いを伝えるチャンスなのでは?」

今はまだリットリオさんが言っていたように指揮官の心を癒す時間なのかもしれない。

「でも戦場での依存症は根深いと聞きますし……………だ、男性なら女に溺れるって方法もあると資料にありました!!」

自分で言っていて恥ずかしくなってきたが、そういう事もあると資料には載っていた。

指揮官を私という女に溺れさせながら一緒にケアしていく……………というプランはどうだろうか?

「……………これなら私も満たされて、指揮官も癒される良い方法かもしれませんね」

そうと決まれば行動開始だ。

少し恥ずかしいけど、これは指揮官を癒す為………決して、決してあの気持ち良さをもう一度感じたいとか、その更に先までしたらどれくらい気持ち良いのだろうかとかいう邪な思いではありませんからね？

「こういう時の資料を集めなくては………ここ、これも勉強ですから」  
頬が熱くなるのを自覚しながらロイヤルの友人から無理矢理、そう、無理矢理渡されていた成人指定の雑誌をベットの下角から取り出してページを開く。

………ここ、こんな事をするんですか？

扇情的過ぎる光景の広がるページをゆつくりと、しかし見落としてが無いようにじつくりと学んでいく。

そう、これは未来に活かす為の勉強なのだ。

………でも………こんな事されたら………はう………

熟読し過ぎて次の日に友人達から目の下のクマを指摘されたのはまた別のお話ですよ？

クリスマスだったよ!! スペシャル篇

《明石とお菓》

指揮官です。

昨日はクリスマスパーティーに参加していました。

はい、言い方から分かるようにクリスマスパーティーに着慣れないスーツを着て参加していたんですよ。

いつの間にかネクタイは無いし、スーツは着崩して胸元を大きく開いていやがるぞ……………」

「……………」これはいったいどういう事だ?」

現在地は昨日クリスマスパーティーをしていた母港の多目的ホール。

ダンスの練習なんかでもよく使うホールを、ロイヤルメイド隊が飾り付けをして即席パーティー会場にした場所。

そのこの一番奥に俺用に用意したであろう前世の価値にして諭吉数百人のソファ―に足を組んで肘掛に左肘を着き、その上の手で頭を支えるような格好で俺は座っていた。

「全く記憶が無い……………」

楽しいパーティーに参加して母港の皆とクリスマスを満喫していた筈なんだが……………」

おかしい。

俺は酒に酔っても記憶が残る方であり、こんな風に酒に溺れるような事は無かった筈だ。

「無視しておきたかったが……………」一応声を掛けるべきだよな……………」明石」

「うにゃあ!! し、し、し、指揮官?! 起きたにゃ!?!」

俺の前にある赤いテーブルクロスで装飾された食べ物満載した机の影に隠れる重桜の工作艦 明石が絶賛挙動不審な態度でこつちをチラ見していたので声を掛けた。

というかこの反応を見るに絶対なんか知ってるぞコイツ。

緑髪のロリ猫娘である明石は黒と赤のリボンとフリルたっぷりパーティードレス姿で涙目になりながらフルフルと震えており、庇護欲が湧き立てられそうになるが腹筋に力を入れてそれを無効化する。

さて、今回のコイツはいったい何をやらかしたんだ？

とりあえず第一被疑者の取り調べをしなければな……………

「ごめんなさいにや！許してにや！赤城達に4万ダイヤ渡されてつい……………薬を盛っちゃったんだにや☆」

テヘペロって感じで緩く言ってるがギルティだな。

俺は無言でソファから立ち上がって明石の側まで歩くと軽く、そう軽く明石の頭を左手で握って持ち上げる。

「ぎいにやあああああ!!ごめんなさいにや！ごめんなさいにやあ!!許してにやあ!!出来心だったんだにや!!」

萌え袖の腕と白ニーソの足をバタつかせながら、色気のいの字も見えない程にパンモロ（緑と白のストライプ）しつつ暴れる明石にお仕置きしながら周りの惨状を改めて確認した。

パーティ会場全体にうちの母港に所属しているKAN—SEN達がパーティードレスを着たままゴロゴロと床に転がっている。

そして皆揃って恍惚の表情を浮かべたまま意識が無い。

「……………おい明石、いったい俺に盛った薬ってのはどんなヤツなんだ？」

「言うにや！言うにや!!だから離してにや!!本当に反省したから離してにやあああああ!!」

「……………ほらよ」

「うううう……………自業自得とはいえ酷い目にあつたにやあ……………でもなんだかだんだん気持ち良くなったような気がしたにやあ……………」

さめざめと泣く明石を床に下ろした俺は明石に視線を合わせる為に、片膝を付いて視線の高さを合わせる。

なんか小声でボソツと言ったような気がするけど、それよりもまずはこのパーティ会場の惨状の切っ掛けであろう薬について聞かなくては。

「し、指揮官？ちよつと近いにや……………明石、そんなに見つめられると照れるにや」

「む？…そうか？これならどうだ？」

「ああ、勿体ない事したにや……………コホン、それくらいで大丈夫にや。えつと……………指揮官に使ったお薬は……………酔いを少しだけ深くするお薬なんだにや」

「酔いを深くする薬？」

「そうなんだにや。普段から指揮官はウィスキーを7本くらい飲んで酔った状態には見えないんだにや……………だから赤城達が酔っ払った状態を作り出してそのまま性なる夜へと持ち込もうとしたんだにや」

「頭痛くなってきた……………」

つまり明石の話を纏めるところか？

赤城達が薬で強制的に酔った俺をクリスマス夜の性夜へと引きずり込もうとしたって事か？

……………何気にヤバ過ぎだろこれ。

俺の貞操が危うく貪り喰われる所だったわ。

最近の重桜の過激派達は既成事実を作ろうとしてマジで笑えない事態が多過ぎるんですか？

お陰様で筋肉との対話の時間が増えて、腕の太さが2Lのペットボトルより少し太いくらいまでサイズアップしたんだよなあ……………

本当に昔憧れたヒーローみたいな肉体になってきたもんだ……………

正直思考放棄しようか迷う案件なのだが、この母港の最高責任者としてこの事態を収集しなければならぬ。

酔っ払った俺がいったいどうやってこの惨状を作り上げたのか？

そこを確認しなくては。

「それで？酔っ払った俺はどうやって皆をこんな状態にしちまったんだ？」

「それはだにや……………」

「それは？」

目を泳がせながら言い淀む明石。

……………なんか嫌な予感がするぞ？

というか目を泳がせてるように見える明石だが、萌え袖から指を出してイジイジしながら内股を擦り合わせてモジモジしている。

それに上目遣いでこちらをチラチラ見ながら少し頬を赤くしているぞ？

何故だ？

「指揮官は……………皆のご主人様になったのにや」

……………は？

理解不能だわ。

皆のご主人様？

それはロイヤルの呼び方的なアレか？

というか何だそれは？

「うくん……………なんて説明すればいいのかにや……………」

「……………本当にろくでもない予感しかしないんだが？」

「とにかく昨日の指揮官は酔っ払った影響でとんでもない事を仕出かしてたのにや」

「本当に頭が痛い……………筋トレしにトレーニングルームに行こうかな……………」

「……………一応聞くかにや？」

「……………おう」

非常に億劫なのだが……………聞くとしようか。

昨日の聖夜にいったい何があったのか本当に聞きたくはないが聞くんだ。

後でめちやくちや後悔しそうだなコレは……………



~~~~~

「指揮官のワインに薬を入れたにや。これで指揮官は酔っ払ってしま
うのにや♪」

「良くやったわ明石。これで指揮官様とのクリスマスの夜は更に熱く
……………うふふふふ♪」

「……………少し卑怯な気もするが、アイツを癒す為にも少しは女の味を
覚えて貰わないとな……………だが私も滾ってきたぞ!!」

明石の報告に一航戦の二人が怪しく嗤う。

「本当は私一人で指揮官様を御癒しになりたかったのに……………」

「隼鷹だつてそうよ？でもオサナナジミの隼鷹も彼を癒す為なら協力
しないといけないよね？」

大鳳と隼鷹はそう言つて残念そうにしてはいるものの、これから起
こる出来事に胸を膨らませていた。

「お姉さんはいつでも良いわよ？指揮官をいーっぱい甘やかせてあげ
るんだから♪」

「うんうん♪これもお姉ちゃん特権つてヤツよね？先に酔い潰れ
ちやつた瑞鶴の代わりに先にお姉ちゃんが味見してあげなきゃね♪」

愛宕に翔鶴が不敵に嗤う。

これから起こるとつておきの一大イベントを前に機嫌がとても良
い様子だ。

そう、これは聖なる夜に行われる性なる性夜なのだ。

明石はダイヤを貰つてホクホク。

赤城達は指揮官を喰らつ……………癒せてホクホク。

どちらも損をしない公平な取引なのだ。

「それじゃあ明石はこの辺りで失礼するにや♪赤城達は指揮官と楽し
むと良いのにや♪」

「ええ、パーティを楽しみましょう……………うふふ♪」

パーティの雰囲気当てられて笑顔で薬を入れたワインを飲む指

フィールドが、指揮官に恐る恐る近寄って様子を伺う。

普段無表情で何事も動じないシエフィールドだが、あまりに様子の違う指揮官に狼狽えていた。

「……………シエファイか」

「!?!?!?!」

シエフィールドの目が見開かれる。

普段は感じないようなむせる程の色気を感じさせる声色を含んだ声で、決して呼ばれない愛称で指揮官から呼ばれた。

それだけで最早異常事態だ。

「シエファイ、どうした？お前らしくもないぞ？」

「……………ご主人様」

ソファアからゆつくりと立ち上がってシエフィールドに歩み寄る。

いつの間にかスーツも着崩して胸元が……………筋肉で盛り上がった大きな胸板と艶かしい鎖骨に首筋が見えていた。

彼女は指揮官から発せられる謎の圧で動けそうにない。

そしてその距離が0になった瞬間……………

「ほら、その顔をよく見せろシエファイ」

「……………ふえ？」

右手で流れる様な顎クイ。

それはこの母港の全てのKAN—SENが憧れる指揮官からの少女漫画や雑誌で見た夢みたいな行為。

もはやシエフィールドに正常な思考回路は残っていないかった。

「綺麗な目だな……………もつとよく見せてくれ」

「は、はい……………」

右手で顎クイをした状態のまま左手で髪を梳きつつ、その頬を優しく撫でる。

「どうした？動かないと……………その唇を奪うぞ？」

「……………はう」

シエフィールドは顔を真っ赤にして失神した。

それを見た指揮官は優しく床にシエフィールドを寝かして、顔をこちらに……いまだに動けないKAN—SEN達に視線を向けられている。

「さあ、夜は……長いぞ？」

見た事も無い艶やかな、そして凄味を感じさせる笑みをこちらに向けていた。

そこから始まる蹂躪劇。

赤城と加賀の一航戦は二人揃ってあの太い腕で抱きしめられながら耳元で何かを囁かれてそのまま撃沈。

大鳳は壁ドンからの密着で首元にキスマークを付けられてそのまま轟沈。

隼鷹は大鳳にした事に憤慨して怒っていたが、怒ったまま後ろを向いたのが運の尽きで、そのまま後ろから抱きすくめられて耳を甘噛みされながらの囁きで沈没。

愛宕と翔鶴に至っては甘やかそうとして逆にデロデロに甘やかされて逆襲に合ってしまう。

そんなこんなをしている間に重桜が誇るヤベー奴らが速攻で墮ちてしまった影響は凄まじく、そこからはまさに釣瓶打ちと言っても過言ではない。

もはや全ての陣営のKAN—SEN達が指揮官による蹂躪を止める事は出来なかった。

その惨劇の最中、明石はなにしていたか？

明石はそのテーブルクロスの下に隠れてたにや

……し、指揮官？その手は何にや？

む、無理にや!!あんなの止められないにや!!!

というか……………ちよつと明石も口説かれたかつたと思つたり
……………にやにや!? アイアンクローはやめて
にやあああああああああああ!!!!

お正月だよ!!初詣マツソー!! 《初詣とジャベリン》

指揮官です。

今年も無事に新年を迎える事が出来ました。

今は重桜の寮区画に数年前に建立した神社に朝日が昇る前に向かっております。

重桜の娘達の中には巫女をしている子達も居るので、その神職を全うして貰う為にも俺の使わず貯まる一方の貯金を全て使い、資材を集めて饅頭達を指揮して凄く立派な神社を建てました。

「まああの時貯まっていた金は全部使って無くなったがな……………」

「でもでもくまた貯まってるんでしょ?」

「使い道が無いからな」

「そんなこと言いつつ皆に晴れ着を買ってあげてる指揮官つてく本当に女の子のキュンキュン来る乙女心を凄くくすぐってますよ?」

「……………そんなつもりはないんだがな」

「うんうん♪指揮官が素でそんな事やっちゃうから皆も指揮官にメロメロなんですよ♪」

神社への階段を登りつつ、後頭部を搔いて視線を逸らす俺にロイヤル駆逐艦 ジャベリンはまるで向日葵のような眩しい笑顔を向ける。

若干青紫っぽい髪を普段は結び上げてクラウンの髪留めやリボンで留めている彼女だが、今日は髪を降ろしたままいつもの白いフード付きワンピースを着ている。

イメージチェンジという奴だろうか?

無垢に笑うその笑顔は俺の心に安らぎを齎してくれる。

「えへへ〜♪指揮官もしかして私の髪が気になります?指揮官つてくいつも頭を撫でてくれる時に、髪を梳いてくれる時があるからもしかして髪の毛触るのが好きなんじゃないかな〜って思ったんですよ!!だから思い切って髪留めを外してみました!!」

「そうか……………無意識だったな」

「そうなんですか?でも指揮官に撫でて貰えるの気持ちいいからつい

ついオネダリしちゃうんですよ♪」

「……………マッソー撫ではしないぞ?」

「え~~~~~~~~!!なんですか!!気持ちいいからお願いしますよ!!」

悲痛な表情で俺の右手に縋り付くジャベリン。

そこまでして撫でて貰いたいのか(困惑)

それにあの撫で方したらお前……………

「あ、粗相してもそのまま続けて下さいね?」

「やる前提なのか!?!」

「いや〜♪気持ち良過ぎて自分で止められないんですよ♪……………
思い出したら疼いちゃいました」

「おいおい……………ここは神様の通る道の半ばだぞ?罰当たりだろ?」

「不敬で罰当たり……………でもなんだか背徳感があってゾクゾクしちゃいます♪」

「しまった……………コイツもシリアスと同類だった……………」

思わず天を仰ぐ俺。

その間にもジャベリンは俺の右腕に、身体をクネらせながら擦り付けて自家発電を初めてしまっている。

中学生位の少女が大人の男の腕で発情するってそれはそれで絵面の犯罪臭がヤバいんだが?

「はあん♡こんなに昂らせて……………焦らすのはイジワルですよ指揮官♪」

「いや、俺は何もしてないぞ?!」

「良いですよ♪指揮官なら良いです♡ここで初めてを……………あ、新年早々にこういうのするのって姫初めって言うんですけど?後から登って来る皆に見られながらの姫初め……………ジャベリンとって
も興奮します!!」

「誰だコイツにこんな知識を深めさせた奴は!!」

「え?ダイドーさんとシリアスさんが渡してくれた雑誌に載ってましたよっ…」

「ダイドー級の二人は後でベルファストに説教してもらわないとな

「……………」

あまりの事態に頭を抱えているとジャベリンの声が段々嬌声へと変わっていくのが分かる。

「というか俺の腕で達しようとするのは止めて貰えませんか？」

絵面酷過ぎて俺海軍部の憲兵隊に逮捕されそうなんだが……………」

「ああん♡大丈夫ですよ指揮官♪はふう…♡指揮官以外に人は居ませんからヤリ放題ですよ♪」

「問題しかねえわ!!」

そうだった。

この母港の人間は俺だけであとは饅頭とKAN—SENしか居ないんだわここ。

「というかコイツの倫理観はどうなってるんだ？」

他にこんな奴は居な……………」重桜の連中ならやりかねんか（失望）

「いかん、このままだとズルズルとジャベリンのペースに惹き込まれて……………」ここで互いの純潔を交換する事になりそうだ。

「さつきまで大人しくしていた俺の息子がジャベリンの嬌声を聞いて『オラワクワクすつゾ!!』と起き上がり始めてやがる。」

……………」おかしい。

俺は普通に初詣に行く筈だったのに……………」

マッソー神よ!!

俺にこの局面を打破するお告げを……………」

俺の祈りが通じたのか……………」一筋の光が、俺とジャベリンの居る階段をそれはそれはありがたい初物である初日の出が照らし始めた。

そしてそのまま階段の上の方まで照らしていく。

「これだ!!」

「あ♡はう♡……………」ほえっ…」

「行くぞジャベリン!!」

「え……………」!?」

俺は自家発電中のア○顔になりつつあるジャベリンをお姫様抱っこして抱え上げ、階段を全力ダッシュで駆け上がる。

「マッソー神のお告げは多分こうだ《階段を登ってマッソーを鍛えつつもピンチを回避せよ》と。」

抱え上げられて惚けていたジャベリンも驚いて丈の短いスカートに手を置き、中が見えないように抑えている。

「……………そういう部分は乙女なのか（困惑）」

オープン痴女まっしぐらだった彼女でも下着を皆に披露するのは恥ずかしいらしい。

「……………どちらかと言えばそういう行為の方が俺的にはグツと来るんだか？」

「はああああああああああああああああああ!!!」

押し寄せるリビドーの攻勢に対して気合いの裂帛と共に階段を駆け上がる俺の脚の筋肉は……………ハムストリングに下腿三頭筋は煩惱エネルギーを喰らいながら爆発的な力を発揮して、一段ずつ登っていた階段を四段飛ばしで駆けてゆく。

燃え上がれ!!俺のマッソー!!!

「着いた!!!」

皆の待つ頂上の神社へととうとう辿り着いた。

新年早々に俺の息子とマッソーがワクワクする展開とんでもねえ開幕は本当に勘弁して欲しい。

「あ……………もう着いちちゃったんだ……………」

「ん?どうしたジャベリン?」

「指揮官とせつかく二人つきりだったのになあって……………もつと長く一緒に居たかったんです。イチヤイチヤしたかったんですよお……………」

「……………そうか」

「やだやだやだやだやだやだあ〜!!もつと指揮官と一緒に居たいんですう〜!!」

口をへの字に曲げて涙目の上目遣いで悲しそうに訴えてくるジャベリンは、先程の痴女モードは何処へ消えたのか分からない程に甘いん坊だった。

普段のお調子者のテンションも消えて、完全な駄々っ子になってしまったようだ。

「指揮官が急にお姫様抱っこしてくれてすつつつつごくドキドキが止まらなかったのに……………こんなにもすぐ終わっちゃうのは……………嫌です」

俺の首に手を回して離れまいとする泣き顔のジャベリンに俺の方がキユンと来たわ。

……………仕方ない。

「分かったよジャベリン。初詣の間はこのまま抱えといてやるから元氣出せよ」

「ホントに?」

「ああ、本当だぞ?」

「指揮官!!大好き!!」

泣いたカラスがなんとやら。

いつもの笑顔ではしゃぐジャベリンを見つつ、神社の本殿へと視線を移して……………俺は乞い願う。

この娘達が、いつか戦いの無い平和な世界を謳歌して……………恋をして、結婚して、子を育み老い衰えるまで壮健でありますように……………と

……………そしてジャベリンでエロスを感じてしまった俺がロリコンの道へと進みませんように!!

~~~~~

「あゝ楽しかったあゝ♪」

ロイヤル寮の自室に戻って饅頭クッションを胸に抱きながら初詣

の時を思い出す。

あの後皆でお年玉を貰って神社巡りをしたんだけど……

今年初めて指揮官を独占した私は、友人の皆からとても羨ましがられた。

「綾波ちゃんはチラチラ指揮官の方を見てたし、ラフィーちゃんは指揮官の服の裾を握って離さなかった……でも一番意外だったのは、二ーミちゃんが指揮官の背中に抱き着いて離れなかった事だよね……」

顔を真っ赤にしながらも指揮官から離れなかったのは……二ーミちゃんも本気を出し始めたって事なんだろう。

アレを見てた他の二人も目の色が変わってたし、多分すぐにでも指揮官へのアプローチ方法を考えて来るだろうなあ……

「うーん……やっぱり私も何か考えないといけないかなあ？」

自分が痴女ストレスの事をしているのは分かっている。

でも指揮官の手を見るだけで条件反射的にお臍の下が、熱くなってキュンキュンし始めるのだから自分では止められない。

「むしろこんな身体にした指揮官が責任を取って、私をお嫁さんにしてくれなきゃダメじゃないのこれ？」

リットリオさんが指揮官を癒すって言ってたけど、それならもっと楽しく皆と遊んで毎日爛れ……充実させた方が良いと思うんだけどなあ……

「……今ナチュラルに痴女っぽくなった」

どうしても指揮官の事を考えると下着がダメになるし、快樂方面に何処までも堕ちてしまいうるようになる。

今だってビショビショになり始めてるし、なんなら初詣の時に軽く何度も達していた。

「指揮官は気が付いてたかなあ？」

指揮官が絡むと本当にどうしようも無い。

気が付いて組み伏せられたらとか、そのまま頭を撫でられたらなんて妄想が正常な思考回路はすぐ横で組み立てられてしまっている程なのだから……

「やっぱり指揮官に責任を取って貰わないと……………えへへ♪」  
ウエディングドレスを着たまま式場で指揮官と致す妄想が止まらない。

こんなに淫乱じゃなかった私は何処へ消えたのでしょうか？  
それもこれも指揮官が悪いのだ。

「こんな事考えたら……………ワクワクが止まらないよお……………」  
指揮官との事を妄想するだけでワクワクドキドキの連続だ。

だからね指揮官？

私だって本気ですからね!!

誰にも一番は譲りませんよ!!

だから……………ジャベリン、全力でいきます♪

### 第30話 初夢とプリンツ・ハインリヒ 修正版

指揮官です。

初夢を見ている。

凄く嫌な悪夢です。

金切り声にも似た飛翔音を響かせながら空を舞うセイレーン側の戦闘機に翻弄される俺の乗る船。

それは初陣の記憶。

「誰か……誰か生きてるか!!」

絶え間無い機銃掃射を受けて操舵室や甲板にいた上官や同僚達は、血飛沫を上げて倒れ伏してただの肉の塊になってしまった。

慣熟訓練の終わりに甲板に集まって総評をしていたのが仇となって、殆どの乗員が鉄の豪雨に撃たれてその生命を摘み取られていったのだ。

駆逐艦規模の大きさでありながら周辺警備用の船となった俺の乗る船は、KAN—SENの登場によって陳腐化した通常兵器の払い下げ品。

艦長に操舵要員や機関要員と指導役の教官以外を徴兵によって集められた俺みたいな一般人達を詰め込んだ……捨て駒に近い人命を使った生きた警報機。

有事の際は遅滞戦術を取りつつセイレーンへの生きた的として役目を果たして、本部に通信してKAN—SEN達を派遣する切っ掛けとなる存在だった。

「なんだってこんな時に……見張りの奴らは何をしてたんだ!!」

そんな俺達が慣熟訓練中に3機のセイレーンの艦載機に襲われたのは実に不運な出来事が重なった結果だ。

戦争のせの字も知らないただの一般人がそのまま船に乗せられて初めて訓練をしたばかりなのに、敵機を確認して的確に報告するなんて芸当は無理な話だろう。

「その結果支払うのは自分の命や周りの人命なんだが……見えた

!!

全速力で駆け抜けて悪態を吐きながら艦側面にある、今日訓練して使い方を覚えたばかりの対空機銃へと辿り着いた俺は、空を我が物顔で飛び回る戦闘機に向けながら弾倉に弾が有る事を確認して薬室へ弾を送り込む為に側面に付いたボルトを1度引いて装填する。

前世の世界にあるブローニングM2に似た機銃の狙いがブレないようにしっかりとグリップ部分を握り込んで、鉄製の無骨な丸に十字のターゲットサイトに敵機が入り込むように偏差射撃の体制を整え押し込み式のトリガーに指を掛けて……………押し込んだ。

「クソっクソっクソっクソっクソお!!」

俺の焦りが伝わっているのか、撃った弾がバラけて当たらない。

そもそも対空機銃とは他の機銃や両用砲などと連携して弾幕を張ることで敵機を近づけさせないのが主な目的であって、敵機を撃墜するのはその弾幕に絡め取られた機体だけなのだ。

俺以外に機銃へと辿り着いた人は居らず、その前に船の甲板や壁に赤い液体をぶちまけてそこら辺に転がっている。

だいたい俺だつてあの時に最年少で1番階級が低かったから、訓練で使っていた弾薬の余りを弾薬庫へと戻しに行っていた最中で幸運にも甲板に居なかつただけなのだ。

「当たれえええええええええええ!!!!」

撃ちまくりながら叫ぶ俺を嘲笑うかのようにヒラヒラと回避を繰り返す敵機。

このままでは俺も床で寝ているこの愉快的肉の塊の同胞になってしまうだろう。

「……………もつと上を狙えルーキー」

「ツ!?!……………当たった」

不意に聞こえたアドバイス通りに狙った瞬間に弾が当たり、敵機は切り揉みしながら海中へと消えていった。

俺は当たった事に喜んで振り返ろうとしたが、

「まだ来るぞ!!敵から目を逸らすなルーキー!!」

「は、はい!!」

鋭い指摘にまだ残っている2機に視線を戻す。  
ただど声だけで分かる。

俺にアドバイスしてくれているのは軍曹だ。

最年少で徴兵された俺を乗船前から何度も気にかけてくれた熟練の教官である軍曹は、この船に俺を乗せる事に最後まで反対してくれた優しい人であり、そして誰よりも厳しい訓練を課す人だった。

「お前みたいな奴がここに配属されるのは俺達大人の不甲斐なさの結果だ……だがお前がここに来たからには死なないようにしてやる!!絶対なのだ!!」

そこから他の連中より二週間も先に始められた厳しい訓練はただの一般人で未成年あつた俺を苦しめたが、その代わりにこうして生き抜く為に必要なスキルを与えてくれたのだ。

「来るぞルーキー!!アイツ……舐め腐って正面から来てやがる!!!撃ち落としてやれ!!」

「了解ですー!」

俺は正面から来る敵機をターゲットサイトの中央に捉えて機銃を連射する。

敵機は黒煙と破片を撒き散らしながら艦の反対側へと頭上を越えて消えていった。

「ツ!?弾が……」

ホツとしたのも束の間、今度は頼みの綱である機銃の弾切れだ。

しかしこの奇襲を受けて、俺は仕舞うはずだった弾薬箱を持ち手用の紐を利用してそのまま背負っていた。

急いでソレを降ろして弾薬箱からベルト式の弾薬をそのまま機銃の蓋を開けて薬室に繋いで詰め込み、しっかりと蓋を閉め直して側面のボルトを勢いよく引いて離した。

「良いぞルーキー……想定外の事によく対応出来たな  
……さあ、最後の仕上げだ。……勝つぞ」

「はー!!」

俺は軍曹からの言葉に力強く返事を返して空を睨む。

ちようど最後の1機は上空を旋回して、こちらの様子を伺っていた。

大きく旋回する敵機から俺は視線を逸らさない。

「……………焦るなよ……………焦った方が負けるんだ……………」

「はい」

獲物を狙う猛禽類のような動きを続ける敵機を見続ける俺に、軍曹は諭すようにその声を掛けてくれる。

そうだ、軍曹の教えを守れば生きられるんだ。

だからここで焦る必要は無い。

「来たっ!!」

「……………しつかり引き付けて狙え……………どんな奴でも的がデカけりや当たるんだ……………」

「来い!!来い!!来いよっ!!」

遠方から急降下してくる敵機の射撃が始まり俺の周囲に火花を散らす。

しかし、距離がある為に狙いがブレてこちらには当たらない。

興奮の余りに出る脳内麻薬のアドレナリンが俺の集中力を高めて、しつかりとターゲットサイトに映る敵機を捉えて射撃のタイミングを測っていた。

「撃てえええルーキーいいいいいいいい!!!」

「墜ちろおおおおおおお!!!」

軍曹の大声に負けず、金切り声になりながらも叫びトリガーを押し込む。

もはや外すことは無い。

吸い込まれるように突き刺さった弾丸が敵機を蜂の巣にし、火達磨にしたまま艦手前の海面へと誘いデカイ水柱を作り上げた。

「やった……………やりましたよ軍曹!」

「……………良くやった」

「軍曹……………?!」

「本当に……………良く……………やったな」





「……………うあ……嫌な初夢だな」

目が覚めるとそこは母港の談話室のソファアーの上だった。

年が明けても仕事漬けだった俺を、ベルファスト達ロイヤルメイド隊が執務室から追い出して休息を取るように促された結果……談話室で読書していてそのままうたた寝してしまったようだ。

しかし、初夢にしてはなかなかハードな内容だった。

俺のオリジンとも言える戦争の始まり。

……………もしかしたら腑抜けていたのかもしれないな。

「……………アレを飲むか」

こういう時はアレを飲むに限る。

ちやうど興奮状態に身体がなりつつある今、KAN—SEN達の露出の多い服装を見たら股間の息子がビンビンになる自信がある。

その為にシソ科の植物から成分を抽質した抗不安剤がポケットの中にあったはずだ。

とあるKAN—SENにお願いして処方してもらっている俺の常用薬。

自然由来の身体に優しいソレは錠剤として処方されており、小さな容器に入れていたのだが……………あれ？

「どこにいったんだ？」

普段からポケットに入れていた筈なのに無いぞ？

上着のポケットからズボンのポケットまで探すが、影も形も見当たらない。

アレが無いと俺の息子がビンビンになり過ぎてズボンとパンツの布にテントを作って表に出られないんだが？

「Guten Abend. 指揮官くん♪」

「ん？ああ、プリンツ・ハインリヒか」

ソファアーに座ってあちこち探す俺に声を掛けてきたのは鉄血巡洋

艦 プリンツ・ハインリヒ。

社交的で明るい性格の彼女は最近配属されたKAN—SENではあるものの、すぐに他の陣営の娘達と打ち解けて輪に加わるのが早かったのですぐに覚えられた。

「何かお探しの指揮官くん?」

「そうだな……これくらいの小瓶を見かけなかったか?」

彼女ならもしかしたら知っているかもしれない。

俺にとって大事な物なので早めに見つけないのだが………つて

!?

「ふうくん?そうね」

「……………」

顎に人差し指を当てながら考える彼女は気が付いているのだろうか?

彼女は同じ鉄血巡洋艦のオイゲンと同じくご立派な胸部装甲をお持ちだ。

しかもノーブラで南半球丸出しのニットののような素材の服装を着ている。

それをソファアに座る俺が下から見ていると………その頂きが見えそうで見えないというチラリズムが完成しているのだ。

『呼んだ?』(股間の息子)

いやいやいやいや!!

お前呼んでねえからステイ!!ステイだこの野郎!!

ハードな初夢のせいでオツキするまでのタイムラグが無さ過ぎる。

「どうしたの指揮官くん?」

「い、いや、何でもないんだ」

「変な指揮官くんだね?」

「す、すまんな」

「?本当に変よ指揮官くん?」

こつちを覗き込むな!!



がら突き進んで行く。

命令を下したハインリヒもまた捜索に戻る。

「待っててね指揮官くん、絶対に見つけるからね！」

「本当にすまん」

そしてまた俺の前で四つん這いになるハインリヒ。

……………俺の股間が弾けるんじゃないだろうか？

というかお尻の動きに合わせて振れたりシワが寄るパンツがエロ過ぎて俺のリビドーが限界突破しそうだぞ!?

っ!? 四つん這いのせいで南半球しか見えてなかったお胸様がその頂きを見せている!?

リビドー、阻止限界点を突破しま…………

「ん？あ、あつた!!あつたよ指揮官くん!!」

「おお!あつたのか!!」

小さな小瓶を片手に立ち上がり、笑顔で飛び跳ねるハインリヒ。

うん、パンツ見えてるよ。

更にテントを大きくする俺の股間を隠すように、前屈みを深くしながらパンツから視線を外せない。

というか早く俺に薬を!!

本当にリビドー抑えられないから早く!!

「はい、指揮官くん♪」

「助かった……………ゴクツ」

「み、水無くて大丈夫？」

「大丈夫だ、問題無い」

小瓶を渡された俺は4錠ほど取り出してそのまま飲み込む。

本当は水が欲しかったのだが……………今この状態で贅沢は言っていないし、急がなくてはハインリヒを襲いましたなんてとんでもない失態を犯しそうだ。

「はあく、ビツクリしたよお……………大事なお薬は無くしちゃダメだよ指揮官くん？」

「本当に助かったハインリヒ。今度何かお礼をしないとな」

「ううん、指揮官くんが助かったなら私は嬉しいからいいよ」

「そうか?.....なら一つ頼みがあるんだ。すまんがくれぐれもこの事は内密に頼む」

「え?どうして!？」

アイゼン君を呼び戻していたハインリヒは俺の事を驚愕した表情で見ている。

まあ驚くのは無理もないだろう。

だがこの薬を飲んでリビドーを抑えているのを知っているのは、今知ったハインリヒともう一人だけ。

こんな事をベルファスト何かに知られたりしたら.....一日中ロイヤルメイド隊にお世話され続ける事になって何もさせて貰えなさそうだ。

「何も聞かないでくれ.....頼む」

「指揮官くん.....」

ハインリヒに頭を下げる。

これからの自由な生活を送る為にもどうか黙っていて欲しい。

下手したら重桜のヤベンジャーズにまで知られてしまう可能性もある。

アイツらが来たら.....俺は重桜の寮に監禁されるんじゃないだろうか?

「うん、これは指揮官さんと私だけの秘密って事にするね?」

「ありがとうハインリヒ」

「ううん、任せて!また苦しかったら私が何とかするからね!!」

「助かる.....頼りにしてるぞ?」

「私とアイゼンくんにお任せあれ♪」

ハインリヒの笑顔で気が晴れた。

本当は自分だけで解決する予定だったのに、思わぬ協力者を得る事が出来たのは僥倖だ。

ハインリヒのエロい姿を拝めて、更に今後同じような事があつたら協力してもらえるなんて欲張り過ぎだろ。

本当に助かったのは本当なので欲張りセットでもありがたく貰っておくべきだろうな。

……………でもあのパンツとお胸様は欲張りバリユーセットだわ。

~~~~~

「……………どうしようアイゼンくん」

夜の帳の降りた母港の棧橋で自身の艤装に語りかける私。

思いがけず知ってしまった指揮官くんの秘密。

新参者として色々な仲間から指揮官の噂や事実を聞いていたけど、実際に会って一目惚れしてしまった私が突きつけられた現実。

鉄血の皆がホの字だという指揮官くんに会ってみたいと思っていたら、実際に会って一目惚れなんて鉄血の陣営は揃ってチョロ過ぎるんじゃないんだろうかと少し不安になってしまう。

「でもね？本当に優しくってカッコイイから仕方ないよね……………はあ……………」

優しく響く声色に柔らかく見つめる眼差し。

こちらがすぐに馴染めるように色々と気を回してくれたし、新年の重桜の行事である初詣の為にKAN—SEN全員に……………それこそ新参の私達の分まで用意してくれたのだ。

一目惚れしていたのに更に心が指揮官くンを求めてしまうのは仕方ない事だろう。

「……………でも、こんなのって無いよ」

アイゼンくんの頭を抱きしめながら涙がこぼれた。
だってそうだ。

指揮官くんは……………指揮官くんは!!

「薬を飲まないと身体がもたないなんて……………」
皆には秘密にして欲しいという事はそういう事なのだろう。

苦しんでいる事実を隠して皆の為に頑張っている指揮官くんが不憫でしようがない。

「黙っている事しか出来ないのかなあ……アイゼンくん、私も苦しんだよ……」

溢れる涙が止まらない。

どうすれば良いのだろうか？

薬漬けの身体なんて長くはもたない。

身体を鍛えているから健康そうに見えていても、その中身はどうだろうか？

「指揮官くん……指揮官くん……死んじや嫌だよ……」

アイゼン君を強く抱きしめる。

せつかく出逢えた運命の人。

こっちからの一方通行な想いなのだとしても、諦めたくなんか………無い!!

「決めたよアイゼンくん。私、指揮官くんの前で絶対に泣かないよ。笑顔ですつと指揮官くんを明るくしてあげるんだ!」

誰にも言えない苦しみを分かちあうのは欲張り過ぎなのかもしれない。

でも私が明るく接していれば指揮官くんだって明るくなれるかもしれない。

「やらずに後悔だけはしたくないよ……それに……」

好きな人の為に頑張るのは恋する乙女の特権だよ。

だったら恋愛だって諦めない。

指揮官くんが毎日を明るく過ごせるようにサポートしながら………ちよつとエッチな事をして役得になるんじゃないのだろうか？

「そうと決めたら頑張るぞー!!アイゼンくんも応援してよね?」

月夜に照らされながらアイゼンくんにそう宣言する。

指揮官くんは理性が強そうだし、腕を組んだ位じゃ動揺しなさそうだから………膝の上に乗るとかどうだろうか？

それも対面に座るなんてどうだろう？

ちよつと恥ずかしいけど………指揮官くんと思ひ出を作っていく
為に必要なことだよね？

明日からやってみよう♪

翌日の執務中に対面で膝に座られて心の中で筋肉経典第4772
章98754項まで唱え続けた指揮官が居たとか居なかつたとか
………

第31話 お茶と不知火

指揮官です。

この前に見た初夢が悪夢だったせいで少し寝つきが悪くなりました。

いつも抗不安剤を出してくれているKAN—SENに睡眠導入剤も処方してもらおうと思っっています。

「俺の睡眠不足で母港の機能を止める訳にはいかんからなあ……………」

睡眠不足で重く感じる肩を回しながらそのKAN—SENが居る場所へ足を進める。

今日の朝のロードワークだっていつもなら150km走るのをぼんやりしてたせいで、250km走ってて護衛に着いていた時雨（ロードバイク乗り）に止められたからなあ……………」

顔を真っ赤にしながら肩で息をしつつ、汗だけで疲れ切った彼女を重桜の寮に送つといたけどね。

そんな事を考えていたら、しばらくして見えてきた母港の学園にある購買部。

そこには近代化改装で改となって赤いエプロンに炎のような赤い縁取りをした、黒い着物姿の重桜の駆逐艦 不知火が無表情で店番をしていた。

赤いカチューシャと着物と同じ炎のような縁取りをしたりボンで結び、肩上まで伸びた黒い髪に赤い瞳の眼を半分ほど隠す彼女はここに来た俺を訝しむように見ている。

「……………お薬はこの前渡したばかりのはずですが？」

「ああ、そうなんだがなあ……………今少し良いか？」

「はあ、この大うつけ……………指揮官さまは妾の商売時を選んで来たのでしょうか？」

「いや、都合が悪いなら後で良いんだが……………」

「誰も悪いとは言っていないですよ……………奥へどうぞ」

「……………おう」

なんだか釈然としない感じだが、俺は購買部の扉を開けて中へ入ると不知火は店員不在の立て札を立て、机の下にあるスイッチを押した。

するとカチャリと音がして購買部の壁だったはずの場所が開いて地下へと続く階段が現れる。

「相変わらずいつの間にか分かんないコレ……………」

「ほら早く降りてください指揮官さま」

「分かった分かった。そんなに急かすなよ」

地下へと降りる階段を降りると鉄製の無機質な扉が見えてきた。

ここが目的の場所だ。

その扉を開くと金属の擦れる何とも言えない音と共に明るい照明がパツと部屋を照らした。

「……………毎度思うが、凄いなここは」

「そう言っただけで頂けると作った甲斐がありますね」

俺の身長よりも高い大きな桐の箆筒に見えるいくつもの小さい引き出しを持つソレは薬箱だ。

しかも1つだけでは無い。

不知火曰く、症状や薬の分類によって分けられた薬箱がおよそ50個は並んでいる。

「これも全て重桜からの資金提供があつての品揃えでございます」

「……………全部、俺の為だったか？」

「世界で唯一の指揮官さまを失う訳にはいかないという重桜の総意です」

そう、ここに集められて保管されている薬は重桜の資金提供があつて作られた俺専用の薬なのだ。

重桜は聖域にいるとされる「カミ」からのお告げがあり、俺を祀りあげて真っ先に保護するように動いた陣営だった。

そしてこの母港に俺が着任すると分かると資金提供に設備投資などを一気に言い、他の陣営が入る前に工事等の作業の約半分は既に着工を済ませて手を入れていたという徹底ぶりだった。

おかげで重桜の陣営しか知らない秘密の部屋がゴロゴロと出来ることに……………

俺が普段重桜のヤベンジャーズとあまり単独で、特に人目のつかない場所では会おうとしないのはこういう経緯がある。

正直……………肉食獣が口を開けて待っている光景しか思い浮かばねえ……………

「それで？今回はどんなお薬をお求めですか？」

「ああ、最近寝付きが悪くてな？睡眠導入剤を貰おうかと……………」

「……………そういう感じで婦女子の飲み物に盛ると？」

「なんでそうなる!？」

「普段から暑苦しく筋肉ばかりの指揮官さまにもようやく猿並みの性欲でも湧いたのかと……………」

「……………お前の中の俺ってそんな扱いなのか」

不知火の毒舌に肩を落としていると、その間に彼女は薬箱に歩み寄り小さな小瓶を取り出してくる。

何度か小瓶の中身とラベルを確認しつつ、薬の一覧表らしき書類とにらめっこを繰り返していた彼女がこちらに戻ってきた。

「お求めの眠り薬です。眠りを誘う位の軽い物ですので、効かなければもう一度妾を訪ねて下さいませ」

「ありがとうございます。今夜から飲んでみるよ」

毒舌だけど仕事はキッチリこなしてくれるし、フォローもしてくれるから憎めないんだよなあ……………

渡された小瓶を上着のポケットに入れて不知火にお礼を言う。

さて要件も済ませたし、筋トレしにトレーニングルームへ行こうかな？

最近加圧トレーニングにハマってて、腕や足にベルトを巻き付けてダンベルを持ち上げたり、そのままスクワットしたりするのが筋肉との対話をしてる感凄く感じるんだよこれが。

でも気を付けないとフルマッソ状態でトレーニングをすると、ベルトの方が切れるから明石か夕張に頼んで頑丈なヤツを作ってもらわないとな。

「指揮官さま」

「ん？どうした？」

そう思つて出口へと歩みを進めようとする、不意に不知火から声を掛けられた。

不知火の方を見ると、薬箱の棚の奥にある座敷のような畳を敷いたスペースで正座で座りお茶を用意している。

「どうやらお茶のお誘いのようだ。」

ふむ、あまり不知火とお茶をする機会なんて無いから今回はご相伴に与りますかね。

「こちらをどうぞ」

「ありがとうございます、頂きます」

靴を脱いで畳に上がり、不知火から渡された湯呑みを受け取つて緑茶を飲む。

金色透明なお茶の色と芳ばしい香りが鼻から抜けるような感じから察するにこれは釜炒り茶か？

前世では主に九州地方で飲まれるお茶だったと記憶にある。

スつとするような気分になれる何処か素朴な味わいのあるお茶だ。

「……………たまにはこうしてゆっくりするのも良いもんだなあ」

「そうですね。指揮官さまは少々ゆっくりされるのがよろしいかと」

「不知火がそんな事を言うのは珍しいな……………」

「妾から見てもそう思えるのが指揮官さまという者なのです」

「こりや手厳しい」

不知火との他愛の無い会話。

前世が日本人というのもあつてお茶を飲みながら話をするという事に安らぎを感じてしまう。

前世を思い出せる本当に貴重な時間であり、もはや掠れすぎて遠い昔のように感じてしまう事なのだがな。

「……………ん？」

「どうかなされましたか指揮官さま？」

「……………急に……………眠気が……………」

そんな安らぎを感じたからだろうか？

急に眠気が俺を襲う。

湯呑みを落とさないように不知火に渡すと、受け取った彼女は湯呑みを仕舞った後に俺の方へと近寄ってくる。

いつたいたいどうしたのだろうか？

「ここに枕は御座いませんで……どうぞ」

「……………いいのか？」

「その為に傍に来ましたので」

彼女は俺の傍で正座するとその膝の上を両手で軽くポンポンと叩いた。

これは所謂……………膝枕だ。

不知火は無表情のまま俺を膝枕に誘っている。

ダメだ……………眠気で考えが纏まらない。

「すまん……………助かる……………」

「ごゆるりと、夕食までには起こしますので」

「……………ああ……………頼んだ……………」

不知火の膝枕に頭を乗せて横になる。

華の香りが俺の鼻に付く。

それはとても良い匂いで俺の意識をより深く沈めていく。

睡魔によって沈む意識の片隅で、微かに聴こえる歌声と俺の頭を優しく撫でる小さい手を感じた。

ああ……………なんて……………気持ち良いんだろうか？

~~~~~

「……………眠ってしまったわれましたか」

子守唄を唄いながら指揮官さまの頭を撫でていたら、すぐに眠りに落ちてしまいました。

余程眠れていなかったのでしょうか。

まるで無垢な子供のような寝顔で妾の膝枕を堪能しておりますね。まったく……このような御方に何故惚れてしまったのか……

そんな妾の想いを知らずに思わせ振りの事ばかり。

今日購買部に来た時だって、姿が見えた瞬間に心臓が飛び跳ねたのだから。

しかし、要件は薬の事だけだったので少しガツカリしたのは内緒だ。

「ご無理をなさらないようお願いしても、すぐに溜め込んでしまわれる……本当に指揮官さまは大うつけでございます」

頭を撫でていた手をその頬に沿わせる。

ただそれだけの事なのに自然と頬が緩む。

普段なら絶対に見せない妾の笑顔。

見せるのは今の意識の無い指揮官さまの前だけ。

「誠に罪作りな御方……独占してしまいそうになりますね」

意識の無い指揮官さまの前でだけ出せる感情の表出は、妾の心の底から感じる暖かな想いの過剰な供給によって抑えられないから起こる事。

見守りたいという想いにすぐ傍で支えたいという想う心がせめぎ合い、つつい指揮官さまと話す際に毒を含んでしまう。

悪い癖だと思っではいるもの……現在まで矯正することが出来ないでいる。

「妾達重桜の女子(おなご)は一途……故に想いが強過ぎて殿方からは重いと評されてしまいます」

それはどうしようも無い重桜に生まれた女の性(さが)というものなのでしよう。

一つ撫でる度に募る想いが胸を苦しめる。

しかし、それで指揮官さまに重荷を背負わせてしまっではいけない。

この御方の心はまだ傷が深過ぎて治らず、元々の強靱過ぎる精神力

でなんとか持ち堪えているだけに過ぎないのだから。

「愛しましょう。慈しみましょう。癒しましょう。……………それが貴方の為ならばいくらでも」

苦しい時も病める時も健やかなる時も全て含めて貴方を心の底から愛しております。

だから……………少しだけ。

「この貴重な時間が少しでも続きますように」

誰も居ない2人きりの空間で、心の底からお慕いしている殿方の無防備な姿を見られるその幸せ。

これに勝る喜びなどあるのでしょうか？

いえ……………一つだけありますね。

ですがそれは指揮官さまと想いを通じ合わせてからのお話でしょう。

願わくば……………そんな日が妾に訪れますように。





はロードバイクのハンドルに腕を載せたまま、肩どころか全身を震わせるように粗く、そして苦しげに新鮮な空気を取り込む。

そのお陰で服の上から分かる形の綺麗で大きなお胸様が重力に逆らわずに下を向きながら大きく揺れているので俺としては眼福だ。

あれ？これは俺に対する御褒美回ですかね？

「か、閣下……閣下がご用意されたその自転車は……」

「ん？これか？ユニオンのリノが重桜の夕張と一緒に造ってくれたんだよ。どうだ、カッコイイだろ？」

「それは……本当に自転車なのですか？」

息が整ってきたアーク・ロイヤルが俺の自転車を見ながら首を傾げる。

ヒーローマニアのリノと創作活動ならお任せの夕張がタツグを組んで造り上げた俺の魔改造自転車。

大まかに形を説明するとバイク版バツ○モーターのバ○トポッド（人力エンジン）の蒼色版である。

リメイク版バツ○ンの○ットモーターが損傷して脱出する際に出てくるバイクなのだが、その機関部を人力で漕げるようクランクとペダルを追加した物が俺の自転車なのだ。

もちろんヒーローマニアのリノが監修したので機関砲やワイヤーアンカーなどの秘密道具まで完備しており、有事の際には漕ぐ為のクランクを強制排出して内蔵されている三角形の小型の高出力リアクターがエンジンの代わりになるとか……

それに伴ってブレーキも前輪を油圧式ダブルディスクブレーキに、後輪がドラムブレーキのほぼ前世のスポーツカーなんかと同じシステムを採用しているのでどれだけ速度を上げてもしっかりとブレーキが作動して大丈夫なのである。

なかなかのオーバーテクノロジー過ぎる一品だなこれ。

というか普通にこれ凄すぎるんだが？

貰った当初は困惑したが、リノが設計したと聞いて納得したもんだ。

その時にリノからお手製アーマーのキャプテンユニオンのコス

チュームと一緒に写真撮影会をしたのはお約束である。

目をキラキラと輝かせて俺にポーリングを頼みながら、一緒に写つて来たので揶揄おうとお姫様抱っこしてみたら顔を真っ赤にしなから縮こまってしまった彼女はやたらと可愛かったな。

「それは最早ただのバイクなのでは？」

「リアクターを起動してないから今はただの自転車だな」

「その1台にいったいどれ程の技術が詰め込まれているのか……もしやセイレーンの技術も？」

「そこまでは俺にも分からんよ。でもリノ達がそれを悪用するなんて考えてないしな」

「……閣下はお優しいですね」

苦虫を噛み潰したような表情でため息を吐くアーク・ロイヤル。

まああまりいい気はしないのだろう。

明らかなオーバーテクノロジーはセイレーンの技術からきているという発想になっても仕方ないことだ。

だいたいアイツらのテクノロジは未来的過ぎて、本当の意味で行き過ぎた化学は魔法と変わらないを地でいく連中だからな。

でもリノ達が俺の為に作り上げてくれたコイツを手放す気はサラサラ無い。

「さて、休憩は終わったか？水分をしつかりと補給しておけよ？」

「まだ走るんですか……さすが超人の閣下ですね。とりあえず水分補給を……あれ？もう飲み干してしまったようです」

「む？それはいかな……ほら、これをやるよ。俺のヤツなんだが、まだ口を付けてないからな」

「ありがとうございます閣下。ではありがたく……」

アーク・ロイヤルは俺の渡した予備のスポーツボトルに口を付けて飲んでいく。

余程喉が渴いていたのだろう、喉を鳴らしながら飲み干していく。だがアーク・ロイヤル、それは頂けないぞ？

お前が空を見上げるように背筋を反らして飲んでいるから立派なお胸様が俺の方に飛び出てやがる。

しかも喉を鳴らしながら飲む度にプルンプルンと震える瞬間を俺の目に焼き付けていくんだよ。

うーん、今日も息子がSTAND UP!!してきたゾ？

これは隠さなきゃな（確信）

「うん？どうかなさいましたか閣下？」

「…………いや、そんなに消耗していたんなら次の外周は俺一人でも」

「それはダメです閣下。誘った私が閣下の速度に着いて行けないのは充分理解しておりますが、それでも一応ですが護衛も兼ねているのですよ？それに何かあれば艦載機を飛ばしてすぐに応援も呼べるように手配しておりますから」

「了解したよ。そこまで考えているんなら俺からは何も言わないさ。だが無理はするなよ？」

「はい、自分のペースで行かせてもらいますよ」

本当に有能なんだよなあアーク・ロイヤル。

仕事で部下や上司に居れば本当に助かる人材だろう。

「はっ!?あそこに居るのは駆逐艦の妹達ではないか？申し訳ありません閣下、少し妹達の様子を見て来ます」

「…………迷惑を掛けない程度にな」

「はい!!妹達よ!!!今行くぞ!!!」

「……………はあああ」

少し先でダンスの練習をしているロイヤル所属のC級駆逐艦のシグニット達が見えた瞬間これだ。

アーク・ロイヤルの悪癖とも言える駆逐艦に対しての情熱的な…………いや、明らかに変態的な愛がこの母港での彼女の評価を凄まじく下げているのは明白である。

「あれが無ければなあ……………とんでもなく有能なんだが……………」

苦笑しながらそう言いつつも全速力でロードバイクを漕ぐ、アーク・ロイヤルのふくよかで柔らかそうな尻を見ってしまう。

プリプリとしたそのお尻は揉みごたえがありそうでもとも魅力的だ。

なんなら股間の紳士が反応して困るまでである。

ピッタリとしたインナーと短パンのお陰で、くつきりと浮かび上がっている形の良いお尻に俺の煩惱指数は急上昇中だぞ？

そしてロードバイクを降りてシグニット達に絡みに行ったが………

「あ、ベルファストに見つかったな」

有能なメイド長がシグニット達に絡む変態淑女を見つけてその場で正座をさせているのが見えた。

ここからでも分かる程の凄まじく威圧感を持った笑顔でアーク・ロイヤルに説教をするベルファスト。

………まあご愁傷様ってヤツだな。

「さて、そろそろ助けてやるか」

アーク・ロイヤルの性癖は今に始まったことでは無いし、シグニット達のダンスの練習も滞ってしまっている。

それにアーク・ロイヤルは一応俺の護衛も兼ねているのだからここで拘束されたら………あれ？

「もしかして俺の護衛がベルファストに変わってしまうのか？」

それは困る。

今日はアーク・ロイヤルからの誘いでサイクリングに来たのに、それでは意味が無い。

確かに普段の生活態度に問題がある彼女なのかもしれないが、今日という日を楽しみにしていたのも彼女自身なのだ。

その楽しみが奪われるのはいけない事であるし………多分、ベルファストに護衛が変わったらロイヤルメイド隊全員からの手厚い介護を受けながらサイクリングする羽目になりそうだ。

「………車で着いて来てすぐ側でペース配分の調整されながらそのまま給水されて、休憩タイミンングなんかも全部管理されそうだ」

極限まで筋肉を使う事で対話する為にサイクリングしているのに、そこまで管理されるのはちよつとな？

前輪のブレーキをかけた状態で大腿四頭筋と下腿三頭筋に力を込め、ペダルを力強く踏み込んで後輪を地面に空転させる。

そしてそのまま少し後輪側を横にパワースライドさせた所で前輪

のブレーキを外して発進した。

「……………まったく、貴女という方は」

「はい、申し訳ありませんでした」

眉間に皺を寄せるベルファストにしよぼくれるアーク・ロイヤル。その二人を遠目から見ているシグニット達の場所へ、辿り着いた俺は自転車から降りてその側まで近寄って行く。

「これはご主人様。その御格好は……………アーク・ロイヤル様？」

「ヒツ?!ち、違うんだ!!決して、決して閣下との用事や護衛を疎かにした訳では無いのだ!!」

戦場では艦隊を鼓舞し、勇猛果敢という言葉が誰よりも似合うアーク・ロイヤルだが、ロイヤルのメイド長にはどうも頭が上がらないらしい。

どうしたら良いのか分からずオロオロするシグニット達も可哀想だし、そろそろ本格的に助け舟を出してやらないとな。

「その辺で許してやれベルファスト。それにほら、いつものアレを拗らせてはいるが、ちゃんと俺の護衛はしてくれているぞ?」

「っ?!確かに確認しました……………はあ、今回はこれで終わりますが、しっかりとご主人様の護衛をお願いしますね?」

俺が指さした方角にアーク・ロイヤルのソードフィッシュ中隊が上空警戒していたのをベルファストは確認した。

その武装として250ポンド爆弾2発を搭載しており、すぐにでも爆撃できる構えを取っている。

しかも更にその中隊よりも上の空には警戒用のソードフィッシュが一機控えているのだ。

まさに万全の警戒態勢といえるだろう。

ベルファストからの念押しにアーク・ロイヤルは真剣な表情となり、何度も頷きながら……………

「勿論だとも!!閣下には指一本……………いや、敵の視線が閣下を捉えるよりも前に全てなぎ払おう!!」

「……………そこまでするのか」

「その認識でよろしくお願い致しますねアーク・ロイヤル様」

「ああ!!」

何やらめちやくちや物騒な事を言っていた。

俺の護衛って見 敵 必 殺 ！ ！（サーチアンドデストロイ）  
………なのか？

まあ指揮官が俺しか居ないから護衛も過剰になるのだろうけどな。

あとはシグニット達にもフォローを入れてあげないと………

「ダンスの練習の邪魔をしてすまなかった。今度のライブは俺も仕事を終わらせて応援に絶対に行かせてもらおうから、それでアーク・ロイヤルの事は許して貰えないか？」

「う、うちはびっくりしただけだから大丈夫。指揮官が来てくれるのは嬉しいよ♪」

「え!?!指揮官が来てくれるの!?!絶対だよ!絶対に見に来てね!!」

「ま、まあアンタみたいな奴でも来てくれるのは嬉しいから………絶対に来なさいよね」

上からシグニット、コメット、クレセントである。

皆俺みたいな奴が応援来るのは大丈夫らしい。

少し冗談めかして言ったんだが、肯定的な感じで助かったわ。

というか彼女達C級駆逐艦の皆は近代化改装が終わっていても華やかな見た目をしているのだが、ダンスの時にミニスカートでとでもアグレッシブに動くから、特等席と呼ばれる最前列に一人だけ座らされる席で3人娘のパンチラを見せられるのは股間の息子に悪いというかなんというか………

まあそこは役得という事で。

だが俺は知っている。

彼女達の改装の際に優雅卿からの資材や資金の融資があった事を

………

いや、フットさあ………シグニットが好きなのは分かるけど、わざわざロイヤル陣営から改装用の資材や資金をもぎ取ってくるの止めようか？

お陰で改装予定だったウォースパイットの資材が届くの少し遅れたんだからな？

さてフオローも入れ終わった事だし、そろそろお暇しますか。  
ちようどアーク・ロイヤルも正座を終えて立ち上がるうと………ん  
？

ありや足が痺れてフラついてるな？

まったく、しようがないなあ………

「それじゃ……よつと。行くぞアーク・ロイヤル」

「へっ?! あ、ちよつ、閣下あ!?!」

「二「えっ!?!」二」

なんだか最近KAN—SEN達をお姫様抱っこする機会が多いな。  
後ろから驚愕するような声が聞こえてきたが、多分セクハラとか思  
われてんのか？

………もしそうだったらショックだし、見ないようにしておこう  
か。

まあ変態淑女なアーク・ロイヤルとはいえ見た目は女性だからな、  
おんぶとかよりはこっちの方が良いだろう。

おんぶだとその立派なお胸様が俺の背中にダイレクトアタックを  
仕掛けて、このライダースーツでピッチリとした股間をモッコリさせ  
る羽目になってしまつて俺の社会的死が確立しちまう。

それにこういう時のKAN—SENつて結構大人しくなるから持  
ち運びに割と便利なんだよなあ………

「か、閣下」

「ん? どうしたアーク・ロイヤル」

「わ、わたし、私は……重くありませんか?」

「羽みたいに軽いぞ? いつまでも抱えていられそうだな」

「そ、そうですか………」

顔を真っ赤にして湯気すら幻視出来そうなアーク・ロイヤルは、大  
人しく俺に運ばれて自転車を置いている場所まで戻る。

そしてそんな彼女を俺の自転車……いや、クランクを外したりア  
クターバイクの後ろに乗せた。

「あの? 閣下?」

「実はまだリアクターを稼働した状態でタンデム走行試験をしてない



んだ。少し付き合って貰えるか？」

「……………私でよろしいのですか？」

「忌避の無い公平な評価が欲しい。それにはお前が一番だよ……………  
やってくるか？」

「はい、喜んで!!」

やはりコイツは狡いよな。

あれだけ変態淑女とかなんとか散々言っていたんだが、美人の笑顔ってのは綺麗なもんだわ。

気を取り直してバイクに跨った俺はリアクターを稼働させて出力を徐々に上げていく。

「しつかり捕まってる。風になるぞ!!」

「はい、何処までもお供致します!!」

アーク・ロイヤルが俺の腰に手を回して密着してきた。

服越しに感じる柔らかなたわわに股間パワーMAXにしなからアークセルを吹かす。

軽くウイリーしながら発進した俺達は加速する事で作られる風を感じながら母港の外周を疾走した。

風を切るつてのは本当に気持ちが良いもんだ。

……………背中のお胸様もあつて最高だな!!

~~~~~

「はあ、今日は閣下にご助けて頂いてしまったなあ……………」

ロイヤル寮の自室にて普段着へと着替えた私は、今日の出来事を振り返りながらそう呟く。

思わず額に手を当てて思い悩んでしまう程に後悔していた。

というよりも自分の性癖をどうしても抑えられないのが原因なので、本当に閣下には申し訳がないというのが現状なのだが……………

「そこに駆逐艦の妹達がいるのだ……抑えようがないじゃないか」
閣下はその事がよく分かっているのか寛容なのだが、必ず一言迷惑だけは掛けるなど言われている。

本当に大切な言葉なのだけでも、抑えが効かない自分が恨めしい。

「閣下は私の事を良い部分も悪い部分も含めて公平に見てください。私も閣下の期待に応える為に精進していかねばならない」

机の引き出しから複数の書類を取り出してじっくりと精査していく。

内容は反KAN—SEN団体についてだ。

彼等は私達KAN—SENの在り方や存在理由に否定的で、人類に対していつかセイレーンのように牙を剥くと叫ぶ人達だ。

その実態はKAN—SENの登場で職に溢れた造船業の人達や戦争が小康状態となって再就職出来なかった軍人、はたまた現在のアブルーレーンやレッドアクシズの在り方に不満を持っている者など……中には閣下やその部下に汚職や揉み消した裏側を追求されて失墜した元権力者等もいる。

「いつの世も争いの種は消えない……か」

汚い面ばかりが人類の全てでは無いと閣下を通じて知ってはいるが……これはあまりにも酷過ぎる。

ロイヤルだけでも事前の調査や捜査で既に検挙された件数だけでも優に70件を越えているのだ。

その中にはテロリズムに訴えようとした民間人を巻き込むような卑劣な計画まであった。

「度し難いものだな……どうしてここまで酷くなれるのだ……」

我々KAN—SENは軍艦の化身であり通常の携行兵器では勝てないからといって、民間人という自身より弱い立場の者を犠牲にするテロなんて間違っている。

そもそも狙いたいなら堂々と我等を狙えばいい。

全く関係のない市民を狙うからテロリストと混同されて民衆の支持すら得られないのだ。

「…………だからこそ非道になれるのかもれないな」

振り上げた拳の先にあるのが、逆に拳を痛めるような硬い石と柔らかな薄い板なら板の方を狙うのは彼等にとっては必然の事なのだろう。

閣下とは真逆の人間性を持った存在…………それは果たして守護する価値があるのだろうか？

清濁併せ持つのが人間なのだとすれば、濁り切った存在が人間として在るべき形から離れた一種の病気とも言える存在なのではないのだろうか？

KAN—SENとして生を受けてこの世界で様々な者達を見てきた。

しかし、一方で依然として人の持つ欲や感情といったモノを自身でコントロールする事すら出来ないのだから彼等の事を一方的に非難する立場に私はなれないだろう。

「その上で閣下にお仕えしているのだが…………本当に精進あるのみだな」

この肉体を得て閣下の偉大さを知り、他の者達と共に学びながらより良い世界を作り上げていく。

それこそが私達、今を生きるKAN—SEN達の使命ではないのかとふと思う。

だがそこで思考を停止してはいけない。

そこで止まってしまえば私も彼等と同じく一方的な考えに堕ちてしまうだろう。

「公平である事のなんと難しい事か……………」

誰にでも分け隔てなく接することの出来る閣下は、本当に偉大な御方なのだとつくづく感心させられる。

故に迷ってしまうのだ。

今日のズリネタに駆逐艦の妹達の写真集を使うのか、それとも非売

品である閣下の肉体美を写した写真集を使うのか。

「実に……………迷う」

本当に迷ってしまう……………閣下と出逢う前ならば駆逐艦の妹達の写真集こそが至高だと思っていたのだが、閣下の鍛えられ傷付きながらも進む事を止めなかった機能美溢れる筋肉と漢気を感じさせるトレーニング風景や日常を写した写真集。

ブーメランパンツ一丁の閣下の姿など、最早私達KAN—SENの理性を破壊する戦略兵器なのではないのかと思う事がある。

「実際に見た重桜の一航戦はよく耐えられたものだ」

反KAN—SEN団体の資料を入れていた引き出しの二重底の中から、閣下の写真集と駆逐艦の妹達の写真集を取り出してじっくりと吟味する。

双方の表紙にはにこやかに笑うユニオンのフレツチャー姉妹の姿と上半身裸でアブドミナル・アンド・サイのポージングを取る閣下。公平な審議を脳内で行う。

駆逐艦の妹達の可憐さや微笑ましさと閣下の肉体美とセックスシンボルとしての素晴らしさ。

どちらも捨て難い素晴らしいモノで甲乙つけ難い。

「……………しかし、今のこの滾ってきた性欲を使うならば」

今日のオカズは決まった。

閣下の写真集だ。

私のこの滾っている想いは駆逐艦の妹達には受け止めきれないかもしれないが、閣下なら全てを受け入れてくれるような気がする。

駆逐艦の妹達の写真集はティータイムの時にゆっくりと微笑ましい気持ちで読ませてもらおうとしようか。

ならば早速使わせて貰おう。

ベットの頭元には既にティッシュも準備完了している。

「ふふふ……………ああ、閣下……………私のこの想い。どうか受け止めて下さい」

ベツトに寝転んで表紙を舐めるように視姦する。

やはり閣下は最高だ!!!

今日の夜はこの昂りを鎮めて貰うまでは寝られない!!!

その日の夜、近所迷惑レベルの嬌声を上げてしまいロイヤル寮でメ
イド長に正座で説教を受けた空母が居たとか……………

バレンタインデー特別編だよ!! (チョコと綾波)

綾波です。

今日は年に一度のバレンタインデーなのです。

各陣営の皆が大好きな指揮官に、愛情をたっぷり詰め込んだチョコレートを渡す日です。

あわよくばそのままお持ち帰りしてくれる事を願う人達もチラホラいるみたいなんですけど……

「完成です。完璧な仕上がりです」

母港の学園にある調理室の一角で、調理台の上にある赤い包装紙に白いリボンで可愛くラッピングした小さなチョコレート。

たぶん指揮官なら2口くらいで食べられる大きさの小さい物。

それは過去にあった悲しい出来事故の大きさ。

「赤城さんと大鳳さん、愛宕さんに隼鷹さんが自分の等身大チョコレートなんて作って送ったから……」

あの時はさすがの指揮官も驚いたらしい。

というか普通に考えても食べきれない事は明白なのに……

ロイヤルのメイド長のベルファストさんに指揮官の健康を損なうつもりかと怒られ砕かれて大鍋に入れられた後、皆でチョコフォンデュにして食べたのは美味しかったです。

綾波達が皆でチョコフォンデュを楽しんでいる間、等身大チョコを作った四人は三笠様や長門様達を含めた方々にずっと怒られて1週間程指揮官の近くに寄れないよう謹慎を命じられたみたいで……

あの時の四人の表情はこの世の終わりのような凄く悲しいモノだったのです。

その事件以来、渡すチョコレートは1口か2口くらいで食べられる物に限定されてしまうことに……

「でもチョコフォンデュ、また食べたいです」

ジャベリン達や指揮官とも一緒に食べたあの味は、今でも忘れられないくらい本当に美味しかったので、またチョコフォンデュをしてく

れないか密かに期待する自分がいる。

「……………ダンケルクさんに頼んだら新作お菓子と一緒に出してくれるかな？」

「よし、早速指揮官に渡してくるのです。善は急げ……………です」

当日になれば指揮官にチョコレートを渡しに行くKAN—SENがいつぱいで、引きこもりな綾波にはとてもじゃないけどその波を掻き分けて渡すなんて無理です。

でも、その前の日ならば指揮官に渡せる機会が多い筈なのです。

せっかくだから指揮官に買ってもらったパーティー用のドレスでオシャレして雰囲気を出したい。

少し恥ずかしいけど、しっかりと準備してから綾波の想いを大好きな指揮官に伝えるのです!!

「……………女は度胸……………です!!」

早速着替える為に寮の自室に戻ろうとしたが、ラッピングしたチョコレートをどこかに仕舞って置かなくては……………

「うくん、冷蔵庫は他の人達のチョコでいっぱいなのです……………さっきまで冷やしていた場所もドイツチュラントさんが両手を組んで祈るようになんかお願いしてチョコを置いていたから使いにくい……………です」

何かブツブツ呟きながら冷蔵庫の前で片膝を付いてお祈りしてたドイツチュラントさん。

普段のドイツチュラントさんからは想像もつかない様な真っ赤な顔で、一生懸命何かをチョコにお願いしていて綾波のチョコを置く場所があるのか聞けなかつたのです。

「うううう……………どうしよう……………です」

すぐには溶けないとは思っただけれど、出来ればしっかりとした物を指揮官には受け取って貰いたい……………

それにプリンツ・オイゲンさんに生チョコレートの作り方を教えて貰って作ったので、生と聞くとどうしてもすぐに傷んでしまうような気がして気になってしまっただけです。

「あら？綾波じゃないの、どうしたのかしら？」

「あ、赤城さん」

オロオロしていた綾波に声を掛けてきたのは調理室に入ってきた赤城さん。

その手には市販のチョコレートと調理器具を持っている所を見るに今日チョコレートを作る予定だったようなのです。

普段は指揮官に愛を叫んで突き進み続けてロイヤルのベルファストさんと裏でぶつかり合う赤城さんだけど、それ以外ではとても優しいお姉さん。

そんな赤城さんなら持つていてくれるかもしれない。

「あの、赤城さん。このチョコを預かっていて欲しいのです」

「ええ、良いわよ?……もしかして指揮官様に渡す用のチョコレートをかしら?」

「そうなのです。明日が本番だけど、皆と一緒に渡すのは綾波には無理そうだから……今日渡すです」

「なるほど、それでオシヤレして渡したいからそれまで預かって欲しいという訳ね?」

「その通りなのです」

「ふふふ!ええ良いわよ!この赤城も指揮官様にはキチンとした姿で想いを伝えたいもの。綾波の気持ちは痛いほど分かるわ」

なんだか微笑ましいモノを見たような目でこつちを見る赤城さんは、綾波のチョコレートを受け取って調理台の一角に自身のチョコレートや調理器具を置いていく。

「それじゃあ私はここに居るから、しっかりとオシヤレして来なさい。この赤城がお化粧してあげてもいいわよ?」

「良いのですか?」

「ええ、指揮官様に想いを伝える晴れ舞台に水を差すような真似はしたくないわ。それに同じ重桜の者ですもの、応援するのは当たり前よ?」

「赤城さん、ありがとうございます」

「ええ、どうぞ致しまして」

優しく微笑む赤城さんに感謝を伝えて早速自室の寮を目指して進

む。

ドレスの着方は鳳翔さんに教えて貰って一人で着れるようになったので、しっかりと身支度と心の準備を整えよう。

そう思いながら学園の廊下を歩く。

………思えば指揮官とは長い付き合いになったのです。

最初の出逢いは………戦場となってしまった前線基地の母港。

青く広がる空を後目に思い返す。

あの日もこんな晴れた日だったのです。

「君達が………KAN—SENか？」

目覚めたばかりの綾波、ジャベリン、ラファイ、二ーミにその声を掛けたのは頭と顔の右側に血染みの包帯を巻き付けた無名の頃の指揮官。

その身に纏う軍服はボロボロでいくつも血が滲んでいるのが分かる。

そんな指揮官の格好に綾波達は驚いて動けなかったのです。

でも指揮官は頭を深く下げて

「目覚めたばかりで混乱しているのは分かる!!だが………俺の部下を………俺の戦友達を助ける為に力を貸してくれ!!!」

絞り尽くすような声でそう言った。

よく見れば右足のふくらはぎの部分にズボンが破れて包帯が巻き付けてあり、後ろの壁には松葉杖が置いてあるのが見える。

恐らく普通に立つのも辛い筈。

それでもこの人は自分の仲間の為に必死になって頭を下げている。

綾波達にはそれで十分だったのです。

「分かったです指揮官」

「ジャベリンも全力で頑張ります!!」

「ラファイも」

「ええ、精一杯頑張りますよ!!」

「ああ……………ありがとう」

皆で元気よく頷きながら手を挙げると指揮官は顔をくしゃくしゃにしながらお礼を言ってくる。

それだけ逼迫した事態なのだろうか？

そんな疑問を浮かべながら案内された棧橋へ向かう扉から外へ出ると……………そこは地獄だったのです。

破壊されて黒い煙を上げるいくつもの建物に湾岸砲。

司令部だったらしい場所は瓦礫の山と化しており、もはや基地を放棄して撤退した方が良いでしょうな有様。

「こんな……………酷い」

「……………想像以上にこれは」

ジャベリンは口を抑えて青くなり、二ーミは愕然とする。

そんな中で残存戦力が集結している棧橋へと向かうとそこには……………

「これが今ある最後の戦力だ」

「これだけ……………ですか？」

「……………少ない」

指揮官が指す先にあったのは魚雷艇が6隻に大破した駆逐艦が1隻のみ。

綾波と一緒にラファイが呆然としてしまうのは仕方の無い事だったのです。

どの艦もボロボロで、一番酷いのは大破した駆逐艦。

元々全部で4機あったであろう単装砲は後ろの3番砲塔が根元から吹き飛んでいて、更にその前に配置して合ったであろう魚雷発射管は余波でねじ曲がって黒く煤だらけになっている。

操舵室付近や喫水線下近くにも機銃や砲弾が直撃した痕があり、何故沈んでいないのかが不思議なくらいのボロボロ具合。

「基地司令部の連中は君達が起きる前の戦闘で全員行方不明、基地に

残った兵員も負傷して動けない。本当の意味でこれが最後の戦力なんだ……………」

栈橋に集まる兵隊さん達は綾波達を連れだした指揮官を見て手を降っていた。

「あれ？ 駆逐艦が動いてませんか？」

二一ミが不意にそう言っ指をさす。

駆逐艦が煙突から黒煙を吐き出し栈橋から離れていくのが見えた。

それを見た指揮官が歩く為に使っていた松葉杖を放り出し、片脚を引きずりながら走っていく。

突然の事態に動けない綾波達を置いて指揮官は、集まっていた兵隊さん達の下へ辿り着いて胸倉を掴み上げながら問う。

「艦を動かしているのは誰だ!!」

「副長であります大尉！ 最低限度の兵員を……………負傷して後方に下がる予定だった連中を連れて艦をジャックしました!! それだけじゃありません……………魚雷艇も……………」

「なんだと!？」

指揮官が再び駆逐艦の方を見るとそれに追従して栈橋を離れる魚雷艇の姿が……………

慌てて駆け寄ろうとする指揮官に兵隊さんは一枚の紙を押し付けるように渡す。

それを受け取った指揮官は内容を確認して……………その場に崩れ落ちた。

「指揮官!!」

「大尉!!」

私達や兵隊さん達が駆け寄ると、指揮官は力無く泣いているのが見えた。

慌てて二一ミが指揮官が持っていた紙を取って綾波達にも見えるように広げる。

そこには……………

『 大尉殿へ

我々へ下された命令であるKAN—SEN建造施設のある基地の死守命令を全うして参ります。

2日後にはここへ応援のKAN—SENが到着するとの事。

それまでにこの基地を死守するように命令がありました。

しかし、最後の人類の切り札足り得る大尉殿と軽傷者や即戦力となる者達はここに残って頂きます。

セイレーンに対抗出来る資格のある指揮官候補である事が分かった大尉は勿論、これからの戦場で必要となる兵員がこの作戦に使い潰される必要はありません。

是非とも今後の戦場でその力を奮って頂きます。

……硬つ苦しいのはここまでにして、今まで本当にありがとうございました。ございました大尉。

俺達みたいな屑の寄せ集めみたいな馬鹿どもを率いて、何処までも生き残らせようと奔走する貴方の背中を見続けた俺達の出来る最後の恩返しを受け取って下さい。

一度は法を犯した日陰者や上官に反発してここに送られ、腐っていた俺達を真っ当にして兵として育ててくれた貴方には感謝してもしきれません。

後ろ指を差され続ける俺達を、貴方が人間として扱ってくれてくれただけ俺達が救われたのか分かりません。

そんな貴方を変わず捨て駒として使い潰そうとするアイツらの思惑に俺達は叛逆させてもらいます。

何処までも真っ直ぐで力の限り戦う大尉に俺達は憧れを感じておりました。

記憶の片隅にでもあんな馬鹿どもが居たと、覚えて頂けるだけで俺達は十分です。

それだけで俺達は大尉と共にあるんだ。

それでは本当にお世話になりました。

ヴァルハラから大尉の活躍を見ておりますので武運長久を。

▽副長以下叛逆を起こした馬鹿どもより』

「こんなの……………こんなのってないよ!!」

涙を零すジャベリン。

ジャベリンだけじゃない、皆泣いている。

「……………今ならまだ間に合う」

ラフィーが艀装を展開しようとするのが見えて、綾波はそつと肩を掴み首を降つて止めた。

不思議そうな表情をするラフィーに諭すように綾波は話す。

「あの艦に乗っている副長さん達はそれを望んでいないのです。

……………死を覚悟して出港している……………です」

「それに私達は目覚めたばかりで訓練もしていなければ実戦も経験していない……………このまま出撃しても返り討ちになるでしょう」

二ーミも悔しそうにそう言った。

そこまで聞いたラフィーは悲しそうに顔を俯かせる。

重苦しい沈黙がその場を包み込んでいた。

「本当に……………どうにも出来ないのかなあ……………」

ポツリと呟くジャベリンのその言葉が胸へと突き刺さる。

駆逐艦から聞こえてきた出撃の合図を示す汽笛を聞きながらその言葉に誰もが答える事は無く、応援が来るまでその場で最低限度の防衛体制を整える事しか出来なかった……………

その後、応援に駆けつけたロイヤルのクイーン・エリザベスとウォースパイトの艦隊によって綾波達は保護されて指揮官とは一度離れ離れ……………

あの時戦いに出て行った副長さん達は誰一人戻って来る事は無く、突き出た岩礁に座礁したセイレーンの巡洋艦に突き刺さったまま炎上していた駆逐艦が戦闘海域で発見されたらしい。

探照灯での光を使ったモールスや汽笛の合図を行っても反応は無

く、近寄ると誘爆の危険性があつたのでそのままセイレーンの巡洋艦と一緒に砲撃処分されたとの事……綾波達には本当に苦い思い出だったのです。

「…………あれから綾波達は改装して更に強くなりました。今の綾波達なら副長さん達を……………」

「そこまで言つて首を振る。

現実にはそんなもしかしたら？という出来事は無いと分かっているのだから。

失われてしまったモノは戻らない。

この戦争で消費してしまった大切なモノはどれだけあるのだろうか？

そんな事を考えている内に重桜寮にある自分の部屋の前に着いてしまった。

「うううう…………考え事をしていたら着いてしまったのです。心の準備もまだ終わつて無いのに……………」

扉を開けてすぐ見える位置に飾つてある衣紋掛けに掛けたパーティー用のドレスが視界に入る。

このドレスは指揮官がわざわざ綾波の為に取り寄せてくれた大切なモノで、貰つた時に思わず指揮官に抱き着いてしまったのです。

そんな綾波に指揮官は笑顔で頭を優しく撫でてくれた。

その時に嬉し過ぎて耳がびよこびよこ動いていたのはあの時の指揮官と綾波だけの秘密なのです。

あんな甘酸っぱい想いを指揮官に抱いていたのは自分でも分かっていたけれど、こんなに抑えきれなかったのは初めてだから……………だから誰にも指揮官を想う気持ちで負けたくはない!!

「…………思い出したら急に勇気が出てきたのです。指揮官に想いを……………好きだつて言うです」

そう、これは綾波の想いを伝える晴れ舞台。

色んな人が紡いできた想いが今の綾波達を支えてくれている。

その想いを無駄にする訳にはいかないのです!!!

「綾波、出撃するのです!!!」

身に纏ういつもの部屋着を脱ぎ捨てて下着姿となり、用意していた下着に着替え着ている下着がドレスに合っているかのかどうか確認する。

白の無地のブラとパンツだけでも、縁取りに可愛いレースが着いているロイヤルのヴィクトリアス製の一品で綾波のお気に入りです。ゲームのソフトに埋もれかかっている姿見で全体を確認し、ドレスに合っているか考えて大丈夫だと判断する。

そして……………ドレスという勝負服を身に付けていく。

「これで……………完璧です」

綺麗に着付けることが出来たのを確認してそのまま学園の調理室へと急ぐ。

赤城さんがお化粧までしてくれるらしいので、完全究極体となった綾波を指揮官にお披露目してその心をガッチリと掴むのです。

絶対に……………絶対にこの恋は成功させるです!!

覚悟して待っているです指揮官!!!

~~~~~

指揮官です。

なんだか急に背筋が冷えてブルつとききました。

風邪でも引いたかな？

そう思いながら明日の分の仕事を終わらせていく。

明日はとうとうバレンタインデーで、KAN—SEN達からチョコレートをたくさん受け取る事になるからだ。

この母港で男は俺だけしか居ないから渡す対象が1人だけ……  
なんだか盛大な義理チョコを貰っている気分だな。

まあこの戦争が終わってしまえば、彼女達もそれぞれの道を歩き出して自分だけの伴侶を見つける事だろう。

「その時は俺が父親代わりにヴァージンロードを歩くのか？……  
いったい何人分歩く事になるのやら」

そんないつかの事を想像しながら書類にサインしてペンのインクを消費していく。

どのKAN—SENがいったいどんな奴を連れてくるのか……

それはそれでここから巣立って行くという事だから寂しくもあるが、ここまで頑張ってきた彼女達の成長の証でもある。

相手の顔面に一発くらいで勘弁してやろう。

「過保護な親父かな？」

クツクツと声を殺した苦笑を浮かべながら黙々と仕事をこなしている  
と不意に扉の方からノックが聞こえた。

「いったい誰だろうか？」

ベルファストはティータイムの準備に下がってまだ戻って来る時間ではないし、委託などの報告もまだどの艦隊も戻って来ていない筈だぞ？

「入れ」

「失礼するです」

不思議に思いつつも入室を許可すると、そこには綾波が……ドレスを身に纏い、いつもはしない化粧を薄くした綾波が執務室に入ってくる。

そんな着飾った綾波に少しドキマギしてしまった俺がいて、掛ける言葉に詰まってしまった。

「に、似合っていない……ですか？」

「い、いや、そんな事は無いぞ綾波。綺麗過ぎて少しビックリしただけだ……本当によく似合っている」

「あ、ありがとう……です」

照れて赤くなりながらモジモジとする綾波。



なんだこの可愛い娘は

すっげー可愛いんですけど？

オシヤレ頑張つて俺の前で真つ赤になりながらモジモジしてるとか……まさか俺に告白でも？

いや、そんなまさか……俺みたいな奴に綾波が？

いや、全く釣り合わないでしょ。

こんな可愛い娘が告白してきたら俺なんて単純過ぎてすぐに墮ちちやうわ。(確信)

「これ、チョコレート……です」

「ん？バレンタインのヤツか？」

「そうです。少し早いけど……綾波は当日皆と一緒になのは無理そうだから……」

「そうか、でも勇気を出して持って来てくれたんだろ？ありがとな綾波」

「はい……です」

机の前まで来た綾波に可愛いラッピングをされたチョコレートを渡された。

なるほどね、普段は引き籠もりがちな綾波は勢いのある皆と一緒にチョコレートを渡すのが難しいから前日に渡しに来てくれたのか。

でも一人だけで直接渡しに来てくれるなんて、とても勇気のいる事だ。

ありがたく貰っておこう。

そうだ、この後ベルファストがティータイムの準備を終わらせて帰ってくるはずだから、一緒にお茶でも飲もうか誘ってみるのも悪くない筈だ。

「……………あの!!」

「む？どうした？」

渡されたチョコレートを眺めてそんな事を考えていたら綾波から声を掛けられた。

両手を胸の前に押さえて先程よりも真っ赤になりながら、潤んだ目で俺を見つめている。

その真紅の瞳はどこか不安に揺れながらも何かを伝えようとしているのが分かった。

その圧に若干押しされそうになるが、あの綾波がここまで覚悟を決めて何かを話そうとしているんだ、それをしっかりと聞いてあげなくては……

「えっと……その……」

「……」

「し、指揮官……」

しどろもどろになりながら何かを伝えようと頑張る綾波に思わず応援してやりたくなるが、ここは我慢して最後まで聞いてあげるのが俺の役割だろう。

「いったい彼女は何を伝えようとしているのだろうか？」

「綾波は……綾波は……指揮官の事が……」

「……ッ!？」

綾波が何かを話そうとしているその瞬間、俺には何者かの視線を感じた。

思わず綾波から視線を外してその感じた方を見ると……窓の外に遠くて小さいがセイレーンの艦載機が滞空しているのが見えた。

「大す……」

「第一種戦闘配置!!対空戦闘用意!!敵が来ているぞ!!」

机の内線の受話器を引っ掴んで母港全体に通じているスピーカーのダイヤルをプッシュして放送する。

次の瞬間けたたましいサイレンの音が母港全体に鳴り響いた。

それが聞こえたのかセイレーンの艦載機は撤退していく。

クソッ!?ここで逃がせば敵がどこら辺に展開していて、どのくらいの戦力を率いているのか分からなくなる。

「待機中の空母は艦載機を上げろ!!敵を逃がすな!!敵空母の位置を確

認するんだ!!」

スピーカーから出る俺の声に反応して艦載機が数十機上がっていきの窓から見えた。

その間にもセイレーンの艦載機は遠くへと逃げていくのが見える。ここまで近寄っているのがまったく分からなかった……まさか、最近確認された風景に溶け込む特殊な迷彩をしたセイレーンの特別个体か!?

だとしたら不味い、ヤツらは何時でも此処を攻められるという事になるぞ!?

「綾波!! 敵の位置が分かれば追撃を……ッ!？」

俺は駆逐艦である綾波に敵の追撃をかける為に声を掛けようとして……めっちゃくちや後悔した。

まず纏っているオーラがヤバイ。

ドス黒く重々しいソレは綾波から発してはいけないレベルだ。

真紅の瞳は爛々と輝いており、もはや獲物を狩る狩人と称しても間違いでは無いだろう。

「敵は……敵はどこです?」

「ま、まだ………搜索中だ」

無表情の綾波の恐ろしさよ。

いつの間にか艤装を展開して、あの大剣を肩に掛けていた。

それはまさに前世の記憶にある種な機動戦士のツインソード装備な機体が、空母や巡洋艦をズバズバ斬っていた時の雰囲気そのままである。

セイレーンよ………なんて事をしてくれたんだ………

その後、綾波は殺気を漂わせたまま、執務室から出て行って出撃待機中の皆の元へ向かったらしい。

一緒に待機所にいた友人であるジャベリン達が戦闘配備解除後に、

涙目で俺に飛びついて来たのでその恐ろしさがよく分かった。  
しかも待機中に何度もブツブツと呟いて居たらしい。

「セイレーン……………滅ぶベシDeath」

うん、怖いわ。

しかも偵察していた艦載機の母艦は見つからなかったから尚更苛  
立っていたらしい……………

待機所にいた皆のSAN値が消費されてエライ事になって可哀想  
な目にあってしまった。

とうかこの襲撃事件のせいで警戒体制を取り続けた結果、バレン  
タイン自体が行えなくなつてKAN—SEN達の戦意がとんでもな  
く高まったのは言う間でもない。

何してくれるんだセイレーン!!

今度会つたらぜつてえ許さねえからな!!!

### 第33話 セントルイス姉妹とエアロビクス

指揮官です。

今日は母港にあるいつものトレーニングルームでエアロビクスダンスを体験しています。

たまたまユニオンの方で流行っているって聞いたから、少し興味が出て指南書とか取り寄せてやってみたんだ。

エアロビクスダンス、縮めてエアロビと聞くと運動をしたい主婦やマダムがピッチリタイツで踊っているのを妄想するけど、実際は結構幅広い世代の人がやってみたいなんだよね。

軽快な音楽のリズムに合わせてステップを踏み、全身を動かして伸び伸びと楽しく運動をする。

それも大人数でやると一体感が出て終わった時の達成感が気持ちいいとか。

そんなエアロビなんだけど……

「ほら、指揮官くん。こんなのはどうかしら？」

「あわわ……本当にルイス姉さん凄い身体が柔らかいんですね!」

何故かユニオンの軽巡洋艦 セントルイスとヘレナの如何わしいそういうお店のショー染みた何かが行われている。

青い長髪にアメジストのように綺麗な紫色の瞳を持つ彼女達は、その豊満な身体をエアロビ専用のタンクトップと尻が半分出てる様な短パンのみで包んでいた。

床には本来肌を隠す為に着ていた黒いインナーが脱いであるのだ。

しかもセントルイスはそのままY字バランスしてるので紫色の薄い布地の下着がチラ見えどころかモロ見えしてとっってもヤバイ。

……………なあにこれえ？

俺こんな如何わしいお店来た覚えは無いよ？

というかエアロビの体験を一緒にしてみたいとやって来たセントルイス姉妹と、その一体感とやらを体感してみたい俺との思惑が一致して始めたんだけどさあ……………

うん、最初はちゃんとエアロビしてたさ。

……ほんの数分前までは。

音楽のリズムに合わせて左右にステップを踏んで、大きく両手を水平方向に広げた後に胸の前で手を合わせ音が鳴るよう叩く。

前後に動きながら前に出た時に大きく両手を上に突き出したりして、その場で身体を捻りつつ腿上げを行うと身体に躍動感を感じる。

伸び縮みする筋組織の感覚とリズムに合わせて震える筋肉に高揚感を感じながら爽やかな汗を流した。

そして一通り終わって最後のフィニッシュポーズまで決めてセントルイス達と一体感を味わっていたんだ。

だが少しだけ不満を言わせてもらうと、両手両足に50kgの重り付きリストバンドを付けてないとあまり運動した気分になれない事だろうか？

やっぱりもつと激しい運動を……いやいや、今日はセントルイス達としているんだからこれくらいにして合わせないとな。

「身体を動かすのは気持ちが良いわねヘレナ」

「ルイス姉さんもそう思いますか？私も気持ちが良いです」

汗を流しながら気持ち良さそうに身体を伸ばす彼女達。

発育の良過ぎるその身体で伸びなると、スツゴイ大きなお胸様が自己主張激し過ぎる!!

こういう時は腹部の板チョコマツソーに力を入れ、上着で顔の汗を拭う振りをすることで視線を逸らす作戦だ!!

「あら？指揮官くん……本当に凄いわね」

「あわわ!？」

「ん？まあ鍛えてるからな」

服で汗を拭う振りをしていたらセントルイスは驚く様に、ヘレナは真っ赤になりながら俺の事を見ていた。

俺の身体なんてそんなに見るものか？

確かに鍛えてはいるが、傷だらけの身体なんて見ても面白くないだ

ろ？

「本当に凄いわ。……少し触ってもいいかしら？」

「別に構わないが……」

「それじゃ失礼して……ああ、硬いわあ……とつても熱いのね……」

「硬くて熱い……私も少し触っていいですか？」

「……………おう」

撫でやすいように着ていたTシャツを捲り上げると、白魚のように白く綺麗な二人の手が俺の腹の板チョコを撫でる。

セントルイスは大胆に手の平全体を使って、ヘレナは指先で恐る恐るといった感じに。

……………他人に撫でられるのは何だかこそばゆい感じだな。

「お腹の筋肉も凄いわけど、胸の筋肉も……」

「ほ、ホントですねルイス姉さん……ずっと撫でていられそう」

「……………」

この姉妹、普通に俺の大胸筋も撫でてきた。

あの、セントルイスさん？大胸筋を優しく撫でつつ俺の胸のトンガリに指を合わせるのやめてもらっていいですかね？

ヘレナさんも隆起した大胸筋を恐る恐るなぞるのは良いんですが、真っ赤になってプルプル震えるくらい恥ずかしいならいいんですよ？

「……………」

「むう……………」

無言で俺の筋肉を撫でる二人に何も言えねえ……………

二人とも俺の筋肉を撫でるのに集中し過ぎて、俺自身の間が持たねえよ!!

本当になんだこれ？

「……………あの」

「ん？どうしたヘレナ？」

何か意を決してように真っ赤になっているヘレナが口を開く。

ようやくこの何とも言えない空気が終わるのか？

その為なら何でもやってやる（フラグ）

「背中！背中も見たいです!!」

……………P a r d o n ? ( , ω , ) ?

今ヘレナはなんて言った？

俺の背中の筋肉が見たいってのか？

ええい、ままよ!!

そんなに見たけりや見せてやらあ!!

「これで良かったか？」

「は、はい!!ありがとうございます!!」

捲り上げていたシャツを脱ぎ捨ててヘレナに背中を見せつける。

もうヤケクソだわ!!

喜ぶヘレナの笑顔に俺の背中の筋肉で良かったのかと疑問に思うが、脱いじまったんだから最早隠す物は無い。

ヘレナが身長差で俺の筋肉に思うように触れないかもしれないので、片膝を付いて少し屈む。

それにこれならオツキしかけている愚息も目立たないはずだ。するとどうだろうか。

「これが指揮官の背中……………とつても大きいです」

そう言いながらヘレナは両手いっぱいに使って俺の背中の筋肉を撫でてきた。

でもヘレナさん？少し気を付けて欲しいんですが……………

「んしょ……………こんなに大きくて硬くて……………凄い」  
「……………」

いっぱい触りたいのは分かりましたけど、肩甲骨より上の僧帽筋を触りたいのか身を乗り出して触っているのは頂けませんよ？

だって……………お姉さん譲りのたわわが、俺の広背筋に当たって言う事聞かん砲が仰角を刻みそうなんです。

「羨ましいわヘレナ、なら私も指揮官くんのこの肩の筋肉をよく見せて貰おうかしら？」



「っ!？」

うおおおおおおおおお!!!?!

セントルイスがまるでマシユマロみたいに柔らかく、大きなお胸様で俺の左腕の上腕二頭筋と上腕三頭筋を包み込むように抱きしめながら肩を撫でてきた!？」

やべえよやべえよ!!

なんだこの無自覚エロ姉妹!？」

前と後ろから複数のパイパイに包まれる感覚とか初体験なんです  
が?」

や、ヤバすぎる……そろそろ離れて貰わないと……

「二人とも、そろそろエアロビクスに戻ろう。せつかく身体が温まったんだからもっと動かさないとな」

よしよしよし!!

ちゃんと言えたぞ!!!

それっぽい言い訳が上手く言えた。

これ以上は耐えられない……

股間の息子がまだ半分しか空を仰いでいない今しかチャンスは無  
いんだよ!!

「そうね………身体が火照ってるわ」

「確かに少し熱いですね」

ふむふむ、それならば休憩を促すか?

この状況を脱出するならここしか無さそうだぞ?

どう言えばその状況へと持ち込めるのか……

マツソー神よ!!俺にお告げを………お告げをつ!!

「指揮官くんみたいに私達も少し脱ぎましょうか♪」

「そうですねルイス姉さん」

「………はい?」

なんか不吉な言葉が聞こえた。

少し脱ぐ?」

なぜ脱ぐんですか？（電話ネコ感）

感じていた柔らかい感触が離れて布が擦れる音が聞こえる。

その瞬間、俺は音速を越える勢いで目を閉じた。

一瞬の脊髄反射的なその判断は………：瞼の裏に映るマッソー神のサムズアップからも正解だろう。

「ルイス姉さんまた大きくなりました?」

「そうね、貴女もサイズアップしたんじゃないのヘレナ?」

「ひゃあん!いきなり触るとびっくりしちゃうから止めてよルイス姉さん!!」

「あら、ごめんなさいヘレナ。つい触っちゃったわ♪」

「もう!!」

………：男が居るのにそんなじゃれ合いはやめてもらっていいですかね?

というか羞恥心とか無いのですか?

まさか………：俺って男として見られてない?

見られても大丈夫なパパ的な扱いなんですかね?

それはそれで心を許してくれてるのかもしれないから良いのかもしれないが………：いや、股間に悪いから勘弁だな。

「指揮官くん、もう目を開けても大丈夫よ?」

「ごめんなさい指揮官。急にこんな事しちゃって………：先に一声掛ければ良かったなあ………」

「も、もう大丈夫なんだよな?」

「ええ大丈夫よ」

「はい!」

二人の声に俺はゆっくりと瞼を開ける。

瞼の裏に映っていたマッソー神が首を降っていたような気がしたが………：まあ大丈夫だろう。

「あら?こつちを見てくれないのかしら指揮官くん?」

「?なんで下を向くんですか?」

「………：問題が大有りだ二人とも」

普通に二人ともタンクトップからブラチラしてるわ。

ご丁寧に俺の脱いだシャツの上に二人の着ていたインナーが上下揃って置いてある。

下の短パンなんてインナー脱いだら尻肉はみ出てんじやねえか………

こんなん見てたら右手で息子を可愛がりしたくなつちやうだろうがよ!!

そんな事したら社会的に終わるわ!!

俺のそんな苦悩を他所に不思議そうな雰囲気の二人。

………少し待て、何故不思議そうな雰囲気を出している？

考える俺！考えるんだよ俺!!

二人は熱くて脱いだんだろ？

しかも俺の目の前でだ。

ははあくん、分かったぞ？謎は全て解けた!!(気分は頭脳は脳筋、肉体はマツソーな名探偵)

二人は俺の事を家族認定していて何とも思っただけなんだな。

家族なら薄着してても別に見られても問題無いし、やはりさつき考えていたパパ的な扱いってのが大正解なんだろう。

一家の大黒柱………まあ、この母港の最高責任者である俺がそう思われてしまうのは仕方無い事だ。

ならば疚しい気持ちで彼女達を見ないようにしなければな。

よし、そうと決まれば………

「あ、やっそこつちを見てくれたわね？」

「どうしたんですか指揮官？」

「いや、何でも無い。………光に目が眩んだんだ」

やっぱりこんな無理ですわ!!

豊富な肉体がエアロビ専用のタンクトップと短パンからはち切れんばかりに輝いてるのを直視出来ないわ。

というか童貞殺しに来てるんですか？

ほんのり汗ばんだタンクトップが胸の輪郭をクッキリと表してる

から余計にエロいわ!!

それに下の短パンだつて……………それ鼠径部まで見えてませんか？

(震え声)

いったいどんな際どい下着を着たらそんな風に見えるんですかね？

そんなに見えるハイレグなパンティとかえつちな本とかでしか見た事無いよ？

結論……………エロい!!

どうして俺はこんなにエロい姉妹を見るだけの拷問を受けているんですか？ (再び電話ネコ感)

手を出してもいんじやねえの？

いやいやいや……………そこから先は……………社会的な死と性犯罪者という地獄しかねえな。

パパ的な俺が娘的な彼女達に手を出すなんて……………信用を裏切るのはノーセンキュー。

彼女達だつて俺の事を信用しているからこんな無防備な格好をしているんだ。

俺が鍛えたマツソーを信用して裏切らないよう筋肉との対話を続けているように、彼女達からの信用を裏切ってはならないんだ!!

「ほら見てちょうだい指揮官くん♪指揮官くんほど鍛えてはいないけれど、こんな風に私の身体は柔らかいのよ♪」

「凄いですルイス姉さん!!」

覚悟を決めて再び彼女達に視界を合わせると、セントルイスが床に座り180°。開脚をして床に豊満なお胸様を潰しながらこつちを見ている。

セントルイスのお尻つて安産型なんやね……………

揉みごたえありそうな魅惑のヒップが見えるのも素晴らしいが、床

と身体に挟まれて潰れる柔らかかなお胸様も魅力的で……………いかにかん!!

俺は彼女達に如何わしい気持ちを持つてはならない。

彼女達は俺を信用してこんなに素の表情を見せてくれているんだ。

その信用を裏切つたら……………

「指揮官、私も出来ましたよ!!」

「さすがねヘレナ。私の妹らしく身体が柔らかいわ♪」

ヘレナがお尻をこちらに向けた状態で、セントルイスと同じく180°開脚をして身体を前に倒していた。

短パンが汗でお尻に吸い付いて穿いているおパンティの輪郭に裾からはみ出る桃のような尻肉、そして短パンの中央がずれ、隙間から見える白く透けそうなくらい布地が薄いおパンティの真ん中から見えてはいけない縦筋がうつすらと……………

……………鼻血出そう

耐性無いの!!そういうえっちな体験に対しての耐性がさあ!!

前世も含めて童貞で過ごした俺にこんなえっちなシチュエーションの耐性無いから鼻血出ちゃうわ!!

ああもう!!パパ的なサムシングになろうと覚悟を決めた瞬間にえっちなのはダメだと思えます!!

俺の愚息が現在最大仰角だ……………

「……………一人とも、身体が柔らかいのは分かったからそろそろエアロビに……………」

「うくん、私も負けてられないわね。……………でもやっぱり身体を鍛えている指揮官くんにしっかり見てもらって評価してもらいたいわ」

「そうですねルイス姉さん。指揮官ならどこを鍛えれば良いのかすぐに分かるはずですよ。ね?指揮官?」

「お、おう……………」

ダメだ、話を聞いて貰えない。

というか彼女達のえっちな光景に狼狽え過ぎて場のペースを奪わ

れ、俺の意見を挟み込む余裕が無い。

だってしようがないだろ!?

女性耐性ゼロどころかマイナスの童貞なら狼狽えるわこんなエロ風景!!

誰か助けて!!!

そして現在に戻る。

素晴らしいまでのY字バランス。

それは認めよう。

だがそのおパンティは俺の股間にダイレクトアタックなんで隠してもらえないですか？

「指揮官くん?どうかしら私の身体は?指揮官くんのお眼鏡に適うような柔らかさだと良いのだけど……………」

「私だって柔らかいですよね!?!」

「……………ああ、そうだな」

「ふふふ♪指揮官くんも認める柔らかさ……………日頃からしっかりと運動をしていた甲斐があったわ♪」

「そうですねルイス姉さん!私も頑張りました!!」

Y字バランスを止めたセントルイスとヘレナが嬉しそうに笑顔で頷き合う。

そんな眼福な光景に俺は既に燃え尽きそうだった……………訳ねえだろうが!!!

ムラムラ最高潮過ぎて辛いわ!!!!  
襲ってやろうかこのエロ姉妹!!!!

……………ダメだ、この娘達に当たってはいけない。

ならば俺のこのリビドーを発散する方法はただ一つだけ。

俺はトレーニングルームの後ろの壁に配置してあるダンベル(60



ちなみにヘレナはリトルヘレナを寝かし付ける為にこの場には居ない。

「指揮官は私達を異性として見てくれてはいるけど……やはりリットリオが言っていたようにそれを筋肉に依存する事で紛らわしているようなの」

「やはり情報は確かなものでしたか……外交と一緒に正確な情報は大事な事です、ここまで来るとなかなか難しい難問ですね」

顎に手を当て考え込むブルックリンに頭を抱えるセントルイス。

この部屋に集まる彼女達は指揮官の情報を纏めて、ユニオン全体へと発信する為の情報機関のメンバーと言っても良い。

そんな彼女達が前回のリットリオからの情報を、より正確にする為に起こした今回のエアロビクス。

元々エアロビクスがユニオンで流行りだしたという情報を流したのも彼女達の策略の一つ。

身体を動かす運動であるエアロビであれば指揮官も食い付いてくれると考えたのだが、これはとても上手くいったと言えるだろう。

「それにしても指揮官は難儀な奴だよなあ……まあ経歴から考えれば仕方の無い事なんだろうけどさ」

「……フン、いやらしい事には変わりないわよ」

「ホノルル、お前そう言ってるけどさ。このエアロビ作戦の、指揮官との接触役に一番に手を挙げたお前が言える事じゃないとあたしは思うんだが？」

「うっ……だつてこうでもしなきゃイチャつけないじゃない」

「ん？なんか言ったか？」

「っ!?何でもないわよ!!」

呆れるフェニックスにそんな彼女を恨めしそうに睨みながら真っ赤になるホノルル。

そう、本来ならこの作戦の接触役はホノルルになる予定だったのだが……

「そうは言っても……ホノルル、あなた委託任務があったから無理だったでしょ？」



「分かっているわよ……ええ分かっているわよ!!何でこの日に私を委託任務に入れたのよ指揮官!!」

ブルックリンに指摘されるホノルルはどうにも諦められなかった想いの丈をぶちまけていた。

決行日に委託任務が入った不運は、ホノルルのイチャつき計画を根元から崩れさせたのは言うまでもない。

ホノルルは普段素直になれない分、こういう接触の機会をととても楽しみにしていたのだが、今回は本当に運が無かったようだ。

「ホノルルのツンデレは今に始まった事じゃないし、今回の結果をどう纏めて皆にどう伝えるのか考えようぜ」

「そうね、時間もかかる作業になるし、こういう情報で先手を打たれて他の陣営に先を越されるのは外交と一緒によ。ツンデレのホノルルはともかくね」

「ツンデレのホノルルは置いといて、早めに始めましょうか」

「ツンデレってなによ!ツンデレって!!」

「「はいはい」」

「むつきいいいいいいいい!!!」

ホノルルを揶揄うのを楽しみながら彼女達は情報を纏めていく。

姉妹同士の素のやり取りを楽しみながら。

### 第34話 ひな祭りと長門

長門である。

今日は重桜でとても特別な行事を執り行う事になっておる。そう、それはひな祭り。

今年はばれんたいんでーという好いておる男子にちよこれーとを渡す行事をセイレーンに潰されたから、皆一様に奮励しておるぞ。

かく言う私も今回は張り切っておる。

なんと今年のお雛様役はこの長門が務める事となったのだ。

あの時お雛様役のくじ引きを、江風が私の分のくじを引いてくれた時に私の分のくじが当たって本当に嬉しかった。

だって今年のお内裏様役は指揮官なのだから……………

「ど、どこか変な所は無いか江風？」

「はい、大丈夫です長門様……………ですがそれは先程も聞かれましたが？」

「う、うむ。じゃが指揮官と共に最上段を飾るお雛様とあっては、どうしても気になるものなのだ……………」

「そうですね……………鳳翔が着付けを行い、あの赤城が化粧を施して完璧ですし、長門様の美しさならば大丈夫だとは思いますが……………」

「そ、そうか？なら良いのだが……………」

ひな祭りの段を飾っている間に待機している待機室の中で私はソワソワしてしまう。

江風には悪いと思っておるのだが、どうしても気になって仕方が無いのだ。

だって……………あの指揮官がこの行事に参加してくれると聞いて誰もが驚いた。

あのばれんたいんでーでの事件は皆に不満をもたらした。

その鬱憤を晴らす目的とはいえ、いつもは角が立たないようにお内裏様役をKAN—SENに任せていた指揮官が、引き受けてくれると聞いた誰もが今回のくじ引きに殺気立っておったのを覚えている。

じゃがの？赤城に大鳳と隼鷹に愛宕よ、くじ引きで引き直しはないからな？

あ奴らの目の血走り具合に睦月型の駆逐艦達は怯えて、くじを引きに行くのにしばらく時間が掛かったらしいからな？

指揮官の事を好いておるのは分かるが、周りに迷惑を掛けない程度にしてもらいたい。

「はあ……………」

「如何なさいましたか長門様？」

「いや、なに……………くじ引きの時の赤城らの騒動を思い出してな」

「ああ……………あの者達にも重桜に属する者として少し落ち着きを持って貰いたいものです」

「全くだ」

江風との会話はとても落ち着く。

ずっと傍に控えてくれている彼女だからこそ、なのかもしれない。

だからあの時、江風の言葉に私は頷いたのだろう。

あれは指揮官と共にこの母港に着任して1年が過ぎた頃の事だったか……………」

「長門様にどうしてもお願いしたい事が御座います」

それは滅多に私に意見を言わない江風が土下座までして伝えて来た事。

重桜寮の私専用で作られた部屋にある和室で江風と2人っきりの部屋で設けられた休息を取る為の時間。

江風が立ててくれたお茶を飲んで、一心地付いていた私にはそんな彼女のお願いとやらが気になった。

「良い、申せ」

「はい、実は……………指揮官の事でござります」

「指揮官の？」

「はい」

江風から指揮官の事と聞いて思わず首を捻る。

私から見ている江風と指揮官との接点はあまり無い。

江風は私の護衛として傍に控えているのだから仕方の無い事なのだけれど、そんな彼女の口から指揮官の名が出てくるなど珍しい。

いったい指揮官がなんだと言うのだろうか？

「長門様が指揮官に恋慕されているのは承知しております」

「ブッフオ!!」

「長門様!?!」

「ゲホツゲホツ……い、いきなり何を申すのだ江風!!」

いきなりの事に飲んでいた茶を喉に引っ掛けてしまった。

確かに私が指揮官の事を好いておるのは事実なのだが、いきなりここでそれを言われて動揺するなという方が難しいだろう。

だって……あの重桜の奥で仕舞われ続けて外を見れなかった私と妹の陸奥を、外へ連れ出してくれた指揮官に……恋に落ちた。

『行こう長門に陸奥!俺達と共に外の世界へ!!お前達の力を貸してくれ!!』

そう言っただけでも強くも優しく私の手を握ってくれたあの時の事は、今でも覚えている。

私達は童のようにただ導かれるままに指揮官と共に世界を救う戦場を駆け抜けた。

救えなかった事もあった、罵倒される事もあった。

しかし、指揮官は私達KAN—SENと握り続けたその手を、離す事だけは絶対にしなかった。

だからだろう、そんな彼の事を好きになってしまっていたのは。

私だけではない、沢山の者達が指揮官との絆を結んでその心まで深く結び着こうと願っている。

私もそんな彼女達の中の一人という訳なのだが……

それと江風の願いはどういう結び付きがあるのだ？

「それで?江風の願いと余の指揮官への想いはなんの関係があるとい

うのだ？」

「実は……………」

「勿体ぶらずに話せ。余の指揮官への想いを口にしたのだ、言えぬとは言わせぬぞ？」

心を許せる江風とはいえ、指揮官への私の想いを口にしたのだ、それ相応の事でなければ私は許さぬぞ？

それだけ私の指揮官への想いは募っているのだからな。

しかし、じつと江風を見ていると普段の彼女らしくない。

具体的には視線が定まっておらぬし、指先を合わせてモジモジしておる。

普段の無表情ぶりが嘘のように狼狽して頬も赤く染めていた。

……………私にはもう答えが見えてきたかもしれん。

明らかにおかしい江風の様子を見て、私は大きくため息を吐いた。

たぶん私の予測は外れてはおらんはずだ。

言葉に詰まる江風に頭を抱えながら私から声を掛けることにした。

「惚れたか？」

「っ!？」

その反応でもう分かった。

それで私にその想いを持っていて良いのか聞きに来たのであるう？

全く……………その想いは江風だけの物であり、私がどうこう出来る事では無いというに……………

「で、では……………よろしいのですか？」

「良いも悪いもお主の心次第であろう？そこに余の言葉を挟む事は無い」

「承知致しました」

「ふう……………」

とりあえずこれで良い。

全く、自分ではなく他人の恋路に口を挟むような趣味は私には無い

ぞ？

しかし、これで私と江風は同じ男子（おのこ）に恋慕する好敵手となる訳か……………

それはそれで張り合いがあつて良いのかもしれない。

だが指揮官を想う気持ちでは負けぬぞ江風？

そんな事を考えながら再びお茶を啜る。

「では長門様に了解頂けましたので、陸奥様からの御提案通りに正妻を長門様、第二夫人を陸奥様、そして妾としてこの江風を指揮官に娶つて頂くご計画を進めていきたいと思ひます」

「ちよつと待つて」

思わず素が出てしまつたが、これは仕方の無い事だと思ふ。

何その計画？

私聞いてないよ？

どうか陸奥はいつたい何を考えているの？

あの子はなんでそんな事を江風に提案したの!!

「江風……………それは貴女も賛同してるの?」

「はい長門様」

即答する江風に本気で頭を抱える。

というかお茶を嘔き出さなかつただけ良かったと思ふべきか。

こんなの威厳を保つような話し方なんてしている場合じゃない。

それよりもいつこの計画が立ち上がったのかをしっかりと把握しておかないと……………絶対に後で後悔する事になる。

「それで……………何時からこの計画をあの子が考えたの?」

「陸奥様のご計画は既に一年ほど前から考えていたとの事です」

それつてこの母港に着任した時からなの!?

あの子、そんな素振りは全く見せなかつたのに……………

でも考えてみれば思い当たる節がある。

指揮官を初めてこの重桜寮に招待し、私にいる最上階へ案内した後、時間を正確に伝えて貰えなかつた私が慌てて準備の為に着替えて

いた部屋に入らせるなんて真似をしたのは今でも許せない。

江風が他の準備の為に私から離れた時を見計らったかのような状態で、下着姿の私を指揮官に見られたのだ。

余りの羞恥に思わず砲撃してしまったのは本当に反省しているが、乙女の柔肌を見られたのだからそれくらいは許して欲しい。

あの時は陸奥が時間を伝え忘れていたなんて言っていたから、嚴重注意だけで済んだのだけど……………

……………まだまだ思い返せば陸奥が原因の私が恥ずかしい思いを指揮官の前でした記憶が沢山ある。

例えば母港を散歩していた時に外周を走っていた指揮官とバツタリ出会って他愛の無い話をしていたら、陸奥の飼っている猫にスカートを捲られて彼に下着を晒してしまったり……………

ある時は執務室で私と陸奥だけで報告に行ったら、私の後ろに居た陸奥が転けて服がずり下げられるなんて事件があった。

あの時は本気で泣き出しそうになった瞬間、指揮官が自分の上着を脱いで掛けてくれたから、その紳士ぶりに彼の事がますます好きになったのだけど……………

「まさか全部計画通りって事？」

「はい、全て陸奥様の仕込みだったとの事です」

「……………頭が痛くなってきた」

「ご心中お察し致します」

つまり陸奥は私達と指揮官の関係をより深める為に、ワザとこういう事をしてきたという事になる。

姉であるこの私をダシにしてまで。

その目的はいったい……………私や江風まで巻き込んで指揮官と繋がろうとするあの子の考えが読めない。

恋とは、夫婦（めおと）となる為には、その人の一番を目指すが普通では無いのだろうか？

「陸奥様はこう言っておられました。皆で幸せになりたい、長門姉と江風と一緒にと」

「あの子が……………」

江風からのその言葉を聞いて、何となくだがあの子の考えている事が分かった気がする。

陸奥は重桜に居た頃からとても窮屈な思いをしていた。

好奇心旺盛なあの子にとって、大事だからと奥に入れられていた事はとんでもない苦痛だったのだろう。

そして姉である私が表立つ事であの子に重い決断や采配をさせないようしてきた。

苦しんで出した答えに声には出さず、納得せずに冷たい視線を送る者達に私は黙って耐えてきたのだ。

その事をずっと見てきたあの子が苦しんできた自分達が、一緒に幸せになれるようになりたいと思ってしまったのかもしれない。

「……………陸奥なりの幸せの形という事？」

「恐らくは」

「……………そう」

「……………」

それ以上、互いに口を開けなくなってしまった。

色々と思わされる事はあるのだが……………ここはあの子の考えに乗ろう。

それに指揮官を想う者達は大勢いるのだ、こちらが有利になるよう連携して勝ち取るのは悪い策略ではない。

「……………そういえば」

「むっ…どうしたのだ？」

そんな事を考えていたら不意に江風が何かを思い出した様に呟く。

今度はいったいなんだろうか？

出来れば簡単に解決出来る事が良いのだけど……………

「陸奥様が『指揮官と夜伽する時に一人ずつだとすぐにバテそうだから皆一緒に良いね。……………長門姉とかすぐに悲鳴を上げそうだもん』と仰っております」

「陸奥のお馬鹿はどこに居るの!!!!!!」



その日は一日陸奥を捜して潰れてしまい、疲れて寮に帰って来たら部屋に居た陸奥に

「ね？長門姉って体力無いから絶対に途中でバテるよ？指揮官って筋肉さんだから余計に凄そうだしね？」

そう言われて疲れきっていた私は力無く頷くのがだった。

「……………あれから数年経ったが、進展してはおらんな」

「そうですね、長門様」

あの時の事を思い出してポツリと呟くが、陸奥の計画通りに進めてあんなに恥ずかしい思いをしたのに、指揮官はこちらを意識してくれているのだろうか？

陸奥のらつきーすけべとやらで指揮官にどきどきしてもらおう作戦らしいのだが……………私が恥ずかしいだけではないのか？

「本当にこれで良いのだろうか？」

「陸奥様からは今回のひな祭りも計画の内と」

「これも仕込みか!？」

「はい」

「……………陸奥はどこまで計画しておるのだ」

思わず天を仰ぐ。

どうやらこのひな祭りに私がお雛様となるのも陸奥が仕込んだらしい。

最近では睦月型の駆逐艦達とも同盟を結んだとか……………もしや!？」

「まさかあのくじ引きの際に怯えていた睦月型の駆逐艦達は……………」

「そうですね、陸奥様からの仕込みもありましたが……………あれは本気で怯えていたのかと」

「そ、そうか」

「しかし、睦月型の駆逐艦達に気を取られている間にくじを仕込むのは簡単でした」

「お主も乗っておったのか江風!？」

「え？陸奥様からは聞かされてないのですか？」

「初耳だぞ？」

「……………」

「なんだか私より陸奥の方が政（まつりごと）に向いておるような気がしてきた。」

「この事は忘れよ」

「はい」

とりあえず起きてしまった事は仕方のない事なので互いに忘れる事にする。

あの子の計画がどこまで続いているのか江風と共に考えないようにしながら……………」

~~~~~

指揮官です。

現在ひな祭りのお内裏様役をする為に紋付袴っぽい着物（何故か重桜のマーキング）に烏帽子に似た何とか冠ってヤツを身に付けて笏を持たされております。

「というかこれ動きにくいぞ？」

重桜の人達はよくこれで動けるもんだ。

「ほらほら指揮官♪長門姉が雛壇で待つてるよ♪」

「まあ待て陸奥、そんなに急かしても俺は逃げないよ」

「お雛様になった長門姉とお内裏様の指揮官が見れるんだもん！早く見たいよ!!」

「ははは、分かったよ。じゃあ案内してくれ」

「はい」

ケモ耳元気ロリ娘な重桜の戦艦 陸奥に右手を引かれて俺はひな祭りの会場に入る。

世界に比類無き最高の戦艦と言われたビッグセブンの内の一隻だとは、この天真爛漫な姿を見て誰が想像出来るのだろうか？

初見だと絶対に無理だな。

こんな純粹無垢なケモ耳ロリ娘に手を引かれて歩くななんてロリコ

ンからすればご褒美なんだろうなあ……………

「ほら着いたよ指揮官」

「案内ありがとう陸奥。おお、凄いな」

「えへへー。重桜の皆で頑張って準備したんだよ？」

元々一般人だった俺には想像もつかないような価値を持つていそうな豪華絢爛の雛壇がそこにはあった。

ちんまりとした胸を大きく張って自慢そうにする陸奥に微笑ましい気持ちになりながらも、俺はゆっくりと雛壇へと近寄る。

見れば見るほど圧倒される雛壇だなこれ。

この段毎に敷いてある敷物も触ってみるが、明らかに肌触りが違う。

五人囃子の使う笛や太鼓も本物ってか明らかに年季の入った、普通じゃない装飾の付いた物が置かれているし……………ひよつとして国宝指定の文化財的な物じゃないよな？

「あ、長門姉も来たよ！指揮官、長門姉をお願いね？」

「む？来たか……………了解だ陸奥」

そんなアホな事を考えていたら、お雛様として着飾った長門が江風に連れられて会場へとやって来た。

ふむ、元々の素材が良いからとても栄えて見える。

十二単つてのは初めて見たが、和風美少女なケモ耳ロリ娘な長門にはよく似合っているな。

それにお雛様って聞くとなんかド派手な髪飾りを付けて、異様に横に髪を広げ固めてマリモミみたいにくつくらさせ、後ろで一括りにするもんだと思っていたのだが……………長門のは少し違った。

確かに髪飾りを付けているが、髪はそのまま流しているし、両横のみみあげ辺りを軽く結って纏めているだけでそんなにゴテゴテしていない。

本人の雰囲気と相まってとても可愛らしく着飾つていえると言えるだろう。

たぶんこのチョイスは、重桜空母の鳳翔が本気で長門の魅力を引き出そうと頑張った結果だと思われる。

まあ素材が良過ぎて張り切り過ぎたつても否めんが……………

「き、今日は…よろしく頼むぞ!!」

「ああ、俺に任せてくれお雛様」

「っ!?!……………そんな不意打ちは卑怯だぞ」

「ん?どうした?」

「な、なんでもないぞ!!」

陸奥にも任されたし、少し張り切ってそう言ってみただが……………キザ過ぎただろうか?

長門は顔を赤くしたまま俯き、チラチラと俺の方を見るばかり。

隣に控えていた江風はそんな俺と長門の様子を見て何故かため息を吐いていた。

いったい何故だ?

そんな風考えて困惑していたら時間となり、とうとう俺達は雛壇に飾られる事に。

まあこのまま写真撮影して終わりかな?

「そんな事を考えていた時期が俺にもありました」

現在の俺、帯が解けて十二単の前が肌蹴た涙目の長門に正面から抱きつかれております。

とうかこの十二単の下に襦袢を着てるけど、前開いてるし元々薄々過ぎてピンクのイチゴちゃんが見えてるんだよね。

泣き顔の長門はそれに気が付いていないし……………

「うあああああん!!取って!!指揮官!!早く取ってええええ!!」

「落ち着け長門!!そんなに慌てたら取る物も取れん!!」

「ひっ!?! 背中にもモゾモゾしたのが……………ひい

やあああああああ!!」

「ぬわっ!?!待て長門!?!」

十二単をとうとう脱ぎ捨てる長門に、肌色いっぱいになり始めて流

石に股間の息子が反応し始めた俺。

マジモンのパニックである。

何故こんな事になったのか？

それは写真撮影が終わった頃になるのだが……………

“ソイツ”は、いきなりやって来た。

撮影が終わり、後はひな祭りで用意したお菓子等を食べてお開きにしようかなんて思っていたら、長門に奥の待機室でお菓子を食べながら話をしないかと誘われた。

重桜のトップで毎日忙しい長門と母港の仕事と筋トレに忙しい俺が二人で話をする機会は余り多くない。

なのでそれも良いかと二つ返事で了承してホイホイ着いて行くと、江風がお茶を入れてくると席を外した。

そして最近あった事を談笑しつつ話していると……………

「それは実に面白い話だ……………ん？」

「む？どうした長門？」

「いや……………何か背中に……………ひい!？」

「どうしたんだ!？」

「い、いやああああああああああああ!!！」

「な、何を……………っ!？」

いきなり半狂乱になった長門が帯を解いて十二単を脱ぎ出した。

俺大混乱である。

そして長門は十二単の前を開いて俺に縋り着いて

「虫!!虫が背中に入ってきたの!!は、早く取ってえええええ!!！」

そう言って背中にを指していた。

そうして俺はパニック状態の長門を落ち着かせながら虫取りする事になったのだ。

原因が分かった所で時を戻すでしょう。

現在長門は肌襦袢しか身に付けていない。

それでも虫は長門から離れていない様でこの最後の砦すら彼女は脱ごうとしている。

流石にそれは拙すぎるぞ？

ただでさえ最近睦月型の娘達に愚息が反応し始めているのに、ここで長門の裸なんて見ようもんなら完全覚醒しちまうかもしれない。

そうなる前にも早く虫を排除しなくては……………

「クソっ!!この服動きにくいな!!」

「も、もういやあああ……………これも……………これも脱いで良いか?!」

「少し待て!!」

「む、無理……………あ、あああ……………」

長門は限界だ!!

俺の息子もそんな長門の様子に性癖歪められて限界だ!!

なんだよこの服!!

お内裏様の服って動きにくいっいたらありやしないぞ？

こうなったら……………仕方ない!!

「フンヌツ!!」

抱きついていた長門が落ちないように俺は片腕ずつ、裾から外して着ていた羽織と上の着物を脱ぎ捨てた。

とうか本当に動きづらんだよ!!

そして改めて長門の背中にいる虫を……………っておい!?肌襦袢どこお?!

「うううう……………ひっく……………」

「……………」

肌襦袢を脱ぎ捨てたら虫もどこかに行ったらしく、落ち着き始めた長門に、上を脱いで動きやすくなったのに役立たずな俺。

どうにも気まずくてソワソワしちゃう。
というかいつまで抱きついてるんですかね？

「……………」
互いについて見つめ合ってしまうが……………何も話せない。
というか目の前にいるこの美少女はマジなんですかね？
潤んだ瞳に上気した頬、そして事故とはいえ見てしまった裸。

これが据え膳ってヤツですか？

最後の守護神であるパンティ（白の無地）こそあるが、殆ど全裸である。

長門の喉が鳴る……………ってなんでお前の喉が鳴るの？

「男らしくて雄々しい身体……………凄い」

「な、長門？」

「スンスン……………指揮官の匂い……………」

「ぬうつ?!……………しまった、長門も重桜の……………」

先程とは目付きが変わった。

長門はどこかトロンとした目をしていたが、ヤバそうなスイッチが入ったのか、あの赤城達ヤベンジャーズのような目付きに変わってしまっている。

「お、落ち着け長門、ゆっくり深呼吸するんだ」

「……………なんでこんなに……………心地良いの?……………スンスン……………ア

ハ♪」

「!？」

視線が獲物を狙ったそれだ。

上を脱ぎ捨てた事がきっかけで、俺の体臭が発情の原因なのか？

そんなの誰が予測出来んだよ!!

「ぐっ?!」

「れろお……………ちゅうう……………はぁ♡」

長門が俺の板チョコマツソーを舐めて吸い付いてきた!!

なんだこのエロさ!?

しかも一度吸い付いてきた後に俺の顔を見つめて蠱惑的な吐息を零すなんて……………

もうここで童貞捨ててもいいかな？

いやあく随分と守ってきたもんだけどさ、ここまで求められて据え膳されてきたんなら食わぬは恥つてやつだろ？

もうビンビンで辛いよ。

それに長門も乗り気みたいだしさあ？

それじゃ、いただきまあ……………っ!?

「……………何をなされているのですか？」

お茶入れに行っていた江風が帰って来ていた。

凍りつく俺と長門。

そりやそうだよな、江風はお茶を入れに出て行っただけで戻って来るに決まってるわ。

そこで半裸の俺と長門を見れば……………こんなん気まずいわ!!

「も

う

い

やああああああああああああああああああああああ!!」

長門のそんな悲鳴が室内に響き渡る。

我に返って湧き上がる羞恥心の限界を超えたのだろう。

そんな彼女に掛ける言葉が俺には見当たらなかった。

それから長門は江風と共にすぐに隣室へと移動して着替えて帰ったらしい。

そして待機室には半裸の俺が残されて、寂しく雛あられをポリポリ

と齧るだけだった……

第35話 抱つことアドミラル・グラーフ・シユペー

指揮官です。

今日はとても珍しいお客さんが執務室の俺に会いに来ています。

執務も終えて今日のアフタヌントレーニングにでも堪能しに行こうかと考えて執務用の机から立とうとしたら、そのお客さんはここに来ました。

肩までのショートな銀髪に赤いメツシユの入った少し不思議な髪色を持つそのお客さんは、学園帰りなのか鞆を肩に提げてクリーム色のニット生地肩出しセーターに、黒いミニスカートと同じく黒色のストッキングでスラリとした足を強調した格好をしている。

これで身長も小柄なので艤装を付けていない現在の姿は、本当に高校生……下手すると中学生にも見えてしまうだろう。

「どうしたんだグラーフ・シユペー？」

「え、えつとね？その………ね？」

そんな可愛らしい格好の鉄血 巡洋艦のアドミラル・グラーフ・シユペーが上目遣いで遠慮がちに胸元で指をモジモジさせながらこちらを見ている。

何かを言いたそうにしているが、耳を真っ赤にしてモジモジするだけで言葉が出てこないようだ。

戦場では赤く巨大な鉤爪を持つ手甲を身に付けて冷静かつ丁寧に敵を葬っていくクレバーな姿とは、似ても似つかない可愛さを俺の前で見せてくれているのはすごい眼福なんだが………

はて？ いったい彼女は何を恥ずかしているのだろうか？

彼女がこの状態になって既に5分が経過している。

そろそろ話を切り出してもらいたいのだが………せつかな奴は嫌われるってこの前読んだ出来る上司って本に書いてたんだよなあ………

「……………」

「……………あ……………うう……………」

……………引つ込み思案なグラーフ・シユペーに話させようとしている俺が悪いんだろうか？

俺としては彼女の口から聞いた方が良いとおもうんだが……………しようがないか。

「グラーフ・シユペー」

「ツ!?な、なに指揮官?」

「いや、そんなに驚かなくても……………んんっ、とりあえずなんだ?何かを俺に伝えに来たんだよな?」

「う、うん……………そう」

俺から声掛けたら肩をビクって大きく反応しながら驚かれた。

……………あれ?もしかして俺ってグラーフ・シユペーに怖がられている?」

まあ図体は無駄にデカいし、傷だらけのモリモリマツソーなオツサシとか普通は声掛けずらいわなー。

でも戦場で共に駆け抜けた仲の戦友と言ってもいいような相手に、それをされると少し寂しいような……………いや、俺が自分で思っているよりも、もしかすると彼女達KAN—SENとの心の距離が遠いのかも知れない。

この前なんて酷かったもんなあ。

最近は煩惱に支配されそうになる確率が高くなってきたから、普段のトレーニングの倍プッシュユでやって様子を見にトレーニングルームへ来ていたエディンバラにドン引きされたし……………

『わー!!わー!!指揮官!!なんでブーメランパンツだけで服を着ずにトレーニングしてるんですか!!そんなのダメです!!そんな金塊なんかより価値のある筋肉を見たら……………見たら私……………ジュルリ……………はっ!?だめだめだめだめ!!……………でも少しくらい味見……………っ!?ベルが見ている!?どこから!』

なんか早口でよく聞き取れなかったが、顔を両手で覆いながら足早に外へ出て行ってしまった。

その後、演習の砲撃音がめちやくちや母港中に響いていたが……………皆も対セイレーンに向けてしつかり訓練してんだなあ。

話は戻るが、やっぱり傷だらけのマッソーは女子に引かれるのだろう。

男にとっては筋肉に憧れを持ち、傷痕を勲章のように思うのはごくごく普通の感性なんだろうが……女子には暑苦しく見苦しいと感じられる事があるとなんかのKAN—SEN達の読んでいた雑誌に載っていた気がする。

そういえば……最近ベルファストが俺の肌着や下着を新品に変える頻度が上がったような……はっ!?

ま、まさか……俺……汗臭いのと加齢臭が入り混じってる!?

ウツソだろお前!!誰か教えてくれよ!!

だからエディンバラの奴速攻でトレーニングルームから出て行ったのかよ……

俺はただポーピングしながら全身の筋肉の状態を確認しようとしてブーメラパンツ一丁で居ただけだったのに……

まあ確かに俺も世間ではオッサンに分類される年齢になってきたんだけど……自分で自分の匂いに気が付かないから分からなかったよ。

……どうしよう、急に恥ずかしくなってきた。

もしかしてグラフ・シユペーが、なかなか言い出さないのは俺のその悪臭を伝えるか伝えないか迷っているせいかな?

そりや言い難いわ。

自分の上司に、凄い臭いですってなかなか言い出せないだろ?

もしかすると影で言われてるかもしれない……指揮官って臭いよねみたいなの?

「……いい、言いづらい事なのか?」

「違う……でも……」

「無理しなくても良いぞ?また時間のある時でも良いんだ」

「……」

それとなく聞いてみるが、やっぱり言い難い事みたいだな。

これは今から急いでシャワーを浴びる必要性が出てきた。
女性ばかりの職場で男より匂いに敏感な彼女達が居るのに、悪臭漂わせるなんてある意味セクハラみたいなものだろう。

だからこの場でその事を言い難いであろうグラフ・シユペーに感謝しつつ、俺は一刻も早くシャワーを浴びてこの体臭を消さねばならない。

こういう時に制汗スプレーなんか欲しい。

明石の店にも不知火の商品にも置いてないから少し困っていたんだが……………

この際男性用の香水なんてのもいいかもしれないな。

そういうのはロイヤルの優雅卿辺りがよく知っている筈だ、絶対に手に入れなくては。

「指揮官!」

「ぬう!?!どうしたグラフ・シユペー?」

色々考えていたらグラフ・シユペーが俺の目の前まで来ていた事に気が付かなかった。

自身のセーターの端を握りながら、俺を見つめる両目が凄くうるうるしてる。

やっぱり近寄るだけで涙目になるくらい臭いのか?

ああ、お前の言いたい事は分かっているぞ。

早くシャワーを浴びたいから俺が臭い事を伝えて退出するんだ。

でもやっぱりそんな事言われたらへこむなあ……………

そんな悲しみを背負って彼女の言葉を待つ。

グラフ・シユペーは……………

「だ、抱っ……して!!」

「(⊠ □ ⊠) ?」

うん、今言われた事を脳みそ（筋肉）が理解するのにしばらく時間がかかって困惑した。

口は半開きだった自信はあるし、本当にそんな表情だったと思う。いや、ホントにき、あの恥ずかしがり屋のグラーフ・シユペーが抱っこ？

聞き間違えじゃなければ本当にそう言ったのか？

ユニオンの駆逐艦 エルドリツジとか重桜の駆逐艦 睦月型の子達みたいな幼い子が、よく俺にお願いするあれか？

え？え？ええ?!

いったいどういう事だ？

「あゝ、抱っこ？」

「うん、そう」

「えつと…………エルドリツジ達にするような？」

「……………」 ↑耳まで真っ赤になりながら無言でゆっくりと首を縦に振る

「お、おう……………そうか……………」

なんかすげえ驚いてまだ俺の頭（筋肉）が混乱しているが、とにかくグラーフ・シユペーは抱っこしてもらいたいらしい。

年頃の彼女が俺に抱っこしてもらうなんて恥ずかしいのでは？

なんて考えもあるが、そんな恥ずかしがり屋の彼女が勇気を出して俺にお願いしてきたんだ、快く叶えてあげようじゃないか。

「こ、こーこういう感じでお願い」

「む？……………なんだこれは？」

彼女から見せられたスマホっぽい携帯端末の画面に映されていたのは、どこかの観光地で若い男女が抱き合う写真。

男が女性の膝の下から持ち上げて女性は男性の肩に手を置いている様子が見えた。

「膝抱っこっていうみたい。……………少し憧れて……………だめ？」

「ふむ……………良いぞ？」

「ホントに!？」

「ああ、良いぞ。大丈夫だ」

純情な美少女のグラーフ・シユペーが、真っ赤になりながら上目遣いでオネダリしてくる。

これは絶対に断れないな。

可愛過ぎて思わず浄化されるかと思ったもん。

底からの弾けるような笑顔とか堪らんやろ……………

オツサンに任せんしやい!!

「こんな感じか?」

「うん……………重くない?」

「軽過ぎて心配になる程だが?」

「そ、そう?……………えへへ♪」

ネットにアップするとかグラーフ・シユペーが言うので携帯端末をセットしてから彼女を膝抱っこだったか?をする。

とても嬉しそうな笑顔で俺も釣られて思わず笑みをこぼしてしまった。

可愛い子の笑顔は良いもんだ。

今回は煩惱に悩まされずにKAN—SENと接することが出来て俺は大満足。

股間の間かん坊に振り回されるのって結構疲れるんだよ。

「ありがとう指揮官」

「おう、このくらいなら何時でも大丈夫だぞ?」

「うん……………あ、少し待って」

「ん?」

「こ、これは……………お礼だから!!んうっ」

「!？」

撮影が終わって彼女を降ろそうとしたら、いきなり顔を近づけられて右頬にキスされた。

突然の事に驚いて硬直してしまう。

その間に彼女は床に降り立ち、そのまま駆け抜ける様にして執務室を去って行った。

「え?…え?…え?」

自慢していたのがとてもとても羨ましくて、ずっと嫉妬していた自分がいた。

この前のバレンタインだってセイレーンのせいで中止になって悔しかったのに……

胸の中で燻っていた想いが抑えられなくなってしまったのだ。

でも指揮官を前にして何度も言おうと頑張っても口が動いてくれない。

そんな臆病な自分が悔しくて悔しくて泣きそうだった。

「でも指揮官は待ってくれてた。私を見てくれた」

行動に移してなお口籠る私を、優しく見守って待っていてくれた指揮官に私は遂に声に出して言えたのだ。

そんな私を安心させるように笑顔で快諾してくれた彼に心が弾んでしまうのは仕方の無い事だと思う。

指揮官はあの膝抱っこがどういうモノか知っていたのだろうか？

男女が協力して美しくカメラに写るあの膝抱っこは……本来恋人同士がやる写り方なのだ。

今日撮った画像はそのまま母港のネットに上げる予定である。

「皆も指揮官にお願いするのかな？」

それを見た母港の皆も指揮官に膝抱っこをお願いするのだろうか？

その時の事を想像すると胸が痛くなって、ドロつとした黒い感情が溢れ出して来そうになる。

「……………嫌だなあ」

そんな自分が醜く感じて嫌になる。

指揮官とは恋人では無いのに嫉妬してしまう自分にだ。

でも……………指揮官といつかはそうになりたい。

一緒にご飯を食べて、一緒に寝室に眠って、一緒に寝室で起きて、一緒に何気ない話で笑って……………何気ない毎日を一緒に過ごしたい。

そんな願いは戦場で生きる自分には過ぎた願いなんだろうか？

「戦争が終わったら……………普通の人みたいに指揮官と過ごしたいなあ」

願わくば恋人になって結婚して子供も産みたい。

そんな想いと願いを混ぜた呟きは部屋の中に消えていく。

恥ずかしがり屋の自分がいつかは勇気を出してその言葉を指揮官に言えるように願って……………

第36話 熱とアルジェリー

指揮官です。

今日は軽めの筋トレをした後にお風呂に行こうとしたのですが、何故か俺の私室の給湯器が壊れてしまってヴィシア・アイリス寮のお風呂を借りております。

他の寮に行っても良かったんだけど、特に、特に重桜とロイヤルのKAN—SEN達の猛プッシュがあったのでゆっくり出来そうなヴィシア・アイリスの寮のお風呂に来た次第であります。

「……………自称オサナナジミとか自称お姉さんとかの猛プッシュとかヤバすぎんだろ」

広めの湯船に浸かって背中を壁に当てて天井を見上げる。

やっぱり前世が日本人な俺にとって、足を伸ばせる広い風呂つてのは心から安らげる素晴らしい空間だ。

基本的に寮内のお風呂はこの寮も同じ内装らしいが、基礎としては重桜の銭湯をモデルにしているらしいので、前世のイメージにある古い日本の銭湯のような作りをしている。

外にはそれぞれの寮の特色が出た造りの露天風呂があるらしいのだが……………外の露天風呂には出ない。

何故かって？

それは室内に設けられている湿気を抜く為の窓の外に見えている光景のせいだ。

「艦載機飛ばしてる奴がいるな……………あれは零戦52型とF8Fベアキャットか？零戦は重桜の奴らだが……………ベアキャットを装備しているのは1人しか居ないな」

最近の兵器開発で作ったばかりのベアキャットを、性能評価試験として装備しているエンタープライズしか持っている奴を俺は知らない。

というか母港の新兵器でエンタープライズと重桜の空母達は何をしているんだ？

演習場はこことは別方向だろ？

ベアキャットに機銃で撃たれた零戦が火を噴いた!?

実弾演習だと!?

誰が許可したんだよ!!

「……………はあ」

後で戻った時に話を聞かなければいけない光景に思わずため息が漏れた。

アイツらに緊急時以外での艦載機の無断使用の始末書を書かせない……………

もはやお風呂をゆつくり楽しむ所ではない。

そう思っただけで肩まで浸かっていた湯船から身体を出ようと立ち上がると

「あら？指揮官じゃないの。どうしてここに居るのかしら？」

タオルを片手に普通に脱衣所からヴィシアの巡洋艦 アルジェリーが入って来た。

綺麗な長い銀髪にアメジストのような透き通った瞳と左目尻にある泣きぼくろ、そしてそのメリハリのあるダイナマイトボディが特徴である彼女は俺が居るにも関わらず、その眩し過ぎる四肢を隠そうともせずにこちらに歩いて来る。

いや、その二つのサクランボと銀色の茂みが生えた下の方を隠して貰えませんか？

「ふふふ、私の身体が気になるのかしら？恥ずかしくないわよ？指揮官に見せても恥ずかしくないと言っているし……………指揮官の“ソコ”も随分と立派な大人なのね。ふふふふふ♪」

「ぬお?!」

アルジェリーの綺麗な四肢に気を取られて自分の息子を隠すのを忘れていた。

俺は慌てて湯船に浸かり直す事で愚息を隠して下を向く。

そんな俺の様子が可笑しく見えたのか、彼女はクスクスと笑ってい

た。

愚息を晒してしまった事に彼女は不快感を感じていない様だが、ここは見苦しい“モノ”を見せてしまった事と女性の身体をガン見した事を謝罪しよう。

いくら本人がそう言っている、親しき仲にも礼儀ありと言う事だしな。

「すまないアルジェリー。見苦しいモノを見せてしまった事と未婚の女性である君の身体をマジマジと見てしまったって本当にすまなかった」「あら？ふふふ♪良いのよ指揮官。私も貴方の身体に見惚れてしまつて、近くで見ようとしてしまったもの……力を感じさせる引き締まって猛々しいその身体は私は好きよ？」

謝る俺にアルジェリーは笑ってそう言ってくれた。

どうやら本当にそう思ってくれているようだな。

その事にホツとしながら、頭を掻きつつこの間の雑誌で書かれていた事をついポツリと口にしてしまう。

「そ、そうか？傷だらけで筋肉質な身体というのは女性にとって暑苦しく感じるというが……」

その瞬間………空気が凍りついた様な錯覚をしてしまった。

アルジェリーの身体を見ないように下を向いていた視線を上に向けて………冷たい笑顔の彼女がいつの間にか湯船に入って俺の目の前に来ている。

そして少し屈んで俺の胸板マツソーに右手を当てながら

「いったい誰がそんな事を言ったのかしら指揮官？」

そう言つて俺を問い詰める。

その声色と雰囲気は今まで全く見た事が無い姿で、美人が怒ると怖いという事がよく分かる状態だ。

あまりにも雰囲気やバ過ぎる彼女を落ち着かせようと、俺は慌て

て立ち上がり彼女の両肩を掴んで

「ぎ、雑誌だ。雑誌にそう書いてあったんだアルジェリー……大衆向けの雑誌にそういう事もあると掲載されていたのを目にしたんだよ」

彼女の目を見つめながらそう言って説明した。

このままじゃヤベエ心配がプンプンだったので思わず肩を掴んでしまったのだが……これセクハラにならないよな？

「その不要な雑誌を捨てない……そう、分かったわ指揮官。でも覚えておいて？貴方のその身体の傷や筋肉は私達との絆でもあるわ」「ぬう？……確かにお前達と知り合ってから付いた傷痕や筋肉は多いが……」

自分の身体に付いた傷痕をチラリと確認しながらアルジェリーの言う絆について考え込む。

筋肉は絶え間ぬ努力の結果であるし、彼女達と駆け抜けた戦場で付いた傷が殆どではあるが、それよりも古い傷痕だって沢山あるのだが……

「共に生きてきた貴方に付いた傷は私達が護りきれなかった失敗の証、でも貴方が生きている事でそれを挽回出来るチャンスくれた証でもあるのよ？……本当なら傷だらけになる事なんて無かった筈の貴方は、それでも私達と共に生きてくれると言ってくれた……だから私達にとってその傷痕と筋肉は絆であり、力の象徴にして誇りなの。それを忘れないで指揮官？」

「お、おう」

なんか凄い大袈裟に言われた気がするのだが……真剣な顔でそう言うアルジェリーの有無言わせぬ迫力に屈してしまった。

まあ彼女だけでなく、皆もそう思ってくれているのなら俺もこの事で悩むのをやめよう。

よし、これからはもっと筋肉との対話を深めて、更に素晴らしいマッソーを披露して見せよう!!

「ああそれと……」

「ん？どうした？」

決意を胸に生まれ変わった気分です。筋肉の事を考えていたら、不意にアルジェリーが目を逸らしながら指をさす。

その指の方を見るとそこにはそそり立つ俺のバベルの塔が……
「流石にそれは恥ずかしいわ指揮官……」

「………すまん」

どうやら筋肉の事を考え過ぎて自分の状態を確認出来ていなかったようだ。

俺は俯きながら彼女から離れて後ろを向いた。

「隙ありよ指揮官?……ちゆう……ふはあ♪」

「!!!????」

アルジェリーに後ろから抱きつかれて首筋を強く吸いつかれた!?

しかも背中のお尻筋に当たる柔らかいお山と頂のポッチの感覚が
ががががが!!

「私は貴方が大好きよ指揮官?力強さも道標として先導する逞しさも……全部私に見せてくれる貴方はね?……それじゃあ後でワイン……は勤務中はダメだったかしら?ならコーヒーを入れてあげるわね?」

「あ、ああ………」

そう言ってアルジェリーは離れて行った。

大好き?俺の事が?

それは……指揮官としての俺の事か?

それとも……一人の男としての俺か?

………分からない。

彼女達の好意を向けられる事が何度もある。
だが俺にはどう答えて良いのか分からない。

つい煩惱に押し流されそうになるが、それは俺の自分勝手に都合の良い考えの愚かしい衝動のせいなのだ。

恋というモノの感覚が分からない年齢Ⅱ童貞で彼女無しの俺にはそういった機微が理解出来ない。

愛情ならば親愛や友愛といったものが少し理解出来るのだが

……

「……………どうすれば良いのだろうか」

一人湯船で立ち尽くす。

あのアルジェリーの身体の柔らかさや熱を感じた背中中は、失った熱の寒さを感じ始めている。

青春時代など、とうの昔に過ぎ去っているというのに……………俺はそれを甘受しても良いのだろうか？

最初も次の人生でも感じたことの無い感覚。

俺はそれをどう受け止めるべきなのだろうか？

よくある異世界転生モノなんかでハーレムを築いたり、恋人を作れる転生者に聞いてみたいものだ。

どうすればそのような女性との良好な関係を築けるのですかと。

自分から動かなければ機会は訪れないのは分かっている。

前世で引きこもりやニートだったコミュニケーション能力を持たない人達が、何故いきなりそんな今まで関われなかった異性と親しくなれるのか？

考えてもみて欲しい。

筋肉以外の自分に自信が無い、自己肯定が出来ない俺にとってそれは傍から見れば情けない事なのだと思う。

だが今まで関わった事の無い女性とそんなに気軽に話せるものなのか？

童貞でコミュ障な事を考えているのは分かるが……………現実的に二度目のやり直しのような人生でも、相当な覚悟がいるはずだ。

「俺には無理だな」

今でさえセクハラ発言や行為をしないように精一杯なのに、それ以上に関係なんて考えられない。

アルジェリーのアレもリッツプサービスってやつの一環だろう。
そう考えたらそんな事に動揺する自分が恥ずかしくなってきた。

「うんうん、そうだそうだ！何甘い事考えているんだ俺は……………やはり弛んでいるな。よし!!」

湯船から上がってその場でスクワットを始める。

片足を前に伸ばしてバランスを保持しながらのスクワット。

これは足の筋肉だけでなく、臀部や腰部といった体幹を鍛えるトレーニングにもなる素晴らしいものなのだ。

一心不乱に筋肉を鍛える。

それで余計な事を考えなくて済む。

今は戦時中、戦う事こそが最善なのだ。

だから……………今はそれだけを考えるんだ。

~~~~~

「……………これで少し揺らいでくれたのかしらっ。」

ゆっくりとコーヒートの準備をしながら、恐らく動揺を筋トレで必死に誤魔化そうとする指揮官の事を思い浮かべる。

そうでなくては困る。

あんなに恥ずかしい思いをしながら指揮官を誘惑したのだから

……………

「でも、こうでもしないとあの人は揺るがないのよね」

苦笑しながら脳裏に過ぎるあの人の“思い出”いや、“記憶”と言った方が良いのだろうか？

世間では勇猛果敢で負傷しても止まらない猛将等と言われる彼が、本当は奥手で臆病だという事を知っているのはこの母港に何人居るのだろう。

私達や戦友達が傷付く事を恐れて、囨として常に戦場の最前線に立ち続ける彼の在り方を。

それを知ったのはあの時事だった。

それはまだこの母港に着任する前の聖堂の警備に着いていた時の事。

聖堂の中で急激に頭の中を掻き回されるような痛みはその場に倒れ込み、そのまま救護室へ運び込まれた私は……………自分の身に覚えの無い記憶がある事に呆然としてしまった。

記憶にある私に笑いかける一人の男性。

私は彼を指揮官と呼んで慕っていた。

常に戦場の先に居る指揮官との思い出は、会ったことの無い人物の筈なのに……………私の心を揺さぶる。

共に生きて、共に戦い、共に笑い合う……………その先に力及ばず倒れる事もあった。

でも記憶の中の私と指揮官はどこまでも互いを信じ合い、倒れても互いを気遣い続けていた。

綺麗だった。

その常に共にある在り方が羨ましかった。

今いる私が何故その場に居れないのか悔しくなるほどに。

絆が結ばれてその先へと進んだ記憶もあった。

純白の花嫁姿の自分に新郎姿の指揮官が優しく微笑んでいる幸せな記憶。

別の自分が彼と結ばれる事に嫉妬してしまう。

何故私では無いのだろうか。

「でも良かった、この世界ではまだ誰とも結ばれて居ないもの」

コーヒーを準備する手を止め、誰も居ない事を確認して普段は仕舞っている“ソレ”を取り出した。

“黒いメンタルキューブ”

いくつかある記憶の中で、アイリスとロイヤルの混合艦隊と敵対した時に聖堂に伝わる秘蹟の再現を行ったソレ。

あの時は扱い切れずに暴走してジャンヌ・ダルクに止められたが、今のコレはその暴走の兆しは見えない。

私に記憶を渡してくれたコレはいったいどの私が使っていたモノなのかは分からないが、これから指揮官を攻略する上で重要な役割を果たしてくれるだろう。

「彼の事もコレのお陰で知ることが出来たし……これはまさに天からの贈り物ね」

本来、奥手で臆病な指揮官の理性という鉄壁の城を崩すのに大いに役立ってくれているのだから。

このメンタルキューブからの記憶から読み取れる情報を駆使しても指揮官を包囲する事は簡単では無い。

でも上手く活用する術はある。

「その為にいくつもの情報をバラ蒔いたのだから……」

それに最初に食いついたのは重桜の陸奥。

彼女もまた聖域の神託を受けて行動しているとの事。

まあ彼女だけに留まらず、他にも独自に動いている人達も居るようだけど……

それはまるで指揮官という餌を蜘蛛の糸で巻き取っていくかのような光景。

果たしてそれに彼は気が付いているのだろうか？

「私達にその光を見せつけて焼き焦がしてきた貴方は……もう逃げられないわよ？」

自分でも初めて感じる愉悦と征服感が熱を持ってその身を焦がす。

誰もが貴方を求める。

その一番を求めて。

さあ、貴方の心は誰の手に？

私も貴方を逃がさないわよ？

### 第37話 秋月型と縄跳び

指揮官です。

今日は縄跳びで全身のシェイプアップを図ろうとジャージ姿で母港の公園に来ております。

たまには外でトレーニングするのが良いだろうと俺専用につって貰った縄跳びの縄で現在三重跳びをしているのです。

三重跳びを連続で繰り返すのは全身の筋肉の持久力だけでなく、リズム感も大事になってくる。

「……………」

それに伴い集中し過ぎて無言で飛び続ける俺を、傍から見ればかなりシユールな光景だろう。

だが、これでいい。

最近のKAN—SEN達とのラッキースケベの遭遇率とグイグイ来るアピールに俺の息子が持たん時が来てしまっているのだ。

「……………つぐう!」

縄を足に引っ掛けてしまった。

やはり変な雑念を持ってしまったからだろう。

でも考えてみて欲しい。

この前の起きてしまったラッキースケベな出来事を……………

ジョギング中の通りかかった俺の目の前でライブの練習をするユニオン巡洋艦 サンデイエゴが、載っていた台から落ちそうになって思わず助けに入ろうとした時に……………大きく開いた胸元から思わず生乳を驚掴みにしてしまった事故。

あれは本当に偶然の産物であり、最近またバストがサイズアップしたらしいサンデイエゴがサイズが合わないブラを外して練習していたのが原因らしい。

普通なら新しいブラを買うのだが、その日に限って明石のお店が商

品を入れ替える為に休業していて、買えなかったからそのままだったという。

赤色のツインテールが目印の元気一番な彼女ではあるのだが、その恵まれた肉体は豊満なバストを備えた魅力的な少女だ。

巷ではその代償にIQを捧げてしまったのだと言われているらしい。

まあ、そんな彼女がブラをしていないなんて知らない俺は、生乳を驚掴みにしている事実には硬直してしまったのだが、サンディエゴの豊満なバストを掴んだお手手は揉み揉みを続けてしたようで……………

『ひゃあうん!!……………あん♡……………し、指揮官? 助けて……………あふあ♡……………くれたの?』

『あ、ああ……………』

『でも……………ああ♡……………こんなに……………んん♡……………いんなの……………きらいじゃないよ?』

『いや!!すまん!!』

そこで揉み揉みを続けていた俺の悪い手に気が付いて離れたのだが、蠱惑的な吐息を吐く上目遣いのサンディエゴがエロい事エロい事。

指で柔らかさを堪能しつつ、手の平で擦るように硬くなった頂のスイッチを刺激していたのも感触的に覚えていた俺は自分の手を思わず見てしまう。

『このエロ指揮官♡』

『……………本当に済まなかった』

その場で平謝りする俺を流し目でみるサンディエゴは、クスリと笑うと自分の胸を下から掬い上げるようにして持ち上げて……………

『私はバカだから上手く言えないけど……………指揮官への想いは他の娘達と同じくらい……………ううん、それ以上なんだよ? 指揮官が触ってくれたのは嬉しかったしい……………ねえねえ、もつと触ってみる? ううん、指揮官が良いなら私は……………』

『さ、サンディエゴ?』

はにかむ様な笑みで俺を見る彼女は……………

『夜の特別ライブ……………来てくれる?』

そうやって俺に寄りかかってきた。

あの時は脳内ピンク色の暴走機関車になりそうになって股間の息子が最大仰角を刻みそうになっていたが、そこを通りかかったボルチモア達の運動部が外周を回って来たのをキツカケにサンディエゴは俺から離れていく。

『指揮官、私はいつでも待ってるよ♡』

『っ?!サンディエゴ?』

俺にしか聞こえない小さな声、しかしその声色はまるで砂糖を大量に使ったお菓子のような甘さを含んだ話し方でそう言う彼女は、正しく恋する乙女の顔をしていた。

何も出来ずに立ち尽くす俺はもう混乱が頭を回り続けて動けない。そして、同じ場所で固まる俺を心配して声を掛けてくるボルチモア達がもう1周外周を回って戻って来るまで完全に思考停止状態だった。

「……………生乳……………いや、何を言っているんだ俺は」

なんていうかもう頭を空っぽにして運動しないと、サンディエゴの言った夜の特別ライブが脳内をチラついて離れない。

俺の童貞は彼女に捧げてしまう事になるのだろうか?

いや、こんな三十過ぎのオッサンの童貞とか欲しがらる奴なんて居るはずないだろ……………

「クソっ、また雑念が……………」

今はマツソーとの対話の時間なのに煩惱が邪魔をする。

というか、あんなにストレートにアピールする彼女が俺の心にここまで残るとは……………

「くっ、殺せ……………」

不甲斐なさ過ぎる己に思わずそう言ってしまうのだが、マツソーな

オッサンのくつ殺とか誰得よ？

需要があるとは全く思えんぞ？

「あれ？指揮官だ。こんな所でどうしたの？」

「確かに指揮官さまですな。いったいどうしたのでしょうか？」

「指揮官さんの事だから鍛錬の途中なのではないでしょうか？」

「じゃ、邪魔してませんよね？指揮官のお邪魔したら駄目です……………」

「たぶん大丈夫ではないでしょうか？今は休憩中みたいですし……………」

頭を抱える俺の前にやって来たのは重桜駆逐艦 秋月型の姉妹5人だ。

最初に声をかけた順から灰色シヨートな髪で涙のようなペイントを右頬にした元気つ子な涼月。

黒い長髪に白い大きなリボンでポニーテールの落ち着いた雰囲気  
の宵月。

桜色の長髪で赤色のカチューシャをした物腰が柔らかそうな花月。  
長い金髪でオドオドとした気の弱そうな雰囲気の新月。

そして最後に宵月と同じく黒い長髪で赤いリボンで髪を留める素直で無垢な春月。

この5人がここに来るなんて珍しい。

普段は扶桑や山城と一緒に重桜の神社で神楽の練習やそのお手伝いをしている筈なんだが？

というか……………その格好はなんだ？

「お？指揮官も気が付いちやった？これって宵月が持ってた体操服を皆で着てるんだ♪」

「宵月の予備です」

涼月と宵月がそう言っ胸を張る。

それはいつぞやの三笠が着ていた体操服にブルマではありませんか。

というかよく五着もあつたなそれ。



「たまには神社の外で運動をしてきなさいと扶桑さんに言われまして……」

「似合ってませんか？に、似合ってませんよね？」

「うーん、新月姉さんはよく似合っていると思いますけど……どう思いますか指揮官さま？」

「……皆よく似合っていると思うぞ？」

「へっ♪指揮官はこういう服が好きなんだっ♪」

涙目になりつつある新月が可哀想なのが、彼女だけを褒める訳にはいけないので全員を褒めてみたら涼月にそう言ってからかわれてしまった……

いや、こんな際どい服装を似合っているなんてセクハラ発言か？

彼女達も女性なのだからそこら辺を気を付けないとなあ……

「いや、気を悪くしたならすまない。よく似合っていると思っとな」

「ぶうー、指揮官ノリ悪いー。プー太もそう思うよね？」

「涼月姉さん駄目ですよ!!指揮官さまは本心でわたし達を褒めてくれているんですから……カミサマに導かれる指揮官さまのお褒めの言葉を茶化すなんて駄目です!!」

「今のは涼月が悪かったと宵月も思う」

「はーい、反省してまーす」

涼月は頭の上に乗っているハムスターのようなペットに同意を求めたが、春月と宵月に言われて少しバツが悪そうにしている。しかし、それで険悪な雰囲気醸し出している訳では無い。

互いによく知っている仲だからこそ言い合える関係が見て取れて、本当に微笑ましい程に仲の良い姉妹だと感じた。

この母港には姉妹艦が在籍しているKAN—SEN達が多数存在しているが、こんな風に軽口を言い合えるような仲の良い姉妹ばかりで俺は少し羨ましく感じる。

「あ、指揮官、そういうえばここで何をしていたの？」

「ん？ああ、今日のトレーニングに縄跳びをしていてな？」

「縄跳びですか？」

「ああそっただぞ花月。どうだ？皆もやってみるか？」

微笑ましさに心を洗われていると、涼月が急にそれまでしていた事を聞いてきたので答えて花月達もしてみないかと誘ってみた。

縄跳び用の縄は俺が飛んでいる最中に切れてしまったりした際の予備として3本持つてきているのだ。

一人で集中して出来ないのであれば、他人を誘って互いに高め合う方法を使えばまた違った刺激があつて良いかもしれない。

そんな浅はかな考えで誘ってみたのだが……………

「縄跳び？面白そうだね！やろう！」

「元より運動をしに来ましたので丁度良かったですね」

予備の縄を受け取った涼月と宵月は早速その場で飛び始めた。

「たまには指揮官さんと一緒に運動するのも良いですね」

「で、でも1本しかないですよ？」

「ならわたし達で縄の両端を持つて回して交代で飛びましょう」

花月、新月、春月は縄跳びの要領で交代しながら飛ぶようだ。

うん、実に目の保養になる。

可愛らしい少女達が仲良くしているのを見ると、どうしてこう心が綺麗になっていくような感覚がするのだろうか？

彼女達の浮かべる笑顔を見ると、自分が今まで頑張ってきた事は無駄ではなかったように思えてくるのだ。

可憐な少女達が平和な世界で戯れる素晴らしき光景……………ああ、これが萌えというものなのか……………尊い。

煩惱という状態異常から解放されて自然と笑顔が浮かんできた俺は……………そのまま召されてしまいそうになっていた。

『閣下もこちら側にお越しになられましたか……………駆逐艦の妹達……………良いですよね……………』

聞こえる筈のない幻聴まで聞こえる。

だが奴は無断でジャベリン達初期艦の入浴シーンを盗撮していたとして営倉入りしているはずだ。

聞こえているのは本当に幻聴だろう。

とりあえずアイツの駆逐艦との接触禁止を兼ねた謹慎期間はあと2週間伸ばそう。

そんな事を考えていたら自分が動いていない事を思い出す。これではいけない。

彼女達の事を見て癒させるのも良いのだが、本来は筋肉との対話を  
する為にここに居るのだ。

この清々しい気持ちで対話すればどれ程の効果が出るのか……  
楽しみだ!!

ここで良い流れを掴んで、そのリズムをもにすれば更なる飛躍が  
俺を待っている筈である。

確定されたマツソーへといざ行かん!!

「よし、早速始め……む？」

自身の縄を握り飛び始めようとした瞬間、涼月達が縄跳びを止めて  
胸を押さえている。

先程まで楽しそうにしていたのに、いったいどうしてしまったとい  
うのだ？

「どうしたんだ皆？」

「」「……」「」

心配して近寄る俺に何も言わない涼月達。

何故皆揃って胸を押さえているのだろうか？

さっきまではあんなに楽しそうに縄跳びをしていたのに……

一番近くに居た新月に話を聞こうと視線を合わせる為にその場で  
跪く。

そんな新月はプルプル震えながら顔を真っ赤にして胸を押さえ続  
けている。

ますます疑問が増えるばかりだ。

「大丈夫か新月？」

「し、指揮官……」

涙目で上目遣いとか普段の雰囲気も相まって庇護欲を唆る彼女に  
少しドキツとするが、この5人が動かなくなってしまった原因を聞か  
ねばならぬ。

もし怪我でもしているのであれば、ヴェスタルに見てもらわねば  
……

「皆揃ってどうした？怪我でもしたのか？」

「あ、あの……その……」

「ゆっくりで良い。教えてくれ」

「あうう……」

「？」

事情を聞こうとすると更に真っ赤になる新月に疑問は尽きない。

何故だ？何故彼女は赤くなるばかりで答えてくれない？

「指揮官さん……」

「花月？」

モジモジとする新月に代わって花月が前に出る。

彼女も顔を赤らめながら胸を押さえつつ、話を聞こうと跪く俺の耳元まで近寄ってきた。

「あの……む、胸が服で擦れて……」

「胸？どういう事だ？」

耳元で恥ずかしそうに話す花月に思わずその顔を見てしまう。

はて？胸が服に擦れる？

それはおかしいぞ？

セクハラでは無いが、普通ならブラを付けている筈だからそんな事は……ッ!?

待てよ？彼女達の普段の格好………というか重桜の普段のスタイルを考えてみるんだ!!

空母群………ナツシングブラ（一部有り）

戦艦群………一部ナツシングブラ

巡洋艦群………ほぼナツシングブラ

駆逐艦群………ナツシングブラ多数

またKAN—SENの謎を解いてしまった………

つまり今の彼女達は………

その真実に辿り着いた俺は改めて花月を見ると体操服にポッチが浮かんでいるのが確認できた。



……………そこに私の貞操が有るか無いかの違いはあるでしょうが。

これを知ったあなた。どうかラッキースケベの原因を暴いてください。

それだけが私の望みです。

~~~~~

「……………まさかあんなに痛いとは思わなかったよ」

「宵月も不覚を取りました」

涼月と宵月は二人で擦れてしまい、痛みを感じていた胸を摩る。

重桜の神社の一室で秋月型の姉妹が集まって開く反省会。

今回の作戦は陸奥様からの入れ知恵で、チビツ子同盟重桜駆逐組の先鋒として指揮官に色仕掛けをする予定だったのだが……………失敗した。

サラシを巻いて擦れない様にする予定だったのだけれど、それでは抱き着いたりした時に意識して貰えないのでは無いか？という疑問が出た為に全員が外したのだ。

そしてその事を指揮官に悟られず、このまま抱き着いたりして自分達のペースへと追い込みそのままのリズムで一夜の熱い体験を……………なんて考えていたのだったのだが……………

結果は知つての通り失敗した。

「でも指揮官さんの反応を見てたら……………全くの間違いでは無いと思いますよ?」

「し、指揮官の運動を邪魔しちゃったのは悪いと思うけど……………わたし達の胸を見てましたから……………」

「うううう……………意識されると恥ずかしいです」

花月は冷静に分析し、新月は少し申し訳なさそうにしながらも自身の胸を揉んでいる。

花月は意識されていた事に羞恥心を感じて真っ赤になっていた。

「やっぱり皆もそう思うよね？ だったらもっと攻めてみない？

……………? ? ? 何とかさあ」

「…っ?!」

涼月が取り出した物を見て姉妹は驚愕に目を見開く。

それは……………

白いスクール水着だった。

しかもただのスクール水着ではない。

生地は薄く通常なら付いている筈の裏地が無い。

つまりこのスクール水着は水に濡れると薄さと白さで着用している者の身体を浮き立たせてしまうのだ。

「ちよつと恥ずかしいけどさ……………これなら指揮官もイチコロだと思
うんだ……………ケダモノになっちゃった指揮官と浜辺の木陰で一夏の
経験つてのは……………どうかな?」

「…ゴクリっ」

涼月の提案に姉妹全員が生唾を飲み込む。

それは彼女達の悲願。

指揮官との既成事実という甘い誘惑に誰もが目を奪われる。

指揮官という恋慕する相手が自分を求めて一匹の獣と成り果てる
様を体験するなど……………獣としての本能を持っている重桜のKAN
—SENならば受けたいシチュエーションO. 1なのだ。

「それじゃあ……………作戦を立てよう」

「一番槍は宵月が……………」

「あ、ズルい!! 指揮官さんに美味しく頂かれないのはわたしも一緒に
すよ!!」

「わ、わたしも……………お邪魔じゃなければ……………」

「破廉恥です……………破廉恥ですけど……………指揮官さまはお喜びになら
れますよね?」

いつの間にか反省会は次の作戦会議へ。

……
姉妹仲良く指揮官に極薄白スクール水着を見せる事になるのだが

それはまた夏のお話に……………

第38話 シャワー室とクリーブランド

指揮官です。

いきなりピンチです。

朝のジョギングを終えて久々に学園のシャワー室でシャワーを浴びようと来たらユニオン巡洋艦 クリーブランドとバツティングしました。

しかも……クリーブランドは全裸です。

朝シャワーしに来てたクリーブランドの居るシャワー室の脱衣場でバツタリ会ってしまった気まずさよ!!!

というかラツキースケベ多くないか!?!?

「し、指揮官……」

「クリーブランド……」

普段は髪留めをしているブロンドの長髪はサラサラとして触り心地が良さそうに見える。

そしてルビーのように真紅の瞳は驚きを含んで俺を見つめていた。タオルで前を隠しているが、それは前の下側のみ。

クリーブランドの発達途中で小山なお胸様は鮮やかなピンク色の頂きと共に見えたままだ。

ジャージ姿のモリモリマッソーなオッサンと全裸のクリーブランド……どう見ても犯罪の香りしかしない。

俺も彼女もあまりの事態に硬直して時が止まったまま動けない。だが予想は出来る。

この後俺は悲鳴を上げたクリーブランドの声にやって来る姉妹達が、この現場に踏み込んで社会的な死が確定することを。

どうする……どうすれば良い？

俺の全身の筋肉に問い掛けるが全ての筋肉が手錠を付けた俺を指し示してくる。

こんな時に頼りになるマッソー神ですら何のお告げも伝えてはくれないのだ。

誰か助けてくれ!!!

「……………指揮官」

「っ!? な、なんだクリーブランド?」

混乱して脳内で救援要請を出していた俺に、いつの間にか近寄っていたクリーブランドが下から俺を見上げていた。

タオルを持った右手で胸元まで隠し、頬を赤くしながら俺の右腕を左手で掴む。

あ、知ってるぞこれ。

この人痴漢ですって言われるやつじゃん(絶望)

「一緒に……………シャワーを浴びない?」

……………?? (、ω、)??

(。D。) ファッ!!

脳ミソが筋肉で埋まったせいかわか耳がバグったか?

なんか凄い事言われた気がするぞ!!

いやいやいやいや!!

皆の姉貴兄貴と言われている元気っ娘なクリーブランドだが、こんな倒錯した事を言うはずが無い!!

きつと幻聴だ!!

幻聴に違いない!!

「ねえ指揮官……………私と一緒にシャワーを浴びるのは……………嫌かな?」

「そ、そ、そ、そんな事は無いぞクリーブランド?大丈夫だ、問題ない」

「本当に?」

「ああ、勿論だ」

はい幻聴じゃありませんでしたあああー!!

しかも思わずOKしちゃったよ……………
だって仕方ないだろ？

潤んだ目をしたクリーブランドが上目遣いに俺を見て、普段は勝気な表情をする彼女が不安げに俺を見ながらそう言ってくるんだぞ？

しかも内股で膝を擦り合わせながら落ち着かない様子で身体を揺らしているんだ……………

ヤバいって!!これはヤバいって!!

何がヤバいって元々魅力的な女の子なのに、更に庇護欲まで唆るのは反則ですよ?!

「あのね指揮官、私も色々悩んだんだよ？どうすれば指揮官に見て貰えるか……………指揮官が思っている以上に私だって興味あるよ？その……………男の人の事……………ううん、指揮官の事をもっと知りたいって」「ク、クリーブランド……………」

切なさを含んだ瞳は俺を捉えて離さない。

こんな表情を見せる彼女は初めてだ。

俺を知りたい？

それはいつたい……………どういう事なんだ？

「自分が男勝りなのは分かってるよ。でもね？この身体になってから……………女の子になってから色んな事に興味が出てきて……………それこそ……………エッチな事とかも」
「……………」

「変な事を言ってるのは分かってる。でも……………切ないんだ。指揮官に見てもらいたくて胸が切ないんだよ」

何も言えない俺に、クリーブランドは右手に持ったタオルを床に落としてそつと抱き着いてきた。

彼女のこの行動に対して俺はどう反応していいのだろうか？

こんな事が起きれば普段なら愚息が『最っ高にHighって気分だぜ!!』とStand Upしてくるんだが、今はまだ小康状態に収まっている。

そうなってしまう程に俺は今困惑している。

「大好きでいたらダメ？そう思っちゃダメ？胸が苦しくて……………張り

裂けそうで……指揮官の特別になりたいって思っちゃうんだ」

「……それは」

彼女の独白が余計に俺を混乱させる。

いや、分かっているんだ。

クリーブランドが俺に好意を持ってしまっている事くらい。

彼女は今不安な筈だ。

自分の胸の内を……それも好意を持った相手に話すなんてとても勇気のいる行為の筈なんだ。

臆病な俺にはとても真似出来ない。

「このままそういう事……してみたいって思っちゃう。私だって女の子だよ？女の子だって……そういう事にも興味があるんだよ？」

「……お……あ」

言葉が紡げない。

ここまで覚悟を決めた彼女に対してなんと腑甲斐無い事だろうか。

女性に対してここまで言わせてしまう愚かな男はこの俺だ。

どうすれば彼女に答えられるのだろうか？

彼女の満足出来るような答えは……

「私を……抱きしめて？」

「ッ!？」

「指揮官になら全部……全部あげちゃうよ。どんな風に扱われてもいいから、心も身体も全部……受け取って欲しい……大好き……ううん、指揮官の事を私は愛してるんだ」

それは小さな蕾が可憐な華を咲かせるような、綺麗な笑みだった。

心の底から本当にそう想っている。

それが伝わる笑顔と言葉だった。

「……すまないクリーブランド」

俺は抱き着くクリーブランドを引き離して自分の着ていたジャー
ジの上を肩に掛ける。

シヨックを受けた表情を浮かべる彼女に俺は優しく抱きしめた。

「俺を……こんな俺を好きでいてくれてありがとう。だが……俺にはまだその好意を受け止められる勇気が無い」

「指揮官……」

誰かとそういう関係になるという勇氣。

今まで童貞だから、ヘタレだからと躲してきていた問題。

筋肉と対話を重ねる事で目を逸らしてきていた俺には……まだ答えを出せないんだ。

「自分でも最低な事を言っているのは分かっている……分かってるんだ。だが、その一步を踏み出す勇氣が俺には出ないんだ……」
思い出すのは何も知らずにこの世界に転生してアズレンの世界であると知った事。

美女、美少女である彼女達と知り合って邪な思いを満たそうと考えていたあの日々。

そんな馬鹿な考えなんて捨て駒時代に吹き飛んで消えてしまったし、共に戦い抜いてきた彼女達にだって感情があり、心が宿った生きている存在だったんだ。

どこか別の世界の話だと心の中で傍観者になってしまっていた俺が居たのは事実であり、どこか現実感が無かった俺に……好意を向けられる？

現実を見れず何も護れなかった男なのに？

こんなが俺が幸せを甘受する事が本当に正しい事だと思えるか？

自分の劣情を優先しそうになるような愚か者が、俺に好意を向ける彼女達を幸せに出来るのか？

ましてや自分の部下を見殺しにしてきた俺だぞ？

そんなの……有り得ない。

彼女達にはもつと良いパートナーが見つかる筈だ。

俺なんかよりもずっと素敵なパートナーが。

その好意は素敵なものだし、大切に受け止める。
だが、俺が答えていいものではない。

だから………彼女達には悪いが………

「俺に………その勇気が出るまでは………答えを待つては貰えないだ
ろうか？」

「………うん！待つてるね指揮官♪」

最低だ。

結論を先延ばしにしてしまうこの俺が最低だ。

答えを聞かせてくれると信じているクリーブランドの笑顔が直視
出来ない。

己の中に蠢く欲望が彼女を受け入れろと叫んでいる。

そんな事はさせるものか。

輝かしい未来を迎える彼女達を俺なんか穢していい存在じゃな
いんだ!!

彼女から離れて頭を撫で、俺は学園の外へ出る。

もう一度外周を走ろう。

もつと自分を追い込んで。

邪な思いを抱けぬようになるまで………

~~~~~

「……………行きましたよ姉貴」

「そう……………やっぱり筋トレしに行ったのかな？」

「そうみたいです」

「そっか」

シャワー室のロッカーの中から現れた妹のモントピリアが、片耳に手を当てながら指揮官の行方について教えてくれる。

外で監視していたデンバー達と通信し、逐一指揮官の行動を教えてください。

指揮官が筋トレしに行ったという事は……………私に欲情してくれたという事だ。

「……………ははは♪」

思わず口の端が吊り上がり笑いが出てくる。

安堵した。

指揮官が自分の事を異性として興奮してくれる事に。

「姉貴……………」

「うん、嬉しいね。私達にもチャンスがあるって事だよ♪」

「本当に？」

「うん♪」

「良かったあ……………」

安心して胸を撫で下ろすモントピリア。

でも姉である私には分かる。

その目はギラギラと輝いて胸には劣情を渦向かせている事を

……………

私だってそうだ。

“そうなるようになってしまった身体”が疼いて治まりそうになり。

「でも姉貴、こんな私達を……………指揮官は受け入れてくれるでしょうか？」

「……………どうだろう？でも捌け口位にはしてくれるかも」

「……っ!？」

「えへへ♪想像しただけでもこんなになっちゃうよね♪」

全身を震わせて喜ぶ妹を見ながら自分も心地良くなる。

もし指揮官に“使って貰えたら”

その事を想像すると天にも昇りそうだ。

軍縮会議。

それはセイレーンとの戦いに勝利し、小康状態に持ち込んだ際に起こる筈だった会議だ。

その会議が行われる1ヶ月前に私達姉妹はその軍縮会議において定数以上の不必要となる余剰KAN—SENとして………その尊厳を辱められた。

どこから入手したか分からないKAN—SENの力を阻害する薬を飲まされて、動けなくなった所を何処か分からない場所へと連れて行かれて純潔こそ散らされる事こそなかったけれど、様々な辱めを受けた。

姉妹別々の部屋に入れられたのだけど、隣同士の壁が薄く、何をさされているのかを説明されながらその悲鳴や言葉にならない声を聞かされ続ける。

まさにそれは地獄だった。

望まぬままに作り変えられていく身体と失われていく希望。

心の奥底で願っていた助けは来ず、ただ打ちのめされていく心。

気が付けば次第にソレを受け入れ始めて楽しみ始めていた自分達  
がいた。

そして会議当日。

私達姉妹は首と手を一緒に拘束する固定された柵に繋がれてステージ上に立たされた。

今までされていた事はこの日集まる上層部の好色家達の為の余興で、そのメインは私達の純潔を味わう事。

その為に密かに監禁されていた場所からこのステージのある建物



へと移送されてライトアップされている。

これから始まる催しに私達は………待ちきれない身体になっていた。

だけどその瞬間は………指揮官がぶち壊した。

会議当日にクーデターを起こし、手籠めにされそうになっていた  
ヴィシアのジャン・ボールを助け、そのままセイレーンと癒着のあつた上層部を拘束したのだ。

そして私達の情報を知ると、KAN—SENの皆を引き連れてそのまま建物を制圧して救助してくれた。

その時の私達は指揮官を恨んだ。

助けに来るのが遅いという思いと………もう少して味わえた快樂が貰えなかったという倒錯した思いに。

でも指揮官に会った瞬間、彼は泣きながら何度も私達に謝り続けていた。

『間に合わなくてすまない』

『俺がもっと早く事を起こしていればこんな事には………』

『間に合わなかった俺を恨んでくれ』

ずっとそう言っていた。

他の仲間達が指揮官のせいでは無いと言い続けても彼はずっと………そのまま謝り続ける。

だからそれを見ていた私は………謝り続ける指揮官に私は一つお願いする事にした。

『私達を助けてくれる?』

その言葉を聞いた指揮官は顔を上げて私達を見つめて

『必ず、必ず君達を救ってみせる。君達が望み続ける限り……俺は君達を絶対に見放したりしない、するものか!!』

力強くそう答えてくれた。

そしてその言葉通りに、私達と共に戦場へ……最前線へ赴きどんなピンチに陥っても傷つきながら私達を助けて見捨てなかった。

彼は約束を守ってくれたのだ。

だから私達の想いは決まった。

この人なら、この人ならば私達を受け入れてくれる。

こんな薄汚れて暗い悦びを知ってしまった自分達を……”救ってくれる”。

それを知ったからには……指揮官の事をもっと知りたくなった。

彼が指揮官となる前、この世に生まれたその瞬間から知りたくなったのだ。

そして知った。

幾度となく裏切られ、挫折ばかりの中で突き進み続けた彼を。

どんなに絶望的な状況でも諦めずに私達を思い護ってくれる不屈の意志を。

知れば知る程に絶望せずに突き進む彼が不思議だった。

私達はたった1ヶ月で絶望に屈してしまったのに……

生きる事すら諦めてしまうような絶望に屈しない彼が光に見えて私達は憧れ……惹かれていった。

その光に焼かれたと言ってもいい。

その光になら全てを捧げる事が出来る。

光を知った私達の取るべき行動は一つ。

この人に私達の”全て”を受け取って貰うように働きかける事。

こんな薄汚れた私達の最後の綺麗な部分。

彼は喜んでくれるだろうか？

その時を想像して私達はいつまでも待っているけれど……

いつまで待てるかは分からないよ？

私達の身体はあの時からずっと……疼いてしまっているのだから……

### 第39話 夕立と運動

指揮官です。

現在アニマルセラピーを受けております。

というのも最近よく悩む事が増えてきたので癒しを求めている次第でございます。

まあその癒しの対象と走ったり学園内のアスレチックコースを攻略して楽しんでいるのですが。

「指揮官！次は何をする？」

「そうだな……………次は森林エリアを散歩するか」

「森か！いいぞ！あそここの森は夕立もよく行くんだ！」

そう言つて飛び跳ねる重桜駆逐艦 夕立。

白い長髪に紅い瞳を持った麻呂眉のKANSEN。

しかし上下共に異様に短い丈のセーラー服に、隠しきれない下乳と眩しいばかりの太ももを見せつける普段着は少々刺激が強いのだが……………今日のパンツは白である。

その言動からいつも元気な人懐っこい中型犬のイメージが定着してしまっている少女だ。

「早く行こう指揮官、森が夕立達を待ってるぞ？」

「ああ、勿論だ。森の中で歩くのは気持ちが良いんだろうなあ……………」

肉球付きフィンガーグローブを付けた両手で俺の腕を引っ張る彼女に苦笑しつつ、俺は森林エリアへと足を進めた。

彼女に会ったのは本当に偶然だった。

「どうした指揮官？腹でも減ってるのか？」

昨日のクリーブランドの件で頭を悩ませながら行っていた執務が終わり、いつものジャージに着替えてトレーニングルームへ向かっている際、通路の向かい側から歩いてきた夕立が心配そうにこちらの様

子を伺いながらそう言ってきたのだ。

「どうやら俺が悩んでいるのが顔に出ていたらしい。」

「いや、そういう訳では無いんだが……………」

「そうなのか？でも苦しそうだぞ？」

「そう見えるか？」

「うん、指揮官が苦しそうなのは夕立もつらいぞ……………わふ、指揮官、くすぐったいぞ？」

しよんぼりした様子の夕立に俺は思わず頭を撫でた。

そうすると撫でられた彼女はくすぐったそうにしていたが、すぐに笑顔を見せる。

皆に心配をかける訳にはいかないな……………夕立にすぐに気が付かれたのは勘が良いだけではなくて、俺自身がそういう雰囲気を出しているからだろう。

「なあ指揮官、なんか悩んでるのか？」

「そうだな、ちよつと考え事だな」

「ならば、指揮官。夕立と一緒に運動しよう！身体を動かせばスッキリするぞ？」

「運動か……………よし、そうだな。身体を動かしてスッキリしようか!!」  
「そう来なくちゃ!!早く行こうぜ!!」

そうして夕立に元気づけられながら俺は外に走り出したのだ。

ニコニコ笑顔の夕立がいつものジョギングコースやアスレチックコースで俺を呼びながら走り回る。

そんな明るい彼女と共に身体を動かしていると少しずつ気分が晴れていった。

雲梯で3個飛ばして進むと腕の筋肉達……………上腕二頭筋に上腕三頭筋や指の筋肉達も喜び、夕立もはしやぎながら着いてくる。

飛び石に連続でジャンプして飛び移って行くと脚の筋肉達……………臀筋群に内転筋群や大腿四頭筋群、そしてハムストリングスや腓腹筋、ヒラメ筋、そしてアキレス腱が歓喜に震えてそれを見ていた夕立が元気よく飛び跳ねる。

最後に鉄棒で大車輪して何度も空中へ飛び上がって捻りを入れて

回る方向を変え、最後に回転しながら着地してポーズを決めたら両手を叩きながら目をキラキラさせる夕立がいた。

充実している。

こんなに心身共に充実しているのは何時ぶりだろうか？

何も考えずに筋肉との対話をしながら運動をする事を楽しんでいるのは。

素直に喜ぶ夕立と一緒に運動するのがとても気持ちが良い。

互いに気持ち良く汗をかきながら笑い合う事の心地良さよ。

明るくコロコロと表情を変える彼女に釣られてついつい笑みが零れてしまう。

そんなこの時間が俺にはとても嬉しかった。

そして辿り着いた森林エリア。

覆い茂る葉っぱを持つ木々の隙間から零れる夕日に、少し感傷的になりながらゆっくりと進んでいく。

いつの間にか夕立に右手を両手で握られて、手を繋ぎ歩く事に気が付いたが、それもまた楽しんでいた。

まあ大きなお胸様が腕に当たって、その柔らかさにドギマギしてしまっているのだが……………

「うーん、やっぱりここは気持ちが良いぜ♪」

「そうだな、こうやって自然の中で歩くのも乙だな」

「わう？おつ？」

「いい事だって意味さ」

「おお、そういう事なのかおつって。確かにおつだぞ！」

無邪気に笑う夕立が無性に可愛く見えるのは俺の気の所為ではないだろう。

そんな彼女と共にここまで楽しめたのは本当に僥倖だ。

何か彼女にお礼をしなくては……………

「夕立」

「わう？」

「今日はありがとうな」

「いきなりなんだよ指揮官……………もしかしてお肉くれるのか!？」

「そうじゃないんだが……まあなんだ、今日は気分が晴れて助かったよ。今度お礼に肉料理を沢山出すように俺から伝えておくよ」

「わう!? 本当に? やったー!! 指揮官ありがとう!!」

「おいおい」

俺のお礼はお気に召したようで、彼女は勢いよく俺に抱きついて全身で喜びを表している。

頭の犬耳はピコピコ動き、尻尾はブンブンとちぎれんばかりに振って本当に犬に見えた。

……ただ、大きくて柔らか過ぎるお胸様とスベスベした肌が擦り付けられると、ちよつと俺の間かん坊が動きそうなんだが?

そんな事は知らないとばかりに頬擦りまでしてくる夕立に微笑まじきと煩惱の狭間で板挟みになっていると

「指揮官は苦しいのはもう無いのか?」

不意に抱きついたままの夕立が俺の顔を見上げながらそう聞いてきた。

どういう意味か分かりかねて首を捻ると

「だって……最近の指揮官は何か苦しそうにしてたぞ? 夕立難しい事は分かんないけど、指揮官が苦しそうなただけは分かったんだ」

「夕立……」

「だから今日は一緒に運動しようって思ったんだ! だって指揮官は身体を動かしている時が一番カツコイイし、楽しそうだから……わふっ!」

「ありがとう夕立。本当にありがとうな」

「びつくりしたぞ指揮官……でも指揮官が嬉しいなら夕立も嬉しいよ」

抱きつく夕立に優しく抱きしめ返すと彼女は驚きながらもそれを嬉しそうに受け入れてくれた。

その眩しい笑顔が愛おしく感じる。

その優しさが俺を癒してくれる。





何時から好きになったのかなんて分からない。

でも指揮官の事が好きで好きで好きで堪らない自分が、指揮官の匂いが嗅げる状況になると、自分自身を抑えられる自信が無い事だけは理解している。

溢れ出す唾液で糸を引く服を離してもう一度深呼吸をした。

少し落ち着くかと思っただけ、また匂いが鼻に入ってきて……更に興奮する。

「……………でも……………指揮官はつらそうだった」

だからって本当につらそうな指揮官を見捨てられない。

指揮官には笑って欲しい。

いつも明るく夕立達に接して欲しい。

そうするだけで夕立は満足して癒されるのだから。

「せつない……………よお……………しきかぁん……………」

火照りきつて持て余す自分の身体が指揮官を求める。

明るくなつてもらう為に一緒に運動した。

運動すればする程に指揮官の匂いは強くなって……………最後の散歩では耐えきれず身体を指揮官に擦り付けてしまったのだ。

抱きついた時だって、あまりの匂いの強さに意識が一瞬吹き飛んでしまったのを指揮官にはバレてないかハラハラして心臓が飛び出しそうだった。

「しきかぁん……………わう……………わううう……………」

もう我慢の限界はどうに過ぎていく。

赤城さん達はどのようにしてこんなに凄い匂いを嗅いで普通に居られるのだろうか？

少しでも気を抜けば発狂してもおかしくはないのに……………

抱きしめ返された時なんて頭の中が真っ白になるほど気持ちが悪くてしばらく動けなかった。

でももう我慢するのは終わりだ。

再び服を噛み、火照りで上手く動かない身体を引きずるようにベツトへ向かわせる。

この熱さを鎮める為にも今夜は一晩中自分を慰める事になるのだろうか？

でも……………悪くない。

だって今日は指揮官の匂いに包まれているのだから。

## 第40話 開発とビスマルクとU-556

指揮官です。

どうしてこうなってしまったのでしょうか？

まるで鉄塊と見間違わん程のアーマーが俺のマツソーな肉体を包む。

鈍色に光る鉄がその重厚感を醸し出し、そして明らかにオーパーツ的な装備に俺の心を震わせる。

でもな？

一つだけ言わせてくれ。

なんで……………

なんでウルフェ○シユタインのスーパーソルジャーなんだ!!

しかもNEW ORDER版かよ!!

変更点は素顔のままだったスーパーソルジャーに対して、ガスマスク状のフルフェイスヘルメットを付けている事くらいか？

本来ならレーザー機関砲装備とかいうロマン装備であるスーパーソルジャーの格好をさせられている俺。

しかし、今回装備しているのは8.8 cm PaK 43を手持ち出来るように改造したものである。

そう、皆大好き8.8 cm (アハトアハト)なのだ。

手持ちするに当たって専用のマガジンを取り付けられるようになっており、装弾数は6発。

専用のコッキングレバーを引くと排莢されて薬莢が側面から弾き出され、レバーを戻すと次弾装填と薬室閉鎖が同時に出来るようになっていいる。

この魔改造8.8 cm PaK 43はバッテリーから電気を使つてのスイッチ操作での発砲が出来るようになっており、トリガーを引いてからの発砲までのラグはほぼ無いに等しいだろう。

持ち方としては左手で支えと照準を兼ねたグリップを握り、右手でトリガーとセーフティボタンの付いたグリップを握る。

そして発砲後はコッキング用のレバーを右手で動かすのだ。

いや……………訳わかんねえわ。

背中 of 広背筋と大円筋を引き締める為に80kgのダンベルでワ  
ンハンドローイングをしていたら鉄血戦艦 ビスマルクに朝から呼  
ばれ、母港のKANSEN専用の射撃場へと行ってみたらこの有様  
である。

まあなんかの実験って言われて新しい砲弾か装備なんだろうなっ  
て思ってたら、俺の装備だったって話なんよね。

……………異常数値は出てないわ。何時でも行けるわよ指揮官」

……………おう」

「不具合や違和感があつたらすぐに言つて頂戴。今回の実験はその辺  
を確認する為のものよ」

普段の軍装から青い繋ぎの作業着で、アーマーから送られている  
データをタブレットから確認する彼女は綺麗なブロンドの髪をポ  
ニーテールで纏め、真剣な眼差しでそれをじっと見続けながら話す。

元々ビスマルクは研究一筋な所もあるし、作業着姿なのは疑問には  
思わないんだが……………

「ん？どうしたの指揮官？」

「いや……………何でもない」

「そう？なら実験を始めましょうか」

「了解した」

あの……………作業着の上のジッパーが開放的なのはどうなんですか  
ね？

しかも白のタンクトップがその大きなお胸様に押し上げられて苦  
しそうなんですが？

姉妹艦のテイルピッツ同様にかなりスタイルの良い彼女がそんな  
姿をしていると、その膨らみがスゲー強調されてて股間に悪いんです  
よ？

「ふう……………行くぞ!!」

股間の紳士を宥める意味で一度深呼吸して、ビスマルクから視線を剥がす。

そしてアハトアハトをターゲットに向けて構えると、ガスマスクのようなフェイスシールド内にターゲットサイトが現れて照準を助けてくれていた。

おお、これ便利だな。

どうやらアーマーとアハトアハトは連動して動いており、アハトアハトを向ける先によってサイトが自動で表示されるようだ。

俺はそれを頼りに海の上に浮かぶ複数あるKAN—SEN用の簡易標的の内の一つに照準を合わせた。

「周囲の安全確認……よし！発砲開始!!」

俺は周囲の安全確認をしながらそう言って右手のグリップの上にある安全装置を親指で押し込み、人差し指でトリガーを引く。

特徴的な発砲音と共に反動で腕が引っ張られる。

しかし、その反動は思っていたよりも軽かった。

たぶんこれはアーマーからのパワーアシストかなんかで反動を抑えてくれているのか？

初弾は照準通りに的へ命中。

ここら辺の精度は、やはり鉄血ならではの工芸品の様な緻密な作りによつてもたらされているものと考えていいだろう。

「次弾装填……完了!」

そんな疑問を持ちながらも次の動作を声に出しながらレバーを引いて排莖して次弾を装填し、もう一度発射体制に持っていく。

排莖された空薬莖が白い煙を引きながら地面に落ちて、カラントという甲高い音を立てて転がっていった。

ここまでの動作で不具合は全く感じられない。

アーマーもアハトアハトも全然いけそうだ。

次弾もすっかり狙って発砲すると綺麗に的を撃ち抜いて大きな水柱を作り上げた。

「各種異常無し。指揮官、次は連続で発砲してみてもらえるかしら?」  
「了解だ!」

フェイスシールド内に内蔵された無線からビスマルクの指示が聞こえた。

確かにこのアーモアの性能を試すには連続射撃も試さないといけないだろうな。

排莖してすぐさま次の的を狙う。

このアーモアのパワーアシストのお陰なのか、照準時の手ブレまで補正して直ぐに調整してくれるので非常に撃ちやすい。

2射、3射と連続して発砲を続けていくが、凄まじいまでの精度で外れることは無い。

「凄いぞビスマルク！思ったように的に当たっていくぞ!!」

「ええ、こちらでも確認しているわ指揮官。その調子でもっと撃ってデータを取らせてちょうだい」

「おうよ!!」

正直楽しい。

人の身で撃てない砲を両手で保持して撃てるなんてまさにロマンだ!!

男というものは何歳になってもロマンを追い求めてしまうものだからこの高揚感は隠しきれない。

最近の悩みで落ち込んで夕立に慰められたから、少しは立ち直ってきた。

それでも少し胸に罪悪感というか不快感が残り続けていた俺に、このロマンを感じられる状況は実に胸がすく思いだ。

「……………つと、残弾ゼロか」

そんな爽快感に包まれながら撃ち続けていたら、弾倉内の弾が尽きてしまった。

「予備の弾倉はここに用意してあるわ指揮官。次は榴弾を用意しているから、そちらのデータもお願い」

「おおそうか、なら……………よつとー」

空になった弾倉を外していると、いつの間にかビスマルクが俺の後ろに新たな弾倉を用意してくれていた。

撃つ事に集中していて気が付かなかったぞ？



うんうんと頷きながらU—556はこのアーマーが出来上がる裏話を感慨深そうに詳しく説明してくれた。

そうだったのか……そうやって真心込めて作ってくれたのか。

これはお礼を言わないとな。

「そこまでしてたのか……忙しいのにありがとなビスマルクにU—556」

「んもう！U—556!!そこまで言わなくて良かったのに……」

「え〜？あんなに張り切って作ったのに？」

首を傾げるU—556に赤くなりながら怒る……というか照れるビスマルク。

そんなに手間の掛かるやり方でこれを作ってくれてたのか……

俺の為にそこまでやってくれた彼女達に感謝の言葉だけで良いのだろうか？

何かお礼をした方が良さそうなんだが……新たに引き締めた俺のマツソープーズでどうだろう？

なかなか決まって見栄えが良くなったと筋肉評論家のローンからも太鼓判を押されたんだよな。

よし、この実験が終わったらお礼を試してみるか。

そんな事を考えながら装填を終え、再びアハトアハトを的に向け直す。

そうと決まればじゃんじゃん撃ちまくろう。

いまだに言い争いというか、照れ隠しにそっぽを向きながらU—5

56と言いつつビスマルクという何処かホツコリする光景を横目に、俺はロマンの塊を存分に堪能するのだった。

「ふう……なかなか珍しい経験をさせてもらったよ」

「アーマーを着てたけど、生身でアハトアハトを手持ちで撃つなんて指揮官くらいしか経験したこと無いんじゃないのかな？」

「良いデータが取れたわ。協力感謝するわね指揮官」

実験終了後に普段着ている服装に着替え、鉄血寮の談話室に集まった俺達。



こんな貴重な経験をさせてもらったお礼にスーパーマツソーポージングを披露しようかと思っただが、丁度お昼時になったので二人を食事に誘ったのだ。

よくよく考えてみれば俺のマツソーポージングなんて見たい奴居ないだろ。

そんな事より改めてちゃんと言葉でお礼を伝えた方が良い筈だ。ベルファストにはちゃんと説明して鉄血寮の談話室で昼食を取る旨を伝えてある。

うちのメイド長はとても優秀で、すぐに俺達三人分のランチBOXを用意して持たせてくれた。

まあ報連相は大事だからな、前に伝えなくて笑顔で説教を受けた記憶はマジで黒歴史だ……：説教3時間は流石に堪えたぜ……：

「二人共、今日は本当に貴重な経験をありがとう。お礼と言っちゃなんだが、俺にできる事を何かさせてくれないか？」

「え？いいの？」

「あ、ああ勿論だ」

テーブルに着いて食事が終わった後のティーブレイク中に、そう言った俺の言葉に食い気味に食い付いたUー556の目がキラリと光る。

なんだか少々嫌な予感がしたものの……：男に二言は無い!!

腹を括ってやらア!!

バッチコイ!!

「じゃあさく、指揮官。わたしの頭をあのロイヤルの駆逐艦みたいに撫でてよ♪あ、ビスマルクのアネキの分もよろしくね？」

……それは……：マズイ。

まさかのマツソー撫でを御所望、しかもジャベリンにやったフルパワーマツソー撫でだと!?

アカン奴やそれ……：

驚いて目を白黒させているとビスマルクが、普段被っている軍帽を

脱いで髪を手で整え始めた。

そして俺の視線に気が付くと頬を赤らめ肩をビクツとさせて俯き視線を逸らすも、チラチラと俺の方をチラ見している。

その胸に脱いだ軍帽を当てる両手の指先をずっとモジモジさせて待っている様子が見て取れた。

え？マジで？

！?  
というかビスマルクさん？なんでそんなに期待してらっしゃるの

「ほくら〜指揮官、早く撫でてよ〜」

「……………」(ソワソワと肩を揺らして待っている)

俺の理解を越える超展開だぞこれ。

U—556はテーブルを叩きながら急かしてくるし、ビスマルクは無言ながらも期待した表情と目で今か今かと待っているのだ。

というかビスマルクのそんな表情を始めて見たぞ俺。

いや、考えろ、考えるんだ!!

何もフルパワーでなくてもいいんだ。

そんな事したらこの食堂が惨劇の現場になってしまう。

普通にマツソー撫でをしてあげれば……………目に見えた惨劇を回避できるはずだ!!

「よし、ならまずはU—556からだ」

「え？わたしから？ビスマルクのアネキじゃなくて？」

「先に提案したのはお前の方だろ？なら言った方からするのは当然の事だな」

「それはそうなんだろうけど……………ふにやつ!?!……………はあううう……………あれ?……………はにゆうううう」

俺は席を立ち、何故か焦るU—556の後ろに移動し問答無用でマツソー撫でを行う。

フッフ、生意気言う子にはちよつと強めのマツソー撫でだ。

最近加減が効くようになってきたからこういった微調整はお手の物。

気持ち良さに溺れそうで溺れないギリギリのラインを行ったり来

たりさせてやろう。

「はっあっ……………も…少し……………はう……………なん……………で……………ううくうううう……………」

フム……………自分でゲスっぽくなくなってやってみたけど、なんだかU—556の声がドンドン艶っぽくなってきてきているぞ？

よくよく考えてみれば気持ち良いのに、気持ちよくなりきれない状態を行ったり来たりってヤバくないか？

それってただ焦らし続けて不満を感じさせてしまっているだけなんじゃ……………

あの、ビスマルクさん？

右手で口元を押さえて顔を真っ赤にするのはどうしてでしょうか？

情事を覗いてしまったかのような表情はやめて頂きたいのですが……………

それになんだか期待する目をしていらっしやる。

このマッソー撫でをご所望で？

そんなに良いものですかねこれ？

「ああっ…あっ、きゅ……………うに…つよ…すぎ……………ふぎゅううう！！?!?!?」

ビスマルクに見惚れてたら加減をミスった。

テーブルに伏せるU—556

だらしなく舌を出して軽く白目剥きながらビクビクと痙攣する彼女に、俺は思わず頭を掻いた。

……………やっちゃまった

ここまでする予定じゃなかったのになあ。

やらかしてしまったこの現状に、どうしようか迷いながらビスマルクの方を見ると

「……………」(ワクワクした雰囲気でおずおずと頭を此方に付き出す)

「Oh Jesus」

俺は思わず天に救いを求めてしまった。

なんでそんなに楽しみにしてらっしやるのですかね？

隣の惨状を見てませんか？

貴女もこんな感じになっちゃってしまうかもしれないですよ？

鉄血のリーダーとして何か大切なモノを失う可能性が出てくると思っているのですが？

普段は身に纏っているカリスマオーラはいったい何処に消えたんだよ……………

「……………ビスマルク」

「!?……………どうぞぞ」

名前を呼ぶだけで頭を出す彼女。

少し恥ずかしいのか頬を染めて上目遣いなのがなんとも可愛いのだが……………

綺麗系な美人が羞恥を我慢しながらワクワクとした様子でこつちを見てくるのは、俺の股間にダイレクトアタックだ。

なんだかイケナイ事をしようとしているような、なんとも言えないような背徳感を感じてしまう。

今にも下腹部のアハトアハトが最大仰角へと達しそうになる程にその……………そそのるのだ。

「いくぞう？」

「……………んんっ」

そんな下半身が元気一杯になりそうな状況で俺は恐る恐るビスマルクの頭に手を当て、ゆっくりとその柔らかく滑らかな手触りの髪に感動しつつも撫で始めた。

最初に漏れたビスマルクの吐息で最大仰角へと到達したのは内緒だぞ？

「ずっと……………」

「ん？」

「ずっと憧れていたの」

しばらく撫でていると目を閉じて俺のマツソー撫でを堪能している様子だったビスマルクが不意にそう言う。

そして撫でていた俺の手を取り、そのまま頬に当ててきた。

「私は、いつも人を褒める立場で……こうして褒められる事は少なかつた」

「そうなのか？」

「ええ、鉄血を率いるリーダーとして誰かの前を歩かなければいけないから、ずつと気を張っていたわ……感情を表現するのも苦手だったのもあるけど、でも、一度こうして甘えてみたかつた」

「ビスマルク……」

嬉しそうに微笑むビスマルクの初めて見るそんな様子がとても可愛らしく感じ、そしてもう少し甘えさせてみたくなる。

股間の主砲は癒し回と分かつたようですぐに俯角を取って下がっていった。

まあ考えてもみれば分かる。

彼女は鉄血陣営のフラグシップ。

つまりはその陣営の顔とも言える存在なのだ。

そんなビスマルクが誰かに甘えられるシーンなど、本当に存在しない事なのだろう。

だから今こうして俺に甘えてくるのは、そうした反動なのだという事が良く分かつた。

「ビスマルク、あそこのソファアに座らないか？」

「え？もちろんいいけど……」

俺はビスマルクを談話室に置いてあるソファアへと誘う。

それは思い切り甘やかしてやろうという単純な考えから思い付いたことなのだが……

「おう、それじゃここに横になれよ」

「ええっ!?!……いい、良いのかしら？」

「遠慮するな、いつも頑張るビスマルクに俺からのお礼をみたいなもんさ」

「そ、それじゃあ……失礼して……」

先に座った俺が膝の上をポンポンと叩く。

その姿に驚く彼女だったが、笑いながら誘う俺に恐る恐るといった様子で静かに横になり、そして俺の膝の上に頭を降ろした。

所謂膝枕である。

前に不知火にしてもらった時に感じた安心感と安らぎは、俺の心を大いに和らげてくれた。

男の俺がする膝枕がどこまで安らぎを与えてくれるのかは知らないが、こんな風に甘え方を知らないビスマルクを癒やすきっかけにはなるだろう。

そうしてまだ緊張している彼女に、俺はまたゆつくりと頭を撫でる。

慈しむように、そしてもつと自然に甘えられるように。

「……………優しいのね指揮官」

「そんな事はないさ。頑張るビスマルクを労いたいだけだよ」

「そういうのを優しいって言うのよ?」

「そうかな?」

「ええ、そうよ……………癖になりそうだわ」

「その時はいつでも」

「ふふ♪ありがとう♪」

心地良さげに笑う彼女へ一層の心を籠めて撫で続ける。

緊張は取れ、俺に身を委ねるビスマルクは心の底からリラックスしているようだ。

綺麗な空の色にも似た碧眼が俺を捉えて離さない。

その視線はまるで、俺にもつと撫でて欲しい、甘えさせて欲しいと訴えているかのようだ。

ああ、甘えさせてやるとも、撫で続けてやるとも。

この不器用な頑張り屋を労い続けてみせるさ。

この時間が常に重責を背負い続けるビスマルクの安らぎの一時となる事を願って……………

だが俺は知らない。

この事がきつかけで、週3の頻度でビスマルクが俺に膝枕をせがみに来るきつかけとなる事になろうとは……………

しかも断ろうとしたら涙目でシヨンボリするから可愛そうで断れないし……………

どうしてこうなったんだ……………

~~~~~

「今回は一步前進ね」

「わたしは酷い目にあつたよビスマルクのアネキ……………」

ニヤける顔をなんとか抑えるビスマルクとは対象的にゲンナリするU—556。

指揮官からの膝枕に撫で撫でまで受けられる、しかもお願いすれば何度でもという約束までしてもらえたのだ。

ビスマルクからすれば宝くじの当選くじを、無期限で何度も使えると言われるよりも嬉しい出来事だった。

逆にU—556の心境は最悪である。

意識を失った後、マツソー撫でて天国と地獄を味わされ、最後は全ての気持ち良さが一度に訪れるという調教のようなナニかを受けていた彼女。

しかも本人の知らぬ間にバラストタンクが勝手にブローしていたのは女性としてのナニかが終わってしまうので、一緒に居たビスマルクとの秘密である。

幸い指揮官はその事に気が付かなかつたようであり、異性として気になり始めている指揮官に知られなかつたのは、まさに不幸中の幸いといったところだ。

「あ……………もうお嫁に行けないよ……………」

「ほら、元気を出しなさいU—556。大丈夫、指揮官が必ず貰ってくれるわ」

「でも……………お洩らしするような子に指揮官が幻滅しないかな？」

「その程度で指揮官が幻滅する筈は無いわ。彼はきつと貴女を心配し

てくれる、もしかすると責任も取ってくれるかもしれない」

「せ、責任つて……あうう」

ナニかを想像して真っ赤になるU—556。

一体何を想像したか気になるビスマルクだったが、それよりも新たな指揮官専用のアーマーの設計する事に切り替える。

ユニオンで造られた指揮官専用アーマーは近・中距離型の仕様であるのは既に既存の事だ。

だからこそこちらは移動トーチカとも呼べる重装甲、高重量、高出力のアーマーで遠距離攻撃を主体にしたアーマーを造っている。

競い合って開発するのでは無く、互いに互いの欠点を補えるようにしたい。

私達に必要なのは、前線から絶対に引かない指揮官の安全だ。

必要であれば、向こうのアーマーの上に着れるように造って緊急時にパージ、そしてそのまま撤退戦にすぐに移行出来るようにしてもいい。

遠距離攻撃方法を持たせてあげれば、指揮官も撃ち合いの最中に前に出る必要は無くなり、後方で支援砲撃に徹してくれる筈だろう。

近距離よりも俯瞰して見れる後方の方が、指揮もしやすくて手持ちに砲があれば助けられる。

まさに一石二鳥の装備なのだ。

だから完成を急がなくては。

「次はもう少し大型化する必要があるわね」

「ええ!?まだ大きくするの!?!」

「そうね、大型化すればその分搭載量も増えて別の機材も配置できるかもしれない……」

「………完成まで付き合うよビスマルクのアネキ!!」

「そう?なら頑張りましょう。指揮官も褒めてくれる筈よ」

「そ、そうかな?……もう一回……無でもらおうかな?」

「?どうした?」

「ううん!!何でもないよビスマルクのアネキ!!よし、頑張るぞ!!」

「そ、そう?」

やる気充分なU—556と首を傾げるビスマルク。
そして今日もまた新たなアーマー造りへと突き進んでいく。

指揮官からのご褒美という甘美な報酬を求めて。

ちなみにアーマーを新造した事がユニオンのリノに知られ、対抗してセイレーンバスターなる大型アーマーが造られて頭を抱える事となるのだが……それはまた別のお話。

第41話ティータイムとイラストリアス姉妹

指揮官です。

今日はロイヤルにある庭園の一角にてティータイムに参加してあります。

本当は足回りに大臀筋や中臀筋の筋トレをしようと、80kgのダンベルを使ったスクワットをする予定だったんだけど、どうしても言われてホイホイ来ちゃったんだよね。

まあとは言っても、とある姉妹とお茶しているだけなのですが……

「はい、指揮官さま♪あくん♪」

「い、いや、自分で……」

「あくん♪」

「……あむ」

「クスクス♪そんなに恥ずかしがらなくてもよろしいのに」

「ムグムグ……俺ぐらいの年代の男なら誰でも恥ずかしいと思うぞイラストリアス？」

俺に茶菓子であるクッキーをあくんするロイヤル正規空母 イラストリアス。

絹と見間違わんばかりの綺麗な銀色の長髪に優しげな眼差しの青い瞳を持ち、ボボボン・キュ・ボンという魅惑的を通り越して性癖クラッシュヤーになるようなスタイルの持ち主であり、白いドレスはスカートほぼスケスケで胸元は上見放題とかいうドスケベ仕様である。ちなみにその優しく微笑む顔の左目尻には泣きぼくろがあって、彼女の美しさを更に際立たせている事も追加で報告しておこう。

「指揮官さまのお茶会は本当に久しぶりなのですもの。嬉しくてついつい触れ合いを求めてしまいますわ♪」

「そういうものなのかねえ……」

「ええ、そういうものなのです♪」

イラストリアスは超ご機嫌である。

というか距離感バグってない？

というかこのお茶会はなんだかおかしい。

一応お茶会なのでテーブルに一式セットが用意されているのだが、椅子は一つしかない。

つまりどういう事なのかというところ……

「……なあイラストリアス」

「はい、何でしょうか指揮官さま？」

「なんで……君は俺の膝の上に座っているんだ？」

そう、彼女は俺の膝の上に横向きに座り、左側に足を出して左側の肩と頭を俺に持たれ掛けているのだ。

こんなに密着されると……その……息子か……ね？

柔らかいお尻の感覚が膝にダイレクトアタックを仕掛けて、イラストリアスから香る途轍もなくいい匂いが俺の鼻を狂わせていく……

しかも俺が大柄なのもあって、上から魅惑の霊峰の北半球を覗き放題と来たもんだ。

正直……たまらんですたい!!

このモンモンとした煩惱が発散出来ずに溜まっていくのは流石にヤバいか？

そんな事を考えているとイラストリアスはクスクスと上品に笑って……

「たまにしか会えませんか……こうして触れ合いたくなるのですよ？」

「ぬうつ!？」

俺の頬を慈しむように撫でる。

それは本当に優しく、まるで割れ物を扱う様な力加減だった。

見上げる様にしてこちらを見つめるその瞳に写る感情は、見たことが無いような怪しい光を湛えるナニか……

「ちよつと!!イラストリアス姉さん!!今日は私達もいるんですよ!!」

「そうよ！私達だって指揮官と触れ合いたいわ!!」

「っ!」

「あら残念ですわ♪……………クスクスクス♪」

俺はいったい何をしていた？

声を上げて抗議するフォーミダブルとヴィクトリアスが居なければ、俺は彼女のナニかに惹き込まれ、受け入れていったのかもしれない……………

そんなもしも、という考えを振り切りながら声を掛けてきた二人を見る。

どちらもイラストリアスの姉妹艦で、二番艦のヴィクトリアスに三番艦のフォーミダブルである。

ヴィクトリアスは姉と違い、金色の長髪に青い瞳で、フォーミダブルは銀色の長髪というか、床に着きそうなくらい長い髪に紅い瞳のスタイルは二人共、姉とほぼ同等のドスケベボディな姉妹だ。

ただその違いとしては、次女のヴィクトリアスはギリシャ風の冠に素肌が見えんばかりの薄いヴェールを身に纏っており、その下には下着と変わらない上は白色のホルターネック、下は黒の紐パンみたいな水着の様なナニかを着ている……………痴女か？

三女のフォーミダブルはその髪をツインテールにしており、ゴスロリ調のドレスを着て露出は少ないのだが、胸元に黒いネクタイのような何かを挟んで谷間に入れ込んでいる。

ま、どっちもドスケベ衣装なんですけどね……………

その二人は俺の両手を胸元に持つており……………というか谷間に挟んで動けなくしているのだ。

右の痴女……………じゃなかった次女に左の三女である。

これ俺が脳内マルチタスクで筋肉心経の1129項第2929を唱えてなかったら煩惱一直線だぞお？

ちなみにここには居ないリトルイラストリアスは、リトルの集いとかいうリトルグラーフ・ツエツペリン主催のリトルだけのお茶会に参加しており、俺もそっちに行けば良かったと只今絶賛後悔中である。

「もう、指揮官？イラストリアス姉さんだけじゃなくて私達も居るのですよ？もつと構ってくださいませ？」

「そうよ指揮官。本当に稀にしかこういう機会は無いのよ？私にももつと甘えなさい？」

「み、耳元でそんなに囁くな……………こそばゆいだろうが……………」

二人して吐息をかけるように囁くんじやないよまつたく……………すんげえドキドキするじゃねえか……………

イラストリアスもそうだが、この二人もそれぞれ違った甘い香りがあるので、腕の柔らかな感触も相まってリビドーのツアーリ・ボンバが爆発しそうになるから質が悪い。

これ……………狙ってやってんのか？

心臓は36ビートを刻んでフルスロットルだし、股間の紳士は『へへ、もういつすか旦那？俺限界なんすよ』とかほざきそうな位に立ち上がりかけていやがる。

だが……………だがしかし、ここで立ち上がったら膝に座っているイラストリアスに速攻でバレて社会的な死刑が待っているのだ。

KAN—SEN達の指揮官として、戦場ならまだしもそんな不名誉な死に方だけは嫌だ!!

「ほら、こつちを見てくださいませ！」

「ぬおっ！」

急にフォーミダブルに頬に手を当てて左を向かされる。

俺の胸鎖乳突筋大丈夫？

今グキツて鈍い音がしたけど本当に大丈夫？

頸椎と一緒に折れたり千切れてない？

「ほら指揮官、あくん」

「え？」

「だ・か・ら、あくんしてくださいませんこと？」

フォーミダブルがその手に持っているのはワッフル。

俺の首を無理矢理曲げたのはソレを俺の口に入れたいからなのか……………

これ以上待たせると今度は口を無理矢理開いて咬筋と顎の骨をヤ

られそうだから、素直に食つとくべきだろう。

「……………あくん」

「ふふ♪私も一度やってみたかったのよね♪」

ワツフルを一齧りするとフォーミダブルは嬉しそうに微笑んだ。

いや、おっさんツラいつす。

可愛い女の子にあくんされるゴリマツソーなおっさんとか絵面ヤバない？

「あむ、ーーっ!!これ美味しい!!」

「おまつ!」

そんな事考えていたら俺が齧った所を、フォーミダブルが普通に齧っていた。

そ、それ……………間接キスちやうの？

呆然とする俺を尻目にパクパクと食べるフォーミダブル。

……………もしかして意識すらされてない感じ？

「もう一つくらい食べちゃおうかしら?はい、指揮官あくん」

「え?」

「ほら、食べなさいよ」

「ええ……………」

お前が食べるんじゃないのかよ……………

そんな思いをよそに困惑する俺の目前に差し出されるワツフル。

何がしたいのかが全く読めずにワツフルを見ると、段々とフォーミダブルの機嫌が悪くなっていく。

変に意識したら何言われるか分からんし、怒らせるのもなんだ

……………とりあえず一口齧るか。

「そうそう♪それじゃあ……………あくん♪」

「んんっ!」

そして俺が齧った所から食べ始めるフォーミダブル。

もう訳分かんねーよ!!

いったいどういう事なんだよこれ!!

彼女いない歴〓年齢な俺には女の子の思考回路なんて分かるわきやない。

助けてマツソー神!!

俺には何がなんだかさっぱり分からねえんだ!!

「それじゃ今度はこっちよ指揮官」

「おうっ!?!」

今度は右側から手が頬に伸びて顔をゆっくり振り向けられる。

そしてそこには……………

「ん〜♪」

「……………へ?」

口にマカロンを咥えて目を閉じるヴィクトリアスがいた。

散々痴女とか言ったが、見目麗しい整った美人である彼女がまるでキス待ちのような様子で口にマカロンを咥えて待っているのだ。

俺の心臓が心房細動を起こしかけない位に震えまくってやがる。

あれ?俺死ぬんじゃない?

「ほら指揮官さま、ヴィクトリアスが待ってますよ?」

「あく、私もそうすれば良かったわね」

からかう様なイラストリアスに残念そうなフォーミダブルの声が聞こえる。

し、進退窮まるとはまさにこの事か?

いや、別にヴィクトリアスとそういう事をするのは嫌ではない。

むしろ俺なんかで良いのかと疑問に思うほどに魅力的なシチュ

エーションだ。

ええい、ままよ!!

漢なら女性を待たせるな!!

……………でもちよつと恥ずかしいから端っこを

「んん♡(´)馳走さま♡」

「……………おう」

端っこの方を齧ろうとしたらそのまま唇を奪われた件について。

少し照れながら舌をチロリと出して唇を舐めるヴィクトリアスに震えまくる心筋達。

それでいて柔らかなお胸様をスリスリと当て続けてくるなんてマジ誘ってるのか？

そんな童貞故のテンパった苦悩をよそに彼女の目は雄弁に語っている。

ご馳走さま♪

ナニかを狙う目でそう言っているのだ。

童貞の心を弄んで何が楽しいんですか!?

魔法使いになったおっさんの童貞ピュアハートを弄ぶなんて酷いぞ!!

三人でその霊峰みてえなドテケえ胸で俺を囲みやがって…………

しかもそれぞれが一人ずつ前世ではお目にかかれ無いほどの美女であり、普通なら接点どころか見ただけでポリスメンに連行されそうな俺に胸を当てて、あくんから間接キス、そして直接キツスまでしてくるなんて想像もできんぞ!?

あ、ちよつと思考を整理してたら主砲の仰角が10°。ほど持ち上がって…………

「あらっ…ふふ♪指揮官さま？このお尻に当たる硬い棒は何ですか？」

バレた！！！！

俺の顎に手を当てて振り向かせるイラストリアスが、優しく微笑みながらそう問いかけてくる。

俺の主砲が軽く持ち上がってしまったのがイラストリアスにバレてしまったのだ。

いやお前、こんな美人に囲まれて反応しなかったら、ただの不能かホモやろこんなの!!

お、俺は悪くねえ!!

これは男の生理反応なんや!!

「へえ、指揮官はそういうのに反応するのね」

「ふふふふ♪指揮官もやっぱり男の人なのね♪」

両サイドに居るフォーミダブルとヴィクトリアスもイラストリアスの言葉に反応して俺の下腹部を流し目で見ている。

く、喰われる!?

どう見ても肉食動物に囲まれた、今にも食べられそうな草食動物の図がここに描かれていた。

もちろん肉食動物は彼女達で、草食動物は俺である。

変な汗が俺の背中を伝って落ちた。

もはや狩られる寸前。

「指揮官さまっ..」

「ッ!」

その霊峰を押し付けるように俺に向き直って、膝の上へ跨がるように対面に座り直したイラストリアスが、俺を見上げるようにして見つめている。

その目にはやはり俺を惹き込むような怪しい光を発して目を逸らせない。

そして俺の両頬を両手で包み込み…………

「指揮官さま…………軟着陸…………試してみます?」

(・o・)……………(?!?)ハッ!!

今魂抜けた。

それは卑怯だよイラストリアス。

そこまでされてその台詞言われたら、ついその気になっちゃおうじゃん?!

主砲は既に最大仰角まで秒読みだし……………跨った柔らかいお尻でそこをスリスリする彼女の誘いに釣られちゃったよ。

「私も居ますわよ?準備は……………よろしくて?」

「ついに私の勝利を受け入れる時が来たのね?」

ああ……………最初から姉妹丼、しかもお外でなんてなかなかハードなプレイになりそうだ……………

前世含めて約60年の大賢者。

今ここで悟りを拓く瞬間を受け入れ……………

「お楽しみみの所を申し訳ありませんがご主人様。そろそろ執務のお時間でございます」

「「!?」「」」

不意に聞こえた声に気が付いて声の主を見ると、そこに居たのは口イヤルメイドのシェフィールド。

俺の方をその冷たい絶対零度の視線で見つめている。

そしてその手には銀色のお盆に載せられた書類の山が……………

「そ、そんなに仕事が残っていたのか?」

「色ボケて忘れてしまいましたか? 鉄血とユニオンが制作した大型アーマーの実験で使われた資材やその記録や関係各所への報告書など、山程仕事が残っておりますが?」

「わ、忘れてた……………」

「はあ……………そろそろお止めになつては? 軍拡競争と言わんばかりにアーマーを制作して既に両陣営共に試作機を含めては50機を越えておりますよ?」

「え?!」

それは作り過ぎだ!!

リノや夕張は分かるが、ビスマルクまで開発狂になるなんて……………確かアレって1機辺りロイヤルの381mm連装砲の主砲1本分の値段しなかつたか?

希少なレアメタルに特殊技術の機材を多数載せてるからそれ相応のお値段になつたとか……………

こうしてはいられない。

早く止めなきや母港の資産が死ぬう!!

「すまん、行かなくては……………お茶会に誘ってくれてありがとう、また今度も……………今度は普通のお茶会で頼むぞ!!」

「あ、指揮官さま!!」

「逃げた！」

「ああ……今回は勝利を逃してしまっただわ」

両サイドの魅惑の霊峰から腕を引き抜いて、イラストリアスをそつと優しく持ち上げて立ち上がり、そのまま俺と入れ替わるように椅子に座らせた。

そして伝えに来てくれたシェフィールドを置き去りにしながらも開発中毒患者の下へ向かう為に走った。

ロイヤリテイな霊峰は凄く後ろ髪を引かれるが、それよりも皆の母港の危機なのだ!!

俺は走り出す。

今まで母港で起きたことの無いような未曾有の危機から救う為に。

何でもする！頼むからもう止めてくれええええ!!

~~~~~

「逃げられてしまいましたわね」

そう言いながらも特に残念そうな様子も無く、椅子に座ったままテーブルの上にあつたティーカップを手に取り、静かにそして上品に紅茶を飲むイラストリアス。

その姉妹艦達も特に気にした様子も無い。

しかし、そんな彼女達を睨む存在が居た。

「失礼ですが、これは協定違反では？」

シェフィールドはイラストリアス達を睨む。

それもそのはず、彼女達はロイヤルだけでなく全陣営での決定でもある指揮官の心を癒やすまで、指揮官へ強引に迫り過ぎないという協定違反を犯しているのだ。

あのリットリオの声明から各陣営の代表が集まって決めた協定を堂々と破る。

それはすなわち代表であるクイーン・エリザベスの顔に泥を塗る行為なのだから。

「そうかもしれませんわね」

「……………では何故？」

あっけらかんと悪びれた様子もなくそう言うのはフォーミダブル。テーブルに置かれたスイーツをパクつき、堪能しながらも同じ陣営であるシェフィールドに鋭い視線を向けて離さない。

それはまるで油断ならない「敵」を睨むかのように。

「それは貴女も知っている筈よ？ だって貴女、あの時にあの場所でイラストリアス姉さんと居たのでしょ？」

「い、いったい何を……………」

困惑するシェフィールドに詰め寄りながらそう言うヴィクトリアス。

その目には普段は籠もるはずの無い怒りが宿っていた。

まるでその事を忘れる事を怒っているかのように。

「この母港に指揮官さまが着任するすぐ前のお話ですわ」

「それは……………」

「忘れたとは言わせませんよ？」

「……………」

イラストリアスの紅茶を飲みながらこちらを見るその目は、まるで凍りついた氷河のようだった。

確かにシェフィールドは覚えている。

母港に着任する前の指揮官に起きた悲劇を。

それはほんの些細なすれ違いが、二度と取り返しのつかない出来事を引き起こしてしまった。

その悲劇は、誰も悪くはなかった。

ほんの少し時間がズレていれば。

誰もがそう思う、そんな悲劇だ。

その日、指揮官は母港に着任する前にとある場所へ護衛のKAN—SENを連れて向かった。

そこは指揮官が戦争孤児となり、引き取ってくれた教会兼孤児院。指揮官は孤児になってから徴兵されるまでの間、その孤児院で心優しい年老いたシスターに育てられた。

いきなり戦争で失った肉親や友人達の事で心に傷を負った指揮官を、シスターはまるで自分の子供のように優しく接してくれたそう  
だ。

そんなシスターに次第に心を開き、シスターの事を第二の母親とまで思い慕うようになった指揮官は徴兵されるまでの間、彼女の手伝いを率先して行いその負担を随分と減らしていたらしい。

そして軍に徴兵されて一度も戻る事ができず、ようやく戦争が終わりを迎えたこの日、指揮官は母親と慕うシスターに自分の無事と立身出世した事を報告しに里帰りしに来たのだ。

しかし、それは予定した日よりもかなりの日数が過ぎていた。

各陣営の上層部のセイレーンとの癒着。

そこから起こしたクーデターの後処理や、虐げられていたKAN—SEN達の救出や保護。

まさに猫の手も借りたいという言葉がよく似合う修羅場を捌き続けていたが故の遅延だったのだ。

ようやく一息つける。

そんな思いと共に、当初の予定よりも遅くなってしまったが、どうしてもシスターには話したいし会いたい。

立派になった自分をすっかりと見てもらいたい。

苦笑する指揮官はそう語り、育ての親だというシスターに見栄を張る為に純白の士官が着る儀礼用の軍装まで新調して準備していたのだ。

用意された移動用の車の中で楽しそうにシスターとの思い出を語る指揮官は、護衛で着いて来ていたイラストリアス達に、何処か楽しげで戦場では見せたことの無いような朗らかな笑顔を浮かべていた。

そんな指揮官に皆も笑顔になり、和気あいあいとした雰囲気で道中を過ごす事となる。

そして、指揮官はシスターと再会を果たした。

それは冷たい墓石との対面だった。

冷たい雨の降りしきる中、指揮官はその場に立ち尽くす。

せつかく新調した軍装を濡らし、車内で朗らかに浮かべていた笑みを消して。

誰もが口を開けない、声を掛けられない。

シスターの死因は階段を踏み外して落ち、頭部を強く打った事が原因だった。

日課の礼拝、しかも出兵した指揮官の無事を祈る為に、朝早くから神に祈りを捧げに向かう途中の教会の入口の階段、そう、たった数段の階段から落ちてしまったのだ。

まさに不運としか言いようのない事故。

しかも起きた時期も悪かった。

シスターが亡くなった日は……指揮官が里帰りする予定日の次の日だったのだ。

もし、もし指揮官が予定日に帰っていたら。

この悲劇は起こらなかったかもしれない。

もしも、というIFは無く、ただ残酷なまでの現実がそこにはあった。

「……………指揮官さまは何も仰りませんでした。ただ雨に打たれてシスターの……………育ての親である彼女のお墓を見つめるだけで……………なにも……………一言も……………」

「……………」

その目に涙を浮かべながらも沈黙するシエフィールドを見続けるイラストリアス。

その場に居た誰もが打ちひしがれた。

あの時に指揮官が予定日通りに帰っていたら？  
確かにあの悲劇は防げただろう。

しかし、その代わりにジャン・ボールやクリーブランド姉妹の様な  
虐げられていたKAN—SENは救えなかった。

どうにもならない事だったと誰もが受け入れてしまったあの日の  
事を、あの光景を見た自分達は受け入れる事が出来ないのだ。

「指揮官さまが何をしたと言うのですか！こんな悲劇は誰も望んでい  
ません!!」

「それは皆同じ思いです。ですが、一番お辛いのは……………」

「分かっています…………そんな事。だから、だからこそ今必要なのです」  
「……………この協定破りがですか？」

シエフィールドの問いかけに大きく頷くイラストリアス。

その目には決意が籠められている。

何事にも止められぬ強い意志が。

ふと気が付けば姉妹艦であるフォーミダブルとヴィクトリアスも  
また、同じ目をしてシエフィールドを見つめているのが見えた。

「今の指揮官は寄る辺の無い渡り鳥に近いですわね。この母港の仕事  
や筋肉に依存する事でそれを自分で考えない様にしているのですわ」

「シエフィールド、貴女……………指揮官から終戦後、退役した後の話を聞  
いた事はある？この数年で一度もそんな話を私達は聞いた事なんて  
無いわ」

「それは……………」

その問い掛けにシエフィールドは答えられない。

誰も知らないのだから。

戦友と呼び、親しくなった筈の指揮官の事が分からない。

そんな筈はないと否定したいのに、何も知らないのだから。

確かに指揮官は戦後の事を明言しない。

そういう事も良いかもしれないとは口にすることはあっても、実際  
にどうしてみたいかを話した事は一度も無かった。

「指揮官さまは……………自身の、その先の事を考えていらっしやらない  
のかもしれない。不必要だと思われる可能性があるります」

「…………だから強引に迫ると？それはご主人様の意思を……」

「今寄る辺を与えなければ…………楔を打ち込まなければ指揮官はそのまま命を削り続けるわ。もはやそのレベルまで達してしまっているのよ？」

「突き進み、勝利を掴み続ける英雄。確かに象徴としては素晴らしいわね？でも思い出しなさい、アーサー王然り、クーフリーン然り…………英雄の末路は悲惨なものよ」

シエフィールドには二人の言う事にもはや反論出来なくなっている。

悲劇の英雄は、幸せになれるのか？

物語の英雄達ですら、その最期は悲しい結末になる事が大半である。

失うモノが無い状態なら？

己の命しか持ち合わせが無い英雄なら？

不利な戦況を変える為にその抱えた命をすぐ賭けとして博打に出る事だろう。

最悪の事態が何度も頭を過ぎてしまうのだ。

それだけの実績があつた指揮官にはある。

「私達はそんな指揮官さまを止める為にここで動くのです。貴女達の協定を守る側を保守派とするならば、私達は止まらない指揮官さまとの繋がりを得ようとする急進派と言えるでしょう」

「急進派…………陛下や保守派と言われる私達に敵対すると？」

「いいえ、そこは違いますわ。敵対は致しません、ですが今の指揮官さまの為に早くに進めなければならぬ事なのです」

「陛下にこの事は？」

「ええ、すでに…………私達の派閥のトップがお伝えになりましたわ」

「イラストリアス様がトップではない!?」

驚愕するシエフィールド。

それが確かであれば、他にもメンバーがいるという事。

それはどれ位の規模で、いつから発足していたのか。

諜報分野を担当しているロイヤルメイド隊ですら把握していない



派閥がすでに存在していた事になる。

「……………信じられません」

「そうでしょうね。私達も話を持ち掛けられるまでは知りませんでしたので……………ですが存在しますわ。それその母港に指揮官さまが着任された頃から」

「それほど前から……………」

驚きの連続に普段は変える事のない表情を変え続けるシェフィールド。

それを見ながらイラストリアスは冷めてしまった紅茶を上品にゆつくりと飲むと、再びシェフィールドへと視線を合わせた。

「必ず止めて見せます。指揮官さまを悲劇の主人公などにはさせません。指揮官さまに全てが終わった時には謝罪して罰を受けましょう。ですが……………指揮官さまを止めるまでは私達は絶対に止まりません」「っ!?!……………それほどの覚悟ですか」

「はい」

意思の表明。

そしてその覚悟の現れとしての即答。

彼女達の想いは強く、そして運命の歯車は確実に回る。

その運命の先は……………まだ誰にも分からない。

## 第42話 お昼寝とラフィー

指揮官です。

今日は何故かとある駆逐艦の甲板の上にあります。

というかその船体を出しているKAN—SENにこき使われているのですが……………

「そつちは終わったのか？」

「もう終わった」

デツキブラシを片手にそう答えるのはユニオン駆逐艦 ラフィー。

銀髪ツインテールに機械的な髪留めの上にウサ耳で改装を終えた姿の彼女は、いつもの袖無しコートとアームガードを脱いでなんとも涼し気な格好で甲板の掃除をしていた。

ってというかコートの下は白のビキニとミニスカートしか身に付けてないってというのはどうなんだ？

最近ロリに目覚めつつある俺にもなかなか刺激の強過ぎる光景なんだが……………

「ん、指揮官、約束」

「……………おう、そうだったな」

軽装過ぎる格好のラフィーがデツキブラシを壁に立てかけると、両手を開いてこちらに催促する。

これは約束なのだから仕方がない。

そう思うのだが……………何とも言えない犯罪臭のする光景を今から作る事になるのは気が引けるのだが？

やっぱり断ろうか？

「指揮官、早くして」

「はあ……………了解だラフィー」

その場で両手をこちらに伸ばし、ぴよんぴよん飛び跳ねて前からピンクと白のしましまパンチラし始めたラフィーに諦めの境地で溜め息を一つ吐き……………俺は彼女を抱っこする。

左腕の上に柔らかく小さなお尻を乗せた彼女は、そのまま俺の首に

手を回してピツタリとくっ付いた。

素晴らしいまでに柔らかく、子供らしい高い体温のお尻の感触に口  
り魂が発動しそうになるのを、左腕以外の筋肉に力を込める事でグツ  
とこらえてマツソー賢者となる。

気分は前世の記憶にある、運命的な聖なる杯を巡る戦争に出てきた  
伝説過ぎる偉大なギリシヤの大英雄だ。

「おお、凄く高い」

「お気に召したようで何よりで……………」

「ラフィー、ここ気に入った」

「……………そうですか」

目をキラキラさせてはしゃぐ彼女に、思わず肩を竦める俺はこう  
なってしまった昨日の事を思い出す。

あれは……………本当に失敗だった。

アーマーの量産をどうにか止められた俺は、その後処理の書類に忙  
殺されていた。

普段の仕事と並行して始末書や報告書を作成するのはとても大変  
で、その日の業務に差し支えそうになるほどだ。

そこで俺は考えた。

こっそり母港の私室に書類を持ち帰って仕事をしてもらえんやろ  
？

普通にバレた。

というか筋トレ用のジャージと一緒に包んで持ち帰ろうと廊下を  
歩いていたらベルファストに

「お洗濯にお持ち致します」

と言われて剥ぎ取られ、書類が床にダバダバと落ちて速攻でバレた  
のだ。

身体が筋肉で大きいから服もでつかくて包みやすいし筋肉万歳!!

なんて脳天気な自分を凄まじく呪った瞬間だったよ……………

そこからは地獄だった。

ニコニコ笑顔のまままで無言の圧力を掛けてくるベルファストに、失望した表情のシェフィールド。

そして事情を知って母港中に情報が拡散されたのか、集まってそのまま俺を取り囲む様々な陣営のKAN—SEN達……………

ある種の恐怖だった。

仕事を持ち帰ろうとしたら自分の部下に睨まれるって信じられるか？

俺は知りたくなかった。

「それではご主人様、罰則の方をお伝え致します」

「はい」

気分は死刑囚だ。

微笑むベルファストが一枚の書類を差し出して俺にペンを渡す。

……………つて!?!おいおい!?!

なんだこれは!?!?

「……………ベルファスト、これはいったい」

「はい、こちらは「ご主人様を一日好きにできる」権利書となっております」

「つまり?」

「明日一日という時間をまるごと私達KAN—SENの誰か一人に、ご主人様が明け渡す権利書ですね」

フンワリとした笑みと共にそんなことを言うベルファスト。

周囲の空気が変わる。

好奇心で集まっていたガヤガヤとした纏まりの無い感じから、殺伐とした戦場で常に感じていた殺気を孕んだものに……………

「き、拒否権は……………」

「あるとお思いでしょうか?」

「すみませんでした」

素直に頭を下げる。

だって威圧感半端ないんだもんよ……………

信じられるか？

顔はニコニコしてんのに目が全く笑ってないんだぜ？

美人は怒ると怖いとは言うが、マジで怖くて筋肉が震えてきたぞ？

唯一の救いはここに重桜と鉄血の2つの陣営がない事か。

重桜陣営と鉄血陣営は合同演習で母港から離れた海域で、互いの総力を尽くした演習に励んでいるらしい。

先週の内にそんな色々な確認なんかの書類を精査させられたから覚えてる。

まあここに居なくて助かった。

ヤベンジャーズとかここに居たら……………怖過ぎて想像したくないな。

「それではご主人様、ここにサインを」

「……………はい」

そんな諦めの境地でボードに挟まれた書類を受け取りサインする。もはやこれまで。

観念して刑期を過ごすべきだろう。

ああ、諸行無常なり。

全身の筋肉達も心做しか普段の盛り上がり盛りが盛り下がりになっていくようだ。

「……………あらっ？」

「んっ？」

サインを書き終えて不備が無いか確認していたベルファストが声を上げる。

まさか……………俺、自分の名前の綴りを間違えたか？

やつべ、そうだったらめっちゃ恥ずかしいぞ？

いやでも普段から書類書いてサインは結構するし……………

「これは……………ラファイー様？」

「……………先手必勝」

何時の間にか俺の身体によじ登っていたラファイーがペンを持ちな

がらVサインをしていた。

まさかと思い、ベルファストの方を見るとそこには俺のサインの下にラファイーの名前が……………

「いつの間に……………」

「指揮官が気が付かなかったから書いた」

「いや、マジでいつの間に登ったんだよ……………」

困惑する俺とベルファストを他所にフンスツと鼻息を荒くドヤ顔しながら満足気にウンウンと何度も頷く。

普段の無表情っぷりはいったい何処にいったんだよ。

ツインテールの髪留めにあるウサ耳もピヨコピヨコして……………どうやって動いてんだそれ？

「最近指揮官が構ってくれないから、ラファイーが寂しいか思っただい、思っただい……………」

「ラファイー……………」

顔を背けながらそう言うラファイーを見て、俺はそれ以上なにも言えなくなつた。

確かに最近は仕事に忙殺されて、皆とコミュニケーションを取る時間を確保できていなかったな。

よし、これはコミュニケーションを取るその再始動のきっかけとして相応しい。

「ベルファスト、ここはラファイーに時間を明け渡すとするよ。なんたってサインまで書きちまったからな」

「はあ……………仕方が無いですね。分かりました」

溜め息を吐いた割には清々しそうに笑うベルファストを見つつ、俺も笑う。

あれ？でも俺……………これ仕事出来ないんじゃない？

……………早まったかな。

そんなこんなで始まったラファイーとの1日。

「おはようラファイー」

「ん、指揮官、抱っこ」

「お？甘えん坊か？」

「んんん!!」

「オーライお姫様。ほら、ご所望の抱っこだぞ？」

「……………すぴ〜」

「そこで寝るのかっ!？」

察へ朝起こしに行けばパジャマ姿のラファイーに甘えられ。

「指揮官、あくん」

「お?……………ちと恥ずかしいが……………あくん」

「ラファイーにも」

「おう、お返しだな。それ、あくん」

「あむあむ……………美味しい」

「ははは、そいつは良かった」

笑いながら朝ご飯を互いに食べさせ合ったり。

「指揮官、手伝って」

「これを二人でか!？」

「うん」

「……………男は度胸だ!!今日1日をラファイーにやるって言つたもんな

……………やるぞ!!」

「おー……………あっ」

「おわっ!?!バケツを落つことした!!」

「大丈夫、ラファイーが取る」

「あ、そうだったな、ラファイー達は水面に浮けるんだったな……………ん?

ラファイー? 艦装は……………」

「……………ブクブクブク」

「ラファイー!!」

艦装を展開せずに海に降り、パニックになって溺れるラファイーを助けて全身びしょ濡れになりながら、彼女の船体を二人で掃除する事になった。

というか最後のキツ過ぎ笑えない……………

なかなかハードなお願いだったわ。  
それもようやく終わってもう日暮れ時。  
というか……よく終わったよこれ。

「指揮官」

「ん？どうした？」

俺の腕から肩へ座る場所を移したラファイーが不意に俺に声をかける。

二人で夕日を見ながらのんびりしながら休憩している所だったのだが、このうさ耳のお姫様は俺の頭に抱きつきながらゆっくりと話し始めた。

「指揮官ともっと一緒に居たい」

「おう、今日はずっといるぞ？」

「そうじゃない」

「？」

不思議に思っただけラファイーの言葉の続きを待つ。

すると彼女はより一層深く、上半身を全て俺の頭に預けるよう抱きついてきた。

そこにはちっぴいながらも自己主張する膨らみが、柔らかく俺の頭を包み込む。

てかこんなビキニみたいなトップス着けてたら、そりや当たるよなあ……

そんな不埒な考えを思い浮かべていると

「ラファイー、指揮官とずっと……戦いが終わっても一緒に居たい」

絞り出すような小さな声でそう俺に訴えかけてきた。

思わずハツとして視線だけラファイーの方を見ると、身体を震わせながら、そのルビーの様に綺麗な瞳の目に大粒の涙を溢れさせる彼女の様子が見える。

これはいったいどういう事なのだろうか？

その疑問は、すぐにラファイーの口から聞くことになる。



「指揮官、戦争が終わったら何するかラファイ達知らない。皆に聞いても誰も知らない。だから、戦争が終わったら指揮官がラファイ達の前から居なくなると思ったから……だから……だから……」

「ラファイ……」

………終戦後か。

考えたことも無かった。

正直、今を頑張る事しか考えてなかったから、こうして泣いているラファイにどう答えていいのか分からないというのが今の俺だ。

だがその事がラファイに不安を与えてしまったみたいだな。

手を伸ばしクシャリとラファイの頭を撫でつつ苦笑して

「俺にもそれは分からないよラファイ。でもこの戦いが終わるその時までは皆と一緒に居たいと………そう思ってるよ」

俺はそう言った。

何かを期待させるのでもなく、そこまでの事をまだ考えていない事を素直に伝える。

まだ俺にはその先の事なんて分からないんだ。

ただ皆と一緒に、誰一人欠けること無く最後まで戦い抜きたい。

どんな困難が待っているのか？

辛くて苦しい未来が待っているかもしれない。

だけだと思うんだ。

皆と一緒に居ればきつと乗り越えられるって。

根拠なんて無い。

でも頼れる仲間がここにはたくさん居るのだ。

だったら俺はそんな皆が全力を出せるように後方、裏方の仕事を己の全身全霊を持って行い続ける。

周りの連中に青臭いとか机上の空論なんて言われるかもしれないけど、俺はそれを諦めたくなんかないんだよ。

「きつと大丈夫さラファイ。俺達なら、皆と一緒に揃って終戦を迎えられるよ……その後の事はその時考えようか？出来れば皆と一緒に

にさ」

「ラファイー達と一緒に?」

「ああ、きつと色んな事が出来るだろうな。楽しい事とか面白い事とかな?こんな戦争なんて終わらせたら皆と一緒にパーっと楽しもう、平和つてのをさ」

ラファイーの涙は止まり首を傾げる。

そんな彼女の頭をもう一度クシヤリと撫でると、少しくすぐったそうだ。

想像したら楽しみになってきた。

終戦後に何をするか?

こんな時代だからこそ、そんな思いを馳せて想像するのも悪くない。

もしかしたらこの子達の恋人なんかを紹介されて、結婚した後にはその子供をこの腕で抱き上げる未来なんてあるかもしれないのだ。

忙しい毎日だけでも、こんな風に立ち止まって未来に想いを馳せるような一息入れるのも悪くはないな……

「ほらラファイー、契約は今日の日付が変わるまでだぞ?この後は何がしたいんだ?」

「ん、指揮官と晩御飯を食べる」

「お、そうか。なら早く片付けをして食堂に行かないとな?」

「またあくんして食べさし合いっこしたい」

「気に入ったのか?了解だお姫様。なら早く終わらせようか」

「うん!」

珍しく感情を露わにして、元気で可愛らしく頷いたラファイーの頭を撫でつつ俺は片付けを始める。

こんな微笑ましいモノを見たら思わず笑顔が溢れるってもんだ。

ラファイーを肩から降ろして仲良く掃除用具を片付ける。

手を繋いでくる彼女に、しっかりと握り返し笑顔で寮へ帰るのだ。

あまり感情を表情に出さない子であるラファイーの笑顔というレアでラツキーな、そして珍し過ぎる光景を見ながら俺もまた笑顔で歩き出した。

先の事なんて誰にも分からない。

でもより良い未来を目指して頑張るのが、今を生きる俺達の役割なんだと理解して前に進み続ける。

それが遺された者達の役割なのだから……………

~~~~~

自室の窓の外から射し込む月明かりに照らされながら、ラフィーは考える。

指揮官ともっといっぱい遊びたい、触れ合いたいと。

今日一日では全く時間が足りなかった。

しかも夕食では帰ってきた重桜の雪風と時雨にあくんし合うのを一回ずつ盗られた。

大規模演習のMVPを取ったから、そのご褒美だとか言っていたから仕方ないって思ったけど……………やっぱり納得がいかない。

「……………むう」

ベットで仰向けに寝転がりながら、置いてあるクッションを抱きしめるとなんだか胸がモヤモヤして思わず声が出る。

指揮官はああいう胸が大きな娘が好きなんだろうか？

ラフィーと変わらない身長なのに、ラフィーよりも大きな胸を持っている。

抱きしめていたクッションを置いて、パジャマの上から自分の胸を触ってみるが、やっぱり彼女達のように大きくはない。

「指揮官……………んんう……………」

自分で触っていて指揮官の事を考えていたら、少し変な気分になった。

これ以上はなんだか虚しいような、イケナイ事をしているような気がしてすぐに触るのを止める。

でも……どこか指揮官を求めてしまう自分が居る事を抑えきれない気持ちが出てきてしまうのは、ラフィーにとっては仕方の無い事だと思う。

自分達だけの指揮官。

常に寄り添い、支え合い、毎日を共に過ごす家族のような人。

いつも全力でラフィー達を助けようと必死に走り続ける、それこそ何故そこまで力の限り続けられるのか不思議な人。

でもラフィー達がお願ひしたら困ったような表情をしながらも、『しようがないなあ』と苦笑しながらそのお願ひを叶えられる範囲で全部叶えてくれた。

とても不思議で頼り甲斐のある人。

そして、そんな毎日を過ごしていたら、いつの間にか心の中心に居て……初めて好きになった人。

もつと一緒に居て、側で常に感じていたい。

そんな想いを抱くようになった特別な人。

そんな認識だった。

でもそれが当たり前だと思っていた。

以前のリットリオの宣言を聞くまでは。

そして恐怖した。

自分は指揮官の事について、やりたい事やどんな事が好きなのか全く知らない事を。

指揮官がとても遠くに居るような気がして、足下が崩れ去るような気がして怖くて震えてしまった。

無条件で甘えられるその人の事を知らずに、自分の願ひ事だけを押し付ける悪い子になってしまったような気がして。

優しい指揮官に甘えるだけ甘えて、指揮官の事を何も考えない悪い

子。

怖かった。

指揮官に悪い子と思われてしまっただけでいいか心配で怖かった。

その事で指揮官に嫌われていないか気になって。

だから今回の事はすぐに実行に移せた。

皆が注目している瞬間について自分の名前を書いた。

いつもの様に苦笑しながらお願いを聞いてくれる指揮官に、どこかホツとしながらもラファイは考える。

そして今日一日を使って指揮官の本音を聞き出してみせる。

そう意気込んだ。

少し失敗したけれど。

朝は眠くて起きられず、ご飯はつつい甘えてしまった。

そして聞こうと思った事は、最後まで言えなかった。

指揮官がとても優しくて。

指揮官がとても暖かくて。

でも一つだけ分かった事はあった。

この戦争が終わっても、指揮官はラファイ達と一緒に居たいと思っている事。

ならまだチャンスは残されている。

だから今日は休んで、一息つこう。

「ふぁ……………ねむい……………」

そこまで考えをまとめていたら急に眠くなってきた。

明日起きたらまた指揮官に甘えたい。

夕食で雪風や時雨に邪魔された分だけ……………ううん、それ以上に甘えたい。

抱っこされたまま指揮官とお昼寝したい。

スリスリと擦りついて指揮官の匂いをいっぱい嗅ぎながら、あの優しい香りに包まれて眠るのだ。

「しき……………か……………」

意識が遠のいてきた。

明日もいつぱい甘えたい。

できるなら毎日指揮官に甘えたい。

そんな一日を過ごせたらいいな。

そんな想いを最後に、夢の世界へと旅立つのだった。

第43話 誘惑と東煌姉妹

指揮官です。

現在心底ビビリ散らしております。

いつもの談話室で本を読みながら、ソファでうたた寝していたところ……とあるKAN—SENが俺の上で馬乗りつていうか覆い被さった状態にاندですよ。

何だこれ？

つい数時間前に今日の分の書類の精査やサインを終わらせて、ついでに明日の分もやれば筋肉との対話の時間が増えるのでは？

とかいうアホな考えで仕事を続けていたら、普段より仕事に時間が掛かっている事を、不審に思ったシエフィールドにバレて執務室を追い出されたのだ。

しかもシエフィールドから全口イヤルメイド隊に連絡が行き渡り、今回の罰として俺が筋トレ出来ないようにトレーニングルームの閉鎖や、私室前で待機してトレーニングウェアや用具を取り出せない様にする徹底ぶり……

途方に暮れる俺には読み掛けの小説を片手に談話室へ向かう事しかできなかつた……

いや、明日の分の仕事をしただけでこの仕打ちは酷くないか？

そんな納得できない感情を抱えながら談話室で小説を読んでいたら……そのまま寝落ちしちまつたんだが……

「それで………いったいどういう状況だこれ？」

「……………」

ソファで仰向けに寝ている俺に被さるそのKAN—SENは、ジツとこつちを見たまま何も話さない。

正直、フニヤリと形を変えて押し付けられる柔らかかなお胸様が俺の理性を削っているのだが……

「そろそろ何か言ってくれないか寧海？」

「……………」

黒髪のツインテールを輪っかにしたような不思議な髪型で、ロリ体形なのに豊乳という所謂トランジスタグラマーな東煌所属の巡洋艦寧海。

藍色のチャイナドレスを身に纏う彼女は、このやり取りの間に一言も声を出さない。

「いったいどうしたというのだろうか？」

「に、寧海？」

「……………」

やはり何も喋らない。

「というか……………さつきより近くないか？」

「いや、間違いじゃない!!」

「寧海と俺の顔の距離がさつきよりも近づいている!？」

ジワリジワリと俺に、そのどこを触っても柔らか過ぎる身体を擦り付けるように上がって来ているのだ。

「お、おい……………」

「フー……………フー……………」

もはやキスまで数cmといった距離で気が付いた。

「寧海の奴、めちやくちや息が粗いつていうか興奮してる?！」

「いったい何故？」

「この筋肉ダルマの何処に興奮する要素があるのさ？」

「そんな疑問で頭の周りに？マークを大量量産していると……………」

「指揮官が悪いのよ……………こんなに焦らすから……………ね？」

瞳の奥に♡マーク入りそうな蕩け声で寧海が呟く。

「その吐息が俺の顔に掛かる程に近いつていうかキス寸前。」

「どうか身に覚えが無い!!」

「冤罪だ!!」

「寧海にそんなR―指定かかりそうな事とかしたことはないもん!!」

「俺は童貞で魔法使いだぞ!!」

「寧海のきめ細やかな肌の質感が視認できる程の大接近に困惑する

俺を他所に、彼女はなんとも淫靡な雰囲気を漂わせてフワリと笑う。普段は妹の為にキリツとした、しっかりした姉という印象の強い彼女が見せるアダルティークな雰囲気にギャップを感じて…………ちよつと息子が反応してる。

分かるか？いつもはしつかり者で厳しめな娘が二人つきりだとガラリと雰囲気が変わって甘えたような声色でこちらに擦り寄ってくるとか…………堪らんね!!

これは据え膳ですか？据え膳ですね？

ちよつとくらい味見…………それは失礼だな。

毒食らわば皿までと言うしな…………

それでは…………頂きま…………

「指揮官」

「ぬうお!」

真横から声を掛けられた。

めつちや油断してた…………

寧海をそのまま抱きしめてしまおうかとした瞬間だったわ。

驚きつつも目だけで横を見ると、其処には寧海の姉妹艦である平海が俺の顔を覗き込むようにしていた。

外見はよく似ているものの、姉と違って赤いチャイナドレスを着てのんびり屋気質であり、姉よりも胸部装甲が薄い、それ以上にロイヤルの陛下並の美尻の持ち主である。

「姉ちゃん、だいぶ我慢した。凄い」

「が、我慢？それはどういう事だ？」

今だにフーフー呼吸の粗い寧海の様子が気になりつつも、平海の言葉が気になる。

いったい彼女は何を我慢していたんだ？

というかい加減息子が完全に立ち上がりかけててズボンにサーカステント建ちそうなんだが!?

なるべく気が付かれたくないのではその話をハリーアップ!!

そんな俺の願いが通じたのか、平海が教えてくれた。

「えっと……クリスマスで姉ちゃんの胸を弄んで……ずっとモヤモヤしてたみたい」

「はいすみません!!俺のせいでした!!」

100%俺に罪有りでした。

あれだろ？

去年のクリスマスで酒飲んでたら明石に一服盛られて記憶が無くなったヤツ。

目が覚めたら母港中のKAN—SENが倒れてたアレだろ!?

そんな事してたのか俺は……

今更知った事実に驚愕していると

「平海もお尻を揉まれて……」

「ただのセクハラオヤジだこれ!!マジで……」

「凄く気持ち良かった、もう一度お願いしたい」

「え?」

「?」

自分の所業の被害者へ謝罪しようとしたら、感想を……しかも高評価で困惑する俺と、そんな俺の反応に困惑する平海とかいう不思議空間が形成されてしまった。

というか去年のクリスマスの爆弾が、今になって俺に牙を剥くなんて誰が想像できるかよ!!

……ちよつと待てよ。

つまり我慢したって……そういう事か?

これはそういう事を期待して二人共ここに居るって事だよな?

俺のリビドーをこのまま発散できるのか?

いやー、ここまで後生大事にしたくもなかった童貞だが……ここですら無くしても構わんのだろう?

童貞丸出し過ぎてキモいかもしれん思考回路だが、乗り気な美少女二人を前にして据え膳とかマジでそれ無いわ。

それはゲイか不能のどちらかだな、うん。
何も抗う必要なんて無いもんな。

「よし、今度こそ……………ん？」

どちらからと言わずに、両方に手を出そうと手を伸ばした瞬間……………俺のマツソーイヤーにとある音が届いてきた。

そう、それは……………廊下を走る音だ。

視界を東煌姉妹に埋め尽くされそうになっていたが、少し見える隙間から壁にかけてある時計で時間を確認すると……………委託が完了して重桜の駆逐艦、睦月型の幼い子供達が帰って来る時間だ。

つまり……………ここで痴態をおっ始めてしまったら、あの幼い子供であるあの子供達が教育的にヤバ過ぎる絵面を見ってしまうという事で……………

……………いかん。

それだけは断じていかん!!

だが、だがそれは……………俺のリビドーを開放して、いらぬ童貞を捨てる貴重な機会を失う事で……………

魅力的な美少女である二人は既に期待した表情で俺を見ている。

そんな期待されたら俺としても応えたい。

でも、でも……………それは母港運営を預かる長としての信頼を失ってでも進める事なのか？

今ここで失っても良いことなのか？

「ぐう……………」

「指揮官？」

蠱惑的な蕩け声が俺のマツソーイヤーを突き抜ける。

リビドーを開放してこのまま情事に耽りたい。

しかし、俺のマツソーと皆の信頼を一身に受け止める良心が……………

『それでも!!』と抗っているのだ。

遂に睦月達の声が聞こえ始めてきた。

俺が談話室で寝ている筈だから添い寝しようとして期待して、こっちに向かっているのが手に取るように分かる。

まさに運命の分かれ道。

俺が……俺が取るべき道は……

「ふんっ!!」

「きやつ!?!」

俺は二人を抱きしめて全身の筋肉を使ってリビドーを抑え込み、そのまま身体を起こす。

そして両膝に一人ずつ乗せて頭を撫でた。

そう、俺はリビドーに抗う事にしたのだ。

今もこの貴重な機会を不意にした残念さは拭えない。

だが、そんなくだらない事で皆を裏切れないのだ。

不甲斐なく、ヘタレな童貞と言われようがこれだけは裏切れない。

「二人共、すまないがこれで勘弁してくれ」

「……………」

「えー……………」

明らかに不満げではあるが仕方が無い。

というか寧海は何にも言わずに俺を睨むのはやめてくれ。

そして平海、不満そうにお尻を俺の膝にグリグリと押し付けるのもやめなさい。

今日イチの修羅場過ぎて身体が震えそうになるが、それはマツソーで抑え込んで平然とした様子を見せつけるのだ。

俺の何とも思っていない様な姿でこの場を乗り切り、睦月達を迎え入れる。

仕方のない事なんだ……………

ああ……………仕方のない事なんだよ……………

……………畜生、勿体ねえ……………

~~~~~

「あれで良かったの姉ちゃん？」

「ええ、今回はこれでいいわ」

談話室のソファで睦月型の駆逐艦に、身体をよじ登られて苦笑する指揮官を見ながら話す二人。

全身に纏わり付かれながらも、揺るぎもしない身体は日頃鍛えている賜物と言っても過言ではないだろう。

睦月型の子達は身体を擦り付けたら、舐めてみたりとやりたい放題だが、指揮官がそれを止めることはない。

それを彼はただのイタズラだと思っっているから。  
実際は違う。

睦月型の駆逐艦達の眼には、指揮官には見えていない熱が籠もっている事を二人は見逃してはいないのだ。

それは同じ女としての生を受けた存在であるからこそ分かる事。

異性であり、どこか鈍い指揮官では気が付きようの無い事ではあるのだが……………

「まあ今回は不意打ちみたいなお事をしたし……………確かめられたからいいわ」

「うん、指揮官凄かった」

いつもは何処かとボーツとしている妹ではあるものの、今の平海の眼には情が写り込んでいる。

そういう寧海の眼にも喜色を帯びた情が写り込んでいることだろう。

実はこの姉妹、指揮官が起きる数十分前から彼の側でいろいろと、そう、いろいろと確かめていたのだ。

その結果、気が付いた。

指揮官の寝相が悪い……………というか近くに何かがあると抱き寄せてしまう事を

しかも撫でたり揉んだり摘んで擦り寄せたりとやりたい放題だと

いう事を。

それはもう楽しんだ。

気持ちが良いなる場所や触ってもらいたい場所を重点的に。

特に普段は節約を信条とする寧海の忍耐力を、粉々に吹き飛ばして理性を失わせようとする程には。

恐らく我慢強い寧海でなければそのまま理性の無い獣になっていた事だろう。

誰も其処には居なかつた為に聞かれなかつたが、自分の手で口を抑えた姉妹の隠し切れない嬌声が、談話室に響き渡っていたのは言うまでもない。

もし見つかっていたら……指揮官の貞操はたちまち貪られていた事だろう。

そんな危険を冒し、想像以上の快樂に身を委ねてしまいそうな状況に抗った二人が、睦月型の姉妹達がしている事を兎戯に見えているからこそ、今の状況を落ち着いて見ていられるのだ。

まあ俗に言う賢者タイムが彼女達を落ち着かせているだけなのだが……

「姉ちゃん、次は……どうする?」

無意識に攻め立ててきた指揮官の手によつて濡れてしまった下着の不快感も、今は何処か満たされたような心地良さに変わって、快感を感じながら平海は寧海に問い掛けた。

寧海はフツと嗤うと

「もちろん、もっともっと我慢した分を取り立てにいくわ♪」

そう言つて足を伝う液体にその身を嬉しそうに震わせながら、妹を伴つてその場を後にしたのだった。

節約から贅沢をするのは簡単だが、贅沢から節約をするのは難しい。

まさに彼女が普段から言っている言葉通りの事なのだが……

ソレに抗う事など、彼女達にはもう出来そうになかった。

## 第44話 朝食と翔鶴

指揮官です。

今日は重桜寮の方にある、ちよつとした座敷にて畳に正座して朝食を取っております。

日本庭園……ここでは重桜庭園と呼ばれる美しい中庭を眺めながら取る食事は、元日本人として心が安らぐものなのですよ。

「良いものだな、本当に美しい」

食べながら話すという行儀が悪い事を思わずしてしまうが、美しく整えられて模様を刻む玉砂利に丁寧に入入れされた樹木、そして色鮮やかな錦鯉が泳ぐ池を見るとそう言わずにはいられない。

こんな贅沢を味わうなんて、今日は一日が良い日になりそうだ。

そう思いながら脚付きお膳に載せられていた赤い器に入っている味噌汁を啜る。

「この味噌の香り、鼻を抜ける度に食欲を唆る芳醇な厚みを感じさせる良いものだな……ズズツ、しっかりと出汁が効いていて味も最高だ。しかも赤味噌、濃ゆ目の味噌が食欲を更に強くするなあ」

これ程までに旨いと感じる味噌汁は前世にも無かつただろう。

そこに茶碗に入った純白の白米を一口食べれば……至高の一時。身体中の筋肉がもつと寄越せとざわめく様に次が食べたくなる。

味噌汁が恋しくなるが、他のおかずも食べなくては。

お膳の真ん中に置いてある平皿の上の鰯の開き。

しかも俺の好物のみりん干しときた。

身を骨から外して一口パクリ。

「……………ああ、『旨い』」

それだけしか出てこない。

俺の語呂力の無さが恨めしくなる。

脂の乗った鰯とみりんの風味が、口の中で合わさって更に唾液を分泌させるのだ。

噛み締めるほどに旨さが引き立ち、気が付けば一口、二口と箸を進



め続けてあつという間に半分以上を食してしまった。

これではいけないとその上に鎮座する、小鉢に入った黄金色に見間違わんばかりに輝く柔らかそうな卵焼きをそつと箸で半分に切り、半切れを摘んで口へ運んだ。

ほんのり甘みを感じる味よりも、驚いた事があつた。

「おお!?これは中が半熟だぞ?!」

卵焼きを作る上で巻いていく作業があるのだが、中を半熟にして焼く方法はなかなか難しい。

前世のように便利グッズを使つてお手軽に、なんて事はここではできないからだ。

こんな風に半熟で作るのには熟練の技や見極めが必要になつてくる。

こんなに手間の掛かる作り方をしてくれた彼女には本当に感謝だな。

「本当にありがとうな翔鶴。こんなに美味しい朝ご飯を作つてくれて」

「いえいえ、指揮官が喜んでくれたなら私も嬉しいです♪」

満面の笑みを浮かべながらそう返す重桜空母 翔鶴。

白い長髪の空色の瞳で、鶴の翼を模したと思われる広い袖を持つ白い着物を着ている彼女は、その穏やかそうな美貌に似合う柔らかかな笑顔で食事を進める俺を見ていた。

何故俺が翔鶴に食事を作つて貰っているのか。

それは毎日ロイヤルメイド隊による筋肉と栄養価を考えた食事に少々飽きがきてしまった俺のせいである。

というかぶっちゃけた事を言うとな……日本食が恋しくなつた。

確かにバラエティ豊かな朝食を毎日違うメニューで出してくれる。

だが、だがしかし、前世が日本人だった身としては……味噌汁が飲みみたい!!!

そんな訳で重桜の料理ならばこの人と言われる鳳翔にお願いする予定だったのだが……

鳳翔は重桜本島に帰参中。

その他で料理が上手いKAN—SENという真つ先に赤城や加賀、愛宕に大鳳が上がるのだが……何を要求されるか怖過ぎた。

長良に頼むという手もあったのだが、彼女は普段から姉妹達のご飯も作っているので手を煩わせるには忍びない。

そこで白羽の矢が立ったのが翔鶴だった。

彼女もやらかす事はあるものの、ヤベンジャーズ程ではない。

というかヤベンジャーズが酷過ぎて比較するのも申し訳ないわ。

それに普段から瑞鶴が翔鶴の手料理、特に天ぷらが美味しいのだと絶賛していて気にはなっていた。

なので重桜寮に赴き今回、明日の俺の朝食を日本食……ここでの重桜食を作ってもらえないか依頼すると

「え？私の手料理で良いんですか？赤城先輩達じゃなくて？」

「ああ、前から瑞鶴によく自慢されていてな。一度味わってみたいと思っただが……」

「もう、瑞鶴ったら……」

瑞鶴の自慢という形で話を切り出してみたが、頬に手を当てながら少し困ったような表情の翔鶴。

……もしかして駄目だったか？

いきなり飯を作ってくれてというのは……うん、普通に上司が部下に頼むことじゃないよなこれ。

普通に考えても立場を使ったパワハラになるのでは？

「ああー、いきなりで本当にすまない。こんな急に無理だよな、俺の勝手な我儘で翔鶴にこんな無茶苦茶な事を言ってしまったているから……また鳳翔が帰って来た時に頼むと……」

「大丈夫です!!任せてください!!」

「お、おお……そうか？」

「はい！腕によりを掛けて作りますね！」

俺の言葉を被せて遮るように笑顔で了承する翔鶴。

袖から伸びる両手は力強く握って、やる気の程を示しているようにも見えた。

まあそんな訳で今日の朝食を翔鶴に任せてみたのだが……

「ご馳走様でした。美味し過ぎて普段の食事で満足できるか不安になつてきたぞ?」

「ふふ♪お粗末様でした。そんな風に言ってもらえたら嬉しくなっちゃいますよ?これ以上は何も出ませんからね?」

食事を終えて素直に感想を言ってみたのだが、ニコニコ笑顔で俺の前に正座で座る翔鶴にそう言われてしまう。

これは俺が悪いのか?

まあ聞き方によっては何か強請るようにも聞こえてしまうのかもしれんが、それほどまでに翔鶴の料理の腕が良かったと言う事なのだ。

「いや、本当に美味しかったよ翔鶴。こんなに美味しい朝飯は毎日食べたいくらいだ」

「っ?!……………それは……………嬉しいですね」

何故だ?

正直に感想を言っただけなのに翔鶴が顔を赤くして挙動不審になつてしまった。

落ち着きなく視線を彷徨わせる翔鶴を不思議に思いながら、湯呑みに入った温かい緑茶を飲む。

ああ、これだよこれ。

この何処かホツとするような感じ、このご飯を食べた後のお茶ってなんでこんなに心を落ち着かせてくれるのか……………

俺の中に居る日本人が心の奥底から満足しているのが分かる。

全身のマッソーもいつもとは比べ物にならない程、力強く盛り上がって絶好調だ。

このまま筋肉との対話を始めたら普段の2倍……………いや、3倍の量を行えそうである。

このまま執務前にトレーニングルームへ向かおうか?

そんな事を考えていると

「あの、指揮官」

「ん?どうした?」

耳を赤くしたままお膳を下げ終えた翔鶴がいつの間にか俺の目の

前にいた。

「というか何故三つ指を付いて頭を下げているんだ？」

「どうしたんだ翔鶴？」

「えっと……………あの……………」

「？」

なんとも齒切れが悪い反応だ。

しどろもどろな翔鶴が見れて少し可愛く感じているが、このままと  
いうのもなんだか居心地が悪い。

それに執務の時間もある。

あまり時間をかけ過ぎると翔鶴の言葉を聞く前に、仕事へ行かなく  
てはならなくなるのはあまりにも不義理ではないだろうか？

言葉に詰まっているようだし、少し俺から詰めてみるか。

「翔鶴、落ち着け。俺に言いたい事があるんだろ？」

「は、はい……………」

俺が近寄って声を掛けたらビクツて反応してる更に深く頭を下げる  
翔鶴。

……………これって傍から見たらパワハラ上司では？

部下に頭を下げさせる上司とかマジでないわ。

しかも飯まで作らせといてこの扱い？

滅茶苦茶酷い奴じゃないか……………

マツソーで親しみやすい指揮官を目指しているのに、ここでパワハラ  
ラするのはいけない。

どうにか翔鶴に頭を上げしなくては……………

「翔鶴、頭を上げて」

「……………はい」

ようやく顔を上げてくれた翔鶴は潤んだ瞳で俺を見つめたかと思  
うと……………胸の前で手を組んでゆっくり瞼を閉じる。

……………待ってくれ。

マジで待ってくれ。

色々とキャパオーバーだ、主に俺の。

これはどういう状況だ？

何故彼女はキス待ちのような……………ん？

なんか引つかかるぞ？

俺はなんて言った？

たしか……………☒毎日食べたい☒？

……………あれ？これってお前の味噌汁が毎日飲みたいとかいうプロポーズの臭いセリフと一緒に？

待て待て待て待て!!

そんな意味は込めてない。

だが……………でも重桜だぞ？

有り得そうな気がしてきた……………

つまり何だ……………俺は無意識に翔鶴を口説いていた？

「し、翔鶴？あのな？」

「……………ぷっ、あはは♪何を本気にしているんですか指揮官？」

「え？」

「冗談ですよ冗談♪」

「だ、だよな!!」

しどろもどろな俺を見ながら袖で口を隠しつつ、吹き出すように笑う翔鶴。

やべー、俺は勘違い野郎になる所だった。

なんだよ、俺をからかっただけかよ……………

マツソーピュアハートを弄るんじゃないよまったく……………

「まったく……………心臓に悪いじゃないか」

「んん、もう少し焦らした方が良かったですかね？」

「おいおい、勘弁してくれよ……………」

「いつも指揮官が優しいから、つい甘えちゃいました♪」

「はあ……………」

思わず出てきた溜め息。

それを見ながらコロコロと鈴を転がすように上品な笑い声を上げる翔鶴。

アレが本当に冗談で良かった。

もしヤベンジャーズだったら……………次の日には干乾びたマツソー

が……………

この想像はやめよう、寒気しか感じない。

冷えた身体に温かいお茶がよく沁みる。

ズズツと音を立てながらお茶を啜っていると翔鶴がスススツと俺の横までやって来て

「でも指揮官?……………本当にしてみませんか?」

「ブホツ!?!」

!?!?!?

耳元でそう言ったものだから思わずお茶を吹き出してしまいそうになった。

しかも変な所に入ったせいかなかなか咳が収まらない。

「ゲホツゲホツゴホツ!!しよう……………かくっ!!ゴホツゴホツ!!」

「あらあら♪指揮官でもそんなに慌てる事があるんですか?クスクス♪」

「この……………やろう……………」

「野郎ではありませんよ?私、瑞鶴のお姉ちゃんですから!!」

息も絶え絶えな俺に畳み掛けるようにしてからかい始める翔鶴。

「どうか瑞鶴の姉の所でドヤ顔すんなや。」

両手を握って頑張るゾイのポーズとか滅茶苦茶似合ってるビツクリするわ!!

「そういうえばコイツはこういうマウンツを……………主に赤城に取る奴だったな。」

今回は標的が俺しかいないから滅茶苦茶弄られる。

「だがやられっ放しってのも癪だな。」

「コロコロ笑う今の翔鶴は、油断して俺の方を見ていない。」

「よし、やるなら今だな。」

「笑っていられるのも今のうちだぞ翔鶴?」

「ほいっ」と

「へ?ちよつ指揮官!?!え?え?え?え?え?」

俺は正座を崩して胡座をかき、すぐ横で笑い続けていた翔鶴をそのまま抱き寄せて横抱きにする。

そして混乱して固まっている彼女の頬に手を当てて、顔を近づけながら

「続き、するか？」

ニヤリと笑いながらゆっくりそう言った。  
するとどうだろうか？

そこにはみるみる顔が赤くなる翔鶴の姿が……あれ？

あの……確かに赤くなつてはいるものの、両手で口元を押さえて潤む瞳で俺を見つめ返す翔鶴がいるんですが……

予想とは違うんですが？

もっとこう……なんだ、恥ずかしかつてくれたら冗談としては大成功なんよ？

そうこうしている内に翔鶴は胸に手を当てて、一呼吸する。

そして何かを求めるかのようにジツと俺を見つめ返すと

「私で……いいんですか？」

眩くような小さい声でそう確認してきた。

その声色はどこか甘く、そうであつて欲しいと願うかのように。

妹の瑞鶴に似て豊満なお胸様がグニユリと形を変えるのも厭わず、まるで何かを抑えつけるかのように両手で胸を押さえる姿は何処か必死に堪えているようにも見えた。

「瑞鶴でも、一航戦の方々でもなく……私を、私を選んでくれるんですか？」

翔鶴の再度の問い掛けは熱が籠もっていた。

そうであつて欲しい、ただそれだけを望む言葉。

ここまでされて俺もこれ以上は冗談なんて言えない。

彼女の覚悟を決めたその姿勢に悪巫山戯なんかで答えられないだ

ろう。

そんな考えをしていたら、頬に当てていた手を翔鶴に両手で掴まれた。

そして彼女の次の行動に俺は度肝を抜かれる事になる。

「ここ、触ってください……………すぐく、うるさいくらい鳴ってるんです」

なんと彼女は掴んだその手を……………自身の心臓の位置に持って行って押し付けた。

「っ!?!翔鶴……………」

「ほら、自分でもビックリしてるんです。指揮官が選んでくれたって……………そう思ったら止まらないですよ」

柔らかさと温かさの中で確かに触れる激しい鼓動。

その空を思わせる瞳からポロポロと涙を溢しながら、晴れやかに笑う翔鶴はとても美しく見えた。

「こんな事して卑しいとか、はしたない娘なんて思われるかもしれない。でも……………でも指揮官になら……………私……………私は……………」

俺は……………彼女の覚悟を見誤っていたのかもしれない。

こんなに必死な翔鶴の姿は初めて見る。

先輩である一航戦……………特に赤城をからかうような陽気さを持った、しかし妹の瑞鶴に自慢される程の立派な姉としての姿を持つ彼女が、ここまで俺を想ってくれていた事を。

そして知らなかった。

いや、知らないだけで、知らないという事に甘えていただけだったという事を。

彼女だけじゃない。

彼女以外にもこうした想いを持った娘達が何人も居たではないか。

また無自覚に彼女達を傷付けるような真似をした。

「指揮官?」



「……………ああ」

翔鶴の問い掛けについ生返事で返してしまおう。  
それを見ていた彼女は、悲しげに目を伏せると

「やっぱり指揮官は……………誰も見て下さらないのですね」

そう言っつてスルリと俺の腕の中から抜け出てしまった。  
引き留めなくてはいけない、そんな思いがあった。

しかし、翔鶴のその言葉に身体が動かない。

哀しんでいる翔鶴を引き留めないといけないという思いと、無責任な事をして更に傷を付ける事を恐れる感情がせめぎ合う。

俺に出来たのは悲しげに微笑む翔鶴が、目の前に座り直したのを見届けるだけ。

なんと不甲斐ない。

なんと情けない。

それでも俺は男なのか？

苦しむ彼女を助けられないし、その原因を作った俺がどうしても腹立たしい。

そんな複雑な感情を抱えながら彼女を目で追っている……………

「……………んむっ?!」

「ん……………ちゅう……………ふはあっ……………キス、しちやいました」

翔鶴にいきなり唇を奪われた。

舌を絡める深く激しい口吻。

俺の首に手を回し、縋り付くように抱き着いて艶めかしく吸い付く翔鶴に、俺はただの身動きせずに驚くばかり。

そんな俺を尻目に抱き着いたままの翔鶴はそう言っつて淫靡に微笑む。

口の端から伸びる唾液のアーチを、指で掬って舐めとる仕草はまるで淫靡のように。

「今回はこれで勘弁してあげます。でも……………次はしっかりと続きを最後まで……………ね？」



あまりの息苦しさに着物の胸元を緩める。  
それでもまだ足りない。

でもまだだ、まだ喜ぶにはまだ早い。

「まだ……キスしただけ」

あの甘美な感触、味わったことの無いような幸福感に包まれたキス。

自分だけの一方通行な想いのキスだけでこれなのだ。

もし、もしも指揮官が本当に自分を求めてくれたら？

「……………!??!」

それだけで意識が遠くなってしまった。

想像だけで。

チカチカと星が瞬くような感覚に気をやってしまいそうになるが、まだ本番じゃない。

その身を焦がすような熱と快樂に何処かに意識を飛ばしつつ、なんとか手を伸ばす。

その先にあるのは……………指揮官が食べ終わった食器が置いてあるお膳。

この時をどれほど待ち焦がれた事か。

朝食を作つて欲しいと言われた時に、既に考えていた事。

大事な妹の瑞鶴にすら秘密にして進めてきた計画。

ゆっくりと震える手でお膳から……………指揮官が使っていた箸を一本手に取った。

そして……………その先端を……………伸ばした舌で触れる。

一舐め、たった一舐めした。

その瞬間、ゾクゾクとした背徳感と興奮がその身を襲う。

いや、実際に身体は震えている。

振り切れた感情が暴走して身体のコントロールを手放そうとする。

こんなの重桜寮の地下オークションで、大枚叩いて買って手に入れた指揮官のハンカチを胸いっぱい吸い込んだ時以来……………いや、あの時以上の幸福感に包まれていた。

「も、もつと……………もつといっぱい……………指揮官」

呼吸が早くなりながらも、もう一度味わおうと浅ましく舌を伸ばす。

こんな変態的な自分を指揮官が見たらどう思うだろうか？  
軽蔑するだろうか？

それとも興奮してこの身を貪り尽くすのだろうか？

しかし、もう自分では止められそうにない。

「んん……ちゆる……んあ……はあ……」

本当はあのまま襲って欲しかった。

獣のように本能だけの存在になって一つになる。

それがどれだけ自分を満たして充足感を与えるのだろうか？

たった一本の箸をはしたなく味わうだけで、ここまで乱れる自分が

どうなってしまうのか期待する欲望が胸に溢れる。

「ぴちや……ちゅう……」

舐めるだけでなく、吸い付いて味わう。

イケナイ事が情欲を燃え上がらせて想像を膨らませていく。

今の指揮官の眼には……心にはまだ誰も写っていない。

そんな真つ更な指揮官の心を独り占めできたらどんなに嬉しいだろうか？

ろうか？

様々な誘惑を跳ね除け続けた指揮官の理性にだって限界はある。

今回はその限界を少し垣間見る事ができた。

「瑞鶴には悪い事をしたかな……でも」

味わい続けた箸を、透明な液体で糸を引くほどに堪能したソレを胸

に抱きかかえてクスリと噛む。

あんなに守りが硬いようで何処か隙が見える指揮官を見たら

……欲しくなってしまう。

「センパイ達の事を言えませんね……」

そうは言いつつも釣り上がる口の端を抑えられない。

それもこれも指揮官が悪いのだ。

こんなにも乙女心を掻き乱してその気にさせるのに、そのくせ最後

までしてくれない生殺しを続けるから。

ドロドロに溶けそうになるほど優しく甘やかしてしまう毒。

しかもその毒はもつとその身に浸したいと願う程の中毒性が出るのだ。

「ごめんね瑞鶴、お姉ちゃん……………我慢できなくなっちゃった」

胸に抱くソレは甘美な毒。

もはや抜け出す事が出来ないほどに深みへと誘われた美しき鶴姉  
妹の姉は……………

どこか歪んだような、壊れたような笑みを浮かべて一人嗤い続けるのだった。

## 第45話 汗と筋肉とポネキにインディちゃん

指揮官で……………

「きやく♡インディちゃん♡かゝわくいく♡ルームランナーで汗を流しながら、筋肉が凄い盛り上がりて最高に切れてる指揮官の隣で走るのがかわいいよ♡こんなに可愛いなんてお姉ちゃん幸せです!! 走っている時にリズムに合わせてフルフル震えるお胸なんて最高だと思いませんか指揮官? 今日のインディちゃんは黒のスパッツにスポーツブラでタンクトップだから可愛いお胸とプリンとした形の良なお尻が見放題なんですよ? しかも指揮官と運動したいからって買ったばかりのおNEWなんです!! こんなの興奮しないわけ無いですよ? 指揮官もいつものトレーニングウェアじゃなくて短パンにタンクトップだからインディちゃんとお揃いで良い感じですね!! 鍛えられた筋肉が動いて汗が流れてるのも良い男っぷりに磨きがかかってます!! やっぱりとインディちゃんみたいな可愛い子を10人……………ううん、10ダース作りませんか? 私はバッチコイですよ? 初めはインディちゃんに見られながらインディちゃんと一緒に3人でするのが私としてはベストなんです♡指揮官に私の初めてとインディちゃんの初めてを全部、うん、前も後ろもお口も手も胸も全部付けちゃうお買い得ですから!! 私もインディちゃんもハッピーでおめでたで、そのまま同じお墓に入るまでの人生設計は如何ですか? というか指揮官とインディちゃんの汗の香りが私の鼻に入って……………うっ……………ふう……………」

「お姉ちゃん、うるさい……………ごめんね指揮官」

「苦労してるんだな……………」

トレーニングルームのルームランナーでユニオンの巡洋艦 インディアナポリスと一緒に走っていたら、妹ガチ勢な姉のポータランドに凄い絡まれ方をしております。

インディアナポリス、彼女の姉の言うところのインディは褐色の肌に緩くウェーブのかかった薄紫の長い髪の背が低いのにスタイルの

良い子で、右が青色、左が金色の珍しい色違いの瞳を持ち普段は大人しい性格であり喋らない静かな娘だ。

逆に色々とうるさい姉のポートルランドは、妹と同じ薄紫の長い髪をポニーテールにして青色の瞳を持っており、妹とは違い白人寄りの白い肌で妹よりも更にスタイルが良いのである。

ちなみに、二人共かなり背は低い………というか俺の胸より低いくらいじゃないか？

そんな二人と一緒にルームランナーでランニングしていたのだが、休憩に入ったポートルランドにマシガントークでそう言われてゲンナリする俺とインディアナポリス。

………というかサラツととんでもない事を口走って賢者タイムに入っていないかアイツ？

「ごめん指揮官、もう走る気分になれない」  
「そうだな、休憩するか」

脱力してしまつてトレニングどころではなくなった俺達は、ルームランナーから降りてポートルランドの下へ向かう。

するとそこにはヘブン状態の彼女が膝をガクガク震わせ………というか全身をビクビクと震わせ、ダラしないアへ顔を晒して口からヨダレを垂らし、その場に立ち尽くしていた。

………どんなに美少女でもこれは酷過ぎる。

残念すぎるだろコレ。

というか汗の匂いだけで達するとか………上級者過ぎないか？

さすがの俺でもちよつと……いや、かなり引くわ。

変態性癖を持つ美少女が可愛いなんて言葉は二次元まで。

改めてそう思わせる光景だよ。

ため息を吐くインディアナポリスと一緒に用意していたドリンクを手を取って飲んでいると、ようやく向こう側から帰ってきたポートルランドがニコニコ笑顔で近寄ってくる。

ちなみに今の彼女も一緒に運動していたので今日の服装は、青のリーブニットとかいう肩の所に細い紐を掛けるような種類のタンクトップにこれまたエグい短さの鼠径部とお尻が半分出てるようなランニ

ング短パン。

……ひよつとしてコイツ下着着けてないのではという疑惑があるぞ？

「あ、指揮官。すぐに始めますか？上はニップレスで下はハーフバツクの2wayストレッチローライズショーツだから脱がせやすいですよ？横にずらして着たままするのもマニアックで良いですね♡」  
「お前はいったい何を言っているんだ」

にこやかな笑みで言うことじゃないと絶対に言える。

お前の妹なんて飲んでいたドリンクを嘔き出して、顔を真っ赤にしなから咳き込んでるんだが？

痴女かコイツ？

いや、何故かポートランドの好感度がバグっている事はこの母港に着任した時から知っていたが、クレイジーシスコンなコイツの妹と同列の好感度つてちよつとヤバイ気がする。

「えー？指揮官、そこは男らしく全部頂きますつてするところじゃないんですか？ほらほら、インデイちゃんと私の姉妹丼ですよ？身体を動かしたらムラムラしてきてこの胸とか揉んだりしませんか？あ、インデイちゃんのお胸の方が良いですか？」

「え……あう……し……指揮官？」

「いや、しないぞ？何故胸を隠すんだインディアナポリス……いやいやいやいやいやいや!!違う!!待て!!待つんだインディアナポリス!!胸を押し付けようとしなくていい!!」

隙あらば妹と姉妹丼を勧めるポートランドに、真っ赤になり恥ずかしそうに俯きながら俺の両手を掴んで胸に押し付けるインディアナポリス。

カオス過ぎるぞこの空間!!

いや、確かに俺も胸の事でデリカシーの無い事を言ってしまったかもしれない。

だが、お前まで暴走したら誰がこの状態を打破できるというのだ!!



「……指揮官、どう？私の胸……お姉ちゃん程大きくないけど……」

「きゃ〜♡おっぱいの大きさが気になってるインディちゃんもか〜わ〜い〜い〜♡」

「お前は黙っててくれ……頼む」

事態が一刻一刻と悪化しているのを感じる。

布越しとはいえ、つい先程まで運動していて少し汗ばんで熱を持ち、フニフニとした弾力性を与えてくるお胸様の感触を俺の両手が伝えてくる。

これは素直な感想を言えばいいのか？

例えば……そう、もつと触っていたい不思議な感触だな。とか？

……いや、それはただの変態だろう。

「ほらほらほら!!指揮官、インディちゃん感想を求めてますよ？こんなに可愛いインディちゃんのお胸は柔らかくて触り心地最高ですよね？もう、素直に言っちゃってくださいよ♪このまま私の胸も触って違いを感じちゃいますか？私はバッチコイですよ♡」

「ポートランドは本当に少し静かにしてくれ。そしてインディアナポリス、無言で涙ぐまないでくれ……頼む。感想を言う。感想を言うから、だから泣かないでくれ……」

いったい何故俺はトレーニングルームでこんなピンチに陥っているのだろうか？

変態的な内容のマシニングトークで悪魔の囁きをかますポートランドに、羞恥に赤くなりながら涙を持って胸の感触についての感想を催促するインディアナポリス。

こんなの全身のマツソーに相談する暇すらないぞ……

なんで俺は毎回戦場でもない安全な後方である筈の母港で絶体絶命に陥っているんだよ……

いったいどうすればいいのだ……

「気持ちいい？気持ち良くない？」

「えつと……だな……」



クレイジーシスコンだから妹をオカズにするのは知っていたが、俺の何処にそんな風に惚れ込む要素があった？

というか女の子がオカズオカズって言うんじやありません。

俺も男だからちよつと反応しちゃうでしょうが……………

まあこれだけ好意を向けられる……………向けられている方向性はサツパリ分からののだが、たぶん良い事なんだろう。

だけど確かにこの姉妹とはラファイー達初期艦の後に、ロングアイランドを除けば3番目くらいに長く一緒に戦ってきた仲ではあるんだよなあ……………

ポートランドの奇行にそんな考えで現実逃避する。

それがいけなかったのだろう。

「あ、指揮官。指揮官だけオカズが無いのは不公平なんで……………はい、どうぞ♡」

「おまつ!？」

「……………むう」

笑顔でそう言ったポートランドは、外すのを忘れてインディアナポリスのお胸様に触っていた右手を手にとって……………ニツプレスしか付けていない生乳の谷間にそのまま突っ込んだ。

その行為に妹からは不満の声が出た様子なのだが、それも好物とばかりにとろける笑顔を浮かべるポートランド。

一方その頃、俺は生乳に挟まれた前腕の感触に脳みそがハングアツプ寸前まで持っていていかれていた。

お、俺の……………俺の前腕に集中するマツソーが……………前腕屈筋群と前腕伸筋群がπとπに挟まれて大変な事になってやがる!!!

「はい指揮官♡ギュー♡ギュー♡」

「ほわっ!？」

「むううう……………」

や、止めるんだ!!

俺のマツソーが……………πに包まれるだけじゃなくてその柔らかい質感にギューギューと圧される感触に蕩かされて……………

両手で寄せるな!!

スリスリと柔らかい感触を俺の腕に刷り込まないでくれ!!

ポートランド!!

妹を見てみる!!

なんか頬を膨らませている抗議してるぞ!!

……可愛いな。

そうじゃなくて……

危ねえ……俺も非常事態過ぎて頭がポートランドになるところだった。

だがそのお陰で助かった。

怒涛の展開過ぎて俺の主砲はまだ仰角を刻んではない。

……シチュエーションが違えばヤバかったな。

「指揮官……んっ」

「インディアナポリス？」

「わお、インディちゃんやるねえ」

姉の所業を見ていた妹の方が、自身の胸に押し当てていた俺の左腕に絡み付くように抱きしめると……そのまま俺の腕にキスをした。

え? どういうこと?

ポートランドは目を丸くして驚いてるけど、なんか意味があるのか?  
?

俺はそういうのに関して全くの無知なんだか?

「ああ、インディちゃんがそんな事するから私も耐えられないよ。」

指揮官……ちゅ♪」

「お姉ちゃん!!」

「えへへ♪ごめんねインディちゃん♪」

「……何がなんだかサッパリだ」

俺の腕で生πスラツシユしたままのポートランドは、妹に対抗するかのように俺にすり寄ると……俺の胸にキスをする。

いや、マジで分からない。

その部位にキスをする事に何らかの意味があるのだろうが、その意味を知らない俺からすると不可解な行動過ぎて全く読めないのだ。

だがインディアナポリスが珍しく激情のままに姉へ怒りを向けているのを見るに、何らかの深い意味合いがあったという事なのだろう。

「うーん、インディちゃんに怒られちゃったからここまでにしようかな」

「もう、あんな事するなんて……………」

「ごめんねインディちゃん。という訳で指揮官へのオカズの提供はここまでです♪今日の夜に使ってくださいね?」

俺がどんな意味があったのか頭を悩ませて、聞こうと口を開く前に姉妹は俺の側から離れていった。

そして……………」

「私、本気ですから♡」

後ろで手を組んだポートルランドは前屈みになりながら、そう言って俺に向かってウインクする。

それを見ていたインディアナポリスは先程よりも更に頬を膨らませて

「むうううう!!お姉ちゃんのバカ!!」

そう言い捨てて走り去っていった。

いや、本当になんなんだ?

「あ、やっちゃったかな?指揮官、また一緒にトレーニングしましょうね?ごめんね〜インディちゃん!!」

「お、おい……………」

困惑する俺を置いて、ポートルランドも妹を追いかけて出て行ってしまった。

……………残されたのは頭に宇宙猫が浮かぶ俺ただ一人。

「……………走るか」

まるで嵐にあったかのような怒涛の出来事に、俺は考える事を止め

てマツソーとの対話に戻る。

とりあえず、夕張印の俺専用ルームランナーへと足を進めて最高速度で設定する事にしよう。

間違っても腕と手に残る二人のお胸様の感触が、今になって俺の主砲を持ち上げてきたからとかそういう意味じゃないから。

本当だからな!!

~~~~~

「なんであんな事をしたの?」

「え〜? インディちゃんがそれを言うの〜?」

ケラケラと笑う私へ問い詰めるかのように話すインディちゃん。

二人揃って指揮官にキスをしたけど、キスをした場所がどうにもインディちゃんにはお気に召さなかったみたい。

こういう表情もまた可愛いなんて思うのは姉としての当然の感情なんだけど、今はインディちゃんの問いに対しての答えを言わなければならぬのです。

「う〜ん、やっぱり本気、だからかな? インディちゃんだってそうでしょう?」

「で、でも……お姉ちゃんのアレは……」

「やっぱりインディちゃんは可愛いなあ♪」

「ううう……」

私の答えに狼狽えるインディちゃん可愛い!!

そう思い、ギューっと抱きしめた。

インディちゃんは頬を赤く染めながらモジモジとしているけど、あの時の大胆なキスは本当に勇気を振り絞ったんだと思う。

だって………異性への腕へキスすることは、貴方に恋をしています

す」という意思表示なのだから。

ソレを指揮官が知っているかは分からないけど……たぶん知らないんじゃないかな？

こんな乙女心全開の意味なんて絶対に知らない。

でもそんな頑張るインディちゃんは可愛くてしようがない。

うん、可愛いのは正義だから問題ないね。

やっぱり普段のインディちゃんも可愛いけど、指揮官に必死にアピールする乙女なインディちゃんもつとつと可愛い!!

それこそ写真を撮って額縁に飾っておきたいくらいに。

残念なのは指揮官がそれに気が付けるほど感が鋭くない事。

薄々気が付いている部分はあるみたいだけど、それでもまだまだこの母港に在席するKAN—SEN達の想いの“重さ”に気が付いていないみたいだし……

まあそこはこれからのアプローチしだいかなあ？

「インディちゃんはやっぱりあの日から？」

「え？」

急な話題の転換にキョトンとした表情のインディちゃん。

やだ、私の妹が可愛過ぎるんですけど？

心のフィルムにその表情を焼き付けながらも努めて笑顔で愛しの妹に聞いてみる。

「ほら、指揮官を好きになったのはやっぱりあの……初めて出逢った日なの？」

「う、うん……もしかしてお姉ちゃんも？」

「そうだねー、私もあの日かな？」

「……………そうなんだ」

そう、あの日。

あの日が無ければ私達姉妹は指揮官に、ここまで惚れ込むことは無かったかもしれない。

それは……………この母港ができるよりも前のお話。

あの日は何の変化も無い哨戒任務のはずだった。

私とインディちゃんは二人でユニオン近海の哨戒を行い、セイレーンが攻めて来ないか見て廻るだけの簡単なお仕事をしていた筈だったのだ。

長い時間の航海を予定していたので、私達二人は艀装ではなく、艀体を呼び出して進んでいた。

最初に異常が起きたのは、日暮れ時から少し過ぎた夜の闇が水平線に差し掛かった頃。

「きゃあ!？」

「インディちゃん!!」

私の少し後ろを航行していたインディちゃんの艀体が被雷した。

敵の姿は見えず、混乱する私にも魚雷が二本突き刺さる。

そしてそこで気が付いた。

敵は潜水艦だという事に……………

でも気が付いた所でどうすることも出来ない。

私達ユニオンの重巡洋艦には対潜装備は無く、しかも夜の闇が敵の魚雷の雷跡を隠してしまっているから。

そうこうしている内に次々と流れてくる魚雷。

母港へ緊急事態を知らせる信号を無線で飛ばして回避する。

被雷して海水が流れ込み、重くなった艀体を必死に振り回して回避するけど……………更に被雷。

「インディちゃん!艀体を……………艀体を仕舞おう!!」

「っ!!うん、分かったよお姉ちゃん!!」

もはや弾薬庫に当たって爆沈しないのが不思議なくらいのダメージを負った私達姉妹は、ここで艀体を仕舞って艀装を展開する事を思い付いた。

艀装展開状態なら小回りが効くし、艀体を出している状態よりも被弾面積を格段に減らす事ができる。

突然の攻撃でパニック状態になってしまい、正常な判断が出来なかった事を今更ながらとても後悔した。

でも今は……………インディちゃんと一緒に生き残ることを最優先に考えるのだ。

結果的に私達は助かった。

まともに動けず、いつ海中に沈んでもおかしくない状態になりながら。

夜闇が辺りを包み込んで側に居るインディちゃんが確認できる事以外は何も見えない。

あれ程執拗に流されていた魚雷はもう今はこちらに迫って来てはいない。

恐らく撃沈が確実なダメージを私達が負っていた事と、夜闇で照準できなくなつた事でセイレーンの潜水艦は去つて行つたのだろう。

暗い海の上で身を寄せ合い、いつ沈むか不安を抱えながら過ごすこの時間が……私達を苦しめた。

「大丈夫、大丈夫だからねインディちゃん。絶対に助けが来る筈だよ。それまで頑張ろう?」

「うん、頑張る。お姉ちゃんも頑張ろう?」

「可愛いインディちゃんの応援があれば頑張れるよ!!」

それが空元気である事は互いに分かっている。

でも声を掛け合わないと……不安に押し潰されてしまいそうだった。

そうして互いに声を掛け合つてしばらく経つた時……最初にソレを見つけたのはインディちゃんだった。

「あ……い、嫌あ!!」

「インディちゃん!?!どうしたの?」

取り乱すインディちゃんをしっかりと抱きしめながら、その指差す方へ視線を向けると……

そこには海面を滑るように進む三角形のヒレが見える。

ソレが見えた瞬間、私の意思に反して身体が震えてきた。

武装も使えず、動くことも出来ず、今にも沈みそうな私達の周囲をグルグルと回る三角形のヒレが3つ。

恐怖しない訳がなかった。

どうやら被雷した際に受けた傷から流れた血の匂いを嗅ぎ付けたサメ達。

血という美味しそうな匂いでここまでやって来たサメ達にとって、私達は格好の獲物に見えている事だろう。

「やだ……やだよ!!サメは嫌だ!!」

「インデイちゃん落ち着いて!!」

「あの時……あの時みたい……」

「インデイちゃん!!」

必死に呼び掛ける私の声がまるで届かない。

これは後で知ったのだけど、これはインデイちゃんのカンレキ……つまり船の記憶が関係したトラウマのような物だったらしい。

もはや制御出来ない感情の荒波に揉まれ続けるインデイちゃんを止める術は……私には無かったのだ。

「助けて!!誰か……誰か助けて!!」

「インデイちゃん!インデイちゃん落ち着いて!!大丈夫、大丈夫だから……っ!?!」

なんとかインデイちゃんを宥めようと声を掛け続けて、ふと気が付いた。

私の足が……とても冷たい事に。

「あ、ああ……お、お姉……ちゃん?」

「う、うそ……そんな……」

ゆつくりと、しかし確実に私は沈んでいつている。

それはもはや止めようのない事実だった。

「やだ!お姉ちゃん嫌あ!!沈まないで!!」

「……あ」

声が出なかった。

私に縋り付き、張り裂けるような叫び声を上げるインディちゃんをただ眺める事しかできない。

浮力を失った船は沈むしかない。

そんな分かりきった事が……私の思考を遮る。

このまま沈んでサメに食べられてしまうのだろうか？

KAN—SENは人とは違うとはいえ肉体を持っている。

それは生きてたままサメに食われてしまう経験をする事になる。

「あ……………ああ……………」

「お姉ちゃん！お姉ちゃん!!」

半狂乱のインディちゃんの声が私の呻き声をかき消す。

息が自然に浅く、早くなるのを止められない。

極度の恐怖と緊張に頭がおかしくなりそうだった。

過呼吸になり始めた私を今度はインディちゃんが力強く抱きしめる。

少しでも離せばそのまま二度と逢えなくなる、そう強く感じているように……………」

「ご、ごめんね……………ごめんねインディちゃん」

「ダメっ!!イヤだよ！諦めないでよ……………諦めないでよお姉ちゃん!!」

泣き叫ぶインディちゃんの涙を拭ってあげて……………私は既に海面に沈んだ自身の膝から下の冷たさをどこか他人事のように感じていた。

もはや助かる見込みは……………無い。

「……………ごめんね」

ヒュツとインディちゃんの息を呑む音が聞こえた。

絶望という言葉を表情にすれば、こんな引き攣った表情なのだろうか？

可愛い妹に絶対にさせたくない表情をさせてしまった私は……………姉失格だろう。

「……………助けて」

「インディちゃん？」

「誰か……………誰か助けて！お姉ちゃんを、お姉ちゃんを助けて!!」

もう大腿部の半ばまで沈んだ私を引っ張りながら、助けを求めるインディちゃんの願いが夜の孤独な海に響き渡る。

助からない。

それが分かっても叫ばずにはいられない。

そんな思いがインディちゃんからは感じ取れた。

何度も、何度も声を張り上げて助けを呼ぶ。

私を抱きしめながら強く強く叫び続けるインディちゃんを見ながら私は……………願った。

願ってしまった。

「助けて……………助けて!!」

聞こえる筈は無いのに。

気が付けば声に出してしまっていた。

情けなく、しゃくり上げながら声を震わせて涙を溢しながらその声を上げてしまっていた。

ボロボロで幼い子供のように情けなく震えながら願い乞う。

妹とまだ生きていたい。

叶わぬ願いと知りながらも……………そう願わずにはいられなかった。

『見つけた。任せろ、助けに来た!!』

それは臙装と共に壊れたと思われていた無線からの声だった。

突如として轟音と共に眩い光の矢が私達を照らす。

私達を囲むサメの群れに突き刺さるその光の矢は……機銃掃射。
ハツと顔を上げると、そこにはこちらに近づく一隻の小型船。
黒く塗装されているその船の船首からは、絶え間無く機銃掃射が続
けられており、私達からサメの群れを引き剥がそうとしてくれている。
る。

「よく頑張った！もう大丈夫だ!!」

船首で機銃を撃ちながら、その音に負けない大声でそう叫ぶその人
は……全身包帯まみれでボロボロの軍服を着た男の人だった。

よく見ればその船は旧式の魚雷艇。

しかし、その両舷に装備されている筈の魚雷は無い。

戦時下でいつセイレーンが攻めてくるか分からない状況下で、あま
りにも貧弱過ぎる装備だ。

しかし、それでも私達を助けに来てくれた事に感極まり、枯らした
と思っていた涙がまた流れ出る。

魚雷艇は滑るように私達の下へつけると包帯まみれの人が、そのま
ま私達の居る舷側へ走って身体を寝そべらせながらこちらに手を伸
ばしてきた。

「お姉ちゃんを!!もう持たないの!!」

「了解だ！しつかり掴まれ!!」

「あ……」

インディちゃんに促されてその人の手を握る。

力強く握られたその手を引かれて船に乗せられるまで、私はその人
の眼から視線を外せなかった。

だって……その人の眼差しは何かを失って、それでもなんとかし
ようと藻掻いているような……そんな目をしていたから。

「よし、次は君だ!」

「うん!」

そうしている内に今度はインディちゃんが引き揚げられる。

辛く苦しい二人だけの孤独な時間が終わった。

そう思えたら……声を上げて泣いてしまった。

そこにインディちゃんも私に抱きついてワンワン泣いた。

もう不安な事は無い。

ただそれだけで涙が止まらなかった。

「本当に良かった……緊急事態の信号を出した君達の捜索任務を任されて信号が消えた海域を捜索していたんだ。偶然、君達が助けを求める無線をこのポンコツが拾って、それで捜索範囲を絞って見つけれたんだ」

「そう言っただけで笑う包帯の人。」

嬉しそうに何度も頷く。

でもよく見るとこの包帯の人に巻き付けられた包帯は、シートか何かを無理矢理引き千切ってそのまま巻き付けたようにしか見えない。

応急処置にしてもあまりにもお粗末で、まだ治っていないであろう傷から血が滲んでいるのも見えた。

「誰が救難者を助けたんだ？大尉は操舵室で無線を聞いていた筈だし……って大尉!!いつの間にか此処へ？駄目じゃないですか!!まだ無理をしたら傷が……」

「副長か、二人に何か温かい飲み物を」

「自分は副長じゃないですよ……俺は代理です。大尉の副長はあの人が好きじゃないから……温かい飲み物だったらあの人が好きだったコーヒーが残ってます。もう誰も飲みませんし……それ、取つてきます」

「そう……か……すまん」

二人のやり取りで何となく分かった。

この人は大切な人を失ったんだって。

部下の人が離れていくのを見届けた包帯の人は、空を見上げて何かを堪えているようだった。

不謹慎にもこの様子を見ていた私は……何も知らないこの人傷ついた人を支えたいと思ってしまった。

部下から慕われて、この戦争で大切な人を失って、それでも足掻こうとするこの人を支えてみたい。

そう、思ってしまった。

そして後にこの出会いが運命であった事を私は確信する。

あの時助けてくれたあの人が、私達の大切な唯一無二の指揮官だった事に……………私は神に感謝した。

あの時から結構な時間が過ぎた。

これまでは支えたいと願い、指揮官を陰ながら支える事に徹してこの母港が出来た時だって遠征なんかも率先してやってきた。

でもね？あの日から指揮官が傷ついたままだつて知つたら……………私も自分の気持ちを抑えられなくなっちゃったんですよ？

本当はインデイちゃんと一緒になったら良いなんて考えてました。

でも……………もう無理です。

だって……………これでも私……………結構独占欲が強いんですからね♪

貴方に惚れ込んでしまった私の想い、どうか受け取ってくださいね？

第46話 天城(?)のお手伝い

指揮官です。

今日は大人しく書類仕事を頑張っております。

というか最近筋肉との対話をしていたら、何故かピンチになる事が多いので、今日は張り切って仕事だけをしていようと思っっている次第であります。

さて、修理用の資材の備蓄倉庫の目録は何処だったか……………

「ケホケホ…………指揮官さま、こちらをどうぞ」

「ああすまない。ありがとうな」

「わわっ?!こ、子供扱いしないでください!!」

「ははっ、すまんすまん」

「もう……………」

そうは言ってもなあ……………

そう思っつてつい頭を撫でてしまう俺は悪いのだろうか？

執務室で書類仕事をする俺と一緒にいるのは、重桜の戦艦 天城。

あのヤベンジャーズレットの赤城の姉であるが性格は冷静沈着、素晴らしいまでに冴えた頭脳を使って重桜陣営を影から支え続けた参謀役である。

身体が弱くなければ重桜の総旗艦となっていたとまで言われる程にとっても優秀なKAN—SENだ。

……………どこで姉と妹が違ってしまったのだろうか？

赤城と同じく栗色のとても長い髪で、やはり姉妹揃ってスタイルが良い……………というか普通にモデルでも真っ青なダイナマイトボディの持ち主である。

黒い着物に重桜の韻が入った帯を締め、赤い上着を着た優しいお姉さんな気質の彼女なのだが……………

今の俺と書類仕事をしている彼女は違う。

執務用の机と一緒に仕事をしているのだが、その天城は椅子に座る俺の膝の上に座っているのだ。

普通なら俺の主砲が暴発しようとして仰角を向こうとするのを止めるのだが、今の彼女にそんなリビドーを感じる事はない。

何故なら……今の彼女は睦月型のように小さく、というよりも幼くなってしまっているのだ。

原因は既に判明している。

またあの銭ゲバ緑猫がメンタルキューブを無断でちよろまかして研究し、思うように進まなかった事から痼癢を起こして謎レーザーで切断して中を見ようという暴挙に出た際……爆発した。

前回はベルファストが巻き込まれてベルちゃんが生まれてしまったというのに、明石が何故その歴史を繰り返したのかを考えると頭が痛い。

そのせいで、最近リトルシリーズが母港に増えているというのに。

そして忙しい赤城の代わりに日用品を買いに来ていた天城が、明石が売店に居なかつたので探しに店の奥へ入った事で爆発に巻き込まれたのだ。

「……………明石、生きてるよな?」

「どうしましたか指揮官さま?」

「いや、なんでもないよ」

「そうですか?」

振り返って不思議そうにこつちを見る天城に、曖昧に笑いながらそう言うって思考を断ち切る。

いや、決して、そう決して敬愛する姉をこんな事故に巻き込んだ明石に、ガチギレする般若や夜叉といった鬼よりも恐ろしい表情で連行して行った赤城の事を思い出した訳ではない。

明石が三味線になる程度で済めばいいのだが……………

「……………つと、これで今日の分の仕事は終わりだな」

「お疲れさまでした指揮官さま。お早いお仕事で天城もあまりお手伝いする事ありませんでしたよ」

「いやいや、一人で細かい所をしつかり見ていたらもつと時間がかかったさ。これも天城のおかげだな」

「それは良かったです! わぷつ、もう、子供扱いたくないでくださいよ指

揮官さま!!」

「ははっ、すまない」

「もう!!」

プリンプリンという擬音が付きそうな怒り方をする天城。

だがしようがないだろう？

だって褒められた瞬間にムフーって感じのもっと褒めて欲しいってオーラが出てたから、ついつい頭を撫でてしまったのだ。

褒めると目をキラキラさせてはしゃぐ幼い天城を見ると、なんかこう……もつと甘やかしてあげたい感覚が湧き上がってくるというか……

「そうだ、確か朝に貰った栗饅頭があったな」

「おまんじゅうですか!!」

「ああ、一緒に食べよう」

「はい!!」

甘い饅頭のお誘いに今日一番の笑顔で頷く天城。

うん、やつぱり滅茶苦茶甘やかしたい。

そう思いながら膝の上の天城を腕に乗せて立ち上がり、栗饅頭を仕舞ってある戸棚へと向かう。

これも子供扱いしているかと少し思ったが、当の天城は饅頭の事で頭がいっぱいなのかニコニコ笑顔のままでも言わなかった。

それどころかフサフサした九尾の尻尾が、俺の胸を撫でるように振られていて少々こそばゆい。

「……………ふふ」

「？」

「いや、饅頭は何処だったかな？」

不思議そうにこちらを見る天城を誤魔化すように饅頭を探し、特に指摘する事もなく俺はお目当ての栗饅頭を取り出してそのままソファの方へ向かった。

ちなみに栗饅頭が出てきた瞬間の天城の表情は、写真を撮っておけば良かったと後悔する程に期待に輝いた笑顔だった。

「それじゃ、いただきます」

「いただきますーはむっ……………ん~~~~♪」

ソファーに座る俺の膝の上に座った天城は、合図と共に両手で持った饅頭に勢い良く齧り付き、言葉にならない喜びを表していた。

主に尻尾で。

俺の腹を何度も何度も勢いのある振りが襲い、こそばゆくて笑いを堪えるのに必死だ。

それでも甘味を前に大きく口を開けることなく、一口ずつ上品に食べるのは育ちの良さ故か。

眉の所で切り揃えられた前髪やその愛くるしい容姿も相まってまるで人形のように可愛らしい。

なんとというか……………俺の父性を刺激する。

こう……………なんだ？

俺に子供が居たらこんな風に甘やかし過ぎて奥さんに叱られる……………そんな未来が見えそうな……………

そんな俺の考えを他所に、一生懸命饅頭をパクつく天城。

「癒やされるな……………」

「指揮官さま？」

「いや、なんでもないぞ？ほら、この饅頭も食べると良い」

「良いのですか!?ありがとうございます!!」

「……………やはり癒やされるな」

俺からさらなる饅頭を受け取った天城がそれに齧り付く。

満点の笑顔で食べる天城の何とも言えない可愛さに俺は、新車のヒーリングサロンに居るのではないかという錯覚を起こしそうだ。

……………だが俺の危機はまだ去っていない。

どういう事かという……………その、なんだ……………滅茶苦茶ムラムラする。

天城にリビドーは感じていない。

それは確かだ。

だが……………その前の出来事と今日の俺の状態が関係しているのだ。

それは……………天城がリトル化する少し前の時間から説明しなくてはならない。

今日は備品を入れ替えたり、ルーム内の機械のメンテナンスの為にトレーニングルームを使えない日である。

仕方なく母港の外周を走ろうと思っただらこの天城の事件で状況確認等をする為に走れず。

そして私室にある用具で軽く済ませようと思っただら……………私室前に大鳳が居た。

しかも隼鷹と二人で睨み合いをしているのだ。
厄介事の匂いしかしない。

俺は被っていた軍帽を深く被り直し、やれやれと首を降ってその場を後にした。

そんな訳で一切筋肉との対話が出来ない現在の状況は……………非常にムラムラが収まらないのだ。

だってよお……………大鳳も隼鷹も下着にネグリジエで立ってたんだぜ？

童貞魔法使いには刺激が強過ぎんよ。

あのまま私室に行ったら俺の主砲が最大仰角で二人に敵う筈ないだろが発動してたって。

ベットでびよんびよんするんじやあくってなつてたって。

それかベットで指揮官のリビドーを促すダンス（意味深）が行われていても不思議じゃなかった。

「クールに去るのがやはりベストだったな」

「くるる？」

「いや、独り言だ」

「？」

饅頭を食べ終わった天城が振り返って不思議そうに俺を見上げる。
そんな動作も可愛らしいのが本当に癒やされるわ。

……………でも大鳳と隼鷹が着てる意味あんのかっていうくらいスケスケのネグリジエに、大事な場所以外が全部紐な下着で立ってるのには目に毒過ぎた。

「な、なんで頭を撫でるんですか？」

「そうだなあ……………撫でたいからだな」

「ふえ？」

ああ、こんな情けない指揮官で許して欲しい。

だから今だけは、今だけはお前を愛でる事を許してくれ。

それもこれもムラムラしてる時にエロい格好で俺の前に現れた二人が悪いんだ!!

癒やし……………圧倒的な癒やしが俺の心を落ち着かせてくれるんだ。

「お辛いのですか指揮官さま？」

「本当にお前が癒やしだよ天城」

「むううう……………なんだかよく分かりませんが、指揮官さまがそういうなら特別に撫でるのを許します」

「ありがとうございます天城」

不満げではあるものの、何かを察したような天城の優しさが染み渡る。

こんなに嬉しい事はない。

俺は優しく丁寧に天城の頭を撫で続ける。

艶やかで指通りの良い綺麗な栗色の髪は、撫でていて本当に心を落ち着かせる効果を実感する。

……………髪を撫でるのがこんなに良いならば、この頭にある耳はどれくらい触り心地が良いのだろうか？

そんな疑問がふと頭を過ぎった。

フサフサとした柔らかそうな毛に覆われた三角のケモ耳。

重桜のKAN—SENはケモ耳に尻尾を標準装備している事が多い。

別にケモナーとかそういう訳ではないのだが、柔らかそうなその毛並みを見たら少し触ってみたくなってしまうのだ。

「なあ天城、その耳……………少し触ってみてもいいか？」

「え？」

「いや、とてもとても綺麗な毛並みをしているから少々触ってみたくなってる？」

「うーん、指揮官さまになら……特別にいいですよ?」

「おお、ありがとう。では早速」

突然のお願いに少し悩みながらも、こちらを見ながらふんわりとした笑顔で了承してくれる天城。

そして天城が前を向いて耳を触りやすくピンツと立ててくれたのを見て……付け根の部分からゆっくり指でなぞる様に触れていく。

「んうっ!」

「おお、柔らかくて指ざわりが良いな」

「はうっ!? つあ……んん……はあ……」

「ここはこんな風に……凄いな」

「こんなの……あう……何か……何かキチャウ……だ、だめ

なのに……ーっ?」

あまりの触り心地の良さに感心して一心不乱に両手で天城の両耳を触り続ける。!!!

耳の裏を優しく揉みほぐすように触ってみたり、その縁から先端までゆっくりと扱ってみたり。

耳の内側の綿毛にも触れて、耳の中に指を入れないように気を付けながらも大胆に触りその気持ち良さを堪能していく。

初めて触る感触に溺れていたと言ってもいい。

それはまさにずっと触っていたいと感じられる魔性を秘めていた。

どれぐらいの時間をそうして過ごしていただろうか?

触るのに夢中で時間を忘れてしまっていた。

気が付けば感じていたムラムラも何処かへすっ飛んでしまっている。

いや、本当に凄いなコレは。

また筋肉との対話が行えない時にはお願いしたいくらいだ。

そう思い、天城にお礼を言おうとした。

そう、言おうとしたのだ。

耳から手を離れた瞬間……天城にその手を握られた。

「天城？」

「……………アハ♪」

その囁い声はとても幼い子供が出す声とは思えなかった。

驚く俺を他所に天城は、俺の膝の上でこちらに向くように足を開けて跨がるように座り直す。

そして、俺の両手を自身の耳に当てると

「はああ……………もつと……………もつとお願いします指揮官さま♪天城は……………天城はこんなの知りません♪もつと教えて下さい♡ほら、早く早く♡」

妹である赤城を思わせる淫靡で危険な表情を浮かべて囁いていた。

俺はいったい何を目覚めさせたのだろうか？

ただ耳を触っていただけなのに……………

暴走状態とも呼べる今の天城は、その身をくねらせながら俺が耳に触れるのを今か今かと待ち望んでいる。

熱を孕んだ吐息は早く浅く、赤く染まる頬は緩み更に淫靡さを増しているのだ。

ケモロリが発情してるとかエロくない？

しかもとびきりの美幼女が身体を擦り寄せながら上目遣いにおねだりとか……………

落ち着いてきた筈の主砲に熱と硬さが増していつてしまうだろうんなの。

俺は天城に促されるままにまた耳を触る。

すると天城は待つていたとばかりにその身を震わせて、自身の両頬に手を当てながら恍惚の表情を浮かべていた。

ダラしなく開いた口からは唾液と、可愛らしい赤く小さな舌が出てきて脱力寸前である事が分かる。

こんなのただ一匹の雌だと言われても仕方がないような乱れ方だ。触る部分を変えるとその度に跳ねる身体は、もはや本人の意思を全

て手放しているといつてもいい程に暴れまわっている。

まるでヤバイ薬でもキメたかのよう乱れっぷりだ。

誰がこんなエロい構図を想像できただろうか？

「ふあああ♡……ふー……ふー……もう少し……もう少しでまた……あつ♡……そこですう……しきかんさまあ……そこがいいですう……」

なんとも可愛いおねだりだ。

人形のように整った顔を喜悦に歪ませて、ソレを一心不乱に感じ取るうとする姿は……俺の嗜虐心を刺激してしようがない。

どうやら天城は親指で耳の内側の先端からゆっくりと、綿毛の生える部分に向かって撫でられるのが気に入った様子である。

それを繰り返し返せば顔を仰け反らせて白く柔らかそうな喉を見せながら、幼く可愛らしい甲高い声が執務室に更に高く響き渡らせるのだ。

この頃になると俺も段々要領が掴めてきたので、欲しがりさんな天城を尚更激しく攻めたてる。

「あつ♡あつ♡あつ♡はげしっ♡はげしすぎます、しきかんさまあ♡だめ……だめえ!!……またくる……キちゃうよお……あ……」

小さい身体をピツツと反り返らせた天城は、舌も唾液も出し続けていた口を大きく開いて目を見開く。

そしてそのまま俺の胸に脱力してしまった。

抱き起こせばその目は焦点が合っておらず、蕩けた表情を浮かべながら時折身体を震わせて余韻に浸っている。

こんなに可愛らしいのにエロい。

そんなロリコンというモノについて悟ってしまう瞬間だった。

……落ち着け俺。

こんな思考ただの変態だ。

というか何してんだ俺。

ついムラムラつときてヤツちまったけど……………これどうしよう(震え声)

もしかして婦女暴行罪に入るのかコレ?

俺はただケモ耳を触って癒やされようとしていた筈なのに……………

何故だ……………何処で間違えた……………

「ど、どうする……………」

思わず口から漏れる焦りの声。

ケモ耳美少女の耳を触っていかかわしい事をする指揮官。

明らかに犯罪臭しからないのだが?

ああ……………どうすればいい……………どうすればいいのだ……………

マツソーよ……………マツソー神よ……………俺を……………罪深き俺はどうすれば良いのでしょうか?

「しきかんさま♡」

「っ!?!……………天城?」

動揺して執務室内に視線を彷徨わせていた俺に、天城が味を知って蕩けてしまったような声で呼んできた。

彼女は両手を胸元に当て、色気すら感じさせる笑みを浮かべて俺に囁いてくる。

「もつと……………もつといっぱいください♡あまぎをこのままめちやくちやに♡……………ここにはあまぎと……………しきかんさましかいませんから♡」

それは悪魔の囁きだった。

期待した笑みを浮かべて身を震わせる天城の目から俺は視線を離せない。

まさに捕食者でありながら非捕食者という矛盾した存在を今、彼女は体現していたのだ。

もはや逃れる術は残されていないのだろうか？

我慢していたムラムラは、彼女の乱れる艶姿を見て最高潮に達しようとしている。

天城の顔がゆっくり焦らすように近づいてくる。

唾液に濡れて輝り、柔らかかそうで薄い桜色の唇が俺へと向かってくる。

たぶんこれを受け入れたら俺は……後には引けなくなるだろう。そのまま貪り散らかして彼女の全てを奪い尽くすまで止まらない事になる。

それが分かっているながら……俺の身体は動かない。

我慢し続けていた俺の身体は、筋肉との対話すら行えないこの極限状態に限界を迎えようとしているのだ。

両腕が彼女の身体を抱きしめてしまおうのを止めるのが今出来る最後の砦である。

それだけじゃない、天城のキスを受け入れようと下がり掛ける頭を胸鎖乳突筋や斜角筋、肩甲挙筋に頸板状筋に力を込める事で止めているのだ。

これ以上はもはやどうすることも出来ないという詰みに近い……いや、詰みだった。

「出来たにやーーー!!!天城を元に戻す装置が出来たのにやーーー!!!!」

「良くやった明石!!!なんていいタイミング……じゃなくて良くやったぞ、うん」

「……もう少しでしたのに」

「んにゃ?どうしたのにゃ?」

それはまさに天からの救いだった。

ノック無しにドアを勢い良く開けた明石。

その瞬間、俺はその詰みの状態からの呪縛から解き放たれたのだ。とつさに反応した身体は、天城を抱きしめようとしていた手を彼女の頭を撫でる行為に変わり、キスに応じようとしていた頭は背筋を伸ばす事で回避した。

いまいち状況を明石は飲み込めていなかったもので、しきりに首を傾げているが、俺にとっては本当に救いの神。

今度売店に行く時はしつかりダイヤを落として行ってやろう。

いや、本当に危なかったマジで……………

その後天城は明石の装置で見事に天城とリトル天城に別れたのだった。

あの猫マジで一度三味線にしてやろうか……………

~~~~~

「コホコホ……………もう少しでしたね」

「そうですね。あと少しでした」

二人の天城は自室で卓袱台を挟み、互いに向き合いながら淹れたてのお茶を飲みながら妖しく嗤う。

そこに意思の齟齬はなく、ただ同じ想いと願いだけが存在した。

指揮官の欲望を解放する事。

ただそれだけがこの二人の天城の願い。

筋肉や仕事で我慢する指揮官の溜まりに溜まった欲望は、どれ程のものか自身の他者より少し回る程度の頭では想像つかない。

しかし、確実に溜まっているソレは……………今回の策でかなり表面化しそうではあったが失敗してしまった。

妹の赤城に絞りに絞られた明石が、想定を越えた仕事ぶりを発揮した為に計算が狂ってしまったのだ。

あと少し……そう、あとほんの少しでも明石の仕事が遅れてくれれば良かったのにと思わずにはいられない。

「しかし、よく分かりましたね？幼くなっても私だという事ですか」「はい、赤城が私に記憶が残っているのか確認する為、この部屋につれてこられた時に、置かれていた日記を読ませて頂きました。そこに記された文章のちよつとした不自然さで分かりましたよ……暗号化された文字を読み解くのはとても楽しかったですね♪まさか日記が幼くなった私に対して、大きな私からの作戦指令書となっていたなんて誰にも予想できないでしょう」

クスクスと嘲笑い合う二人。

そう、何を隠そう今回の騒動は仕組まれた物だった。

秘密裏にキューブを用意し、それを自分が流したと分からぬように第三者……ここでは怪しまれないように赤城に偶然見つけた体を装いその管理を頼み、赤城であれば母港の物資や貴重な品を倉庫番である明石に渡すのを天城は知っているので、後にコツソリ明石にカメラをかけるようにあのキューブはその後どうしたのか確認したのだ。

その時の慌てようですぐに確信できた。

元々キューブに対して並々ならぬ興味を持つ明石が、偶然発見された誰の物でもないキューブを見ればどう思うか？

商売だけでなく研究意欲の高い明石の事だ、元々無かった物だからバレないと盗みを働く可能性がとても高く、そしてそれは的中した。

後は明石の研究がどこまで進んだかを確認して指揮官を取り巻く環境の変化を記したスケジュールをチェックしていただくだけ。

そうすれば指揮官の限界を迎えようとする時期を確認しながら、効果的に欲望の開放を行えるようになる。

あのロイヤルのメイド長の幼い姿をしたベルちゃんや他のKAN—SEN達のリトルと呼ばれる存在……つまり指揮官に対して普段とは違う幼い姿であれば彼の普段は聞けない事や知らなかった面について触れる事ができるのだ。

もしも記憶が継承されていない事を懸念して、日記（指示書）を保険として用意しており、全てを予測、保険まで用意した用意周到で自分の性格をしっかりと把握している天城だからできた作戦だった。

そう計画しての行動だったのだが……………

「予想外だったのは指揮官様の手淫で完全に理性を飛ばしてしまった事ですね」

「あれは耐えられるものではありませんでした」

その場面を思い出し、二人して熱を孕んだ吐息を出す。

あまりにも情熱的で深く、そして優しさを含みながらも激しさを混在させるあの触り方が、官能的過ぎて天城の理性を飛ばしてしまったのは仕方のない事である。

しかし、一方で自身の推論が間違っていない事を確認する事ができた。

「明らかに私達の耳に癒やしを求めている様子でしたね？」

「ケホケホ……………筋肉にも仕事にも頼れない。そんな時に縄れるモノを用意する」

「そうですね……………相応しいモノを御用意できれば……………」

そうして二人は口の端を吊り上げて嗤う。

溺れさせればいい。

全てを忘れる程に溺れさせられる欲望の捌け口を用意する。

筋肉や仕事は個人で完結してしまう事が多い。

それは己を追い込む自分との戦いなのだから。

しかし、それではいけない。

それではいずれ耐えられなくなってしまうのだから……………

そうなる前に、傷ついて頑なに心を広げない彼への荒療治。

自ら急進派に属してその音頭を取り、大切な妹にすら教えていない計画の数々を頭の中に思い浮かべては実行可能な物をリストアップしていく。

全てはただ一人愛する御方のために。

二人は揃って居室の窓の外を眺める。

その視線の先は母港にある指揮官の私室。

「身も心も全てを捧げる」

「そう御伝え致しました」

「貴方様が硬く閉ざし続けるのなら……ここらから私を……この天城の全てを使って御救いさせていただきます」

怪しく囁う九尾のKAN—SENが二隻。

その笑みは妹の赤城と瓜二つである事はその夜の月と星々しか知らないことであった。

## 第47話 エレバスとテラーとハロウィン

指揮官です。

今日はハッピーハロウィンですね。

母港でもお祭り騒ぎになっております。

そんな中でも筋肉との対話は欠かせません。

現在母港の私室で筋トレの王道であるスクワット。

全身の筋肉の支えとなる屋台骨な脚の筋肉と対話中ですよ。

「4833……4844……4855……」

空気椅子の状態まで腰を降ろして、しっかりとポーズを取りながらゆっくりと行う。

素早くする事だけが筋トレではないのだ。

ゆっくりと確かめるように負荷を掛ける事で、自分の筋肉がビルドアップしていくのを感じ取るのです。

そして膝を曲げる時に、膝がつま先より前に出ないようにするのもポイント。

正しい姿勢で行わないと、腰や脚に負荷がかかり過ぎてギックリ腰や故障の原因になりやすい。

マッソーを信仰する身としては、筋肉との対話が出来なくなるような事態にならないよう予防するのも大切だ。

「496……497……498……499……500!!」

よし、今日のノルマである500×10セットのスクワット完了。

ちよっと物足りないが、今日はハロウィンとあって急いで準備しないといけない物がある。

これを用意しておかないと少々……いや、この母港が地獄より生温い戦場と化してしまうのだ。

それはお菓子だ。

たかがお菓子と侮るなかれ。

母港着任した年に行われたハロウィンで俺は地獄を見た。

前線に出ずっぱりな俺はすっかりハロウィンの事なんて頭から抜

けており…………トリック・アンド・トリートではなく、トリック・アンド・トリックを仕掛けられそうになり、母港で一晩中鬼ごっこする羽目になったのだから……………」

「嫌な…………事件だった……………」

思い出すのも辛いわ。

あの時失くした俺のワイシャツ……………まだ見つかってないんだ……………」

目を輝かせながらハンティングに勤しむヤベンジャーズ＋その他に、撒き餌として脱ぎ捨てたあのシャツの事を俺は忘れない。

あのシャツの尊い犠牲によって稼いだ時間で俺は逃げのびれたのだから……………」

背後から聞こえる怒号に、砲撃音と急降下爆撃機のダイブする風切り音は今でも思い出すのも本当に辛い。

ハロウインの終わった朝の母港が、まるで大規模な敵襲を受けて被害を被ったかのような光景に見えた時は思わず目から雫が溢れたものだ。

本当によく生きていたな俺。

そしてあの日以降、同じ過ちを繰り返さぬようにこの日だけはお菓子を事前に準備するようにしたのだ。

故にたかがお菓子だからといって侮る事をやめた。

ガチで母港が終わったら人類滅亡までのカウントダウンが始まってしまふのだから……………」

「何故お祭り事で人類の未来を左右することになるのか…………いや、これ以上はやめよう」

哲学的な何かを悟りそうになりながら俺は頭を振る。

予防線さえ貼っておけば防げるのだから、俺も祭りを楽しむべきだ。

母港の皆が楽しむお祭りなのだから、母港の最高責任者の俺がムスツとしても皆楽しめないしな。

やはり出来る上司は率先して楽しまなきゃね。

「とりあえずダイヤ20000分のお菓子は確保した。これでも足り



るか少々不安が残るが……まあその時はベルファストかダンケル  
クに頼んで作ってもらおうか」

去年はこれで少し余りが出るくらいだったが、今年はまだKAN—  
SENが増えたので分からない。

だが一番先にヤベンジャーズに配る予定なので酷い事にはならな  
い筈だ。

「あいつ等本当に容赦ないからなあ……つと誰だ？」

ヤベンジャーズの面々を思い浮かべて背筋を寒くしていると、私室  
の扉をノックする音が聞こえる。

ハロウインはまだ始まっていないので、トリック・オア・トリート  
はまだされない筈だが？

はて、一体誰だろうか？

「入れ」

「失礼するわ指揮官」

「……失礼します」

入って来たのはロイヤル所属のモニター艦 エレバスとテラーだ。

二人は姉妹艦であり、同じ白髪に深紅の瞳をしたまるで西洋人形の  
ような美貌を持つKAN—SENだ。

違いとして姉のエレバスは髪を腰まで長く伸ばしており、スラリと  
した美脚の持ち主である。

少々厨二っぽい話し方をするのだが、それもまた個性と言えるだろ  
う。

そして普段は魔女っ娘のようなゴスロリ調の服を着ており、白いワ  
イシャツに黒のミニスカート、そして耳付きの黒い魔女帽子と裏地が  
赤色のマントを羽織っている。

一方の妹のテラーは髪が短く髪留めなのかよく分からない大きな  
ボルトが頭を貫通したように留めてあり、フランケンシュタインのよ  
うな縫い跡が全身の至る所にある。

彼女も姉と同じくゴスロリ調の服を普段は着ているのだが、姉と違  
い白い袖無しのフリル付きシャツに同じく白色の萌え袖アームガー  
ドとスカートと至ってシンプルな装いだ。

テラーは感情の起伏がかなり薄く、幼い子達に容姿も相まって少し怖がられる事があるが、聞き分けも良くとてもたまに見れる笑顔がとても可愛らしい女の子である。

そしてテラーはエレバスには無い立派なお胸様が存在しているのも違いの一つだろう。

「指揮官？なんだか邪悪な思念が過ぎったようだけど？」

「そうなの？」

「……………いや、何でもない筈だぞ？」

危ねえ……………エレバスはめちやくちや感が良いから俺の不埒な考えが読まれる所だった。

カンレキに刻まれた記録とも呼べるモノが彼女達を象っているのだ、そのイメージ通りの力を持つていてもおかしくはない。

特にエレバスは歴代のエレバスの名を持つ艦の記録も保持している傾向にあり、そこからの力が働いている節すらある。

まあ、彼女達がその力でどうこうする訳ではないし、逆に俺達を助けてくれる心強い仲間である事には変わりないんだがな。

「ふうん、まあいいわ。指揮官なら別に、ね」

「……………姉さんに指揮官どうしたの？」

「……………」

本当に気を付けよう。

さて気を取り直して、二人は何故俺の私室に来たのだろうか？

いや……………たぶんアレか？

「そうよ指揮官、コレよ」

「？」

何か悩ましげに目を閉じるエレバスと、対象的に不思議そうに可愛らしく小首を傾げるテラー。

テラーはとても可愛らしい仕草だが、その格好に問題があるように思える。

何度も言うようだが、今日はハロウィン。

エレバスもテラーもハロウィンの仮装をしているのだが……………エレバスはいい。

彼女は普段の格好に唾に蠟燭を立てた耳無しの魔女帽子と裏地が黄色になったマント、そしてガータベルト付きの黄色と白のストライプが入ったニーソックス。

なんともハロウィンらしい装いだ。

問題はテラーの方である。

いつものボルトを頭に付けて、全身が疎らどころか殆ど見えてしまっている包帯を緩く巻いただけの姿に、いつもの萌え袖アームガードだ。

さすがに豊満なお胸様や下の局部には包帯を多めに巻いているのだが……その格好はどうなんだ？

「どうかしましたか？」

「いや、その、だな……」

「分かるわ指揮官」

本当に不思議そうにするテラーに、なんといいのかわからない俺と理解を示すエレバス。

「というか俺にこれを注意しろと？」

「いやエレバス、俺が言ったらセクハラにならないか？」

「だからあなたしか居ないここに来たのよ」

「………そうか」

「？」

もう思考を読まれているのはこの際置いておく。

姉として妹のなんとも言い難い扇情的な格好について俺から注意

して欲しいんだな？

「それで合っているわ」

「はあ………」

「指揮官も姉さんもどうしたのですか？」

「はあ………」

なんという難題だろうか？

俺と同時にため息を吐いた所を見るに、恐らくエレバスも一度注意したのだろう。

しかし、それでもテラーを止めることは出来なかったと。

本人が問題無いと考えているから余計に止められないといったところか？

……………一応聞いてみるか。

「あー、テラー？ハロウインはその格好で参加するの？」

「そうですよ？包帯を巻くの私、指の感覚が鈍いから苦勞しました」

「そっかー」

エレバスにジト目で見られるが、なんかもう言いにくい。

テラーは本当に感覚が鈍く、様々な場面で苦勞する事が多い。

そんなテラーがハロウインの仮装を頑張ったのが、その無表情ながらも頑張りましたオーラを通してヒシヒシと伝わってきたのだ。

本当に何も言えねえ……………

「ねえテラー？やっぱり寒くないかしら？包帯だけでは風邪を引いてしまうわ」

「姉さん、大丈夫です。生まれてからずっと風邪なんか引いたことありませんから。それに今回は姉さんもハロウインの装いをしているんですもの、私も一緒にハロウインを楽しみたいです」

「そうだったわね……………」

やべえ、俺もエレバスも頑張ったオーラたっぷりのテラーに何も言えなさ過ぎる。

だって一生懸命な雰囲気溢れんばかりに伝わってくるんだもんよ……………

どうしたものか……………

二人でどうしたものかと頭を悩ませていると

「姉さんも今日のハロウインを楽しみにしてましたよね？だって今日の下着は、指揮官に見られても良いように透かしの入った白いレースの可愛い刺繍が入ったのを着てましたから」

テラーによる爆弾発言がいきなり炸裂した。

思わずエレバスの方を見ると、彼女は耳まで真っ赤になった顔を両手で覆い隠す。

「エレバス……………」

「聞かないで……………少しだけ羽目を外し過ぎただけなの……………お願い、聞かなかった事にして……………」

「姉さんどうしたのですか？指揮官に見せる為にここに来たんじやないんですか？最近買ったばかりでお気に入りの勝負下着だつて言つてましたのに……………」

「ううううう……………」

「もう止めるんだテラー!!エレバスのライフは0だ!!」

テラーの無自覚な口撃にエレバスが顔を隠したまま、とうとうその場にしゃがみ込んでしまった。

その勝負下着は気になるが、それよりエレバスの心がヤバい!!

プルプルと震えながら動かなくなつたぞ!!

「あれ?ここに来たのは、私の仮装と姉さんの勝負下着を指揮官に見せる為じやなかつたのですか?私、指揮官にいっぱい見てもらおう為に包帯をいくつか巻き直して来たのですよ?」

「その格好が増やしたの結果なのか!」

「そうですよ?」

「……………頭痛くなつてきた」

「……………」

巻いている量を増やす前はどれだけ紙装甲だったのか…………

驚愕する俺を見ながらやはり不思議そうに首を傾げるテラー。

そしてエレバスは何も言わずにただ震えるのみ。

このカオス極まりない空間をどうすればいいのだろうか?

聞けば聞くほど自分の常識を崩されていく感覚に陥ってしまうのだが?

「……………もうお嫁にいけないわ」

「しつかりしろエレバス!」

見たことのない涙目のエレバスにドキツとしてしまうが、今はエレバスのメンタルケアを行うべきだ。

ここで味方を減らしてしまつては元も子もない。

とりあえずしゃがみ込んだままのエレバスの前に屈んで話そうと

した瞬間……………

「指揮官、責任を取ってちょうだい」

涙目で真つ赤に顔を染めたままではあるものの、目が座ったエレバスが片手で俺の服を掴みながら自身の服を脱ぎだした?!

「おまつ?!ちよつと待て!!マジで待て!!ホントに待て!!」

「ダメよ指揮官、ここまで私の闇を知ったのなら……貴方という光とここで一つになるべきだわ。もう失うモノなど無いのよ?ならば後は全てを得るだけのこと」

「何言ってるのか分からんぞ!いや、本当に脱ぐの止める!!自分が何してるのか分かってるのか!?!」

「大丈夫よ指揮官、私の大切なモノを貴方にあげるから貴方も私に光を注ぎ込めばいいのよ!!」

「それ比喩表現出来てないからな!!」

もはやグダグダである。

なんかエレバスの目がグルグルしてて恐らく正気ではない。

羞恥心の限界値を越えて暴走し、勢いだけでなんか口走ってしまっているんだ。

なんとか落ち着けないと……あ、これがテラーの言っていたエレバスの勝負下着か。

俺が慌てている間に下着以外の全てを脱ぎ去ったエレバスの勝負下着が見える。

本当にテラーが言っていたように白い地肌が見える程のスケスケで白のレースと刺繍が入った可愛い下着。

しかもブラとショーツともに同じ感じなので、上の方はピンク色のポッチが透けて見えてますよ!!

「さあ指揮官、男を見せなさい!!」

「づえ!?ヤバい、これ逃げられんヤツ……」

シャツを握られたままそう言われてしまうと……逃げ場が無い。

この場を収めたいのだが、展開が早すぎて止められそうにない。

そ、そうだ、テラーは……………テラーはどこに……………  
一縷の望みを託してテラーに助けを求めようとした。  
そして視線を上げると……………

「……………という訳で、ほら、姉さんが指揮官に勝負下着を見せているんですの」

「「「へへ〜」」」

いつの間にか入室していたヤベンジャーズに俺とエレバスの痴態を説明しているテラーの姿があった。

というかヤベンジャーズの面々の目が怖い。

ギラギラっていうか……………それ以上の擬音で表現出来ない熱が……………灼熱が籠もっていた。

「ぎやあああああああああああああああああああ  
!!!!!!!」

我に返ったエレバスの悲鳴と共に俺は私室の窓に向かって走り出す。

そして全く使っていないなかった護身用の拳銃を抜いて4発発砲し……………そのままガラスをブチ破って脱出した。

ガラスで数ヶ所切ったと思われる痛みがあるが、そんなの無視だ!!

今の痛みよりも逃れなければならぬ未来があるんだ!!

そしてその日俺は……………一日中母港を走り、隠れ、そして全ての思いの丈を込めて叫ぶ。

もう二度とハロウインはゴメンだと……………

~~~~~

「……………」

「姉さん、どうしたの？」

寮の部屋に戻って来た妹のテラーが私に心配そうにそう聞いてくるが、今日の私は何も話したくはない。

指揮官が母港を巻き込んだ鬼ごっこへと強制参加させられてたハロウインは終わり、綺麗な月がまた水平線へと沈もうとしていた。

テラーがとても純粋な良い子であるのは知っているのだけれども…………アレは本当に最悪の出来事だった。

一方的に恥をかいながら暴走した挙げ句に下着を見られる羽目に…………

「？姉さんは指揮官に下着を見せられたから良かったんですよね？」

「…………そんな訳ないでしょ」

「？」

いまだに勘違いしているテラーにツツコミを入れてみるが、全く気がついた様子はない。

それもまた妹らしい所ではあるのだけれど、今日は、今日だけはそれを欲しくなかった。

「いいテラー？淑女は殿方に下着を見せたりしないのよ？」

「そうなの姉さん？でもウォースパイト様はスカートを履いていないけど……………」

「それは…………例外よ」

「？…………よく分からないよ？」

「はあ……………」

どう説明した方が良いのだろうか？

本当に私の妹は純心過ぎて突拍子もない事をしてしまうのだから気を付けなければいけない。

…………でも、いつまでも進展の無かった私と指揮官の間に少し進展があったのかもしれない。

指揮官の事が気になっているのに、いつも遠巻きに見ているだけであまり話すことも無い。

そんな毎日を歯痒く思っていたのだけれど、テラーの仮装をキツカケに話す事ができた。

話すのが凄く恥ずかしくてあまりいっぱい話す事は出来なかったけど、久し振りに見たあの人はやっぱり本当の光のように暖かな人だった。

その後のハプニングは闇の底に沈めてしまいたいだけでも………

「姉さん」

「何かしら？」

テラーが私の前にやって来て、普段は見せない笑顔を浮かべる。いったいどうしたのか疑問に思っている

「テラー、姉さんと一緒にハロウィンを過ごせて嬉しい。今度は姉さんと指揮官も一緒にハロウィンを楽しみたい」

「そう……そうね。指揮官と一緒に楽しくなるわね」

テラーの言葉に私もつい笑みが溢れてしまう。

この子と一緒に指揮官も入れて今度はハロウィンの母港を巡るのも悪くないだろう。

そんな妹の願いを聞きながらまた明日への力を蓄えるべく、就寝の準備を始める。

光の側に必ず闇は訪れる。

でもその光は優しく暖かく闇（私）を迎え入れてくれた。

ならば私（闇）も光を優しく、慈しむように包み込んでみせる。

それに私は一人じゃない。

可愛い妹（テラー）と一緒にならばどこまでも光を守り、そして更に強く輝かせてみせよう。

第48話 晩酌とリシユリユ

指揮官です。

現在とても懐かしい人と母港にある通話室で電話しております。

その人物は元所属部隊の副長代理で、痒い所に手が届くと言えるような仕事ぶりを見せた、本当の意味で俺の右腕（本人は左腕と名乗っている）だった男だ。

現在は軍を抜け、少しだけ平和になった世界を見て回っているんだとか。

…………ちよつと羨ましいぞ。

『こんな夜遅くにすみません大尉、いや、今は指揮官殿でしょうか？』

「お前にそんな風に言われるとこそばゆいな…………まあ呼びやすい呼び方で構わんさ、そっちはもう軍属じゃないからな」

『アイサー…………つと昔の癖が抜けませんな』

「ははっ、長く軍に居たからな。それは仕方ない事だ」

他愛の無い会話。

元とはいえ俺の指揮下にいた部下の元気そうな声を聞いて少しホツとする。

あの時生き残った連中と一緒に笑いながら俺をこの母港に行くよう勧めた一人でもあるので…………恨みがないとは言い難い奴ではあるのだがな。

『大尉、エリックの奴…………結婚して子供出来てましたよ。一年見ない間にコロツと太ってました。あれを幸せ太りって言うんでしょう』
「そうか…………エリックの奴に子供が…………」

『本当に幸せそうでしたよ。これも大尉がああ時に泣きながら敵前逃亡しようとしたアイツを、殴って気絶させて引き戻したから、ああ時の空襲の犠牲にならずに済んだんです』

「あれは…………酷い戦いだっただ」

二人してそこで黙り込む。

副長達の特攻の後、乗る船が無かった俺達は前線基地へと配属に

なった。

しかし、その基地司令が寄せ集めの捨て駒部隊 通称『ダストボックス（塵箱）』隊を基地内部に入れたがらず、基地から離れた場所での野営をする事になったのだ。

エリックは兵士として着任して三ヶ月、俺達の部隊に配属されて一ヶ月の新兵で、上官からのやつかみでこの部隊に配属された運の悪い奴だった。

やつかみの理由も実にくだらな物で、配給部隊に所属する女性に惚れていた上官がその女性がエリックに惚れているという事を知ってしまったというもの。

しかもその上官は上役の将校と親戚関係であり、その権力で俺達の部隊へ配属される羽目になったのだ。

支給される食事は残飯みたいな食べ残しのような物か、俺達が狩ってきた獲物を調味料無しで焼いただけの物。

毎日硬い地面に横になり、いつ死ぬかも分からない消耗率の高いと噂の悪夢のような部隊。

更に捨て駒故に他部隊との待遇の違いや、居るだけで針の筵のような突き刺さる視線の数々。

そんな部隊に配属された新兵のエリックが発狂するのは、水が上から下に流れ落ちるように当たり前の事だった。

『本当に偶然でした。あの日の昼の哨戒役の連中がセイレーンの艦載機が上空を飛んでいたのを発見したのは。それを見て発狂したエリックが、基地へ走って逃げようとしたのを大尉が無理矢理止めなかつたら……爆撃を受けた基地と運命を共にしていたでしょう』
「俺も無我夢中だった……明らかにアレは基地を潰すつもりだったな」

『大規模な編隊を組んでの空襲……数えた訳ではありませんが、恐らく百機以上は居ました。あれは確実にあの基地を狙ったものでしょう』

「基地は消滅。基地に駐在していた兵員は基地司令を含めた全員が死亡……渡されていた4機の旧式の対空機関砲で攻撃したが焼け石

に水だったからな。あんな数を止められる筈がない」

赤々と燃え上がる基地を尻目に悠々と去っていく奴らを俺達は、ただただ見上げるだけしか出来なかった。

数の少ない払い下げの古ぼけた対空機関砲では、疎らな弾幕しか形成出来ず撃ち落とせる筈もない。

それでも俺達は弾が尽きるまで撃ち続けた。

『あの時、基地の連中は何をしていたんでしようか？我々が対空戦闘をしていた時に対空砲火の一つも上がっていなかった……内陸に近いからとボケていたんでしようか？』

「あの基地は前線とはいえず、海上戦闘が主戦の戦争から離れていたからな……それもあつたかもしれない」

人類総力戦と言われるセイレーン大戦においてなんとも羨ましい話だ。

平和ボケできる程に穏やかな場所なんてどこにも無かつた筈であり、ましてや前線基地の一つだったのに……

「何にせよ俺達は生き残つた。あんな地獄のような戦闘ばかりの戦場から生き残つたんだ……今はそれに感謝しておこう」

『そうですね大尉……つと、もうこんな時間ですか。長々と話して申し訳ありません』

「いや、久し振りにお前の元気そうな声が聞けて良かったよ」

『それでは大尉……今度は大尉の奥さんを紹介してくださいよ？俺、大尉がKAN—SENのベルファストさんとくっ付くんじやないかと思つて賭けてますから』

「余計なお世話だバカ野郎!!」

電話先で笑いながらアイツは通話を終了した。

まつたく……アイツは何考えてやがんだ。

こんなオツサンの相手とかベルファストに失礼だろうか……

だいたいKAN—SENの子達に手を出すとかイカンだろう。

……そりゃ魅力的だし、たまに誘つてんじやないかつて思うくらいグイグイ来る奴らもいるがな？

あの爺に指輪まで渡されてるからケツコンできるだろうが、それは

KAN—SENの能力を上げる為の装備品だぞ？

実際にこんなオツサンの嫁とか皆嫌だろ？

一部なんか好意を持っている連中も居るが、それは俺しかこの母港に男が居ないからだろう。

この戦争が終わって周りを見れば俺以上に魅力的な奴だっつていっぱい居るはずだ。

「……………いったい俺のどこが良いのやら」

そんな呟きと共に溜息を吐きながら通話室を後にした。

外の中庭に通じる母港の渡り廊下を歩く。

空には綺麗な満月が浮かんで雲一つない空には、その輝きに負けなように光る星が見えた。

「月の綺麗な良い夜だな。戦時中はあんなに煩わしかったのに……………」

夜の海において満月ほど厄介なモノはない。

夜闇が月明かりで照らされれば、それだけ被発見率も高くなってしまふからだ。

駆逐艦と魚雷艇で戦列を組んでいた俺達にとって、新月こそが味方であり満月は敵だった。

「本当に変わったもんだ……………」

「そうでしょうか？」

「っ?!……………リシユリユーか、驚いたぞ」

「ふふふ、申し訳ありません。指揮官が夜空を見上げているのを見かけたものですから」

渡り廊下の少し先にあるテラスに置いてあるアンティークな椅子に座るアイリスの戦艦 リシユリユー。

彼女はヴェシアの戦艦 ジャン・バールの姉であり、アイリス陣営のトップだ。

また、アイリス陣営では枢機卿とも呼ばれており、その権威はアイリス陣営の中で絶対的なものである。

その装いは白いミニスカワンピースに赤色や金色の装飾が施された物を着ており、足には真紅のニーソックスを穿いてどこか清潔感を

感じさせる服装だ。

容姿はジャン・バールと同じく黄金比と言つてもいいようなスタイルの良さが挙げられ、目はピンク色に近い紫色の瞳を持っている。

髪はオレンジ色よりの金髪で、腰よりも先まで伸ばしており、太陽に当たるとまるで輝いて見える事があるほどに美しい。

「ところでどうしたんだこんな時間に？」

「いえ、こんなに月が綺麗ですから、少しだけ晩酌をと思ひまして」
リシユリユーの手にはお高そうなワインのボトルがあった。

確かに今日の満月を見ながら飲むのは、なかなかの風情があつていいのかもしれない。

「なるほど、酒のつまみにはもってこいな綺麗な満月だからなあ」

「はい、指揮官もどうですか？」

「俺もか？だが、勤務中に飲むのはな……………」

リシユリユーにお誘いを受けたのだが、さすがに俺が飲むわけにはいかない。

もしこの母港で緊急事態が起きた時に、飲酒していたら正常な判断を下せなくなってしまう。

それだけは一番避けたい所だ。

「ならこちらは如何ですか？今朝試作品が出来たとダンケルクが持つて来た葡萄ジュースなんです」

「……………本当にダンケルクは何でも出来るな」

そう言つてワインとはまた違うボトルを取り出すリシユリユー。

最近のダンケルクはお菓子作りだけに留まらず、甘い物なら何でも出来そうな感じになつてきている。

なんでも最高の完成品を食べてもらいたい人が居るらしい。

あんな家庭的な可愛い女の子であるダンケルクに、そこまで言わせるソイツが俺は羨ましいよ。

そんなダンケルクの試作品か。

美味くない筈がないだろう。

「ああ、そつちなら付き合おう」

「ではこちらに」

俺はリシユリユーに誘われるままにテラスの空いている椅子に座り、彼女からワイングラスを受け取る。

このグラスも目が飛び出る程お高い物なんだろうなあ………なんて考えていたらリシユリユーが俺のグラスに御酌してくれていた。

これはありがたい。

こんな美女から御酌してもらえるなんて、なんて贅沢な事なんだろうか？

ワインのボトルの方のコルク栓は既に抜いてある。

ならば俺からもリシユリユーに御酌を返しておこう。

そう思いボトルのラベルが注ぐ際に上を向くよう持って、置かれているリシユリユーのグラスに容器の1/3ほど注いでおく。

「あら、ありがとうございます指揮官」

「こういうのも悪くないだろう？」

リシユリユーにお礼を言われて自身のグラスの足を持ち、同じくグラスを持つ彼女とグラスを打ち合わせないように乾杯をして一口飲んだ。

葡萄の爽やかな香りが鼻を抜けてほど良い甘味が舌を刺激する。

なるほど、これは大人でも楽しめるジュースだな。

甘過ぎず、しかし少しだけ酸味を効かせることで全体にメリハリを付ける上質な味わいだ。

ジュースにここまでの違いを付けるなんて流石はダンケルクだな。

「これが未完成だなんて驚きの美味さだな」

「コレの前の試作品を私も試飲しましたが、本当にそうですね………それとは別の事なのですが、失礼ですが指揮官、どちらでマナーを？」
「ん？別に気にしてはいなかったが………」

たぶん無意識に前世の行動が出たのだろう。

忘年会や新年会での上司への御酌。

下手すると更に上の役員に御酌する事もあるあの行事なんて、マナーを知ってなきや損する事ばかりだからな。

特に洋酒であるワインなんて面倒なマナーが多い。

まず洋酒の本場であるヨーロッパでは注ぐのはだいたい男の役割

であるという事。

そして注いだ後の雫で色が付きラベルが見えなくなるからラベルは必ず上に向けろだとか、グラスを持つ時は必ず足を持つ事、乾杯の時はグラスは打ち合わせずに軽く近寄せるだけ……なんてもんがある。

正直面倒くさいが、覚えておかないと社会に出て常識が無いなんて思われるのだ。

まあかなり前に覚えていた事を今でも出来るってのは、それだけ身体に染み付いてしまっているのだろうか。

「まあ、たまたまだよ」

「……………それにしても自然にできていましたけど」

訝しむリシユリユーに肩を竦めながら俺はまた一口ジュースを飲む。

俺に前世の記憶がある事は誰にも話していない。

そんな事を話せば精神を病んでいると思われるも仕方ないからな。

内心そう思いながらまた一口ジュースを飲む。

本当に癖になりそうな美味さだな。

気が付けばグラスからすっかりジュースは無くなってしまっていた。

「お気に召されたようだなによりです」

「ああ、ダンケルクにとっても美味しかったと伝えておいてくれ」

「ふふ♪指揮官からのお言葉は彼女にお伝えしたいのですが、これは私が試飲を頼まれた物なのでまた完成品の時に伝えてあげてくださいね♪」

「ん？どういう事だ？」

リシユリユーに訊ねてみるが、彼女は笑うばかりで何も答えない。

……………いつたいたいという事なんだ？

リシユリユーの言葉に頭を悩ませていると、グラスを空にした彼女がこちらを向く。

答えを聞かせてくれるのか？

「こうしていると懐かしいですね」

「む？懐かしい？」

「覚えてないのですか？初めてお会いした時も、こんな満月の夜だったじゃないですか」

「……………ああ、そうだったな」

答えを教えにくれずにクスリと笑うリシユリューに、俺は若干残念な気持ちになるが、確かにこんな満月の夜に彼女と俺は出会った事は事実だ。

「というかこんなロマンチックな状態ではなかったのだがな。」

「あの時の指揮官は前線帰りで、ボロボロの軍服に包帯だらけのまるで幽霊のようでした」

「仕方ないだろう、服なんて持っていなかったんだ。それにあの時の俺は……………」

「……………そうでした。申し訳ありません」

「いや、もう過ぎた事だ。気にしてないさ」

頭を下げて謝るリシユリューに俺は気にする事もなく空を見上げる。

リシユリューと初めて会った時の俺は、大戦の戦勝パーティーに英雄という神輿となるべく出席させられたもの。

まだ俺の価値は指揮官としての適性が高い捨て駒でしかなかった頃の話だ。

歴戦の兵士、常在戦場という風体を出させる為に、あえてそのまま出席させられた俺にとって本当にどうでもいいパーティーだった。

それよりも早く前線に戻って残党狩りを進めてしまいたかった俺は、挨拶もソコソコにさつきと壁の花になるべくパーティーホールから外に見えるテラスへと移動したら……………そこで静かにワインを飲むリシユリューが居たという訳だ。

「あの時はしつこく話しかけてくる殿方を避ける為に外で飲んでいましたら、パーティーの主演だった筈の指揮官が来たので驚きましたよ」

「俺も誰も居ないと思ってたから少し驚いたな」

「ふふ、あの時の指揮官は顔にも包帯を巻き付けてましたから、本当に

驚いていたかなんて分かりませんよ」

「そうだったかな？あの日の俺は、早く前線に戻りたくてイライラしていたからなあ……あまり覚えていないな」

リシユリユーがクスクスと笑うのを見ながら、思い出してみる。

だが勝ったと騒いでパーティーなんぞ開いている上に対して苛つくばかりで、そんな事を気にする余裕なんか俺にはなかった事だけは記憶しているんだが……

たぶんそんな中でリシユリユーとも話したんだろうなあ……

「という事は私と話した内容も覚えてらっしゃらないのですか？」

「あー……すまん」

タイムリーにリシユリユーが訪ねてきたので、とりあえず謝っておいた。

そんな俺を見て、また笑うリシユリユー。

だって仕方ないだろう？

前線の様子や残党狩りの経過なんかが気になってそれどころじゃなかったのに……

それもこれも指令書まで作っていきなりパーティーなんぞに俺を呼び出した上の連中が悪い。

だいたい捨て駒扱いして、毛嫌いしていた俺達を……いや、俺を英雄扱いして神輿にしてきたんだ、それ位の無礼は許してもらいたいもんだ。

「あの時の指揮官に『こんな所に居て大丈夫なのですか？』って訪ねたら、『俺はパーティーの飾りだ、用が済んだら捌けるのが筋だろ』なんて低い声で言われたのでビツクリしましたね」

「……あの時は本当に気が立っていたんだ」

「でしようね。目のギラ付き方や纏っている雰囲気があるで神話に伝わる戦士 ベルセルクのようにした」

「そんなにか？」

「ええ」

思わず目を丸くしてしまうのは無理もないだろう。

ベルセルクっていえば、和訳するとだいたい狂戦士(バーサーカー)

なんて言われる存在だ。

だからあの時挨拶が終わったら誰も話しかけて来なかったのか
……

しみじみとあの日の疑問が解決した事に納得していると

「あの日……私はそんな貴方が気になったのです」

リシユリユーがポツリとそう言った。

ハツとして彼女を見ると微笑みながらこちらを見るリシユリユー。
月明かりに照らされる彼女はとても神秘的で、その微笑みまでも輝
いているようにも見えてしまう。

まさに月の女神と呼んでも良い程だ。

そんな彼女が俺を見ながら言葉を紡ぐ。

「調べてみた指揮官の活躍はまさに物語の英雄そのもので、苦難に満
ちて先が茨の道だったとしても抗い戦い続ける戦士であり、そして多
くを率いて道を示す指導者……どれ一つ取ってもまさに神に愛さ
れた存在と言っても過言ではありません」

「……そんな大層なもんじゃないさ」

その言葉に俺は真っ向から反論する。

神に愛された？

それなら今まで救えなかった奴等はどうなるんだ？

神に愛された存在ならもっと多くを……いや、その前に助けられ
た筈だ。

俺は唯の人間であり、自分の両手で助けられるだけしか救えなかつ
た男だ。

……まあそれも本当に限られた人数だけだったんだがな。

「いいえ！そんな事はありません!!指揮官のお陰で救われた人達は
皆、貴方に感謝しているのです!!あの悪名高いアイアンボトムサウン
ド鏡面海域撤退戦だって……貴方が座乗していた艦が殿を務めな
ければ全滅、文字通りの全滅していたのですから」

「俺達はただ……必死に抗っただけさ」

熱弁を振るうリシユリユーに俺はそれだけ言って視線を下げた。

あの時も俺達は囷……そのまま沈むまで戦えと命令されただけだったんだ。

命令して真っ先に逃げた連中が一番初めに沈み、途中で重桜の艦隊が合流しなければそのまま沈んでただろう。

そして指揮権があ爺、あの時大将だった元帥に渡り、全軍撤退命令が出されなければずっと戦う事になっていた筈だ。

「それでも貴方達が居なければもつと被害が増えていた筈です」

「……そうかもしれない」

チラリと視線を向けて見た先にいた、目を輝かせながら話すリシユリユーの言葉は俺には眩しく感じる。

誰だってそう信じたい。

俺達にはそんな希望を感じる暇さえなかった。

我武者羅に生きて生きて生き延びる術を常に模索して、泥水だろうが下水だろうが生きる為に啜り続けた存在には目が眩むほどに眩しい言葉だ。

「……指揮官は何故そこまで」

「その自覚が無いからかもな」

「自覚、ですか？」

「そうだ。英雄なんて持て囃されても、結局俺の中では地べたを這いずりながら生きた記憶しかない。それに今まで毛嫌いされて目の敵にされていたのに、手の平を返して褒め称えられるなんて性に合わない、そんな風に言われる覚えなんてないのさ」

結局の所そこだろう。

あれから数年経つのだが、どうしてもその感覚が抜けない。

目を閉じればすぐに思い出せる。

飛び交う砲弾に硝煙の匂い。

弾ける波に混じる赤い色（炎）と黒い色（重油）が。

陸に戻っても同じだ。

すぐ横を黄色の閃光が連続的に走って土を耕しながら前に居た仲間を穴だらけにし、肉の塊にしていく。

爆弾が開けた大きな穴と立ち上がる土柱、そして焼ける肉の不快な香りと湿ったワタや肉の部品を撒き散らす戦場。

そんな地獄が俺の日常だったんだ。

懐かしさすら感じる。

まるで俺自身、そこに居る事が当たり前のように……………

「ダメッ!!」

「っ!?!」

気が付けば俺はリシユリユーに抱きしめられていた。

小刻みに震える彼女は何か怯えるかのように俺から離れない。

フワリと広がる甘い香りにドキツとさせられながらも、俺は状況把握に努めた。

昔を思い出していたら急にリシユリユーに抱きしめられ、しかも何故か震えている？

……………分かん。

なんでこんな状況になる？

「ダメです指揮官。そんな風になってしまっは……………戻れなくなります」

「リシユリユー?」

俺の背中を掻き抱く様に何度も手を彷徨わせる彼女の声は、継り付くような弱さを秘めていた。

何を恐れている？

リシユリユーがここまで弱さを見せる何かが俺にあったのか？

分からない……………

それが何なのかが分からない。

「指揮官は……………またベルセルクに戻ろうとしました。もういいのです、そんな風にならなくても。」

「ベルセルク……………俺が?」

「……………はい」

少し離れてようやく俺に顔を合わせたリシユリユーは泣いていた。

彼女によれば、俺はベルセルク（狂戦士）へと戻ろうとしていたらしいが……………

自分ではよく分からない。
というかこれが俺なんだが？

今でこそ母港という後方にいるが、俺の戦いは常に死と隣合わせの前線で、それに付き従う同士たる部下……………いや、戦友達と地獄を巡るのが常だったんだ。

それ相応の心持ちになるのは普通ではないのか？

「貴方はそれが普通だと思ってしまうているのです。普通ではないのに、それが自分であると認識しているから……………」

「……………そうか」

「私の大好きな……………いいえ、愛している貴方に戻ってください。あの陽だまりのような暖かな眼差しで皆を見守る貴方に」

「リシユリユー?!」

思わず声が出た。

いや、いきなり告白されたらビツクリするだろ？

だが彼女は俺の目をじっと見つめて離さない。

その目は懇願するような願いを込めた目だ。

困惑する俺を見ながらもリシユリユーは語る。

「気になつて調べ、実際に共に過ごして貴方という人に触れてみて……………私は恋をしました。気さくに話し掛け、嫌な顔一つせずに様々なしがらみを持つ私達を平等に受け入れてくれた貴方に。貴方のお陰で私達は兵器ではなく、まるで普通の女の子のような体験をする事ができたのですよ？それだけで私達は満たされたのです。」

「それは……………普通ではないのか？」

兵器であると存外にそう言うのだが、心を持つのであれば、それを尊重しない訳がない。

確かに彼女達KAN—SENは兵器として生まれてきた。

だが心を、感情を持つのであれば、それは同じ心や感情を持つものとして人と同じように尊厳を守るべきなのではないのか？

捨て駒として戦友達と共に生きた俺は、それが普通だと思ったん

だ。

最期のその時まで、人として生きていたい。

その思いを抱えて必死に今まで戦っていたのだから。

「いいえ、それは貴方だけです指揮官。KAN—SENというだけで私達を武器や道具としてしか見ていないからこそ……ジャン・バルや他の娘達のような事が起きてしまったのです」

「それは……」

「私達の尊厳を、心を守ってくれる。それだけで私達は貴方に尽くし、そして心を寄せてしまう……貴方以外をそういう対象として見る事ができないのですよ?」

「俺は……ただ、仲間だと」

「ええ、そうです。何も打算も裏も無くそう思ってくれるだけで、私達は救われているのですよ」

意外だった。

それが俺に固執する理由だとは。

分からなかった。

誰でもそうするのだと思ってしまうていた。

だが思い返せばこの世界はまだ、俺の世界というWW2の真っ只中である。

人権という言葉は無く、現代でも残る差別なんて一番酷かった時代だ。

それこそスマホやタブレット端末なんかがあつて科学の一部が突出しているので忘れそうになるが、時代背景は史実に照らし合わせればその辺りなのだから。

「忘れないでください。私達KAN—SENは貴方だけしか求めていない事を。貴方以外に何もいららないのだという事を」

「……」

改めて見たリシユリユーの目は何処か濁っているようにも感じた。

KAN—SENでその陣営のトップとしての権力を掌握する。

この時代においてどれだけ苦勞する事があつたのだろうか?

リシユリユーだけじゃない、その他の陣営のKAN—SENだつて

そうだ。

人間が数を減らしているとはいえ、陣営の旗頭を持っているならば……それだけ暗い部分だつて見てきたはず。

そう思ったらつい……俺はリシユリーの頭を撫でていた。

「……指揮官？」

「なんだろうな……こうしたくなつたんだ」

優しく、労るようにリシユリーの頭を撫で続ける。

彼女は少し驚いた様子だったが、スツと目を閉じて俺の手に任せてくれた。

こうした触れ合いこそが俺をここに留めてくれる。

何も言わずに、ただそこに居てくれるだけで良い時があるのだから。

傷の舐め合いと言われればそれまでだ。

この世界は本当に理不尽な事で溢れている。

それでも俺は……彼女達と共に有りたい。

同情なのかもしれない。

でも……この思いは無くしたくなんかないんだ。

月明かりだけが照らすこの場において、それ以上に思う事は俺にはなかった。

~~~~~

「……はい、ありがとうございました」

『お役に立てたのなら幸いです。あの人は……昔からそうでしたから』



通話先にいる指揮官の部下だった人はそう言って溜息を吐く。指揮官の事なら何もかも知っている。

そう存外に言っているかのよう。

少しだけ受話器を握る手に力が籠もった。

そんな態度に私は少しだけ嫉妬してしまっている。

「……………ですが助かりました。今回の事で皆への接し方や考え方が少しでも変わるといいのですが」

『そうですね。そうだと良いですね。ですが自分に出来るのはここまです。後はそちらの努力次第です』

淡々とそう口にするその人は、まるでこちらの苦悩を嘲笑うかのよう。に事実だけを話す。

感情を感じさせないというのはまさにこういう事なのだろうか？

『では吉報を待っていますよ。貴女方の努力が報われ、あの人がこれ以上苦しむことの無い世界の為に……………他の連中など信用するに値しませんので』

「分かっています」

この口調からも分かる通り……………この人は指揮官や戦友以外の全てを敵だと思っている。

いや、仕方の無い事だとは思う。

それだけの事をしてきた人達を憎み、世界を滅ぼそうとしないだけでも奇跡に近いのだから。

だからだろうか？

急に連絡が入り、こういう話を持ち掛けてきた事には本当に驚いた。

他者への不信感しか持たないこの人が、わざわざ私にこの一連の流れを組んできた事にも。

本音で指揮官と話す事ができて嬉しかったのだけれども、それ以上にこの人の手の平の上で踊らされている感覚に陥ってしまう。

色んな人間と話してきた私だけど、正直言ってあまり関わり合いはなりたくない人種だ。

舞台裏から全てを見通し、そうとは悟られる前に全てを終わらせる

ような感覚……………

『……………ああ、それと』

「……………何でしょうか？」

通話がもうすぐ終わると油断して、不意に続けられた言葉にビクリと反応する。

枢機卿と言われるまでに魑魅魍魎が跋扈する権力闘争を乗り越えた私だ。

たった一人の人間の言葉を恐れていると言ってもいいだろう。

いったい何があるというのだろうか？

『そういった感情はあの人に向けないように。その感情を向けていいのは……………その隣に居る事を赦された者のみにだけです。』

この人はどこまで見透かしているのだろうか？

思わず固まってしまった私は咄嗟に何か言おうと口を動かすけど、言葉が、声が出てこない。

だけど、ここで返さなければ、私はその程度の女だと思われてしまう。

あの人の……………指揮官の隣を目指すのならば、必ずこの人と比べられてしまうのは明白。

この人よりもその隣に相応しいと言われるためにも……………

「大丈夫ですよ。私は指揮官にこの感情を “今はまだ” 向けようとは思っていませんから」

『……………そうですか、なら期待しておきましょう』

見透かされる感覚はもう慣れた。

感情の籠もらない言葉も気合を入れて迎え撃つ。

指揮官でなければ抑えられなかったこの怪物を私は超えるのだ。

「それではまた……………元 “ダストボックス隊副長代理” さん」

『ええ、それでは自由アイリス教国枢機卿殿下』

その言葉を最後に通話を終わる。

終わった瞬間、全身の力が抜けた。

全身から汗が吹き出てくる。  
まったく、本当に心臓に悪い。

枢機卿となつて様々な人を見てきたけど、一番身近にいるタイプであり、あまり近寄りたくない人種。

それがさっきの通話相手の元ダストボックス隊の副長代理だ。

「指揮官が戦い続けていられたのはあの人が裏で全てを整えていたから……とんでもないですね」

足りない物資を自給自足する場面が何度もあつたダストボックス隊。

しかし、その中でも本来なら最も手に入れ難い筈の武器弾薬を、どの場所でも忌み嫌われていた部隊に補給したのが彼なのだ。

不要となつた武器や弾薬を処分したように見せかけて徴収し、部隊へと支給し続けたその手腕はまさに神がかり的なものだった。

元々は処分品故に不良品も多かった筈なのに、それすらも修理部品として活用しながら戦う彼らは本当に神に愛されたかのような活躍をあの大战時に残し続ける。

「それもこれも全ては……私は勝てるのでしょうか？」

ついそんな弱音が出てしまった。

あの日から調べ続け、枢機卿となつた今の権力を使ってまで細部に渡つて調べ尽くした情報を考えると頭が痛い。

どうすればあんな優秀な部下を持てるのか？

また、上層部は何故そんな優秀な人材を手放し、あれ程までに憎まれるような事をしたのか？

「それもまた、人の業というものでしょうか？」

ダストボックス隊を調べれば調べるほどおかしな事実が出てくる。

指揮官が未成年で徴兵された事もあるが、無実の罪で左遷されて配属された者も数多く居たのだ。

もちろんその事でクーデター後に裁判となり、軍事裁判で裁かれた者も多いと聞く。

最高刑は死刑で、銃殺刑だったそうだ。

だがその一方で、何故そこまで多くの者達の罪が暴かれたのかも謎

となっている。

懐かしさすら感じる随分と過去の出来事ですら、しっかりと調べ上げられてその証拠までもが揃っていたのだから。

私の方でかなり力を入れて調べてみたけど………それに関しては特級の機密事項として陣営トップの枢機卿である私ですら知る事は出来なかった。

「まあ………誰の仕業なのかは目星が付きますけどね」

この予想が当たっていたら、本当に恐ろしい事である。

それとは分からないように全てを揃えられてしまう。

誰も気が付かずに欲しい物だけを必ず手に入れるなんて事がもし出来るのならば………

「………裏の顔を持つ者ならばこれ程恐ろしく感じる存在は居ないでしょう」

しかし、私はこの人物に勝たなくてはいけない。

指揮官が悲しむ事の無い世界。

それが私とあの人の共通の目標であり、唯一利害が一致している事である。

指揮官の隣に立つのであれば、必ず越えなければならぬ壁。

おそらく重桜の軍師や参謀である彼女達もそれに気が付いているはず。

「目標にはまだ遠く………先は長い……か」

この数年で得られた力を振るっても、届かない背中。

でもまだここから巻き返せる。

「指揮官の隣は私が取ります。他の誰にも譲れません」

窓の外に見える星空を眺めながら、自分の決意を刻み込むように口にした。

表も裏もその全てを護り、貴方と共に歩みましょう。

清濁併せ呑む事で、貴方に安らぎと平穩を齎す事を誓います。

我が身、そして我らが祈る神に誓って。

## 第49話 幸運と雪風

指揮官です。

今日はいつものルーチンである筋肉との対話を終えて、執務をしていたのですが……それどころではなくなりました。

いつもならベルファスト達、ロイヤルメイド隊にお世話されながら執務をするのですが、今日はロイヤルの本島での式典があることで出払っております。

即ち仕事が終われば筋肉との対話し放題と思っていたのですが

……

「……………あー、そろそろ離れないか？」

「やだ」

「そうか……………」

執務用の椅子ではなく、ソファーに座る俺の膝の上に対面で座る一人の少女。

顔をグリグリと俺の鳩尾辺りに擦り付けてイヤイヤする彼女にホトホト困り果ててしまった。

さて、どうしたもんな……………

「なあ雪風、今日はいったいどうしたんだ？」

「……………今日はずっと一緒なのだ」

「それは構わんのだが……………お茶とかいらさないか？」

「いらさない。ここに居るのだ」

「そうか……………」

ずっとこの調子で俺の上から離れようとしなない。

本当にどうしたんだ？

重桜の駆逐艦 雪風。

白雪のように白く柔らかなフワフワの長髪に、頭頂部に結ばれた黒いリボンがよく似合う普段はちよつとワガママな明るいケモ耳尻尾な少女。

小さい身長にしては育っているお胸様をお持ちでヘソ出し改造

セーラー服をいつもは着ているのだが、今日に限ってフリルたっぷりの白い甘ロリワンピース、前世のアプリで見たブランコ様衣装を着ていた。

「というか最近俺の膝の上に跨がるようにして座る娘が多くないか？」

もしかして流行ってる？

「いったいどうしたんだ雪風？今日は随分と甘えん坊だな？」

「んう……………」

仕方なく頭を撫でると、俺の服を握る手の力を更に込めながら目を細めてもつと撫でろと言わんばかりに俺の手に頭を擦りつけてくる。

その仕草はまさに甘えてくる仔猫のようで、可愛らしくもあるのだが…………それが目の覚めるような美少女なのだからたまったものじゃない。

自他共認める可愛いを体现するような美少女である雪風が、普段は見せないような弱さと甘える仕草を見せるなんて俺の庇護欲を滅茶苦茶刺激する。

気が付けば俺は雪風の背中に手を回して抱っこしながら頭を撫でていた。

…………いや、マジで無自覚でしていたんだが？

「指揮官……………」

「どうした雪風？」

潤んだ眼で俺を見上げる雪風が頬を赤く染めながら俺を呼ぶ。

そんな雪風に返事を返したのだが、自分でもビックリするくらい優しい声が出ていた。

「というかこんな声が俺から出たのか少し混乱するくらい穏やかな声だったんだが……………」

「えへへ…………呼んだだけなのだ」

「そうか」

そう言う雪風はとても嬉しそうで笑顔のまま、また俺の鳩尾辺りに頬を擦り付ける。

まるでそこがお気に入りの場所で、自分の場所であるとマーキング

するかの様に。

なんだろうかこの可愛い生き物は？

ちよつと本気でビクリしてるんだが？

こんな甘い甘えてくる雪風なんて本当に稀にしか見れないんだけど

……

そこまで考えて気が付いた。

背中に回している手に伝わる僅かな震えを。

「……………雪風」

「？」

俺の声に反応して顔を上げる彼女。

その緋色の瞳には僅かだが、怯えが入り混じっている。

何が彼女を怯えさせた？

ムードメーカーであり、同じ重桜の時雨や夕立に綾波といつも笑顔で元気な彼女に一体何があったというのだろうか？

昨日はいつもの仲良しメンバーでクジ付きのきな粉棒を食べてとても楽しそうだったのに……

こうなっている要因が分からない。

とりあえず当てずっぽうで聞いてみるか。

「……………怖い夢でも見たか？」

「っ!？」

ビクリと身体を大きく震わせる雪風、初手でヒットした。

分かり易すぎる反応。

これで理由は分かった。

だがこれをただ悪夢を見ただなんて考えで片付けてはいけない。

彼女達KAN—SENは自身の元となった史実側の記憶、カンレキを保持している。

非業の最期を迎えた娘達だっているのだ。

それが夢となって出てきてもおかしくはない。

「そうか、怖かったんだな」

「ううう……………」

雪風のしゃくり上げる声が聞こえてきた。



それに合わせて先程よりも労るように優しく頭を撫でる。いつもはピンツと立っているケモ耳も倒れて元気が無い。

それ程の質の悪い悪夢だったのだろう。

雪風がここまで落ち込む悪夢とは、いったいどんなモノだったのだろうか？

まずはそこを聞き出さなければ話は始まらない。

古傷を抉るようでちよつと可哀想だが、彼女達KAN—SENを指揮する上でのメンタルケアも指揮官の仕事でもあるのだからやるしかないな。

「……………どんな夢だった？俺に教えてくれないか？他人に話せば怖くなくなるかもしれないぞ？」

「う……………あ……………」

「ゆつくりでいい。落ち着いて俺に話してくれ」

ポロポロと涙を溢しながら俺を見上げる雪風だったが、言葉にしようとして声にならないらしい。

必死に伝えようとしているのが分かる。

だから俺はその頭を優しく撫で続けて雪風の言葉を待つ。

こういう時は急かさず、話しやすい雰囲気を持ち込んでいく事が大事だ。

しばらくそうして待っていると、動揺が収まったのか雪風がゆっくりと話し始めた。

「……………指揮官」

「なんだ？」

「夢……………夢を見たのだ」

「ああ、怖い夢だったんだな？」

「……………うん」

また思い出したのか、雪風の眼に涙がじんわりと溢れていくのが見える。

これは相当ショックな悪夢だったようだ。

しかも根が深そうなタイプを見た。

俺のシャツを掴む手に力が籠もって震えていくのが分かる。

そんな雪風を優しく抱きしめて頭を撫でていた手を背中に回して、一定のリズムを刻むようにポンポンと優しく叩く。

子供扱いしているようにも見えるが、駆逐艦のように幼い容姿の子達にはこれで案外落ち着く事が多いのだ。

「……………夢の中で雪風の身体が船体しか無くて、他の重桜の皆も船体だったのだ」

「……………なるほど、それで？」

やはりカンレキからの記憶、カンレキは彼女達KAN—SENに様々な影響を与えるが……………今回はあまり良くない影響を与えたようだな。

「皆と一緒に海を走って……………戦って……………でも雪風だけは傷付かなくて……………皆は沈んでいくのに……………」

「……………」

「気が付いたらわたしは……………一人で……………誰も居なくて……………う……………う……………」

収まった筈の涙がまた流れる。

それを俺は何も言わずに抱きしめる力を少し強め、雪風の頭に手を当てて思い切り泣かせた。

ああ、これはツライ。

雪風は史実において豪運艦とまで呼ばれた船だ。

どんな戦場でも無傷で帰って来た、砲弾の方が避けて当たらず、雷撃や爆撃は不発や命中しないなんて事が当たり前のようなどんでもない幸運を持つ奇跡の船。

だがそんな幸運が仇となって、自分の姉妹艦や仲間の最期を看取るのが常となる立ち位置となってしまうた不幸な船でもあるのだ。

「うあ……………ああ……………みんな……………な、居なくて……………雪風だけ……………雪風だけしか……………居なくて……………」

「ああ……………」

縋り付く雪風の頭をくしやりと撫でながら相槌を打つ。

史実の雪風も感情を表す事ができていたら、こんな心境だったのだろうか？

見送り続けるだけの助けられない無力感。

それは前線という地獄に居た俺にも共感できる。

銃傷や爆発の衝撃で内臓破裂が起きた場合、即死出来れば苦しまなくて済む。

だが稀に即死せず、そして意識を保ってしまったが為に自分がゆっくりと死に向かっていく瞬間を知ってしまった者達も居た。

口々に助けを乞う言葉や肉親や親しかった者達への言葉を口にしながら、徐々に消えていく灯火。

そしてそれを見つめる事しか出来ない歯痒さ。

生き残った……いや、生き残ってしまった俺や仲間達はそれをずっと見続けてきたから、その苦しさや悔しさを知っているのだ。

見送るといふものは……残されるといふ事は、ツライ。

「だから……何も考えたくなくて……思い出したくなくて……外に出たら何か変わるかと思って……お気に入り着の服を着てお散歩してたのだ……でもやっぱり無理で……」

「それでここに來たんだな？」

「……うん」

「そうか」

優しく、労るように彼女の頭を撫でる。

冷え切った心に俺の手の平から、俺の持つ熱をゆつくりと染み込ませて暖めるように。

ただ話を聞いて寄り添うだけ。

それだけでも何故か人は安らげる事がある。

互いの体温を感じるだけで何故かホッとしてしまうのは、いまだに不思議に思う事があるが……今はそれで良い。

求めているモノがそこに有れば良いのだから。

「指揮官……温かいのだ」

「もつと抱きついててもいいぞっ」

「……いいの？」

「もちろんだ」

「えへへ〜♪」

蕩けるような笑顔で更に抱きつく雪風。  
どうやらこれ以上、言葉は要らないな。  
ただそこに居る。

それだけで得られる心地良さこそ冷え切ってしまった心に一番必要なモノなのだからな。

ゆったりとした時間が流れていく。

全てを忘れる事は出来ない。

でもそれをどう受け止められるのか、そしてそこに支えてくれる人が居てくれるか。

その求めたモノが有れば、人は、感情は、乗り越えようとしてくれるのだから。

ちなみにこの後二人ともそのまま昼寝をしまい、雪風の事が心配になって見に来た綾波達に見つかって、ちよつとした騒動になったのは別のお話。

~~~~~

「えへへ〜♪」

緩む頬を抑えられない。

お風呂もご飯も終わって寮の自室に戻ってからというもの、緩み続ける頬を抑えることができないのだ。

というよりあれからずっと緩みっぱなしだ。

「やっぱり指揮官は優しいのだ♪」

布団に寝そべり行儀悪く足をパタパタさせながら思い出す。

パジャマに着替え終わって後は眠るだけなのだけど、昼間の事を思い出して少し目が冴えてしまった。

でもそれも心地良い。

胸がポカポカして暖かく、そして何度思い出しても嬉しくて嬉しくて身震いしてしまうのだから。

「もつと……もつと指揮官に甘えたいのだ」

あの甘美な感覚をもつと求めてしまう自分が止められない。

どこまでも甘く暖かな感覚をずっとずっと感じていたい。

そんな欲求に身を焦がしている今が本当に楽しく感じてしまう。

もつと熱く、もつと深く、もつと鮮烈に。

あの感覚をそんな風に味わえれば……一体どうなるのだろうか？

「はっ……はっ……はっ……はあああ……どうしよう、ドキドキが止まらないよお……」

想像するだけで呼吸は浅くなり、鼓動は強く早くなる。

身体は熱くなり、期待に焦がれて身震いも大きくなってしまった。

なんだか考えるだけでおヘソの下が疼いて寂しくなってきた。

こうなる原因はもう分かっているのだけど……

「ジャベリンとニーミが持ってた本に書いてあった通りなのだ。わたし……指揮官の子供が欲しくなってるのだ」

ジャベリンとニーミが持っていた男女が絡み合う肌色の多い写真が載った本に書いてあった通り、自分は指揮官の子供が欲しくて、ココが疼いてしまっているのだろう。

全部本に説明されていた通りで、最近覚えた自分の慰め方を実践する時に、指揮官に激しく求められている妄想をするだけで激しく燃え上がる。

いや、燃え上がるだけでなく、満足感や充実感がとんでもなく高いのだ。

「指揮官のを……」

思わず生唾を飲み込む。

想像するだけでももうたまらない。

お風呂に入った後だというのに、指をその先端に触れさせたくて内腿を擦り合わせてしまう。

自分が慰めるだけでも凄いののに、指揮官がしてくれたらどれだけ凄いのだろうか？

指揮官に甘えながら蕩けるような快樂を甘受し、そんな毎日が続けて子を授かる。

それはこの身体、女性として産まれた自分の存在意義なのではないだろうか？

「もし、もし子供が出来たら……指揮官も喜んでくれるかな？」

その日を想像し、笑顔で喜ぶ愛しい人の顔を思い浮かべるだけで……キュンつと甘い疼きが下腹部から全身に広がっていく。

今日指揮官に甘えるキツカケになったあの悪夢は本当に怖かった。

でもそれを吹き飛ばす程、指揮官に甘えられて自分の使命を思い出す事ができた。

「指揮官が一番なのだ♪えへへ♪大好き♪」

思い出すだけでも笑顔が溢れる。

疼いて疼いて寂しくなるけど、それは指揮官が大好きで大好きで結ばれたいと思っっているから。

見たくもなかったあんな悪夢なんかには負けない強い想いがこの雪風様を奮い立たせる。

「でもお……き、最初はき、キスから始めたいなあ……」

想像したら恥ずかしくて声が小さくなったけど、愛を確かめるなら、求めるのなら……唇にキスしたいし、されたい。

両手で頬を触って顔が熱くなり、自分でも真っ赤になってしまっているのが分かる。

でもこれだけは、愛し合う関係になれば必ずキスは欲しい!!

言葉だけじゃなくて、行動で示して……そして……

「……………っ?!?!」

またその先を!考えてしまった。

今度はさっきの疼きよりも更に強かった。

もう……我慢出来そうにない。

「わたし、頑張るのだ……指揮官……わたしに……わたし
“ココ”に……く、ください」

妄想の中でも恥ずかしさが勝って小声になってしまったけど、それでも想像の指揮官は笑顔で満たしてくれる。

優しく、的確に雪風の弱点を一つ一つ丁寧に突いてきながら。

自分の意志とは関係なく漏れる声が恥ずかしい。

でも指揮官なら、指揮官ならこんなエツチなわたしも受け入れてくれる筈。

“大好き”その言葉を何度も伝える。

いつか本当にそう言えるよう願って。

50話 クリスマスディナーとフリードリヒ・デア・グローセ

指揮官です。

今日は楽しいクリスマス……のはずなのですが……

「さあボウヤ、たっぷりとお食べなさい。休みなさい。今日はいつもの仕事も日課も忘れてしまおうのですよ?」

夕方から始まるクリスマスパーティーに参加するまでの間に仕事しようと思い、執務室へ行こうとしたら私室前にスタンバっていた彼女に食堂まで連行されて、何故かいつぞやの北のロリ巨乳とご飯を食べた、端にある角の席に座らされてめちやくちやお世話されております。

というか何故ここに?

「ボウヤの事だから、こんなにおめでたい聖なる夜を迎える日にも仕事をするんじゃないかと思ったのよ。私にはすぐに分かったわ」

「いや……あの……」

「遠慮しないでいいわボウヤ。普段からもっと私に頼って欲しいくらいなのよ?ああ、飲み物はブドウジュースが良かったかしら?」

そう言ってテキパキと俺の居るテーブルに料理と飲み物を準備していく鉄血の戦艦 フリードリヒ・デア・グローセ。

彼女は普段から俺を自分に頼らせようとして、危うく依存寸前になるのを自制しなければならない程に甘やかしてくるKAN—SENである。

鉄血の闇の聖母と呼ばれる彼女の容姿は片目を隠す長い黒髪に黄色の瞳を持ち、頭の両側頭部には金属的な赤い角が生えている。

聖母の名に偽り無しと言わんばかりのたわわと安産型のお尻を持ち、キュツと括れた腰にはとんでもない色気を感じさせるアダル

ティーな美女。

そんな彼女が黒のボディコン風な服のミニスカートに、ニーソとブーツを身に着けて俺のすぐそこに居るのだ。

正直、居るだけで股間の息子がビクビクしてヤバいのだが…………

普段は身に付けている赤い手袋とアームガードを外したきめ細やかな綺麗な肌の手で、次々と美味そうなパーティー料理を並べていく姿をボケツと見ていたのだが、ふとそこで気が付いた。

これからクリスマスパーティーなのに何故ここに料理を？

「あー、フリードリヒ？なんで料理をここに？パーティーはまだ始まる前の筈なんだが……………」

そんな俺の問いにニコリと笑い、その後少し顔を曇らせると彼女はこう言った。

「実はねボウヤ？ロイヤルの娘達が料理をしようとしたら……………重桜の娘達、一航戦の娘を筆頭にした何人かで料理をすでに用意してあったわ。でも少し怪しくてあまり母港の仲間を疑いたくはなかったのだけど、少し拝借してビスマルクに検査させたら……………何らかの薬物反応があったの。ボウヤには安全で美味しい物を食べて貰いたかったから、急いで用意していたのよ？」

「ありがとうフリードリヒ!!本当にありがとう!!」

彼女が居てくれて本当に良かった!!

というかあの重桜のヤベンジャーズ達は前回の悲劇を繰り返させるつもりなのか？

本当に勘弁してほしい。

フリードリヒに全力でお礼を言うと、彼女はまた慈愛に満ちた笑顔で微笑む。

聖母って言うのは本当に居るのだという事を俺は改めて感じる事ができた。

「さあボウヤ、重桜の娘達が気がつく前にお食べなさい。心を籠めて作りましたよ？」

「ありがとうフリードリヒ、早速頂くよ」

そんな彼女の手料理が美味しくない筈が無い。

フォークを手に取り、とりあえず目に付いた大きなローストビーフを皿に取り寄せる。

暖かそうな湯気を立てるソレはとても美味そうだ。

俺の食欲を大いに刺激して早く食べろと筋肉達がざわめいている。

「それじゃ頂きま………す？」

ローストビーフを刺したフォークを口元まで持っていき、食事への感謝の挨拶をしようとした瞬間……それは俺の視界に入ってきた。

「どうしたのボウヤ？私に何かあるかしら？」

俺の視界の先に居るのはフリードリヒだ。

キョトンとした表情で俺を見ている。

それはいい。

いや、良くない。

俺の目が幻覚を見ているのか？

だって………彼女はさっきまでいつものボディコンみたいな服を着ていたよな？

ならなんで今は………露出しまくりのミニスカサンタの衣装なんだ？

格好を説明すると、胸に赤地の布を巻いてるだけの上着に、それ屈まなくても歩いたらパンツ見えるよね？っていう丈のミニスカートに黒のガーターベルト。

頭には申し訳程度の小さなサンタ帽とききたもんだ。

いったいいつ着替えたんですか？

というかこんなセクシーなサンタさんとか俺の息子がめっちゃ喜んですでに仰角最大なんですけど？

「………いつ着替えたんだ？」

「ふふふ♪ボウヤを驚かせようと思って、服の下に着込んでいたのよ？ビツクリしたかしら？」

「…………マジか」

めちやくちや用意周到じゃないですか。

いやちよつとその溢れんばかりの色気に思わず悩殺されてたわ。

筋肉が無ければ危うくご飯前に、性なる夜をおっ始めるところだった…………

「ほらボウヤ、いつも頑張る貴方に私からのクリスマスプレゼントですよ。はい、あくん」

「うおっ?!柔らかかつ…………」

フリードリヒが左隣に座って俺が持っていたフォークを取り、そのまま抱きつきながらフォークをあくくんしてくる。

尋常じゃない柔らかさを誇るたわわ過ぎるお胸様が俺の腕を包み込み、彼女の体臭だろうか?とても良い香りが俺の嗅覚を刺激してきた。

これはヤバい。

っていうかなんだこの状況は?

確実に俺の理性を殺しにきている…………

「食べてくれないのかしら?それとも…………あむ」

「???」

「ん!♪ふふふ♪やっとプレゼントを受け取ってくれたわね♡」

混乱する俺を他所に、彼女は少し困った表情を見せたが、すぐに手に持ったフォークからフォークを唇で挟み、そのまま口移しの要領でこちらに唇ごと差し出してキスしてきた!?

なんだこの状況?! (2回目)

まるで訳分からんぞ!?

美味そうに見えたローストビーフの味も分からんぞ!!

フリードリヒは唇を人差し指でなぞりながら笑みを浮かべているし…………

助けてくれマツソー神!!!!!!

俺の股間の息子が爆発しそうだ!!!

童貞過ぎてこういうクリスマスマスのシチュエーションなんて知らねえ!!

こんなリア充のイベントを体験した事ねえ!!

経験値不足過ぎて俺の脳味噌はすでにボドボドです!!

「気に入ってもらえたかしら?でも、もつといっぱい私からのクリスマスプレゼントを受け取って欲しいわ」

「え?.....マジで?」

彼女いない歴前世を含めて60年以上の童貞達人の俺を殺すと申しますか?

心臓バツバクですよ?

これ以上とか俺の煩惱爆発すりゅ.....

「さあこつちを向いて、もつと食べさせてあげるわボウヤ♡美味しい料理も.....私も.....ね?」

「.....」

「今日は聖なる夜、毎日頑張るボウヤに私からの贈り物をたくさん用意したわ。私自身も含めて.....今宵奏でる音楽は貴方にだけ聴かせる純恋歌(ラブソング)なのよ♡きつとボウヤも気に入ってくれる筈だわ♡」

潤む黄色い瞳が俺を捉えて離さない。

頬を染めながらも微笑む彼女はとても美しい。

フリードリヒからの視線はこう言っている。

ここまでお膳立てはした、後は貴方次第だと。

正直ヤバイ。

これしか脳裏に浮かばない語彙力も無さ過ぎて本当にヤバイ。

というかこれ据え膳やんけ。

しかも全部準備が終わって御丁寧に箸まで持たされて食べる寸前。

自分のタイミングで何時でも始められる様に待っていてくれる状態だ。

「ボウヤが奥手なのは知っているわ。だから私も積極的になるのよ

……こんな風だね」

「おおお、おま………」

フリードリヒは胸で挟んでいた俺の左手をそのまま内腿に置く。スベスベして柔らかくて暖かくてヤバイ!!

それよりリビドー戦線が崩壊しつつあつてそのまま手を出しそうだ。

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!!

まるで電撃作戦を仕掛けられているかのような全面攻勢に、俺の理性はすでに敗走し始めている。

「あん♡ボウヤ、いいわあ♡もつと私にその身を委ねて♡」

「お、おれは………」

気が付いたらフリードリヒの内腿を揉みしだいていた。

もはや左手は制御不能。

言語中枢だつて言葉を紡ぐ機能が麻痺し始めている。

残った理性でブレーキを掛けなければ、そのまま乱暴に抱きしめて唇を奪ってしまうだろう。

聖なる夜が性なる夜になって、そんな性なる夜に俺はフリードリヒに贈り物をその身に注ぎ込む事になる。

「さあ、私とボウヤの協奏曲（コンチエルト）を始めましょう?」

耳元で囁く言葉にもはや抗う意志は………無い。

協奏曲……ああ、上等だ。

俺とフリードリヒで奏でる協奏曲はきつと、重く、激しく、刹那的で………淫靡さが重なり合う狂騒曲にも聞こえるだろう。

もはや止める術は無い。

最後の軛は既に解き放たれた。

ただ………ただ貪るだけ。

その豊満な胸を手で触り、感じ、そして味わう。

触り心地の良い内腿も撫でてその奥深くまで好奇心と色欲、そして征服欲が満たされるまで、満足し満たされるまで堪能しよう。

さあ、聖なる夜の贈り物を届けよう。

「お肉だー！！！！」

「ぬあっ!?!」

「あら?」

リビドーを開放しようとしたその瞬間、食堂に大声が響き渡る。

驚いた俺はフリードリヒの内腿に触れ、胸に挟まれた腕を引き抜く。

そして食堂の入口を見るとそこには目を輝かせ、耳を立てて尻尾を千切れんばかりに振りたくる重桜の駆逐艦 夕立の姿があった。

それだけではない。

各陣営のKAN—SEN達が食堂へとぞくぞく入って来たのだ。

「これはいったい……………」

「あらあら?」

二人揃って首を傾げていると料理の肉に釣られた夕立がテーブルまでやって来た。

そしてヨダレたつぷりの口を開いて

「お肉食べていいか!? パーティー用に準備してたのをロイヤルのシリアスが全部ひっくり返して食べれなくなったんだ!! なあ良いだろおしきか〜ん〜」

視線をローストビーフに釘付けにしたままそう言ってきたのだ。た。

周りのKAN—SEN達も羨ましそうな、食べたそうな表情でこっちを見ている。

俺とフリードリヒは思わず顔を見合わせて、どちらかともなく笑い出す。

「ああ、皆も一緒に食べよう」

「ええ、たくさんあるから皆で食べましょう」

そしてそう言って皆に誘いを掛けるのだった。

楽しい楽しいクリスマス。

少し俺の理性は吹き飛んでしまったが………仕方ないだらあんなもん。

しかし、皆が来たからうやむやに………ちよつともつたいない………

でも皆と一緒に食べるクリスマスディナーは美味しかった。

また来年もこんな風に皆と楽しめるように頑張るとしようか!!

~~~~~

「………貴女の仕業ね?」

「ええ、そうです」

寮の帰り道、夜の帳が下りる夜道の中で私 フリードリヒ・デア・グローセは暗がりの中にある電灯の下に居るKAN—SENに声を掛ける。

そこに居たのは重桜の巡洋艦 神通。

重桜の軍師と言われる彼女の眼は閉じられている。

その脳裏に浮かぶのはいったいどのような策謀なのか。

「あの一航戦達の蛮行をロイヤルのメイド達に悟られずに行わせるなんて、貴女か天城くらいだわ」

「でしようね」

本当はこんな答えの分かっている事なんて聞きたくはない。

でも………一呼吸置きたいのだ。

何か策を仕掛けていた。

おそらく私のような行動を取る者を炙り出す為に。

それも特別な日にボウヤを罠に使うという豪華な餌まで使ってた。

だから……………

だからこそ……………

「貴女は私の敵なのかしら？ねえ……………神通？」

自身の右手には指揮棒（タクト）が現れる。

私の背後には既に展開していた長大な龍を模した一對の艦装が、今にも神通に牙を向かんと威嚇していた。

これは私の意思でもある。

私達の、私のボウヤを囮に使うなど……………言語道断である!!

大切に仕舞い込んでしまいたい程に愛しいボウヤ。

この身の全てを掛けて傷付いた心を抱きしめて、癒やし、そして暖めてあげたいと願うボウヤを使うなど……………仲間とはいえ、赦し難い暴挙である。

「答えなさい神通。嘘偽り無く、そしてボウヤを囮に使ってまでしたかった貴女の企みとやらを全て」

やっと、やっと皆との日常や触れ合いでここまで心を赦してくれたのだ、ここでその心を踏み躪るような真似を許せない。

どのような策であれ、ボウヤの為であったとしても……………私は止まれるのだろうか？

もしも下らない理由であれば……………私の艦装達が奏でる交響曲（シンフォニー）の一曲になって貰おう。

ボウヤをその様な理不尽な出来事や謀に委ねてなるものか!!

「……………ええ、お話ししましょう。その全てを聞いてから考えて欲しいのです……………彼の事を」

「……………聞きましょう」

指揮棒（タクト）を神通に向けたまま話を聞くことにしよう。

ボウヤを守るのは私の役割。



他の誰にも委ねる事は無い。

私の大切なボウヤ、何処までも互いに溶け合う程に何処までも求め合いたいボウヤは……誰にも傷は付けさせないのだから!!

## 第51話 ライプツイヒとニユルンベルクと夜這い

指揮官です。

月も頂点を過ぎる丑三つアワーな深夜。

ロイヤルの陛下が最高の使い心地だと太鼓判を押す、ロイヤルス  
ワイート級キングサイズベットでこれから入眠しようとしていたの  
ですが……この私室に誰が入ってきました。

とうるかマジで誰？

「こんばんは指揮官さん」

「こ、こんばんは」

「ライプツイヒにニユルンベルク？ 一体どうしたんだこんな時間に  
？」

入って来たのは鉄血巡洋艦のライプツイヒ姉妹。

姉のライプツイヒは金髪ショートボブに赤い瞳、妹のニユルンベル  
クは同じ赤い瞳に銀髪の超ロング三編みポニーテールである。

姉妹だけあって体型はよく似ており、何処ぞの許不和バりにフワフ  
ワボインなお胸様に、大泥棒三世に出てくる泥棒美女並みの蠱惑的な  
ヒップを兼ね備えた美少女達。

そんな姉妹が俺の私室へやって来る？

しかも見ろよ……お揃いの黒色スケスケネグリジエにほぼ紐な  
超重要拠点のみしか覆っていないショートツしか身に着けてないって  
………え、え、っ!?

「ふ、二人とも……その格好は……」

驚愕する俺を他所にライプツイヒはにこやかに嗤い、

「夜這い、しに来ました♡」

そう言って俺の居るベットへ近寄って来た。

いやいやいやいや!!

待て待て待て待て!!

いったいどういう事なんだってばよ!?

二人共頬を赤らめているけど、表情が違う。

ライプツイヒは蠱惑的でこの日を待ち望んできたというような笑みを、ニユルンベルクは恥ずかし過ぎて死にそうだけど、この時を逃さないという覚悟を決めた表情をそれぞれ浮かべている。

それにライプツイヒなんてショーツにスケスケネグリジエだけの自身の身体を、惜しげもなく披露してらっしやるのだから目に毒とかいうレベルじゃねえぞ?

対照的にニユルンベルクはというと、覚悟を決めた表情をしてはいるものの、やっぱり少し恥ずかしいのかお胸様と局部を手で隠そうとされていて逆に艶めかしく見えてしまっていた。

「指揮官さん、失礼しますね?」

「……………失礼します」

そんな事考えていたら二人が両サイドから、ライプツイヒが俺の右側に、ニユルンベルクが左側に入って来る。

いや、ニユルンベルクは今にも火を吹き出しそうなくらい顔真っ赤だぞ?

ってか柔らかかつ!?

いろんな所が柔らかい!!

フワフワなお胸様だけじゃねえ!!

俺の腕に当たる二人の肌が柔らかくて暖かくて……………マジで良い匂いがする……………

「お、お前ら……………夜這いって……………」

狼狽えながらもとりあえず二人に聞いてみる。

もしかしたら一緒に添い寝する事を夜這いと思ってるらっしやるかも……………

「指揮官さん、私とニユルンベルクちゃんのどっちから先に始めますか?えっと……………二人同時も、有りですよ?」

俺の耳元に口を寄せたライプツイヒにそんな事言われたらもう確

定ですな。

これ逆夜這いですわ!!

俺の全身の筋肉を使ったマツソー会議で満場一致の逆夜這い(意味深)判定です!!

「い、いや……突然過ぎてよく分からないのだが?」

煩悩的リビドーが爆発寸前ではあるものの、残り少ない理性で惚けてみる。

ここでいきなり姉妹丼で3Pとか上級者過ぎるから!!

ここで日和つたとか言うな。

極上の美少女二人からいきなり求められたら童貞はキョドるし日和るって!!

そんな暴走しつつある思考の俺の顔を急に左側へと傾けるニユルンベルク。

どしたの?

「……………本気ですよ?……………んんっ、ちゆる……………んあ……………好き……………好きですよ指揮官さん」

ニユルンベルクにディーブなキスをされ、そのまま大胆な告白をされました。

大胆な告白は女の子の特権だよね!

でもそれをされた方は心臓の心筋達が誤作動かと思うくらい動きまくって止まらないのよ。

「お、おま……………ぬっ!」

「こっちも、ですよ?ちゅう……………ふあ……………えへへ♪キス、しちやいました♪」

狼狽えている間に今度は反対側のライプツイヒが、俺の顔を向けさせてキスをする。

ニユルンベルクのようにディーブなキスではないが、じつくりと堪能するかの様に優しいキスからの照れた上目遣い。

これこっちが恥ずかしくなるヤツ……………

二人の全面攻勢に理性の最前線は既に敗走を繰り返し、気が付けば……………俺は……………

「あ♡指揮官さん……………」

「ひゃあつ?!だ、大胆ですね。でも……………良いですよ?」

両腕で二人を抱きしめていた。

満更でもないライプツイヒに、少し驚きながらも胸の前で手を組みながら受け入れるニルンベルク。

とうとう……………とうとうこの童貞を捨て去る時がきた。

スタイル抜群で極上の美少女である二人を相手に、満足させる事が出来るのか?

男として……………いや、漢として彼女達の心意気を組んで全てを頂戴するのが最早義務だろう。

このスベスベモチモチの綺麗な白い肌を、ほんのり朱色に染めた彼女達は準備万端。

ならば後は俺の覚悟のみ。

「俺で……………良いのか?」

これは最終確認。

彼女達に問うているのでは無い。

自分自身に聞いている。

こんなにも俺の事を好きでいてくれる二人を幸せに出来るのか?

その覚悟の程を自分自身に聞いているのだ。

「はい♡」

俺の問いに二人は息を合わせた様に即答する。

よし、覚悟は決まった。

二人の期待する様な表情に俺は腹を決める。

絶対に幸せにしてやるからな!!

「……………あ?」

そこまで覚悟した俺の身体に起きた不幸。

猛烈な睡魔。

ソイツが俺に襲いかかってきたのだ。

視界が歪み、焦点が合わない。

原因は分かっている。

明日も早いから寝ようとして眠れず、モヤモヤしていた所で以前不知火に睡眠薬を貰っていた事を思い出した俺は、一錠だけでいいと言われていたのに、眠れないからといって五錠ほど内服してしまったのだ。

そして、それが今になってそれが効いてきている。

ここで寝ちや駄目だ!!

せつかく覚悟を決めたのに……………

ライプツィヒやニュルンベルクの想いを無駄にしては……………

「……官さん?」

「指揮……!!」

二人が俺を呼んでいる……………

駄目だ……………意識を……………保っていられな……………

「……………」

目が覚めると、私室のベットに一人で寝ていた。

両脇に居たはずの二人は居ない。

二人がいた筈なら残り香がある筈。

少々変態的だが寝ていた布団の匂いを嗅ぐが……………何も匂わん。

つまりこれは……………

「夢……………か?」

いや、めつちや恥ずかしいんだが?

夢とはいえ、部下二人に扇情的な格好させてそれで興奮する上司ってなんだよ?

セクハラクソ上司やんけ。

「夢で良かったのかもしれん……………」

そろそろベルファスト達、ロイヤルメイド隊の誰かが起床の声掛けをしに来るだろう。

だがその前に……………

「煩惱退散マツソーじゃあああああ!!」

腕立て500回、腹筋500回、海老反り500回、腿上げ500回の感謝のマツソー25セットでアホな煩惱塗れな脳内を叩き起す!!

そんな夢で変な覚悟を決めて部下を辱めるアホな上司。

ただのセクハラ・パワハラオヤジなんぞに人権はねえ!!

「ぬうおおおおおおおおおおお!!」

とりあえず、無茶苦茶身体を動かす。

煩惱に負けそうになった不甲斐ない俺を鍛え直す為に。

ああもう……………なんで初夢がこんなアホな事になったんだ

……………

新年初の夢がセンチタイプ過ぎた事に悶々しながら……………

~~~~~

「凄かったですね……………」

「これで本番じゃないって……………ちよつと自分が保つのか心配だよお……………」

暖炉のある鉄血寮の談話室で小さなテーブルを挟んで対面しながら椅子に座り、そう話すのはライブツイヒとニルンベルク。

眩しい朝日が差し込む談話室で二人はどこか上の空だ。

それもその筈、つい一時間前まで二人は……………指揮官に良いようにされていたのだから。

ロイヤルメイド隊のメンバーが総出で助けなければ、朝から痴態を見せたまま、指揮官の煩惱が爆発していたことだろう。

想像して欲しい。

体液でドロドロで、粗い息を吐きながら恍惚の表情を浮かべるライプツィヒとニュルンベルクを。

身に着けていたネグリジエは濡れて光り、ショーツなど足首に引っかけたものはいるものの、既にその役目を果たしていない。

その上で全身をビクリビクリと震わせながら、朱色に染まった頬を見せつつ蕩けた声でこうおねだりするのだ。

「もつと……イジメてください♡」

並の男ならここで煩惱が破裂してケダモノになる所なのだが、今回の指揮官は……意識が無かった。

というかこれが一番悪かった。

指揮官は寝相が悪い。

M1ガーランド風によく似たライフルを片手に毎日寝ていたので、寝ながらライフルが無いのにその整備を無意識にしましう程に習慣付いてしまっているのだ。

それがどのような出来事になるのかは、他のKAN—SENで実証されてしまっている実績がある。

巻き込まれたKAN—SEN達は最初は戸惑い、困惑して抵抗するが……だいたい墮ちる。

それによるリピーターが多いのもまたこの母港ならではの所だ。

ちなみに一番のリピーターはベルファストで、二番はシェフィールドである。

シェフィールドに至っては下着を着けていない派なので、ベルファストのヘルプが入る事がしばしば。

本人曰く『下着を着けていない事にこれほど感謝した事はありません』と普段は見せない笑顔で語っていたらしい。

そんな魔の手に初挑戦した二人。

ちよつと文字に書けないデルタゾーンの部分のお豆や危険地帯の

奥地を丹念に磨き上げられ、自身でも割と大きいと思っっている霊峰とその頂きを撫でられ、摘み上げられる。

しかも指揮官は意識が無いのでノンブレイキのフルスロットルの朝までコース。

自分ではした事もないような場所まで丹念に丹念に整備された二人は……それを感知したりピーターの一位と二位に揃って介護されながら、部屋を後にするという事態に陥ってしまっていた。だが二人に後悔は無い。

本番こそ無かったが、それでも自分達の被虐心を満足させる事が出来たのだから。

それはもう堪能した。

自分ではブレイキをかけてしまう所を無遠慮に弄られ、辱められる。

意識が無い指揮官は高みに恐怖を抱き、その手を止めようとする力な二人をあつという間にその先へと昇天させたのだから。

「今回は指揮官さんが寝ちゃったけど、次……だね？」

「まだ足が震えてる……でも、また……欲しいです」

恍惚とした表情で次を期待する二人。

事前に決めていた夜這いの覚悟なんて、実際に受けた指揮官からの施しに比べれば風に吹かれて飛ぶ紙切れ同然。

事が終わってロイヤルメイド隊が、全てを隠蔽してくれたお陰でおそらく指揮官は気が付いていないことだろう。

また次を……その次もまた。

その想いを胸に笑みが溢れて期待が止まらない。

「教えてくれたベルファストさんとシェフィールドさんには感謝しないと。いっぱい愛して貰えたし、さかなきゅんにも自慢しなきゃ♡」
「そうね。そういえば前に参加したアルバコアちゃんなんて、大鳳さんと一緒だったみたい。二人共意識が飛んで戻らなくて、ロイヤルメイド隊の人達が大変だったらしいけど……わ、私が……そ、そんな風にされたら心臓が保たないかも」

秘密を共有する者同士で話が盛り上がる。

それは指揮官には内緒の秘密の花園。

しかし、その話題の中心は指揮官であり、心の底から慕う殿方に慰めてもらう話題ばかり。

いつか選んでもらうその時に……指揮官は自分が何をやらかしてしまっていたかを知る事になるだろう。

バレンタインデー特別編その2!! (エンタープライズと手作り) 追記有り

指揮官です。

今年もやって来ましたバレンタインデー。

なんというか……やっぱり量が……量が多いです。

前世とか母親からしか貰えなかったのに、凄い嬉しいよね。

量が多いというのは贅沢な悩みなんだろうなあ……

「まあ二口位で食べる量なのはありがたい」

私室で椅子に座ってテーブルに載せられたチョコを掴み取り、そう言いながら口に運ぶ。

む、これはリアンダーのか？

ハート型の小さなチョコレートだが、そこにホワイトチョコで縁取りなんかをしていてなかなかお洒落だ。

手作りチョコってだけで、本当に嬉しくなる。

こういった少し凝ったやり方も、KAN—SEN達それぞれ違おうで見てるだけでも面白い。

「さつき食べたラングレーの文字入りのチョコといい、本当に俺が食べて良いのか悩む位の工夫がしてあるなあ……」

まあ義理チョコなんだろうけど……

だいたい母港に俺しか男が居ない時点で送る相手が限られているのも問題だろう。

たった一人しか居ない男の上司に送る義理チョコ……

なんか涙出そう。

「……いや、皆の優しさにこの涙は出ているんだ」

若干の虚しさを感じつつ、次のチョコを手に取りろうとした所で

……私室の扉をノックする音が聞こえた。

チョコを渡しに来た誰かだろうか？

渡しに来してくれるのは素直に嬉しいし、待たせるのも悪い。

早速入ってもらおうか。

「入れ」

「失礼するぞ指揮官」

入って来たのはユニオン最強とまで称される空母 エンタープライズ。

姉のヨークタウンに似てモデルのような均整の取れたスタイルを誇り、灰色に近い長い長い銀髪に青紫色の瞳を持ち、金色の縁取りがされた白いシャツと黒いミニスカートを着て、裏地が赤色の黒いロングコートを身に着けている。

黒いニーソとロングブーツを履き、頭には海軍将校の被るような帽子を乗せ、いつも自信に満ちた表情を浮べて戦場をたった一人で支配するほどの強さを誇る彼女に、俺は何度助けられた事だろうか。

そんな戦場では無双を誇る彼女は何処か落ち着きが無い様子で入室してきた。

まあ上司にチョコ渡しに来るとかちよつと位緊張するか。

でも手渡ししに来てくれたのは素直に嬉しいかな。

「その……だな。指揮官、貴方に渡したい物があるんだ」

「そうか。エンタープライズが直接くれるんだ、ありがたく頂くとしよう」

「ああ、そうしてくれると嬉しい。今回は……手作りチョコレートに挑戦してみたんだ……少し不格好でも笑わないでくれ」

「そうなのか？それは嬉しいな。是非、受け取らせてもらおう」

手作りチョコか。

あの効率ばかり求めて食事もエナジーバーやレーションで済ませるエンタープライズが、手作りしてくれるなんて……正直嬉しいな。

前もその前も既製品のチョコをラッピングしただけのチョコだったし、エンタープライズが手作りするなんて本当に気合が入ってるぞこれ。

嬉しくなった俺は、早速エンタープライズから受け取ったチョコの包装紙を外してチョコの入っている箱を開けた。

すると中から出てきたのは手の平よりも少し小さいハート型の
チョコレート。

そしてその中央にはホワイトチョコでLOVEの文字が
描かれていた。

ヤバイ、めっちゃ嬉しい。

このLOVEの文字もよく見たら少し歪んでいる。

頑張つてゆつくり丁寧にエンタープライズ自ら書いたものだろう。

普段は本当に料理をしない彼女が頑張ったんだ、しかも俺の為にだ
ぞ？

嬉しくない訳ないだろうが。

「いい出来だ。早速頂くよ」

「お、お世辞でも嬉しいな、ありがとう。ベルファストに習いながら
作ったんだ。味も保証する」

照れくさそうに帽子を目深に被るエンタープライズ。

そんな彼女に微笑まじさを感じながら俺はチョコを手を取った。

「そうか、頑張ったな。では……………」

「……………」

エンタープライズの唾を飲み込むゴクリという音を聞きながら、カ
リツと小気味の良い音を立ててチョコを齧る。

よく噛んで味わうと、舌に仄かな甘みと苦味を感じた。

これはビターチョコか？

確かに甘い物が多かったが、ここでビターチョコというのは少し斬
新だな。

でも甘い物ばかりで変化が欲しかったのは事実だ。

たぶん、これはベルファストの入れ知恵かな？

そんな事を考えて味わっていたら、エンタープライズが胸元で手を
組んでこちらを見ている。

んん？なんでだ？

なんでそんな表情でこっちを見てるんだ？

そこまで考えてもう一口チョコを口に入れて完食する。

一方エンタープライズは段々と不安そうな表情を浮かべるように

なってきた。

圧倒的不利な戦場でも見たことない表情なんだが……………

まあでも本当に美味しかったなあ……………ん？

ああ、そうか。

俺は味の感想を彼女に言っていないかった。

それが原因か。

そこまで考えて苦笑し、しっかりとエンタープライズの目を見て

「ありがとうエンタープライズ、とても美味しかったよ」

自分にできる最高の笑顔でそう伝える。

感想を聞いた瞬間の彼女の表情は、まるで無垢な幼子が喜んだかのような明るい笑顔だった。

この後、余韻に浸っていたエンタープライズとチョコを渡す為にやって来た重桜の赤城が鉢合わせてちよつとした修羅場となったのはご愛嬌。

でもこんなに気持ちの籠もった物を貰えるってのは良いことだよな。

俺はここに来れて……………本当に幸せだよ。

~~~~~

「まったく、赤城の奴め。あんなに怒らなくなっちゃっていいじゃないか」  
せつかく指揮官に手作りのチョコレートを食べてもらい、美味しいと言ってもらえた嬉しさが台無しだ。

なんでも私より先に渡そうとしていたらしく、チョコレートも私と同じビターチョコだったらしい。

……………ベルファストに言われて早めに持っていたのは正解だったな。

「それにしても……………ふふふ♪指揮官に喜んで貰えるなんて本当に嬉

しいな。……やっぱり、愛して……いるからかな？」

その言葉だけで胸が締め付けられる。

この想いを自覚したのはかなり前、それこそ指揮官が指揮官として私を隷下に置いた頃の話だ。

実際にセイレーンに通常戦力で挑み、勝ち、そして背中で語って皆を率いる姿に私は惚れ込んだと言ってもいい。

諦めず、挫けず、自由を手にする為に抗うまさにユニオンの夢見るスーパーヒーローのような姿勢は私の心を掴んで離さなかった。

「でもそれだけじゃなかった。あの人の本当の素顔は……とても傷つきやすくて、だけど皆を心配させないように隠し、どれだけ傷付いても優しくいられるような少し不器用な人」

そんな素顔を知ってからは、本当に大変だった。

いつも思っていた。

どんな戦場でも凛々しく指揮する貴方を抱きしめたいと。

皆に変わらぬ笑顔で接するあの人にもう良いんだと伝えてあげたいと。

リノがヒーローを支える存在になりたいといつも言っているように、私も彼を支えたい。

でも私は彼に、ヒーローとしての役割を押し付けたくはない。

だって……彼は人なのだから。

そう、漫画や映画のスーパーヒーローのような存在でありながらも、生身の感情を持つ一人の人間。

それが彼だ。

だからこそ護りたい。

彼の全てを。

力強く、雄大で、鮮烈に皆を照らし続ける彼にだって、気を休める宿り木や木陰が必要なんだ。

太陽が昼を照らし、水平線に沈んで休む時間があるように、私が彼を優しく包む夜の闇になりたい。

「その為の第一歩。そうだ、ここから始めるんだ」

この一歩はちっぴけなもののかも知れない。

それどころか他の皆よりも遅れたものなのだろう。  
だが構わない。

それでも諦めない事が必要なのだ。

それぐらいで諦めるのならば、私の想いはその程度だったという事。

でも違う。

こんな事で今まで想ってきたこの愛は終われない!!

「私はエンタープライズ、大いなる挑戦と銘打たれた私は諦めない。  
必ずその先へと進んでみせる!!」

新たな誓いをその胸に、これからの戦略を練っていく。

ビッグEの名は伊達ではないという事を皆に知らしめよう。

その為にも……まずは料理を習おうかな？

ベルファストに頼んで習えば大丈夫な筈だ!!

これが後の私、エンタープライズのメイド隊に仮入隊という珍事件のきっかけとなったことに関しては……ノーコメントとさせて頂く。



## 第52話 お世話とアンカレッジ

指揮官です。

今日はいつもの日課をサクツと終わらせて、執務まで終わっているのですが……ちよつと困った事になっております。

現場は俺専用の浴室。

この母港が出来た時からある、KAN—SEN達用とは別のワンルーム型のシャワーと人一人が足を伸ばして入れる湯船があるだけの風呂場。

普段はここで俺が一人で風呂に入っているのだが、今日は違う。

「せんせー、これくるしい！はずしたい！」

「うえっ?!嘘だろ?それブレマートンから借りた水着だろ?それで苦しいとか大き過ぎるだろ……待て待て待て!!すぐ終わるからな?外さないで良い子にしてくれよ!」

「……うー、わかった」

「よーし、良い子だ」

俺はホツと胸を撫で下ろしながら目の前の事に集中する。

半袖シャツに短パン姿の俺の前に居るのは、風呂用の椅子に座り、ブレマートンから借りた赤いビキニを身に纏うユニオン巡洋艦 アンカレッジ。

見た目は傾国の美少女と言われてもおかしくないダイナマイトボデイに、北欧系の美貌を兼ね備えた完璧美少女なのだが……

はつきり言おう。

精神が幼女である。

彼女は特別計画艦と呼ばれる特殊な建造で産まれたKAN—SENであり、あの許不和のローンやロイヤルメイドじゃないメイドなチェシャー、そして闇の聖母のフリードリヒ・デア・グローゼなんか

が該当する。

特にアンカレッジは第Ⅳ計画艦と呼ばれる最新の計画艦であり、俺が前世で見っていたアズレンのアプリでは見れなかったKAN—SEN Nなのだ。

それ故に建造が始まってからどんなKAN—SENが来るのか楽しみにしていたのだが……

「しき…かん？せんせー？うん、せんせー、アンカレッジ…わーい、せんせー、すきー…せんせー」

ユニオンの新しい仲間を迎えようとその場に居た俺、エンタープライズ、ジョージ・ワシントン、ヴェスタルが、建造と調整を担当した明石を犯罪者を見つめる目で見ると、明石は物凄い勢いで首が取れるのではないかと心配するレベルで横に振りたくった。

そう、アンカレッジは見た目は大学生位で抜群のスタイルを誇りながらも、その精神は幼児……どちらかと言うと保育園入りたてクラスだったのだ。

アンカレッジの言う俺の呼び方であるせんせーも、どこか舌つ足らずな呼び方で、正しく彼女の発音を言葉にするならば『しえんしえー』と聞こえる程に幼い。

無垢に笑いながら俺をせんせーと呼んで抱き着いてくる彼女を他所に、俺はどうしてこうなったのか頭の中で困惑し続ける羽目になったのはつい先日のものである。

さて、現在に戻ろう。

普段は薄い金色の長い髪をツインテールにしているアンカレッジなのだが、今はそれを解いてしまっている。

そもそもお風呂場にいる理由が理由なんだが……

アンカレッジはその精神の幼さ故に孤独を嫌う。

つまり、一人で風呂は入れないし、夜も寝付くまでは一人で居られない。

本当に幼女なのである。

夜はわざわざアンカレッジの部屋まで寝かしつけに行くのが、最近の俺の日常にすらなり始めているのだ。

まあ幼女なのでかなり寝付きは良いのだが。

そしてもう一つ欠点がある。

気を許した相手以外を怖がる極度の人見知りなのだ。

これもまた俺の頭を痛める原因となっている。

気を許した相手も数が少なく、怯えて俺に泣きついてくる事がしばしば……

普段は気を許した相手と日中を過ごしているのだが、今日に限ってその気を許している者達が居ない。

というか俺がミスって全員委託に出してしまったのだ。

そのせいでアンカレッジが……ギャン泣きした。

いつもは居るはずの友達が居らず、絵本を読んだりお絵描きをして寂しさを紛らわしていたようなのだが……限界を迎えて執務室でお茶してた俺に泣き叫びながら飛び付いて来たのだ。

いや、本当に悪かったと思っている。

というか途中で気が付こうぜ俺……

精神年齢3歳から4歳児の子を一人で放置したとかもう……ネグレクトだそれ。

とんでもない事をしでかしたと気が付き、ソファアに座ったまま、悲しむアンカレッジを膝の上に乗せて頭を撫ながらお菓子を与えて優しく抱きしめた。

もちろん謝罪の言葉を言いながらな。

ごめんな、ごめんな、寂しかったな？もう大丈夫だと抱きしめて頭を撫でながらそう言うと言つと次第に落ち着いてきたアンカレッジが、お菓子を食べつつ笑顔を見せてくれはじめた。

そこでようやく一安心。

だが、そうは問屋が卸さない。

アンカレッジの身の回りのサポートをしてくれる人が居ない。

気を許した相手が今の母港には俺しか居ないのである。

つまり……一人では生活できない幼児のアンカレッジをサポート

トできるのは俺しかないという事。

ここで最初に戻るのだが、食事、お風呂、寝かしつけの全てを俺一人で行わなければならなくなってしまったのだ。

そして現在お風呂。

ベルファストを筆頭にしたロイヤルメイド隊に女性の入浴についてレクチャーを受けて、体型が似ているであろうブレマートンに水着を借りてのお風呂だ。

本当に苦労した。

何も分らない状態からのスタートで、俺はどうすればいいのか分からなさ過ぎたのだから。

それでも教えてもらった通りに手順を踏んでいく。

アンカレッツジの髪を傷付けないように優しくブラッシングしてからお湯で軽く濯ぎ、シャンプーを手に取って泡立ててから優しく泡で洗う。

決して擦らず、泡だけで洗ってしまう繊細な作業に、筋肉で対応できない手先の器用さが求められる事になるうとは……………

しかもアンカレッツジは髪の量が多いし、長い。

普段は何人かが手伝ってくれているそうなのだが、それを今回は俺一人で行う事になってしまった。

髪を洗う間は寒くならない様にタオルを身体に掛け、シャワーからお湯を出して掛ける。

……………髪を洗うだけで三十分以上の時間を費やしてしまったのは俺の不器用さだけではないと信じていたものだ。

トリートメントもしっかりと髪全体に塗り終わり、軽く流したこの瞬間の達成感は……………筋肉との対話を完遂できた時にも勝るのではないのかと思うほどである。

「ほーら、終わったぞアンカレッツジ?」

「せんせー、ありがとうー」

キャツキヤと笑いながらお礼を言う彼女を見ると、ここまで頑張った甲斐もあるというもんだ。

苦笑しつつも微笑ましいアンカレッツジの様子に癒やされていると、

次の問題から思わず現実逃避したくなる。

顔は髪を洗っている間に洗顔フォームの泡で、しっかりとアンカレッジに洗ってもらった。

それでも彼女に指示を出して実行するまでにかかなり苦戦したのだが……………

だがここから……………ここからである。

本当の戦いはここからなのだ!!

「せんせー、ぽよぽよとかも、こしこしする?」

「そ、そうだな……………ご飯もあるし……………急がないとな」

「うん、ごはん♪ごはん♪」

「やるしか……………ないのか……………」

途方に暮れる俺とは対象的に、かなりご機嫌なアンカレッジ。

この後に控える夕食の事も考えれば、急がなくてはならない。

頭と顔は洗い終えた。

ならば次は……………身体を洗わなければならない。

精神が幼女とはいえ、身体はヤバい。

ブレマートンよりデカイお胸様とか……………後ろからはみ出て見え  
てるしなあ……………

ここで彼女が言うぽよぽよとはお胸様の事である。

実際に見ていたら本当にぽよぽよしてんだよなあ……………

「せんせー?」

「ん?!お、おう、こしこし…しようか!」

「うん♪」

そんな事考えていたら不思議そうな表情で振り返るアンカレッジ  
に見られていた。

相手は幼女だ!!

相手は幼女なんだ!!

幼女に欲情する奴なんかおるう?

俺は指揮官だ!!

マツソー神を主神とした筋肉教典の信者……なら日和る事はないよなあ!!

「それじゃあ、こしこしするぞ?」

「は〜い」

楽しげに両手を上げてバンザイするアンカレッジを尻目に、俺は専用の泡立てスポンジでボディソープを泡立てて、泡を手取る。

確か女性の肌は傷つきやすいから直接擦らないようにと言われていた。

ぬるま湯で先に身体を流していたので、あとは洗うだけ……そう、泡を使つて身体を洗うだけ……

肩と背中からゆっくりと泡で撫で付けるように拡げていく。

「あ……ん、はう……ん……せん……せー」

「ど、どうしたアンカレッジ!」

「んーん、きもちいい……ん、んん……」

いやいやいやいや!!

急にアンカレッジが喘いだんだか!?

俺は何も間違つた事はしてないはずだぞ!?

手が止まりそうになるが、ここで止めたら絶対ヤバい気がする。

アンカレッジには悪いが、手早く済ませないと……

腕と手を洗おう。

そこなら刺激が少ない筈だ。

「せんせーのおおてて、おっきい」

「そうか?」

「うん、あわあわがいっぱい♪」

「大きいからいっぱい載るんだよ」

「すごい、アンカレッジもいっぱいほしい」

よしよし、軌道修正出来た。

だが……どうする?

このまま前を洗うのか?

アンカレッジの大きなぽよぽよを触るのか!?

いや、それは流石にマズイ……

………っ!?

その時、全身の筋肉に稲妻が走る。

泡だ、泡に興味を持って今なら!!

「ほらアンカレッジ、泡さんだぞ?これをぽよぽよとお腹に塗ったら楽しい筈だ」

「ほんとう?アンカレッジ、する♪」

「良い子だ」

セーフ!!!

マジでセーフ!!!

泡を渡されたアンカレッジは楽しそうに前を洗い始めた。

第一関門を突破だ。

問題は………ここからだ。

スラリとした長い足は、まだ問題無い。

最大の問題点はその前にある極めて危険なデルタゾーンと、プリンとした安産型のお尻にある。

ここを………俺が洗うのか?

いや、泡で遊ぼう作戦、これでぽよぽよもいけたんだ、次もこれにいける筈。

「せんせー」

「どうしたアンカレッジ?」

「つかれた」

「っ!」

自分のぽよぽよに泡を塗りたくっていたアンカレッジが、疲労を訴えて遊ぶのを止めてしまった………

いつもは複数人で行い、手早く済んでいた洗髪が俺一人だった為に時間が掛かり過ぎて疲れたのだろうか?

これは作戦に支障をきたす事になる。

早急にどうにかせねば……

「ほら、さつきよりいっぱいの泡さんだぞ」

「うゝ、せんせー、せんせーがぬって」

「俺が!」

「うん」

マズイマズイマズイマズイ。

泡への興味が薄れてしまった。

どうする？

このままでは幼女……いや見た目はナイスバディな美少女に泡を塗りたくる変態になってしまう。

考える!!

考えるんだ俺!!

どうにかこの場面を切り抜ける方法を……

「アンカレッツジ」

「？」

「アンカレッツジが頑張って泡さんで下もこしこし出来たら……」

「できたら？」

キョトンとした表情で正面の鏡に映る俺を見つめるアンカレッツジに、俺は最後の切り札を切ることにした。

正直使いたくはなかったが、もはやどうする事も出来ない。

「明日の朝まで一緒に添い寝してあげよう」

「?!ほんとう?!せんせー、いつしよ?ほんとう?」

アンカレッツジの表情がみるみる明るくなっていく。

今までアンカレッツジが俺に添い寝を何度も希望しており、それを断ってきた。

まああんな無垢な感情を全面に出して距離感バグったスキンシップしてくるアンカレッツジに、俺の忍耐が耐えきれないと判断しているからこそだ。

だが今回は違う。

俺からアンカレッツジに添い寝を言い出した。

しかも夜から朝までとか童貞の俺には刺激が強過ぎるのに。

この母港のKAN—SEN達に聞かせたら、キモがられる事間違いないのこれだが、精神が幼女のアンカレッツジならば間違いなく喜ぶは



ず。

例えるなら園児が保育園で大好きでお気に入りの先生を、お昼寝の時間から帰るまで独り占め出来るという事なのだ。

大好きな先生と一緒に居られるのはとんでもなく嬉しい筈だろう。後はその先生である俺が朝まで筋肉心経を唱えてしまえば何も問題には起きない。

まさに捨て身の戦法だが……これは必要な経費と言う奴だ。

「ほんとう？・せんせー、ほんとう？・うそじゃない？」

「ああ、本当だぞ？・今日のご飯はあくんで食べさせてあげるし、寝る前は絵本も読んであげよう」

「やったー！・アンカレッジ、がんばるー！・がんばるね！」

賭けに勝った。

ただ、その代償がデカいだけで。

だがアンカレッジにはその内心を悟らせない。

だってよお……あんなに嬉しそうに喜んでるんだ、これから苦行を耐えようとする考えを表情に出す訳にはいかないだろう？

男は顔は笑って腹で泣く、どこぞの葛飾柴又産まれ的主人公が言っていた台詞だ。

黙って耐えるべきなんだ。

「はやくはやく！・だから、これいらない!!」

「はっ！」

正直油断してた。

だって信じられねえだろ？

目の前でいきなり立ち上がって水着を全部脱ぎ捨てるなんてよお……

結んで止めるビキニの結び目を全て解き、勢いよく脱ぎ捨てられた赤いビキニが宙を舞う。

本人曰くのぽよぽよがバルンバルンと弾み、布地で覆われていた形の良い安産型の肌色の桃が姿を表すとか目の錯覚かと思ったわ。

「せんせー、あわあわ、ちようだい！」

「いや、ちよ、え、ちよ……ええ?!」

「せんせー！」

「あいよお!!」

アンカレッジがこちらを振り返る瞬間、俺はスポンジで泡を作り続ける泡立て器となった。

そう、俺は見えてない!!

バルンバルンと弾むぽよぽよの先端にあった、汚れを知らぬベビーピンクの頂きとか見てねえんだ!!

髪と一緒に薄い金色の茂みとか見てねえ……見てねえんだ

……

「そらあ!!泡さん追加だああ!!」

「あわあわー♪」

息子がギンギンに反応しているのを恥ずかしく感じながらも、泡を量産する手を止めない。

止めたら死ぬ。

俺の社会的なナニカが終わる。

アンカレッジの身体を見ないように泡だけを作り、そしてその伸ばされる手に載せていく。

楽しいなアンカレッジと対象的に、悲壮感すら感じる俺の心は

……ボロボロだった。

その後、お風呂が終わってアンカレッジに自分で身体を拭いてもらっている間、俺は脱衣場の壁で白く燃え尽きていた。

無自覚って……怖い。

俺の心の悲鳴をしかと感じながら……

~~~~~

「あ、にーみせんせー！」

「アンカレッジじゃないですか……というより私に先生は要らないとあれほど……はあ……」

委託先から帰ってきた鉄血の駆逐艦 Z23ことニーミは、笑顔で出迎えるアンカレッジに手を頭に当てながら溜息を吐く。

以前仲良くなろうと絵本を読んであげた際に、懐かれてニーミ先生と呼ばれるようになってしまい、そこを訂正しようとしたのだが……身内に甘いニーミは訂正する事が出来ていなかった。

「しつかりお留守番できましたか？指揮官に迷惑を掛けていませんか？」

「はい、せんせーといっしょ、アンカレッジ、まってたよ！」

「そうですか……やっぱり指揮官、苦勞したんだろうなあ」

「？」

留守中の事は一応聞いていたが、笑顔いっぱいのアンカレッジを見ていたら、指揮官がとんでもなく苦勞した事をニーミは理解していた。

しかし、それでも指揮官は全部やり遂げた事も知っているので、今度会った時には優しく労ってあげようとニーミは思っただけ目を閉じる。

そしてその時にちよつとだけ……そう、ちよつとだけ役得な出来事、例えば……少しだけ良い雰囲気になってしまったりとか……ムツツリなニーミは何かしらの妄想を始めて、そこで両手を頬に当ててその場でクネクネし始めるのだが……

「あのね、にーみせんせー、きのうせんせーといっしょにね、ねたの!!」

そう言っただけニコニコしているアンカレッジに、ニーミはその場で固まった。

しかし、そんなニーミの様子に気が付く事なく、アンカレッジは更なる追加情報をぶち撒ける事となる。

「せんせー、おてて、おっきいのーぎゅーってしてくれだ！」

「……………え？」

そこでようやくフリーズ状態からの回復するニーミ。
いったいどういう事なのだろうか？

自分ですらそこまでしてもらった事は無いのに……………
もしかして……………先を越された？

グルグルと頭の中でそんな考えが回っていると……………特大の爆弾が、それはもうとある魔王の御用達であるJ u - 87の急降下爆撃のような勢いで叩きつけられる。

「せんせー、ぽよぽよをこしこししてね。アンカレッジ、ふわふわピカってなるの♪いっぱいいっぱい♪あたまチカチカきもちいいの♪」

「アンカレッジ!?!」

今まで見たこともないようなアンカレッジの蕩けた表情。

幼女のような無垢な笑顔から、一人の乙女の表情……………いや、色を知った雌（おんな）の顔へ。

いったい昨夜に何が……………いや、ナニが起きたというのだろうか？

そこから始まるニーミ探偵の徹底的な調査。

そして全てが分かった時に……………とあるロイヤルなメイド長と無表情なメイドに全てを聞かされるニーミの姿があったとか……………

ちなみにアンカレッジはお気に召したのか、週3で添い寝をおねだりして指揮官を困らせる事になったとか……………

真相は全て夜の闇の中である。

エイプリルフルイベント発生!!

何故、こうなった……………

「指揮官様ああああ!!」

「指揮かあああん!!」

特設会場に設けられたステージに立つ俺を包む大歓声。

今日がエイプリルフルであるからと、巫山戯てユニオンのアイドルであるサンデイエゴに前の日から極秘にコーチングして貰ったのがいけなかったのだろうか？

しかし、ここまで来たらやるしかない。

俺はマイクスタンドを掴んで引き寄せる。

そしてマイクに顔を寄せ……………

「楽しんでいけよお前ら」

不敵な笑みを浮かべてそう言った。

再び起こる大歓声。

赤城や大鳳、愛宕に隼鷹といったヤベンジャーズ達は恍惚の表情で指揮官LOVEと書かれた大きな団扇を振っている。

ああ、本当に不幸だ……………

こうなりやヤケクソだ!!

全部出し切る勢いでやってやろうじゃねえか!!

「俺の歌を聴けええええええええええ!!」

かかり始めた軽快なミュージックと共に俺はステップを踏む。

アイドルとして妥協を許さないサンデイエゴが監修した振り付けが身体に刻み込まれて、俺の身体は止まらない!!

この日の為に用意したボタンの無い紺色のジャケットが翻りながら俺の身体に風を吹かす。

特注で作ったこの衣装が緊張で流れる汗を吸いながら、俺の身体を曝け出す。

そう、このジャケットの下は何も着ていない。

鍛えに鍛えた大胸筋に腹筋が外気に晒された状態。

下は同じ色のスラックスと革靴を履いているだけで、ジャケットの下には肌着もシャツも着ていないのだ。

サンデイエゴ曰く

「指揮官はあ、筋肉が一番見栄えするんだけどお……衣装も大胆な方が受けると思うんだよねえ♪」

との事で、こんな大胆な格好になってしまったのだ。

振り付けもそれを意識しての身体を大きく見せるように大振りが多く、それを見ているKAN—SEN達は更にヒートアップしていく。

そして再びマイクスタンドを握り近づけて歌うのは……生足で魅惑過ぎるマーメイドな歌。

前世で好きだった西〇の兄貴リスペクトだ!!

もう何度カラオケで歌ったか分からないレベルで本当に好きな歌手だから、歌詞が見えなくてもそのまま唄えるぜ!!

季節感が無くて現在は夏でもなんでもない春なんだが、候補に上がった中でも最初にインパクトのある曲でいこうというコーチからの言葉で決定した。

まあ少しセンシティブな歌詞が含まれているが、歌だから大丈夫な筈だ。

だが選曲は正解だったのだろう。

KAN—SEN達はこれ以上に無いほど盛り上がっているのがステージ上からも分かる。

ここまで楽しんでくると、こっちまで嬉しくなるな。

そんな興奮と共に一曲目が終わった。

キヤーキヤーと楽しげな悲鳴が上がっている。

だが、まだまだ彼女達には楽しんでもらわないとな!!

「おいおい……まだ始まったばかりだぞ? そんなんで着いて来れるのか?」

俺はニヤリと笑いながら皆を見渡す。

KAN—SEN達は一曲で終わるものだと思っていたらしく、次があると分かれると更なる興奮が高まってざわめいていく。

「さあ、俺に着いて来い!!」

そう言って右手を頭上に掲げると歓声が上がった。

ああそうだ、普段は任務や委託なんかで不満が溜まっているだろう彼女達の鬱屈とした気持ちを吹き飛ばしてやるぜ!!

次の曲は凍えそうな季節に温め合う歌だ。

これもまた兄貴の曲だ。

というかカラオケで兄貴の歌以外を唄った事が無え!!

その代わりに採点機能付きのカラオケで、95点以下を取った事が無いのが俺の自慢でもある。

あの特徴的な振り付けを更に大きく腕を振りながら行う。

今の俺には兄貴が着ていた衣装のような長いスカーフは無い。

ならば動きで皆を魅せる必要があるのだ。

サビを迎えてボルテージは最高潮に。

そして俺も満足のいく振り付けを皆に披露出来た事で、ある種の達成感に浸っていた。

だが、まだまだ、もっともっと熱くしなくては。

そう思いながら頭から流れる汗を左手で髪を掻き上げるようにして拭って、こちらを見つめるKAN—SEN達に声を掛ける。

「まだ寒いな……もっと熱くだ。もっと熱くもっと盛り上がっていきよお前等あ!!」

このセリフもコーチからのアドバイスだ。

自分達KAN—SENは、指揮官からのちよつと強めの言葉かけなんかに弱いと。

だから引つ張っていくような言葉で扇動してあげれば、もっと盛り上げる筈なのだ。

会場からは破れんばかりの歓声が響き渡る。

あのアドバイスは本当に正解らしい。

正直、俺が圧倒されそうなレベルの熱気がここに渦巻いている。
だが……………ここで俺が負ける訳にはいかない。
ここまで楽しんでる彼女達に、水を差すような真似なんか出来ないからな!!

「次行くぞおおおおお!!!」

「「「「「キヤアアアアアアアアア!!!」」」」」

俺はKAN—SEN達の大歓声を受けながらジャケットを脱いで左手で襟を持ち、そのまま肩に掛けて右手にマイクを引き寄せて歌い出す。

俺が兄貴を初めて知った歌……………種の機動戦士の第一期OPを!!

その後も唄い続けてアンコールも含めた全8曲を披露した俺は気持ちの良い高揚感を感じたまま、ステージを後にした。

兄貴の歌しか唄えない俺ではあったが、あの熱い歌が俺の心を昂らせて、そのまま筋トレを普段の4倍に増やそうか迷う程の気分の良さだ。

「……………大成功みたいだな」

いまだに聞こえるKAN—SEN達からのアンコールが、俺に笑顔を与えてくれる。

最初は本当にどうしたものかと思ったが、始まってみるとそんな事を気にする余裕すら無い程に興奮していた。

でもそれも今は心地良い。

「エイプリルフルでやって見たが、まあ、悪くはなかった」

控え室の窓から外を見れば、もう夕日が沈み始めている。

明日もまた早い、今日はこのままシャワーを浴びたら夕食を摂って休むとしようか。

「お疲れ様でしたご主人様」

「ん? ああ、ベルファストか」

控え室にノックをして入って来たのはロイヤルが誇る瀟洒なメイド長。

片付けが終わって呼びに来たのか？

そう思って外を見ていた窓から彼女へと視線を移したら……………何か持つてる。

「ベルファスト？……………あー、それは何だ？」

「こちらでしょうか？」

「ああ、その手に持っているやつだ」

ベルファストの手にあるのは……………俺のブロマイド。

明らかにステージで唄っている時のやつだ。

というかいつの間にそんな写真撮ったんだろうか？

「ええ、ご主人様のアイドル活動をされている記念すべき最初の一枚ですから、ご主人様にお仕えしているメイドとして、そしてお慕いしている個人としては手に入れないという選択肢はございませんでした」

「ええ……………」

大事そうに胸に俺のブロマイドを抱きしめる彼女の表情は、まるで恋する乙女のように……………って

「あのなベルファスト？今日はエイプリルフルだぞ？アイドルをやるのは今日だけ……………」

そこまで説明した所で思い出した。

エイプリルフルの大まかな内容を。

エイプリルフルで嘘が許されるのは午前中までだった筈で、それ以降に付いた嘘は現実に、真実にしなければならぬという事を。

慌てて窓の外を見る。

残っていた夕日はすでに沈んで、静かな夜がやってきていた。

「……………スッ……………あ……………ベルファスト？」

「はい、何でしょうかご主人様？私としましても、これからのアイドル活動のスケジュール管理などを任せてくださるといふご相談でしたら、喜んでお受けさせていただきます♪」

キラキラとした目で俺を見つめるベルファストに、俺は否定の言葉

が出せなかった。

いや、こんなにワクワクしているベルファストに、言える訳ないだろう？

そうして暫く悩んで、悩み抜いて……………

「次回の活動予定は未定だ!!!」

先延ばしにする事にした。

未来の事はきつと……………きつと未来の俺が素晴らしい考えで回避してくれる筈だ!!

笑顔で頷くベルファストを尻目に俺はそう願った。

もうエイプリルフルなんて懲り懲りだああああ!!!!

第53話 鈴谷と熊野と。パジャマパーティー

指揮官です。

正直どうしようも無いです。

目の前に広がる桃源郷。

それぞれジャンルの違う美少女二人が、俺をベツトに押し倒して覆い被さっています。

しかも二人はケモミミフード付きの上着（パジャマ）しか着ていません。

下着は二人揃って俺の目の前でパジャマを着たまま脱いで、そこら辺に放置されています。

それに……俺の身体もヤバイです。

どうやら少し前に飲んだ飲み物にナニカされたようだ……

先程から身体の奥底から、グツグツとした噴火寸前のマグマのようにムラムラが止まりません。

「ふふふ、お薬がよく効いているみたいですね？」

「我慢できないって顔してるよ指揮官？」

そう言つて頬を染めつつ嗤うのは、重桜の巡洋艦 鈴谷に熊野。

右側に居る鈴谷は濡れた烏の羽根のように艶やかな黒く長い髪に、琥珀色の瞳を持つクールな印象相まってどこか品行方正な優踏生という印象がある美少女だ。

逆に左側に居る熊野は少しくすんだ長い金髪に青紫色の瞳を持ち、小麦色の肌をしたギャル風の明るい印象の美少女。

こんな対象的な二人ではあるのだが、共通点として一対の赤い角を持ち……イラストリアス達程ではないが、大きなお胸様にくびれた腰、そして安産型のお尻とスラツとしていながらもむっちりした足を持っているのだ。

正直こんな二人が同じ学校に居たら、とんでもない美少女っぷりとスタイルの良さに全校男子が前屈みで学生生活を余儀なくされるところだ。

もし本当に学校に居て、水泳の時間とか男子と女子で分けなければ、どれだけの犠牲者が出た事か……………

そんな二人が俺に覆い被さっている。

これは本当に股間に悪い。

というか何故こんな事に……………

「だいたい指揮官が悪いんだよ？熊野達に手を出してくんないじゃん？」

「そうです。私達は指揮官の視線だけで……………こんなにもゾクゾクしているのに」

二人して俺のパジャマを脱がそうと前開きの上着のボタンを一つずつ焦らすように外していく。

「や、やめるんだ……………」

「指揮官、そんなことないっしょ？満更でもないって表情だよ？」

「これから先の事を楽しみにしている、そういうお顔をされますね」
「くう……………」

マジモンの絶体絶命。

クスクスと嗤う二人に為す術もない。

どうしてこうなってしまったのか？

それは……………アンカレッジの事が関係している。

寝かしつけに行く事が日常となつて寝る時間が遅くなり、眠気を覚えていた時の事。

寝る前だったのでパジャマに着替え、いつも通りアンカレッジを寝かしつけてあくびをしながら母港の廊下を歩いていた所を鈴谷達に目撃され、あれよあれよという間に重桜寮の自室へと招待されてしまったのだ。

いや、あの時はそういう感じじゃなかったんだ……………

遡る事、ほんの一時間前……………

「あ、指揮官じゃん、奇遇だね。そうだ、これから鈴谷の部屋で遊ぶだけだよ。一緒に遊ばない？」

「指揮官も来てくれますか？二人よりも三人で遊んだ方が楽しいですよ」

「む、明日も早いが……………」

そう言い渋る俺。

正直マズイと思った。

これが昼間なら談話室で遊ぶという方法を考えられるのだが、今夜。

ケモミミ付きフードのパジャマを着る熊野と鈴谷の少し煽情的な格好が更にヤバさを引きたてる。

てか丈が長いのを良い事にミニスカワンピースみたいに着ているので、生足を晒し放題とか……………ここは女子校の寮じゃないんだぞ？

これに加えて相手は暴走に定評のある重桜。

もう嫌な予感しかない。

だから丁重にお断りしようとしていた。

そう思っていたら熊野が急に右腕に飛びつくように抱きついてきた。

おい、そんなにくつつくなよ……………張りのあるボインボインが押し付けられて股間に悪いだろうが……………

しかしそんな俺の胸中など知らないとばかりに熊野は頬を膨らませながら

「ねえ、指揮官が全然構ってくれないから熊野は寂しさに死にそうなんですけどお？」

と不満げな様子。

確かに最近は色々有り過ぎてKAN—SEN達全員を相手に話す事など出来ていない。

「というか誘惑多過ぎてまともに話す機会が減りまくってる。

「ああ、それは……………すまない」

「なら私達と今日の就寝時間までご一緒に遊びませんか？少しだけ……………ええ、少しだけでいいんです。私も、指揮官と久しぶりにお話

したいです」

「鈴谷……………」

その事を素直に謝罪する俺の左側に近寄って袖をそつと掴み、悲しげに目を伏せる鈴谷に俺はなんだか罪悪感を感じてしまった。

そんな儂げな鈴谷の頭を撫でて

「そうだな、少し位なら大丈夫だろう」

「やったー！それじゃ行こう!!」

「はい、お部屋へご案内しますね」

苦笑しながらそう言うと、二人は笑顔で俺の腕を引いて重桜寮の鈴谷の自室へ連れて行く。

嬉しそうに喜びながら俺の両サイドから腕を引き、強引に寮の自室へと連れて行こうとする二人にこんな寂しい思いをさせるのは、指揮官失格だろうと思いつ承したんだが………だけどもさかこんな事になるとは露とも思わなかったんだよな………

いや、最初は仲良くトランプでババ抜きなんかしてたよ。

優等生気質の鈴谷の自室が、かわいい系の小物やぬいぐるみで溢れている事に驚くが、まあ女の子であるのだからそれも普通かと自分の認識を改めたり、意外にもパーティゲームに強そうな熊野がババ抜きが弱く、負け続けた事で腹を立ててJOKERのカードを他の手札より少し持ち上げて取って欲しいアピールした時はちよつと笑ってしまったりと。

まあミニスカワンピースと化しているケモミフード付きの上着が割とゆつたりとした作りになっていたので、熊野は赤いブラが、鈴谷は黒のブラがチラチラ見えて目のやり場に困ったのはご愛嬌。

というかゲームでヒートアップする度に熊野が大きくりアクションを取るもんだから、赤いショーツがもろ見えして俺が気まずい思いしてたよ………

普通に楽しい時間を過ごしていた時に、鈴谷が紅茶を用意していなければ………もつと良かった事だろう。

そう、この紅茶こそが諸悪の根源である。

少し休憩という形で差し出された紅茶をなんの疑いもなく受け取って飲み干した俺。

それからまたババ抜きを再開したのだが………今思えば俺が紅茶

を飲み終えるのを二人がずっと笑顔で見続けるのは少しおかしいと考えるべきだった。

紅茶が結構美味しくて飲み干してしばらくした頃に、身体の異変に気が付いたが……もはや手遅れだったのだ。

そして今に至る。

いや、気が付けよ俺。

こんな分かりやすい手に引つ掛かるとか馬鹿じゃねえの？
警戒しないとイケない場面はいくつもあつただろ。

これだけ分かりやすいのになんの疑問も感じないとかさあ……………
とまあ現実逃避はこのくらいにして。

実際どうするよ？

上のパジャマのボタンを外されて、俺の大胸筋や腹筋が惜しげもなく晒されているこの状況。

「これが指揮官の筋肉……マジヤバイんですけど」

「こんな盛りがあって……………あは♪硬くて熱いですね♪」

「お、お前ら……………」

二人揃って好き勝手に俺の大胸筋や腹筋を撫でてやがる。

そんなに撫でたければ、こんな事をせずに言ってくれば……………

いや、そんな事したら俺の股間のタワーがタワーマンションになっちまう。

なんだその絶妙な優しさで慈しむように撫でる手付きは。

背筋がゾクゾクするじゃねえか……………

「この傷跡ヤバっ、かなり深いよね？」

「歴戦の雄々しい身体……………はあ」

「っ?!」

傷跡に吐息をかけるのもやめろ!!

いいか？傷跡つてのは結構敏感肌なんだぞ？

身体がビクツと反応しそうなったのを筋肉で抑え込むのも大変なんだ……………

俺の苦悩を他所に、二人は指先で多数の傷跡をなぞる。

今回は焦らしプレイか？

重桜のKAN―SEN達は肉食系なので、すぐに襲いかかってくる事が多いのだが………鈴谷と熊野の二人はウツトリと俺の身体を触るだけで何もしてこない。

いや、触られるだけで股間のタワーがタワーマンションへと変貌しそうなのを必死のB連打（筋肉）で止めているだけなんだけども。

「ふふふ♪不思議ですか？」

「熊野達が触るだけで、指揮官を襲わないのが気になるんでしょ？」

「!?」

思考を読まれた!?

だが彼女達の言う通りだ。

ここまで据え膳的な状況を整えて置きながらも、最後の一線を越えようとはしてこない。

逆に俺の方が身体を抑え込むのに必死になっている。

盛られてモツコリしそうなのは置いておくとして、不思議な話ではある。

「どういう………事だ？」

「指揮官分らないの？」

「乙女に言わせようとするなんて………鬼畜ですね♡」

「ますます分からんぞ!!」

頬を染める二人に更なる疑問が湧き上がってきた。

だがこれはチャンスだ。

この生殺しの現状を切り抜けてしまうには………ん？

ちよつと今の状態を確認しよう。

今の俺はタイプの違い美少女JK二人にベットで押し倒されて上に乗られている。

しかも二人はすでに下着を脱ぎ捨てて、ケモミミフード付きのパジャマの上だけを羽織っているだけだ。

そして俺は盛られた何かでバベルタワーを必死のB連打で堪えている状況………

「……………据え膳か？」

「あ、分かつちやった？」

「ああ……………気が付かれましたか♡」

思わず口に出してしまっただが、二人の反応を見るにこれは正解らしい。

つまりなんだ……………二人は……………

「指揮官、目の前の御馳走は……………いららないかな？」

「私の身体はどうですか？」

ここぞとばかりに自身の胸を強調してくる熊野と鈴谷。

パジャマから覗く魅惑的な褐色と白い谷間が俺を誘惑してくる。

こんなに美味しそうな果実が目の前に……………あ。

「あは♪ねえ、指揮官……………足に当たってる硬い棒はなあに？」

「熱い……………こちらまで火傷しそうなくらい熱くて張り詰めてますよ♡」

更に密着しようとする俺の身体の上に寝そべる二人の太ももに、堪えきれなくなってしまう俺の主砲が当たっている。

だってπが……………白と褐色のπが……………俺の大胸筋の上でムニユツと潰れてるんだぞ？

そんなの堪えきれぬ奴は居ねえだろ!?

最大仰角を刻む俺の主砲を二人は示し合わせたかのようにその柔らかかでスベスベで、若くムチムチした太ももで触れたり軽く擦ったり……………ヤバすぎ!!

パジャマとパンツという布越しとはいえ、これでは暴発も止む無しか?!

「ふ、二人共、やめ……………」

「良いんだよ指揮官？」

「ほら、触って下さい♡」

「おあ……………」

言葉になっていたかも怪しい呻き声が俺の口から出た。

寝そべる二人は互いに俺の手を取って、柔らかで張りのある軟肉へと導く。

しっかりとその手に感じる感触は、俺にそれが現実であると知らしめる。

右手の平に吸い付くように当たる軟肉は、とても柔らかくて絹に触れているかのように触り心地が良い。

左手の平の張りのある軟肉はムチムチしていて、そのまま揉みだきたくなるような感触が俺の中で劣情を昂ぶらせて渦巻く程だ。

おそらくこの感触の先は、二人のアンダーピーチの軟肉なんだろう。

恐ろしい……ただただ恐ろしい。

リビドーの攻勢をギリギリで堪えている俺の理性を、電動の研磨機で削り取るが如くの所業だ。

俺は……抑え切れないこの衝動を爆発させたい。

このまま一匹の雄として、獣として目の前の獲物に飛びつければどれだけ気持ち良いのだろうか？

もともと据え膳である。

ここまで状況を整えられたらすでに檻の中と変わらないのでは？

なら全て頂戴してしまってもいいよな？

「指揮官、は・や・く♡」

「指揮官の猛りをそのまま私に……強く、激しく、深く、傷跡が残るくらいに刻んで下さい♡」

恍惚の表情を浮かべる二人の声に俺の脳が遂に理性を吹き飛ばし

………た？

「随分と楽しそうな事をされておりますね？」

「薬を盛るとは卑劣極まりないものだな？」

「可愛い後輩とはいえ、これは看過する事は出来ないな」

「……あ」

盛り上がっていた二人は後ろから、そう、鈴谷の部屋の扉から掛けられた言葉に固まった。

というか部屋に入ってきた三人の姿を見た瞬間に、俺の理性がリビ

ドーをふっ飛ばして主砲を最大俯角へと戻すことに成功させる。

部屋に入ってきたのは天城、長門、三笠の重桜における良心トップスリーだ。

実質、重桜のトップである彼女達に睨まれたら何も出来ない。

とりあえず俺に出来る事は………鈴谷と熊野への罰則が軽くなる事を祈ることだろうか？

それからあつという間に事件解決。

鈴谷と熊野は俺に薬を盛って強引に関係を結ぼうとしたとして、俺との接触禁止令二週間。

薬を卸した明石は根性注入棒による臀部百叩きが実施されたそう
な。

俺？現在ムラムラを抑える為に筋トレ中さ!!

………ムラムラが収まんないんだけど………どうすればいいんだよこれ!!!!

おい明石、中和剤!!中和剤をくれええええええ!!!!

~~~~~

「あくあ、あとちよつとだったのにね〜」

「そうですね。ですが次は必ず仕留めましょう」

寮の自室にてベットに並んで腰掛けながら反省会をする熊野と鈴谷の二人。

接触禁止令が出ているというのに慌てる様子はない。

それもそのはず、今回の計画はこういう事態が起こる事を想定して組まれていたのだから。

「だけど時間切れっていうのは味気ないよね。あそこまでいったらあとひと押しして所じゃん？」

「仕方ありません。あの方が用意してくださった時間を過ぎてしまう程に熊野がゲームに熱中してしまいましたから」

「だって悔しいじゃん！負けっぱなしなのは悔しいの!!」

「それで作戦が失敗するのは如何な事かと」

「うっ、……………反省してまゝす」

頬を膨らます熊野に溜め息をつく鈴谷。

あの時に、少しでも早くゲームを切り上げてお茶を指揮官に飲ませたいれば……………そう思わずにはいられない。

二人が太ももで感じた剛直の雄は、その後の一人遊びにて何もかもを燃え上がらせる程の熱をもたらしてくれていた。

もし、その雄々しく熱い剛直を自らの中へと入れていたら？

何もかも、髪の毛の一本に到るまでの自分という存在を味わい尽くされ、蹂躪され、所有物であるという証を刻まれたら？

それを想像するだけで下着の換えが必要になる事は間違いないし、誰も居ない場所であれば気が付かれないように始めてしまっていただろう。

「本当に勿体なかったなあ……………それに明石には悪い事しちゃったよね」

「ですが、最近の明石は痛いのが気持ちいいと言っていますでしたか？指揮官に仕置きをされて、痛みが心地良く感じるからご褒美だとか言っていたような……………」

「え、マジ？それはちよつと……………引くわ」

「そうですか？私は指揮官に乱暴にされながら貪りつくように蹂躪されるのなら……………っ♡♡♡」

「……………ちよつと想像したら私も軽く飛んだじゃん」

ベット上で頬を赤らめて二人仲良く身震いをする鈴谷と熊野。

甘く疼く下腹部を二人揃って撫でながら長い長い吐息を溢した。

もはや反省会をするような雰囲気ではない。

思い出した指揮官の雄と、頭の中で繰り返される痴態が下腹部で

甘く響く疼きを止められないからだ。

今回仕込まれた作戦で、二週間も指揮官と触れ合えないのは残念だが、かなり美味しい思いをさせてもらったのは事実である。

「あとの作戦はあの方に任せて……………少し熱を出さないよ」と

「あく、やっぱりムリ。今日も止めらんないよこれ」

そう言うが早いか二人はベットに寝転がり、自分の手で自身の服の下を弄り始める。

どうせ指揮官と触れ合えるのは二週間後なのだから、こんな熱は持っていても仕方がないし、それはどうにもならない事だ。

ならば溜まっている熱を発散させるのが、一番賢い選択だろう。

「はあ……………ううう……………指揮官……………」

「切ない……………切ないからあ……………欲しいよお……………」

二人の声が狭い室内に響き渡る。

それは指揮官という雄を求める声。

今回は失敗してしまっただが、次なる作戦はすでに桜の御旗の元に立案が完了している。

徐々に狭まる包囲網が指揮官を勝ち取るのは……………近いのかもしれない。

## 第54話 リアンダーとだらける日

指揮官です。

現在母港の私室にて軟禁されております。

というか…………抱き枕？

とある一人のKAN—SENによって右隣から抱きつかれ、筋肉抱き枕にされて動けません。

「スンスン……………はあ……………こういう匂いも悪くないですわ」

「いや、匂いを嗅がれるとか普通に恥ずかしいんだか？」

「いいじゃないですか少しくらい……………スウ〜ハア……………まるでイケナイ薬でも使っているようでドキドキしますわ♪」

「そんな成分は放出してないだろ!」

ベットの上で俺に足まで絡めて匂いを嗅ぐのはロイヤル巡洋艦リアンダー。

金髪碧眼でスタイルの良い貴族のお嬢様系の彼女は、母港においてアキリーズやエイジャックスの姉妹艦であり、よく共にお茶をしているのを見かけている。

柔らかな雰囲気も相まって、ギャルゲーだったら癒やし系のお嬢様キャラで人気も取れる程だろう。

そんな彼女が何故俺の私室で俺を抱き枕にしているのか？

それは……………俺にも分からない。

というか彼女の格好も気になる。

普段は半袖の上着に白いシャツと赤色の膝丈何cmか聞きたくなるような短さのスカートを着て、白いニーソに黒のガーターベルトを付けた魅惑の絶対領域を持っている彼女なのだが……………

「どうですか指揮官様？昨日の朝に届いた新しいルームウェアドレスですの♪このデザインなんて素敵ではありませんか？」

「……………確かに似合っているが」

そう、彼女はルームウェアドレスとやらに身を包んでいたのだ。

薄いクリーム色のそのドレスはかなり布地が薄くて若干肌が透け

て見える。

俺の見る側から見て胸元はエグいくらい開いてるし、その縁取りがレースになってるのが分かる上に側面に大きなスリットが入っており、魅惑の生足っていうか下手するとショーツまで見えそうな程だな。

そんな色気マシマシなドレスをスタイルの良いお嬢様な彼女が着ると…………正直言って股間に悪いんだが？

しかもこれ…………おい、見えてる谷間と下のスリットから推察するに下着着けてないだろリアンダー!?

扇情的過ぎるわ!!

「そう言って下さり嬉しいですわ指揮官様♪背中なんて布地が無くて暑い日でも大丈夫ですよ?少し触ってみてくださいいな♪」

「いや、ちよつ?!」

「そんなに遠慮なさらず…………ひゃん…………あの…………まだ朝になっただばかりなのに、とても積極的ですね…………」

「いやいやいやいや!!事故だ!!」

そう言うのが早いか、彼女は俺の空いている俺の左手を取って触らせようとして……………そこまで俺の手が届かずに自己主張の激しい胸へと着陸を果たしてしまった。

いや、これは事故だろ!?

確かに魅力的なお胸様ではあるが、俺の意思ではないぞ!?

「んう…………その…………そのように、はう…………揉まれたら…………私…………」

「おわつ?!すまん!!」

ヤツベえ!!

俺の意思とは関係なく勝手にリアンダーの胸を揉みしだいていた。前に盛られた薬のせいか、エロい事にノータイムで反応してやがる……………

今日だって本当はトレーニングや仕事に打ち込んでムラムラをぶっ飛ばしてやろうと考えたのに、昨日のうちに普段の仕事と暫く先の案件についての必要書類の作成を行い、普段の十倍くらい筋肉との対話をしていたらベルファストを筆頭としたメンバーに止められて

しまったからな。

オーバーワークだと言われて仕事も筋肉との対話の為の道具も取り上げられてしまった。

それで不貞寝してたらリアンダーに抱き枕にされたんだが……………  
どうしてこうなった……………

リアンダーが上目使いでこつちを見ている。

赤らめた顔に期待をするような目で俺を見ているのだ。

先程のモミモミでそういう気分になったのだろうか？

いや正直こんな美少女にそんなことされたら……………

「指揮官様……………もつと触つて下さいませんか？私、こういう事は初めてで……………指揮官様に触って頂けたら、ナニか来そうで……………」

「ええ!？」

いや、押しが強過ぎないかこのお嬢様？

恋愛強者かよ!!

求めている……………そう、俺を、俺からされる事を求めているのがよく分かる。

ここで求められている事と言えば一つだろう。

「本当ですよ?こんな初めてなのですわ。胸が高鳴って、背中がゾクゾクするような……………ですが無性に切なくなるような感覚……………指揮官様ならこれが何なのかご存知ありませんか?」

「あ、いや、その……………だな?」

「教えて下さい。私、リアンダーに是非とも指揮官様からご教授下さいませ……………んあ……………ああ……………はしたないと思われてしまうかもしれません……………ですがどうかお願い致します」

そう言いながらリアンダーは俺の手をもう一度取つてまた胸に乗せた。

どんどん艶めいていく彼女から視線が離せなくなっていた俺は、リアンダーの胸へと手が置かれた事で我に返る。

おいおいおい。

そんな……………また据え膳かよ……………

しかも無知シチュエーションだと?



性知識が乏しいお嬢様に快感を教えてそのまま致すような、そんなエロゲ的シチュエーションじゃないか……………

正直……………めっちゃ興奮する。  
てかヤバイ。

俺を見ているリアンダーからは見えてないかもしれないが、俺の間が天を指してそそり勃っているのが分かるわ。

こんな良家のお嬢様の美少女のリアンダーが、初めて知った快感をもっと知りたくて身近な男に身を委ねていく……………

こんな美味しい場面で興奮しない方がどうかしてるぜ!!

「り、リアンダー……………」

「指揮官様……………」

思わずリアンダーの方を向けば、彼女もこちらを見つめていた。

その目が雄弁に語っているのが分かる。

この先の事を知りたいと。

ならば童貞ではあるものの、イメージネーショントレーニングだけなら誰にも負けない自信のある俺の出番だ!!

技術もこれから彼女と磨いていけば良い筈だろう。

これから始まるのは、俺とリアンダーの大人の保健体育なのだ!!!

「……………何をしているのかしらこの筋肉豚!!」

「ちよつ、エイジャックス!!これから良い所じゃないの……………面白いモノが見れたのになあ〜」

顔を真っ赤にしながら怒るエイジャックスとそれを止めようとするアキリーズ。

とかいかいつの間に部屋に入ってきたんだ?

疑問に思う俺を他所に、ますますヒートアップするエイジャックス。  
ス。

頭で湯が沸かせそうなくらい赤いんだが?

「リアンダーが居ないから訪ねようと思って来てみれば……………ノックの音すら聞こえない程に情事に耽るなんてね……………この色豚」

「いや、そうは言うけどエイジャックスだって興味あるんでしょ？  
ここはおごぼれに……………」

「それは当たり前……………っ!!??何を言っているのかしら!？」

「あ、やっぱり? いやあく、私も混ざろっかな☆」

「ちよつと!!」

なんかとんでもない事になっている……………

というかアキリーズに翻弄されるエイジャックスとか初めて見た  
わ。

「ちよつと!!いつまでそうしているのかしら!?!早くっ……………降りなさい  
!!」

「ああ、エイジャックス……………そんなに引っ張ってしまつたら……………あら  
?」

「あくあ、私知くらない」  
「あ」

真つ赤になったエイジャックスが、俺から離そうと布地の薄いドレスを着たリアンダーを引つ張った。

そこまでは良かったのだ。

しかし、そこで想定外の事が起きた。

リアンダーの着るルームウェアドレスとらやは前述の通り布地が  
薄い。

それを力強く手加減無しで引っ張るとどうなるのか？

答えは破けるだ。

俺の目の前でリアンダーのロケット気味のお胸様と危険な△ゾーン  
ンがお目見えする。

お胸様にいたっては、ふるんつという擬音が付きそうな勢いで先端  
のチェリーも右と左の二つがエントリーだ。

△ゾーンも髪の色と同じ色で、柔らかかそうなヘヤーが整えられて  
茂っているのすら見えた。

「あの……………そんなに見られますと、私も恥ずかしいですわ」

「あ、いや、すまん!!」

おっとりとした仕草で胸と△ゾーンを手で隠すリアンダー。

俺は勢いよく体ごと反対側を向き、視界から魅惑的な肢体を晒すリアンダーを外した。

思い切り視線が吸い寄せられた……………

マジマジと凝視してしまったぞ。

これ仕方ないだろ!!

目の前に魅惑的な美少女の裸体が現れるんだぞ!?

これを凝視しない奴絶対居ねえ!!

断言するわ!!

「うくん、とりあえずベルファストさん呼ぼうか☆」

「……………えつと……………ごめんなさいリアンダー」

何とも言えない気味い雰囲気の中、アキリーズが呼んだベルファストが来るまで、俺は決してリアンダーの方を見ないように注意してずっと待機するのだった。

その後やって来たベルファストから着替えを受け取ったりリアンダーが、俺が居る室内で生着替えを始めてしまい、俺の情緒が不安定になった事もここに記載しておく……………

俺、よく耐えられたなあ……………

~~~~~

「んもうっ、エイジャックスったら……………もう少しでしたのに……………」

「それは……………申し訳なかったと思っっているわよ」

「エイジャックスってき、初心ってヤツだよね」

「し、仕方ないでしょう!!私達……………いえ、この母港のKAN—SENは、その、経験なんて無いのですから」

ロイヤル寮の談話室で可愛らしく頬を膨らませ、怒るリアンダーと

本当にすまなそうに謝るエイジャックス。

なんとも珍しい光景のだが、そこからかうアキリーズが加わりとなんとも騒がしいお茶会が始まる。

三人がテーブルに着いて優雅に紅茶と茶菓子を手に取りながら進むのは、やはり指揮官との仲が進展しそうであつたあの出来事。

「だいたいさ、あそこまでいったらもう後は美味しく食べられちゃうだけなのにね☆エイジャックスが余計な真似しなきや私達も一緒に頂かれちゃって、今頃毎晩指揮官の私室に呼ばれてたかもしれないなあ」

「それはっ、それはふしだら過ぎでしょう!!」

「えく? 普通じゃない? だってあんなムキムキマッチョな指揮官だよお? 絶対に体力が有り余ってるって☆」

「た、確かに筋肉豚なのは認めるわ……でも、そうとは限らないでしょう!?!……ねえ、リアンダーはどう思う?」

アキリーズの明け透けな言葉に顔を赤らめながら、エイジャックスはリアンダーへと質問を投げかける。

いつもは強気な態度のエイジャックスではあるものの、今回だけはアキリーズに押されて分が悪いようだ。

そんな二人を気にする事なくお茶とお菓子を舌鼓を打っていたリアンダーは、一度その手を止めてフワリと微笑むと

「私はどのような指揮官様でも……その全てを受け入れます。愛しておりますから」

そう言つて再びお茶とお菓子を楽しみ始める。

なんともマイペースなリアンダーの様子に、エイジャックスとアキリーズは思わず顔を見合わせ、互いに苦笑しながら肩を竦めた。

こういう事ではリアンダーには敵わない。

まるでそう言っているのが聞こえるかのよう。

この場において本当の意味での強者はリアンダーなのであつた。

「でもリアンダー? 次にあのような機会が巡ってくるとはあまり思え

ないわ」

「そうだよ。次はどうするつもりなの？」

そんな頼れる強者であるリアンダーへ、二人は次の機会をどうするのかと尋ねる。

これほどまでの強者っぷりを見せたのだ。

おそらくまだ秘策があるのでは？

そう考える二人にリアンダーは

「機会？別に指揮官様とお会いするのに機会を伺う必要がありませんの？いつでもお会いできますし、その時にもっとお互いを知っていくのですわ。ですから、ご用事で忙しい時にお会いすれば機会を伺う必要なんてありませんわ」

「……………」

そう言って二人を黙らせるのだった。

あまりの強者ぶりに何も言えなかったとも言おう。

そのまま沈黙しながらお茶会は続いていった。

強きお嬢様は再び求める。

それは愛する指揮官に染めて貰いたいという一つの願い。

自分のペースで進めるその先には……………彼女の求める愛がある
と信じて……………

クリスマス特別編 アイアンボトム・サウンド鏡面海
域撤退戦 前編

潮騒の音が俺の意識を覚醒させる。

船体を打ち付ける波の音が嫌に心地良い。

やはり自分は海の上でしか生きられないという事を実感させる音だ。

「…………ガダルカナル島及びソロモン諸島沖か」

史実において世界を巻き込んだ大戦である第二次世界大戦。

その戦いにおいて数多くの船や航空機が沈んだ海域であり、アイアンボトム・サウンドと後に呼ばれる場所を俺達、ダストボックス隊は船で進む予定でいた。

「いや、ダストボックス大隊か……………大きくなったもんだな」

自分しか居ない艦長室でポツリと呟く。

ダストボックス大隊、その名の通り現在の隊員数は480名である。

ここに来た奴らは、犯罪者や左遷された連中が多い。

しかし、よくよく話を聞きてみると冤罪だったりクソみたいな理由で上に顔の効く奴に左遷された連中ばかりだ。

本当に犯罪者だったりした奴が居ないのを見るに……………ここは本当の意味でゴミ箱なんだろうな。

「アズールレーンの上層部は終わってる……………ここから本編へどうやって進むんだ？俺がセイレーンなら次の世界に望みを託して捨てるぞ？」

艦長室に据えられた簡易ベットに寝そべりながら考えてみるが、何も思いつかない。

まあ俺如きの頭脳では思いつきもしないような実験に明け暮れているんだろう。

そう思いながら俺はベットから起き上がった。

「そろそろ出港の時間だ」

壁に掛けてある時計を見れば、出港の30分前だ。

少しのんびり休み過ぎたかもしれない。

副長……いや、副長代理や乗船している大隊の全隊員達に、長丁場となる可能性があるから休むように嘆願されて部屋で寝つ転がっていたのだが……結局の所一時間程しか眠れなかった。

休むのも仕事の内なのだというのにな。

「本当に俺には勿体ない位の連中だよなあいつらはさ」

恵まれた仲間達に感謝しながら立ち上がって上着を羽織り、帽子を目深に被って部屋を出る。

さあ………仕事の時間だ

部屋を出て少し歩いた先にある艦内のエレベーターに乗り、最上階の艦橋の階を記したスイッチを押す。

低い駆動音と共に登っていき、エレベーターが止まった先にある扉が開かれると……艦前方を一望できる艦橋が目に入った。

「大尉……いえ、艦長、お休みされていたのでは？」

「代理か、もうすぐ出港だろう？少し早いですが、眠気も無いんで見に来たんだ……新しい船に少しだけ浮かれてな？」

「……目の下の隈は取れてませんよ？あまり眠れてませんね？」

「あく、なんだ。見なかった事にしてくれ。それよりコイツの慣熟訓練はどんなもんだ？俺達の手に余りそうな気もしたんだが……」

艦橋に入った瞬間にやって来た代理に、すぐ目の下の隈を指摘されてジト目で小言を言われながらも苦笑しつつ窓の外を眺めた。

「はあ………とりあえずは、なんとかかなりそうな所ですね。………ですが本当によく貰えましたねこんな船」

「本当にな………」

俺と代理は二人揃って窓の外を眺めつつ話す。

眼下に広がる新品の船体。

艦前方に配置された巨大な二基の砲塔と砲身の長い三連装の主砲

は、それまで乗っていたどの船よりも力強い事を示している。

「12インチ56口径か……既存の戦艦よりも小さい主砲だが、試験で従来の主砲と比較しても高性能って報告だったんだってな？」

「そうらしいですね。……この船も我々と同じで捨てられたモノ、という存在なんでしょう」

「……皮肉なものだな。コイツも時代が時代であれば戦艦として名を馳せていたんだろうが……」

何とも言えない感情を感じつつ、俺達は自分達が乗る船を眺め続けた。

全長250m余り、砲塔4基、主砲12門、533cm4連装魚雷2基、最高船速32.5ノットの俺達に与えられたこの戦艦は……KAN—SENが生まれた事により御役御免にされた船だ。

最新鋭の試作装備特装戦艦として鉄血で建造され、解析されたセイレーンの技術を盛り込んだこの世界における正に最新の技術を粋をかき集めて建造され、国の象徴となる榮譽ある生まれとなる筈だった船は……KAN—SENの有用性や戦略的価値の上昇の煽りを受け、名前すら与えられずに鉄血の軍船登録からの除籍、及びスクラップか標的艦としての末路が決まってしまった。

しかし、そこに待ったをかけたのが鉄血で力を見せつつあったKAN—SENのビスマルク。

KAN—SENも元を辿れば船である。

そんな彼女がこの名も無い戦艦の悲惨な末路を哀れに思ったのか、どうせなら戦って沈んでほしいと俺達を直接指名して送り付けたのだ。

当然、俺達の上は戦艦なんて高級品を与える事に反対したのだが
……

「あら、良いじゃありませんか別に。それにセイレーンの技術を盛り込んで造った艦を試験できるのですよ？人員が少なくても運用できるように設計してあるのですから今後の建造にもその経験は使えま

すし、実戦での情報も貴重な資料となるはず……なら実戦経験の豊富な彼らに渡して使ってもらった方が良いでしょう？」

早くからKAN—SENが実権を握っていた重桜の代表 長門の代理としてアズールレーン本部に来ていた赤城からの言葉が鶴の一声となり、俺達ダストボックス大隊が受領する運びとなったのだ。た。

俺達が受領するまでに面白く思わなかった上の連中がどうか妨害や故障させようと作業員を送り込んでいたみたいだが、重桜に所属する隠密に長けたKAN—SENにより作業員等が捕縛………というよりも公開処刑を行ったと聞いている。

なんでも身内でこのような事をしでかそうとする者はセイレーンと繋がっている可能性がある為、スパイの可能性が高くセイレーンに情報を抜かれる前に即刻処刑するのが望ましいとその場で銃殺刑に処されたとの事。

なんとも恐ろしい話だ。

そして新品そのまままで重桜から信じられない量の資材や備品をたっぷり積み込まれたこの船は、俺達の元へと届いたのだった。

受領の際に赤城から濃密なボディタッチ、いや、絡みつかれるように抱き着かれながらペンを持たされて書類にサインさせられたのは………まあ、置いておくか。

「今回の任務は南の大陸における示威行為の目的の式典に参加せよ、だったな？」

「そうですね。全く、上層部も何を考えているんだか………」

赤城の事を忘れようと頭を振りかぶりながら、今回の作戦を思い出すように代理に聞くと頭を抱えそうな雰囲気ですう答えた。

確かにそうである。

アズールレーンとしてセイレーンと対抗する為に結束を強めなければならぬ昨今の情勢で、重桜を刺激するかのように行われる軍船を集めて行われる式典には少々首を捻らざる負えない。

「しかも人が乗っている船ばかりを集めて式典を行うなんて……KA

N―SEEN主体の政権である重桜を見下していると言つてもいいやり方だぞ？こんな事をしてる場合じゃないのにな……………」

「もしかすると我々の件で痼癩でも起こしたのでしょうか？人ではないKAN―SEENが口を挟むな……………」

「今のアズールレーン参謀本部や元帥は人間至上主義派だからあり得るな……………KAN―SEENに自分達のお株を奪われたと考えてもおかしくはない」

「……………せっかくセイレーンの攻勢を切り抜けて制海権をある程度取り戻し、人類とKAN―SEENが歩み寄り始めたばかりだということに」

「割り切れない人間もいる……………そういう事だろうな。実に馬鹿らしい話だが」

徐々に出港準備が整いつつある艦橋内で俺と代理は、先行きの見えない未来への言いようのない不安を募らせてしまうのは仕方のない事だろう。

だが、指令を受けた身である俺達はそれに従わなければならない。

……………どうせ今回の俺達の役割はこのスクラップ予定だったこの船を新造戦艦としてお披露目する事、そしてKAN―SEENが居なくても人類がここまで出来るのだというプロパガンダの広告として使うつもりなんだろうな。

「……………まったく、嫌になる」

「そうですね……………」

出港日かな晴れ渡る空とは裏腹に、俺と代理の心は曇っていくのだった。

「ああくそつ……………面倒なことになった」

出港から8時間後、鼻つまみ者である俺達に護衛なんて贅沢な物もなく単艦でアズールレーン聯合艦隊との合流地点であるソロモン諸島沖に向かっていると、怪しげな雰囲気醸し出した虹色の空間が広がっているのが見えた。

「これは……鏡面海域というやつですか？セイレーンの連中が展開する特殊な空間だと聞いていますが……」

「ああそうだ。聯合艦隊が見えない所を察するに……“アレ”に飲み込まれたんだろう」

「近海のKAN—SENが在籍する基地へ連絡すべきでは？我々では荷が重すぎます」

代理の言う事に俺も頷く。

通常海域で彷徨っている野良のセイレーンならば俺達でも対処が可能ではある。

しかし、この世界とは別の空間と繋がっているとされる鏡面海域では俺達の常識は通用せず、KAN—SEN達の持つメンタルキューブに納められたリウウコツから発せられる特殊な力 “スキル”が必要となってくるのだ。

KAN—SEN固有の技であるその力は自身の力を増幅させたり、逆に敵の力を弱めたり、はたまた天変地異と見間違うような派手な攻撃をしたりと様々である。

そんな現代兵器では再現不可能であるその力を持つKAN—SENでなければ……鏡面海域を突破、もしくは解除するなど不可能に近い。

まだドレットノート級戦艦等がいた頃に、KAN—SEN否定派の将校達が鏡面海域の攻略を独断で行い、参加した250隻あまりの軍船が僅か2隻のみしか帰ってこなかった事もある。

第一世代のKAN—SENである三笠やアヴローラ達が慌てて介入しなければ、その2隻すら帰還できなかつたと言われる程に厳しい環境……それが鏡面海域なのだ。

「通信手、至急本部に通達。こちらダストボックス大隊、聯合艦隊との合流予定の地点に到着も聯合艦隊は見当たらず。合流地点に鏡面海域の発生を確認。至急KAN—SENの派遣を要請する。送れ!!」

「アイ・サー！電文を本部へ送ります!!」

「……これでKAN—SENが来てくれると良いのだが」

「艦長、嫌な予感がします」

「ああ、俺もだ」

そう二人して嫌な予感を振り払えずに居ると、すぐに本部から電文が帰ってきた。

それを最初に受け取って内容を確認した通信手の顔色がどんどん青ざめていく。

……………最悪の中の最悪を引いたんだな。

その様子から俺はそう思った。

少し他人事のように思ってしまったが、現実逃避してしまいたかったのだろうか？

いい加減この現実味を感じられない転生した時から続くあやふやな感覚をどうにかしないといけないな。

そんな思いでこちらを向く通信手に頷いて内容を艦橋全員に聞かせる事にした。

「本部からの指示です。聯合艦隊が鏡面海域にいる可能性が高く、聯合艦隊には式典に参加する予定だった元帥閣下と参謀本部の幹部複数名が旗艦に座乗している。よってダストボックス大隊は鏡面海域に単艦で突入し確認。聯合艦隊が居た場合はそのまま殿を勤め、居なかった場合はそのまま調査せよ……………との事です」

艦橋内の空気が死んだ。

本部は俺達に死ねと言ってきたのだからこうもなる。

一番聞きたかったKAN—SENの派遣なんて一言も言わなかった。

生還率が1%もない戦場に行けと？

「本部の連中は……………俺達に消えてもらいたいらしいな」

「そのようですね。鏡面海域での活動なんて……………KAN—SENに護衛してもらったとしても安全な場所なんて無いのに……………狂ってますよ」

「……………本当にな」

自分で処刑台の階段に登らされている気分だった。

だが止まってもいられない。

このまま俺達が止まっても、後ろから味方に敵前逃亡として撃たれるのは目に見えている。

どうせKAN—SENに護られた後詰め艦隊がやって来て、俺達が鏡面海域に入ったか確認しに来るのは明白だ。

もはや逃げ場すらない。

「艦内放送を繋げ」

「アイ・サー……繋がりました」

「ダストボックス大隊諸君、本部より鏡面海域内の迷子の搜索と内部の調査の指令が下った。いつも通りだ。いつも通りの仕事をしよう。どうせろくに期待なんかしていない連中だからな。それどころか俺達をゴミと思ってる……だがな？ ゴミが連中の出来ない事をやるんだ、やり遂げたら連中はゴミ以下って事だ!!いくぞ野郎ども!! 上品な役立たず共を迎えに行つて、ついでにセイレーンに一泡吹かせてやれ!! 両舷前進!!」

「「「サー・イエツサー!!」」」

号令は下した。

あとはいつも通り戦うだけだ。

名も無き戦艦に揺られて死地へと進む。

ああ……いつも通りのクソみたいな戦場だ。

「鏡面海域に突入します!!」

操舵手がそう叫ぶ。

よく見れば腕が少し震えていた。

こんな手の込んだ自殺のような行動をしていればそうもなるだろう。

「総員、突入時の衝撃に備えろ!! 来るぞ!!」

艦内放送を付けっぱなしにしたまま、俺はそう叫んだ。

艦の前方が空間に入った瞬間……目の前の光景が一変した。

七色に光る空、そして紅蓮の炎が揺らめく海原。

よく見れば見覚えのある残骸が最期の力でゆらゆらと浮かんでいた。

聯合艦隊だ。

式典に参加予定だった150隻の艦隊の殆どが残骸と成り果てている。

先を見ればまだ戦っている船も見えた。

今回の主役として各陣営に威容を見せつける筈だった旗艦である戦艦と、その取り巻きもまだ健在だ。

「よし、迷子は見つけた。両舷増速!!艦隊に合流するぞ!!復唱は不要だ!!」

「了解!!」

俺の指示に従って乗っている艦の速度が上がっていく。

操舵手の腕により浮かんでいる残骸を見事に避けながら突き進んでいた。

「向こうの連中にこっちの事を知らせておけ。一応味方だしな、撃たれたら面倒だ」

「了解しました!!」

俺の指示に通信手が無線を飛ばす。

暗号化もされていないただの短波無線なのだが仕方ない、存在を知らないと同様にも混乱するのが目に見えているからな。

戦場においてこういう連絡は本当に大事な事だ。

未確認の船が接近するなんて恐怖以外の何ものでもないし、同士討ちなんて目も当てられない状況になるのは明白だ。

そうして敵の位置を双眼鏡で確認しながら前進している内に、聯合艦隊の右側面から回り込もうとする20隻程の敵の巡洋艦部隊が主砲の射程圏内に入ってきた。

「まずは旗艦右舷側の巡洋艦部隊を掃討するぞ!全兵装の使用を許可する。セイレーンの技術で作られたんだ、連中にその威力を味合わせろ!!」

「了解!!主砲一番二番、照準合わせ!!目標、旗艦右舷側の巡洋艦部隊先頭艦!!」

俺の指示を受けて代理が砲塔内のスピーカーに繋がる無線を手に持ち、目標への照準を指示する。

それに合わせて砲塔がゆっくりと旋回し始めて指向し、主砲が持ち上がっていくのが艦橋からの見て取れた。

「艦長、照準終わりました。いつでも撃てます」

「よし、一番二番……撃てええええ!!」

「一番二番、発射!!」

俺の号令と共に代理が指示を下した瞬間、主砲発射のブザーが鳴り響き……轟音と煙が巻き起こる。

腹の底に響き渡るような轟音が耳を打ち、艦橋付近まで巻き上がる煙が俺達が今戦場に居るといふ事をその身に分らせてくるのだ。

そして撃ち出された砲弾はあつという間にセイレーンの巡洋艦へと殺到していく。

そして着弾。

初弾から命中弾を出した。

発射された砲弾6発のうち、3発が命中。

その内の2発が正面砲塔を突き破って内部で爆発、弾薬庫に誘爆したのか船体正面が爆裂して吹き飛ぶように消し飛んだかと思ったら、そのまま艦尾を持ち上げ始めてしまった。

「……敵巡洋艦撃沈しました」

「凄まじい命中力だな」

俺と代理は敵艦の撃沈を喜ぶよりも、この戦艦のポテンシャルの高さに驚いていた。

だが時間は待つてはくれない。

狙うべき敵はまだまだたくさん居るのだから。

「よし、このまま敵の数を減らす。目標は浮足立っている巡洋艦部隊のままだ」

「了解。次弾目標、撃沈した先頭艦すぐ後方の艦」

主砲が下がり、装填を開始する。

しかし、それほど時間を置かずにまた主砲が持ち上がって照準を始めた。

「セイレーンの技術を解析して作った自動装填装置か……凄まじい装填の速さだな」

「照準の補正を効かせる装置もセイレーンの物を解析して作られたのだと聞きました。お陰で砲塔内の人員も3人程度で運用できるようになっていきますからね……改めてヤツ等の技術力には驚かされますよ。……照準完了しました」

「全くだな……次弾発射!!」

「発射!!」

号令と共にまた砲弾が轟音を立てて敵に飛んでいく。

そしてセイレーンの技術力の高さを証明するかのように、また水面上に紅蓮の華を咲かせるのだった。

「次弾命中、敵巡洋艦の船体が真っ二つに折れました」

「ああ、見えている」

双眼鏡で見るまでもなく分かる、まるで開いていた本を閉じようとするかのように船体の前後が持ち上がっているのが見えた。

こうなるともう一方的に撃ちまくるだけだ。

主砲が下がってまた装填し、また持ち上がって照準する。

俺達はまるでゲームの的を撃っているかのような気安さで、次々と旗艦艦隊の右舷側に回ろうとしていた敵巡洋艦部隊を撃沈していった。

だが油断は出来ない。

ここは鏡面海域で、セイレーンのホームグラウンドなのだから。

そして、最後の一隻を撃沈した所で旗艦からの通信が入ってきた。

「それで?向こうはなんだって?」

「……貴艦の援護感謝する。これより撤退を開始する為、殿を要請する、との事です」

「……はあ、予想通りだな。ま、最低限の礼は言ってきたんだ。殿くらいはしてやるさ……了解、殿を務める。旗艦に送れ」

通信手からの報告にため息を吐きながらそう返した。

またいつもの面倒事。

そう思いながら燃え続ける海原を睨む。

正直この程度の数で聯合艦隊がやられたなんてありえない。

寄せ集めの人に乗った船とはいえ、巡洋艦部隊程度でここまで数を

滅らされる事など無理だ。

つまり、まだ聯合艦隊を襲った何者かが潜んで居るわけなのだから安心なんて出来そうにもない。

そう思いながら……ふと海原から視線を空に向けた

第六感と言ってもいい。

本当に何気なく双眼鏡を当てて空を見上げたのだ。

そこには……七色の空に浮かぶ数えるのも嫌になる程の黒点が徐々に大きくなっていくのが見えた。

「対空戦闘用意!!」

そんな俺の声に艦橋に居た皆が呆気にとられていた。

しかし、いち早く立ち直った代理が艦内スピーカーに無線を繋げて叫ぶ。

「敵機襲来!! 繰り返し!! 敵機襲来!! 対空戦闘用意!!」

「レーダー反応ありません! ジャミングされている可能性があります!!」

その言葉と共に全員が次々に準備を始めた。

代理の言葉にレーダー観測手がレーダーを確認するが、何も映っていない。

ここにきて鏡面海域における我々人類では太刀打ち出来ない要素が出てきた。

こんな状況でも、KANSENならば打破する為の力がある。

しかし、我々人類では用意していた手札でしか対応する事が出来ない。

この差はかなり大きいものがある。

それでも俺達は黙ってやられる訳にはいかないのだ。

俺達が人で在る為にも。

「新しい対空戦闘システムは全員頭に入れてるな？射程圏内に入った砲から射撃を開始しろ。訓練通りだ、訓練通りにすれば生きて帰れる………いいな？」

「「サー・イエッサー!!!」」

繋げていた通信用の無線から威勢の良い返事が帰ってきた。

この戦艦に使われている新しくなった対空システムは、セイレーンの技術をほぼそのまま組み込んだと渡されたマニュアルに載っていた。

正直に言ってみれば、実戦で使う事に抵抗はあるが………そんな事を言っている暇はない。

だが、この新システムには良い所がある。

「対空戦闘員を艦内に入れたまま対空砲を動かし外をモニタリングするカメラで敵の位置を確認して、赤外線照準装置で補足………トリガーだけを人間が引く……か」

「二応誘導装置を切って、マニュアルで照準する事も出来るとありましたね………どこまで信じて良いのやら………」

「弾込めも基本自動装填らしいからな、異常が発生しない限りは人員への被害が極限まで減らされる仕様の船か………いつか本当に人が要らなくなる時代が来るかもしれないな」

「ええ、そうですね………ですが今は現状を乗り切ると致しましょう」「ああ、乗り切るぞ!!」

まるで空を覆い尽くすような敵機に視線を向けつつ、正念場がやってきた事を俺は感じていた………

クリスマス特別編 アイアンボトム・サウンド鏡面海
域撤退戦 後編

「何度目だ!!」

「もう6度目です!敵の編隊、まだ途切れそうにありません!!」

そこはまるで地獄の釜の底だった。

次から次へとやって来るセイレーンの艦載機。

せつかく手に入れた新造戦艦の新システムが噛み合っているとは
いえ、許容オーバーなのは目に見えている。

一度の空襲で目測400〜500機程の大編隊が次から次に襲い
掛かって来るのだから。

「対空砲及び機銃の砲身加熱度が限界間近です!!もう持ちません!!」

「くそつ、単艦での対空戦闘ではここが限界か……………聯合艦隊の撤退
は?」

「半数が撤退出来ずに撃沈されて腹を晒してます……………旗艦もそろそ
ろ限界かと」

「……………最悪だな」

「……………艦長」

そろそろ年貢の納め時か?

代理からの報告にそんな考えが頭を過ぎる。

このままでは圧倒的な物量に擦り潰されるのは分かりきった事実
だった。

だが突破する方法が無い。

「重桜から貰っていた三式弾は?」

「すでに撃ち尽くしました」

「……………流石に万策尽きたか」

密集して襲ってくるセイレーンの艦載機に、重桜開発の主砲から放
たれる対空砲弾である三式弾がよく突き刺さり、出来た隙間を縫うよ
うに投爆や雷撃を回避していたのだが……………それもここまでのよう

だった。

史実ではあまり効果的な砲弾ではなかったのに流石アズールレーン世界、充分使えるのが驚きだ。

だが、本当の意味での限界が間近に迫ってくる。

すでに対空兵装の6割が使用限界に近づいているこの状況はヤバ過ぎた。

「旗艦からはなんとやっているー!」

「変わらず殿として敵機への攻撃を続け、囷として孤立せよ……と」

「本当に馬鹿なのか!? こちらの艦の方が圧倒的に艦隊より対空性能が高いのに、それを艦隊に組み込んで旗艦を護衛させるという考えすらないのか!」

通信手からの返答に思わず大声で怒鳴ってしまった。

どうあつても自分達だけ逃げるという選択しか出来ないようだ。

まあアズールレーンの指導者達が乗り込む船なのだから、最優先で防衛しなければならぬのは分かる。

しかし、今この状況でそんな目立つ真似をすればどうなるのか？

「大尉!! 旗艦左舷側から水柱4本上がりました!! 被雷した模様です!!」

恐れていた事が起きた。

回頭して撤退する旗艦艦隊を双眼鏡で見っていた代理が慌てた様子で叫ぶ。

艦長と俺の事を呼んでいた筈なのに、慌て過ぎて元の呼び方に戻ってしまっている程に焦っていた。

「落ち着け!!!」

「っ!?!」

「落ち着いて状況を報告しろ。上の俺達が焦ったら下も混乱するんだ、焦るよりも先に状況を確認して最善を尽くせ!!」

「失礼しました!!」

そんな代理を落ち着ける為にも大声で声をかけ、双眼鏡を当てて旗

艦隊の状況を改めて確認する。

まだだ、まだ終わって無いはずだ。

そう思っつて旗艦艦隊を見た瞬間……………

旗艦である戦艦が巨大な爆発と煙の向こうに姿を消した。

艦橋内はまるで時が止まったかのようだった。

静まり返り、対空砲の射撃音だけが響く時間が僅かに過ぎ去る。

俺達を捨て駒にしようとした旗艦は……………一瞬のうちに紅蓮の炎に包まれ、側で護衛していた巡洋艦数隻にその残骸をバラ撒いて損傷させながら冷たい水底へと消えていったのだ。

「……………艦隊に通信を繋げ」

「……………」

「通信手!!艦隊に向けて通信を繋げ!!」

「りよ、了解しました!!」

呆けている通信手に怒鳴る。

護衛対象が沈んだ時点で俺達の負けだ。

しかし、俺達はここから生きて帰らなくてはならない。

その一手を絞り出す為にもここで立ち止まる訳にはいかないのだ。

「こちらダストボックス大隊、護衛対象の轟沈を確認した。そちらの被害状況を知りたい」

『ふ、ふざけているのか貴様!!貴様らがちゃんと囷にならないから閣下達の乗る船がやられたのだぞ?!どう責任を取るつもりだ!!』

艦隊に向けた無線にそう問いかけると、聯合艦隊に参加していたらしい俺達の上官……………いつも俺達を毛嫌いして無茶振りをかましてくるデブハゲが音割れする程の音量で怒鳴り込んできた。

何故そこに居るのかも聞きたくないというか、正直話をしたくもないが軍での上官の命令は絶対だ。

ため息を吐きたくなるのを堪えて話を続ける。

「今この状況でどう責任を取れと仰るのですか?全艦が空襲を受けているこの状況でどうすればよろしいのでしょうか?」

『決まっている！貴様達が敵へ特攻を掛ける！そして我々をこの海域から撤退させて死ね！！それ以外に閣下達への詫びにはならん！』

「…………コイツよく軍にいられるな？」

艦隊側の最大火力の旗艦である戦艦が沈み、その余波で周囲に居た対空戦闘の要であった巡洋艦が損傷した時点で対空能力が格段に落ちた現在…………次に誰が狙われるか気が付いていない。

それに限界が近いと言ってもまだこちらの対空能力は落ちていないし、損傷も機銃を撃ちかけられた程度でほぼ無傷と言ってもいいだ。

そうなれば被害を減らす為、そして狙いやすく数を減らす意味でも先に狙われるのは向こうの筈。

まああのハゲの発言は、誰かに責任を押し付ける事だけしか頭になりからこその言葉なのだろう。

俺としては別にこのハゲが沈んでも問題は無いのだが、それに付き合わされる艦隊が不憫でならない。

おそらくそれに気が付いている者達も居るはずだが…………誰も無線に割り込んでくる気配がない。

…………もしかするとコイツ以上の階級の高い奴が残っていないのか？

そんな俺の疑問を答えてくれるかのようにはハゲが指令を下す。

『ゴミ共に告げる！聯合艦隊における現最高階級将校の私からの指令、最優先事項だ！！我々の撤退が終わるまで…………いや、終わっても戦い続ける！！』

「…………了解」

俺は無線機のマイクを握り潰しそうになるのを堪えながら通信を切った。

誰もが口を開かずに俺の方を見つめる。

俺は一度だけ目を閉じて深呼吸した。

色々考えるが、もうどうにもならない。

この海域における未来は決定した。

「艦長……………」

「やるぞ」

「本気ですか？」

不安げに聞き返す代理の方を見ずに俺は話を進める。

もう、この場において望む希望が残っていないのだから。

「陸に居た時、KAN—SEN達から話を聞いた事がある。鏡面海域にも上陸して休める施設や陸地等が存在すると」

「つまり……………」

「そうだ、連中を撤退させたなら俺達はそこを目指す。撤退終了後も戦うとしても、拠点になる場所を確保してはいけないとは言っていないからな」

「了解しました」

残念だが、この海域を彷徨うのは確定事項のようだ。

しかし、まだほんの僅かではあるが……………賭けに近いような希望はある。

砕けて散った欠片のような希望ではあるが、俺達が生き残る為に必要な絶れる希望が。

「艦内通信を開け」

「アイ・サー……………繋がりました」

通信手にそう声かけて繋がったマイクを口に近づける。

一度大きく深呼吸をして……………俺は大隊全員に伝えた。

「大隊諸君、俺達はこの鏡面海域に残って戦う事が決定した。我等が尊敬するハゲ上がりは何故かあの聯合艦隊に居て、しかもアイツが現在の艦隊における最高階級将校だそうだ……………」

俺は淡々と事実を語る。

艦内にいる全員が既に察している事だろう。

またいつもの無茶振りが起きたのだと。

「戦い続ける……………だそうだ。弾だつて無限じゃないのになあ……………実に面倒で馬鹿馬鹿しい話だ。本当に軍人なのか適正を調べ直した方が良さげな案件だと俺は思うよ」

そんな俺の言い様に艦橋内から複数の忍び笑いが聞こえた。

そうだ、このくらいの緩みがなくては潰れてしまう。

絶望的な状況でも他者から不要のゴミだと罵られようとも、俺達はそれでも人間らしく生きていきたい。

苦しくて逃げたい戦場の中で、少しくらい笑い話をしたって罰は当たらない筈だ。

「大隊諸君、俺はKAN—SEN達から鏡面海域内にはセイレーンの施設や上陸出来る陸地もあると聞いた……だから肉付きが良過ぎて鈍足な上官殿の居る艦隊が撤退したら、俺達はそこに向おうと思うんだ。戦うにしたって腹は減るし、眠って休みたいしな？そこを頂戴して休んだっていいだろ？」

戯けるような俺の口調に艦橋内に笑い声が響き始めた。

士気を上げる為にも少し戯けた話し方をするのも気分が良い。

乗ってくれるコイツ等もだいぶ俺に毒されたようだな。

「という訳で諸君、俺と一緒にもう一仕事だ。肥満体型を維持する上官殿を見送ったら、陸地か施設かのどちらかを見つけてバカンスと洒落込もうか。安心しろ、見目麗しい美女は居るぞ？海の上に浮んでるし人類の敵であるセイレーンってのがな？ナンパに成功したら教えてくれ、俺も参考にする」

この頃には皆が大笑いしていた。

艦橋の外の地獄絵図な景色とは大違いだ。

これがいい。

これこそが俺達ダストボックス隊にふさわしい空気なのだ。

一呼吸おいて告げる。

「さあ戦友ナンパ師の諸君。デートの相手はそこら一带に居るぞ？退屈させないようにもてなそうじやないか!!!覚悟を決めろ!!!ダストボックス大隊、任務を遂行せよ!!!」

「二「サー・イエツサー!!!」」

艦橋だけでなく、無線!の先からも声が聞こえてきそうな元気な返事だった。

ゲラゲラと笑う皆を見ながら俺も笑う。

全く………本当に俺には勿体ないくらい良い連中だよ。

「さあ、お嬢様方には悪いが………ここからは自重無しの泥臭い男の

時間だ!!機関増速!!足の遅い上官殿を眺めながら前進と行こう!!」

「機関増速!!」

俺の指示に合わせて代理が復唱し、艦の速度が上がっていく。

最大船速32・5ノットの快速戦艦が大海を割って疾走していく。

空から見れば火花を散らしながら水面を切り裂く大剣にも見えただろう。

そんなカツコイイ姿を自分の目で見れない事を残念に思いながらも空を睨み続ける。

「レーダー回復しました!前方39Km地点に15隻の敵艦隊を補足、反応から推測して……戦艦を含む本隊と思われまます!!」

「おー、来なさったか………諸君、良い女つてのは時間に少しルーズで男を待たせるものらしいな?このまま眺めているのもいいが、やはり俺達にそんな紳士的なのは性に合わない。さっさとダンスのお誘いといこうか?全主砲照準!!敵艦隊に対して砲雷撃戦用意!!」

「砲雷撃戦用意!!繰り返す!!敵艦隊との砲雷撃戦に突入する!!」

レーダー観測手からの報告に思わず口の端が釣り上がるのを感じた。

そんな中でも俺の指示に復唱して指示を飛ばしている。

脳内が戦闘によってスツキリしていく。

さつきまで上官殿に感じていたイライラなんてどこかへ消えていく。

嗚呼………ここが俺の居場所なんだ。

なんて不謹慎な気持ちなのだろうか?

戦場で仲間達と戦う事に安らぎすら感じてしまっている。

居場所を無くした俺達の、最後に残った聖域(サンクチュアリ)。

戦いが始まってしまえばそこから先は全てを戦いに捧げてしまい、文字通り全身全霊を振り絞って生き残る事のみを考え抜くのだ。

………その戦いが自分達の最期だとしても。

「レーダー観測手!!主砲要員に情報を伝達してレーダー照準を合わせ

ろ！マニュアル通りだ！！先に前衛を潰すぞ、レーダーからの観測射撃を開始せよ！！」

「アイ・サー・レーダーからの情報を送ります！！」

この名も無き戦艦はこの時代にそぐわない能力が載っている。

まるで現代戦に合わせたかのような未来の装備と言ってもいい赤外線誘導装置に自動装填装置、そしてマニュアルを確認した時に俺も驚いたのだが……砲射撃指揮装置だ。

コイツがあれば敵をレーダーで捕捉し、電波を指向し当て続ける事で高精度でロックオンする事ができる。

あとはその情報を元に精密射撃を行うだけでいい。

本来は未来の兵器である誘導兵器のミサイルの照準に使われる技術ではあるのだが、この戦艦は自身の主砲だけでなく全ての兵装とシステムリンクしているのだ。

つまりレーダーで捕捉、ロックオンする事ができれば高精度の攻撃を叩き込む事ができる……そんな理不尽の塊のような存在。

最初はレーダーがジャミングされていて使えなかった方法が今は使える。

それだけでもかなりの強みだ。

「敵艦へターゲットロック完了！！主砲に位置情報入力完了したとの事です！！」

そうこうしている間に照準が終わったらしい。

それでは見せて貰おうか。

現代戦の装備を身に纏った戦艦の力を見せてつけてやる！！

「よし！主砲斉射始め！！」

「主砲斉射！！」

号令と共に空を睨む主砲から爆音と煙がぶち撒けられた。

だがすぐに主砲を下ろして装填作業に移り、あっという間にまた主砲を持ち上げて照準を終わらせる。

「次弾目標設定完了！いつでもいけます！」

「次からは指示無しで良い。前衛が潰れるまで装填と照準が終わり次第順次発射せよ！」

「アイ・アイサー！」

俺はそう指示したあとに双眼鏡で空を眺めると……空にあれだけ居た敵機が疎らにしか見受けられなくなって居る事に気が付いた。やはり俺の予想は当たったらしい。

今頃、聯合艦隊の方は蜂の巣を突いて逃げた子供達のような騒ぎになっっているだろう。

「ま、ざまあつてな」

「艦長？」

「いや、せっかく美女とダンスをしてるんだ。贅肉タップリな男の事なんて考えたくもないな」

「は、はあ？」

頭を振りかぶりながらそう言う俺を見た困惑気味の代理の様子に少し笑ってしまった。

とにかく今は敵を叩く。

また主砲が発砲する。

雷のような轟音が響き渡り、レーダーをチラリと見れば戦闘前に映っていた点がいくつか消えているのが分かった。

向こうの点の塊が縦に長くなったので、一方的に撃たれるのを嫌がって足の早い船で接近を試みているようだ。

「美しいセイレーンも俺達の花束に喜んで近寄って来てるぞ？近い順にもっと渡してやれ」

「イエッサー！近い敵から先に照準を変更します！」

駆逐艦や巡洋艦による至近距離からの雷撃狙いなのだろう。

だがそうはさせない。

本番がまだ残っているのだからここで……消えてもらうのだ。

「……………今までの戦闘とは比較にならないですね」

「戦争は技術を大きく進歩させる。今は有効な手段であってもいつかはそれも陳腐化して旧式となるものだ」

「そうですね。ですが今の私達が人類側におけるその最先端です」

「ああ、だからといって手加減はできんがな？」

「それは勿論です」

代理と軽口を交わしている間にも戦況は変わっていく。

前衛艦隊が文字通り消し飛んだセイレーンだが、後ろから近寄っていた2隻の戦艦の射程圏内にそろそろ入っているはずだ。

「美女達はどうかやら俺達を熱烈に歓迎しているらしいぞ？ 強烈な投げキッスが飛んでくる。そんな物喰らったら俺達も男だ、一発で昇天しちゃうな……………」

「それはいけませんね。我々は男性ですからキチンとエスコートする必要があります」

「そうだ、男の意地にもかけて先に口説き落とせ。まずはドレスを褒める所から始めようか？ 敵艦上層装備に砲弾のシャワーを浴びせて脱がせてやれ!!」

「アイ・サー!! ドレスから褒め殺す為にも情報入力を開始します!!」

俺と代理の冗談にレーダー観測手も笑いながらそう言って操作を始める。

主砲が細かく動く。

何度も照準を合わせ直し……………発砲を開始した。

この頃には周りを飛んでいた敵機は居なくなり、対空砲火は止まっていた。

後は目の前の敵に専念するだけ。

そこから新たな拠点を確保して……………

「っ!?! 少し油断したか?」

「至近弾ですね……………次は当たってもおかしくはないかと」

「嫌になるな、人類がここまで頑張ってもその先に行くのは卑怯を通り越して尊敬に値するよ」

「それは今に始まったことではありませんよ。ヤツ等はいつも先に居ますから」

7度目の斉射が終わった頃だろうか？

とうとう敵から砲撃がこちらに迫ってきた。

彼我の距離はすでに30 Kmを切っている。

だが、初弾で至近弾を撃ってくるのは想定外だった。

「だが向こうも装備がボロボロの筈だ。ここからが正念場だぞ!! 気合

を入れていけ!!!」

「「サー・イエツサー!!!」」

すでに何度も命中弾を受けている向こうの1隻はすでに炎上まで起こしている。

問題はもう1隻の方だ。

ほぼ無傷でこっちに来るのが目に見えている。

「……………いや、前の戦艦が被害を受ける担当を担っているのか」

「確かに……………そうするとすれ違いざまに一撃、といったところでしようか?」

「こちらの主砲は性能が良い。口径こそ小さいが、貫通や装填速度で向こうを超えているんだ。大口徑の主砲で一撃……………と考えているのかもしれない」

「それなら早めに先頭の艦の処理する必要がある……………」

「そこまで代理が話した所で俺は……………この戦艦にある一つの装備を思い出した。

普通ならば戦艦は長距離の砲撃戦を行う為に使わず、逆にその砲弾の殴り合いの際に誘爆の危険があるので後の改装で姿を消していった装備。

「ちようどこのまま接近してくるのであれば、その装備の射程に入る。」

「代理、俺に考えがある」

「はい? いったいどのような……………」

「アレを使う。前の船での要員は今対空砲に着いてるな?」

「まさか……………」

「補給の目処も立たないんだ。残すのも危険だし、使ってしまったら」

「俺は噛みながら取り出した艦のマニュアルにある、その装備のページを代理に見せる。」

「代理は驚きを隠せない様子ではあったが、最終的には俺の作戦に同意してくれた。」

「さて……………ファイナーレだな?」

敵との距離が15 Kmを切った。

至近弾が降り注ぐ。

こちらにも負けずに撃ち返すが、黒煙と炎をまき散らしながら盾になり続ける前の戦艦に砲弾を吸い取られてしまっていた。

しかし、前の戦艦は主砲が振じ切れて使い物にならず、本当の意味で盾としての役割しか果たせなくなっていた。

敵艦は俺達から見て右舷側に位置取ろうとしているのが分かる。

恐らくそのまま全砲一斉射する事で決着を着けるつもりなのだろう。

「当たってないのが奇跡だな」

「それだけこちらの操舵手の腕が良かったということでしょう」

「あー、陸地を見つけたら操舵手には重桜の資材にあった酒を振る舞ってやるか」

「それがよろしいかと。……………そろそろですね」

「ああ……………それじゃいくぞ!!」魚雷全弾発射!!」

「了解、魚雷全弾発射!!」

艦側面に1基ずつ装備されていた魚雷発射管。

右舷側の魚雷を全弾発射する。

転舵の遅い戦艦にこの至近距離で魚雷を撃たれたらどうなるのか？

それは簡単だ。

「弾着……………今」

「面白いように刺さるもんだな」

「全弾命中を確認しました……………敵艦の砲撃停止及び傾斜を確認、撃沈です」

「まああれだけ喰らえばそんなものか……………意外とあっさり決まって拍子抜けしたよ」

「ついぞと言わんばかりに炎上していた前の戦艦も誘爆を起こして2隻とも沈黙。」

激しい戦闘の終焉とは思えない光景に俺は少し気が抜けたような

感じでその様子を眺めていた。

だが次の瞬間、それ以上の衝撃が俺達を襲うことになる。

「た、大尉!?空を、空を見て下さい!!」

「……………嘘だろ?」

艦橋内は驚愕で静まり返っていた。

先程まで虹色だった空が……………青空へと変わっていったのだから。

つまりこれは……………

「鏡面海域が解除された?」

「つまり……………我々は人類史上初の鏡面海域の解除に成功したので
すか?」

人類史上初の快挙に俺達は呆然としてしまっていた。

実感が持てずに誰もが動けなかったともいう。

その後、俺達は鏡面海域を調査及び攻略に来た重桜のKAN—SE
N艦隊と合流。

そこで重桜から俺達が人類だけで初めて鏡面海域を攻略した事を
大々的に公表した。

しかし、あのハゲ率いる聯合艦隊はどうやら生き延びていたらしく、
癩癩のまま補給も無しにそのまま海域の調査出撃命令を下そうと
して……………大将、後の元帥にその命令の撤廃と全軍撤退命令が下され
た。

そして俺達ダストボックス大隊は……………人類史上初の快挙を成し
遂げた英雄としてプロパガンダ、広告塔の役割を担う羽目になる。

その為にあのハゲ上官からの指揮を外れ、大将直轄の部隊に代わる
事となったのだ。

まああの面が見れなくなってせいせいした……………と思っていたん
だか……………

まさかあのハゲデブがジャン・パールにあんな事をするとは思っても
よらなかったさ。

未遂だったから良かったけどな。

あの戦いの後、俺達の乗っていた戦艦は解析に回される為に取り上げられてしまった。

とても良い船で気に入っていたのだが、人類の発展の為に言われて持っていかれてしまったのだ。

まあその後には新造の駆逐艦を渡されたのでそれ以上に忙しかったのもあるが、あの船がその後どうなったのかは俺には分からない。

まあ、もしかしたら………また何処かで出会えるのかもしれないな。

第55話 水着とチェシャー

指揮官です。

冬に入って寒さが続いていく我が母港です。

ダウナー系のKAN—SENなんて暖房の効きまくった部屋から出ようとしない時期がやってきました。

正直に言えば俺も身体を暖める為にトレーニングルームに引き籠もりたい。

「……………そうはいかないんだがな」

目の前に広がる透き通る海を見ながら、ビーチパラソルの下にあるビーチチェアに座りながらそう呟く。

何故なら俺の視線の先には、満点の笑顔で海を見つめるKAN—SENが一人……………

「夏にや!!海にや!!そして……………ダンナさまあああああああ
!!!!」

「……………チェシャー?俺は夏の風物詩の一つじゃないぞ?それにもう1月なんだがな……………」

呆れたように言うところ、ロイヤル巡洋艦 チェシャーは弾けるような笑顔のままこちらに近寄り、ロイヤルとしては大きめになる胸を弾ませてくびれた腰に手を当てる。

そのエメラルドグリーンの瞳はキラキラと輝き、左右に一房ずつある瞳と同じ色のメッシュの入ったボブカットの黒髪には先に海に入っていたのか水滴を滴らせ、どこかウキウキとした雰囲気醸し出していた。

というかフリルのアクセントが入った紫ビキニにトレードマークのネコミミカチューシヤな彼女は、ちよつと目のやり場に困る。

胸の中央部分の谷間を強調する隙間の空いたブーツの紐のようなソレとか、横がほぼ紐な下部分の水着はめちやくちやババい気がする

ぞ？

「ダンナさま!!ダンナさま!!ここは鉄血の技術を結集して作ったシミュレーションルームの中の常夏の母港!!だから夏の海なんですよ?ダンナさまと一緒に海なんですよ?しかも二人つきり……………」

「そ、そうか……………」

スタイルの良い自身の身体を自分で抱きしめながらイヤンイヤンと首を振るチエシャーのノリに、俺は全くといって良いほどついて行けない。

まあ彼女のテンションが高いのも分からなくもないがな。

シミュレーションルーム内とはいえ夏と聞くと不思議なもので、何故か気分が高揚してくる。

俺なんて普段より筋肉のキレが良く感じて、水着のブルーメランパンツに着替えたまま鏡の前でポージングを繰り返したくらいだ。

夏という言葉にはそれくらい開放的になってしまう不思議な魔法があるのは確かだろう。

「だからと言って……………はしやぎ過ぎじゃないか？」

苦笑しながら俺がそう言うのとチエシャーが頬を膨らませながら怒る。

「むー!そんな事言っちゃダメにや!!チエシャーはダンナさまと一緒に居たくて触れ合いたくしてほしいがなかったのに……………長期任務に編成されていたから出来なかった分を今取り戻している最中……………にや!!」

「うおっ?!いきなり飛び込んで来るなんて危ないじゃないか!!」

「んにゃ〜♪ごめんなさい〜♪スリスリ〜♪サワサワ〜♪」

怒っていたかと思えば、急に座っていたビーチチェアに居た俺目掛けて笑顔で飛び込んできたチエシャー。

驚きながらも注意する俺の言葉なんて話半分も聞いちやいない。

お目当てらしき俺の腹筋や大胸筋に満面の笑みを浮かべ、頬ずりしながら撫でている。

というか蕩けた表情……………いや、今の表現はかなりオブラートに包

んだ言い方だ。

ちよつと他の人にはお見せできない表情で俺の筋肉達を愛でている。

俺としては筋肉を褒められているようで悪い気はしないのだが………例えるならマタタビを貰って蕩ける猫だろうか？

それでもまだまだオブラートに包みまくった言い方かもしれない。

………身近で例えるなら最推しのてえてえから放たれた波動に全身どころか魂まで焼かれたオタクというのが適切だろう。

「すうううううっ♡はあああ♡すうううううっ♡はあああ♡」

「チェ、チェシヤー？」

「ふああああああ♡ダンナさま成分を身体の中に取り込んでるにやあ♡幸せにやあ♡もうコレ無しには生きられない………っ!?!♡♡♡♡」

俺の脇腹に顔を近寄らせて深呼吸するチェシヤーにちよつと引いてしまった。

………身体がビクビクとか腰がカクカクしているのは匂いだけで達したとは思いたくない。

匂いだけで達したとか………ポートランド以来の変態が生まれたことになるのだが………

「ふう〜、ダンナさま成分を補給完了にや♪」

「そうか………」

そう言っって顔を上げた瞬間には何時も通りのチェシヤー。

ヤバい、本当にポートランドと似ているかもしれない。

何とも言えない感じに俺がなっているのは裏腹に、チェシヤーのやりきった感が凄すぎる。

「………チェシヤーが涙ながらにお願いしてきたから断りきれなかったが、早まったか？」

そんな眩きをポツリ。

本当にこの言葉に尽きる。

いや、チェシヤーが着任してきた時からこの気配は確かにあったんだ。

それを放置するような形で練度を上げる為に長期の委託や、他の艦

隊からはぐれたセイレーンのいる海域への討伐派遣任務に従事させ続けた俺の責任か？

しかし、小康状態とはいえまだ戦時中なのだから、仕方がなかったというのが正直なところなんだが……………

顎に手を当てて考え込んでいると

「にゃん♪」

「……………あ？」

どこかご機嫌な甘えるような鳴き声と共に、俺の膝の上に何かが置かれた。

それに気が付いて視線を下げると……………何やら見覚えのある紫色の三角形が……………

「……………はっ？」

一瞬間が理解を拒否した。

視線をズラしてチエシャーを見るとニコニコと微笑んでいる。

しかもその笑みはますます深くなっていくのが分かった。

「おま……………コレ……………」

「ふふくん♪ダ・ン・ナ・さ・ま？チエシャーはもう待てないよ？」

ウキウキとした雰囲気 of 彼女に俺は観念する。

チエシャーとはそういう約束だった。

だから……………

俺は……………その紫色のソレを……………

紫色の”ネコミミカチキューシャ”を頭に乗せた。

「きゃくん♡ダンナさまあ♡すつごく似合ってる♪これでチエシャーとお揃いだね♡」

「……………そうだな」

スリスリしちやうんだからね♡」

「ど、どういう事だ!？」

「チエシヤーのお口から言わせちやうの? やくん♡ダンナさまったらド・エ・ス♡」

「意味が分からんぞ?」

俺にはチエシヤーの考えている事が少しも分からん。

ただ今分かっている事は、チエシヤーのお胸様が凄いいワフワフで肌がスベスベしている事くらいだ。

上機嫌なんてレベルをぶち抜いてご機嫌なチエシヤーが、ずっとスリスリし続けたら……俺の半身がムツクリ来ちまうだろうが!!

「ねえ、ダンナさま?」

「ん? どうしたチエシヤー?」

湧き上がるリビドーをどうにか抑えれないかと筋肉に相談しようとしたその時だった。

あれだけ上機嫌に俺の体にスリスリしていたチエシヤーが、ギュツと抱きついたらまま俺を呼ぶ。

その表情も先程までの笑顔から、どこか遠くを見つめるかのような表情を浮かべてなんとも言えないアンニュイさを醸し出していた。

「チエシヤーはね? 今こんなに幸せで良いのかなって思うの……それが嫌じゃないんだよ? 嫌じゃないけど……研究所で製造されたチエシヤーがこんなに幸せいっぱいいいのかなって思っちゃう」「チエシヤー……」

チエシヤーは少し震えながら俺を抱きしめる手の力を強めた。

そんな彼女を覗いた俺は、ゆつくりと抱き締め返しながら

「俺はチエシヤーに幸せでいて欲しいと望んでいるよ」

そう話した。

ハツとしたような表情を浮かべて俺を見つめる彼女に笑いかけて俺は話を続ける。

「俺はなチエシヤー? あの研究所からチエシヤーを連れ出した時に

思ったんだ。幸せになってもraithたい、笑顔で過ごせるようになって欲しいって」

「……………ダンナさま」

「俺達は生きているんだ。生きている限り辛い事や悲しい事が沢山ある。でも俺は戦友に恵まれ、君達に出逢って、嬉しい事や楽しい事も沢山経験出来たんだ……………押し付けるような身勝手な考えなんだけどき、俺が経験した時以上に幸せで楽しい日々を送って欲しいと望んでいるよ」

「……………ダンナさまっ!!」

そこまで語り終えた時に、チェシャーは涙を零しながら笑顔で俺に抱きつき直してきた。

そんな彼女の頭を撫でながら俺は苦笑する。

「ダンナさま！ダンナさまがそう言うってくれるならチェシャーは幸せでいいんだよね？これからも……………これからもいっぱい、いっぱい幸せになるよ？良いの？」

「ああ、俺が望んだんだ。いっぱい幸せになってくれ」

「大好きだよ!!ダンナさま!!」

目尻に涙を浮かべながらも、太陽のような笑顔でそう言う彼女は眩しかった。

こうして母港の日常がまた過ぎていく。

その先にある幸せを望んで。

~~~~~

「ダンナさまは卑怯だにや。チェシャーの言って欲しい事ばかり言うってくれるんだもん」

口ではそう言っているが、口元が緩むのが止まらない。

それもこれも全部ダンナさまのせいなのだから仕方がないのだ。

母港の寮の自室でベッドに寝転がり、ダンナさまと撮ったツーショット画像をタブレット端末から見続けて幸せな気持ちを噛み締める。

これをプリントアウトしてラミネート加工し、額縁に入れて壁に飾ろう。

幸せな思い出はいくつあってもいい筈だ。

ダンナさまがチェシヤアの幸せを望んでいるのだから、もつともつと幸せにならなくてはいけないのだ。

その為の第一歩がこの画像。

「これからもつともつと増えていくんだろうにやあ……………」

周りを見回せば、可愛い小物に溢れたチェシヤアだけの自室が目に見える。

自分色に染め上げたその部屋に……………今度は幸せな思い出が追加されるのだ。

その幸せが呼び水となって、更なる幸せを呼び込んでくれる事になるだろう。

今思えば数奇な運命だったと思う。

特別計画艦として研究所で建造されて、テスト以外はベッドの他に何も無い無機質な部屋に押し込まれていた頃とは雲泥の差だ。

何も映していないガラス玉の様な目でこちらを無遠慮に観察してくる研究員達に、24時間監視される毎日が日常だった無機質な日々。

「あんな日常……………もう嫌」

もう耐えられないだろう。

繰り返されるテストと一方的な質問に、味の無い栄養面のみ考えられた食事。

どれも幸せとは程遠かった。

しかし、そんな無色の日々は突然崩れ落ちた。



あの瞬間は……………目を閉じれば直ぐに思い出せる。

「君がチェシヤーか？俺は……………アズールレーン本部 元帥直属の指揮官だ。俺と外に出よう！もつと広い世界を見てみないか？」

抵抗する研究員達を拳で弾き飛ばし、数度の蹴りで外から鍵を閉めるタイプの金属製のドアを蹴り飛ばしたダンナさまがチェシヤーに手を差し出したのを。

あの時は驚き過ぎて固まってしまったけれど、真っ直ぐな眼差しで優しく手を差し伸べられた瞬間……………恋に落ちた。

チョロいと言われるのは分かっている。

でも……………恋に落ちてしまったのだからしょうがない。

カッコイイと思ってしまった……………今ではどんな姿でもカッコ良く見えたり、お茶目を感じたりと胸の高まりが止まらなくなってしまうのだからどうしようもないのだ。

後で聞いた話ではチェシヤーの居た研究所は人間至上主義派閥の研究所であり、研究解析が終わったら無力化されてそのまま好色家達のパーティーでオークションに賭けられる予定だった事も分かっている。

寸前でダンナさまの戦友がその情報を突き止めて強制突入、制圧逮捕に至ったという経緯もあり……………チェシヤーはダンナさま以外の男性は目に入っただけで気分が悪くなってしまう。

「チェシヤーには……………ダンナさまが居るもんね」

もしもという考えを振り払い、ダンナさまと居るといふ幸せで全てを切り替える。

結ばれなくてもいい。

貴方の傍に居させて貰えるなら。

それだけでチェシヤーの望む幸せは、いっぱいいっぱい出てくるの

にや  
♡

だから………また、一緒にデートしても良いですか？

## バレンタインデー特別編その3（時雨様のチョコレート大作戦!!）

指揮官です。

今年もこの日がやって来ました。

乙女の純情をラッピングして渡すこの日が。

「この日ばかりはちゃんと空けとかないとな」

このバレンタインデーだけはちゃんと空けておかないと、後で地獄を見る事になる。

この母港に着任した時なんて……………忘れてて糖尿病一直線な量のチョコレートに囲まれたからな。

主にヤベンジャーズのせいだ。

「それでも貰えるってのは嬉しいよなあ……………前世で母親以外に貰った事なんて無かったし」

思い返しながら苦笑しながら今日終わらせておくべきの書類の最後の一枚に、俺はサインして決裁済みの箱に入れておいた。

童貞で彼女居ない歴〓年齢だった前世に比べて、なんと恵まれた環境に居る事か。

この高揚感は筋肉との対話でマッソーとのシンクロ率が最高潮になった時と似ている。

「今年も気持ちの入りまくった渾身の一品ばかりだろうし、ありがとう食べないとな」

去年は睦月型の子達が全員の分を一つにして癒される笑顔と共に渡してきたり、ロイヤルの優雅卿ことフットが頬に手を当てながら恥ずかしそうにあくくんしてくるなんてイベントもあった。

それぞれが思い思いの渡し方をしてくれるので、俺もそれを楽しみにしているのだ。

「ふふっ、楽しみになってきた……………よし、少し腹を空かしてカロリーを消費する為にも筋トレを……………」

執務室内に用意してあるダンベルを視界に入れて上着を脱ぐ。

長袖のシャツを腕まくりしながらダンベルのある方へ近寄って行くと……不意に扉をノックする音が聞こえた。

「ん？もう来たのか？少し早い気がするが………入れ」

早めに仕事が終わったとはいえ、まだ朝の9時を少し過ぎた頃。

いつもの感じだったら10時頃に渡しに来る筈なのだが………

そんな事を考えながら入室を許可する。

もしかすると緊急の案件があったのかもしれないから、皆のバレンタインデーを中止させる訳にもいかないので早急に対応すべきだと思っただが………

「し・き・か〜ん♡バレンタインチョコよ〜♡」

入って来たのは甘ったるい声を出しながら満面の笑みを浮かべた重桜の駆逐艦 時雨だった。

というかなんかおかしい。

ほんのり顔が赤いというか、歩き方がフラついている？

格好もどこから手に入れたのかフリルをあしらった白いエプロンに、ミニスカメイド服とガーターベルト付きの黒ニーソ。

更にこちらに差し出す綺麗にリボンと包装紙でラッピングされたチョコを持つ手は肉球付き手袋まで付けているのだ。

「し、時雨？」

「なあにし・き・かん？あ、もしかして食べさせて欲しいのかしら？良いわよ？今日の時雨様は優しくて皆に幸運を振りまく存在なんだからね！」

声を掛けるとそう言ってケラケラと笑う時雨。

明らかにおかしい。

いつもならツンデレと小悪魔チックな感じで渡してくるのにどうしてこうなったんだ？

そんな疑問で頭が混乱してその場で固まっていると、時雨がチョコの包装紙とリボンを取りながら近寄って来てから彼女の様子がおか

しい理由が分かった。

「……………酒の匂い？」

「ほら、屈んで口を開けなさいな♡身長が高くて食べさせられないじゃないの♡」

その場でびよんぴよんと飛び跳ねながら何とか食べさせようとする時雨から、僅かだがアルコールの匂いがした。

というかこれは……………

「ウイスキーか？確かにチョコレートに入れる事もあるが……………」

「ほくらあ、早く屈みなさいっての!!」

匂い的には多分正解だろう。

ウイスキーボンボンのなチョコを用意しようとして、誤って時雨が飲んでしまったという事なのだろうか？

いや、それ以上にぴよんぴよん飛び跳ねる時雨のお胸様がバルンバルンしてる様がエロくてしようがないんだが？

「あくもう!!バカ指揮官!!」

「ぬおっ?!」

股間の紳士がニッコリしそうな視界の情報にまた固まって居たら……………時雨が俺の服を掴んで急に引き下ろした。

咄嗟の事に俺も対応できず、屈んでしまうと

「ん♡こんな幸運滅多に無いのよ？キスだけじゃなくてチョコもほら♡あむ♡ん♡ちゆる♡ぷはあ♡美味しかった？」

「……………ゴクン、おう美味かった」

キスされてチョコを口移しで食べさせられた。

イタズラっぽくウインクしながら離れていく彼女の口からはチロリと赤い舌が覗き、ツーツと半透明な液体が伸びていくのが見える。

時雨自身もいつもは吊り目気味な目尻をトロンと下げ、赤い瞳はどこか潤んでいるように見えた。

「ねえ指揮官。胸、見てたでしょ？」

「あ、いや、その……すまん」

そんな彼女に見蕩れていると、時雨は左手で自身のお胸様を軽く抑えながらそう言ってくる。

俺はしどろもどろになりながら、とにかく謝罪した。

だがよ……あんなにバルンバルンしてたんだぞ？

あんなにバルンバルンしてたら童貞の視線は釘漬け間違い無しだろうがよ。

いや、童貞だけじゃなく男ならガン見するって!!

時雨には申し訳ないが、筋肉との対話が出来そうにない今ならそうハッキリ言える。

だからここは甘んじて時雨からの罵倒を浴びようと身構えた。

しかし次の瞬間、時雨はとんでもない事を言い始める。

「良いわよ？指揮官なら触ってもね？」

「へ？」

俺は彼女の言う事が理解出来なかった。

馬鹿面を晒していると少しムツとした表情の時雨が顔を近づけて

「……バカ、女にここまで言わせるのはダメでしょ？指揮官になら……触らせてあげるって言ってるの♡」

そう言っつて胸元のボタンを一つづつ外し始めたのだ。

「まじっ」

「そう、マ・ジ♡」

時雨はそう言うのとボタンの外れたメイド服の胸元を開いて見せる。小柄な身体に備わったたわわなお胸様が黒のレースの着いたブラに包まれているが見えた。

俺にはその光景がまるで輝く桃源郷のように見えていた。

手を伸ばせばすぐそこにある桃源郷がマジで眩しい。

「ほくら、我慢なんてしなくて良いのよ？すぐに手を伸ばして触りなさいな♡」

「お……マジか？……本当に？」

「指揮官以外には絶対触らせない場所よ？時雨様は指揮官の物なんだ

からね?」

心臓の音が鳴り響く。

喉が鳴って生唾を飲み込む。

極度の緊張状態の中で俺は震えるその手を時雨の胸に…………

「お楽しみ在所失礼致しますご主人様、バレンティンチョコをお渡し出来れば私の胸も触って頂けますでしょうか?」

「え?」

突然の声に時雨と二人でその方向を見ると、そこにはチョコレートに抱いたベルファストの姿が…………

「どうかその後ろには大鳳や隼鷹、赤城に加賀が興味深そうにこちらを見ている。」

「ご主人様にチョコレートを渡すと胸を触って頂けるといいうご褒美が今年からあるのですよね?皆、楽しみに待っておりますよ?」

「指揮官様に触って頂けるのですよね?大鳳、ドキドキしてきましたわ♡」

「幼なじみの隼鷹の胸だっていっぱい触って下さいね?その後は……………はう♡」

「指揮官様♡もう待ちきれませんわ♡この赤城、この時をずっと待っておりますわ♡」

「指揮官、早くしろ。そして私の胸も力強く頼むぞ?」

「……………」

固まる俺達をそっちのけで盛り上がる皆。

ほろ酔いで赤かった時雨の顔が更に赤くなる。

「ふにやあああああああああああああああああああああ  
!!!!!!」

時雨は爆発した。

そしてその場から猫のようにシユルリと抜け出して執務室から走り去ってしまったのだ。

誰にもそれを止める事は出来なかった。

だが、俺にまだ災難は続く。

チョコレートを渡せば胸を触ってくれる、しかも皆の要望に応えた触り方をしてくれるという尾ひれまで付いた噂が飛び交ってしまったのだ。

実際に触ったのかつて？

童貞には眩し過ぎて無理に決まってるだろうが!!!

ちなみに終息するのに三日掛かった挙句、仕事にまで支障が出たのはご愛嬌である。

~~~~~

「……………はあ」

自室のベッドで毛布に包まりながらため息を吐く。

あと少し、本当にあと少しだったのに。

今回のバレンタインデーのチョコレートを指揮官に渡して仲を進展……………いや、それ以上に進める筈だった。

「その為にお酒もちよつと飲んで覚悟を決めてたのに……………はあ」

また、ため息が出た。

ため息は幸運を逃がすと言われているけれど、これは仕方の無いため息だと思う。

出陣前の景気付けのつもりでチョコ用のお酒を少し飲み、自分でも驚く位に大胆な事をした筈だった。

指揮官とキスどころか口移しまでして、胸まで開いて見せたのだ。

雪風が持っている少女漫画では、ここまで来たら後はベッドシーンへ移ってしまうはずだったのに……………

「上手くいかなかったなあ……………はあ」

参考にした漫画の通りに進んでいた筈だった。

でも上手くいかなかったのは何故なのか？

「もっと大胆に行くべきなのかな？この時雨様の肌を見て落ちないつてのが悪いのよ……………バカ指揮官」

いつもの指揮官への悪態には力が入っていない。

というよりもあと少しだったという悔しさが出てしまっていて、この悔しさは指揮官にぶつけるものでは無いと分かってしまったているからだ。

「どうすれば良いのよ……………指揮官の筋トレを阻止した状態で告白してそのまま既成事実を作るのって。難易度が高過ぎるじゃない」

もつと誘惑するべきだったのか？

しかし、下品な女だと思われたくは無い。

指揮官には可愛く綺麗だと思っていて欲しい乙女心があるのだから。

とても難しいけど、そればかりでは指揮官は振り向いてはくれないだろう。

「難し過ぎるのよバカ指揮官……………」

だいたい前提条件が筋トレをして発散する前に畳み掛ける事というのが難し過ぎる。

重桜の諜報機関の調べで分かった指揮官のストレス発散方法である筋トレ。

それが行われる前であれば、幸運が味方をしてくれる間は指揮官にアピールし放題だという。

それを利用した作戦だったのに……………時間切れで他の人が来てしまい、失敗に終わってしまったのだ。

「……………まあチョコレートは渡せたから良いよね？」

まだ唇に残る感触を撫でるように人差し指でなぞる。

お酒の力を借りてとはいえ、口移しという大胆な方法で指揮官に食べさせたのは他の事が霞む位に輝く大金星ではなからうか？

思い出したらまた顔が熱くなってきた。

「うう〜…………早く時雨様を貰いなさいよ!! バカ指揮官!!……………」
待ってるんだからね」

近くにあつた枕を胸に抱き締めてまた指揮官の事を思い浮かべる。

どうか指揮官が自分の事を意識してくれそうですように。

そしていつか特別なこの想いを受け入れてくれますようにと。